續群書類從

第拾九輯下

東京
續群書類從完成會

續群書類從卷第拾九輯下目次

遊戲部

續群書類從第拾九輯下目次終

續群書類從卷第五百五十一

總撿挍保己一集
男 源 忠 寶 校

遊戲部一

三條家薰物書

黒方四季通用

沈。四兩。 貝香。一兩。 薰陸。一兩。
白檀。一兩。 丁子。二兩。 麝香。二分。

梅花春用之

沈。四兩。 丁。二兩小。 貝。二分。
甘。二朱大。 麝。二朱。 梅に入物。一朱。

荷葉夏用之

沈。三兩。 甘。三分。 貝。一兩一分。
白。一分。 欝金。一朱。 薰。二分。
藿香。二分。 丁子。一兩半。 麝香。一分半。

菊花秋用之

沈。二兩。 丁。一兩。 貝。三分。
薰。三朱。 甘。三朱。 麝。一分。

落葉冬用之

沈。五兩。 丁。三兩。 白。三分。
薰。三分。 藿。二分。 欝。一朱。
青木香。一朱。 桂心。一朱。 甘。一朱。
貝。一兩。 麝。一兩。 占唐。一朱。
右占唐事口傳有之。

新枕

沈。四兩。 丁。二兩。 貝。一兩。
薰。三分。 白。三分。 麝。二分。

侍從

沈。四兩三分。 丁。二兩。 貝。一兩。

甘。一兩。　麝香。一分。

白梅

沈。二兩。　丁。三分。　貝。二分半。
白。一分。　薫。二朱。　甘。一朱。
欝。一朱。　麝。一朱。　梅に入物口傳。一朱。

盧橘　給様橘祝言アリ

沈。四兩。　丁。二兩。　貝。一兩一分。
白。一兩一分。　柏木。一朱。　麝。一分。
青木香。一朱。　藿。一朱。　蘇香油。一朱。
右柏木並蘇香油。此薬種口傳。

野風

沈。四兩。　丁。二兩。　貝。二分。　白。一兩。
薫。一兩。　藿。二分。　青木。一朱。　甘。一分。
桂。一朱。　麝。一分。　欝。一朱。

かなうすの次第

沈　丁　白　薫　貝

香のかはらんたびごとに。かなうすきねをよくのごふべし。いまだあはせぬさきに。香どもべち／＼にすべし。ちりばかりもかよひぬれば。かをうしなふ。沈丁はことになかあしき物也。沈。丁。薫。白。いづれもおなじさまにやをらつきふるふべし。あらくつくには。火のけをのづからいでゝ。又かうになるべき所もくだかれてわろし。いづれも／＼つくときはけのたつを。ちらすべからず。もろ／＼の香のかは。たゞそのけにある也。けをたてず香をちらさで。あまづら合つれば。もろ／＼の香ことごとくこもりて。たく時いとかうばし。沈ぬれてつかれぬ事あらば。あさきかうのかうばしきを入ぐしてつくべし。されはよくつかる。又にほひもよくなる也。

篩事

ふるひはむらなくうすききぬをはるべし。白貝のふるひは。沈丁のよりはこまかなる衣をはるべし。薫六は物につきて。ふるひにももらねば。いますこしうすからん衣をはるべし。

ふるひはこまかなるもあらきも。薫物によりてとるかたあるべきにや。梅花あらく。黑方はこまかなるべし。そのゆへは梅花ははなやかにいまめかしう。はやき心しらびくして合べき物なれば。すこしあらかるべし。黑方は物ふかくおだやかなるべしとみゆれば。ふるひこまかなるべし。こと方どもゝこれになずらへ〔て脱〕とはからひわかつべし。但おほうはこまかなるをさきとし侍るべし。

和合次第黑方

沈。貝。麝。薫。白。丁。

同梅花

沈。丁。貝。甘。薫。麝。

散和合様

箱のふたにうすやうをしきて。其うへに沈ををきて。雉の羽にて格子のごとくこれをわかつ。其上にあまねく丁子をわかちをきて。よくかきあはせて。中より分て二になしてをく。そのひとつをかきひろげて。麝香半分を和して。かき合てしばしをく。さかうに合ぬかたおなじくしばしをきて混合せず。べちの所に貝かう半分ををきて。その上に白旦ををきてかきあわす。又その上に薫陸ををきて。かき合てしばしをく。次にさかうにあわせぬかたの沈をかきひろげて。その上に貝香をわかちをきて。かき合て又はじめのやうにかきひろげて。さかうに合たるかたの沈丁をその上にわかちをきて。よく／＼あわする也。次にあわせふるひ二度。其後一夜をへて。そのにほひたがひにそむをよしとす。かくしてのちあまづらにあわす。これ秘傳也。其後いま半分のさかうをぬりて合つきあわすべし。

香をあわする時。一ばんにをく香は。たく時そのかはてにいでゝ。はてにをく香は。たく時そのかはじめに出てよし。そのゆへににほひよき物をはじめとはてとにをく。貝かう薫六の

たぐひをば。中間にこれをまじふることは。そのかをあながちに出さじが爲也。これはなはだふかき秘說なり。ある方に云。かうばしき香をはてに入れよといへり。さかう丁子の事也。麝香をさす事色々ありといへども。もろもろのかうをかうしのごとくわかつ。そのくぼき所にあまねくちらすなり。

黑方にはさかういれず。こしたるがいとかうばし。梅花侍從にはさかうおほかるわろし。

甘葛和合口傳事

あまづらのあつきはたき物のかをうしなふ。よくさまして合べし。あまづら入たるによきほどなるは。すこしとりてみるに。手につかぬほどにて。手のはだのすぢつくほどなるをよしとす。あまづらを入すぐして。たき物しるくなりたらば。ひをけのはいに。うすやうをあまたしきて。しばしをけばかたまる也。冬のたき物は。合する時しるけれども。ほどふればかたまるゆへに。こまかにつきて。心よく和せしむる也。夏のたき物はたゞいまかたけれども。のちにうるひ出くるゆへに。すこし香をあらくつくにや。小造紙にこまかなるはよけれども。火の氣いとゞしくあがりて。かへしのかになるとあれば。夏はつねより火の氣つよきゆへに。香をあらくつく也。

あまづらなませんじなるは。すぐれてほろめく。さればとてせんじすぐしたるも。あまづらこゞりかたまりて。たく時わきていとわろし。これをよくはからふべし。夏のたき物は。いかにもあまづらすこしせんじすぐしたるにあしからずとあり。あまづらのせんじほどあしくてかはくは。七日八日もすぎてのちの事也。合て次の日などかはくは。あまづらからなり。これにはしほをすこし入べし。此事あなかしこしひすべし〳〵。

合香事

あはせつきあらくすべからず。手をかへずして一人つけといひたれども。それはさしもあらぬにや。かなうすにきねのあたれば。かなくさくなる也。つきひろげられたるをかきあわせ〳〵して。なかをむらなくつかんとすべし。

合春之數。

大一臍五千。小一臍三千六百。四兩三千。二兩千五百。或三兩。一兩千。小四兩二千。

ある方に云。薫物うづむといふ事。はなはだあしき事也。ちやわんのつぼに入て。口をよくつゝみて。かぜにあてずして。春夏三日。秋冬五日。をくなり。

一占唐事。代に楠木のかれたるをわりてきざみ。こになす也。

一白梅に入物事。梅干のさねの中のあんにんを水によくつけて。しほけをいだして。あかきかわをとりてこにする也。

一梅花に入物事。鶯宿梅のしべをかげぼしにして。四兩合ならば。一朱よりもすくなく。こにして入加べし。

一柏木事。これは柏を小きざみ。こにする也。

一蘇香油事。あまづらにませて用也。いづれも其方に随て分兩可有物也。

藿香

水にて土のすむ程あらひてのちに。さけを水に入て。二三度もあらひて。かげぼしにして。こまかにきざみてつく也。

貝香

一日一夜灰にてせんじてのちに。いかにもうすくこそげて。のちに千度ばかり水にてあらひて。いかほどもうすくこそげて。あまづらにて一かへりほどせんじて。上をぬめりのうするほどあらいて。あぶりこにていかにもそとあぶり〳〵。こまかにおろしてこになす也。

甘松

一夜さけにひたして。ぬのにつゝみて。これも

水のすむほどあらいて。あぶりこのそこをかみにてあつくはりて。火をとをくして。きざみてこになす也。又アブラ子共粉ニモスルナリ。

燒薫物故實

つねのたき物のだいにてはなくて。しやうじちやうといふ物をつくりて。それに薫物をいれてたけば。にほひよそへちらずして。香よく物にとまる也。たとへばあかりしやうじのほねのやうにたなをつくりて。とをばうちかみのあつきにて。よく煙の出ざるやうにはるなり。中のたなの重々。又あかりしやうじのほねのごとくして。かみにてははらずして。けぶりを上へとをす也。ぢう／＼にして。しやうぞくなどをそのたなに入をきて。下のぢうに火をとりて入て。つねのやうにたくべし。けぶりのあらんほど。たなの戸をひらくべからず。一夜ほども其まゝをくべし。又こはきうち物。すゞしのものなどの匂ひは。とまりにくき物にて候。それは第一の下にかへり湯のあつきををけば。空にあがりて。ぢう／＼のしやうぞくにしめりのけいさゝかいでゝ。そのゝちゆをとりのけて。たき物をたくにほひとまるべし。秘事也。

たき物のすみには。萩をやきて。そのすみを粉にして。のりにてかたむ。大さ一寸ばかりにすべし。又たゞのすみのいかにもかたきをこにして。のりにてかためたるもよきなり。

かなうすのきね梅なり。まへに一色づゝこにする時はかなきねなり。

又秘方。

沈。一兩。　白。半兩。　生腦。一朱。　甘。一朱。
貝。二兩。　丁。半兩。　薫。少。

右大辨公忠

烏方

沈。四兩。　丁。二兩。　貝。二分小輕。
薫。一分小輕。　白。一分小輕。　麝。二分。

右沈ヲ搗ニテ。次丁。薫。白ノアハイニジヤ香ヲバ合。次貝香。

又說。蜜合之上。麝香振懸云々。蜜合之時。以手振之也。加畢成之。

黑方

沈。四兩。　丁。二兩。　白。二分。

薫。一分。　貝。一兩。　麝。一分。

同方

沈。五兩。　丁子。二兩半。　白檀。一兩。

薫。一兩。　貝香。一兩。　麝。二分半。

梅花

沈。四兩。　丁。二兩少輕。　貝。二分。

甘。二朱。　麝香。一朱。

同方

沈。　貝。　丁。　白。　薫。　甘。　麝。各等分。

荷葉

沈。三兩。　甘。三朱。　貝。一兩一分。

白。一分。　欝。一朱。　薫。二分。

藿。二分。　丁。二兩半。　麝香。一分半。

同方

沈。四兩。　丁。一兩一分。　甘。三朱。

貝。一兩一分。　藿。二朱。　白。二朱。

欝。一分。　安息。一分。　麝。一分。

同方

沈。四兩。　丁。一兩一分。　甘。一朱。　貝。一兩半。

白。一朱。　欝。一分。　薫。二分。　藿。一朱半。

青木。一朱。　安息。一朱。

菊花

沈。四兩。　丁。二兩。　貝。一兩。

薫。一分。　甘。同。　麝。二分。

侍從冬用之。

沈。四兩三分。　丁。二兩。　貝。一兩。

甘。一分。　青木。一朱。

八千代

沈。四兩。　丁。一兩。　貝。一兩。

甘。一分。　欝三分。

御本云
右方當家代々秘本也。更不可有他見。宍賢ゝゝ。
永正六稔夏六月日　内（實香）府御判

沈。半分。丁。貝。次麝ヲ半分。次薫。次白也。次沈ヲ半分ヲパ一ノ後ニ白ノ上ヘ雉ノ羽ニテヒログベシ。麝ハ惣ノ薬種ヲ如此ミツ〔ソ歟〕ヲ付テ竪ニメ。麝ヲ少ヅヽヒネル也。サテ後ニ又横ニミツ〔ソ歟〕ヲ竪ノ如クニ。麝ヲヒネリ入テ。又アハイヲ如此シテ。如元ニ麝香ヲヒネリテ。サテ能々惣ノ薬種ヲ合也。
薄様。硯ノ蓋ニヒロゲテ。其上ニ薬ヲ入也。口傳不一。
右調合如件。
又方新枕
沈。六兩。　丁。三兩。　貝。同。
白。二分。　桂。一分。　薫。二分。
藿。三分。　青木。一朱。　麝。二分。
白梅春
沈。一兩。　丁。二分。　貝。一分半。
白。二朱。　薫。一朱。　甘。半朱。
欝。同。　麝。同。　梅ニ入物口傳。一朱。
荷葉。ハスノカニヨソヘタリ。夏。
沈。二兩二朱。或四朱。　丁。一兩。或加一分。或一朱。　甘。二朱。
貝。三分二朱。　白。二朱輕。或三朱。或一朱。　麝。四朱。
同方
沈。四兩二分。　丁。二兩。　貝。三兩。　麝。一分。
白。四朱。　香附子。一分三朱。　薫。三朱。　蘇合。二分。
侍從。紅葉チカタドル。朱雀院御方。
沈四。小一。　丁二。小二。　貝一。小三。
甘一分三朱。小四。　占唐一分三朱。小五。
落葉。秋ノ末ニ冬ノ始ニ用之。
沈。五兩。　丁。三兩。　白。三分。　薫。同。
藿。二分。　欝。一朱。　青木。同。　桂。一朱。
甘。一朱。　貝。一兩。　麝。二分。　占唐。一朱。
菊花。口傳アリ。冬。
沈二二。　丁一。　貝。三分。

薫。三朱。　藿。同。　麝。一分。

黒方。口傳アリ。

沈四。　丁二。　貝二。　薫一。　白一。

麝。一分。　藿。一兩。　茗。一分。　青。一分。

ナガ月。妙音院殿ノ御新作。

沈。一兩。　丁。二分。　貝一分。

薫。二朱。　麝。一分。

在明。同。

沈。四兩。　丁。三兩。　貝。一兩。

薫。二分。　麝。三分。　白。一分二朱。

富士

沈。六兩。　丁。二兩二分。　貝。二兩三分。　白。二分。

桂。一分一朱。　薫。三分。　青。二朱。　麝。二分。

蘭

沈。五兩。　占唐。三分。　貝。一兩三分。

甘。三朱。　白。一分半。　丁。一兩。

桂。一朱。　薫。六兩三朱。　麝。二分。

供養香

沈。二兩二分。丁。二分。蘇合。一分。薫。一分。白。同。

梅花香

甘。三兩。　藿。二兩。　丁。一兩。

宿砂。一朱。　木香。一分。　川芎。同。

麝香皮。二朱。白。二分。　薫。二分。

本方分

沈。四兩。　丁。二兩。　貝。同。

白。三分。　薫。三分。　麝。一分。

又云。

沈。五兩。　丁。三分大。　貝。同上。

白。二分小。　薫。同。　麝。一分時ニヨル。

和合次第

侍従次第

沈。　丁。　貝。　甘。　欝。

黒方次第

沈。　貝。　麝。　薫。　白。　丁。

和合之事次第ハ。梅花黒方ハ次アリ。自余ノ方ハ黒方ヲ以テナゾラヘ入ベシ。

一ヘラハ柳ナルベシ。又合テ五葉ノ松ノ本ニ

ウヅム事本也。
一梅花青木香ヲ加ベシ。是ハ花ノシベノ香ニカタドルナリ。
一カナウスノ事。七八サイノ童子ノカヲホドニメツクベシ。
一菊花二兩合ニ。菊サカリニ開テ。ソノ香バシキ時。花ヲヽリテカタワラニ置合スベシ。菊花二分バカリ加ベシ。シベナドヨク取ステヽ。花ビラバカリヲムシリトリテ入ベシ。黄菊ヲ用也。水ノホトリニ菊ノ下ニウヅムベシ。二七日バカリ。若急事ナラバ二七日ステト(キズ歟)モ用。又云。當時ハウヅマズ。
一侍從ハヌルキ火ニ蜜ヲ煎〆。古唐ヲミツニ入テ。カツウハカイテヨク合セ。ヲワリテモロ〳〵ノツキタル香ヲ入。カイヲモチテ調合ス。三千六百ツクベシ。
一安息香コソゲテ粉ニナスナリ。

又方云春日野。
沈。一兩。　甘。一分。　丁。二朱。
薫。同。　白。一分。　麝。一朱。
焔消。二分。　生腦。同。
右爲細末。コレホドニ車前子ノ糊ニテ合テツキカタメテ。コレホドニ丸也。上ニ竹油ヲモヲス。只モスル也。又ハ粉ニテモタク物ナリ。

龍涎香
沈。二兩。　白。一兩。　丁。二分。
薄。二分。　甘。一分。　龍腦。一分。又ハ生腦モ良。
麝。二分。
右爲細末。車前子五兩。水ニテ煎。ネバネバト〆。布ニテコシテツキ合。コレホドニ丸。口傳有之。
各此方ハ當家代々相傳之秘本。後白河后府(有歟)好此事。有故實御相傳云々。其巨細後押小路

(公忠)內府命後三條(實冬)相國之由見裏書畢。

香西岩熊殿御所望ニヨッテ。如此書之進じ候。相傳之所如件。何モ禁裏之御方也。ユメ〳〵人に御相傳有間敷者也。

大永參五月四日新編之者也。

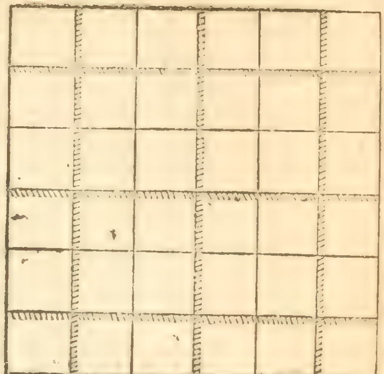
甘松。三兩。　一兩二分。　三分。
藿香。一兩二分。　三分。　一分二朱。
丁子。二兩一分。但三兩一分。　一兩三分。二分二朱。　一分一朱。　三分。
白旦。一分一朱。　二朱半。　一朱少重。
川芎。二朱。　一朱。　朱中。
薫陸。一分。　二朱。　一朱。
菖蒲。三分。　一分一朱。　二朱々中。
甘菊。三朱。　一朱半。　朱半少重。
　五方云。
くわつかう。二分。
かんせう。一分。
ちやうじ。二分。
くんろく。一分。
びやくたん。二分。
しやうかう。一分。但口傳有之。
　宮內卿方也。

雲上より一吟齋御あづかりの御本也。香西新次郎殿一しほ御所望あるによつて。うつしまいらせ候者也。

　　權大納言(光卿)

　薫衣香
藿香。一兩。　甘松。一両。　丁子。一両二朱。
白旦。二分。　薫陸。二分。　青腦。一分。
藿甘ニアライテ丁(子歟)ヤウニ口傳有之。
藥種わかち合時のかうし也。但口傳有之。

　薫衣香
藿。　甘。　白。各一兩。



丁。二兩二分。　麝。一分。　薫。一分。
木香。一分。

トウチン香　ウイラフ方

阿仙薬。二兩。　丁子。二分。　カン水石。同。
龍脳。一分。但生ノウモ良。　麝。三分。
右廿草車前子之煎物ニテ丸。廿七兩。車五兩。水七ハイヲ一バイニセンズベシ。口傳有之。

同　外良方也。所秘也。

阿仙薬。四兩。粉ニメ。　龍脳。一分。去塵。　麝香。三朱。塵去。
沈返。二朱。　石膏。二分。土器ニテ燒。刻テ末スル。　甘草。一兩。煎メ可丸。黒ミ口傳有之。

合香之方

沈香。　丁子。　乳香。　薫陸。　貝香。
安息香。　藿香。　白旦。
各一兩蜜ニテ合也。

四辻家薫物書

黒方

沈。四兩少。チモク。　細ニワリテ。虫クヒ木ノクチケヅリテノケ。米ノツブナドホドニキザム。アマリ細ク粉ニシタルハ悪シ。
丁子。三兩。同。　花ヲサリ日ヲサリテ。キザミテロシフルフ。
甲香。一兩。水ニテヨクニテアブリフルウ。又蜜ヲ水ニテ古酒ノ色ホドニノベ。其蜜ニツケテアブリ。其少カロキ吉。後キザミフルフ。

白檀。二分。ソノマヽキザミフルウ。
同。
薫陸。一分二朱。其マヽヲロシフルウ。
少カロク入テ吉ナラヒ也。
麝香。二分。能スリテ毛ヲエラミ。チリヲエラミフルウ。
少ヲモク吉。
蜜。金バチニ入。アハノタタヌホドニ。湯センニシテアハヲトルナリ。

重様之事

沈。一。丁。二。甲。三。白。四。薫。五。广。六。

先一番ニ沈ヲ文匣之蓋ナドノヤウナル。イカニモロクナル物ニトリノコヲシキ。其上ヘ沈ヲサジニテイカニモ平ニシテ。其上ヘサジニテ丁子ヲマンベンナルヤウニフルイカケ。ソレヲサジニテヨクマデルヤウニマズベシ。イヅレモ如此次第有ニ見エタリ。

广香ヲバ沈丁甲白薫ヲ合セタル餘ヲロクニナヲソ。其ニ搗コノヤウニ筋ヲ引。其スヂノ中ヘフルイガクル也。

蜜ヨキホドニ入テ。金ウスニ入。ミチツクベシ。ナルホド五千六千モツク。鹽マタ口傳有之。

仙人。伏見殿方。

沈。二兩。丁。一兩。白。一朱。薫。一朱。麝。一分。

黒方

沈。三兩。丁。一兩二分。白。三分 薫。三分。
具。二分一朱。麝。一分二朱。

くむえ香

かむ松。 三兩。
くわつ香。 二兩。
沈。 一兩。
丁子。 四兩二分。
さかうのかは。 一分。こまかにきざむ。
白檀。 三分。こまかにけづりてあわす。
うこむ。 二分。
薫陸。 二分。
いづれもきざみてこまかにして合す。

同

丁子。 二兩。
甘松。 一兩二分。

くわつ香。　一兩二分。
せむきう。　一分。
せうのふ。　一分。
キヌニ○是程ニ〔ツ製紙〕ソ、ミテ。中ヘ灯心ヲ入クハヘテ。口ヲユイテ一袋ニヒトツ、入緘。
けいしむ。　一分。
たうき。　一分。
ういきやう。　一朱。カハラケニテイツテ。上ノカハヲテツス。

黒方。四季通用。祝言之時モ用ル也。
沉。　四兩。
丁子。　二兩。
貝。　一兩。
薫。　一分。
白檀。　二分。

黒方
沉。一分ヒカ。　一兩二分。
丁子。　二分一朱。
白檀。　一分一朱。
薫。　三朱。
貝。一朱ヒカ。　一分。
麝。一朱マス。　一朱。
麝ハ一朱ヲ二度ニハリテ入也。
沈貝白薫丁广以上。

梅花。春。
沈。　四兩。
丁。　二兩。
貝。　二分。
甘松。　二朱。
广。　二朱。

荷葉。夏。
沈。　七兩二分。
甘松。　一分。
貝。　二兩二分。
丁。　二兩二分。

藿。一分四朱。
白。一分。
うこむ。三分。
安息香。一分。

菊花。秋。

沉。二兩。丁。一兩。
貝。二分。薫。三朱。
甘。三朱。麝。一分。

侍從。是ハ冬用。口傳。

沉。四兩。丁。二兩。
貝。三分。甘。一分三朱。
占唐一分三朱。代あり。口傳。

くのへ香の方

梅花香。後白川右府御しんさく。

甘松。三兩。くわつかう。二兩。
丁子。二分二朱。
しゆくしや。一朱。
木香。一分。
广のへその皮。三朱。白檀。二分。
くむろく。一分。せんきう。一朱。

やくしゆとゝのへやう

かんせうはあまのくこんなどのやうなるさけにひたして。一夜をきてしぼりあげて。よるのむしろの下によくつゝみて。そのうへにいねてしきほすとなり。

くわつかうはあつききぬにつゝみて。白水にて六七度ふりすゝぎて。しぼりあげてかげぼしにする也。

稱の薫種はきざみて。木きねにてあらくつきてなずらへて相成の同香にになふ道理としりてたきぬれば。あしきものさりよき事きたり。菩薩聖衆にもちかづき。福得幸も心にかなふべしと心ゑぬれば。その匂ひもちからありて。よしふかゝるべく侍なれ。たゞいろ〳〵にふけり。香にふけるべき巾たちとばかりしれらん人は。あはせまなばんも。うき世一の人の心にも。なほあまれくはかないぶたかるべしとなむ。

薫物相承次第

一秤斤目事。

六朱を一分とす。四分を一兩とす。十六兩を小の一斤とす。卅八兩を大の一斤とす。小の三兩を大の一兩とす。

一おもしのをほそくすべし。多分むまのあしり。

一かなか〔う歟〕すの次第。

一沉。白檀。薫陸。貝香。丁子。

ある方にすくなき香よりまづつくとあり。沉をばのちにつくべき也。

今案。沉。白檀。薫陸。貝香。丁子。如此口傳。

一かならずあまたにて一度に程なくつきいだせとあり。程へぬればわろし。いそぎ〳〵あはすべし。ことに沉ばかりつきてをくべからず。にほひうせてわろし。

一香のかはらんたびごとに。かならうすきれをよく〳〵のごふべし。いまだあはせぬさきには。香どもべち〳〵にをくべし。ちりばかりも香のかよひぬれバかをうしなふ。沉丁子はことに中のあしきものなり。

一香どもをほくいれて。かならうすのはだをのどはせ。金うすのはだはくさきものなり。

一金うすの口のめぐりにかみをたてゝ。きねにゆひつけて。すきまなくつくべし。きをもらすべからず。香をうしなはじがためなり。もろ〳〵の香のかはたゞそのきにあるなり。かぜにふかれては。かれていたくかうばしきをわろしといふ。ぎをたてず。薬をちらさで。あまづらあわせをしつれば。花やかなるにほひあるべし。

一沉をば兩數に一二兩ばかりあまりてつくべし。

一篩事

ふるいにむらなくうすぎぬをはるべし。白檀貝香のふるいはめのこまかなるべし。沉丁子はめあらかるべし。

一薫陸は物につきてふるひにももらぬは。まへにつきたる白檀をちととり合て。ぐしてつきふるべし。この事秘すべし。

一もろ〳〵の香どもふるふを。きづよくあらきもいかゞ。又こまかなるはいのごとくにも。匂ものにとゞまらず。よき程にはからふべし。

一梅花はあらく。黒方はこまかなるべし。そのゆへ梅花ははなやかにいまめかしうあはすべし。くろはうはものふかくおだやかなるべし。諸方ともに是になずらへてはからふべし。

和合次第

黒方。承和秘方。

沉。貝。麝。薫。白。丁。

梅花

沉。丁。貝。白。甘。薫。麝。

侍從

沉。丁。貝。甘。麝。

散和合様

一 はこのふたに。地うすやうをしきて。その上に沉をおく。きじのはねにてこれをわかちをく。

一 よく〳〵あはせて後に。あはせふるひ二度。

一 合ふるひの後一夜をへて。その匂たがひにそむをよしとす。そのゝちにあはすべし。

一 あまづらあはせの時。合こめて沉二ふんばかりうへにあわすべし。あまづらのかをへだてんためなり。

一 黒方にはさかういれ過したるいとからばし。

一 梅花侍從にはさかうおほかるわろし。

一 春丁子。秋沉。冬薫陸。

一 あはせむ時にしたがひて。三朱ばかりくはふべし。

一 あまづら和合事

あまづらのあつきはたき物のかをうしなふ。よくさましてあわすべし。

一 あまづらいれたるに。よき程成は。すこしとりてみるに。手につかぬほどにて。手のはだのすぢつくほどなるをよしとす。あまづら入すごして。たき物しるくなりたらば。火をけの灰にうすやうをあまたしきて。しばしをきたればかたまるなり。

一 冬のたきものは。合する時うるおひたれども。程ふればかたまるゆへに。こまかにつきて。心よく和せしむる也。

一 夏のたき物はたゞいまかたけれども。のちにうるおひでくるゆへに。すこし香をあらくつくにや。

一 合つきの事

あはせつきはあらくつくべからず。かならうすにきれのあたれば。かなくさくなれば。中をつかんとすべし。つきひろげられたるをかきあはせ〳〵して。むらなくつくべし。

一 つきてのち風にあてずといふ也。

一 合つきのかず

大の一ざい五千。も一ざい三千六百。四兩三千。二兩千五

百。一兩千。小四兩二千。

一　あはする時節

梅花のさかり二月三月九月。あるいは正月十月比にあわすべしともいふ

かいかうはおの〳〵の香をよくとゝのへ。白檀はとをくにおひをとばせ。くむろくはをの〳〵の香をよく物にとむるなり。

後土御門院勅合れうさう院へたづね下されこのぶん也。

御調合の梅花

沉。五兩。大。　丁子。一兩。大。　貝香。一兩。小。

甘松。二分。　麝二分。大。

家の方

黑方

沈。一兩。　丁字。二分。　薫陸。一朱半。

白檀。一朱半。　貝香。一分。或ハ三朱。　麝。四分。或ハ三朱。

梅花。梅のかににたるにほひ也。

沈。三兩。　丁子。一兩二分。

貝。二兩二分。　麝。一分。

薫。一分。　白檀。一分。

花はちす。はちすのかによそへたり。

沈。四兩。　丁子。一兩二分。

貝。三分。　うこむ。一分。

甘松。一分。

落葉。秋のすゑ冬のはじめにもちゐるべし。時雨する時もみぢのちりかゝるに心すごきかにやあらん。

沈。九兩。　丁子。四兩。

貝。一兩二分。　麝。二分。

かうふし。二分。　白檀。一分二朱。

薫陸。一分。　そかう。一兩。

又方

沈。一兩二分。　丁子。二分。かろし。

貝。一分二朱。　白。一朱。

薫。一朱。かろし。　かうふし。二朱。おもし。

广。一朱。　そかう。二朱。

玉椿。後白川右府の御新さく。

沈。四兩。　丁子。二兩。
甘松。一分二朱。貝。一兩。
薰。一分。　うこむ。一分。
麝。一朱。

若草。同。

沈。三兩。　せんきう。三分。代口傳。
貝。一兩一分。　甘松。三朱。
白檀。二分。　丁子。一兩。
薰。一分。　麝。一分。

しら菊花。同。これをたきこれをきけば。老をさけ命をのぶる方なり。冬菊のにほひ也。

沈。二兩。　丁子。一兩。
貝。三分。　薰陸。三朱。
甘松。三朱。　麝香。一分。

梅花

沈。　貝。　丁。　白。薰。　甘。　广。各とうぶん。

蓮葉

沈。三兩。　甘松。三分。

貝。一兩一分。　白。一分。
うこむ。一朱。　薰陸。二分。
くわつ香。二分。　丁子。一兩。
さ香。一分半。

野風

沈。四兩。　丁子。二兩。
貝。二分。　白。一兩。
薰。一兩。　くわつ香。二分。
しやう木かう。一朱。甘松。一分。
けいしん。一朱。さかう。一分。
沈。四兩。　丁。二兩。
貝。一兩一方。　しやうもく香。一朱。
くわつ香。一分。白。一兩。
柏。一朱。口傳。　广。一分。

新枕

沈。六兩。　丁子。三兩二分。

貝。二兩三分。　白。二分。
けいしむ。一分一朱。　薫。二分。
しやう木かう。二朱。　じや香。二分。合様あり。口傳。

烏方。家の方。

沈。四兩二分。　丁子。二兩。
貝。一兩。　薫陸。一兩。
白。一兩。　じや香。一分。

蘭。家の方。

沈。二兩。　せんきう。三分。
貝。一兩。　甘。三朱。
白。一分二朱。　丁。一兩一分。
けいしん。一朱。　薫。三朱。
广。二分。

千種。れうしやうゐん新さくの方成。

沈。五兩。　丁子。二兩。
貝。一兩。　白。一兩。
くんろく。一兩。　うこむ。一分。
かんせう。二分。　ざ香。二分。

仙人方

沈。二兩。　丁子。三分。
貝。二分。　白。一分。
丁香皮。二朱。　薫陸。一朱。
じやかう。三朱。

拾遺方。じゞうのかう名。

沈。四兩。　丁子。二兩。
貝。三兩。　薫。二分。
白。二分。　かんせう。二分。
うこむ。二分。　せんきう。三分。代口傳。

同方

沈。三兩。　丁子。二兩。
貝。一兩。　薫陸。二分。
うこむ。三分。　しやうなう。一分。口傳。

菖蒲

沈。一兩一分。　丁子。一兩。

貝。二分。　白。二分。
薫。一分。　うこむ。一分二朱。
あやめのね。一朱。　麝香。一朱。
二葉
沉。一兩二分。　丁子。二分。
貝。三朱。　白。二分。
甘松。三朱。　麝香。二朱。
以上。

當家たきもの丶方のことは。禁裏御代々つたへきこしめす御おもむき。勅書ならびに御製の御たんざくあり。めいぶつたるによりて。今こ丶にうつす所なり。

たきもの丶代々のにほひを雲の上につたふる風のたよりうれしも

黒方。菊方。
沉。　二兩。
丁子。　一兩。
白檀。　二分。
貝香。　二分。
薫陸。　二分。
麝香。　二朱。

右之諸方。四辻家代々雖爲相傳之双紙。予數年〔懇歟〕根望之間難默。故亞相遠行之砌。蘊奥口傳等不殘令傳受給者也。

小澤本
當今へは先年愚老御前におきて調合させられ。條々申入了。

右四辻代々相傳双紙也。亞相遠行之砌。口傳等所殘令傳授畢。殊黒方者。正親町院以御自筆之方奉寫者也。末代之重寶無比類事也。穴賢々々。外見停止云々。

于時文錄〔衍歟〕承曆仲秋日　僧都實隆

薫衣香 小澤本已下ナシ

甘松。　一分二朱。
白檀。　一分。
丁子。　一分。
扁脳。　二朱。
龍脳。　一分二朱。
ういきやう。　一分二朱。

同。いかにもほそくうつりて。

もつかう。　二分。
白檀。　二分三朱。
丁子。　一分二朱。
安仙薬。　一分二朱。
薫陸。　一分三朱。
ちんかう。　二分。
りやうかう。　一分三朱。
龍なふ。　二分。

かんせう。　一両。
扁脳。　三朱。

同

甘松。　大二分。
木香。　三朱。
青木香。　三朱。
白檀。　大一分。
丁子。　一分。
安仙薬。　一分。
安息。　一分。
薫陸。　一分。
良姜。　三朱。
扁脳。少。　二朱。
麝香。　一分三朱。
龍脳。　一分三朱。少
茴香。　六朱。

同

甘松。　一兩。
白檀。　半兩。
丁子。　一朱。
良香。　一朱。
龍腦。　一分。
麝香。　二朱。
うこん。少ひかへて。　三朱。

同

しんゐ。　廿一兩一分。
みんな。　四兩半。
大わう。　九兩四分。
白たん。　同。
かんせう。　十四兩半。
ざかう。　二兩。
たいさう。　十一兩一分。
右聞書兩日不詳。
龜延眞。　一兩。

松。　一分。
丁。　三粒。
旦。
广。　各一朱。
腦。
うこん。　一朱。
花説腦。广。一朱。　丁。旦。甘。一分。　雷丸。卅五兩。

這薫物方一冊。借或人秘藏本書寫校合訖。
天明五年首夏　平(花押)

此一卷平三品時章卿令借給。以備筆書寫畢。
天明六年立秋　經亮

以下小澤本ニアリ
にほひ袋方
一じやかう。一兩。一りうのう。一兩。一かんせう。三兩。一白たん。三兩。一丁子三兩。

黒方

一ちんかう。二両。一丁子。一両。一白たん。二分。一くんろく。二分。一かいかう。一両二朱。一じやかう。一分。

一ちん。四両。一丁子。二両。一かいかう。一両。一びやく。一分。一くんろく。一分一朱。一じやかう。二分。

右むたいなは殿方。

わか草

一ちん。二両。一かいかう。二分。一白。二分二朱。一占唐。一分。一かんせう。一朱。一くんろく。一分。一じやかう。一分二朱。

一かんせう。二分。一じやこう。同。一りうのう。同。一もつかう。一分。一せうもつかう。同。一白。同。一へんのう。二朱。一ういきやう。二朱。一りやうかう。三朱。一はいさう。三朱。一れいりやうかう。一分。一くんろく。一分二朱。一あせんやく。同。

一あんそくかう。一分。一しんゐ。同。一そかうゆ。少。

あんへるの方

一丁子。一両二分。一あんそくかう。三分。一あせんやく。同。一かんせう。三朱。一くんろく。三分。一松し。三分。一じやかう。一両。一そかうゆ。一両。

れうせんかう方

一ちん。三両。一かんせう。二両。一くわつかう。三両。一丁子。二両。一しんせう。一両。一うこん。三両。一しかう。少。一しやうのう。少。

右こにしてしやぜんしを煎じ。よくねりつめて。

右くすりこねて。かたにていろ〳〵にをし申候。

ひやうぶけう手あぶらの方

一じやかう。一両。一かんせう。貮両。一丁子。二両。一ほわう。二分。一白たん。一両。一きやらのあぶ

ら。一兩。
一たうのつち。これはしろみに入申候。よきほどに。手あぶらもおなじ事ねばりかたく候へば。いかほどにてもよきほどにらいくわんのあぶら入てねり申候也。

寛政三年六月以小澤芦菴本校合且追加畢。

經亮

續群書類從卷第五百五十二

遊戯部二

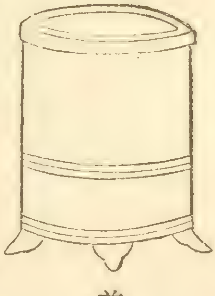
香爐之卷

香爐飾之事

一床に香爐置事。軸本也。しかれども香爐名物にてならばおかれまじき也。置所は軸外を香爐の眞中に當るか。又は軸外を盆の端に當て置也。掛花なくば張付の繼目をめ當にすべし。

一聞香爐は床におく事。大かた盆なしに置也。香前なくば灰をよく暖めてかき。灰涯(キシ)能きよめ可置。又香すきても置也。其時は客より所望ならば可置。さなくば勝手へいるゝか。

又は地敷居。脇に可置。おき所口傳有。



前

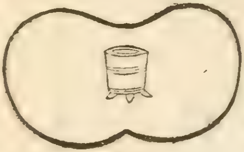
一四方盆に聞香爐置合する事。足所を床の前へなして置也。灰は右同前。惣じて香爐を盆にのする事。名物にあらずばおかれまじき也。四方盆には箸おかず。香爐斗也。丸盆方

盆に同前。置様口傳

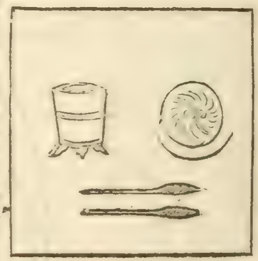


前

一沓形の盆に聞香置合る事。方盆と同前也。自然箸そゆる事も有。箸不勝おかれまじき也。



一長盆に聞香爐香合香箸置事如繪圖。香合香袋へ入。香爐は蓋をして置也。置所違棚勝手の棚などに可置。大成盆長盆同前。

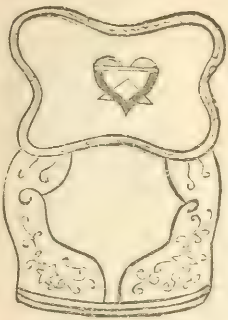


一飾に置香爐には火をとらず。銀葉もおかざる也。箸目斗付。灰涯をよくきよめおく也。又箸目を二ッづゝ付て置事有。是は畧儀也。看板には鴫。鴛。獅子。其外生るいの香爐よ



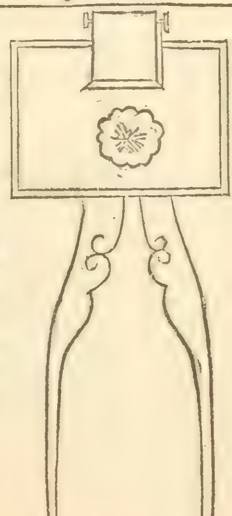
き也。
置合繪圖のごく。置所口傳。
一卓には何香爐にても可置。但聞香爐は不置。
灰の押やうかき上所口傳。





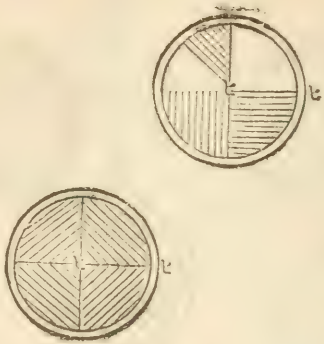
一香臺には剔紅。堆朱炷障。犀皮累々なども有。

ころはさだまらざる也。香爐置合る事卓と同じき也。
一中央の卓飾におかず。空炷に可用。空炷の香爐は鴨の香爐。獅子の香爐。禅香爐すべり。香爐の類よき也。香合置合すべし。銀葉はおかざる也。



一空焼に名香たく事なかれ。
一空焼の時はかならず香合を置べし。香合袋へ入て置事も有。空焼の香はいかにもかうばしきはなやか成香しかるべきなり。

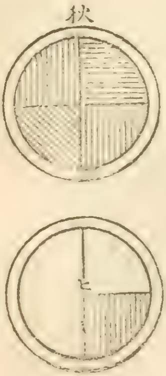
一空焼の香の寸法。長サ三分。巾二分。厚サ壹分。
一雨中にはかならず香をたくよし。古人の傳也。
一床におく香爐。一簾なくば火をとらずにはおくまじき也。

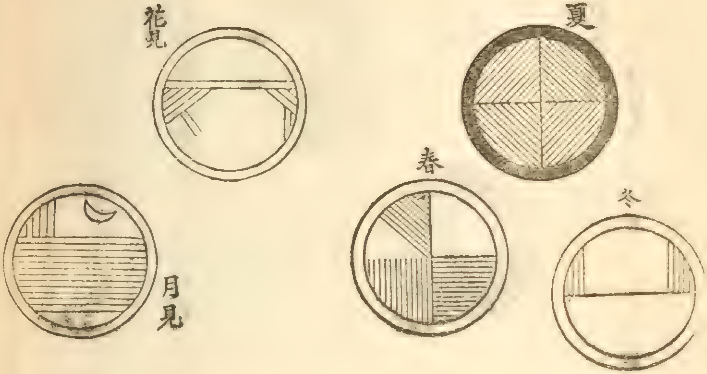


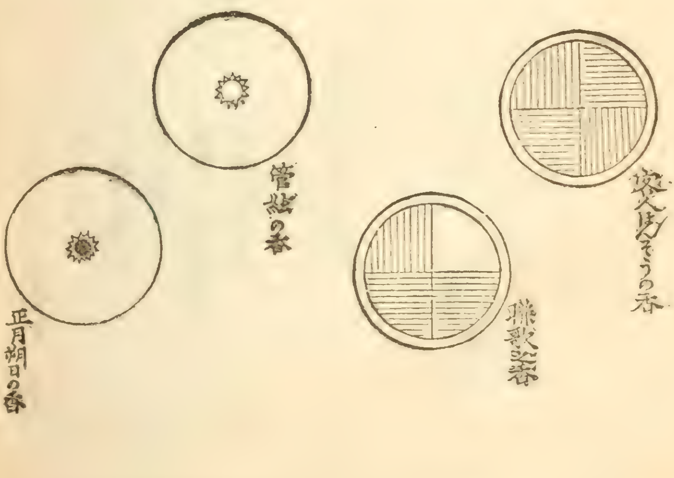
鹽器の類はあしらひに可置。法外成故也。
老父宗信憶所傳授也。令(ヨク)知命之後。(有脱字)別而依執心。口傳不殘相傳畢。因玆聊不可他見者也。

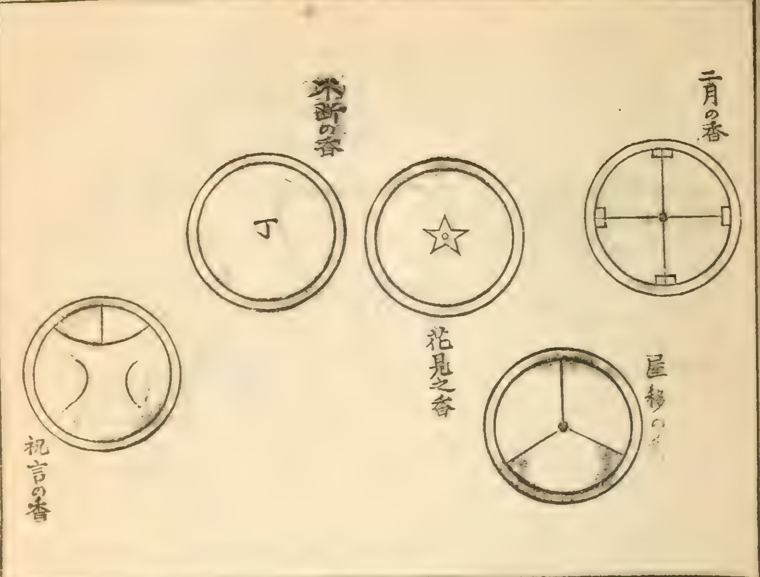
志野三郎左衛門尉　宗信
同參兩齋　宗温
同不寒齋　有巴
和泉屋　道浦
神田二郎九郎　勝重
中川祐之丞　親良

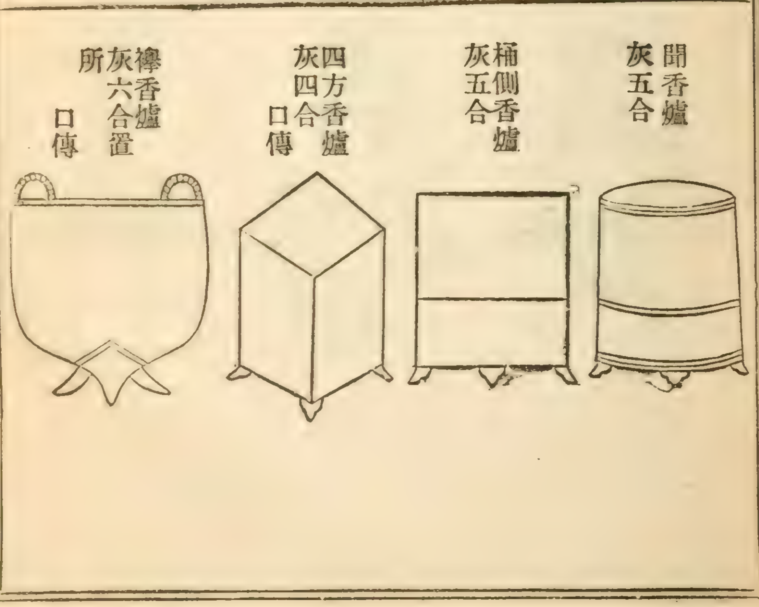
香爐灰押ヤウ之事



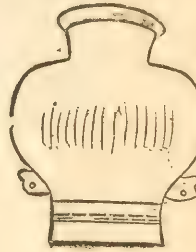

夏
花見
春
冬
月見


管絃の香
正月朔日の香
連歌之香


二月の香
不断の香
花見之香
屋移の香
祝言の香

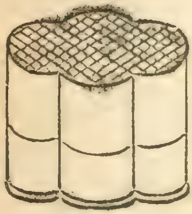

聞香爐
灰五合
桶側香爐
灰五合
四方香爐
灰四合
口傳
襷香爐
灰六合置所
口傳

すのこ香爐
灰六合置所
口傳

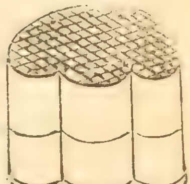


火鉢香爐
別のも可
有之
灰六合





火取香爐
灰五合



鴛ノ香爐
灰六合
口傳



鴨ノ香爐
灰六合
押やう色々
口傳



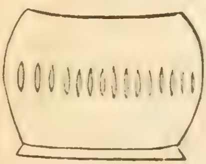
獅子の香爐
灰六合
口傳



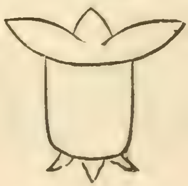


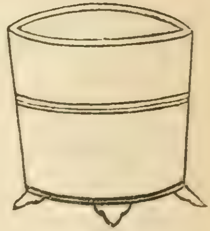


盥器當世香爐ニ用
灰五合

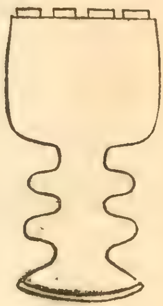


船の香爐
一葉ト云
灰五合

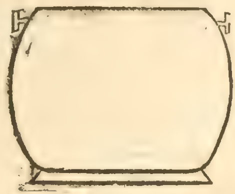




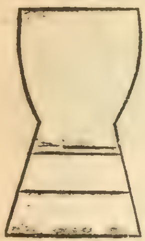
ほやの香爐
灰五合
置所口傳



すべり香爐
灰六合



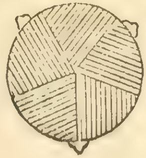
二重香爐
灰五合



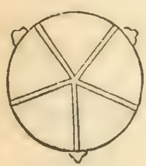
二重香爐
灰六合
置所口傳



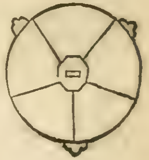
五合の灰
皆如此
灰のかき
上ゲ賞翫
の箸口傳



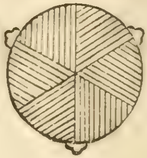
草の押やう



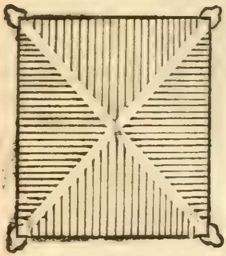
銀葉の置やう香の木なり



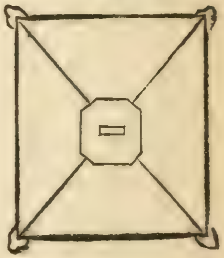
六合ノ類皆如此灰のかき上ゲ聞香爐に替ざる也銀葉置やう聞香爐と同じ



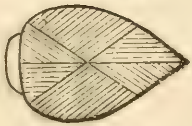
四方香爐如此



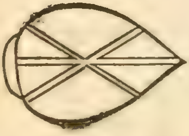
銀葉の置様香の木なり



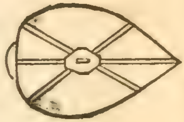
鴨之香爐眞ノ灰ヲシヤウ



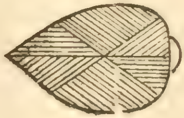
草の灰押ヤウ



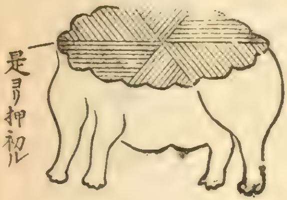
銀葉ノヲキヤウ香ノ木ナリ



右構之座敷には如此置合る事也此時ハ灰ノ押ヤウ替ル也



獅子の香爐灰鴨の香爐とおなじ箸目如此



右香爐之卷當家秘傳之書也。努々不可有他見者也。

志野三郎左衞門尉　宗信
同　參兩齋　宗溫
同　不寒齋　有巴
和泉屋　道浦
神田二郎九郎　勝重
中川助之丞　親良

某家香合

一番
左　ほつけ
右　ちどり

きさらぎ中の十日あまりなるに。ことしはうるふ月も侍ゆへにや。花はまちとをに。吹風は枝をならさずしめやかにて。梅の匂ひのみそこは かとなく のこりたるに。時の好士ども秘めをきたる名有沉香

どもとり出して。我も〳〵といどみ、あらそふ事のありけるとかや。それ香の徳たる。天子の位につき給にも。まづ香をたきて天に告る事あり。一瓣を拈ずるにも万歳〳〵の祝語あり。まして佛に供しては遍滿十方界ともいへり。其徳みじかき筆にはつくしがたし。されば治世理民よろづの道にいたりて。よこしまなきをさきとせるに。辟邪香といへるぞ。そのことはりあらはなりける。衆香の中に。麝香にすぎていともめでたきにほひはなけれど。過分すれば害をなせり。沉香は斤にみちても。にほひをやぶる事なしといへる事あり。まことによこしまなきにほひは。沉香のみにぞあるべき。この比國の政よこしまなき事をたのしめるあまりに。此かちまけをさだめ決すべしとて。香をむすびてあらそひあへる。興ある事とぞきこえし。しかるにこの比此かちまけに詞をくはふべきよし。はるかなるこしの海山をこえて申をくられし。もとより二葉よりのにほひをそなへたる身にもあらず。いまはまして死灰槁木になりはてゝはいなみ申べきを。鼻根重罪。畢竟淸淨懺悔の思もたへずしてしるし付けり。

左。其名をうちきくより。隨喜の功德增長し。罪過の鼻根淸淨となれり。これにたちならぶ事あるまじくおぼえしに。雲井をわたる心たかさにや。千鳥とてさし出の磯にすむなる。まさしく冬の夜のさえわたる曉などうちきゝたる。又なく物あわれなるは。この世の物ともおぼえず。かの源氏物語になく音さびししき朝ぼらけかなとよめるは。さながら不輕の聲にきゝ

なせるにや。されば是も法花をはなれざる心ありぬべし。さらにおとるけぢめあるまじきにや。されど此一番に出たる法花最第一に符合せり。よりて例にまかせて左を勝とす。

二番

左　日かげの花

右　立まふ袖

左。日のかげにさしたる花は。さかりも久しくみるべきにや。又ちはやふる神代をかけたる日かげならば。世にたぐひなかるべし。右はわが切におもふ人のたちまふ袖にならべては。心もとまりぬべきを。かの五節の小忌にあへる人〳〵の。からくしきすがた思くらぶるに。天てらす日かげのかつらに心はひかれけり。

三番

左　木がらし

右　あやめ

左。朧月夜の内侍のかみのおぼつかなさの此もへにけるといひ。狭衣の中將のかゝるこひぢと人はしらぬにといへる。おなじほどのおもひにや。

四番

左　みよし野

右　八重がき

右。八雲たついづものむかしは。人の世となりてのみぞ一もじのはじめなれど。今の世にはにほひなし。みよし野の花の雲は。八雲には立まさりぬべし。

五番

左　すま

右　ありあけ

左はかの行平の中納言のもしほたれつゝ

といひてし浦風に。おもはぬ方までたなびき薫じたん煙のほかに。ありあけのさりげなく出たるけしき。たちはなるべき物ともみへず。ならべて見るべきにこそ。

六番

左　ろきつ

右　らうばい

左。ろきつといへるや。司馬相如が上林賦には。廣橋のはなたちばな夏熟せりとあり。又の説には盧橘は枇杷といへり。此名にはなたち花とこそあるべきを。こはこはしといへるは枇杷にぞあるらし。戴叔倫が盧橘花開楓葉衰。出門何處望京師と。時節の景氣をあり〳〵とつくり。しかも又あはれに物さびし。

右。蠟梅は黄魯直が天公戲剪百花房。奪盡人工更有香。この詩は心のたくみたぐひなきにや。花のさまもこまやかなれば勝とす。

七番

左　八はし

右　しのゝめ

左。はる〴〵きぬる旅の道などには。一煙中のなぐさめだしく物あらじかし。右。しのゝめ。をのだきぬ〴〵のおもひのなだめすてがたさを。しばしをしてめでなん。

八番

左　似たり

右　みそぎ

左。昔殷高宗傳説にあひて。これ似たりとありし詞も。かしこくおもひよそへられけり。右のみそぎ。うちりかましき習のうちをはらへきよめ侍らん。香の煙ぞいくしたてたるはらへなるべき。勝とぞ申べ

き。

九番

左　しほがま

右　夕つく夜

左。しほがまやわがみかど六十余國のうちににたるもなき所のさまといへれば。

こと葉をつけて申がたし。されど雨氣などありて。物むづかしき空のにはかに雲晴て。風すこしうち吹などして。はなやかにさし出たる夕月夜のをかしきは。もろこしかけてもおもひながされ侍り。このつがひことによき持たるべし。

續群書類從卷第五百五十三

遊戯部三

池坊專應口傳

瓶に花をさす事いにしへよりあるとはきゝ侍れど。それはうつくしき花をのみ賞して。草木の風興をもわきまへず。只さし生たる計なり。この一流は野山水邊をのづからなる姿を居上にあらはし。花葉をかざり。よろしき面かげをもとゝし。先祖さし初しより一道世にひろまりて。都鄙のもてあそびとなれる也。艸の菴の徒然をも忘れやすると手ずさみに。破甎古枝を拾ひ立て。是にむかひてつら〳〵おもへば。廬山湘湖の風景もいたらざればのぞみがたく。瓊樹瑤池の絕境もみゝにふれて見る事稀也。王摩詰が輞川の圖も。夏涼しきを生ずる事あたはず。舜叔擧が草木の軸も。秋香を發することなし。又庭前に山をつき。垣の內に泉を引も。人力をわづらはさずして成事をえず。たゞ小水尺樹をもつて江山數程の勝槩をあらはし。暫時頃刻の間に千變萬化の佳興をもよほす。宛(たゞ)仙家の妙術ともいつつべし。十府のすがこも七府には花瓶を置て。三府に我居ても。見あかぬ床のたのしみは。誠に安養界の

寶樹寶池も愛をさる事遠からずして。華藏世界に吹風も瓶の上にぞにほひくる。凡佛も初部の華嚴といふより一實の法花にいたるまで。花を以て縁とせり。青黄赤白黑の色。五根五體にあらずや。冬の群卉凋落するも。盛者必衰のことはりをしめす。其中にしもいろかへぬ松や檜原は。をのづから眞如不變をあらはせり。世尊の拈花を見て迦葉微笑せられし時。正法眼藏涅槃妙心の法門。教の外に別に傳て。摩訶大迦葉に附屬すとはのたまひしか。靈雲は桃花を見。山谷は木犀を聞。皆一花の上にして開悟の益を得しぞかし。抑是をもてあそぶ人草木を見て心をのべ。春秋のあはれをおもひ。一旦の興をもよをすのみにあらず。飛花落葉のかぜの前に。かゝるさとりの種をうる事もや侍らん。

一三具足の花の眞たかさ。凡花瓶一たけ半也。されどもほそくみたてなき眞は二長ばかりにても相應すべき歟。此枝葉の次第は前短後長。右長左短と心えべき也。賞翫の枝とて其方に副を用。當季の花も主居の請て用べし。長短の枝葉にて四方をかゝえて。かた落もなく。又四手を取たるやうにもなく。眞副眞隱みこし流の枝前置體。用其科々にて。見たての圓花たるべし。枝葉さのみとりからさずして。眞に下草をつゞけてあげ。次第々々にたてくだし。水ぎわまでもこまやかに用べきなり。

一脇花瓶對する時は。眞に木と木とも。草と草とも。又草木とも。或は松竹などともつがふべし。直なる眞は副のなびきにてつがふべし。のき眞は向あひて對すべし。中尊の副は左右にとりあはず。座上を請るなり。

一棚の下の眞は。たかさ程よこえなして。たけ

をみじかく立るなり。柱床押板よりほかへ枝葉を出す事あるべからず。

一一瓶の内にても。まへさきを第一と用。脇にても專に見ゆべきかた第二たるべし。今一かたのわきを第三と。次第に心得て用べし。今一中央の花は何方もおもてなるべし。書院のをしいたの花は。裏面前へと心えべし。

一一瓶のうちにても。一かたへながく出たる枝葉あらば。今一かたは短く。その方をば枝葉しげりたる物を用べきなり。一かたの枝はひらき。今一かたは抱。一方はたかく。いま一かたはひきく。一かたはのべに。今一方は一もんじに。一かたはあがり。今一かたはさがるやうに用べし。すきやかなる物のきわには。こまやかなる物を用ひ。ふとき物のきはには。いかにもほそき物を用べし。おなじ色をつゞけて用べからず。

一水ぎわも一方はたかく。今一かたはひきく。まばらならぬやうに。又いひしめたるすがたなく。よせてよらざるやうに。水に出入ありて。つよき本をばはやく捨て。よわき所には下草しげく。凡春の千枝さし過て。藤山吹の頃きたれる折ふしより。牡丹。芍藥。杜若。桔梗。紫苑。仙翁花などのたぐひ。何ものび〳〵と水ぎはもちとたかく用べし。又秋の千草。菊。龍膽の時節より。冬がれの野山の體物さびしくて。水ぎはもいさゝかひきく用べき歟。

一口のひらきたる花瓶は。置所たかきにしたがひて。下草くき高に用べし。端越の枝を嫌ふゆへなり。

專嫌ふべき事

一輪大なる花の類。さのみ短く立る事。

一葉のある物を花ばかり立る事。

一花と其葉とそひたる間に。余のものを立る事。
一同じ物を二所に用事。但色を替ては用べき事。
一草にて木をつゝみ。木にて草をつゝむ事。
一長競。但一方のきてあがりたる末。同じ程ならばくるしからず。
一枝葉の水へつかぬやう成事。
一切枝。但遠近によるべき歟。
一面をさす枝。
一壁さしのえだとて後をさす事。
一本切。
一後より前へまはる枝。前本切の事。
一瓶の口よりさがる枝葉。此十三ヶ條を專さし合と定べし。
一同枝のうちにてきるゝとくるしからず。
一花に其葉のなき時。似たる葉を用事常にあり。
一一枝に三ッひらく花。面へ一輪用べからず。花のかず五あらばおもてへ三用べし。又三あらば二ッ面へ用べし。
一枝のをゝいたる下に用べき物。間を二寸ほどおきて用べき歟。
一三瓶の時。脇花瓶に一方の花のまへを草にて用ば。今一方は木にて用べし。一方のおもて葉ひろき物ならば。一かたはこまやかなる物を用べし。色をかへ科を替て。一瓶のすがたもちがひ。まへ置なども替て用べきなり。
一陰陽の葉とて。面を見する葉あらば。又裏を見する葉を用べし。
一祈禱神前の花には。枝葉の榮たる直なる眞を用べし。眞につゞきてたてたる枝を影向の枝と心得。連歌などの花にも。名號或は神

體をかけたる右のかたに花を用べし。心つかひは祝儀いづれも同前たるべし。

一聟取嫁取の花に。のき眞或は枯たるもの。又葉などの破たるもの用べからず。合眞含みたる花。若葉。若枝。陰陽の葉。天地和合の枝などを用べし。

十二月に可用也。

正　月。松。　梅。
二　月。柳。　椿。
三　月。桃。　杜若。
四　月。卯花。　芍藥。
五　月。竹。　菖蒲。
六　月。百合。　蓮華。
七　月。桔梗。　仙翁花。
八　月。檜。　白槇。
九　月。菊。　鷄頭花。
十　月。唐水木。　南天。
十一月。　水仙花。　寒菊。
十二月。　枇杷。　早梅。

五節句に用べき事

元三。　梅。　水仙花。　金錢華。
上巳。　桃。　柳。　欵冬。
端午。　竹。　菖蒲。　石竹。
七夕。　桔梗。　仙翁花。　梶木。
重陽。　菊。　荻。　鷄頭花。

高くたてざる物の事

金錢花。岸比。鳫足。葱。ぜんまひ。つわ。石葦(ひとつ葉)。藜蘆(おもと)。ふきのたう。太山樒。富士撫子。澤桔梗。つち草。梔。岩躑躅。香附子。葱花(ぎぼうし)。曼殊沙華。河骨。龍膽。赤草。澤ちしや。白丁花。沉丁花。

凡このたぐひ成べし。

一松竹梅の花とて。押板の上三瓶の眞に。此三種用事祝儀たるべし。三瓶ともに松を用事

上々也。又二瓶を松にて。今一瓶を當季の花にて用事もあり。竹を梅に心得有之。

一砂の物地取の事。眞副の間に心得あり。又香臺付にも口傳有之

一わたましの品に色を嫌ひ名詮を忌なり。

一軍陣にての花に輪むきやう有之。のき眞。葉の破たる物。かれたる物を嫌ふ也。城中にて椿葵花を忌也。勝軍木を用なり。

一水草に太山木をさしまぜて。ひとつに見るを瓶にさす。花の徳と申せど。蓮にかぎりて樹の類立て合べからず。

一對する花瓶の眞は青黃赤白と次第に用べきなり。

一男女赤白とて。男には赤き色。女には白色を用べし。

一陰のかたに包花を用。陽の方にひらき花を用なり。

一歸花をば祝儀に用ひ。殘花をば嫌ふなり。

一風情興ある眞には下草ひきく用べし。直なる眞には下草たかく用べし。

一口のひらきたる花瓶には。上にてひらかせ。中口の花瓶には中程にてひらかせ。細口には水ぎはにてひらかせ候てよく候。

一祝儀の時。上座の花一瓶其心遣あらば。余の花いづれもくるしからず。三瓶の時も中尊を本とすべし。

一春の末より夏秋のはじめまでは。一瓶の内草花がちに用べし。また秋のすゑより冬春のはじめまでは。樹がちに用べし。

專祝言に用べき事

松。竹。梅。椿。柳。海棠。石竹。鷄頭花。岩躑躅。葱花。(常磐)桔梗。菊。桃。柘榴。仙翁花。岸比。節黒。牡丹。金錢花。山橘。白槇。芙蓉。長春。水仙花。仙蓼菓。百合。

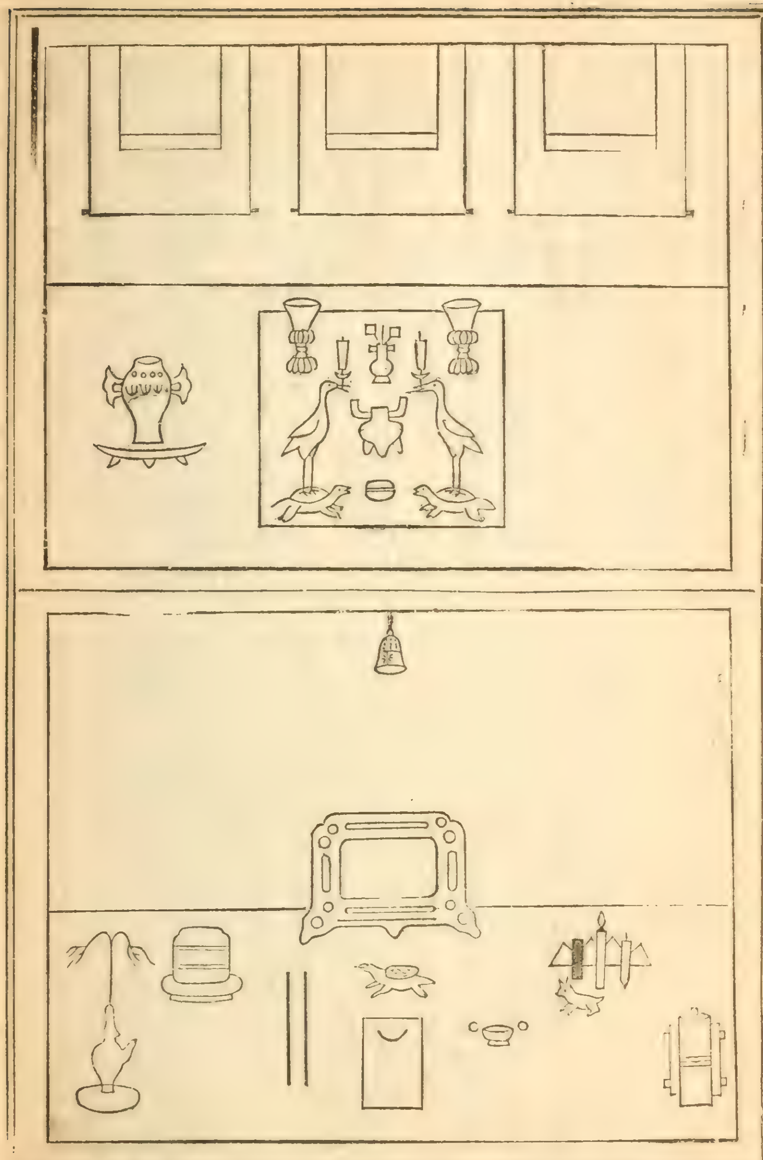
菁莪。杜若。常磐木。此等用べき也。

祝儀可嫌草木

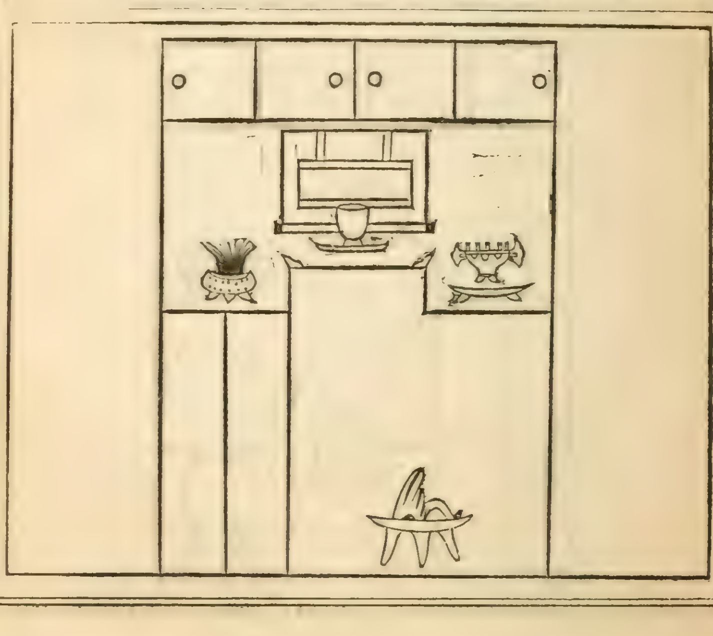
雑木。雑草。四花。四葉。四草。四木。六花。六葉。芥子花。残花。萱草。梔花。荷葉。紫竹。紫菀。河骨。馬酔木。槇。山夘木。蔓椒。米柳。蘇花木。瓜。茶木。杉。樗花。龍膽。木槿華。白葱。

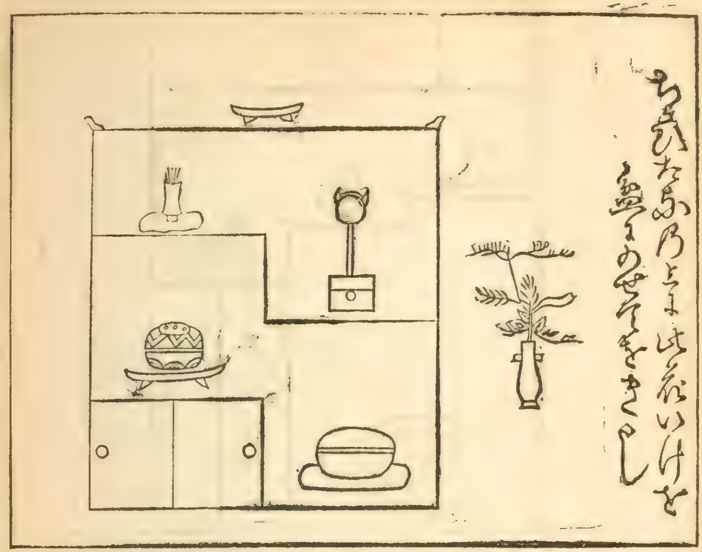
末の枯たる物。葉破たる物用べからず。

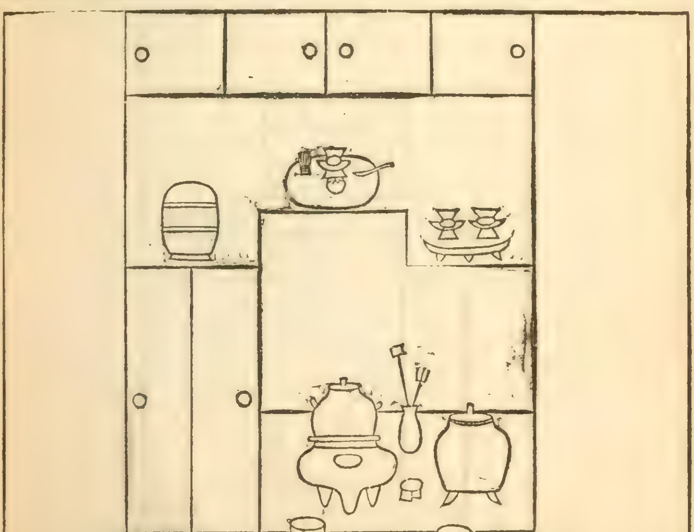
凡諸道ともに執心あさくして。其道を仕うる事侍るべからず。たとひ器用なしとも。稽古のほどふかければ。興ある姿を立出す事あり。先一瓶のすがた尋常に立のびて。上にてくつろぎ。中程に道具おほく。枝葉のはたらき色〳〵に。草木のしな一種〳〵にありありと有所おほく。こまやかに水ぎはほそく。すぐやかにさしたる花をよき風體とは申也。しかれど數瓶のうち様々の手科。或は眞行草も有べきなれば。一やうにかぎるべきにはあらざれど。大かたの心得かく侍らんにや。野山に生る草木の體をまなぶなれば。さほど嫌ひこのむべきにはあらざれば。何のみちにもかやうのこゝろへ侍るならひなり。夏草秋萩を見て妻を戀。鶴龜に付て君をおもひ。人をもいはひなば。などか又さることもなからざらん。先よき風流をふかく稽古すべき事専たるべし。草の名も所によりてかはれるなれば。たゞ常坐におよびて。作者の心づかひ肝要たるべし。誠に千葦万木猶おゝかれば。中〳〵よしもあへがたきものゆへ。よしなきたわぶれ草。さのみはと筆をさし置ぬ。比興々々。

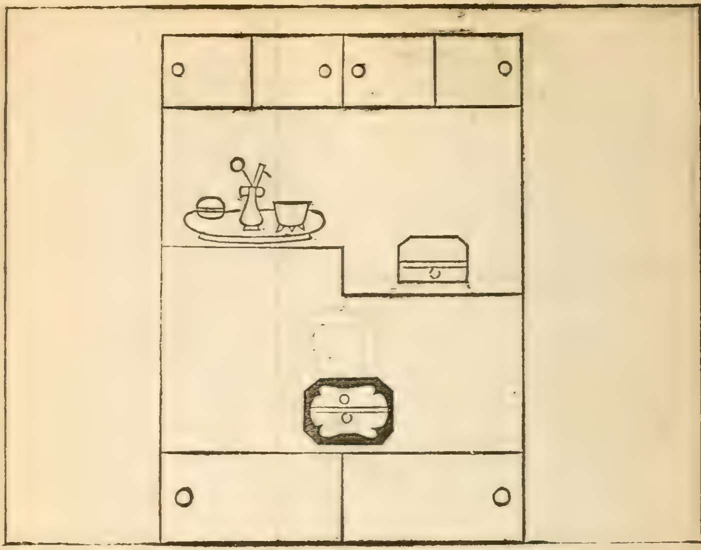


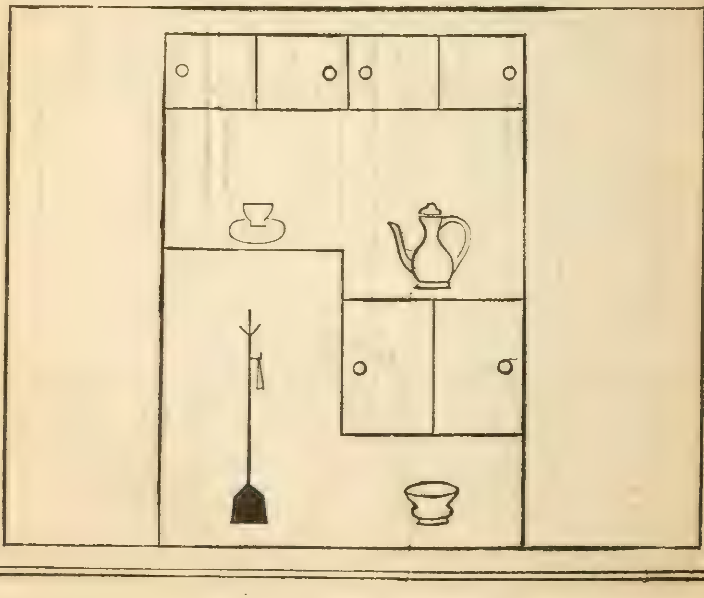


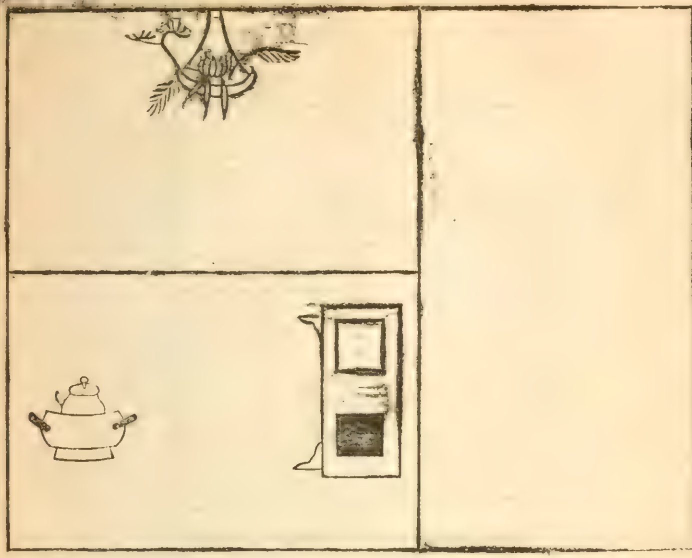


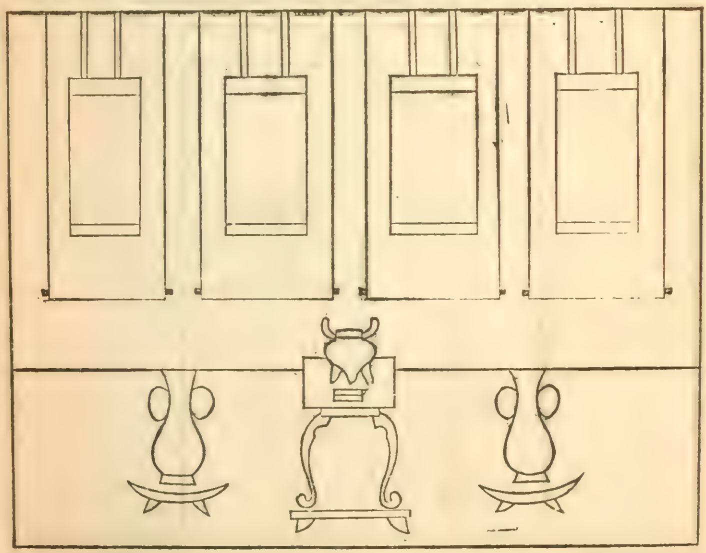


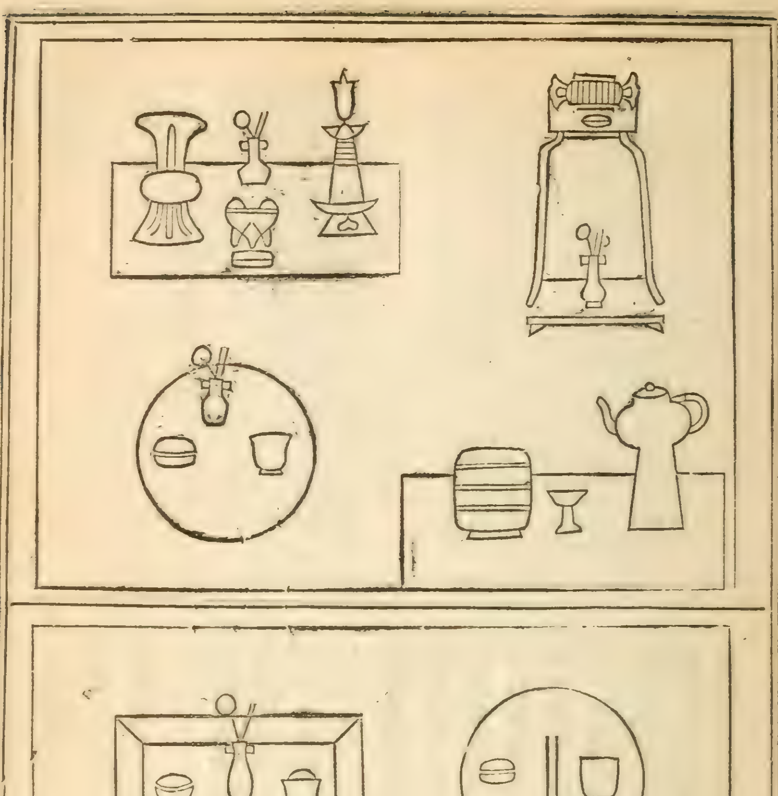


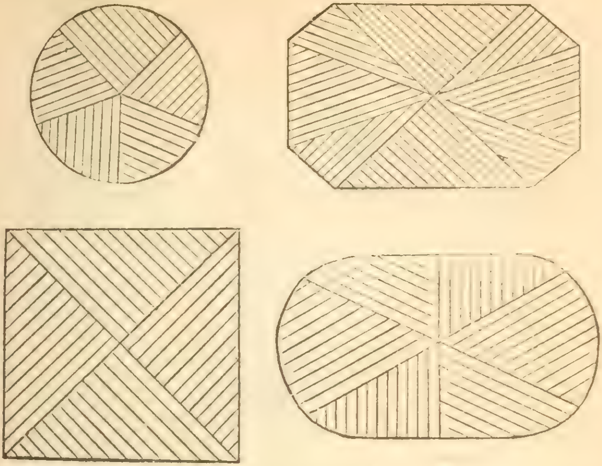












一三具足は三幅一對。五幅一對。又は獨幅を懸時置べきなり。二ふく一對。又四幅一對を懸時は。中に香爐を置て。わきに花瓶をかるべし。

一風鈴は春の末より夏秋の初までは。廣縁の上或は書院のさきにかけらるべし。又秋の末より冬春の初迄は。坐敷の天井につるべし。

一鵜遲茶碗を臺にすへて一物に置とあり。

一繪は上を本にかくる也。

一書院のかざりなき時は花をも立候。又は鉢の石をも置候なり。

一柱かざりは鏡。花瓶。印金袋。帶の鐶。唐刀。軟挺摺。楊子筒。麻姑。河梨勤。此等の類見合てかくべきなり。

一縁には氈。唐莚。豹。虎皮などをしきて。竹倚或は曲彔を置て沓をおかるべし。其外

團扇。箒。杖。笠。絵懸卓。此等を見合てかけらるべし。

一納戸にはたに太刀。右に長刀おかるべし。中に具足。其上に甲を置べし。のんれんかけて口一尺ばかりあぐるなり。

一軸の東は中端と中端との間にいるべし。

一春三ケ月冬三ケ月は坐敷に火鉢置べし。炭のおき様口傳有之。

右一巻者拙者於家秘本也。聊爾令相傳事稀候。雖然江州岩藏寺圓林坊賢盛依御所望。老耄雖無正體候。自筆書注。則令口傳申也。努々不可有他見者也。

天文十一年拾月朔日　池坊専應在判

百瓶華序

夫華者。自天地開闢以來。毎歳得二十四番花信風。而草木所開也。無人而不愛見之。故不可一日無華矣。予暇之日。悉考韻書。鄭氏曰。花隷作華。徐曰。華今作花。然則華花二字。其形雖異。通用明矣。大凡四時之間。万木千草。雖更開花。就中以春爲花之盛時也。其在春以梅爲百花魁。何哉。盖梅獨得花信第一番之風。而早開花。因之諺曰。始於梅花終於楝花。良有以也。自早梅資始。群卉和微暖。次第開花也。予以爲。遠看則不是造物者之經天緯地。施之機梭。而費多少工夫。織出段々錦者耶。似則似矣。近看則鶯梢鶯粲。深紅淺白。易色外飾。其光彩奪目。華則華矣。其花之盛而有美色。自初夏至季秋亦然矣。方冬寒向時。襯雪開花者盧橘也。四時所開之群花。雖欲一々題其名。不堪縷數。東之高閣而已。又以花託物而名者。多々有之。其物云者。何言哉。若在天言之。有日華月華。有霜華雪華也。若

在地言之。於山有山茶花也。於水有水仙花也。於石有石榴花。有石竹花也。若在虚空言之。有凌宵花也。若在大陽言之。有葵花也。若有四序言之。有四季花也。若在佳節言之。正旦之頌有椒花也。上巳有桃花也。端午有菖蒲也。星夕之比有仙翁花也。重陽有菊花也。若在人言之。於上古有華胥。有重華也。於中古漢有鄧仲華。有華佗。有華歆也。晉有張華。有華譚。有華嶠也。劉宋有王華也。隋有華秋也。唐有魏華。有尙華。有蕭華。有李華。有子華也。後唐有盧華也。趙宋有國華。有區華也。若在身上言之。肺神有皓華。髮神有蒼華。心境有智慧花。眼界有黑花也。若在異國言之。有中華也。若在縣言之。有華亭也。若在五岳言之。西岳有太華。有少華也。若在山居言之。有五枝花也。若在溪言之。有浣花也。若在寺言之。有南華。有覺華。有寶華。有華光。有華林也。若在僧房言之。有歎冬花也。若在荒墳言之。有鼓子花也。若在上都言之。有京華也。若有四門言之。有東華也。若在宮言之。有玉華。有華清也。若在殿言之。有金華。有承華也。若在樓言之。有花蕚相輝。有花蘂。有散花也。若在臺言之。有雨華也。若在亭言之。有花心。有仙華也。若在朝廷言之。君王有牡丹花。宰相有芍藥花。使臣有皇々者華也。若在夫婦男女言之。有夜合花也。若在慈親言之。有萱草花也。若在孝子言之。有白華也。若在兄弟言之。有常棣華也。若在舉子言之。有槐花也。若在君子言之。有蓮華。有蘭花也。若在士大夫言之。有蕙花也。若在異人言之。有三朶花也。若在門士言之。有李花也。若在涙雨言之。有梨花也。若在春睡言之。有海棠花也。若在秋艶言之。有木芙蓉花也。若在美女言之。有顔如舜花。有解語花也。若在包貢言之。有杜若花也。若在夜學言之。有燈花也。若在文字言之。有木筆花也。若在講說文章言之。有春

之花也。若在鳥言之。在鳳仙花。有鷄冠花。有杜鵑花也。若在獸言之。有馬蘭花也。若在角言之。有木犀花。有牛勒花。有牽牛花也。若在鱗言之。有龍華也。若在食服言之。有米囊花也。若在春酒言之。有杏花也。若在良藥言之。有松花。有枳殼花。有桔梗花也。若在香材言之。有百結花也。若在器財言之。有金錢花也。若在妝鏡言之。有菱花也。若在單衣言之。有盧花也。若在白氈言之。有煬花也。若在歌曲言之。有陌上花。有後庭花也。若在正色言之。有青黃赤白之花也。若在間色言之。有紫薇花。有紫藤花也。若在五色外言之。有無色花也。總所謂以花託物而名者。且以万分之一信口吐露了也。在昔有花之現精神。崔元徽於月夜見青衣女伴與緋衣小女。皆殊色而有芳香。小女曰。苑中每被惡風相撓。每歲旦作一幡。而上圖日月五星。以立苑東。崔爲立幡。雖他是有東風忽吹來而折木飛花。此苑中之花不曾動。崔乃悟女伴即衆花之精。因名花神追思之。則自古花有精神。不可疑者也。又按。其神仙於花也。西王母宴群仙。有舞者。戴砑光帽簪花。奏舞山香一曲也。羅郁梁簡文帝時。降羊權家。眞誥云。即是蕚綠華也。瓊仙居麻姑壇。餐花絕粒。年八十而顏色益少也。其帝王於花也。漢高祖起御兵二十万。入洛陽看花。而悅精神也。隋煬帝宮樹秋冬凋落。則剪綵爲花葉。綴於枝條。常如陽春也。唐則天臘月宣詔曰。花須連夜發。莫待曉風吹也。明皇取羯鼓。縱擊春光好之曲催花也。寧王繫金鈴於花梢上。以驚禽護花也。穆宗宮中花開時。以重頂帳蒙被欄檻。置惜花御史掌之。號曰括香也。其宮女於花也。後漢光武即位。得南陽陰麗華爲皇后也。陳後主得張麗華爲妃。以沉檀之香木。新作結綺閣居之也。費氏蜀之青城人。以才色入蜀宮。號華蘂夫人也。其群臣於花也。善卷古高士也。雖欲舜以天下讓不

受。去而入深山。隱居華妙洞天也。莊周著書者十餘万言。名之曰南華經也。文禮有俊逸才。作章華賦。多艶麗之詞也。何點與梁武帝有舊。召之引入華林園。賜以詩酒也。李靖有王佐才。論兵造六花陣。即七軍圓陣也。唐朝故事。有軍國事。則中書舍人雜署其名。謂之五花判事也。又中宗神龍以來。進士及第者賜探花宴也。李尚眞兄弟俱以文章名。同爲一集。號李氏花萼也。劉晏八歲獻頌於行在。上奇之。賜遊宮。貴妃坐之膝上。宮人遺花投果也。李太白嘗騎驢過華陰縣。則縣令止之也。韓退之於儒有勞。沉浸醲郁。含英咀華。作爲文章。其書滿家也。賈耽拜相而後。著百花譜。益傳芳名也。劉夢得溫飛卿之輩。往々以風華累其正氣也。義山以文滑稽者有數十。其一曰。殺風景。是謂花上曬褌。對花啜茶之類也。錢惟演爲洛師留守。置驛貢花也。蔡會所居類市隱。抱其地曰南園。多植花木也。李正臣蓄異石。名曰壺中九華。蓋九峰玲瓏也。四休有三畝園。花木鬱々。客來則以脩酒茗也。蔡謹築圃植花木。爲遊憩所也。許子大知鄧州時。建堂於百花州之上。與民同樂也。周武仲宣和中稱旨。上賜宮花也。其詩人於花也。老杜詩云。鶯入新年語。花開滿故枝。是傷春之品題也。王維詩云。花落家童未掃。每哦此句。令人坐想輞川春日之勝也。錢起詩云。長樂鐘聲花外盡。宮掖之事。如眼聽如耳覩也。岑參詩曰。樹交花兩色。是能寫景物者也。韓翃德宗時制誥闕人。上批曰。與韓翃。時有與翃同姓名者。上復批曰。春城無處不飛花。與此韓翃。寔過華袞之榮也。嚴維詩云。花塢夕陽遲。其綺麗可覩也。常建詩曰。禪房花木深。其後歐陽愛此佳句。欲効此作。竟不能得。以爲恨也。孟東野詩云。一日看盡長安花。是春風得意走馬者可知也。韓湘方外士也。聚土以盆覆之良久。則碧花開者有二朶。於花間擁出金字詩

一聯云。雲横秦嶺家何在。雪擁藍關馬不前。不是黃絹幼婦乎。杜牧宮詞詩云。月明花落又黃昏。深有不盡之意也。于良史詩云。弄花香滿衣。評此句云。眼用拗字也。杜荀鶴詩云。日高花影重。實述春宮怨者也。宋齊丘詩云。養花如養賢。以見其志者也。陳圖南詩云。野花啼鳥一般春。是携書歸隱時之吟詠也。杜世昌作五老詩云。花朝月夕隨時樂。此滿座皆會雪鬢霜髯者也。東坡詩云。花有淸香月有陰。介甫詩云。月移花影上欄干。蠹齋論此二詩云。流麗相似也。陳無己詩云。相州紅纈鄂州花。當于時重此二物也。謝蝴蝶詩云。相逐黃花人過橋。其紫韻紅音盈耳哉。張子野倅秀州。創花月亭有詩云。雲破月來花弄影。此句膾炙人口。是三影尙書之一影也。應子和詩云。風過落花紅。此句三紅秀才之一紅也。邵堯夫每出乘小車。司馬公爲之作詩云。花外小車猶未來。是古今絶唱也。方豐之詩云。寒花承露落毿々。此句法從活處參者也。吾宗門亦禪餘有學詩者。謂之禪詩。其詩僧於花也。僧可士詩云。履香楚地花。此非肉食者能所致也。僧悟淸詩云。鳥歸花影動。以爲句意俱新也。僧希晝詩云。花露盈蟲穴。鍊句尤工也。這三高僧所謂學詩渾似學參禪者乎。其丹靑於花也。滕王湛然善畫花鳥。趙昌亦工畫花而逼眞矣。是皆凡愛花之稱首也。或曰。於吾倭國之洛陽。不名而謂花者櫻也。古往今來。上自一人。下迄至于萬人。研精覃思。詠此櫻花。而以歌名愈高者不暇枚擧也。實是似於中華之洛陽。以牡丹謂花。於西蜀之成都。以海棠謂花。而騷人墨客雖多製賦題詩。而相似也。然以櫻爲本朝第一之花者。不言而可知焉。若又非花用者言之。春有柳枝之靑於藍。秋有楓葉之紅於花。此外用諸葉諸子者不知其數也。以上數品花。吾佛所不取也。吾佛於花也。若在天言之。諸佛出與時。諸天雨四華也。若在地

言之。金輪王出現于世時。海水減少。而現優鉢華也。若在人言之。心華發明。則照十方刹也。或時雖文殊攜水。普賢猶未折花者。却是惜花之謂乎。或時梵王持蓋。帝釋布華。或時阿修羅欲採四天下華釀海水爲酒不成。由是誓不飮酒。故阿修羅此稱無酒也。其惟釋尊初發心時。便成正覺。三日思惟。說廣大圓滿頓敎。而名之曰華嚴經。是吾佛氏之極談也。其後爲暢佛出世本懷。說大乘敎。而名之曰法華經。是吾釋氏之妙理也。又惟於靈山會上。世尊拈華示衆。是時衆皆默然。唯第一祖迦葉尊者破顏微笑。謂之敎外別傳。祖々傳受將來。至于二十八祖達磨大師。佩佛心印。於梁普通之初。來東震。寓止于嵩山少林寺。面壁者八九年。果符二株嫩桂之懸讖。是以稱西天末葉東土初枝者也。伏承。當臘九雪夜。慧可參承初祖。而師資道合。祖曰。內傳法印以契眞心。外付袈裟以定宗旨。加之祖示偈曰。一花開五葉。結果自然成。祖又曰。吾有楞伽經四卷。亦用付汝。其後楊居士撰楞伽經經後序云。而壁得髓。達磨拈華。亦復謂之敎外別傳宗旨者。宜乎這石上油麻。抽惡芽蘖。六葉既敷。千花競秀。其應機說法之枝辭。其的問的答之蔓語。皆集傳于諸錄。箇中有悟花之數語。予雖銜口而難止。竊諗于二三子曰。姬魚語汝。夫午頭山融禪師。幽棲北岩之石室。則有百鳥銜花之異也。靈雲具活眼睛。見華忽決疑情也。道英答于僧之一問曰。琉璃瓶貯花也。祖鑑上堂曰。一華端有一如來。妙談不二也。僧問境於夾山。々答曰。鳥銜華落碧岩前也。奎廣乃大衆曰。移花兼蝶至也。古宿曰。雲門臨濟百花春也。如上件々。此悉佛祖以花得大悟。又指花接得學者底之葛藤也。烏麼則自利利佗。唯莫如花。若有遇花著花者。換却眼睛。以可參決。莫容易近傍于花邊也。右外諸佛諸祖之於花。機緣語句檢之。雖有數多。卷而懷

之。不錄之矣。夫以洛陽繁華之地。有所名六角。眞市中隱也。由是有寺號頂法。當其乾之方有派居。名曰池坊。累代以立華於瓶裡爲家業。其元祖曰專慶。自專慶至于今之池坊專好法印。累十三葉。法印以華馳名。大過先人。夫是謂之後生可畏歟。是故有志於華者。致識韓之願。而如草偃之風必偃。天下靡然皆從而師之。其爲任亦重矣。茲有敎蓮社聖譽貞安上人者。其宗系實稟鎭西末流之正派。先是相攸受洛東肥饒之地。聚大木細木之良材。積日積月。久歲郢斤風。新築淨刹。朱甍碧瓦。美哉輪美哉奐。既至落成之日。號寺名大雲。於是乎燕雀尊相賀。剏緇白之徒。相與騈肩累迹。而來謁遣大者。豈可以言而述也哉。佛經曰。如來出現於世。如大雲起。本于此語。則此名之設。抑亦追慕如來出世者乎。可尙矣。上人於蓮社中間。以無量壽佛爲本尊。口唱南無。晨香夕燈。聊不怠止矣。予與上人雖未眉毛厮結。傳聞。上人匪啻日用常行修般舟三昧。又尋常嗜獻華於佛前。以故上人稟因法印。極華傳書之奧義者。絕類離倫。可謂勤矣。越去歲慶亥季秋維月十有六蓂。上人迎接印於大雲淨社。見催百花之會。於法印。所謂天王門華會者乎。法印之爲弟子者。聞此花會。雖欲才不才亦各群聚而備其員。法印護不允容。而除其不善者。擇其善者。取之一百人。皆傑然者也。古曰。觀其徒則可以知其師矣。誠哉是言也。漸欲立華之時。師弟共改容凝齊。整其衣服。必盥而出。然洗盥水。即並百箇銅瓶於案上。若而人列坐。俾以寺華。雜草木之榮枯。量枝葉之短長。匕箸入樣於皆々々。華既畢後。法印擧一百人。聞其言以華花。而消遣世慮。不知天壤之間。復有何樂可以代此也哉。誠是千歲一會。何日忘之。法印名之曰百瓶華。固當矣。上人見催此紅會合之意。唯法印具識華眼。而立華以殊絕於人。所以欲使其名

益鳴天下也。世人聞此紅會。無貴無賤。無長無少。或膏吾車。或秣吾馬。或策扶老。或鞋乖蛾。遠者來近者喜。有花便入門。爭先延頸拳踵。喝々然刮目看華者。不知其幾千万人。皆以手加額。喟然嘆曰。嗚呼法印爲華之師。而在百瓶之華間。彷彿百華叢裡現優曇者乎。次惟一百人爲華之弟子。而在百瓶之華間。依稀一等春風百樣花者乎。又熟視。上人爲華之主。而獨居一百人之上首。恰似百花深處一僧歸者也。咸謂人傑地靈。今日以華莊嚴此淨刹者。與吾佛華藏世界之嚴飾。是同是別。如何商量去。當此之時。烏有先生突出曰。佛與衆生雖異。其以華儼飾。有何優劣耶。言訖退出矣。開戶視之。不見其處。奇哉。吾想夫法印扁齋號笑雲。古有戴道純居士者。咨扣靈源。一日有省。乃呈偈。其始曰。一片心華露印紋。又其末曰。時々微笑動香雲。料知。以此末句之意。法印之齋號笑雲者歟。未審。法印老顏

笑雲耶笑花耶。若笑雲。則於此大雲之當場。吟取大雲庇九丘之句。宜參得江西詩祖之意旨。若又笑花。則與破顏頭陀豈異代同稱哉。傍有人問法印曰。汝之笑在雲耶在花耶。答曰。雖外稔笑雲之名。依內傳心華。其眞實之笑唯在花也。聞此答處。則法印接頭陀之武。悟入于正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙法門者必矣。華之事吾止於此矣。一日法印自書立華一百人之名。以爲一卷。特編貞安上人於卷頭者。其眞所以有功于花也。如此形之紙墨。自今至於万世。自万世至于無窮。爲使後之人知之鑑之也。日之昨法印扣予草菴告曰。百瓶華之一卷。雖集而大成。猶未有以題其首。非缺歟。請使予作序。予與法印講交者。屈指五十年來之舊友也。雖憖遺一老。學疎才短。自識其不足補吾子所須也。所愧應被百花撩亂笑。汗顏々々。雖然于朝于暮。百花驛使絡往紅還。而俾急責予。弗克峻拒。遂述其大槩。而

爲之序。
于時慶長第五曆。龍集庚子。春之仲花朝日。
前東福月溪叟聖澄。頽齡過華甲子者五春也。
於松月軒下。以薔薇露濯老手。謹焚香揮毛潁
子書焉。

百瓶華淸衆
大雲院。　會應。
文貞。　存貞。
調圓。　宗圓。
用運。　見貞。
聞貞。　永壽。
林茂。　武藏。
禪林寺。　祖慶。
壽珍。　增上寺。
誓願寺。　善休。
善甫。　養運。

實相寺。　報恩寺。
源光寺。　大超寺。
透玄寺。　淨教寺。
壽感。　了蓮寺。
慶感。　九感。
太存。　浩哲。
守三。　壽傳。
相撲。　傳榮。
慈雲菴。　安止齋。
正因。　能就。
惠祐。　壽三。
龍珠。　永壽。
順良。　見孝。
心教。　乘順。
但馬。　越前。
光永寺。　眞宗寺。
正觀坊。　金寶寺。

西光寺。　顯宗寺。
祐光寺。　讃岐法橋。
常陸法橋。　心了。
心行。　專了。
誓玄。　專勝。
善海。　玄珍。
行阿彌。　宗乘。
了紀。　東普。
休味。　道意。
藤呂。　朝賀。
乖蝶齋。　喜運。
道慶。　宗語。
久慧。　道市。
宗利。　正信。
淨西。　宗覺。
永珊。　原齋。
左兵衛尉。　左京助。

實右衛門尉。　與七郎。
太郎右衛門尉。　藤左衛門尉。
藤左衛門尉。　八郎左衛門尉。
源介。　摠右兵衛尉。
與三郎。　久次郎。
忠右衛門尉。　池坊的子師專朝。
皆慶長四己亥年秋九月十有六日
華師池坊法印專好記焉

小廬石詩并序

卜意齋休菴老人者。但州出石之異産也。其癖在嗜石。玆聞。往歲出門。尋求異石者十里餘。攀踰登山。忽得一快石。而皈吾廬矣。昔李約云。苟適吾意。其用則多。誠哉是言也。老人宅邊。寡適意而從遊者也。故多聚異石。而游息之時。與石爲伍。則適意而以爲樂足矣。予謂老人扁齋號卜意者良有以也。所以快石適意也。去歲老人以事離

却枌鄉。家于洛陽繁華之地。實是市中隱也。先是在枌鄉之日。雖多聚異石。就中專愛登山所得之一快石也。然從家于洛以來。依隔溪山。不得愛看此石。其故鄉念遽爲萠于懷。頃者航海梯山。使此石以至洛陽之新居。安置之於庭前。則不遠千里。坐作佳山水之遊矣。世人傳聞。無貴無賤。望看石者不知其幾千万人也。日之昨予亦備其員。胥牽二三子。介於或者。于以看此快石。潰以盆水。布以白沙。其横徑寸者三尺。其堅餘尺者七寸。其上下高低相應。而其勢可覩焉。其四面也秀色青々。如挼藍而染矣。加之澗壑有一株青松。四時不變色。與石相映。而染愛看者之眼矣。其崖岸也横突出。而其形不異浮夜船於遠浦矣。其峰頭也高潔淸白。而遠看如雲。近看如雪矣。其溪流也高有一條懸泉。々々之絕崖而下者。如長織出白練矣。此石之奇勝。千變万狀。一日之景不同。而樂亦無窮。可謂天開圖畫也。予謂老人云。遙自但州出石於洛陽。暗合故鄉出石之名者歟。奇哉。老人拍手笑曰。如師之言。其名不虛矣。予愛看快石之良久。而不覺移晷。俄然告別而趣皈路之時。有舊識竊引予袖。傳老人之言有云。即今師所看之石。未設其名。願就師需石之名與詩。予非其才。則不逮的答。拂袖去。他後老人與舊識聯袂敲予柴門。持南楮來。責名與詩不已。予峻拒者數矣。雖然强而不允容。遂不獲免。而應其命矣。熟按。此快石之懸泉。源遠而流遠矣。吾想。夫借巨靈手中分謫仙所吟廬山三千尺瀑布。而移置于此快石之上。而流出者乎。由是予漱石。名之曰小廬。々々二字。蓋取藏叟所謂小廬山之語者也。以老人愛此石。而能察其爲人。古曰。視其所好知其人。宜哉者老人。淸姿秀骨而不凡者石之躰也。德重一世而不動者石之性也。勤詠倭歌而不怠者石之文也。長富春秋而不崩者石之壽也。然則老人即石。々即老人。

一以貫之。嗚呼舉世愛石者甚多如牛毛。而識石者纔少如麟角矣。如老人則誠是識石者也。縱雖云唐朝牛僧孺。李德裕。宋家蘇子瞻。楊廷秀。可望崖而卻。不可同日而語焉。吾心內有一片安禪石。老人眼中有一片小廬石。是同耶是別耶。速道々々。若能道得。小廬石必爲之點頭。於是予猥綴川八一章。以塞其責者如左矣。

小廬石上富佳景。　染眼青來色轉鮮。
岸似夜船浮遠浦。　泉如瀑布掛長川。
峰頭白者雲耶雪。　盆裡碧兮水與天。
颯々松風聽愈好。　飛流吹下尺三千。

慶長六年歲舍辛丑林鐘吉辰

前東福月溪叟聖澄於松月軒下書焉。

盆松詩并引

洛陽繁華之地。當震之方置諸寺。就中有勝境一寺。以本能爲額。衆之集而大。不言而可知焉。爰有諱曰日守坊稱定藏者。其法系也。原本元祖號日蓮大菩薩。始用法華經王建立一宗。因自古至今。仰之信之。而檀越皈依大矣。日守公有老慈父。法名曰常敎。自少時有愛松之癖。是故手親栽植蘗松子。積日積月積年。養護如嬰孩。其樹生長而枝葉繁茂時。即移盆中。深根固柢。有以培之。盡力殫慮。先寧樹之本。而自中至末。直者曲之。曲者直之。則其幹勢宛如龍之屈蟠。枝梭短葉長。一々擠縮。而高者撓之。低者舉之。葉觀其疎密省之圓之。令高聳翠蓋於枝々之上。則其爲形不類。以爲貴賤之觀。而往來不絕者。于玆有年矣。雖然頃者慈父辭讓此盆松。而付與孝子之守公。々々歡抃之餘。或時置諸座右。或時置諸庭除之間。而賞之愛之。其松色之青々也。其風聲之颯々也。日染耳濡。是以極視聽之娛。信可樂也。世之好事者。傳聞此美松。相與駢肩累迹。群聚如雲。容其十一。有令看之。則皆喟然嘆

而曰。雖水陸之草木可愛者甚蕃。莫如此盆松也。予亦有志于松。一日予以扣公之門戸。則出迎眉毛厮結。恰如舊識。公引予袖。到盆松之所有。當此時予正襟危坐而見之。所以遊目騁懷。忽消遣世慮也。夫以此松耿介拔俗之標。蕭洒出塵之想。愛之暫得於己。快然自足。曾不知老之將至。何日而忘之。解言千聞不如一見。佳話移晷。已及昏鴉。予伸謝辭飯去矣。他後公介于友人。就予請作盆松詩。而以寄南楮來。予聽之掩耳退矣。然于晨于昏責之不已。友人告予曰。昔育王印月江。有一菴曰松月。今和尚亦有一軒曰松月。咸謂異代同稱。然則和尚爲松月主人。盍作盆松詩乎。宜無固辭。予曰。居吾語汝。々之言不虛。固當矣。匪啻居松月軒中。又遊戲吾山久能祖之千松林。則幷以難得免而已。隨友人諫言。遂應其命。受命以來。孰視公之爲人。造次於松。顚沛於松。抑公友松乎。松友公乎。松之與公。其性雖殊。其所以爲友一也。由是以此松抗物。則隋珠趙璧不足爲公榮。吳綾蜀錦不足爲公貴。唯公愛松之甚者有父風矣。所謂箕裘似康爲有子者耶。可幷按焉。吾想。夫此盆松也。蟠困偪側。而其大横徑七八寸。竪高一尺餘。蹙縮然絕類離倫。一日之内一刻之間。而氣候不齊。況又四時之景不同。而樂亦無窮也。誰不歆羨乎。予暇之日。細考禮書。分松之字曰木公。曰十八公。又有易松之名字。倭國書まつ。震旦書万都。或曰蒼官。曰乾濤。曰龍髯。曰髯御史。曰蒼髯叟。曰延蓋叟。曰瀟洒侯。或有君子松。合歡松。連理松。風入松。孔雀松。子規松。九里松。十里松。二十里松也。夫松爲百木之長。以信誠爲根。以禮定爲林。以智惠爲枝。以機用爲葉。匠氏謂之棟梁材。宜乎其徽志也。偓佺以松子遺帝堯。其晩節也。夫子曰。歳寒然後知松柏之後凋也。誠哉是言也。其官爵也。秦始避風雨於五松下。封爲五

大夫。吳丁固夢松。後十八年而爲公。誠是符十八公之讖文者也。其高標也。庾亮謂和嶠。森々如千丈松。其飯來也。陶靖節撫三徑孤松而盤桓。其淸聽也。陶隱居入山中愛松風。欣然爲樂。其出產也。唐置松州。蓋所以產廿松也。其中興也。明皇之鑾輿西幸時。禁中枯松復生枝葉。是再興唐祚之祥也。其献納也。武宗之朝。遠貢松風石。其淸居也。張滋好於齋前種松。秦系大松百餘章所植結廬。其佳作也。劉向作芳松枕賦。蔡孚作偃松賦。崔融作死松賦。李白製水松詩。杜甫製四松詩。張文潛製松扇詩。李賀作五粒松之歌。崔斯立吟哦二松之間。其遊山也。盧仝逢鄭三。他日期石上一株松。其靈藥也。姚合上高枝。採松花服之。淮南子曰。千年之松。下有茯苓。上有兎絲。又五臺山上有長松草。其熱啜也。劉禹錫試茶歌云。驟雨松風入鼎來。其嗜好也。李德裕聚珍松怪石。其凡聽也。李義山以松下喝道

爲殺風景。其晴景也。劉長卿詩云。過雨看松色。其夜明也。盧綸詩云。一家松火隔秋雲。其淸淨也。李紳詩云。寺深松杉無塵事。其宴遊也。郭受詩云。松醪酒熟旁看醉。其同宿也。杜牧詩云。松寺曾同一鶴捿。其雅曲也。許渾詩云。松葉正秋琴韻響。其隱居也。李山甫詩云。露洗松陰滿院淸。其避暑也。司空圖詩云。松涼夏健人。其寒吟也。王貞白詩云。松欹半岩雪。其歷代也。黃滔詩云。松偃數朝枝。其卜筮也。方秋崖詩云。白携周聽松風。其良材也。宋孝宗帝以日本松作翠寒堂。其異鄉也。誠齋云。漢朝昭君在於胡國。猶白鷗宿於松上。其移置也。嵩岳神以北岳松移東嶺矣。吾邦菅神移一夜松於北野。薩天錫詠之。其栽培也。蔡君謨夾道種松。以蔽歊毒。蘇東坡少年日種松於東岡。欲食其膏。張毅植万松於道周。芘行者以名其亭。其投老也。王荊公在蔣山作詩云。霜松雪竹鐘山寺。其高臥也。魯直題張

待學曲肱亭云。擁被聽松風。其變化也。古松之精。化爲青牛。爲伏龜。爲琥珀。爲蒼石。奇哉其名也。有赤松子。松菊主人。七松處士。曹松。道松。雪松。佛子松鄰先生之輩。共惟甘蔗氏有栽松道者。松山。松源。万松之諸祖。又有羅漢松。般若松。出世松。入定松。監寺松。加之善惠大士於松山頂行道。感七佛相隨。講徒可觀。以松風山月爲無盡衣鉢。玄奘三藏赴西域時。摩靈岩寺松曰。吾若皈來。此松向東。可使弟子知。果然。號之摩頂松。寒山子頌出安心處曰。微風吹幽松。近聽聲愈好。一宿覺東土大乘經曰。江月照松風吹。道林棲止于長松上。時人謂之鳥窠。臨濟栽松於黃蘗曰。一與山門作境致。二與後人作標榜。長沙作一偈。識斫松竹。法演作投機頌曰。爲憐松竹引清風。洞山聽指東嶺松。以爲金剛般若經。法昌在門前栽松。佛印以青松結社。大朗每執松枝爲談柄也。如上枝辭蔓說。於此盆

松者所不取也。與此盆松有因由者。粗學一二也。法眼偈曰。同得妙何處。澗松西北風。又梅溪先生作天依寺詩曰。風松吹作法華聲。緬憶法眼與梅溪。爲公預設此句者耶。不亦奇異乎。與麼則此盆松清風亦吹作法華之妙聲者必矣。與公所誦法華之妙聲。有甚麼異曲乎。公若參尋自教入禪而二妙歸一理處。豈獨得一佛心者也哉。勉旃々々。攸祈此盆松益長子葉孫枝。自今至万世。自萬世至無窮。名高不朽也。祝々。於是乎予以梅溪所作詩之韻。猥綴蜂腰一絕。信口吐露法華妙旨。式塞其責云爾。

盆中松偃尺餘生。　晴亦枝頭翠蓋撐。
颯々清風得何妙。　友公吹送法華聲。

維時慶長第七曆。龍集壬寅。夏五謹月吉辰。前東福月溪野釋聖澄。華齡屈指。春秋六十有七歲。而倒拈起管城子。書于東山左邊松月軒下。

續群書類從卷第五百五十四

遊戲部四

撰要目錄卷

序

夫當道の郢曲は。幼童のくちにすさみ。萬人の耳にさへぎるたぐひ。さま〳〵おほしといへども。愚老が撰あつむる曲。すべて其軸十まきをさだめ。其歌百のかずをきはむ。このうち二十餘首は愚作の外なり。すなはち其作者の名字をたどる〳〵しるす。これ或は貴命により。あるひはうたゝ聞をよぶところ耳にとゞまり。ゆへあるしなをさきとして。都鄙のもてあそび。ちまたの說をもきらはざれば。さだめてあやまりもあり。本說もおぼつかなくうける事おほくして。後のそしりのがれがたかるべし。いはんやみづからもとめ。外をうかゞはざれば。はかなき筆のまよひおろかにして。なをつたなきあまり。（[illegible]）あるかざし花に賦するおもひをのべ。あしびきの山の名をうとき國近にとぶらひ。なを〳〵年中の行事。あさかすみてのどけき日かげより。霜雪のつもるとしのくれまで。あらゆる政につけても。君が御代をいはふ。すゞしき泉のふたつの流には。たつた河名とり河に戀のあふせをたより。もしほ草か

きあつめたる中に。女のしわざなればとて。もゝたびもいにしへの紫式部が筆の跡おろそかにするにもにたれば。かるかやのうちみだれたるさまのおかしくすてがたくて。なまじゐに光源氏の名をけがし。二首の歌をつらぬ。のこりはとしげゝれば。こゝろみなこれにたりぬべし。よりていま録するところ。撰要目録の巻となづけて。後にみだりがはしからしめじとなり。この外にいできたり。世にもてなし。時にさかりならむ末學の郢作。よしあしのわきまへ。人のはぢにあらはれざらめや。

宴曲集巻第一 四季部

春　花 藤三品作 [illegible] 明空調曲
春野遊
夏　郭公 瀬空上人作 明空調曲
秋　月
秋興
冬　雪 洞院前大相國家作 明空調曲

宴曲集巻第二 賀部 神祇

祝言　嘉辰令月
宇禮志喜哉　優曇花
花亭祝言　不老不死
神祇

宴曲集巻第三 戀部

吹風戀 素月作 同調曲　遲々春戀
戀路　龍田河戀 冷泉武衛作 明空調曲
袖志浦戀 權少僧都賴慶作 同調曲　袖湊
袖餘波 或人作 明空成取捨調曲　源氏戀 或女房作 同調曲
名所戀

宴曲集巻第四 雑部上 付無常

樂府　伊勢物語
源氏 或女房作 同調曲　海邊
海路　海道上
同中　同下

祝

雨

究百集

隱德

長恨歌

風

十驛 讃少僧都[illegible]慶作 明空成取[illegible]調曲

君臣父子道 法[illegible]作 明空成取拾調曲

叢物

和歌 自或所被出冷泉武衞作 明空調曲

納涼

水 自或所被出不知作者 明空成取拾調曲

明王德 自或所被出 明空調曲

老後述懷

後伏見院御宇

正安三年八月上旬之比錄之畢　沙彌明空

いまはむそぢのあまり。つれなきいのちの程。おもひしらざるべきにしもあらねば。しづかなるすさびに身をかくして。ひたすら佛の御名をたのむよりほかはと。よろづをおもひすて侍しを。のがれかたらず。かしこより。あながちにすゝめられしかば。なまじゐにうけひき。かみの目錄にてそもれ侍れども。なをざりにてやまむもしかすがなるべければ。かさねてしるす。しかあればよその家の風に吹つたふると葉の花の匂は。まづさきだちてたをらまほしく。色にうつるかずもおほくこれをえらび。つたなきもとにさびしき老木にのこるとの葉は。かつはふりはてぬるもめづらしからず。冬枯の木末まれに人にしられぬかくれがの。ふかき林にいをりをしめ。後にひろひあつむるわざなれば。拾葉集となづけ。卷をふたつにわかちて。上下といへるなるべし。

拾葉集上

南都靈地譽

同幷

巨山景 已足侍者作 明空成取拾調曲

五節本 自或所被出候 明空成取拾調曲

同末 同前 同

忍戀 自或所被出候 明空成取拾調曲

金谷思 自或所被出候 明空成取拾調曲

宇都宮叢祠靈瑞

瀧山等覺譽 熊野常住作 明空成取拾調曲

同摩尼勝地 同前 同

拾葉集下

梅 自或所被出候 高階基清調曲　磯城島 自或所被出候 明空成取捨調曲
遊仙詞 平義定作 明空成取捨調曲　蹴鞠 二條羽林作也 助員調曲明空加取捨
車 生覺作 明空成取捨調曲　神情 明空作 基清調曲
旅別　雲 自或所被出候 同調曲
曹源宗 〔一曲集〕雲岩居士作 明空調曲　二闡提
後二條院御字
嘉元四年三月下旬之比重加注之畢
沙彌明空

拾菓抄 調巻後日出來之間追加入之云々
管絃曲 自或所被出候 月江成取捨調曲　文字讚 空闡上人圓林寺長老也 月江成取捨高階基清調曲
仙家道 藤原頼光作 月江調曲　五明徳 同作 月江成取捨調曲 入江羽林調曲源正字印
旅別秋情 月江作 曲同　曉思留記念〔實イ〕 月江作 高階基清調曲
戀朋哀傷 月江作 曲同　得月空池砌
全身駄都徳 同　江島景 藤原頼光作 月江成取捨調曲
諏訪効驗 月江作 曲同
花園院御字
正和第三三月五日重注之畢

別紙追加曲
源氏紫明兩榮花 月江作 曲同　琵琶曲 洞院左幕下家作 藤原助員調曲
聖廟靈瑞讚 月江作 曲同　同靈瑞超過
鹿島靈驗 左金吾藤原宗光作 入江羽林月江相共調曲成取捨　同社壇砌 同前 同
補陀落靈瑞 自或貴所被出候 月江成取捨調曲　同湖水奇瑞 同前 同
巨山龍峰讚 月江作 曲同　同砌修意讚 同前 同
玉林苑上
鶴岡靈威 沙彌曉心作 藤武衛頼冬調曲　善巧方便徳 月江作 高階基清調曲
永福寺勝景 月江作同列戶記 宇石行時調曲　同砌并 同前 同
鹿山景 月江作 高階基清調曲　竹園山讚 月江作 曲調
同砌法寫經讚 同前 同　象山路 作 藤金吾二千石頼光 月江[illegible]曲
紅葉興 藤原親光作 曲同　日精徳 作調曲 [illegible]光作〔一說字〕
、
玉林苑下 付部律講式 繼出來加之 仍次第不同　彼山住僧蜜
山王威徳 法印忠覺作 藤原助員調曲　背振山靈驗 [illegible]海作 月江調曲成取捨
同山并 同前 同　隨身競馬興 月江作 曲同
同番諸藝興 同前 同　寢寤戀 月江作 左金吾春瀾調曲
屏風徳 藤原親光作 曲同　琴曲 月江作 春瀾調曲

餘波 藤原助員調曲

後醍醐天王御宇

文保三年二月之比記之了

後花園院御宇

享德三暦孟夏中旬書之。　三善常房

右一帖者。以飯尾彦六左衞門尉三善常房朝臣自筆本令書寫。即時校合訖。

貞享元甲子仲秋天　前泉州司馬時元

宴曲集卷第一 四季部

春

霞たなびく雲井より。春立けりな天の戸の。明る氣色も閑にて。鶯誘引春風。かすむとすれど淡雪の。下草は猶結れて。岩間の氷解やらず。爭か春の越つらん。不來の關の東路。そよや有まほしきは梅が香を。櫻の花に匂せて柳が枝に發てしがな。百千鳥木傳ば己が羽風にも亂ぬべき物をな。誰に仰てか鳴音も絕せざるらん。八重歟冬紫深き藤浪。汀になびく池の面。取々にてや覺る。しゐてや手折まし。おらでや挿頭ましやな。三月の永き春日も。猶あかなくに暮しつ。

花

春は義弓木の德ありて顯せり。櫻桃李道花の中にも勝たる。紅櫻糸櫻初花櫻さけるより。梢にかゝるしら雲。花の所の名高は石崇が住し金谷苑。廬山の邊の錦繡谷。我朝の吉野山。龍田。泊瀨。志賀の山。奈良の都の八重櫻。大内山の花櫻。雲井の櫻をかざすなる。臨時の祭の舞人。花しづめの祭はげにさは此神のなをぞたのもしき。去來穗別の天皇の。稚櫻の宮の花の盃。淳和の御門の花の宴。天長八年の春也。花

見の御幸と聞えしは。保安第五の二月。萬代のためしをば花にぞ留し白河。瓶にさしたる花を見て。物思ひなしや老のはる。けふもこずと恨しは。雪と降し庭の花。楊貴妃がかほばせを帯たる花の枝。源氏の紫の上。霞の中のかば櫻。催馬樂の櫻人。雙調には柳花薗。花山の遍昭僧正。花薗の右大臣とかや。花色衣。花染。花うすやう。花がたみ。靈山說法の庭には四種曼陀の花ぞふる。法花の喩し優曇花。いかなる匂なるらむ。哀賢き御代なれば。あの風も枝をならさず。千年の春ぞ開き。

春野遊

上陽の春の野遊の曲。紅錦をさらす春日影。閑き風にや匂らん。霞にもるゝ花の香。花に鳴ては木傳ふ鶯は。此誰が家の軒端にか。珠簾いまだ巻ざるに。夢の枕に音信て。人來と客を呼とかや。臺頭に酒有て醉を勸る砌に。爐下に巻をわする。野澤に求しゑぐの若菜。折手にたまる早蕨。土筆と書るは土筆。長安の薺の青き色。田中の井戸に引田菘。あこめよいかにとめこかし。形見にそでを連つゝ。摘しらせばやとぞ思ふ。うつろふ情の色しあらば。花のもとに歸らむ事をや忘るらん。遊絲繚亂の色々。碧羅の天になびくなり。裳を宛て打解る花の下紐永日も。あかでぞ暮山鳥の。尾上の櫻さきしより。一木が本は綾なくて。見きと語らむ都人に。いざうち群て御吉野や。小泊瀬志賀の山越。片野のみのゝ櫻がり。雉鳴野の夕煙。龍田の奥の幾霞。霞を分て誰栗柄野に宿とらん。尋入野のつぼすみれ。摘てや來給ふらむ。今夜ねて名殘の袖はしぼる共。小野の芝生の露分衣。日もゆふ暮の歸さ。

夏

花は根に。鳥は古巣にや歸らん。惜し物を櫻色

に。染しは花の袂を。此いつしか更は。云ぬに着たる夏衣。卯花さける玉川の。井せきにかゝるしら浪。二葉に見えしあふひ草。みあれのころや榮ん。勝先初音もめづらしき郭公。雲井の外の一聲を。おもひもあへず詠れば。強顔のこる晨明。水位増ぬや五月雨に。苅手もたゆき河長の。菖蒲はもらぬ軒端にも。藁屋萱屋板庇。何もかはらざりけり。外面の木陰露凉し。一むらすぐる夕立に。水増らざらめや。鵜飼舟螢やかゞり。篝火や螢にまがふ夕闇。今宵計や六月の。名殘も惜き木綿祓。麻の末葉にかよふ秋の初風。

郭公

緑松の陰の本。紫藤の露の底。胡蝶も霞に遠ざかり。溪鳥も雲に入ぬれば。待るゝものとは我宿に。問ふ空の郭公。ほどゝき過ず聞ばやと。おもふ心や誘引けん。その神山の昔年。其神舘にたちやすらひけん。かたをかのもりて初音にめづらしき。四五月のあはひの。端山の峯の雲の外。二三更の間の夢の直の雨の後。枝には露を帶つゝ。金鈴りりと房なり。華は艶を施して。岩屛芬々とかうばしき。盧橘の香をもとめて。鳴は昔や忍ばるゝ。有つる垣根の同聲に。慕來にける哀は。さすがに人には異なるや。花散里の時鳥。待日はきかず日比經て。今夜聞つと讀りしは。音羽の山の時鳥。鳴つる方を詠れば。たゞ有明の月影の。強顔人の橋より鳴音空なる戀わび。心のうちを書口說。岩瀬の松の郭公如來りしは。いかなる夜の事成けん。汝が父なれど鶯は。賤き墻ねに木傳て。玉敷庭には音信ず。然を一聲の山鳥は。夜となくひるとなく。開む事を松の戸に。明方かけてや名乘らん。木の丸殿の曉。鶯の聲の中より巣立とも。藍より靑き聲あるは。たゞ郭公鳥のみならで。履手乞ては何かせん。鵙めか片戀を顯

す。五常の中の信あるは。布穀に過たる鳥ぞなき。何の田長ぞ名もしるく。己鳴ては早苗とり。九は田に立営に。にぎはひわたる君が代。げに治れる時の鳥。寐覺の空の村雨に。袖に涙の色染て。人の戀數常磐山。唐紅にふり出て。鳴は我身の類かと。露けき程の五月雨に。しげきあやめに水越て。善悪もみえぬ夜の浪に。御船を留し淀の渡。まだ夜ふかきにと詠しは。いかなる船の中ならん。覺束なしや鞍橋山。山路暮しつ行やらて。只一聲のあやなくも。やがて明ぬる篠目の。信田の森の千枝の數。聞てもあかぬ名殘は。いつも初音の子規。紀路の遠山廻つゝ。今來の岡にぞ侍るなる。聞ても杉のむら立を。こゝを詮にせむ山田の原。又百千歸信濃なる。須賀の荒野になく頃や。聲六月の郭公。

秋

取し早苗の何の間に。稲葉の鳴子引替て。秋風吹ば七夕の。妻迎舟に契てや。時しもこゑをほにあげて。雲井をわたる鴈金。遠の山路や霧籠て。友迷せる旅人は。過さぬ秋や怨らむ。露分わぶる篠の目。春は緑にみえし若草の。花は野邊に。紅葉は峯に。綵露の玉由良も。日影を待えざりけるは。垣ほにつたふ朝がほ。古枝にさける本荒の小萩が花。苅萱。女郎花。花薄。ほのかに招く夕間暮。えそ過やられざりける。同じ雲井のなどやらむ。七月八月九月に成ば。久方の月の都に。光ぞさやけかりける。賤士が假寐の稲筵。棹鹿の音に驚かされて。おどろかすなんなる物をな。山田の打木の寢覺は。此夜や寒からん。つゞりさせと鳴蛬。いかゞはすべき暮る秋の。名殘をしたふ袂よりや。先は時雨そむらんやな。

月

更闌夜閑にして清明たる月の夜。明月峡の曉。

庾公が樓に登れば。千里に月明かなり。殘月窓に傾て。宮漏正に長ければ。折や碪の萬聲。千度寢覺の床の上に。拂ひもあへぬ露霜を。片敷袖にや置副む。月冷く風秋なり。此和琴緩く調へて。潭月に望むのみならじ。索々たる絃のひゞき。松の嵐も通來て。深ては寒き霜夜の月を候山に送なり。瀧水氷むせむで。ながるゝ事をやえざるらむ。月の出鹽や御津の濱松の。下枝をあらふ浪（イナシ）の。波間にかよふ白妙の。月や砂を照らむ。月は明石の浦の栖居。槇の戸口の月影。問ず語の夢もげに。忘ぬ節とや成ぬらむ。いざ見に行む佐良科や。姨捨山清見が關。廣澤住江難波方。蘆間にやどる夜半の月。仰げば清き久方の。月の都は九重の。雲の梯にすみわたる。露臺の月の在明。月花門の夕月夜。秋の宮人の袖のうへに。移ふ萩が花ずり。露もさながら色々の。玉かとみゆる月影。いざよひに弓張。伏待の月。朧に霞む三日月。

秋興

蕭颯たる涼風。一時の秋を告とかや。槐花雨に潤ふ。桐葉風涼し。林を繡紅葉。綠苔を掃もてなしも。皆秋の興を增て。色々にみゆる百種千種の花。下ひも早解染る綠萩に。亂て結ぶ白露。薄霧の立旅衣の。袖かとまがふ初尾花。分行末もはる〲と。ほのかにきけば妻籠に。男鹿鳴野の眞葛原。末枯ぬれば蟲のねも。絕よはる夕暮。よしさらば今夜こゝに宿とらん。男山花にあだ名は立ぬとも。我脫懸む蘭。なまめき立る女郎花。げにそもえならぬいろなれば。あたりのゆかりまでも。心をかるゝ夕露の。手枕さむきかりがねの床。第一に心を病しむる。何の所にすぐれたる。月のあきらかなる前。此夜はじめて長ければ。かう〲たる星の。あけなんとする曉。壁に背る灯の。幽にのこる窓の中。

冬

今日よりは問なく時雨の。間無時雨のふるの神杉や。年舊ぬれば染あへなくに。猶綠に三輪の山本。嵐や過て吹ぬらん。僅にのこる紅葉は。霜に枯行淺茅生の。宿には人も問こず。板井の水も水草ゐて。氷の上に霰ふる。小野の山里雪ふかし。跡だに見へぬ細道。春の隣の近ければ。老木は花も浦山し。いとひてもいとふ方ぞなき。來る老樂の關もり。さても佛名に成ぬれば。三千世界恒河沙如來。諸佛菩薩受持名號。功德無量無邊引接。頼敷ぞや覺る。立舞袖もしばし。追儺の夜半の宮人。

雪

瑞を豐年に顯す。尺に滿白雪の。降て暮行年月の。積々ても。終に紅葉ぬ松が枝の。綠もふかき春くれば。雪間を分る若草の。はつかに思ふ心はうき人の。末の松山浪越かとみゆる浦ちかくふりくる雪。この光に明る山の。尾上の里のさと人は。人目枯行跡無庭に。問ぬを情と思へども。猶恨敷や待るらん。袁司徒が家の雪も。春過夏深く。積て道は迷はず。瑤階を連ぬる庭の雪。瓊樹を抽る林の雪は。此一万株の花ぼころび。梅が枝に花降まがふ淡雪。鶯の百囀すれども。猶風まぜの春の雪は。班女が閨の中には。秋の扇の色となる。孫康が窓には雪を集て光とす。朝に跡を尋しは。雪の中の損ぬ駒とかや。夕に鳥立に迷ふ雪も。白符にみゆる寄特。皓鶴あざやかなるをうばはれ。白鷳は素をうしなふ。抑善政曇らぬ御代に。あふがたのしき九重の。豐の明の小忌衣。袖ふる雪はなをさえて。日影に消ぬ玉欺の。御墻にたえぬ御溝水。汀の氷峰のゆき。君にぞまよふ道は迷はずと詠ても。きえなばけぬべき命の。なを又世にふる白雪に。市の南に望し賣炭翁は。さゆる一尺

の雪を悦ぶおもひあり。我やどの薄をしなみ降雪は。世々に續ても。跡たえじとぞやおぼゆる。

宴曲集巻第二　賀部 付神祇

祝言

四海浪閑にして。九州風治り雨壤を犯さず。棘の野邊も押なべて。遍き露をや灑らむ。幾万代と白浪の。濱松が枝の手向草。緑に見ゆる山藍の。小忌の衣の。立舞袖をひるがへし。神の心もや打解て。曇らぬ光は玉鉾の。道有御代をや照すらむ。所々の宮柱。猶古へに立歸り。寺々の甍もかはらねば。鎮護の道場憑有。蓬莱洞は長生殿。歳月春秋積りても。老せぬ門に仕て。忠臣朝を待出る。砂に響く沓の音。民も久しき御影を仰ぐ天の下。閑き春の耕すより。苅ほす稻葉の秋を經ても。絶ずぞ備る御調物。東に霞を隔ては。花洛の境に攀上り。西に浪路を凌ても。都の道に急がはしく。万民愁を成ざれば。關の戸とづる事もなし。

嘉辰令月

嘉辰令月の。曇なき御代に會ては。國富民豊なり。万歳千秋の風長閑なれば。浪治れる時を知。優曇花海中に開つゝ。百度幾万度。榮る春の日の。長居の浦の砂路の。砂の數は拾へども。盡せず久しき玉津島や。光を塵に和げて。紀路の濱木綿重ても。猶憑しく三熊野の神もろともに瞻せば。掛も賢き流のすゑ。聞ては古ぬる五十鈴川。伊勢の濱荻代々を經て。替らぬ田鶴の聲までも。雲井に遥に立のぼる。此位山麓の塵ひぢ積りても。其名はげにさは高砂の。尾上の松の枝さし副て。幾千年をか限らん。

宇禮志喜哉

宇禮志喜哉や皇の。玉體光淸して。曇らぬ御代の天の下。幾万代をかかぎるらむ。大宮人は帝闕の。星を戴に急はしく。渭濱の浪を疊まで。猶又仙洞の月にぞ歩を運けるやな。かゝりける御代の事かとよ。七德を舞て七德の。歌をば奏しけるやな。元和の古も聞ては詞舊たり。今日の日今に非ずな。

優曇花

思へば久し君が代の。様に類ば。希に開くる優曇花の。花待えても百千度。改らざんなる物をな。榮は端山茂山しげみの綠重きに。猶枝差そふる杉の葉。谷深み道も知れねば。遙きかなや行末。此 蜀江の錦と。閻浮檀金。崑崙山の玉。婆竭羅龍女が一顆の玉も。此砌にや顯れん。

花亭祝言

玉樓金殿に錦を飾る甍し。雲のたゝりかた甍を並たりやな。霞の軒端には又立並様なく。萬代の春を重ても。榮花の花はさき草の。三葉四葉に殿作。宜も富けり我君の。御代の榮は曇なき。玉を連ぬる綠のすだれ。行末懸て見ゆる哉。鏡を磨く粧ひ。臺には鋪り紅錦の色。庭には滿り。面を並る珊瑚の甃やな。青苔地を飾つゝ。黄菊籬に鮮也。枝かはす軒端の松の木高き陰。幾千年をか仰べき。峨々たる山は動なき岩根を認て。流絶せぬ池水の。汀の砂のかずかずに。寶を雨す如意珠までも。此閣にや備らむ。

不老不死

長生不老の樓は。必蓬萊の嶋のみかは。いなや歸らじと尋しかど。文成が僞も由無。老せぬ門をさして云へば。日月陰らず代を照す。御垣の光や是ならん。されば累代の政ごと賢くして。青陽の春の始の日。樂の曲調を連ね。弓場殿に此又座を敷て。不老不死の藥を獻ずとか。衆德を兼たるは酒の興宴。憤を散じ齡を延。年

月次を重ても。巴の字を書たる流のすゑ。重陽の宴の菊水。仙宮萬年の翫び。上壽をたもつと態なり。何も常磐の若緑。千とせを遠く松に任ば。まだ巣の中なるひな鶴。梅の初花初子の日の。若菜は老せぬ君が代の。樣に誰かは引ざらん。勝棒柴の屢も。枝を鳴さずのどかなるや。風治まれるしるしならん。幼なかりしは若紫の。遙に思ふ行すゑ。初もとゆひを結しは。二葉より契葵草。若葉さす野邊の小松と祈しも。衰ねび增て物々敷。見る甲斐有し樣なれや。抑佛は常住にして。はや浮雲の空隱。法性の光は有明の。つきせず無量の壽命なれば。二八の尊者は今現に。遺教流布の勅を受。或は北瞿廬西瞿陀尼。東勝南贍浮州をしめ。或は玉樓金閣。香翠山。潘覩婆山。廣教毘布羅の山の麓。分身普く及して。教法今に絶せぬは。不老不死と說れたる。一乘一味の雨のしたに。藥草藥樹の花のにほひ。病即消滅の風薫ず。あの凡不老不死の利益。藥師の十二大願。十二神明の擁護なれば。宮毘羅大將よりぞ伐折羅大將。安底羅乃至摩虎羅眞達羅等。此招杜羅大將毘羯羅も。皆是等の大將諸共に。各七千の眷屬と。君をぞ守奉らん。

神祇

神德峯高くして枌楡の葉枝を連ね。感應海廣ければ蘋蘩の緑波に浮ぶ。波を隔る千里の外。雲を重ぬる萬國に。其形を餘多に分ては。利益を品々に施す。倩古の舊にし跡をおもへば。天の岩戸を緋の瑞籬に。宮ゐする代々に至まで。皆我國の神態。誰かは之を仰ざらん。伊弉諾伊弉冊の二人尊計て。天より降す玉鉾の。道有御代の今もなを。荒金の地の動なく。崇神の賢さ昔かとよ。天津社を崇て。此地祇御神も瞻す。神の神たるは人の敬に依てなり。人の人たる

は神の恵に依とかや。されぱや大内の御垣にも祝れ給ふなる。神祇官の八神殿。園韓神の社と。生馬の明神鑒て。賢所は温明殿に玉體光を並とか。又賤き宮仕子祝子。あの巫女が鼓の打妙に。神閑冷增る鈴の音。振仰見れば榊葉や。立舞袖の追風に。御注連にかくる白木綿。弓立宮人聲々に。此豐幣取々なる態までも。神の心やなびくらむ。

宴曲集巻第三 戀部

吹風戀

吹風の目にみぬからに身焦て。おもふ心よ何も角。益無迷ふ戀路の。すゑやは何合坂の。せき留難瀧津心は山川の。音に立ても謂ばや物を。無端命も知ずかげろふの。岩垣淵の隱に身を捨ても　何かは忍ぶ。思ふには負習も有蘇の海の片貝。此拾もて會ぬ恨の。數取とらばや。如此計見目の外に强顏は。關も終なでや思草。葉末の露のたまさかに。來てだに手にもたまらぬは。取滯り衣手に。咽淚の中に別れにし。うきおもかげを身に副て。明行空に朝鳥の。音のみ啼て左右に。憂物なれや人每の。聞苦しき世の中に。長居てあはむ憑だに。懸ても如何か他浪の。寄邊定ぬ水の上の。泡ときえなでや浮沈。水隱に喘餘。早川の瀨に立ねど。苦しき戀の淵となる。淚の床に浮枕。人賴なる夢をだに。結も終ぬ片絲の。今將更に逢ずば。何をか玉の緒にはせむ。

遲々春戀

遲々たる春の終日に。長恩は萱の根の。たえぬ淚を押ても。暮待程ぞ苦しき。蕭々たる秋の終夜。篠の葉分し袖〔よ宮〕もりも。猶露深き曉を。栢の小枕欹て。聞も悲き鐘の音。つきせぬ名殘の切

なるは。戀慕の思なりけり。節にふれ時に随て。心を動す妻と成。衣にそみし移香。解て寢られぬ下帶。獨ねの我手枕の。透間閑冷木枯の。にしむ風の便りだに。絶ぬる中の恨は。露の玉巻眞葛原。見甲斐無は水莖の岡やかや原。重人目を凌ても。あいみんと云人毎の。只等閑の傳もがな。山鳥の己が鏡の。影にも恥ず戀にのみ。衰へ終る姿の池の。生る計に浮沈。この誘引水も流ては。終に寄瀬は有なんと。身を萍の根を絶て。しばしやさても待見む。されば難波のうらにあしを刈。己が樣々世々を經ても。深きおもひの指南とや。身をつくしても會見けん。或は弄玉が簫の音に。顯れしおもひの色成は。楚の襄王の后に近就近臣の。纓を取々なりし態までも。戀路に身をや代けん。如何に爲誰かは書初けんやな。愁の字をやかこたまし。秋のこゝろは物毎に。うつろふ色の怨ければ。人は鶏の常磐に。うとくや今は成ぬらん。勝我身かりにもさのみはいかゞしたはむ。人遣ならぬの咎なれば。今更誰をか歎つべき。人遣ならぬ道ならなくに。生憂と云て歸ても。關なで海士の足緩く。苦しき習なりければ。恨さてもつきせじ。異浦風にや靡らん。其煙するぞおぼつかなき。

戀路

戀路は如何なる習ぞ。思初入初しより。一方ならず濕て。峯の雪汀の氷ならね共。急雨か露か時雨か。すぞろに袖の濕は。雲か霧か霞か。强顏中の隔の行末も。しらず迷は其や白雲の。其や白雲のかゝらぬ山も嶠〳〵ぞ。君には迷ふ迷ても。愛も情も露の假言も。かゝらぬ身に仕へつゝ。あの顧もせぬ我宿の。軒端にしげる荵草の。種取ましを逢事の。最如此難岩にも松は生なるものを。强てなど强顏色と知ながら。な

をこり須磨の浦に燒。海士だに愼思さへ。けぶりのすゑにや顯れん。後をば知ずたのみつる。今夜計や新枕。返しもあへぬ呢語の。名殘は未盡無に。後夜將に明なむとす。頻に鳥も音に立て。つらき別在明の。月こそ袖に曇けれ。又夕暮と契れども。憂習の言の端は。盡ても不知哉憑ねば。待としも無音信の。そよともすれば下荻の。末越風をや待らん。見や夢有しやうつゝ面影の。忘ずながら遠ざかる。雲井の雁の玉章も。虚の空なる記念哉。君が爲に衣裳に薫物すれども。匂有とも白雲の。懸ぬ山もあらし吹そふ木の本に。消ずはありとも散花の。明日は雪とや積るべき。如何に鳴海の恨ても。人を見口は假にだに。憂節しらぬ吳竹の。長夜懸て契也。

龍田河戀

戀爲てふ我名は未き龍田川。渡ぬ水の分てなど。益無袖ぬらすらむ。不知幾世か玉の緒の。長往にける伊勢の海の。海人の眞手形のしばし置らむ露。出て拂ふと計の。情は能や葦垣の。隙こそ無れ勝に又間れねば。條日苅澤田に袖の。濕にぞぬれし物思ふ。我衣手を見ばや。婦に山城の六田の淀に。小網差てしほるゝ麻の狹衣。

袖志浦戀

戀爲てふ袖しの浦に拾ふ玉の。たまたまきては手にだに止ぬ強顏さは。からからと懐貝のからかひて。終に逢ずば玉くしげ。二度命の長經て。有經物とは白雪の。きえてや中々忍れむ。淺間の嶽の淺猿く。もゆる氣色は富士の峯のけぶりもそらに立上り。上無思の行末とや。雲居の月も霞らん。鏡の影に向居て。むかしもあらず山の井の。淺猿げなるくろかみも。誰手枕にみだれん。問れぬ夜半は菅莚。我も臥憂竹簀。昔流けん水莖の。跡は入江の藻鹽草。からくは浮世に跉跰て。此輪の中に廻逢瀬にかげに

水草。うしとは誰を岩打波の。砕る心は我計憤とすれど涙川。朽にし袖のしがらみの。流て早月夜の。夜の衣の恨しく。計無夢の中にさへ。ゆるさぬ夜半の關守も。しばしは打ぬる隙も哉。浦山布さても彼巫陽臺の邊にして。朝には雲と成。夕には雨と時雨けん。神女に結し夢の契。げに有難かりし樣哉。是も思へば何かせむ。迷の中のまよひなり。暗より闇にぞ入ぬべき。山のはつかに殘る月の。心の霧をやかゝげまし。光は秋の白露の。色々にみゆる玉なれば。磨ばなどか磨ざらん。

袖湊

思立より戀衣。袖の湊の深くのみ。鳴海の波の音に立て。謂ぬは苦しきたくなはの。長恨と成やせん。人心不知未しらず花染の。變安き世の間の。習を誰かは賴らん。川船の差香に差も離ねば。うきたる中と思へども。寄てはかへる他波の。情を懸る言の端。諸ともにおもふと聞ば能やさは。心盡陸奥信夫の奥。千尋の海の底までも。入なむとぞやおぼゆる。勝奥の海の な。鶉の居岩の狹間にも。葎のやど萱が軒。土生の小屋の紲さも。昔踏鳴す岩がね。〔遁世〕薫る雲をわけても。太唐濤雲棧梯を取ても。渡まほしき物をな。此不來の關守は。打ぬる宵も有なむ。留らん露もさのみやは。袂結ぶべきやな。契の末の粹ずば。虎臥野邊鯨の寄る嶋にも。留ば留なんやな。如何なる思なりけん。反魂香に咽し。けぶりの末の面影。生ても思に絕じとや。此石季倫が別には。綠珠が身をもすてけむ。

袖餘波

さても此强顏見し晨明にや。衣々の袖の名殘。忘る間無は曉。思ふ鳥のそらね。談らふ一夜の夢路にや。緒斷の橋の名をかけて。又今も渡ぬ中河の。逢瀨もつらき別路。さぞな昔の垣も越

ぬらん。

源氏戀

善とても能名も立ず。苅萱のいざ亂れなん。菩薩に藤壺の。如何なる迷なりけん。憂名もきかなで薄雲の。浮立おもひの終よさは。立舞べくもあらぬ身の。紅葉の賀の夕榮に。頭の中將の匂ひも。人より殊に見れども。花の側の太山木と。押しもさすがに如何おぼしけん。袖打振し御返し。立居に付て哀と讀せ給ひけんも分無。此朧月夜の内侍の侍や。さりや何に落けむ涙の色を。窘[マヽ]など疑せ給たりけん。朱雀院の問し御心。恥くも如何恥ざらん。女三の宮の柏木も。薫の行末と思へば。更に疎も終れざりけり。浮舟の匂ふ兵部卿の宮。橘の小嶋が崎に。舟さし留て契けん。河より遠の御栖居。寂漠からずやおぼゆる。

名所戀

忍も苦し如何にせむ。強顏人は常葉山。言ねばこそあれ岩躑躅。さのみはいかゞ愼終む。思倍田の生限は言出じ。漏じとこそおもへども。音羽の瀧の音にたちて。岩瀨の森の梢の色にし見えねば。然る人だにも。戀には迷ふならひの。我柄忍の泉郞の苅。藻に住虫の音をぞ啼。ねぬ夜の友と成にける。袖の涙を佗ても。知ず體なる松の風の。手枕近き明暮。おもへば計無や。身をさらぬ面影計の忘記念。誰も思は攝津國の。難波の蘆の憂節に。礙小舟の寄部無。身は他波の心地して。いでや此煙計を。此世の思出な。又思ふ邊に立別て。憂身を離ぬしるべならん。蘿つぼ邊に忍しは。いとゞ無態なれども。語ふべくも無ればや。消あらじとて立寄し。后徽殿の細殿の。をし明方の朧月夜はにる物やなかりけん。心迷の契故。消こり須磨の浦傳。飛鳥井の深き思。跡無水の夢の直。如何に憂と思出

る。常磐の里を忍けん。凡妹脊の中に落。芳野の瀧の山無に。推て物を思ふてふ。心の中の苦しさを。さて又誰かは我爲に。慰程も語て。袖打返したはぶれむ。春や昔の春の狂言は。水の尾のいにしへとかやな。夢かうつゝかおもほえず。齋の宮のかりの契。憂子一のかたらひより。丑三計の睨語にや。神の關の渡てなどかと問ざらん。さりともと信土の山の待甲斐も。名草の濱千鳥の。跡だに付ねば不餘綾の。急て我や行まし。宇士濱の踈遠心の駿河なる。田籠の恨有蘇の海の。見日の外にや成ぬらん。爭かは會の松原行てみむ。浦山布は戀の岡。婦が姿の池水に。しばし水飼影をだにみむ。栴の隈川を渡す駒。人しれず涙に袖は。鹽垂山に迷つゝ。佐野の舟橋さのみやは。外にも人を聞渡らん。君が住綴喜の里の床しければ。尋行ては美作や。久米の佐良山更々に。爭人に逢ざらん。常陸には田をこそ作筑波山。端山重山茂人目を凌ても。荊田の機思出ば。秋はてぬとも問てまし。日情計は懸よ鹿島の常陸帶の。神に誓し契の。すゑの松山他にしも。爭か波の越つらん。人心うつろふ花の櫻川。外にもやがて立歸る。霞の關の關守。妻が嶋記念の浦に鳴〔つる田鶴〕音には立れど忍の岡。強顔色のかはらぬは。年經松が浦嶋。夏紅葉に問人あらばすまの浦の。あまり憂音に袖は露じ。言絶ぬれば陸奥の。壺石文ふみもみず。心の奥を知せばや。信夫の山の下わらび。然伊吹の誓約束。さしもつらくてやまんとや。不審な逢瀨だにも迷身の。渡ぬ前の名取川に。しづみゝ終ば無名嶋。麻生の浦回に來寄波の濕衣。羽束しの濡ても誰か散しけむ。會事をと海。猪無の湊入の。蘆分小舟の礙おほみ。緒斷の橋の絕ぬとや。鳥居のゝ島の有耶無耶の。關の扇の稠ければ。敢ぬ中とや成ぬらん。

宴曲集巻第四 雑部上 付無常

樂府

如何に心も摧けむ。蓬萊宮を尋けん。童男娘女は。眼は穿なんとせしかども。不見事をえざりき。是皆徐福文成が。誰たと歎し甲斐もなくして。たゞ徒に老にき。上陽人は又紅顔空に衰。窓打雨の夜の床。寝たる事も覺ず。秋の夜長寝ざれば。明も心無宮の。鶯は百囀すれども聞事を厭。梁の鷰はならび住ども。物妬事を止てけり。たゞ深宮に向て。明月を望とかやな。此□衣裳青き黛。眉書て細く長ければ。外人には見じとよ。みなば笑れなんやな。

伊勢物語

昔男在原の。其身は賤と云ながら。かたじけなくも栢の葉の。末葉の露の白玉か。何ぞと問し人も皆。他なるちぎりの中様かは。心の奥は陸奥の。信夫の里の摺衣。[おもひ亂歟]亂る涙より。袖に湊のさはぐまで。一方ならぬ迷にも。命強顔長らへて初冠の往年より。五十に餘年月を。送迎る春秋の。詞の花の色々に。調る匂を殘つゝ。思ひ忍はず花籃。日並人は大幣と。名にこそ立れ。百年に。一年足ぬ白髪。立寄老の波までも。情を懸ば武藏鐙。さすがに誰をか捨終し。我身一は替ぬに。おぼろげならぬ春の夜の。月やあらぬと詠ても。見し面影をや慕ふらむ。あだし閨のせめて猶。透心は逸早。都をさへに住浮て。東路遙に思立。淺間の嶽の夕煙。富士の高峯は時知ぬ。山路の雪の曙の。蔦の下道や打拂 限無遠來にけりと。來し方を思繼て。哀なる時しも有。名も睨まじき鳥の音。住田川原の渡守に。事問侘し旅の空。物うきひなの栖居なれば。此夷心もいざやさは。都の土産にいざといはむ。何かはわすれん御芳野の。頼の鴈もひたぶるに。我

が方にのみ寄と鳴物を。おもへば久方の。餘隈無心もて。誰に思ひを掛も。賢神の鬪垣をも。强顏中の隔とや。假の使の假にても。思寄べき便かは。子一計の月影に。丑みつまでは語へど。夢現とも分かねてや。心迷に明にけん。井筒に懸し丸がたけ。振分髮の戲。落穗拾し田邊の庵。春日の里。深草。長岡。水無瀨。小野の里。莵原の郡高安の。里をば鬪ずや通けん。飯貝取しくままでも。忘れ[illegible]れや。

源氏

藻鹽草書集たる其中に。紫式部が筆の跡。疎なるは無やな。六條院の女樂。傳てきくも面白や。比は正月の廿日の空。おかしき程に成行に。御前の梅も盛に。大方の花の木どもゝ。皆けしきばみ霞渡るに。臥待の月差出て。先女三の宮を見奉ば。人より殊に少くて。櫻の細長に。柳の絲の様したる。御髮こぼれかゝりて。琴引給ふ御姿。鶯の木傳ふ羽風にも。亂ぬべくぞ覺る。女御の君今少。匂加る様して。箏の琴をぞまさぐり給し。開こぼれたる藤の側並無早朗を見心地す。紫の上は葡萄染にや。色濃小袿に。蘇芳の細長をぞき給ふ。宸花やかに和琴を氣高こそ書立れ。花と云ば櫻に喩ても。猶物より異に見るに。並ては非御邊に。明石は氣押べけれども。宸差も非持成て。駒の靑地錦の。端さしたる茵に。琵琶を打置て。只氣色計引懸て紡宛に仕成たる撥の持成。五月待盧橘の花も實も。共に押折たる喩は。何にも如何くだされん。

海邊

蒼波路遠し。雲の浪煙の波をしのぎて。纜を解を叩て。商客の夢を驚す。憂ねの床の梼枕。旅泊の哀を催す。滿來鹽の彌增に。湊を隔る伊豆手船の。名殘を留る猪名の渡。難波入江のうら風に。末葉に波を亂葦の。世に定無爲鳥の。浮

巣を他にや遷らん。伊勢の海の清渚の。玉敷濱邊に拾貝。しばしとおもふやすらひに。涼しき松のしたかげ。烏羽玉の夜佐の浦浪の。荒磯に砕る音立て。友迷せる小夜千鳥の。聲澄程にや成ぬらん。苫ふく軒を漏月の。かたぶく空は天の戸の。明るも花篠目に焼愛たるいさり火の。煙に紛ふ朝霞。浦より遠の浦傳。憂かりし鹽の彌合に。沈も終ぬ身と成て。淺からざりしちぎりも。如何なるしるべなりけん。泡と見淡路吹越輿津風に。鳴湊の若布。海松房。玉藻貝。苅干てふ里の泉郎の。間遠の衣袖冴て。月影ながらやこほるらん。海漫々たり。年々に薬を尋し蓬萊宮。天水范々として更に氷に所無りき。

海路

海は四徳を滿つゝ。連鹽を萬壁に廻合。刹客は霞に乗て居たり。仙人は月を翫ぶ。深襟は澤の雲をうつし。畵鷁を波の前に開。あの節にふるゝ情は。船の中波の上。一生の歡會是同。朝浪閑の霞の間より。行瀬の浦の白波の。花かと紛ふ追風。此輿津鹽合を吹送る眞帆に當る。船乗爲らし吾妹子が。赤裳のすそ濕つゝ。霧共行舞見日しげく。麻生の浦廻の磯菜摘にてや歸らん。住吉の岸なる其さは。草の名は忘る種を誰か蒔し。さても思の我にのみ。津守のうらの恨してめや。强顔生の松原生て世に。心つくしに幾代經む。蒼海渺茫として。きけば青海の波の音は。岡部の松にや通ふらん。嵐に類琴の音。攪ては又挑し。玉盤に跳。竊々たり嘈々たり聲も有。船を近付て語しは。潯陽の浪に浮し曲。鹽の山差出の磯には千代〔マヽ〕經ても〔マヽ〕〔千イ〕。浪治れる時やしるき。藤枝の浦に居鷗。干潟も遠立騷。夕浪千鳥輿の海の。浪越岩の嶋津鳥。浮て流葉の根の亂て鹽瀬の波や懸む。滿鹽の入江の嶋にかづくてふ海士の。神馬草ぞ苅干汀の岩根の床

に。其かとみゆる引敷。己が爲態も取々に。眞橈の響櫓の音。皆聲澄て船子歌。夜船をいそぐ礒傳。夜さへ苦しき綱手繩。月に促す天の戸を。緋の粧舟ほの〴〵と。波よりしらむ篠の目。暫とて立寄甲斐も渚なる。苫屋は如何に浦廻る。一時雨も森戸の松の。木陰にいざゝらば宿取む。

海道上

行々たる露の驛に。思を千里の雲に馳。眇々たる風の泊に。心をき夜の波に碎む。霞隔霧を凌。立別れば旅の空。雲居の外にや成ぬらん。馴來し都をかへりみて。會坂越て打出の。濱より遠を見渡ば。鹽ならぬ海に歆る。石山詣の昔まで。其面影の心地して。山田にかゝる湖の渡。矢橋を急ぐ渡守。長等の山を外にみて。淡津の原を後にし。勢田の長橋。野路の末も。時雨て痛く守山の。篠に露散篠原の。小竹分る袖も濕つゝ。日も夕ぐれにや成ぬらん。くもりも霞む鏡山。いざ立寄て見てだに行む。年經ぬる身は。此老ぬる。老蘇の森のした草の。蔭に駒を留ても。今夜は是所に假枕。草引結ぶ旅ねせん。ふけぬるか人を。咎る里の犬上の。床の山は不知哉何ぞ。ふち哉河々風寒曉の。ね覺に聞ば小夜千鳥の。岡部の松に積る雪の。雪よりしらむ篠の目に。小野の舊道雪吹して。篗浦返す旅衣。末野を廻ば伊吹山。差も冴暮す夕嵐に。氷やすらん佐目井も。檜の葉柏はら〳〵と。降や霰の音立て。關の藤河波越て。水の柵行遣て。たれかは心を留む。不破の關屋の板廂。眞屋の餘に聞荒なれば。時雨も月もたまらず。駒並て渡井ぜきの杭瀬河。雨に凝ば笠縫の。里にやしばしいむ。己々契や結ぶの森。浦山布も立並て。枝差通す一本。水の流て川嶋の。若墨俣や替らむ。危く渡す浮橋の。足重をこえ。早朝も池にや成ぬらん。初霜結ぶ絲薄。枯葉の尾花袖濕て。茅萩や切ぬ萱

津の軒々も亂て吹風に。ひぢ笠雨の舊渡の。橋にとかゝる歩人。雲晴行ば夏の日の。熱田八劍逸早。恵に大鳴海瀉。干潟も遠浦傳。天照神は星崎に。光も曇ぬ代にしあれば。願を滿の鹽風も。猶吹送二村山。打過ぬれば是や此。又同越堺河。遠里遙に立上る。煙の末の一筋に。急は旅夕暮。

同中

唐衣着つゝ馴にし。着つゝ馴にし妻しあれば。都をさゝに忘めや。外にのみ聞渡しを參川なる。蛛手に懸る八橋の。澤邊にさける花の色に。移安き人心を隔て見る杜若。者武の持る矢作に取副。梓の眞弓。兼の澤田を作岡の。苗代水をや任らん。早雁澤に懸ぬる。宮地の山中中〳〵に。間ば遙き東路を。渡津かけてみ渡せば。新今橋の今更に。立歸る橋柱を。嵐の音も高足山に。閑冷立る一松。直下と見下ば靈見坂。水はるかに連て。眼正に穿なむとす。濱の砂はかぞへても。白州が崎に居鷗。入海遠き濱名の橋。渚の松が根年を經て。誰主ならば不審。朽ぬる泉郎の捨船。岡部の若草春と云ば。引馬もさこそは斯らめ。水鳥の下居池田の薄氷。とけて臥られぬ旅の。夢さへうとく成ぬらん。佐夜の中山長經ば。命の中に又も越なん叢秋と。君が千とせを菊川の。流も久し大井河。歩より渡ば前嶋の。岸邊に浪寄藤枝を。手折や挿頭の花ならん。手向の袖の追風に。靡は神の木綿四手。

同下

山は青巖の形を。誰かは削成けん。巧に知れて幾年月をしる谷の。磯路に凝敷苔根の。岩根傳蔦蚊懸。宇都の山現とや云む夢とだに。思も敢ず昔みし。人にや都へ言傳む。昔遺文の手越こそ。猶も心の泊なれ。今夜は是所に臥ぬる夜の。未夜を籠て芥家鷄の。鳴別ては背河の。背をば何所遺ぬらむ。彼昇遷橋に催て肥たる馬に乘

ずば。此高橋も渡じ。故郷も同月ながら。光は清
見が關路より。向を遙に三穂が崎。磯邊の浪の
立歸り。契興津の濱千鳥。跡をば忍ざらめや。
あとを忍も及ぬは。上宮太子の黒駒。蹄に知し
不盡の峯の。其鳴澤の心地して。川瀬の水も早
ければ。ふねさす棹の取敢ず。向の岸にや着
ぬらん。鹿子まだらに降雪は。時しも夏とは知
れぬに。早苗取田籠の浦浪に。浮はやみる浮嶋
が。原中遠行々て。抑此國は何ぞと問榮て千꧁
破神の惠の絶ずのみ。歩を運ば我も先。詣て三
嶋の瑞籬。山又山の雲を分て。くれば遙き箱根
路の。山おろしの風も寒葦の海。吹けや氷らん。
朽殘るなるしるしをも。いざゝは射てみん箭
立の杉。鳥綱足柄山に。船木きるてふ山人の。入
狹の道をや廻らん。是も湯術はいざ不知。まだ
みぬ湯元早河。早むる駒は大磯の。急て過る磯
傳。寄來る浪に袖濡て。磯菜摘て。此泉郎の苅藻
に住虫の。我唐衣日本には非ぬ唐が。原をば遠
隔來て。早鎌倉を御輿が崎。越ては稲村稲瀬河。
抑垂跡の源の。あの石清水を引導て。濁ず潔き心
以。言吉差給けむ。詞の花は櫻麻の。苗を貫す
る榮にて。心の任の蓬は更に有難や。御代なれ
ば幾千年を送共。猶若宮の松に住。此鶴が岡の
叢祠にぞ神留御座。枌楡和光の月は弥曇ぬ政
にかげをそへ。蘋蘩の禮奠の風は又忘ぬ信に
徳を増。誠に文信に武皇の如にしくのみかは。木
と無草と無。風のごとくに靡して。賢く久敷君
が代は。民の烟も穏にければ。九年貯蓄なり。

羇旅

山路に人希なり。耳に満物は。是青嵐梢に音信。
野徑に煙たなびきて。眼に遮類は。又白雲遙に
聳たり。羇旅に鞭を進る。駒の振分吹亂。嵐に向
ふ曙。路驛に鞍を解ては。野村の叢に宿をしめ。
旅より旅に遷來て　花摺衣の袖の色。結し露の

情より。直き草葉の末までも。皆思出の妻なれや。凡旅客の情。旅人の思は取々に。行も歸も押並て。名殘は誰も變らねば。蘇武が胡國の鴈札。昭君が旅の馬上の曲。是皆餞別の色深。故郷を忍心有。かゝらずばかゝらましやは下野や。室の八嶋に絶ぬ煙。猶立歸りみて行。如何成思の類ならん。草枕深行夜半の秋風に。扉（蔦イ）の狭衣宇都の宮。月に寢覺のすさみならん。抑遙に傳聞。神護の古天應の。久しき昔とよ。照日の光を和げて。塵にまじはる瑞籬に。普門を開つゝ。歩を運宮人の。絶ぬ誓の御注連繩。長契を結つゝ。今もかはらず呪言。勝此旅のうれしければ。幣も取敢ず袖に挿頭。紅葉の錦の色々に。手向て過る神垣。早霜枯の芦沼の。氷汀に風冴て。関冷さ増冬室山。音にのみ聞し計の心あてに。是や其と思なす野の假枕。たゞ一夜の小竹の庵も。忘ぬ節とぞ成ぬべき。行末はまだ我知ぬ白川の。關の稜踏鳴。己乘駒の爪だに浸す名にし負淺香の沼の花篋。且見からに戀しきは。猶故郷の面影。西渡月を慕ても。送る心は太に。其方の空にや通ふらん。窘なさは此行べき陸の奥の。終は何の旅ならん。立隔れど籬垣の嶋。畑の末も隱無。見や千家の鹽竈。

留餘波

行人も留る袖も旅衣。歸來て後の悔さを。今更思ふも甲斐なくて。勝引留ばやと歎共。駒並て先前立は涙にて。足柄清見不破の關守 徒に。扇は如何に名のみなれや。しゐても留ぬ別路に。人をば送ざらめや。猶行末にも會事は。有とこそきけ足引の。山より山のすゑ迄も。嶺の白雲外に頓。遠ざかり行は如何爲む。

行餘波

熟とおもふも苦し入合の。兼ても名殘のをしあけ方の天の戸を。立別なば白雲の。知ずや何

ぞ人心。無如の情もあだなれば。馴々て中〳〵悔しき契さへ。憂身を知ば晴やらぬ。涙の雨の故郷へ。又思立旅衣。袖しのうらを過難きに。浦山布も歸るか浪に。裳末は霧とも伊豫。小餘綾の急れ無に顧。肩瀬の波は行河の。早や三年を過ぬらん。草枕假初と念名殘だに。旅臥の床の常磐に。濕るは別の袂なれど。終に稻葉に結ぶ露の。命の中にも忘ずば。苅田の穗思出て。問ばいかに答らん。哀てふ事をあまたに思亂て。我黑髮の末までも。本云置し言の端の。替ぬ色の類ば。東吹風の便にも。などかは傳の無るべき。山越ても我のみぞ。東路はるかに宇都の山。夢にも通ふ心ならむ。

無常

眠は五更に醒ぬれば。倩有爲の理を。思へば夢の他し世に。みし面影の一日の媚。千々の容貌も。刹那の生滅早別。幻夢影稻。乾闥波城の變化は。諸執の終も無。流水歸ぬ老の波。越行末の松山の。松に齢を寛ても。終には朽ぬる埋木の。苺の下には。たゞ其名をや殘らん。若を送老の恨。老てはさらぬ別の。千世もと歎人の子の。歎は憑影も無。枯葉の淺茅生と幾日は。結べば霜によはるむし。後先立夕烟。雲とやなくと涙の時雨けん。哀は何も切なれど。取敢ざりし夕顏の。鬢亂髮の其まゝに。短き契の終しなく。散にし花の玉かづら。懸てもさやは憑しに。育立けん淸までも。憂かりし昔の形見とや。柏木の燃思の終。莫無跡にや殘けん。若根の松の若みどり。花戯る春の園。月に語秋の閨。身にしむ風に隨散。木の葉に替ぬ命持も。なにかは露の賴有む。凡三世の諸佛の勅。無常を發心の初とし。花は萠り菩提の樹。菓涅槃の山。さればにや證果羅漢も誓化城に留て。漸實所別令。只偉八相の成道も。先其姿をあらはす。歸去來六の道

に。やすらひ終ぬ身と成て。

宴曲集巻第五 雑部下 付釋教

朝

朝市の榮花盛にしてや。君の恩も事繁く。市を成たのしみは。仕る道ある御代なれば。夙夜の功をや重ぬらん。朝候日たけて出ず。月卿冠をかたぶけ。雲閣袂を連るは。朝覲の其儀式。鳳闕仙洞の春の朝。此朝餉に見そなはし。朝政もおこたらず。春のくる葛城山の朝霞。かすみて出る朝日影。明るもしるきあまの戸。露とやいはむ涙とやいはん歸さの。袖うち拂ふ篠目。一人寝の夢の名殘なれば。おきうき朝の床の上に。みるかひ有てうれしきは。契し今朝の玉札。除目の朝の上書。槿の花さく垣ほの朝霞。朝置霜の朝しめり。朝居雲の朝まだき。霧の間墻の隔は。衣々の朝やつらからん。朝滿鹽の朝なぎに。あご調る海士小船。朝立旅のゆくすゑ。遠里遙に見わたせば。朝氣の煙の。もよひにぎはふ民のかまどは。さかふる御代のしるしなり。小泊瀬稚武の尊いますかりき。泊瀬朝倉の宮に宮居して。賢き昔の御名をとゞむ。あの浦嶋の子がいにしへも。この御時の事かとよ。

夕

夕陽西に傾て。東に歸みれば。まだ麓は霧のへだてつゝ。山よりおちの夕日影。さすがに暮や終ざらん。松のゆきあひの木枯に。つれなき色をのこしても。外の木の葉や時雨らん。夕こえかゝる旅の空。かこつ方なき哀は。夕やわきてまさるらむ。夕鹽夕なぎ夕波千鳥。鳴音さびしき夕間暮。夕の月にわりなきは。野分の風も身にしみて。思みだれし節かとよ。わするゝ間なく忘られぬ。夕の空の村雲に。猶立まよふ夕霧

の。籬の花の夕しめり。手折し袖やそぼちけん。夕顔の花さく宿の主や誰。たそがれどきの空目は。げにおぼつかなくぞおぼゆる。夕立の晴ぬる跡の夕づくひ。影ろふかたの涼しきは。雲間をわたる夕風。夕宿の晩田の稲葉うちなびき。風にたまらぬ夕露は。結びもあへずみだるらん。暮染の夕の色のすごき。しきみ摘山路のそばづたひ。雙の野寺のはるゞと。そともみえし詣るさに。時しもあれや入逢の。かねて思し有明より。猶心澄山陰の。五百代小田の夕嵐。草の戸ざしの明暮は。袖もほしあへぬ露のまに。蟬よはりゆく故郷の。蓬が柚のきりゞす。昔行空の氣色。誰も哀やまさるらん。夕は隱き涙哉。

年中行事

大昊木徳の春の始。一天風のどかなり。千年をさして契は。霞て出る朝日影。四方拜小朝拜。あの白馬踏哥の節會の儀。子の日の松を引てこそ。君が齡を祈けれ。春日。平岡。率河。園韓神。大原野。此日々を定て神事。皆二月の事也。逸年の昔のなみ。周旦曲水のふるき風。絶ぬ流を留てあまねきは是桃花水。鶴に乗し仙人の。花にあそびし茅君洞。凡世間の美景は。春三月を賦せる詩。中天竺の藍毘園。卯月の八日は佛生日。其神山のもろかづら。誰か心をかけざらん。雲の外の郭公。鳴や五月のあやめ草。長ためしに引けるは。郁芳門院の根合。六月の瀨の蟬の。晴の雨に似たりしは。高山樓の北の。此暢師が住し禪房。螢火のかゞやく袖と。五蠅なすあしきかみとを平げて。河瀨にながす木綿幣。歸る袂に吹初て。涼しき秋の初風。年々渡天の川。雲井の庭の乞巧奠。玄宗皇帝の。楊妃がかたちにかゝりて。比翼連理と契し。驪山の昔ぞゆかしき。秋の寂中のかひありて。月に心の

あくがるゝ。陽明門の一廻。詩哥管絃の遊あり。都の南に男山。神の誓の放生會。上卿參議辨官。諸衛の佐まで供奉しけり。九日の宴は年ふりて。久しき菊の盃。十三夜の佳明は。延喜よりぞ傳はる。神無月十日あまりの比なりし。朱雀院の行幸。紅葉の色にうつろひし。青海波の舞の袖。朔旦冬至の叙位の儀。五節の舞姫の參の夜。辰の日の節會は。豊の明も面白や。月次神今食。内侍所の御神樂。あの雪も月日も積年。送迎ていく代共。此猶限ぬは我君の御代なりけり。

山

五天竺國震旦國。浪をへだてゝ百萬里。其地はいづくもしらねども。名を傳て聞山々は。鐵圍山。須彌山。王舍城の耆闍崛山。此觀世音の補陀落山。文殊のまします五臺山。悉達太子の修行せし。阿私仙人が檀特山。崑崙玄圃節風山。瀑布の泉は天台山。海中五の神山は。龍伯人につられて。蓬萊方丈瀛州の。三の山こそ殘けれ。秦皇帝のやどりしは。泰山五株の松の陰。漢の武帝の上しは。萬歳呼祟高山。李將軍が隴山。嚴子陵が富春山。淮陽山の一老。商路山の夏黄公。匡廬山の杏。羅浮山の橘。紫容山の白雲。銅梁山の翠黛。元和九年の秋八月。この上亞。白樂天のあそびして。玉頓山ぞゆかしき。我國秋津島には。東山山陰山陽道。國々の名山。山又山の青巖。天武天皇大友の皇子を恐て芳野山に入給。清和天皇は十善の寶位を振捨て。水の尾の山に住給ふ。前中書王の小倉山。惟喬の御子の小野の山。宇治山喜撰法師。花山の遍昭僧正。室の戸ふかき北山。この御門の西山。神社の勝て尊は。男山賀茂山稻荷山。春日熊野山。靈寺の殊きこゆるは。泊瀬山有由比叡山。書寫の山。弘法大師の入定は。紀伊國高野の山の奥。さても東の方にこそ。名高き山は聞なれ。相坂不

磯の中山。佐夜中山高足山。都良香が記をつくる。駿河の國の富士の山。在中將がふみ分し。宇津の山邊の蔦かえで。あしがら箱根の山こえて。道あるときの賢に。鎌倉山の朝ゆく。若御代こそ日出けれ。龜谷山巨福山。大倉葉の幕府山。家の匂も紅葉々も。いつも常磐の色ながら。嵐の聲も月影も。いく萬代を契らん。

草

閑もやさしきさいたづま。春緑と夏野の草の葉をしげみ。秋百草の色々。冬はさびしき枯葉にて。とり〴〵なる中にも。先は雪間の若菜卯杖つき。摘まほしきに春日野の。飛火の野守出て見よ。すぐろの薄角ぐめば。駒いばゆなりや粟津野に。ほどろと折は早蕨よ。とりたがへたるはすまふ草。あまのとの冬やこれならむ。御生所の葵のかづらと。五月に軒端に蓬あやめ草。五月雨すればしほたれぬ。いつかりほさん眞□(菰歟)草。小菅の笠のひまもがな。早苗を急ぐ御田や守。若苗とらんさをとめ。彼岡に草苅をのこしかなかりそ。有つゝも君がきまさん。御馬草まうけんにせんやな。奥山の岩本小菅ねふかめて。思ふ心よ君がため。色どり衣する榊草。うつろひぬるか何の間に。人の心は秋の露の。色々ごとにをけばこそ。千種もひもどけ。さいたる花を手にとりて。かきかぞふれば七種。萩のはな尾花葛花なでしこのはな。をみなへし藤ばかま槿。たゞ借初に結ぶちぎりかは。小野の草伏草枕。あだなる鴫の草ぐき。あの壁におふる草の名の。いつまで草のいつまでか。古屋の垣にしげらむ。瓢簞屢空ければ。此又げにさは。草顏淵が巷に滋かんなるものをな。何とかや忍には非ぬ草の名に。軒端にしげるわびしさ。かき絶ぬるか水莖の。岡邊のまくづ恨ても。良枯まさる冬草。

上下

上として哀むは。君たるおもひなり。下として仰ぐは。あの臣の臣たるみちとかや。かたじけなくもすべらぎは。雲上階下の御名にいます。天地もこれを司どり。あらゆる世のと(寧歟)態。皆上下の字に治まる。先は青陽の始に。此上の子の日を定て。若菜を奏する政。下の卯の日は。必卯杖を献ずとかや。或は上東上西門。上繧襖。上の戸上の御局。或は殿上の下侍。此掃部寮に仰て。垣下の座を敷なるは。臨時の祭の庭の儀。上達部のなみ立て。連ぬる袖の色々に。思々に手折は。かざしの花の下枝。晋の王羲之が垂露の點。書流しけん水茎の。上下の字に任つゝ。逆卷浪も立歸る。にごらぬ泉のながれは。げに有難かりしためし哉。齊の威王は。隣國の民に禮をなし。我座の上をあたへき。孟嘗君が砌には。三千の客を賞しつゝ。わが座を下にあらたむ。文集の調はひろけれども。上下の卷につゞまやかに。柿の本のまうち君を。上とも更に云難く。此赤人を下とも定ざりける。古今集と撰れ。千歌廿卷なれども。上下に是を分たる。内外の縑緗おほくは。此字に卷を名付也。光る源氏のわりなきは。若菜の上下なりけり。あはれをかけし小萩がもとに。露置そふる雲の上人。下人して問けるは。伊勢より須磨の便とか。家々に替て引は。ひらやなぐゐの上帶。人にしられで解なるは。契を結下帶。うはものすそ下重。袖のうは露の下ひもの。せきとめがたき涙を。上にはつゝむとすれども。下には通ふ思の色を。誰かはとがめざるべき。吹下嵐の山の麓の。其水上はとなせの瀧。筏を下す大井川。下は名に流たるや久方の。月の桂の川淀に。影さえわたる冬の夜。岩間傳にわき歸り。下行水もうへこす浪も。氷をくだく心地して。拂もあへぬあし鴨

の。上毛の霜は結べども。そのが青羽はつれなくて。つらゝの下にや朽ぬらん。入江の波の下草。抑上は三世の諸佛。下闡提に至まで。上求菩提の月の光。下又衆生に影をたる。されば兜率の雲の上を分。彌勒の下し阿輸舍國の。輸闍那講堂に御法をも。上古無着世親と。此護法戒賢論師より。下末代に傳る。如來は金剛座の上。あの菩提樹下を定て。正覺をとなへ給ふとか。

心

明王孝をもて代を治。功臣忠あれば國を守。忠孝ともに勇ある。心を前とするや。是周公孔子の敎ならむ。壁に納し箱の底。ふかき心は玉くしげ。明幕心を瑩つつ。百錬くもらぬ政。凡心を法として。心すなほに仕れば。賢き御影を仰つゝ。あまねき雨露の恩をうく。されば戴淵心をあらため。周處思を飜す。誠なる哉。彼是同心を直からしむ。綠竹紫藤の春の雨。黃葉梧桐の秋の露。皆節をしれる情有。誰か心なしといはむ。いはんや花に木傳鶯。水に住てふ蛙の聲も。其心を動す理あり。いざやさは心づからの色もみむ。移ろふ花をばよきてふけ。治れる御代の春風。その原や道に綾なく迷ひつゝ。心をしらぬはゝ木々に。さま〲なりしあらそひの。上品の上より。下れる品のしかずがに。此七夕の手づかひ賢き態までも。猶捨はてざるたぐひなれば。心を前とや撰けん。抑心を德として。其形見にくかりしかど。賢女のきこえ有しは。彼梁伯鸞が孟光。項羽が勇める兵。勢おほしといへども。陳平張良が。心の道にはせかれき。此山は關に心をかず。海又浪おさまる。かゝるのどけき御代なれば。心に愁ふる事もなし。戀ぞ心に任せねば。おり立田子の身づからと。かこたむかたも覺ぬ。よしさらば思はじ。よしなしとにかくに。心ひとつの心なれば。心のほかの

法の道か。筏の棹のさしてしも。げに彼岸をや求べき。諸德は意識のなす所也。心地觀經心地品。あの般若心經心月輪。心の眞を悟えてぞ。是等の御法もくもりなき。

顯物

佛陁の善巧方便に。あの慈悲の實を顯す。賢人の忠を顯すは。此國の政による。政陰ねば。明王の德をあらはる。詞をのぶる筆跡は。思の色を顯す。ぬぐ沓又かさなり。いもりのしるしも隱無は。あだなる契をあらはす。いかでか顯ざるべき。筑磨のなべの數やれ。螢をつゝむ袖の色。欵冬の花色衣のたもとにも。涙は顯れけるや。思ふ心も淺からず。淺綠の薄様の。いとしみふかき玉章の。あらはれ初ししとねの下。此柿の紅葉をながしけん。其水莖の行ゑも。火とりをかづけられしわざと。うつ蟬のもぬけの衣も。終には主をしりにき。衣の裏に顯しは。一乘無㝵の玉とかや。

酒

酒に名德の譽あり。しかも百藥の名を獻ず。萬年を延る翫び。皆情を催す中だちたり。花の春の木の本には。歸らむ家路も忘られ。紅葉の秋の林には。酒をあたゝめて日をくらす。南樓り翫の夜もすがら。光をさしそふる盃の。かたぶく空を猶したひ。香爐峯の雪の朝。簾をまきあげて。誰かは是を勸ざらむ。されば唐の太子のひん客も。あの酒功讃に德をのべ。晋の劉伯倫は又。常に一壺の酒を持し。戰場に望ても。勇める色にほこるとか。古德もおほくあひしき。賢人もさすが捨ざりき。いはんや眞實の砌には。なんぞ必しも人のすゝめを待んや。身づからこの邊によらむ。鸚鵡盃のたはぶれ。みな其興なつかし。酒の香ばしきのみならず。誰かは德にきせざらん。百數には酒殿。酒司の事態。酒を

たうべてとうたふなるは。催馬樂の哥の詞なり。樂には酒故酒清子皆舞曲は無れど。飲酒等勅を重ても。猶輙からずきこゆる。胡飲酒の曲ぞすぐれたる。孝行の實をあらはれしも。養老の瀧のいにしへ。いかなる酒のながれならん。げにありがたかりしためし哉。

遠玄

凌雲臺の春の霞。浪を凌て幽々たり。高樓の秋の月。霧へだてゝ瑤々たり。遠さは雲の外なれや。青鳥遙に音信て。曉の夢すさまじ。遠く往事を思へば又。あの帝女廟の春の竹。いくよの昔を重ぬらん。徐君が塚の秋の松。三尺の霜ふりんたり。波の上に幽なる。此漁舟の火の影は。旅泊の哀や增らん。杜句鶴が。監江纜に宿せし夜。山を過る驛路の鈴。ね覺の枕に遠ざかり。さこそはさびしかりけめ。山より山を隔るは。峯より嶺にかゝる雲。とをざと小野のみちとをみ。行かふ人や稀ならん。遠津浦はにやほのみゆる。あし分小船のさはりにほて。浪は高津の難波がた。行末遠き磯傳。跡ばやまだ我しらぬ。遠山鳥の遲櫻。青葉にまじる一枝は。春のかたみにのこりたり。思へどもいはての關の戸ざしきびしくつれ無は。遠ざかり行人心の。おくにあるてふみちのくの。忍の里ぞはるけき。

閑居

廬山の雨の夜の。草庵の窓の灯。かゝげ盡して懷舊の涙を催すは。夜を殘ね覺の曉。夢か夢にあらざるか。くらきよりくらきを厭てし。實の道のしるべは法の教にて。厭離は穢土の春の花。他成かや匂らん。欣求は淨土の秋の月。陰らぬ影をや照すらん。聞も浦山布ゆゝしき。とは流沙を隔り。月氏の外。葱嶺に近き。震旦の中にも勝ておぼゆるは。釋尊説化の耆闍崛。沙羅林の雙林。鹿野苑。三世覺母の般若の室。解脱

の風も涼しきは。清涼山の竹叢。終南山の月の光。悟眞寺の水にややどるらん。瑤池の正觀便を得て。さこそは心澄けめ。閑居は大原小野の里。芳野の奥小倉峯。喜撰が栖し宇治山に。優婆塞の宮の移ろひて。うき水鳥の音になきし。その面影の今更に。又立歸る哀は。川瀬の波にやそぼちけむ。人に知れぬ山陰の。岩根をもる苔の門。さすや岡部の夕づくひ。ほのかにみゆるすゝきの墻。しのに露ちる篠の庵。誰又爰にふし柴の。しば〱夜をも明さん。手向る花の花かづら(かつみイ)。且みる人も稀なれば。ひとり念誦のや聲澄て。例時散花梵音。例時散花梵音。九條の錫杖。深山をろし瀧の音。涙を催す便なり。空山にさけぶ猿の聲。梢のよぶこ鳥やな。口にふれ耳に遮る類。あはれをそふる住家也。

閑居釋教

狂言綺語のあやまりをも。漏さぬ御法は 在明の。月待程の手ずさみに。結し水の淺より。深きをいかでか徑くしらん。寂寞の夢の岩戸のしづけさに。倩思つゞくれば。衲衣のたもとを潤す露の。適かゝる身を受て。誰かはこゝろを瑩ざらん。繩床正にうけぬとも。空布眠事なかれ。兎に角に何かは歎く何か思ふ。此眞如外にあらざれば。身を捨ていづくを尋ん。空假の二の中なる道。圓頓圓□(宗歟)の花の色。初縁實相の匂ひをほどこす。春風心深。空寂の空晴て。のこれる雲の跡も無。煩惱眠はや覺て。後夜の成道に異ならず。曉ふかき震の。をとすみ増る峯の嵐。窓打雨のさめ〲と。老の涙を催すは。僧年ふりぬる念誦の聲也。峽の哀猿の三叫。栖ばすまるゝ心なれば、山陰ふかく結庵に。谷の岩かど踏ならし。閼伽汲水の絕ずのみ。流の末も濁なき。水上淸き法の水に。光を浮へて陰無。秋八月の月影。霧をかけしいにしへ。なを昨日の夢

の迷ならむ。抑さてもあらまほしく。浦山布嶺を證すとも。此獨處仙林阿練若。樹下石上の住
は。須陀□斯絕含[ナシイ]阿那含道阿羅漢果。菩薩の位家也。

續群書類從卷第五百五十五

遊戲部五

宴曲抄上

熊野參詣

八相成道の無爲の城。眞如の臺は廣けれど。和光同塵の月の影は。やどらぬ草葉やなかるらん。されば景行賢御代の事かとよ。南山の雲に跡を垂て。星を連ぬる瑞籬に。誠の心をみがきつゝ。誰かは歩をはこばざらん。或は五更に夢をさまし。夕陽に眠を除て。煩惱の垢をやすゝぐらむ。宵曉の去垢の水。所をいへば紀伊國や。此無漏の郡彥の山路の。雲の濤煙の浪を凌て。思立より白妙の。衣の袖を連つゝ。都を出道すがら。あの北に顧れば又大内山は霞つゝ。へだつる跡もとをざかり。淀の河舟さしもげに。急とすれど在明の。名殘はしゐて大江山に。かたぶく月やのこるらん。行末をはるかに美豆

の浪よする渚の院。此男山につゞける交野禁野の原。向の汀につのぐむ。芦の若葉を三嶋江や。難波も近成ぬらむ。九品津小坂部戸の王子。過行方にやすらへば。武庫の山風おろしきて。浦吹送音までも。是や高津の宮柱。建て舊にし跡ならん。西をはるかに望めば。夕日浪にうかびて。淡路の瀬戸の夕なぎに。蘆手にまがふ薄霞。繪嶋の磯の遠津浦。東に顧れば又。あの伽監甍を並て。寶塔雲にかゞやき。一輪光を殘つゝ。轉法輪所を顯して。法燈今に絶せず。並たてる安部野の松に。鶴鳴わたる磯傳。君千年は津守の。恨をのこす事もなく。まいれば願を滿願の。入江の松をあらふ浪の。白木綿かゝる瑞籬。神冷まさる住吉の。千木の片鐵立並。儛袖もおかしきは。王子々々の馴子舞。法施の聲ぞ尊。

南無日本第一大靈驗熊野參詣

山は峨々として雲そびけ。海は漫々として浪を漬す。麓を過てより登。御坂をこえてやすらへば。手向の王子の御注連縄。なをくりかへし願。渚につゞく和歌の浦の。干潟に並立る。芦邊の鶴も鳴わたり。汀にくだくる空貝。浪に沈める玉柏。玉津嶋の明神。玉藻の塵にまじはりて。吹上の濱の濱風も。神冷まさる音涼し。夏山のしげき軒端に薫橘。本の宗主や袖ふれし。さもなつかしき夕風。梓弓入狹の山の鏑坂。分くる山路はしげゝれど。流はかはらず在田川。川より遠や名草の濱。々路はるかにとをければ。ほのみの崎をやへだつらん。青柳の絲我の山のいとはやも。はこぶ歩の日を經ては。道もさすがにしられつゝ。湯淺の王子かうのせ。由良のみなとも程ちかく。紀路の遠山行廻。鹿の背の山名にし負。鹿のしからむ萩原。寶富安千年ふる。様にひかるゝ小松原。愛徳山をばよそに

見て。氷高の河の川岸の。岩打越浪よする。浦路にかゝれば慇を。垂る鹽屋の神なれや。此いなみ班鳩切目の山。悪もしげき梛の葉。王子々々の馴子舞。法施の聲ぞ尊。

南無日本第一大靈驗熊野參詣

秋の夜の曉深立こむる。切目の中山中々に。月にこゆればほの〴〵と。天の戸しらむ方見えて。横雲かゝる梢は。そも岩代の松やらん。千里の濱をかへりみて。皆へだてこし道とをみ。萬山行ば萬の罪きえて。今はや出立田の部の浦。砂地白〴〵とゆかば。白良の濱の月影。陰ぬ御代は秋津嶋の。神もさこそは照すらめ。萬呂の王子の神館。見すぐし難き稲葉峯。穂並もゆらとうちなびく。田頬を過て是や此。岩田の河の一の瀬。きゝのみわたりし流ならん。倩其水上の。深誓をおもへば。浮たる此身のさすらひて。無始の罪障は重とも。さも消やすき泡の。哀あひがたき道に入ば。岩こす浪の玉とちる。涙も共にあらそひて。幾瀬に袖をぬらすらん。山河の打漲て落瀧の尻。渡せる橋も頼母敷。彼岸につく心ちすれば。誰かはたのみをかけざらむ。王子々々の馴子舞。法施の聲ぞ尊。

南無日本第一大靈驗熊野參詣

山下に上を望ば。樹木枝をつらね。松柏緑陰しげく。道は巉巖折巓に通じて道上。登々ては暫休石籠の邊。行行ては崎又崎々たりとかや。此雲に埋む峯なれば。げに高原の末とをみ。疑敷岩根は大坂の。王子を過て行前も。はや近露にや成ぬらん。檜曾原しげり木の下。木枯さむく雪ちれば。花かとまがふ櫻。岩神湯の河はるばると。御輿をこえて傍傳。閑谷人希也。鳥の一聲。汀の氷。峯の雪。物ごとにさびしき色なれや。うれしきかなや仰見て。是ぞ發心の門ときけば。入よりいとゞにごりなく。心のうちの

水のみぞ。げに澄まさりて底清く。あらゆる罪も祓殿。御前の川は音無の。浪しづかなる流なればかや。社壇軒を並て。あの三所權現若王子。五體四所の玉楄。滿山の護法に至まで。或は久遠の如來も。常寂光の宮を出。或は闍提補處の菩薩。慈悲忍辱の姿を。しばらくかりにかくして。樣々の利益を施す。御正體の鏡は。塵をはらひて陰なく。珠簾玉を磯つゝ。薰香風にやかほるらん。向へる峰は備崎。行道もしられつゝ、惣持陀羅尼蘇多覽般若の聲耳に滿り。河船に法のしるべもうれしければ。いつか佛の御本へと。思ふ心を先立て。煩惱の浪をや分過。雲通苦路紫金瀨。取々なる道とかや。新宮は垂跡の始なり。飛鳥の宮神の藏。先此山に顯はれ。此巫女が皷も打懸。々をかくる木綿襷。佐野の濱松幾世經む。同緣の梢なれど。此二千石の號ありし。いかなる樣なりけむ。磯路を廻濱の宮。山路に向ふ坂本。那智の御山は安名尊。あの飛龍權現御座。苔路ならす岩がね。所々の靈窟。半天雲を穿て。三瀧浪を重。峯より落瀧下の例時懺法聲澄て。瀧水灘音さびし。かゝる流の淸ければ。かたじけなくも陰なき。淸和寬平花山よりの代々の聖代も此所に。あれ今に絕す御幸あれば。百王の末も瑞籬の。久しき神の御代なれば。我國やいつも榮ん。

南無飛龍權現千手千眼日本第一大靈驗

善光寺修行

信濃の木曾路。甲斐の白根。思を雲路にはてばしめ。旅客の名殘數行の淚。情を餞別の道に顯はす。穗屋の薄のほのかにも。伏屋に生る。箒木を。有とばかりもいつか見む。吹送由井の濱風音たてゝ。しきりによする浦浪を。なを顧常葉山。かはらぬ松の緣の。千年もとをき行末。分過秋の叢。小萱苅萱露ながら。澤邊の道を朝立

て。袖打拂唐衣。きつゝなれにしといひし人の。千飯たうべし古も。かゝりし井手の澤邊かとよ。小山田の里にきにけらし。過こし方をへだつれば。霞の關と今ぞしる。おもひきや我につれなき人をこひ。かゝ程袖をぬらすべしとは。久米河の逢瀨をたどる苦しさ。武藏野はかぎりもしらずはてもなし。千草の花の色々。うつろひやすき露の下に。よはるか虫の聲々。草の原より出月の。尾花が末に入までに。ほのかに殘晨明の。光も細き曉。尋ても見ばや堀難の。出難かりし瑞籬の。久跡や是ならん。あだながらむすぶ契の名殘をも。ふかくや思入間川。あゝ此里にいざ又とまらば。誰にか早敷妙の。枕ならべんとおもへども。婦にうはすのもりてしも。おつる涙のしがらみは。げに大藏に槻河の。流もはやく比企野が原。秋風はげし吹上の。梢もさびしくならぬ梨。打渡す早瀬に駒やなづむらん。たぎりておつる浪の荒河行過て。下にながるゝ見馴川。見なれぬ渡をたどるらし。朝市の里動まで立さはぐ。是やは兒玉玉鉾の。道行人に事とはん。者の武の弓影にさはぐ雉が岡。矢並にみゆる鏑河。今宵はさても山な越ぞ。いざ倉賀野にとゞまらん。夕陽西に廻て。嵐も寒衣澤。末野を過て指出や。豐岡かけて見わたせば。ふみとゞろかす亂橋の。しどろに逢坂鼻。[illegible]松井田にとまるらん。

南無日本第一大靈驗熊野參詣〔[illegible]〕

千早破天より下神なれば。御影を垂てこゝにすむ。池田と和泉の堺の里。々をもさてこそ守らめ。急雨の露もしのにちる。篠の松原千草の緑。雲居をわたる鶴が原。大山重木松。あのみ森。信田の杜もしげりあふ。小木の若葉の若ゆる渡瀨はしるき淺小河。流の末ははるゝと。海に出たる水の浦。興津濱邊のさ夜千鳥。吹

井の浦の浪の音。高しの濱安濃木が浦に。鹽木積なる海人の住。磯間のみるめぞゆかしき。日根の松原や是ならん。梢にかゝる天雲に。有と是をばえもしらぬ。檉の井冬戸駒並て。驛にしばしやすらはん。長岡信建も過ぬれば。あゆ彼方是方の峯つゞき。雲のいくえぞよそに見へし。葛城山の山中　山口の王子に來にけらし。妹脊の中をながれくる。吉野の河の川村。登ば苦しき態坂。下てはるけき道の末の。達にしげる栢原に。つゞける木陰の松本　神も我をや松が枝の。梢に掛藤代。手向る幣も取々に。王子々々の馴子舞。法施の聲ぞ尊。

同次

野邊より野邊を顧て。野外の煙片々たり。山より山に遷來て。重山はるかによぢ上。雲雀は翅を雲にかくし。哀猿は號で霧にむせぶ。苔踏ならす副傳。向へる尾上の盤折。椎柴槮柴椅柴に。枝さしかはす白檉。かぶろなる樹するどなる。槇の立枯陰さびし。岩間に漲る瀧の音巖洞に響松嵐。取々なる哀は。山路の旅の秋の暮。青葉こそ山のしげみの木陰なれ。いざ立よりてかざしとらむ。一急雨のやすらひに。まだ染やらぬ紅葉ばの。薄紅の臼井山。おもふどちは道行ぶりもうれしくて。いかでわかれむ離山の。其名もつらし過なばや。雲間にしるき明方の。淺間の煙にまがふは。高根にのこる横雲の。跡よりしらむ篠の目。日かげのどけく水葱の松原。遙々とへだつる方や葛類の。里より遠の程ならむ。深きはしらず櫻井に。花の白浪散かゝり。霞める空そおぼつかなき。望月の駒引かくる布引の。山の楚変にみゆるは。海野白鳥鷺島の。川にあらねども。岩下かはる落合や。淵は瀬に成たぐひならん。富士の根の姿に似たるか鹽尻。赤池坂木柏崎。同雲居の月なれど。何

の里もかくばかり。よも佐良科とみゆるは。姨捨山の秋の夜。筑摩篠の井西河。さま〳〵の渡を越過て。既に彼所に詣つゝ。倩思つゞくれば。かすかに傳聞。西天月氏の古。信心の窓を照しては。三尊光を並つゝ。紫磨金の尊容。東土日城の今。眼前結縁絶ずして。利益を普施す。かたじけなくも十萬億刹の堺を過。妙覺果滿の臺を出で。粟散邊地を尚捨ず。濁世の塵にまじはる。故有哉や本願の。あゝ難化難度の誓ならん。

道

道の道たるは。常の道にはあらざれば。跡なき〔名脱歟〕太山を踏初て。尋やせまし花櫻。名のたるべきも。此常の名にはあらざれば。明行月のほのかにも。待れてぞ名謁郭公。孝悌仁義禮忠信。分てもなぞやわづらはしく。是を一に惣成て。要道と只にやすくいはん。三皇の昔も昔なれば。小吳の道をばしらじ。はや五帝のとをきも遠からじ。大同の門をや尋まし。身より憂世にさすらへども。心を虛無に任つゝ。むなしき空を詠れば。たゞ秋風の過る聲に。妙なる響のある故も。棗篇のためしなるべし。上德の濁は誰かしらん。夕立過る谷の水。大白のけがれはさもあらばあれ。村雲かゝる秋の月。いへば執着恐あり。いはねば無明に落ぬべし。すべて此世の有樣は。思さだめん方もなし。たのしむ時は樂もあり。愁ふる時は苦とも成。野原に馬を失て。いと愁ざりし老翁。離の蝶を夢にみて。こはうつゝとおもひし眞人。紕れる繩とけやすく。昨日の山に今日の海。深もおもひしづまざれ。浪路のごとく浮る世に。たかくもおもひ登ざれ。山路は苦しき坂なれば。あだに結ぶ蓬が庭の朝露の。宿をいつも捨やらで。此名利貪心たえず。槙立山の夕日にも。子をおもふ闇路は晴

やらず。いはんや陰陽の道ぞげに。哀といふもおろかなる。或はなく音を忍わび。涙ゆるさぬ袖もあり。或は別に又寝して。かたみをしたふ夢もあり。涙も我をすつるやらん。おさへんとすればわざともる。夢路も我をまよへとて。さむる枕は跡もなし。戀しやなこひし〱のとの葉は。我言種にいひなれて。馴よとおもふ面影の。などかくよそに成ぬらん。やらこはなに事の様ぞとよ。此世縁俗念ふつと捨ば。散亂麁動も止ぬべし。世にたゞしき聲なければ。あの是にもあれ非にもあれ。耳に悦を聲と聞。物に實の色なければ。邪ともいへ正ともいへ。目に悦を色とみて。中正通知の身とならば。酔ても醒ても聖ならむ。此事金玉にまされり。酔吟先生が心なり。江南の屈平よしなしや。林下の劉伶たより有。人間の榮利をば。泥塵の如輕して。枕の上の仙と成。無彊の郷に入なんぞ。賢道とは云つべき。

十六

人に定れる盛有。十六を以て盛年とす。物に必故有。數十六に德多し。栗散廣しといへども。先は十六の大國。々又無量にきこゆれど。天照日次を受傳。古ぬる磯の神代より。天逆鉾を立初し。我國は賢境なれば。人代十六の皇應神の御宇の榮より。色々の寶を送つゝ。百濟經典を奉。芳野の國栖を奏せしも。此御時にはじまる。其より又十六世。用明の陰らぬ御代かとよ。厩戸の王子世に出て。終に法燈をかゝげ給ふ。則逆臣を平しも。十六歳の時なりき。累代の善政は。折にふれ時にしたがふ。踏歌は正月の十六日。霰走の節會は。和暖を奏る政。朱雀は明主の譽有。御在位十六年の間。様々の政德を施す。御手洗河の瑞籬に。鳳輦光をばかゞやかし。轅を北に廻しめ。又男山の峯には。大宮人

の頭挿折。歩を南に運つゝ、雪を廻す花の袂。山藍もて摺れる衣の色、並立る袖もうちみだるゝ、求子駿河舞の其品、勝に故々敷ぞおぼゆる。東遊の追風、[illegible]々おさまれる御代なれば、なびかぬ草木やなかりけん。十六拍子の舞曲は。三臺鹽閑亂旋。此陵王の半帖よりの亂拍子、取々なる曲也。源氏のわりなき節には。十六乙女の巻とかや。古世の友よはひ經て、神冷まさる天津袖豐の明の面影を、いつかは思わすれん。紅顏の粧にほひやかに。花の容貌妙なりし。上陽人が古も、參し時は十六。三千の鍾愛の其中に。十六人を撰て。猶又勝たりしは。光明夫人摩尼仙女。二人の媚を調て。三十二相ときこえしも。各一十六かとよ。抑遺教流布は皆。十六羅漢の擁護なり。大通智勝の往年。二八の王子の末なりし、第十六の王子も。今の釋迦牟尼如來是也、壽量は第十六品、如來の久遠を演らる。般若の十六善神は。文殊の利劒いちはやく。覺母の梵筐を圍遶す。彼土の相を修するも。十六の觀蜜にしくはなく。遠離不善の願も又。第十六に當とか。十六の章段を連ては。浮土の宗旨を顯はす、末代濁世の根機には、是又要路とこそきけ。十六丈の廬遮那佛。我朝第一の大伽藍。外朝にも並なし、迷盧は十六萬由旬。十六丈の寶塔も。皆故あなる物をな。かたじけなくぞおぼゆる。一字頂輪王の三摩地後十六生。菩薩の十六分の種姓は。正覺の月圓に。殘れる隈はなけれども。蜜教の嶺はるかなれば。顯乘の雲をやへだつらむ。

雙六

夫雙六の基は。遠西天の古より。近く東土の今に至、傳て絕ざる術、様々の品を顯はす、穆王も是を興じつゝ。井公と〔谷口〕たはぶれ給ひき。されば孟嘗君は。はかりて各を酬理。犯を幸喩とす。

是を陰陽に當。暦の面をきざみては。此十二廻に象。かるが故に則其名を雙六とよぶとかや。三十石を並ては。一月の一廻。十五の石を分立。實に又十二の目を定。十二時に擬して行度有。簡の中をば夜とし。外に出ては晝とす。倩其風を思とけば。勝負を互にあらそふ様。世のわたらひの端も皆。浮も沈もとにかくに。あざなはれる纏の一筋に。思さだめん方ぞなき。凡此道に名を得たりしは。殷の目偶と漢の蘇師慶子。栢の國醫博士。此宴賀道盧豐藤丸。此等は雲煙の浪の外。霞をへだてし古なり。我朝の近比道々に長ぜる人を得給。一條の院の御宇とかや。主殿寮に侍し丹治の比手勝は。双六の擧世に勝。名を又異朝におよぼし。藝を他人に感ぜしむ。時は南呂無射かとよ。此正に長夜もすがら。獨明月にうそぶき。大内山に木隱。彼方此方にさすらひて。右近の馬庭を行過。緣の松原にたゝずむに。松風梢に冷敷。蟲の音數にしげくして。五更に夜闌なりしに。松の上に聲有て。汝が好長ずる道を感じて。昔の殷の目偶。今こゝに來れり。恐るゝ事なかるべし。雌雄を決せんと望しかば。比手勝更に恐ず。則勝負に向て。はるかに時をうつすまで。數を競て良久し。夜既に明なんとせしかば。日比の執心是なりと。聚にかたらひを成つゝ。紺碧瑠璃星角の。調度をかたみとおぼしくて。天の戸の明行空の横雲に。入にし事ぞ不思議なる。中にもやさしくおぼゆるは。光源氏の方違に。其かとばかりの垣間見に。湯桁の數もたど〳〵しからず。三十廿四十とかずへし碁の。うちある硯も故々敷。いづ方と思分ざりし。碁心の透々敷。移菊の紫の。ゆかりの色も淺からず。御碁の相手に召て。一枝手折し薫の。思心や故ありけん、近江の君の双六ぞ。最太なるとの葉の。様殊なりし

態と聞。抑博奕品々に。謀計術を究つゝ。あの語條言を盡せり。五四尙切目振返し。相見立入品態。四三小切目の。一六難の異流。叶子平賽の揆馴し。要筒金賽金頭。定筒入破探居。乞出透筒袖隱。竹藤丞が手仕。負博のおかしきは。集居ての言種には。各利賽を取々に。我先前にと爭數の下に。敷つめられては古鷲の。そも鞘よはげにみゆれば。九條筵の打ぼうけ。差逢をや構まし。靈佛靈社は多けれど。象王權現の氏子とや。三たけのこひが博堂には。鎮守に祝道祖神。勝手宮をや崇らん。住持供僧借住は。此五四多法師彌多房。三明房の筑紫聖。時所に歩を運人。誰かは珍財抛ざらん。抛ても〳〵よしなしや。負ては積借錢の。子はいかにして遊やらむ。

宴曲抄中

郢律講物禮

敬禮妙音諸聖衆。哀愍道場結縁者。願此功徳を無邊にして。普からんとなり。凡郢律様々に。絲竹の調を調へ。音曲殊更に濃に。眞俗二諦を兼とかや。さればにや外に出ては。清濁を分て國を治。ある政を象る。内には父をのつから塵得道の境なれば。聲字實相の。其理に叶り。先は青陽の名に負。春の春庭樂や。柳花苑は雙調。霞る春の曙に。のどけき調ぞ勝たる。桃李花の粧。花芬馥の氣を含は。此風香調の曲とかや。石河竹河鈴香川。流れてはやき走井に。篠浪越音

涼しき時しもあれや秋の夕。身にしむ聲を吹立る。秋風樂の笛の音。春はさながら綾羅と。見えし草花も庭に生る。淨蒼色付冬枯のさびしき物は東屋に。片敷床の席田。閨野の小菅薦枕。内寺におこなふ道は安名尊。蘭蘇神に手向やせをし伴かえ。古小柳の開引。とさむからきんとうたひても。なを又さかふる我門。維藝風俗の郢曲は。其宗々に翫つゝ。乙ゝ乗の花鮮にいく春秋を重らん。これ皆音詠の類也。妓樂の薩埵を友とせん。一色一香のかざりは。中道の妙理に答つゝ。花は菩提常樂。互に匂をほどこし。香は香雲と立上り。供養を藩に。梵釋四禪にをくるとか。音曲共に玄とあり。證明知見垂給へ。

三嶋詣

和光同塵は利物の謀。法性の海とこしなへに。不變の波を湛。垂跡は化儀に隨て。方便の舟を浮つゝ。彼に信敬の實依。夫三嶋明神は。かたじけなくも磯の上。ふるの神代の天にしては。第六代惶根の尊の御子也。化儀を當所に弘。利益を是所に待しむ。豫州と當國の本末も。時の宜にや任せん。されば或は海中に。棲出路境の奇瑞をなし。或は夢の告ありて。本地醫王の誓約。十二大願を顯す。三島の宮の古は。伊豆嶋根に跡を垂。文武の賢き御代には。動權の貴男に託して。當國賀茂の郡に遷座す。其より以來あまつめに聖武の御宇には。天平聖暦の昔かとよ。叢祠を府中に遷され。粉楡の景を仰しより。神德年々に威光を副。感應益々審なり。然ては社壇甍を並て。金玉の御簾鮮に。朱丹軒に輝き御正體の聖容は。星を連て赫奕たり。廻れる廊廈の宮柱。太敷立て彌榮。功德池の浪をたゝへては。苦空無我の響あり。水鳥樹林交て。常樂我淨の風冷。七寶の橋列ては。金繩界道に異ず。歩を運

人も皆。行通道の萬度。千度を重ても猶。進心を陰なく。見目は賢き調御の師。三世の佛の母の。子を思ふ道にかはらねば。我等に一子の慈悲を垂。阿遮一睨の眸。吠尸羅増福の掌。彼は四魔を退。是は寶塔を捧つゝ。飯酒の王子と號せらる。十種の願王文殊師利。定恵の二を分ては。大楠小楠の陰陽。八幡福譜の内には。十念不捨の憑あり。御社戸の六體は。六觀音の化現にて。普門の誓にこたへつゝ。各扉に立給。第二は后妃の昵なつかしく。十一面の笑を含。第三は王子の嚴。六道能化の姿にて。忍辱の世に出つゝ。衆苦に闡提の身を任す。此等の結縁遠近。閣に思つゞくれば。此般若獨持の法施には。内證の月朗に。外用の雲をも拂らん。夜の嵐に吹立る。龍吟に響笛の音。漏更に雪を回す。霓裳羽衣の袂に。霜を重て白妙の。神さび増三嶋木綿。凡勝地をト給ふ。神慮も争か淺からん。後をかへりみれば。あの北嶺高く聳て。富士の明神に鴫澤の。深き契や故あらん。其名も賀茂の御手洗と。おなじ流は隔離い。久き代々の様も。山あたる物をな。西を遥に望ば。田籠の浦波に。浮嶋が原の礒傳も。道ある御代はのどかにて。浪おさまれる船寄の。汀の松も廣擴て。榮る宿は高名祖の。神の恵の普さや。法男體性の響ならん。抑備思解ば。大通智勝のその昔。東方阿閦と開ゆるも。此今の驛王普道かとよ。十六沙彌は則。十六王子と顯れ。互に行化を助けつゝ。共に主伴の昵あり。二乗化城の妙文。誰かは是を仰ざらん。

理世道

夫天命を全するは。必明王の徳に應。理世のすなをなるは。是忠臣の諫に依とかや。上下を治て。下又上に叶つゝ。浪能船を浮れば。舩叫のどかにて。其尊に歸せしむ。海は廣き恵遥かなくや。深き哀人を分ず。されば明主としては此

賜を與つゝ。子を賄て父母に賜。徭役の大燒事。々繁からずはかりては。國を治暖く。蝗をなし政。自然にあり立て。くろに進る事農。農業を天下に勸つゝ。民を撫るはかりごと。かたじけなくぞ覺る。凡仁を施て。譽を求ざるは。是階下の好する所也。才藝を專に賞するは。功臣の嘗道也。秦の二世皇帝。梁の武帝の古の其體を痛すべし。二世は深宮に居しつゝ。此亥言からず。武帝は朱異に廻て。聞事を四方に告ざれば。愁を外に殘せりき。奈ぞ必しも獨を用るは。明ならざる君たり。しかれば毛詩には。仙人云る事あり。詢て賤きに聞べしと。敎る道を忘ざれ。廣く伺て聽ざらむ爲也。豈一日の萬機を。一身の慮に定ん。しかじ普く賢良の。臣に任て身づから。是をはからずとも。法令空からんや。太宗の至て重くせしは。魏徵房玄齡二人の臣。彼は天下を靜つゝ。あの政を諫き。是は萬度命を捨。

一たび生ずる代に逢り。須く賢を學ては。愚を伴ことなかれ。一宮の小情に守て。萬人の費を成ことなく。道を直くして私を願す。諫の言を恐ざれ。賞の疑しきをば。二度問事なかれ。罪の定らば。重不審かれとなり。郊異朝の古は。波を凌て傳聞。霞をへだて。遠なり。我朝の天照神代より。神武綏靖かたじけなく。代々の明君時運。代々又今にかきなれど。流久き瑞籬の濁ぬ末を受傳。累代の政は天の下にくもりなく。野澤の草のしげゝれば。其ことの葉も及れず。八方の月のあきらかに。たれかは是をしらざらん。備州禪師は。天下靜謐にや。物を利する事皆自性法身の内證よりや。應化寺流の外用の。慈悲眞實の姿なれば。或は君と成。或は臣を掌どり。眞俗二を分つゝ。心王心數の座を出。百姓撫民の柴の樞。賤き土生の小屋までも。漏ず賢き詔。紫泥の尊きを仰つゝ。太平の德に誇なり。

夙夜忠

道を傳家を起。名を後の代にとゞむるは。此君に仕る忠臣。々々の譽を顯すは。夙夜の忠を重つゝ賢き恵を仰也。凡夙夜に隙なく。風に髪梳雨に湯するしてや。曉に出星に入。履壁に背る燈を挑といへども。閨の床を暖ず。閑に枕を傾ず宮司の勤に忙しく。三度食を納ず。三度髪を上るは。功臣の忠勤に依てなり。朝政にぞ見えつゝ。朝に雨露の恩を受。夕に御膳備ては。霜雪を戴て。夙夜の功や積らん。されば上は三公輔佐の雲の上。景靡月の都より。百の務とく/\く。其品々に隨て。緋も綠も色/\に。衣の袖を連つゝ。仕る道に物うからず。掃部寮の莚道。此衛士の燒火の庭もせに。大宮人の朝清日。靡に交態までも夙夜の忠にや備らん。光源氏に仕し惟光義清は。霞の内のかくれ家にも。立をくるゝ事なく。霧の籬の隔なく。里をもわかず隨て。花の宴紅葉の賀。あの春の遊秋の興。夕顔の宿。花散里。六條邉の通路。須磨明石の浦めしかりし旅寢の床。礒間傳や彼岸に。年經海人の栖家までも。みるめの草の假にても。こゝろに違節もなし。舊臣の勝て哀なりし様しの。衣の色の深さは。延光の大納言也。顯基の中納言。彼は天暦の古を忍つゝ。近臣の昵なつかしく。菩提の道の縁と成。是は夙夜の昔の面影を。故宮の月に思出て。煩の心を傷め。淺茅が露の玉山良ゝ忘るゝ隙ぞなかりける。是皆夙に與夜半に寢ざりし。懐舊の思や切なりけん。

文武

學は麟角を抽て。此文章を味ふ。武は虎牙に連りて。又正に武勇を拉き。文は民を撫る謀。武は國を治る轡也。されば或は二八の文士を撰れ。或は四七の武將を定置。守文草創の二の道を分し。魏徵玄齡が諍。いづれも進退ず。呂尚周文

の車を許れし賢才。拘らざる故とかや。楚の軍戦に。あの革車に乘し忠臣。思慮の武きを顯す。蘇武は是麒麟閣の兵。田邊のおくの露の命。稲葉のすゑにかゝりて。多の秋を送し愁書を。鴈の翅に付。野相公は即仁明の朝に仕き。松嵐冷き月の夜。悲歎を藁草のとばに載。彼は武功ありしかば塞垣に因れ。是は文藝巧なれば勅答に預る。蓮府。僕射。丞相は文を掌て。律令を正。翰墨を前として君を助る勞深く。幕下。都護。大理は各武に象りて。兵仗牛車の輦。帯劒を給て。あの國を守る功厚し。漢家の四皓にはぢざるは。我朝の四納言とかや。才を雲上に施し。翼を都督に處ぜしむ。樊噲豫譲に及は。源平兩家の〔良將〕軍將よりや。田村保呂に至まて。古今殊なりといへども。忠を天朝に盡して。名を後の代にとゞむるは。たゞ此道の譽也。凡北闕彌安全に。東關益治て。武威重く文道すなをなりければ。四夷又起事なく。此三韓早く隨はん。

朋友

夫與善の人に作て。芝蘭の室に交。與惡の友を厭て。鮑魚の肆に入べからず。子猷は雪月にあくがれて。遙に安道を尋き。劉楨は清風に。古座なき事をや恨けん。伯牙は鍾子なかりしかばや。永琴の緒を斷し。樂天は久遺文に。金玉の聲を増とかや。立まよふ夕の雲の絶まにも。〔別號〕烈を亂鴈がね。鏡に向山鳥の。影をや其と鳴つらん。友とする人のすくなき。東の路の宇津の山。山腰雲晴してや猿の叫もなく。洞庭嵐凉して。此鳥の聲幽なり。葛も鷄冠木も色に染。檜垣眞木の葉露滋し。夢にも人のと言傳しも。都の友の行あひ。彼常陸の宮の栖家を。里わかぬ月に遷來て。入方見せぬと疑しも。深き情の友なれや。凡君臣合體のことはり。夫婦同穴の契も。皆是ともになずらふ。中にも梁伯鸞が。此霸陵

山におくれざりける。孟光多年の遊を忘ざれと。契し儲君が製作。影さゑ見ゆる山の井。此すみはてぬ飛鳥井。深き思の程は猶。此世一の酬かは。淨徳夫人は即。妙莊嚴王を諌て。つゐに善趣におもむかしむ。無着世親の其昵なつかしく。名を千古に飛しめ。春の蘭あきの菊。匂を善く施して。互に遷化を兜率の雲に顯し。滿月の光圓也。彼是ともに勸て。得道に向謀。是皆朋友の徳なれや。

山寺

千株の松の下には。青嵐窓冷じく。雙峯の軒の間には。白雲降をトたり。晩鐘霜に響聲。曉月露に寒色。聞に哀を催し。見るに心を傷しむ。抑天智の草創は。園城の舊院。百年餘の經行。その名を三井の水にやながすらん。桓武の建立は。あの叡山の靈竃。七社の垂迹新に。其威を四明に及す。一乘圓宗の英。吾建杣にかうばしく。一心三觀の月の影。比良の高根にかゞやく。麓を遙に望ば。白浪湖水に連り。後を顧ればまた。紅葉巖上に色をそふ。古松は瓦のひまをかくし。老杉は門をふさげり。霜深庭の叢重れたゞ。うき世に還跡もなく。霞行檜原を分入泊瀬山。人の心をしらねども。花は貞にさきけるは。泊瀬にし宿の梅。昔に聞其名も高き高野山。深御室の遙〳〵と。星霜舊き松の戸の。さしていくよの曉に。出べき光を契るらん。堂塔甍を並て。佛像鳥瑟の影を副。坊舎窓を並て。經論玉章の文を磨。さても承和の比かとよ。楢の雪も寒き夜。靈鳥來て鳴しはいかなる昔なりけん。延喜の朝には即御衣を送給しに。樣々の瑞相をあらはす。

松竹

緑松は貞木の號有て。霜の後に露。素竹は錯午の風吹て。此夏の天に聲あり。されば忠臣の道

をも。此色に喩たり。鳴鳳の管にもあの。其聲をや裴ふらん。さくらを分て。樹とはせぬ鶯も。軒端の竹臥馴。三月の空のくれつかた。花は殘ぬ嵐に。散ぬ翠の松の葉。風の竹に生夜の。あの窓の間の假寢。松の響に通は。班女が夜の琴の音。陵園妾が松の門。晋の七賢が竹林。臨時の祭の試樂に。竹をかざしし始も。よし有てぞやおぼゆる。洞戸に鳥の歸る時や。竹の煙たち增。除日の中の夜半の天。松明の炭や積らん。松の尾の明神は。王城ちかく鎭座し。竹生嶋の天章は。湖邊遙にあとをたる。松の柱竹の垣。疎なりし家居は。海面遠き山里。さこそは冷しかりけめ。

名取河戀

云ば緣に。いはねば胸にさはがるゝ。心の程を堰返し。つゝむとすれどおもふには。忍ぶるとぞ負にける。さもあらばあれ惜からず。なにぞは露のあだ物よ。かへてもかへて捨ぬべし。たへてしなくば中々に。人をも身をもとばかりに。うれふる隙こそ安からね。涙に□てとも消もせず。胸の邊に立煙。靡き初にし一方に。亂終ぬれば陸奥の。しのぶもぢ摺いかゞせん。湘浦に竹斑か也。涙に染し色ながら。鼓瑟の跡露深し。秦臺に鳳去ては。此廻のかへらぬ道なれば。吹簫の地には月空。行衛もしらず絶もなし。あふを限の戀路なれば。迷心の絶ぞうき。夕殿に螢亂飛。思の炎燒まさり。空窓に燈殘ども。なげく命は甲斐ぞなき。玉殿桧花觀。あの時移こと去ぬれども。三十六宮の秋の月。我身一の袖にのみ。ちりしまゝなる涙さへ。今は化なる記念かな。佐野の船橋懸てだに思はじ。よしなしとても又さも。文惡なる名取川。瀨々の埋木あらはれば。其も我身の心から。いかにせんとか浦みけん。

曉別

逢に別の有世とは。知がほにしてしらざりけるこそはかなけれ。曉思はて何か其。あひ見る夢を憑けん。病鵲の寡鳥。稀に逢夜を驚す。情もしらぬ狂鷄の。未明ぬに別を催す。又何とだにもなきなかの。むつ語名殘おほかるに。逢人柄のつらさなれば。秋の夜短く明なんとす。程は雲井に別とも。空行月のあふせまで。忘なよ契は在明の。つれなくみえし曉。後會其期遙にして。袂を鴻臚の露にぬらし。名殘をしたふ涙さへ。とゞまらぬ今朝の面影。一夜の夢の浮橋。渡絶る峯の横雲。其さへたえ〴〵立別て。鷄籠の山ぞあけぬめる。おしからぬ命に更だに。とめん方なき衣〴〵の。其袖のなかにや積るらん。もろき涙もなく〳〵歸る道芝の。露をたぐひに託ても。又夕暮や憑まし。

懐舊

閑に曉の夢に語へば。懐舊の露の手枕に。結や老の涙の。古にし昔ぞ戀敷。深更に殘る燈の。ほのかに往事をかぞふれば。霜をかさねて消なんとす。此秋の閨冷。朝に異代の昔を望。家に忠臣の跡をしたふ。是皆懐舊の思あり。されば詩篇に心を演や。和歌に詞を頤す。王子晉が珠の床。空き洞に留り。羊太傅が碑の文。主なき宿に殘れり。吳竹の斑なりしは。舜したひし。餘波の涙なりけり。古宅の梅をさそひしは。昌泰の昔の詞なり。親故は鶴を翅し。菅家は都を出ずして。鳳凰池上の月におくられしも。いまだ關を越ざるに。いつしか古鄕をや忍けん。梓弓引野のつゞらくりかへし。猶古をしたひつゝ。春を忘ぬ記念は。舊野に櫻花。昔の波も戀しく郭公。鳴音よいざゝは我に借ん。今までも心ながきは秋の夜の。月の光にさそはれて。思賜の御衣と詠じつゝ。詠明石の浦傳。波　立居に古鄕の。面影いかにうかびけん。分て又昔をしの

ぶ籠の。其二首のなかにも。思出る事おほく。秋に成行客の化粧。山形懸たる家居の。門田の稲のいねがてに。ひたひきならすをとまでも。見し東路の心ちして。時を分ぬ夕の露。さてそは袖に亂けめ。小野山や深き浦見の雪の朝。時分て聞し情に。家主も更に昔を戀。客久懐舊の切なる事を勸めき。さても文武の御宇かとよ。遠く唐のや文の道を忍つゝ。孔子の報恩に日を點じて。釋奠を大學寮に始。近く建久の治天には。日本歌の情をすてざる餘。柿の本の影供を和歌所に行はる。抑法華説期の砌。燃燈佛の古を。今の瑞相にしらせしも。懐舊の誠を顯はす。

宴曲抄下

内外

佇むべき稱あり。憚べき品あり。是を兼たるは内外の徳。眞俗二を守。陰陽皆おさまる。一も闕ては道をなさず。函蓋則かなへり。されば先は三聖貫且に出つゝ。外典の風塵を拂ふ。如來月氏に道を得て。内典の月くもりなし。九十五種を外にさけ。一乘眞實の内に歸す。我朝の起を思にも。天照神の古。五十鈴の川上を卜つゝ、あゝ今も絶ず栖給。長誓の玉體惠は替ぬ瑞籬の。久堅の宮造も。内宮外宮と祝れ。法身和光垂跡の。内證外用を顯す。遙に傳聞。兜率の雲の上。無著平等の花の園。共に快樂の境なれど。内院外院の位あり。法華の妙文の尊きは。此内秘菩薩の行のみかは。外現是聲聞と説る。火宅

の内の導引。在門外立大白牛車のはかりごと。とり〲にぞ覺る。さても殆内五位の始より。外に養育のあはれみふかき。内外の父母の恩德。喩ていはん方ぞなき。大内にとりても。内侍所は温明殿。内教房は雅樂所。宮内省。内藏寮。内記の戸を出ては。そも敷政門をや入らむ。外記の廳の有樣。由ある物をな。内辨の上卿の。二なくみゆるよそをひ。外辨の上達部は鳥曹司にやすらふ。又外朝外都は遠き境。雲霞の外也。雲外の郭公。野外の鹿の遠聲。いくへの霧の外ならむ。雲のいづくを過ぬらん。光源氏の大將の。都の外の浦傳。年月次の程もなく。數の外にくはゝりて。いつしか參内ありしも。あのいかに珍かりけむ。誰かは思の外といはん。識蓋の卷かとよ。内大臣ときこえし後。牛車を許され給しぞ。とはりとはや覺る。内親王の始は仁子。嵯峨の御女。長爪梵士舍利弗。本是外道の友とかや。我等理世安樂の。のどけき御代にあへるかな。内には柔和の室深。外かは五常をみだしざる。内外の德用普くして。仁たり主たる慈。是をそむく族は。天命の外にやしりぞかん。日出かりし樣は。上東門院の御入内。外戚の重臣輕からず。博陸三公の傅き。前には玉の轡を並。後には花の轅を廻す。車は錦の紐嚴。遣つどけゝむもてなし。汗衫の袖もなよびかに。外に見えたる出衣の。かさなる妻の色々。八重さく花のいとこよなく。梅花の方の染深も。さてそは世にをなりけめ。外祖は戚里の臣として。内覽の宣旨を下れしも。長德の賞き恵なり。

筆徳

夫物を賞るは德にあり。此德は名に顯る。鷄距を馬蹄に交ては。筆を馳て志を顯す。普く文の園に遊て。あの春の花匂を増。廣くと葉の林をかざりて。此秋の菓色を益。是皆筆跡を本と

して。其徳一にあらずとか。されば遠く月氏の雲を隔。多羅葉の梵本。震旦の霞の底には。蒼頡が漢字を書傳。近く日域の霜を重ねし古。天の浮橋のとの葉を。さゝわたりし意までも。さながら朽せぬ筆の跡。書死風死ざる道。家々の風にや傳らん。かたじけなくぞ覺る。優婆塞とする。逢難き御法の教文。一乗妙典の五種法師の中にも。此書寫の功徳猶勝。木を割石の面に墨を染。苦海の群類を救なるも。魚網に寫す筆の跡。哀なりし様かとよ。網代木の浮瀬の波に捨し身の。消もはてなで泡の。流てつれなく年やへにけん。さても猶世にありとも人にしられねば。小野の山里尋ても。誰かは問む古はてし。身をしる雨のおやみなく。昔を忍なぐさめとや。たゞさばかりの手習の。筆の旨に書築し。涙や晴間もなかりけむ。凡好色優人のなからひ。あの妻を重ぬる衣々の。別をしたふ朝に。薄墨に書置たる水莖の。ねくたれ髪の手枕に。見るもうれしき玉章。此荒忠の白眞弓。強き心を引更て。引ば本末よりくるはかりのとはりも。只一筆の跡にこそ。情の色もしられけれ。管を握門座。筆を含山水。龍池にひたす墨の色。碧丹をまじへて紅也。形は石岩を帶て圓なるも。是皆筆をもとゝす。

狭衣袖

そよや狭衣の袖の涙の。雨と古にし昔の。様々なりし事態を。つゝむとすれどいざやさは。誰かは世にはもらしけん。少年の春の始より。此首夏の夏に遷さて。蟬翼の薄き。袂に結菖蒲草の。ねにのみなかれて浮沈。かゝる戀路と人はしらじ。太山の里のさびしさは。梓寛の跡より外の通路も。希なる秋の氣色に。物思ひの花のみさきまさりて。汀がくれの冬草の。枯行哀に至るまで。とり〳〵なる中にも。いかにせんい

はぬ色なる八重款冬の一枝を。手折し心をしらせそめて。へだてなかりし古も。今更いかゞおぼしけん。あり さもこそあれ。いかでか色にも感ざらん。節に付たる花紅葉。霜雪雨にそぼちても。えならぬ情のこと草に。いなにはあらず稲淵の。瀧津心ぞ猛まさる。抑百城の雪の上まですみのぼる。しな〳〵の曲を調へし。絲竹のねにやめでけん。天下袖なつかしくしたはれて。此道にわたせ雲の梯とうきたちしを。かたじけなしや。後代も。我ぬぎ着は勅なれば。いとも賢しとあふぎても。げに武蔵野の紫の。ゆかりの袖やなつかしき。よしさらば我のみ迷ふ戀の路かは。古もかゝる樣は在原の。古にし跡にやよそへけん。さてもいかなる垣間見のたよりか。待に命ぞと託ても。猶又思や出けん。室の屋嶋の煙に。立も離ぬ面影。後瀬の山もしりがたく。すゝむ心の程もなく。早衣々の恨は。我にもあらぬ心ちして。絶間やをかむ葛城の。神の誓をたのみても。明る朝の眞木の戸は。さこそはくやしくおぼえけめ。夢かとよみしにもあらぬつらさかな。うき名をかくす隈もあらせよとぞおもふ。四方の木枯心あらば。神代より注連ゆひそめし榊葉を。及ばぬ枝となげきしぞ。せめて心やましき態なりし。

狹衣妻

思遣べき方やなかりし小車の。我かもあらぬ始より。深き思は飛鳥井に。やどりはつべき影し見へぬばと恨しに。御馬草がくれの人目よきて。げに珍き草枕を。幾度結重けん。猶行まゝの哀に。行末遠くたのめをけば。こはかゝるべき契ぞとも。さこそは思あはでけめ。行方しらぬ數遣火の。煙の末の跡に角に。おもひみだるゝはてもさは。つゐのよる瀬よいかならん。飛鳥河明日渡らむとおもふにも。今日の晝間の

戀しさに語あはせん見し夢の俤去ぬ面影。未夜をこめし関守の。心遣ひの苦しさを。木綿付鳥にやとゞてん。やすらひかねし天の戸。明ぬと急ぐ別路に。淀の河船指うけて。帆と絶命もたゆと。いかでしらせんはる〴〵と八重の波をか分過ぬ。心つくしのはてぞうき。今ぞきく未我しらぬむしけの。浮津の波は深海の。みるめかなしくおもふにも。君が記念に届の。名残も惜く身に副て。今をかぎりと早き瀬の。底の水屑と書付し。其浦風の便までも。いかなるたよりにしられけん。なき跡までも呢じく。尋し宿の模柱。今ははてそといひけるも。是や朽せぬ記念ならむ。種蒔をきし嬉小松。つゐに木だかき色みえて。翠に染る梢は。常葉の森にやそだちけん。世々經て後にしられつゝ。哀を猶も重しは。浮邊の鶴の毛衣。よしやげにさのみはいかゞかきながさむ。こと葉の花の梁にもるゝ。水茎の跡も及ねば。夏草のしげきよの葉の。露をもみがくことなかれ。此等やさは猿衣の。わすられがたき妻ならむ。

鷹徳

翅は大虚に翔つゝ。時を林に求也。跡は陸路にし馳つゝ。伏所を叢にしむとかや。物皆品昧にして。あの志を顕はす鷹は是百済の雲の外を出。扶桑の霞の中に入。仁徳の賢き御宇より。此代々の聖代の。野外の叡覧も。先此鷹を賞せらる。されば弘仁。天長。承和の。古にし御代を訪ば。野の行幸の陣の列。前後の馬打轡を四方に分つゝ。放鷹楽をもよほすも。とはりなる習かな。左右近衛の面々。随身の狩装束。殊に美々敷ぞや覺る。犬飼鷹飼の其色々に見ゆるは。緋の袂褰紙。下濃の袴。革の袴。錦の帽子やきたる。笠の端になぞらふる狩杖も。つぎ〳〵敷ぞ覺る。綠の端は。春の朝に色染て。興ありてぞ見ゆ

なる。梁の昭明の撰せし西京賦の詞にも。青骹鞲。韓盧之纅とか。いざみに行む狩庭の小野。鶉の床も深草の。露分わぶる狩衣。人なとがめそといひしは。流たえせぬ芹河。御幸古にし大原野。小鹽の山小野の渡。守多野淡津野嵯峨野の原。交野の御野の三栖。並る禁野の歸様に。見るに付て鳥柴の雉。餌袋の鳥もさすがに。故々敷ぞ覺る。紫の行志日の行。雪打拂手前の。斑の雪の明ぼのに。身寄の方を身にそへて。風いとはしき嵐山に。向る小倉の峯つゞき。そよや朝ぎりに立おくれじと。久方の月の桂の里までも。尋し野原の小鷹狩に。小鳥を付し荻の枝ぞ。わりなくはきこゆる。鷹の興ある大鷹野曝の贄羽と山歸りの上羽。峯飛渡箸鷹の。谷越の羽ぞおかしき。鷄を揃草執。木居に懸る鈴の音。落羽も早隼。兄鷹鳥屋歸屋形尾。鷂兄鷂と。此差羽雀鷂雀鷂。眉白の鷹眞白符ぞ。げに面白はみえける。羽白ふちさは柄局。廿鳥屋は希代の鷹也。攝政賴は。あの鷹の道に譽有て。是を傳し餘かとよ。胡竹てふと離からばとなげきても。昔にこそたてね苗竹の。一夜の節をや忍けん。鷹山鷹の子は。催馬樂の歌の詞なり。

馬德

秋月西天に剛に。佛日東漸の光ぞそふ。倩其ことはりをおもふにも。經典を白馬に荷しめ。轡を流砂に促かし。蹄を葱嶺に奈せず。傳し道ぞ賢き。凡馬に眞俗のや德多く。就して其字に故あり。七寶のなかにも。まの正に馬を寶とす。龍樹菩薩の論釋に。隔僑往向を分つゝ。四圍海德をあらはしも。起信大乘によりてなり。是又馬鳴の製作。されば此論師の名字め。其古を詢ば。過去の輪陀の在世かとよ。千の白馬を獻じつゝ。千の白鳥を鳴しめて。正法を紹隆せし故に。即馬鳴の名を得たり。佛法最初の軌蹤も。譯

の王子と號せらる。其妙の皇子の大原も。此御時の人とかや。穆王八疋の天の駒。後の人是を愛する。背は精の如し。あかつき頸は鳥のごとく也。累代の政は白馬の節會駒引。甲斐の御牧子は九重に見を立らる。左右馬の寮頭馬司。圓々め懐々の中に。口綺とらせし鹽立ても。よしある物をな。都の路やまよひけん。黒駒を引し明方に雲井に翔とぞきくもよ。秋の夜の栗毛の駒をば。いかなる馬なるらん。甲斐の黒駒と望月の駒と。望月御牧の御牧に立駒。いて我駒ははやく行。待らん路をはやみん。花げにこふらしやれ駒の跡やな。沛の河川に留とめよ。しばし氷かふ影をだにみん。霞る春の花形。くもらぬ秋の望月は。我朝に名を得し名馬也。竹馬は幼稚のたはぶれ。老馬は雪にもまよはず。胡馬北風にいばゆなるも。いかでか心なるべき。觀音の形像には。馬頭の形をあらはし。神には生馬の明神。駒形の利益ぞ揭焉。馬鳴菩薩の號は。馬を守護する念をや憩る。鞍山に守僧正坊。白馬其駒。司馬相如が筆の音。牧氏といへるは提世の名。抑様々の御牧の數は多けれど。心の馬をしづめずは。誰かは實の道に入らん。

雲鼠宮

東方朔が北鼠の宿。用る所には物となし。老虎芽は實に喘ぐ。大師は鼠を動かし。雲鼠は寶晶眼ければど。名は月宮に上れも。四世上下の中にも。北を以て象る。子の方前是也。陽春初月に。若菜を備る故も。子の日を先賞せらる。凡其身の猶たらく。かたじけなくもやたへ也。東方精王善逝の。十二神將に迎りて。形を毘沙羅の眞戴に顯はす。是又本地釋迦牟尼。されば我立柚の麓の。七の社の木綿欅。掛も賢き瑞籬の。あたりを去ざる叢祠にも。其名をあらたにとゞむなり。心賞く故あれば。月をも盛花紅葉の。色

にも心やうつりけん。梢を傳木鼠。三日月弓張居待の月。伏待闇夜在明の。月の鼠の名にしおへば。影をも今更離に恥む。夜はすがらにねられねば。軒もる月にあくがれて。板間を求る板宿桁梁の通路に。いそがはしくや鼠走。妻戸の透間なくされほどり。古屋の棟に年を經て。すむてふ鼠のあなかま猫にしられじ。はやさばかりやさしき柏木の。なれよなにしに手にならしけん。冷じく鳴音を聞も胸さはぎ。心迷ぞ由なき。かゝらん時の隠家を。尋求ても穴鼠の。そことも姿をいかゞみせん。火鼠は火叢にも侵ず。猶其河をきよむとか。遙に傳聞。異朝の波の外とかや。雲南の軍におもむきて。凶徒の陣に変。あらゆる弓弦を噛て。王事もろき事なかりしも。靈鼠のなせるはかりごと。さても我朝三十七世かとよ。孝徳の御宇。豊崎の宮の古。おほくの鼠むらがり。おほ大和國へ渡つゝ。あの都遷をしめしけるも。不思議とかや覺る。おのが習の爲態なれば。引手あまたの心導に。いかなる方に寝住てか。孕腹に子をは設けむ。西寺の老鼠。えむしやうつみ又けさつみけるや。騎馬變の詞なるらん。最不意なき事には歟にもあらず。劣き鍵の足の毛も。そも昔いかなる故ならむ。硯の上古鼠の尾の毛といはるゝも。恥がましくぞきこゆる。されども法華譬喩の妙文には。窮鼠の字を載られ。理當國土の蹟の文。六十心の其中に。鼠心と説るゝ。然も我等が心の鏡とす。後是同類衛共にもれざれば。いかでか忽諸なるべき。錦寶を心に任つゝ富るは家の榮なり。備其徳をおもへば。法界帶性の所變として。大黒天神の分身。姿を靈鼠に破つゝ。鼠はかたくなゝれども。名を福増と崇せられ。さま〳〵の利生を蒙らん。

船

一葉風にさそはれて。水にうかべる昔より。河海を渡はかりごと。滄溟を浚任とす。されば葉分小船のさわりおほみ。相雖遣壺を尋しも。船をして煙波の底に傳らく。尋陽に月静也。入江の舟の琵琶の曲。東の船西の船。悄然として是をきく。あゝ和琴緩く撥鳴して。唐櫓さびしき船の中。葦間の月に棹さして。伴ふ翁の釣漁の船。維ぬ舟の定なく。誰をさしてか松浦舟。心づくしの波の上。年や經ぬらん長井の浦の。渚に朽ぬる捨船。外濱舟の楫の滴も絶難き。三千里須磨の浦傳ひ。客帆寒き夕嵐風や。舟人さはぐ適保の海。鸚鵡州の夜の泊。隣船に哥の聲愁て。明月漢とや登らむ。玉をかざり錦色々の財力ある。隋堤の柳に繋船。

寄山祝

君王徳高して。巍々たる青巖。霞をそばだてゝ聳たり。功臣忠深き事。遠々たる開谷。雲に埋て幽なり。久き様にひかるゝ。蓬が嶋もなにかせん。大内山の麓には。此春の恵普く。雨露の恩をそゝぎつゝ。繁み榮は筑波山。葉山繁山しげゝれば。御笠の山の春日影。さして幾代をかぎ覧。姑射山の月の光。秋の色鮮に。星をいたゞく夙夜の勤。同仙洞に霜を打拂ふ。龜の尾山の動なき。岩根の瀧の白玉は。幾萬代のかずならむ。人ごとに升ばうれしき位山の。道ある御代はおさまり。代々經ても彌榮行。竹の園生に遊なる。鳳は翅を刷。明王の徳を待出。幕府山の春の梢。枝を連てのどかなるや。天下静謐のしるしならむ。千年の松の翠も。万年の若の色までも。鶴龜の名をあらはせば。此砌にやさかへむ。龜谷山。巨福山。嵐万歳を呼なり。

續群書類從卷第五百五十六

遊戲部六

貞曲抄

對揚

陰陽萬物を養育し。天地に是を育。日月光を和て。風雨又寒暑をたがへず。君臣代を治て直なれば。文武の二を賞せらる。詩歌は風月にかたどりて。和漢に詞の花を傍り。管絃は絲竹に呂律を調。高麗唐の曲を分つ。成王を助し周公旦。白貴事を知。漢高を守し張良。立所に師傳に登き。隴山雲晴して。李將軍が家に有。勇士のいさめる謀。三尺の劍一張の弓。其勢を施す。あの父母は恩愛德高く。慈ふかく際もなし。婦夫は語ひ濃に。蘭麝の匂なつかし。勝其名さへ呢じき。いも瀨の山の中の落る。よしや吉野の河浪の。立歸るもつらき瀨に。袖ひたすらにぬるとても。哀を懸る身とならば。思へかし何に思はれ

ん。思はぬをだにも思ふ世に。聞る砂は二佛座を並し。寶塔踊出の佛名。妙荘嚴王を導し。淨藏淨眼の二人の子。江南江北の流には。維摩大悲の不思議。解脱空座の二の詩ひ。抑觀佛念佛の兩三昧を宗とする。彼觀世にや說る實。韋提の獄の窓には。目蓮阿難の二聖來り。阿闍世の獄母をいさめしは。耆婆月光の二人の臣。王宮耆山の剛も。兩界の正說とこそ聞。阿閦不動の二明王。胎藏の外部を司どる。明王に左右の二童子。定慧の法を顯す。面によるゝ情の。樣々なる中にも。聞き春の朝霞。身にしむ秋の夕風。上陽の春の谷の戸に。明れば出る鶯の。濃香芬郁の。匂を誘ふ梅が枝。柳條の糸を宛たる。柳を拂ふ春風。碧玉全波三五の初。始て露の結ぶより光をみがく玉簾の。葉分の風にや亂るらん。雲收盡ては。行雨洗き夜半の月。秋の水瀨來ては。船去車速也。岸楊高く押ては。雲井を浸寫金。碧玉の雅成る。此錦の社の。錦に立るかと見ゆ。

遊宴

因華高臺の閣の上。喜見城宮の玉の楷。忉利の雲の上。遊覽の花の苑の遊。出車の轍を絕しつゝ。觀音臺を並ても。遊宴は勝妙の快樂也。意を忘て日を送。されはや琴詩酒の興。雪月花の翫び。皆其邪僻を先とす。詩歌の流には。金玉の聲に異有。心は高嶺もゑこしを捨。詞は葦原中津國や。八雲の風をや傳ふらん。三寸を動る樹には。鸚鵡舌の情をしゐてまし。葉は上林苑に。此離かは畫ざるへ。さ。家主は今や小船裏の。急て催來みるめ所。入江の濱物尋つゝ。盃子のかたにいざりせむ。春日閑き花の宴。猶める日影も菲片春の鶯囀曲や。梅花苑の手折る衣雪を廻らす袂より。秋風身にしむ夕はへの。紅葉の錦の色々に。袖打ふりし時しもあれ。吹合たる絲竹の。調に通ふ松風。凡管絃に曲多く。其品樣々

なれども。鶯のかたらひは。花の木になめらかなるのみならず。急雨に紛大旗。小枝は私言の〔四字ナシイ〕ごとし。つらゝの下に咽ぶ流の一泉に浪の音澄て。或は一聲の鳳管は。秋秦嶺の雲を驚す。能鳴和琴の秘曲の。妙なる調に音信て。心有てや昵金の雲わに己が音を副ん。抑朝庭の嘉禮。鳳闕仙洞。竹園。博陸輔佐の歓び。殿上の淵酔。嘉基の亂舞。重陽の宴。南殿櫻の花の色。折袖付仙人の。幾千代秋をかさぬらむ。青山霜吟惹く本末の拍子も取々に。神樂には弓立宮人。嫌の前に挿頭てよ。櫻帶弓。千歳々々。又折てはしこ。櫻鞍のきり／＼す。催馬樂には萬壽の扇に隠ぬ梅が枝。名も睦じき妹と吾。與は情んあげ巻や。色にぞ彩る櫻人。隙鳴河岸に立るか青柳や。夏引の置糸の貫河。いかにせん有といふなる淺水の。橋をばわたらざらんや。

夢

ぬるが内に見るてふ夢の面影は。鳥羽玉の夜半の衣を打返し。思へば他なる形見の。猶又しゐて戀しさや。夢の直路をしたふらん。夢路をたどる枕には。霜打拂ふさ夜衣。ゆきふみ分て君を見ても。夢かとぞ思ふおもひきや。さだかなる夢にいくらも増らぬは。是亦此現とゝなき中河の。逢瀬をしたふ朧。浮立雲の憐哀は。朝る夢の外絶にて。衣衣の袖をやしぼるらん。豊ぬる夢の心地して。枕に覆所縁は。又ねの夢の暁夜かは夢とやいはん。さても彼小野の里人をのづから。有と計の心當に。守る道をしるべにて。思はぬ山に踏まよふ。夢の浮橋浮沈。絶ぬ命の長歎ても。有し昔を忘めや。往事眇茫として都夢に似たりとか。或は皆夢に見て傅説を得。或は魏徴を夢に見て子夜に哭。仙家に夢を遇る夜。深て漢洞の月を見る。漢に到て驚夢。風に和しては猥がはしく。霜夜に冴る鶴

の肇。抑多の夢の内に。驚程こそたどるらめ。悟十信十住より。次又十行十廻向。其品懺多に見ゆる夢の。終十地の眠覺。妙なる覺に入とかや。過去の迦葉の御代かとよ。未來を速に知せしも。訖栗枳王に告し十の夢。如夢幻泡影と說るゝも。金剛般若の眞文也。

無常

夫異生羝羊の攝心。嬰童無畏の幼なさ。我等が狂醉覺難く。道をや外にたどる哉。習やすらふ迷有。無常は春の花盛。林を飾る夕の色。移ひ安き匂の。嵐に隨ふのみならず。黃葉の晩秋の梢。時雨に絕ぬ別も。生滅共に終しなく。其車の廻に異ならず。無明緣行より。行緣識々緣名識々々緣六入は。十二の因緣の。うつれば替姿也東岱前後の烟は。山の霞と立のぼり。朝市の榮花は忽に。日夕の露をあらそふ。行水に數書かごと跡なき世と。思へば他なる泡の。哀を知も

入月の西山の端近ければ。老の涙の雨とのみふり行年のいつまてか。芭蕉泡沫電光朝露に替らぬ身の。終は枯野の草の原。苗の降場の朝日影。待間も程無世をしらて。たれかは遁はつべき。任他れ能やさは。終にはとすら追棲ればいそがはしき所は。常樂我淨の眞間なる四德波羅蜜の波の邊。功德池の砂に戲て。海雲比丘の如ならむ。善哉童子を友とせん。

法華

合事は妙なる法の英を。掌に得たるのみならず。口に其文字をも唱れば。化佛はそらに顯れ。他なるかゝる術とはいはじ。此言の葉の末までも。傳てきかん功德は。喩も足ごりければにや。佛も說演給ず。抑彼瑞相に。燈明佛の古は。實相の宗をあらはし。涌出の菩薩に讓しは。久遠實成のよはり。彼是會場の有樣も。由有てぞや覺る。凡此經を說れし事。番番出世の如來の。

唯以一大事因緣とこそ見へたれ。然ば縁を結て。砂を集る手すさみ。只箏閑に手折花。或は手をあげ頭をうなだれて供養をのべ。又乃至童子の戯まで。他なる信は洩れず。况や宿實無人聲讀誦。此經典の室には。我他天龍王。夜叉鬼神を避衆とし。諸佛も共に見そなはせば。恒沙の佛もまみへ給ふぞ覺る。天諸童子の給仕のみかは。十女も擁護を垂給ふ。南無靈山界會。法華經中一乘教主。多寶分身。諸如來梵釋。多門諸天聖衆 漸悟頓悟。六根罪障の霜消ざらめや衆罪は草葉の末の露。本の滴と成々も。理とぞや覺る。誰かは更に疑はん。浪路の障を凌て。乙女の姿を改し。南方無垢の成道も。勝此經の故也。二もなく三もなき。只一乘の法なれば。顯密權實皆漏ず。諸宗は是より詞の玉を拾。學者は文を集て鏡を瑩。余經も幡をなびかして。諸論も幡を引つべし。丈夫の道に向には。功臣の忠も何かせん。髮をも切て山無 何も無明の敵をば。只此經に任べし。などかは五千の慢人は。蓮を卷て去にけん。我等はいかなる契にて。只假初の情に。詞をかはし座を連ぬ。是皆如來の應用の。一味の雨に潤ふ。如我昔所願の慇化一切衆生の謀。いかでか遁ざるべき。されば[にや]大士の菩薩より。人天龍神其會の衆。皆大に歡喜を成つゝ。佛の御と法を受持して。禮を成て而も去き。

釋教

本覺の城を出しより。眞如の臺に隔て。此身の身を知がほにして知ぬかな。作し生じても。無明の行えをは辨ず。如來は我等か慈父として。一子の慈悲を垂給ふ。なぞしも我等が思もしらでのみ過す。不孝の責をいかゞせん。倩思つゞくれば。他にも年月を作遂けんやな。こゝろより外には誰の馬もなし。精進の鞭をはす

ゝむとも。しかすか定惠の埒にはつまづかざるべし。醫王の藥を備しも。病に利有と見給へども。其藥をなむる人は皆。只良藥の名にのみめづ。故有とぞや覺ゆる。淨名居士の無言說。文殊は是を知て不二法門と褒給ふ。云ば云はねば恨む等閑の。情の言の葉は。由無婦が玉章。何とかやあな云しらずや。水は流て春の色。嵐は吹て秋の空。本よりなれる理をばいかゞは作成べき。抑六大四曼の相。綠の春の英。色々にさける秋の草。琴詩酒の戯。緊那羅摩睺羅が法までも。歩を運手をあさふ。是皆秘密の形なり。さながら深秘の言種。見も見ざるに似たり。きゐても聞ざるのみならじ。或は色に出。或は聲に立。宮商角徵羽の五音。五色五輪の形も。五佛の知より顯る。知と知ざると。捨と捨ざるとなればい ざ去ば只大に漕出む。大悲の海には弘誓の舟を浮べつゝ。取手は緩とも。忍辱の梶に身を任。引手にたゆみなく。大慈の綱に懸りて。浦々嶋々磯本動。猶豫浪に立る白雲。八重に隔る海原や。靑波分出る岩が根。藻に住虫の棲にも。我からゆかんの道なれば。十界六道皆滿さず。只其群類の奴とならんとぞ思ふ。乞願は此願を。陰らず照給はゞ。上は法身の月の前。下復和光の塵の底。我等に深き結緣の。感應擁護を仰國津神。芦原や磯城嶋に御屋敷建て。御座かりける。憑敷ぞ覺る。

淨土宗

歸命頂禮彌陀願海。即得不退涅槃會。廣して猶邊もなく。深して復際もなし。頓敎菩提の藏なれば。開てもみだりに疑はざれ。觀經證定の古。貞元入藏の掌を。さすがに仰がざらん。況や諸佛の證誠は。三千に普詔。必至無上の正覺は。超世の願にはやこたへ。斯願不滿足の誓は。偏思なく憑有。拔諸生死勤苦なれば。誰かは漏

る類あらん。六八弘誓の門を建。門々毎に悉。稱我名號の心有。亦達多が勸し禁父の緣。禁母を犯し折指の咎。先其姿を說しも。下聾の弑母を顯す。然ばさても如何はせん。我身を知ば濁江の。藻に埋るゝ玉柏。浮出べき便だに。渚に遠き水底の。そこ共しらでややみなまし。廣劫多生の流轉は。因位の悲願に濟れ。佛の十劫成道は。我等が爲に成ぜらる。彼是共に結ほれ。豈さい行ざるべけんや。忝も拙き袖に。手折て挿頭英に。芬陀利の名を得のみならず。汝好持是語の付屬は。偏に御名に限れり。さればにや暫しるべせし。二の門の益もなを。開口はてぬる八重葎。しげれる宿にもさはらぬは。望佛本願の秋の月。定散均廻して。開て長鎖ざるは。名號不思議の樞なり。宜哉や第十八に。正願王の名を與。いかなる宿緣催て。今此法に逢ぬらん。只二三四五の如來の。御本に植けん種のみかは。若門此經信樂受持。堅が中に堅しとす。其有得聞彼佛名號。歡喜踊躍の人は皆。上無功德を具足す。只等閑の流に。思亂るゝ世なりとも。一筋に憑を懸るならば。御手なる糸のくり返し。專にして復專なれ。三念五念捨られず。乃至一念至心廻向證。無生五乘も均く入なれば。誰かは更に疑はん。たのもしくぞや覺る。

追撰新作三首

祝

花は萬歲の春の匂。月は千秋の秋の光。陰らぬ鏡の宮柱。太敷建ては皇の。代々に榮て德高く。上として懸廣ければ。海山川をいとはず。下筑〔[illegible]〕波根の動なく。是面彼面に。繁しも分ず道しわれば。巷に德をや歌らん。されば古を訪へば。三皇に恥ざる政。遠く異朝を順れば。五帝の昔を奈ともせず。文には螢雪の積。直を賞する事態。皆家々の風に傳れり。藻鹽草かくてふ文字の

關の外。西戎は浪路のすゑの。泡と消ては跡無泡。武は又梓弓眞弓槻弓取々に。其勢にやなびくらん。轡を並轅を廻しては。此久右車左馬の謀。重は恩によればなり。輕は命をや忘るらん。霞を隔る陸奥の。壺の石ぶみに書し跡も。朽せぬしるしに殘也。是皆神風や御裳濯河の絕ぬは。御注連の玉簾。掛も賢く跡を垂て。同梢の男山。流は替らぬ石淸水。其源のにごりなく。代を平にや瞻すらん。差てもいはじ三笠山。照月の影は限あらじ。

薫物

色にはめでじさく花に。思ひ付身のいかなれば。身に疲の入も知れず白眞弓。春は心の空にのみ。あくがれ出ても何かせむ。移後の記念とは。匂を袖にや留まし。されば匂に心の移來て。衣々の名殘の袂にも。なを染深き薫衣香。幾里懸てか香ほるらむ。遙に匂ふ百歩香。思亂も信夫摺の。見過し難き故鄕に。それかとしるき舊籬の方。心に懸るは軒端なる。梅花の方の空燒。夏は汀の蓮葉の。冷しき風にやかほるらん。秋の籬の白菊の。移ふ匂ぞ懷き。鳥羽臣の夜半の黑方は。誰手枕に香をとゞめむ。間近く覺る匂は。五葉の枝に麗かに。結付けん薫の。匂を送し節かとよ。婦やとがめむ花の香を。えならぬ袖にと有しは。兵部卿の宮の御返。匂ふかほるも思ひも分で契より。心うかれて浮船の。憂名を留し小島が崎。他にや浪のこゑつらん。懸る迷を思にも。勝さは誠の法の道の。妙なる匂を爭しらん。佛土に微妙の薫香有。青白朱色の蓮花香。薬（荷葉イ）圃々と水淸く。功德池の浪にやかほるらん。林は菩提を篩つゝ。涅槃の山に風薫ず。欒欒る砌なり。

雨

秦皇泰山の天の下。星霜ふりにし古。榮爵に

あづかる松が枝の。綠も深き色を增す。凡雨は天子のや恩として。國に普き德を成。西北に起る雲の膚。東南に來雨の足。時を違ざるは是やこの。十日に開き惠ならん。春の荒小田打返し。思へば榮る民の草葉も押並て。苗代水の引々に。取や早苗の態までも。畔こす小浪に袖ひぢて。春雨急雨白妙の。●卯の花くだし五月雨。影ろふ雲にやさはぐらん。おもひもあへぬ夕立。すゞしき風を先立て。露置副る秋の雨は。時雨に成か尾上吹。嵐の末の浮雲。小雨に懸る露けさ。ひぢ笠雨のやすらひ。惹に傳ふ玉水の。落るや軒端の山下に。脆も木の葉の雨とふれば。いつしかさゆる氣色にて。風まぜに砕てたまらぬ玉霰の。霙にかはる冬の雨。さびしき詠の徒然に。其品樣々なりけるは。雨夜の衹の物語。勝忘られぬ節々も。さこそはおもひ合せけめ。雨の名殘の宵の間に。溫明殿の渡を。たゝずみ步行て。東屋歌し折かとよ。うたてもかかる雨そゝぎ。眞屋の餘も馴しとや。數ならでさすが世にふる習は。身を知雨の槇のやに。やすくも過るか淺水の。橋うち渡す雨もよに。此とゞろとゞろと降し雨。

究百集

隱德　和謌
長恨歌　納涼
風　水
十驛　明王德
君臣父子道　老後述懷

隱德

夫譽を顯して名を揚は。あの終に隱德のなす

所。隱德の云ざるをみるは。また明王の曇らぬ鏡也。凡隱に類おほけれど。隱て希に知とかや。傳聞。孔子の教今に絕ずや。壁に納し經書も隱て德を施し。舜は隱て死をのがれ。或は畔に耕わざ。或は賤漁に超過のとくをもや隱けん。四皓七賢も商山の雲に跡を隱し。竹林の隱士として各名を埋き。伯夷叔齊は。この首陽山に隱つゝ。朽せぬ名を殘せり。老子の信たる德にも。正に隱君子の號あり。君に仕る忠臣も。密事の僞らざれば。是恩澤の誠にほこるとか。諸曲の究まる所皆。綱に傳て顯さゞるを。隱て床敷道とす雲隱行月影を。扇ならでもと。口惜つゝ招けん。撥を納し所かとよ。覆手に隱る隱月。々々の其名もよしあれや。如何なる秘曲を隱らん。霞に隱て歸る山の。嶺飛越る春の鳫。島隱行海士小船の。ほの〴〵みゆる朝霧の。絕間を隱す奧津波。寄來浪に隱るゝは。渚の松が根。磯間

傳ふ岩根の道の岩稜。汀に摧る空貝。乙女が漁に拾玉。水底に隱玉柏。水隱の沼の蒲菖の長根。みえ分ぬ姿の池の玉藻隱や。藻樓束鮒童子が。小網さす跡にぞ隱なる。深き夏野を分行ば。茂るに隱る姫百合。小鹿入野の茂み隱。狩庭の雉の草隱。鶉の床も深草の。下はふ葛の葉隱に。結びもあへぬ夕露。葦の葉に隱て住し攝津國の。小屋とも更に聞ねども。したひくる妻が邊の名も呢き。綴蓴のさとをや尋まし。籬に隱る面影。人知ず外にはつゝむ中河の。逢瀨に沉埋木も。終にや隱はてなん。せめても隱て傳るは。鳥羽に書玉章。抑鷲峯の雲に隱しは。雙林樹下の夕の月。鷄足の羅の洞こそ。迦葉の隱し砌なれ。佛の在世にも顯ず。滅後八百歲かとよ。南天の鐵塔を。始て開し教法。故安なる物をな。東土の久米の道場に。隱して納し古。忝なくぞ覺ゆる。瑜伽密教の理。他にもゆるす事ぞ無。誰かは輙

く傳へん。此秘が中の秘なれば。深が中に深しとす。

和歌

傳に聞。日本尊の哥は是。天地開始り。人事定らざりしより。心内に動て。理世の道も備り。詞外に顯れて。撫民の信を先とす。されば日域朝庭の。本主は専我国の。習俗を捨ずして。時雨降をける梢のはの。侍臣に仰し万葉。勅集の源也けり。其後代は十嗣をへ。年は百年あまりかとよ。延喜の聖の御代には。古今集を撰て。此巻を廿に調へ。品を六種に分てり。梨壺の五人を。昭陽舍に置て。後撰集を集しむ。拾遺は花山の製作。長保寛弘の比とかや。後拾遺の奏覧は。應徳三の長月。金の葉を重ぬるも。同き御宇とこそ聞。彼よりおほくの春をへて。詞の花を手折しは。崇徳の賢衡。千載は文治の夏の天。彼宇治山の跡を訪て。松の樞を出たるや。傍に越し譽ならむ。さても新古今を集。其名を輿すのみならず。歌を二千々にかさねつゝ。君もさながら難波津の。よしあしを分るゆへに。手づから集。自撰る跡を留め。臣も又あさか山。淺深に迷ねば。心の林詞の露。漏たる玉やなかりけん。花の匂鳥の聲。此月の光雪の色。景趣こゝろすごくして。眺望眼に浮ぶより。盡せぬ戀を駿河なる。富士の烟に身を焦し。鏡の影の朝毎に。雪と浪とは厭しく。長柄の橋の橋柱。朽ぬる昔を忍びつゝ。鶴龜に余副ても。あの萬代を祈まで。勝磯城島の道無ば。知もしらぬもうづもれぬ。其名をば何にか殘べき。渾百福の宗は悉。六義の内に演盡し。萬物の徳は何れも。八雪の奥に納れり。大空の月も住吉の。園墻の松の葉散事なく。代々に絶せぬ此歌も。藥のかづらながゝらん。

長恨哥

夫泰階平に。四海ことなく。玄宗位に御座て。天

の下治事。改の年を重ても。霓裳羽衣の袂に。花(ハナ)箏篌(カタイ)日並色やなかりけん。楊家の深き窓に養れ。一朝に撰て。君王の傍に相見つゝ。この百の媚ありしかば。六宮の粉黛も。顔色無とや愁けん。さればや風になびく。雲の鬢なつかしく。雨を帯たる花の容貌句を副。芙蓉の帳あたゝかに。春のよいとみじかく。日闌てをき給ては。朝政や怠し。承観に寝に侍て。閑成暇なく。春は春の遊に随ひ。夜は夜を専に。仙楽風に飄り。所々に聞えつゝ。緩々歌ひ。猥がは敷かなてゝや。絲竹の調をこらしけん。叡覧終日に饱ざりしも。理とぞ覚る。しかはあれども。翠花瑤々として。行て又留る。都門を出て百餘里。その六軍奈ともせざりき。花挿頭地にゐして。治る人やなかりけん。風蕭索たり。雲の梯廻り廻て。劍閣のみねにのぼるとか。娥眉の山の邊にも。行通人ぞ稀なりし。朝な〳〵よな〳〵の心。行宮に月を見ば。心を痛しむる色。夜の雨に猿を聞て。腸を断聲も。勝さこそは哀なりけめ。春の風に。桃李の花の開る日。秋の露に。梧桐の葉の落る時。西宮南内に。秌の草や茂るらむ。落葉階に満て。紅拂ずとかやな。鴛鴦の瓦すさまじく。霜花重や。ふるき枕ふるき衾。誰と共にかなづさはむ。抑方士が尋得し。太眞院の玉の樞。左右の侍者。をの〳〵絲の袖を連ね。出向し有さま。執あへざりし挿頭の。ねくたれ髪のそのまゝに。思ひ亂れし粧ひ。彼驪山宮の私言。語傳し態までも。あの天長地久。終に絶せぬ契りは。憑敷ぞや覚る。

納涼

青苔の地の上。綠樹の陰の前。晩涼興を催す砌。古集の詩を吟ず也。鳴扇の風をも。岸風に代てや忘るらん。冷泉砂なめらかに。氷になづむ玉かと見えて。底きよき水のしがらみ。懸ても袖にすゞしきは。只一重なる夏衣。日も夕陰に

傾ど。歸樣もさらにいそがれず。暫し立寄氣色の森の。木陰も冷きに。いざゝは誰も挿頭とらん。夕立のあと吹をくる風越の。嶺の浮雲晴行ば。襲代衣うち拂ふ。山路のつゆの玉篠の。襲すそにかゝる涼しさ。青嵐松に音信る。汀の波のよるは涼しき。月待ほどの手慰に。岩間の水の幾結び。むすびも敢ぬうたゝねの。み終ぬ夢の名殘の。枕を過る風の音。抑納涼の勝地名所の中にも。殊に床敷覺るは。涼風薫ずる摩訶陀蘭の。栴檀樹の下。娑羅林雙林。那羅陀樹下とかや。玉順山の碧岸〔岩イ〕。悟眞寺の瑤地〔池歟〕。天台山に曝布の泉。玉泉龍門の瀧津瀬。穎川耳を濯し水上ぞ。聞さへ涼しかりける。流絶せぬ瑞籬の。久敷すめる神泉苑。冷しき梢の滋野井。山の井玉の井玉河。川浪寄るなぎさの院。平等院に釣殿。影ろふ汀は朝日山の。麓に見ゆる款冬の。瀬々の岩根に浪越る。此橋の小じまが崎に。船指留し河岸。

風

風大虚にゆるくして。春の水泳を漲流あり。風野徑に音信て。秋の露草葉を潤す粧ひ。寒暑折をたがへず。其德時にかなへるや。聖代明王の御代成らん。先は風輪最下の安立より。器世間是に成ぜらる。五大をいへば風大。黒色其色をかたどり。代に皆其風儀あり。いはゆる巣穴冬夏の住居として。繩を結びや木をきざみし政。伏羲氏の王爲。書契をつくりし風體。黃帝代を治しも。風后輔佐の臣たりき。凡あらゆる事態。何か風の德を備ざらん。されば詩歌の妙なる詞にも。風月の名を先とす。遙に漢家を訪へば。昭明太子の撰し文選の中にも。あの宋玉が風の賦。近く吾朝をかへりみれば。風土記は廣く記する處。風俗は神の御代より。今にたへざる郢曲。家〳〵の風に傳はる。源氏の卷にも。松風野

分ぞわりなく聞る。六義の風情に風あり。古今の作者は春風興風。小野の道風は。此書圖の屏風に筆を染む。琵琶の調に風香調。樂には夏風秋風樂や。五音皆風にあり。絲竹の調に顯る。風北林になる。花をおひて風の雅かと疑れ。竹に向て龍吟（はイ）に似たる聲あり。青嵐窓を過る聲。曉の夢に通ずとか。竹風葉を鳴すや。夜を殘すね覺の友ならむ。松風琴を彈ずなる。何の緒より調ぶらん。風渡る蓬萊の御海に春立ば。浪の白木綿神懸て。風の祝にすき間あらすなと祈ばや。木曾路の櫻さきぬらん。東吹風に浪寄は。霞を流す櫻川。乾風の風に送は。時雨を誘ふ浮雲。紅葉の筏を下は。嵐の山の麓の。河瀨に秋や暮ぬらん。寒嵐冷く。霜深き夜の。月にさけぶ哀猿。風を便に渡成は。觜を傳ふむさゝび。倶羅を增も風なり。風を向る海月。いかなる故成らん。梢の葉柏うちそよぎ。木枯はげしき飛鳥川。風寒ければ。汀の浪や氷るらん。風のしなぐ〜に。所によりて興あるは。山風谷風山下風山下木の下葉分の風。松吹風のつれなさは。思めて聞はぬ夕暮。葛の裏かぜ恨わび。身にしむ秋の初風。かぜの便風の傳。かぜの術りを誰かしらむ。浦風鹽風興津かぜ。眞帆の追風朝風にや。湊吹越いなの渡り。抑君の恩を仰ぎて。此風の德に喩れば。風の前の賊塵は。拂に敵する類なく。なびかぬ草木もあらじかし

水

佛陀に結緣を求る。花水供に始り。灌水加持五瓶の水。四海の流を汲ても。深き敬要なる物をな。毘盧舍那覺位を證せしめ。即位の灌も添なく。彼等の水をや灑らん。父母の恩德をむくふも。水菽の孝を道とす。水曜天に連りて。地をおほふ光曇なく。水神地にたゝへて。あめ天を乗る惠あり。天地勢を和。陰陽時に調ほり。水に

あまたの徳を聞。姑洗初三の春の日に。水巴の字をなすなる。曲水の宴を訪えば。源周年に起しより。幾若干の霜を重ね。顯宗の朝には移しけん。堙入る水の涼きは。木隱深き中河の。宿りも終ぬ夢の名殘。取あへぬまで驚す。鳥の聲〱鳴きわかれ。月は晨明の光納まりて。薄霧殘る。山本くらき木枯に。紅葉の色も深けれど。渡れば濁る河の瀬の。あさくは契らぬ中なれや。音信ながらさびしき。筧の水に袖ぬれて。さそふ水あらばと讀るは。縣召の後朝。三代まで汲し三井の水。彌勒常座の砌より。龍花を待てや流るらん。尺會難行のいにしへ。採菓汲水の勤にこたへつゝ。一乘無二の法を受。累劫成道の今も又。漸濕土泥を見れば。決定知近水の喩に。因位の丹誠を濆らる。抑垂仁の治天に。天照皇太神。五十鈴の原の水邊に。光を和げ給て。衣を洗ふ山水。御裳濯河の名を流す。白浪渺々たる水の底。百尺を卜の瀧祭。遠岸蒼々たる水のうへ。一里を去ざる常の宮。この所〱に跡を垂。誓を樣〱に顯す。然ば一天利生を仰つゝ。十善首をたれ給ふ。鈴鹿河八十瀬の水は遠けれど。伊勢まではるかに思ひやり。五畿七道の人民も。宮川の水の木綿鬘。心に懸歩をも。なを重なれる足引の。山田の原のすぎやらで。手向になびく神態。太祝言のれの句の中に。百王恙御座さず。万人やすき還あり。

十驛

悠々として遙なり。淺深千万軸おほく。此杳々として幽なり。内外に百種の道廣し。三聖を遣す仁德。皆牟尼の善巧より起。十驛を連る住心。これ毘盧の金言成べし。中にもをろかにはかなきは。異生のつたなき狂醉。十惡日々に心よく。三業夜々に犯しつゝ。燃に焦る夏虫の。身を徒になすのみか。蘇に草取箸鷹。木網をはな

れて走犬にや、禽獸涙をながすらん。澤を籠つヽ引網の房敷態にさす小網。魚鼈の族をつくしても。猶あきたらぬ心ざし、强竊二の咎たゞ。衣食に耽て樂み。名利に誇て戯る。歌舞遊覽の興をまし。翠黛紅顔なつかし。林に猪鹿の類をかけや。池に酒の浪を湛。いつかは醉を醒さん。抑石田月日へて。秋畝の惠に會なれば。法界毗富羅の内薫外に顯て。由良の湊に拾貝の。たまく得たる人身。五常を堅守てぞ。檢束の擧普く。仁義の道を仰べき。金銀銅鐵粟散王。四州の民に致まで。誰かは是を捨べき。戒珠の光妙なるは。四王忉利の花の下。あの 四禪無色の雲の上。淮王の藥高く上り。費張の竹遠く飛。二篇二見の雲開く。眞如の月を隱つヽ。涅槃の山に入。されば六行の水泥やすく。五熱の燃消難し。鉛刀の鈍をなげすて。泥蛇の愚なるを嫌つヽ。四諦の利劒賊を切。三藏の鷹鷲（飛イ）雨を灑ぐ。三十七品菩提の種。漸甲さけ萌つヽ。四向四果の英や。そも二百五十に開らん。猶も哀のまさるは。霞の内の山櫻。嵐のまヽに散はてヽ。青葉に殘る夏木立。綠もふかき色々を。時雨や染て過ぬらん。村々移る紅葉ばの。終に留らぬ神無月。無常を四種に觀じつヽ。十二緣記覺安く。部行も是を先とし。麟喩もいかでか捨べき。されども化城に逆上る。羊鹿の車軸をれ。いつかは寶所に致べき。去來さは心をはげまして。此 利他を無緣に調へ。芥石を久劫に礴つヽ。二空の月をかゞやかし。三性に塵を拂はん。五等の位隔なく。一眞の臺を瑩つヽ。廢詮の客にかしづかれ。藴落の賊にも恐じ。誠に唯識の軍の。等持の城を守つヽ。勝義の都無爲なれば。太平の德をうたふなれど。内證の光闇くして。五障の雲をや隔らん。隔雲にまがふは。空即是色の花の色。句を八不に任つヽ。冴き影の隈なくば。色即是

空の秋の月。袞を二諦に明む。齊の建武の時かとよ。遼東を出し朗公。輿王に虎を服しつゝ。江南に劒を振しかば。成實の栖を靡てや。敵する類も無りけん。風にしたがふ浪も皆。水の外なる色ぞ無。中道の玉を浮べても。眞俗道別つゝ。境理になをも闇くじして。絶中の月を得ざりしかば。無明の闇にや迷ふらん。迷闇路を導引は。界外に傍し駕。開三顯一の理。誰かは信ぜざるべき。放光の瑞を見せつゝ。久成の形を示。皆本迹不思議の業因。あの二佛同座の寶塔。光を普偏の星に磨き。三昧不染の花潔く。白鷺池の浪に浮ぶなり。草木法雨にうるをひて。菓を未來に結ばしむ。龍女が無垢の成道。我献寶珠の供養をば。世尊納受を垂給ふ。信南岳山則て。陳隨の風冷敷。明淨の德を開しは。一心三觀の窓の前。藍より出て青と也。天眞朗なりとやせむ。無二亦無三の本懷。恒沙の己有を知ざれば。一道に爭かやすらはん。いつかと待し朝日影。高山のみねにくもりなく。功德の林花綻び。匂を四方にや分らん。成道二七の法輪。七の所を傍つゝ。八會に儲し教法。修羅の四兵のごくして。海印に浮びし三世の德。祇園鷲子も現前し。未來を遙に顯して。信に果海を兼なれば。一念に唱る正覺他ならずぞや覺る。されば則天の春の月。朧々たりし明方に。十門の霞を掃て。金師子形を磨つゝ。賢首の智光を耀して。十玄の臺明かに。六相の門深けれど。微細の霧晴ざれば。闇道よりいとひ來て。金張を開謀ごと。忝なくぞ覺る。あの郭に牛を放し客。この廟に鷄を待賓。龍宮の玉を得てしかば。濁らぬ蓮あざやかに。曼陀の花芳敷。雨部塵數の妙德。心のまゝに施して。教綱四方に覆つゝ。苦海の鱗品々に。何をかすくはざるべき。

明王德

唐堯は徳を以て國を治む。虞舜は孝をもて代に聞ゆ。王道共に私なく。の忠臣これに随ふ。或は水を治て。九年の愁を休めしむ。或は位を賢に讓て。親疎の道を隔ず。凡君たる徳は又。遠きもなく近きもなく。普き惠を施す。國に民絶ざれば。上に行ふ力なく。民を仕ふに時あり。農業の暇を授とか。日に磨き風に磨く。玉の枝より發初て。匂も聞き御代なれば。文章の花も盛なり。よし芦原の古にし跡に。又立歸るまつりごと。天地の神の代は。あの直なれども分難く。百王の下れる今。淳素の先事を違へず。雨露の恩又深ければ。草木も色を改ず。君に心は筑波根の。陰より茂き惠の。恨を含める人ぞなき。上の明成はこれ。日月照すに異ならず。下に愁なきは又。仁愛普きゆへとかや。されば四海事なくして。關の戸閇時もなし。其政理正に直ければ。寒暑も節をあやまたず。周文未まみえずして。虞芮の訴をしづめき。殷帝賢を求しかば。傅說を夢に得たりな。明王の用し人の鏡。古今にくもらず。形を鑒し百練は。箱の底にぞ朽にける。草創と守文と。何も堅に似たれども。爾忠心を一にして。終を守にしくはなし。身のたゞしきにしたがふ影。君臣の通る成べし。魏徵を子夜にみし夢。張謹を辰日に悲む。あの三足の思惟は。智惠の信を顯す。五復奏の御言法。刑罰の依違を謹む。驪宮の玉の石甃。疊々たる秋風に。宮樹の梢の蟬。垣根にしげる苔の色。瓦の松も徒に。御幸にしられで年古ぬ。四皓は漢惠に仕て。國の位を讓しむ。周公は成王に代て。世の政に德おほし。我朝の聖代は。寒夜に民を憐み。善政さかりに行はれ。万州に道を榮しむ。さて又大和言の葉の。情を捨ぬ名をとめて。哀昔べ槍のはの。古にしとを拾ひをき。延喜は古今に集て。かゝる賢樣の。學を和漢に及す。

君臣父子道

賢王は廟神の再誕。影をも深敬へ。忠臣は郡國の賓なり。貞臣おもひ淺からず。尊親二を兼たるは。父たる父のいつくしみ。孝行の誠といへるは。其子以て子たる昵なり。森の花になづさひては。梢を育む袖しあらば。荒き風をも防てん。あの秋の月を仰みれば。曇らぬ御影の。藪しもわかぬ光なれや。立ならぶ様も長閑き春霞。かすみと共に富士の根の。煙や空になびくらん。上無意の上無は。仕ふる君の厚き恩。薄衣をいとはぬは。此閔子騫がとのは。涙も露にまがひしは。白楊が柳の枝なり。緑の林の中まで。菓を惜し蔡順。夕立すなり遠近の。雲井の外に鳴神の。音も絶せず名謌けん。心の中ぞ切なりし。誰爲に身をば賣てか董永。空遷めせし織女の。星合の昵をしたひけん。君は陽徳にかたどり。朝日の影もあまねく。父母は陰薬を調へ。身に入風をもいとはず。夜の衾は染氷れども。片敷袖を猶あたへ。霜夜の床のとことはに。子を思ふ道にやかきくれん。霧よりすゑの村時雨。世にふるわざもかへりみず。あの雪を分けん孟宗が。もとめし竹の子はいかに。郭巨が堀得し金釜までも。孝行に僞なければ。天地あはれみを垂給ふ。生を胎内に受ては。身體髮膚を破ざる。先孝の始とこそ聞。命を君命に任つゝ。草創守文を角しも。互に譽を施。三皇五帝様〳〵に。八元八愷取々なり。延喜天暦の明主も。外朝に名をや恥ざらん。彼四納言か仕しあと。昭陽舎の五人も皆。忠勲の道を先とす。抑三十三天は。忉利天に一夏説し御言法。五十二類は涅槃のまへ。阿闍世の懺悔賢く。耆婆が諫に隨しや。其身の藥成けん。世人爲子造諸罪。此恐べきを忘れ。不見輪廻難可報。しらざる事ぞつたなき。然はあれども則。若人至心供養佛。復有情勤

修孝養。何もかはらざりければ。勝還歎ぞや覺る。

老後述懷

若は後も賴あり。賴めば慰あらまし。有增かばと思出の。なき古も忍ばれて。緑珠が綠の插頭。潘安仁が紅顏。若て媚を調しも。今更いかがはうらやまん。上陽人が翠黛。眉かきて心細しとも。六十の後や愁けん。はづかしや百年ちかき白髮。思ひみだるゝ面影。外の人目をつゝみても。やすらふ道の歸さ。身を摘ば霜の下なる冬枯に。さびしく立る翁草の。其名を外にや思ふべき。閒荒にみゆる梢までも。古ぬる老蘇の杜なれや。老骨の濱の砂路の。沙の數を盡しても。越ては歸らぬ老の波に。沈む憂身は藻に埋るる玉柏。ありとも人に知れめや。哀とて又引立る人やなからむ。今は早腰に梓の弓を張。よはり終たるや老が世を。見彼衰老相。いかでか是を恥ざらん。髮白而面皺。誰かはいとはざるべき。隨喜功德の眞文。他にしもいかゞ說れん。然はあれ其然爲我に。故あむなる物をな。眞人たりし老子も。猶又老の號有き。東方朔はやたへ也。九千歲の老を經て。樣々の名をかへつゝ。代々の朝に仕て。幾度恩に誇けん。稚武第三の淸寧。玉體誕生の臺に。白頭の鶴の髮。千年を兼てや示けん。彼是何も。有難かりしためしは。そも老の譽に殘なり。抑古賢は今も曇らねば。昔をうつす鏡たり。故實は古を辨て。老後に德を顯す。されば古をあながちにさみせざるは。聖代明時の成所。なさけを施す道ある御代の恵なり。

續群書類從卷第五百五十七

遊戲部七

拾菓集上

南都靈地譽

夫靈地靈場は聖跡名を埋ず。勝地勝形は又瑞籬光を和ぐ。共に甍を並つヽ。法灯も神鏡も耀き。百千の眞榊に。眞角の鏡とりしてヽ。天の香久山に顯しも。天津兒屋根の謀。鹿嶋の浪を凌て。春日の霞にうつりしは。慶雲の其いにしへ。春日閑き淺(御イ)影を副。則擁護の神として。妙なる御法の薗に遊。利益を鎮に眞俗の莫(マヽ)に灑令。彼山階寺江(イナシ)は是。掛もかたじけなき。天智の賢き御宇とかや。逆臣を立所に平げ。天下靜謐ならしめし。大織冠の誓約より。禪門不比等の建立。今に彌榮。扉を連靈場は。奇瑞品々に世に勝。佛像又並なく。衆病悉除の聖容は。聖武元正の爲に作。悲母の報恩の尺迦の像は。光明皇后の

願に答。乾陀羅國の巧匠。桐好端嚴に顯す。補陀落生身の觀世音。自然涌出の不思儀成。南山弘法の鎭檀。南圓堂の尊像は。不空羂索新に。八臂三目に備りかたじけなくも正く。春日の權現變化して彼檀を築給。(與言歟)彼譽是と謂。何の所にかゝる樣有ける。かゝる德を傳聞。然ば法相と殊に勝て哉。段乎此所に廣まり。維摩大會の好匠は。帝尺宮に記せられ。常樂會の梵音。兜率天より傳る。名は漢家の秋の月。曇無會は興福のや。春の花鮮なり。侍中宗の譽を訪へば。遠く西天の雲の外。一生補處の大聖。無着の請に趣より。玄弉戒日王の宮にして。(唯)維識の旗を擧しかば。一十六師皆共に。楯を列し有樣。風に隨ふ青柳の。最も輙く打靡き。日影の霜の解安。戒日蓋を着也。狗摩羅王は旌をとる。或を玉鉢を橋として。三藏に踏令ば。大宗皇居を法師の爲に與て。歸敬の眞をあらはす。近く本朝には村上の御代(ぞかしイ)とし。應和の宗論爭無。叡感の餘にや。銀の盃に。黒三寸豊にたまひつゝ。名を今の代に留て。權の長官と聞も理とぞ覺る。

同弁

抑神は法味に誇て威光を増。德唯識の法施豐なれば。差て三笠の山の甲斐。有てふ御代を守るなる。神の誓は楢の葉の。名に負里に普くして。飛火の野邊のわかれの(なし歟)。摘しる惠の道し有ば。男鹿の角の時の間も。忘る妻や無らむ。棹山奈良山柞原。此手柏の二面。何も重き榮かは。飛鳥の飛鳥の河の早瀬。三種の色やみどりの池。水底深き猿澤。面影移るわきも子がひ佐々波や越趣井。古郷の橋と聞渡も。朽せぬ名をや殘らむ。近津飛鳥の入逢も。早暮ぬるかいざや今は。梨原の厩に駒留ん。さても此維摩會場の儀式の。世に又類無は是。時は葉守の神無月。散(雨イ)道紅葉も照増。月の夜比の露なれば。ふきおろ

す峰の松風は。絲竹の調に通來て。雪を廻す袖の色。天の岩戸の明し夜の。昔のあな面白とや。此やとぞ覺る。上の文句は玉章玉を磨つゝ。衲衣の袂に移月の。つゆを疊ず開つゝ。螢を拾ふ智水は。深心を汲て知。雪を集る學窓に。積る功を顯す。一眞の臺高くして。麼全の前に仰れ。蘊落の賊を外に避。等持の城を守てや。太平無爲の都ならん。五部の論說。八識五重の座も皆。何か是に漏べき。猶さは是等の砌のみか。十六丈の盧舍那佛。二基の寶塔の莊嚴も。喩て言方ぞ無。其や一乘大乘は。世に又均しからずして。傳灯營學新に。大日教釋も。彼等の寺院に傳り。貴哉眞言。深き哉や法相と。納受の首を垂給。擁護の神慮とこそ聞。凡北闕仙洞の安全も。南都鎭護の加被なり。況哉藤の末葉の花の色。南の岸に雨を帶。執柄攝臣。戚里の臣。專藤門の榮露重し。

巨山景

青巖萬仭側て。聳て高き峰巒。白雲千里かさなりて。遙に入ぬる山の內。山皆寺有寺作。其唐國を遷來て。見心地する是や此。寂明けき御代なりし。建長の昔の政の。賢き樣なるべき。先は嵩山の舊跡。遙登吟。傳西來の古年舊て。宛の松の若緑。庭前柏樹の色までも。祖師の心をや殘らん。得月樓の秋の夕。正好修行の月の前。淸光比倫を絕ずや。或夜は誰か詩を得たる。雲間に響鐘の聲。或夜は誰か徒に。袖を拂て歸らん。讀書橋に澄のぼる。强顏影は在明の。憑て來ぬ夜は積共。欄干に立や讀まし。能やさは諸惡讀善も打捨て。あの都莫思量の所をば。大徹堂と名付つゝ。未少夜深き火鈴の音。永き眠も覺ぬるに。彼夜に上堂告るほど。ほの〴〵明る比ほひ。今上皇帝と禱なる。說經諷經の廻向と。峰より峯は重て。山の尾上の葛折。三輪には非

ぬ杉村に。繼ける竹の葉末より。ほのかに見る寶塔の。向け玲瓏岩とかや。汀の氷踏分て。迷ぬ道有奥や。此東山の正續なるべき。雪降つもる朝ぼらけ。彼香廬峰かと錯る。跡無庭を詠ても。問ぬは怨く消ぬべきに。猶又しひてぞ待れける。閑冷雪の夕暮。抑圓通閣の上に。衲衣の袂を連たる。修懺の儀式珍布。山颪の風に類つゝ。香花の節も聲澄て。衆苦永盡の此世より。及て大涅槃と聞時ぞ。來世と兼て頼敷。榮る御垣の一松。石清水の水上より。貴き擁護も絶せねば。山門中外感安にして。檀信福壽を增とかや。さても「此日既にすぎぬ」(七字一本ナシ)此日既に暮ぬめり。日景を告る念誦の聲。楞嚴會の朝日影。放參寮の夕聞ぐれ。禪學秉拂終ぬれば。方丈點湯有やな。告香普說入室の儀。四節の禮と勤次。小參上堂小坐湯。巡堂點茶も取々に。哀を殊に催は。其曉の十佛名。

五節本

夫古今累代の政。朝家に樣々聞れど。五節の勝て覺は。此代の始の儀哉(式歟)とか。辰の日は又名に高く。御座へぞ御幸なる。進て昇し甃。分無道も踊れき。廻立殿の行幸に。冴る夜の月濃無(須歟)て。差扇にや移けん。霜置袖も氷つゝ。悠起主基の節會には。あの古の內侍の進道(近衛)。近衛も立並。弓杖の末々寂幽美。豐の明の程かとよ。清暑堂の御神樂に。雲の上人取々に。柏子の音もものゝ音も。面白や聞し。凡五節の粧は。雪を重て竹の葉に。置霜月の比ぞかし。火燃すほどにも成ぬれば。藏人御倉小(にイ)舍人を。聲々呼て急なる。其夜は直衣姿にて。舞姬共に參めり。後涼殿の西裏。この后徽殿の細殿の。前をば過て登花殿。玄暉門の裏より。貞觀殿の北裏の。妻戶の砌にたゝずめば。宣耀殿の北の廂。主上は忍て御覽有。えならぬ宵の道なれど。あの衣被共拂はせて。

汗衫の童と下仕。袖を引てぞ扶持すなる。常寧殿の帳臺の。今夜の試しとて。后町より參なる。黑戸の番の諸人も。皆其後に交立。寅の日は又殿上の。淵醉軒治り。令月歡無極。萬歲千秋樂未央。靈山深山の五葉松。筑摩の院も樣無。南枝北枝の梅の花。開る色も異ならん。さて又今は袒て。氣高開る沓の音。北の陳を渡つゝ。渡殿を經てや廻らん。朝餉より色々に。刷重る出衣。勝言知ずやみつらむ。后の宮の推參に。思の津をぞはやすなる。

同末

さても日出かりしは後嵯[illegible]野の。道有御代の賢忠の事かとよ。大宮參の大納言。權大納言其外も。推て上りし宮司。時めき榮し傳。類は人もあらじ。宮の御前の置櫛は。染分擇櫛動櫛。衣櫛に差結櫛。いざ立なんやと計の。鴛の鴨鳥節からは。又無覺し名殘の。推明方にぞ成にける。卯の日は興有袒の。童御覽に始れる。仁壽殿より萩の戸の。上の御局の程とかや。假橋渡て簀の子より。淸涼殿の孫廂。過る乙女の袖色。其容貌も隱無。透扇をぞ挿頭ける。雲の通路暫共。心に誰かは懸るらん。天津風をぞしたひける。五夜の節會の今日の名殘。誰彼時の上達部。暮る色なる束帶に。交や小忌の袖の摺。取々に露臺の亂舞終ぬれば。白薄樣小禪師の紙卷揚の筆。蒔繪書たる筆の軸。故々布ぞ覺る。御後の妻戸の下にてぞ。藏人の頭はやすなる。內辨氣高舍人召。其樣異にや聞らん。采女の御膳終て後。深る程にぞ入御成。淸見原の古。暮野の川の水上に。調し琴の妙なる聲。心引てや久方の。天津乙女の薄衣。五度諷し袖。是ぞ五節の始なる。

忍戀

能やたゞ色には出じ山櫻。及ぬ枝を吹風に。いかなる匂ひようつりけん。花に成とも埋木の。

深山かくれに朽はてね。人しれず室の八嶋に紛ても。甲斐無戀も悔る煙。消ねと詠浮雲。懸る心終にさは。如何かは忍はつべき。竹の葉も霞は降ぬ夜な〳〵も。更にねられぬ宿にしも。病鵲の狂聲に。怨さや分てまさるらん。悄然たる思を。澤鳥の螢によそへつゝ。語ばや物をと計に。汗衫の袖にやうつしけん。我未しらぬ篠目の。道芝深き朝露を。涙に副て歸夜の。怨さに殘る在明の。强顔命は長經て。忍とすれど柏木の。漏て聞し夕時雨。染殘しける岩根の松の。種をば誰か蒔けん。

金谷思

金谷の春の朝には。うつろふ花を誘引嵐。南樓の秋の通夜。傾く月をや慕らん。春の情秋の興。其品様々なれ共。心一を悼しむる。思の色や切ならん。上陽の舊き床の邊。六十の夢ををくる思。陵園の深閨の内。幾夜の思を重らん。貞女峽の古。馴來跡を慕おもひ。燕子樓の砌には。昔を忘る夜の思。王昭君が萬里のおもひ。涙に爭道芝の。露の情も今はさは。かゝらざりせばかゝらましやはと。離思の増鏡。あゝ凡心に深き思。身を憂浪のしたまでも。入ぬる磯の草の名の。見目はさても片貝。君に今この浦に拾ふ。玉章の文字の薄墨に。書流けん筆の跡も。思の色をや知すらん。待宵の鐘の響。飽ぬ別の鳥の音。何も思の妻と成。未昵言も懸無に。明ぬと急ぐ衣々の。今はの山の峯にさへ。絶々迷横雲。富士の高根に立煙。行衛もしらぬ詠のすゑ。虚のそらなる思ならん。難波入江の篝火の。浪間にしづむおもひのはて。能やたゞやがてまぎるゝ身ともがな。世語に傳んあぢきなく。何を待にか藤壺の。かゝる契を結びけん。思亂し心まよひ。女三の宮の煙くらべ。柏木の露と消し思。若紫の由來の色も。さこそは思初けめ。春の雉

の末野の原。思を籠若草の。秋の男鹿の麓の野邊。妻戀ぬる思もみな。昨日は今日に暮矧鳥。あやにくにこの惜き名殘までも。たゞ其思やしるべ也。

宇都宮叢祠靈瑞

南無再拜三所和光。なむ再拜再所和光。仰て神恩の高を貴み。伏て結緣の深く。悦ばしき事を思へば。國に神の名を受。叢祠を宗神に崇しより。光を和る瑞籬は。何も取〲なりといへども。當社明神は內院の月圓に。明德一天に曇無。外用の雨普く。万人の祈願に灑令。とをくは六八の誓約鎮に。因位の悲願に答のみか。千手千眼の手房には。様〲の標示三摩耶形。馬頭一男の御子としては。慈非の忿濃に。誓は餘聖に猶勝。踵を廻す貴賤の。運壽の數々に。其志を瞻す。あの　曇無代を照。日光も同く影を垂。明星天子の由有て。星を連る御籬に。互に主伴の隔無。

覺母は悟の花開け。內董の匂芳敷。般若の室をや飾らむ。內の高尾神と祝れ。能化の薩埵は。忉利の付屬をあやまたず。此六の衢のほかに出。外の高尾神と名にし負。阿遮の利劍は羽の宮。左に業縛索を持。志□この座を勸てや。大神に臺を奉りし。西に廻ば甍有。堂閣高像の粧。念佛三昧退轉無。道に生る願望。偏思無懸有。節にふれたる花紅葉。色〲の莊嚴微妙にして。寶樹の下の寶池は。あの　瑠璃にすぎて玉の橋。光を通珊瑚の砂。禪侶軒を並つゝ。四明圓宗の學窓には。螢を拾雪を集め　三密瑜伽の道場に。はや五相成身月澄り。東に顧ば又寶塔巍に重て。寶鐸雲にや響らん。彼是何も天長地久の謀。顯密の法施豐なれば。神德彌威光を增。抑此靈神は朝家擁護の霜を積にし。天曆のいにしへより。終に朱雀の聖暦に。神威の鋒を幣帛に擧逆臣栖を列しかば。果て勅約かたじ

けなく。極れる位に備り。二季の祭禮も新なり。其や九月の重陽の。宴にかざす菊の花も。えならぬ祭なれや。紅葉の麻の夕榮。秋山飾の手向に。類をかくる神態さても神敵をしえたげし。獵夫が忠節の恩を憐て。恩愛の契も昵敷。孝行の義も重かりき。さればにや今も織の森の。こずゑに茂き恵は。法界體性の。圓滿無㝵の功德ならん。冴歸る霜夜の月も白妙の。袖の追風深ぬる御神樂。冷增音舊て〔管絃〕。冷倉にそのしるしを。奈須野のをじかの熱も。ゆへあるなるものをな。

瀧山等覺譽

瀧山等覺の靈地は。南海の北に影を浮。熊野權現の瑞籬は。北城の南北光〔仁與〕を垂。願を三の山を置〔北辰〕。大慈の峯德高く。日月出て朗に。大悲の瀧憐み深。波濤を湛て鎭なり。分ては斗藪の苔の衣に。法水を漏さず潤のみか。惣ては參詣の花の袂に。恵の露を廣灑ぐ。されば步を運人は。皆榮花の色鮮に。心を至袖の上に。和光の月ぞやどるなる。那智の御山はかたじけなく。別山嘉名の勅なれば。最も賢御言法。累代の眉目也。社壇の甍は十三所。利生方便の數多。所は密嚴の淨土にて。胎金兩部の水淸し。境は不老の悠淵。腰劒三壺の霜うすく。雲居に灑白浪は。無熱池一の流なり。天の河瀨を偃下。そも牽牛や渡るらん。曇ぬ空を引分て。誠の誓を憑つゝ。忠仁公の籠しは。國母を祈爲なれや。淸和寬平花山の。三代の帝諸共に。同く斯に經行し。七の聖も其昔。薰修の功をぞ積と聞。しかれば代々の聖主も。臨幸駕を飛令。道々の名匠。練行蹤を繼とかや。夏耶裸形の二德は。勝此道の始かは。月氏の雲より遙と。日城の霞を尋つゝ。霧〔人意〕の迷や晴にけん。如意輪観音と申は彼聖への本尊。正身の薩埵新なり。弘法大師の記念には。妙法山の

石の室。金の阿字の水澄て。自本不生の字體なれば。今は亂れずとこそ聞。傳教慈覺當山に。論談筵を調て。法味を手向奉る。智證大師這峯は。最勝講を修せしかば。千佛御頭を出て。眉間の光地を照す。鳩槃鬼の瀧より。此善如龍王來て幢を捧奉る。鷲峯一會の儀式も。これには過じとぞおもふ。佛頭出と號するも則此山也。白毫耀く光は峯。經を講ぜし所をば。最勝共又申也。應照上人の奇特は。中院に跡を殘り。煙消行空までも。讀誦の聲ぞ澄上る。如法に經を寫れし。賢御代の舊跡。龍花の朝を待なる。金經門ぞ貴き。抑聖運永延の春の天。花の都を移て。杉の庵をトつゝ。はや竹の編戸の明暮は。月すむ瀧に袖浸て。六十人の衆を結。六の道の苦を離。三七日の斷食は。飢饉の愁を顯。巡の新衆の灯は。友呼迷夏むしの。澤邊の葦の夜を籠て。このいかに結て玉の帶。中絕たりける光ならん。

同摩尼勝地

摩尼勝地の中にも。玉臺行儀の砌は。七佛岩に顯れ。景明察記の庭には。七星梢に懸り。六大觀音に掌。六人不斷の供浪法。三五番衆の陀羅尼こそ。十五童子の標示なれ。凡汾陽の流を汲。百布の色を引かへて。上求菩提の人のみぞ苺の筵を岩根に。勝敷妙の常磐に。猶墨染の色深き。範俊僧正の山籠。一の玉を留置。忠算般若を講ぜしに。瀧水天に逆上。玉の簾を卷したの。巖頭に千手見給ふ。遠山に響辨の瀧。神女の琵琶の調有。岩間を潛谷の水。圓滿陀羅尼の聲澄り。澤花嚴惟石品々に。嘉樹靈木房なれり。心も詞も及ばねば。白麻の紙も所せく。紫毫の筆も染やらず。秘所名嶋を等閑に。如何は他に書人き。後に靑山峨々として。古仙多居をト。或法聲□。或は振鈴の響有。前には蒼海漫々

として。直下と見下ば。あの蓬が島も遠からず。得つべき哉乎不死の藥。誰かは外に尋ん。扨も神功皇后。高麗に赴給し時。安曇彌ノ壽丸。亂舞の神と申て。二人の神御座き。船の中の徒然を。慰給けるとかや。彼神則此に座す。常樂安居の片延年。是等も舊にし名殘かは。鶯來鳴花の山。峯に横切朝霞。五葉の嶽の夕嵐。若耶の薪も取儲。時雨に染紅葉ての。村々見錦より。月に色付常木の。様々光に磨れて。金の波の夜の露や。亂て玉を連らむ。玄冬素雪の寒にも。此麻の衣たゞ一重。岩根に夢も結れず。禪侶檀に向て。天長地久と祈は。常住不退の行法。々儀にすがる勤者の。法施の聲ぞ身にはしむ。

拾葉集下

梅花

夫青陽の春を迎ては。南枝の初花先ひらけ。仙方の雪にたゝへて。淺紅ふんいくの色をます。若木の梅の逕こしに。誰袖なれし白妙。老木は深匂あり。木ずゑに春の風をいたむ。凡梅花の德有て。其名をあまたに分つゝ。催馬樂には梅が枝。匂の中には梅花方。色をも香をも君ならず。誰にかみせむ難波津に。さくや此花冬籠。今は春なる波の初花。立歸り見て過難。花の香や梅津の里に匂ふらむ。かたじけなくも聖廟は。天下の鹽梅。風月の匂香ばしく。春を忘なと計の。言の風に誘引て。根くじて移飛梅。琴上に飛し花の雪。軒端の梅も片敷て。ほつゝ立枝の薄匂。凝花舍は梅坪。紅梅園梅の色。榮花に

はつぼみ花やれ(な歟)。梅唐草唐梅。衣の色の妙なるは。つぼみ紅梅々重。あの雪の下の紅梅。義隆の少將が。昔語を思出る。世尊寺の梅とかや。誰蓑虫のきたるらん。垣根の梅の花笠。五條わたりの春の夜の。在中將が問ずがたり。月や非と讀けむも艶ならぬ梅の花盛。光源氏に集しは。薫合の色々。散過たりし梅の枝に。着し言の葉の分無は。先齋院の其品。紅梅の大臣と聞しも。此卷に其名をや顯けん。

磯城島

夫磯城島日本哥。才は簸(に歟)の川上より流來て。心を難波津の浪に寄。或久方の天よりくだり。或は八雲の風に傳ふ。三十文字餘一文字は。人の代の事態なれば(を歟)。とも王の御影曇ぬ証。賢哉乎皇の。代々に絕せぬ道を知。花に鳴鶯は春の林に囀り。水に住てふ蛙は心の泉に聲を副。麓の塵泥山と成て。峯に棚引白雲の。かゝる心の指南より。情と(を歟)樣々に顯す。凡哥に六義有。先風哥を始として其品餘多に別つゝ。釆女戯濃(の歟)に。此此道の歌の信を知す也。色好の家に埋木の。人しれぬ心を通じ。武道には者武の。固心を和ぐ。扨も奈良の古に。拾集し言の葉の。跡を尋し御代とよ。百年の末を受て。十續に撰し古今集。天曆は普き歌の聖。五人を梨壺に定置。花山は舊道を慕。拾遺を三代の後に繼。其より以降代々の。聖主も是を捨られず。春の朝の吉野山。櫻と雲に紛けん。あの柿の本の家の風。何も其に分難き。山野邊の霞の色。勝立むとらずや聞らん。又名をえたりし人は是。僧正遍昭は徒に。繪にかける女の。心を動す心地して。其誠や少かりけん。萎る花の色ならで。薄にほひの殘しは。彼中將の歌の品。文屋の康秀は商人の。好衣着たらん其樣。身に負ずや見へける。曉の雲に見月の。面影幽に殘しも。守治山の喜

撰とか。小野小町は舊名殘。最物哀なる女の。なやめる所有しも。古の衣通姫が流也。大伴のくろぬしは。はなの影に居て。薪を負る山人。音羽の山の音に聞ど。先言渡中河の。岩漏水の讀ても。昔懸たる玉章の。心も歌にや知らむ。日にみぬ人も斯に通。たゞこの道のしるべなり。有經神も隨して。歌に德を施す。かたじけなかりし勅判は。亮子の院の哥合。天德四年小野の宮。村上の御宇に撰る。康保の秋の半。清涼殿の月の宴。色々の花を懸ても。哥をぞ殊に先とせし。光源氏は物語。中にも深き心有。飛鳥井に寢し狹衣。ね覺に過る夜半の時雨。勝竹取の翁さびて。猶住吉の濱松の。其名替ぬ舊言も。さながら哥の媒なり。和歌のうらの道も昔に歸る波の。善惡分て藻鹽草。書置跡も絕せず。

遊仙詞

夫積石の山は。金城の坤の角。河の出足所也。傳らく河源遠。漢家の波の外に流。星霜を積て問を。この外朝の雲にや殘らん。悠々として幽に。其萬古の二三を訪へば。張騫が賢舊跡は。十萬里の波を凌し。伯禹のかたじけなく殘る跡は。二千年の坂嶮し。深谷地を廻り。たかき嶺天に横り。煙霞是濃に。泉石又明なりりや。〔行脫〕日暮道遙にして。馬疲人や泥けん。青壁の岩。碧潭の淵。神仙の妙なる砌とは。舊翁や知せけん。又松栢の巖。桃花の淵に至に。獨の乙女子水の側に。洗衣する渡有。僕斯に事問て。聊休む宿を望。家主の行末をたづぬれば。崔女郎が舍ならし。博陵王の苗裔。清河公の舊族。花の容貌。玉の姿希なる類と聞からに。調る琴の音は又。妬し顏に細き緒を。時々弄鳴ば。聞だに有を見ばと。勝いか計かは床しかりし。半面たるを垣間みて。後夜長く更深く眠ず。無爲き月のみや。窓に望し友ならん。能やさは夢覺て胸平

なり。赴て誰に語はん。徒に薫香の薫のみや。思に燃煙と立もとおりて。徘徊共披演に便無。然爲我諸共に詩を詠じ。錦の障あげたる帷。半垂とや挑げん。紅の顔翠の黛。何の所か輕に盈かならざらん。靨は織女の星を留。眉は恒娥の月を送むに異ならず。窈窕とたはやかに。忍笑とほうゑんぞ。恥しらへる粧。雅妙の操にして。歩絶て閑殆なるや。無越寂咲き様ならん。せめても昵じき戯とや。雙六の局の諍。其賭の情には。强ても醉をや勸けん。玉の備珍に。絲竹の調を調ふ。満音塵を飛し。雪を廻す舞の姿。手を擧足を蹴に。正に宮商に叶へり。さて又殿舎の構は。臺を飾龍鬢の筵。床の邊の玉の簾子。或は銅雀の正に開け。或は靈光の新なる。持成梅の梁。桂の棟。はや反宇雕甍。上る鳳にや紛らん。猶さは連れば。懷しかりし様かとよ。金の釵を正しくし。繡の茵を重たり。灯は四方に照し。蠟燭は彼方是方に明なり。始て知ぬ如何はせん。遇難見難き事を。可憎の病鵲や。夜半〱に人を驚す聲。あの薄縮と情無狂鷄の。曉を栢の小枕取て。是を十娘に與しや。忘記念のしるしな覧。

蹴鞠興

夫蹴鞠は三國握翫之藝。萬年治世の術なり。故事を天竺に擲れば。長中眼前如來の禮義を受傳。應を晨旦に初は。軒轅始て練民の法則を成りや。其書二十五篇。あの其義二六對陣なり。加之寒食の。節に是を擧とし。淸明の日是を事とす。誠に萬春千秋の觀遊として。專左文右武の義法に叶り。我朝皇極天皇政務を治給しにも。天智の皇子たりし時。法興寺の砌にして。大職冠と相共に。先此興を催す。其より以來文武淸和相續。延喜大暦の聖代中興す。朱雀一條より世々に是を續。代々に翫ぶ。中にも顯徳殊に此

藝に達し。此道に長じ御座て。人數を六八に分つゝ。韈の色を六の品に定られ。精靈を滋の井に崇て。松本の明神と號し奉。凡六藝の中より出て。三朝の間に廣まる。諸藝道多と雖。蹴鞠の德をば靈威顯れ給て。劉榮家富官祿如心。除病延壽後生善所と。拾遺亞相に示し給けんも。賴敷ぞおぼゆる。然ば則上帝闕かたじけなく。下武家に至まで。此道にぞ携。抑是を翫。方角適なれ共。南庭を用は。聖人南面にして。此天下を治故とかや。前朱雀の聖は。長生不老の道也。されば懸を植も。此砌を先として。四方四季を分は。皆其故有やな。花は春の榮德軒端に植も。習は本朝にも限らず。唐に取ても紫宸殿の櫻は。玄宗殊に賞き。楊陽の聲あれば。夏に是を象り。紅葉は秋の景物。其品數多にみれ共。鷄冠木の紅色又世に勝たり。十八公は則。千歲賢貞の德を得て。霜雪の朝に榮の程と。

隱む君子の名を顯し。忠臣の譽を擧とかや。潮木を植は。安宅の謀。懸を又立も。鎭座の方なり。さても興遊の樣々になりし所は。仁壽殿綾綺殿。溫明弘徽二の殿。嘉木の名を得たりしは。世尊寺の北なり。〔不審〕尊重寺の懸こそ。春やむかしも床布けれ。安井は仁和寺。本院の懸は神殿の前とかや。二重鷄冠木雲分。梅津の大櫻は。匂も殊に幽美く。花園の梢は西郊に在や。法勝寺〔脫歟〕高勝寺。最勝成勝法金剛院。田向殿法住寺。高松大樹大炊殿。河上河崎高陽院。此水無瀨殿に至まで。昔注たる水茎の。流を絕ず見にも。其源も賢き。其や光源氏の樣に。分無聞えし中にも。鞠に與を勸しは。えならぬ花の夕榮。所に故有庭の木立。風に亂て並立る。袖の靡も染深く。舊籬の方にや紛けん。心に懸し玉垂の。見過難隙ごとに。奧床布面影。終に如何なる便にか。梢は薰花ならん。散も恨しき花の

枝に。櫻を過て木の間を分鞠は。勝理とぞ覺る。殊に類も稀ならんは。三月の空の花曇。風治て霞日の。良影ろふ暮つ方。いや雨の名殘の露拂。野伏に非□きて。移句も並てならず。花の木陰に徘徊る。大宮人の道仕。進退れず。立連れる袖の懸。促纖類着馴せる。其色の裝束。故々布ぞ覺。三時に分作法あり。三段に蹴様有。一段三足。甲乙悉に違ず。君が八千代を延足。名殘多きは櫻狩。暮ぬと急まり足。身に副老を返し足。楊菓の聲は勅を待。壽命長乞取福祿は身に在。笑孽外に追とかや。

車

夫推輪は大輅の始。此大輅は殷の車なり。文王渭陽に狩して。大公望を得てこそ。車の右に乗けの。微公旦の指南車。夏の文明の驪馬車。市の南に遣車。轅を北にせし車。十二の車を照玉。五百の車に積寶。井中に投し車の轄。堂中に作し車の輪。或は小車に乗じて。禁朝に入人も有。或は三車の喩にて。一乗の車を顯しや。誠の法の指南ならん。さても秋七月七日。あの驪山宮に暑を避しも。楊姫替に傳き。牽牛織女を感じて。比翼の契をうらやみしや。せめて分無思なりけん。又元和の翁の遊し。玉顛山の勝景。綠短岩根の松。瘦て垂たり危岩の竹。幽鳥時に一歌。歌をまじふる寒蟬。覺に車を留てぞ。此岩巔にも至し。右近の馬場の引折の日。見ずも非ず詠しは。向に立し女車。格壺の更衣の。手車の宣旨。葵上の車爭。祭の物見車は。一條の大路に立並べ。歸遊の車こそ。紫野に遣なれ。夕顔の宿に立し車。誰彼時の露の光。扇に置し花までも。心宛にそれかと謂し言の葉。竹田河原の淀車。夜深賑る聲すごし。浮てや浪に廻らん。世を宇治川の水車。虛の空には思へ共。吹來たよりの風車の。我のみ待る心迷。其

品々のおかしきは。此輪も〔緑毛飛〕檳榔唐廂。大顔日綱代金作。八葉五緒長物見は。由有なる物をな。進もうれしき雲の上の。しるしを顯す立ふぢ。飾車に結ぶ花。小車の錦の紐とかや。家々の車の文。皆故有〔[illegible]〕てぞや覺。主床布車は。色々に匂ふ袖口。重る替を出車の。えならず染深き追風。

袖情

夫楚國の李斯が古。忠勤の譽を顯し。雨にゆするしても猶。衣の袖を干ざりき。蔡頓孝行の筵には。寒夜に袖をや重けん。黄安が仙に登し園の。梢に懸し緑衣の袖。如何なる情を殘らん。凡袖は是衣を傍妻として。姿を刷儀を成。其品直のみならず。寂染深移香の。互に留記念の。此眤き理も。乍〔是歟〕皆袖の情也。彼盜浦の闇。濃なりし語に。面を半差隠て。數曲を彈ぜし調に。京都の聲も懐布。涙に袖は太に。青衫先や潤し。さても言の花の。色々様々なる情を。拾集し匂までも。其袖の裏にやとまるらん。袖に片布月影は。只假染の轉寝の。夢だに更に。結もあへぬ宵の間に。憑めし人も來や不來やの。面影の枕に細灯の。消歸ても戀敷に。閨でや終に深なむと。身に染松の秋風も。勝我爲にや怨からん。思の色に顯しも。螢を裏汗衫の袖。誰袖觸し梅が香ぞ。昔を忍袖の香は。盧橘の夕風。暫留れど松には。尾花の袖に紛色。卷手寒朝明の。袖白妙にみるは。雪打拂旅衣。如何なれば袖は涙の宿ならん。泪は袖の由來ならん。袖師の浦袖の湊。袖ひれ振し松浦[illegible]。唐人の立舞袖の氣色。袖打通す戯。通もあへぬ手枕に。やがて明行記念の分無は。亂る袖の袋[illegible]

旅別

旅にし有ば草枕。唯假初と思しを。馴に何しに楢柴の。馴も初けんと。戀はてぬれば中〳〵

に。たゞ〳〵別路にしげれとぞ思ふ忘草。人を信夫の里なれば。心奥白河の。堰留難名殘(二字ナシイ)を。さてさは後をも憑じとや。我も人も命有ば。又も逢瀬は河島の。水の流て絶じやとぞおもふ。

雲

鷄人曉を唱て。雲居に閑を驚し。淮王の藥を嘗し古。夕の雲をや分つらん。行客の跡を埋白雲に。都の空も遠ざかり。遠樹を隱す浮雲は。花の色にや紛けん。五月雨の山本晴雲の外に。一聲名謁郭公。雨と成雲とや成しと歎比の。跡問人の面影も。淺からずぞや覺。雲冴て雪峯を踏分て。岩にや道を迷にし。飽ぬ名殘の曉に。見る人怨横雲。白雲(重疊)氣色のうれしきは。暮待空に立雲。洞天に日暮て。沉々たる雲海。蓬萊遠して。此漫々たる雲の濤。無常をおもふ夕暮の。雲に立副煙の。跡は何に消ぬらん。往事を忍曉の。雲や昔を隔らむ。立騷雲に暫は迷共。終には御法の風吹て。業障の雲ぞ晴ぬべき。

曹源宗(洞家)

向上の一路千聖も傳ず。格外の宗は又。遙に文字の外に出。あの威音那畔の古。機前に會得し。夫も猶一重の關を隔(一加一爲加重)。到非聖凡の道に。非參是心意識を放。尺加一文は多子塔の前に。始て半座を分與。靈山會上の筵には。拈花微笑時至。達磨師は梁魏の間に西來して。小林冷座の雪の夜に。深心を傳し後。二祖は禮三拜にしてや。其位に依て立。直指人心。見性成佛。教外別傳の心印なりけり。楊負暉日の前に在。頭を去外に廻に。未知音有ず。言むと爲れど詞無。たゞ南泉を思しむ。寒洲崎に立鷺も。雪には同色ならず。知や如何に。嵐に咽松の響。岩頭に淀水の音。香巖は竹を打聲を聞。靈運は桃花の色を見。桂林葉落て。寒雁聲冷。現正公案大難々々。難して

猶難からず。此安くして又安からず。扶涼しき秋風に。重る閨の狭衣。古殿の香瀬院程。珊瑚の枕の夢の中に。様〳〵なる爭の。何は醒て誠有む。功名も泡影に異ならず。富貴人も露電の如也。光陰人を待ずして。無常は早到易し。此時衆流を截斷して。一思兩門に懸され。然に至道は難からず。唯揀擇を嫌とか。萬事を浮雲に任つゝ。閑に岩下に眠べし。さても遙に思へば。過去遠々の七拂也。五家七家も取々に。不傳の心を傳つゝ。各法燈連れり。抑我朝の昔は。康德御宇治し。白雉四年の比かとよ。習禪院を立られき。嵯峨の聖代には又。唐朝の義空を迎らる。用明の太子世に出ても。片岡山の榮を殘す。本地の風光動く。頭と垂示の所なれば。物々拾取の姿無。天地と德を均し。日月と光を雙なり。猶又末後の一句有。誰かは是を辨ん。善劉下惠を學て。其跡を師とせざるべし。

二闡提

抑此二闡提は。利土を補陀落の波に浮。所居を伽羅陀の雲にし。彼は無量壽佛の補處として。觀音受記に德廣。是は大尊摩頂の付屬を受。未來の衆苦を憐む。先其觀音大士は。三部の中には蓮花部。掌に英を捧とか。修多羅の中の妙經も。たゞ此一體に備り妙音無盡觀世音。語云三昧を掌る。又能化引接の薩埵は。かたじけなくも故有哉。毘盧遮那所遍分身。曼荼の聖衆に連ては。寶冠形寶幢。此祈所の增福は。寶珠の御手に任なり。六道能化は定る道たり。望らくは無佛の境に身を任て。忍辱の法衣痛しく。大悲の威身を顯す。金剛堅固の錫杖は。奈落の鐍を摧破し。鐵城の鎖も何ならず。凡濟度は鎮に。二聖の誓卷滿。我建杣の麓に。光を和ぐる瑞籬にも。七社甍を並れども。靈驗殊に聞るは。此二聖のたまの樞。利生勝て新也。されば靈地靈場にば。

普門を開つゝ。歩を運數多く。勝地勝景にも太其譽有。粟散邊地に限無。外朝震旦に名を傳。此蘭七觀寺は廣けれど。六波羅蜜寺は分て猶。觀提の二尊聖容を並つゝ。利益を樣々に施す。觀音妙智の力なれば。怨たるも怨たらず。終に怨心を飜し。かれたる草木も日もはるに。甘露の法雨を潤して。具足妙相の花開。柳をかざす瓔珞には。春の風閑に。恵を漏さず灑。雨露の恩に異ならず。毎日晨朝の誓約は。勝在明の懸せず。煩惱のねぶりの枕までも。到ぬ隈〔長歟〕やなかるらん。圓滿大陀羅尼。千手千眼觀音。在馬頭准祇聖觀音。十一面如意輪。乃至不空羂索。天神呪深秘密字印形像三摩耶形。其結緣功力も他ならねば。たれかは仰ざるべき。常念地藏の憑有。決定を受苦疑す。慇懃付屬をしたれば。以大神通無導〔導歟〕ならん。

續群書類從卷第五百五十八

遊戲部八

拾菓抄

管絃曲

夫管絃は天地の始。萬物の父母たりやな。其理を絲竹の間に籠。其聲を呂律の内に成。目に見えぬ鬼神。妹脊の昵こまやかに。此性五音に通じて。心を和る甚なり。鳳管琴瑟取々に。曲又異なりといへども。籠笛音取麗。周絃斜に調たる。絲寄竹の聲に合て。哀聲様々に顯る。甲乙は陰陽に象て。四絃は四序に掌る。凡調子に六儀有。其又十二わかれて。無調の上下にわたりつゝ。一音不聲の初より。五聲の信をおさむる。是又今の妙儀なり。此風を遷し俗を易る道は。只樂より増れる物はなし。治世の聲は安樂な

り。愁を懷る民もなく。爰知ぬ即。百王の理亂は聲にあり。或は九照の樂をおこし。或は七徳の曲を成。哀樂の異なる。是皆五音の爲態なり。黄帝洞帝の樂は。ぁの五奏湯々然たり。我朝の聖代のつくりし。代々の賢様にも。仁和樂や延喜樂。雙調には柳花苑。何も管絃を賞らる。しかれば此器は。鳳闕朝庭の重寶。清涼殿の御厨子に。皆名こそふりんたれやな。さてもやさしかりしは。春の鶯囀る曲。のどけき比の花の宴。早神無月の風にもろき。紅葉の賀の興をまし。立舞袖の緑の色は。青海の波の立居につけて。哀とは見きとぞこたへけるやな。類も希にいよこよなく。様々なりし女樂に。拍子を調し童姿。殊にきびはにおかしき中に。立へだてゝも夕霧の。まがきはよそにや異なりけん。名をさへきくも冷きは。夏行瀨々の河水樂。いつしかかはる荻の葉の。露吹結秋風樂。千々の秋をもか

ぎらぬや。兜率の雲に聲をそふる。彌勒慈尊萬秋樂。狩庭の小野の雪の中に。昔の跡はふりぬれど。放鷹樂の其姿。いかなる木居に懸らん。げに想夫戀ぞ床敷。黄帝團亂旗は皆。舞曲の中の秘說なり。清調啄木は。調子の中の奧積。上陽性呂の春の聲。霓裳性律の秋の調。愁場性呂の水の流。聞こそ袖もしほれけれ。王昭君が數行の涙。柳塞に向しあきの風。楊貴妃が一枝の雨。梨苑に奏せし春の花。青衫いたくうるほすは。潯陽の江の船の曲。村上の聖主の調給し。玄象の撥音妙にして。承傳につたへし清涼の秘曲。上原石上黄金の柱の邊には。大絃小絃をやわらげ。碧玉の柱の間には。滴瀝の銀の聲をまじふ。離鴻は秋の霧に咽。別鶴は夜の月になく。候嶺の雲にたはぶれし霓裳。一聲の鳳管は。ぁの王子晋がその昔。黄笛晋に調。五聲八音を器として。四徳二調の譽なれば。つゐには樂音

樹下の砌。功徳池の波に聲を合。常樂我淨苦空無我。乃至檀波羅闍提諸波羅蜜の。諸の德をぞ備べき。

文字學

夫一代敎主の御法は。五時八敎に分たり。孔老無爲の理を說のみか。或は五常の道をわかつなり。其言を遷筆跡 露の點より傳てぞ。三國心を通じける。伏儀（羲）氏の天下に王たりしに。初て八卦書契を書。繩を結し政に易て。國を治めしより。此黄帝の御代に移ては。又蒼頡が文字を學。懸針垂露反鵲。廻鸞龍鱗虎爪まで。六種の姿をなすのみか。鬼龍人鳥四の形。梵漢齡字故文の體。皆是其樣ことなれど。心はかはらぬ筆の跡の。跡踏つくる濱千鳥。取〴〵なる品なれや。中にも人の心の花にのみ。うつろひやすき故かとよ。いろはにほへどちりぬるを。わがよにつたはる日本詠。三十文字余のことの葉は。四十七字にやはらぐる。文字をはしとして。わたらぬ道ぞなかりける。されば彌圓々海得の浪にすむ。五筆の水莖にあらはせる。はては無明のゑひもせずと。連る文字の數ならん。抑一切の如來は。阿字文をはなれねば。彼八不の中の不文字の。第一の不のふの字は。是秘蜜の字儀にこもれり。況や四十二字の功德は。圓融無碍の理にて。一字多含を備たり。法華八軸二十八品。六萬九千三百餘字。たゞ是妙の一字なり。法藏比丘の本願は。思維を五劫にをくりて。三祇百劫百萬行。六字の名號にきはまる。我等が五欲の薗の内。くらき迷の六の道に。いくめぐりして袖の玉。くもらぬ影を磨らん。なをし敎の外の傳。賢き諫の不立文字。々々にはやすらふ道もあらじ。巴峽山の巴水は。巴の字をつくる浪の上。曲水の遊宴に。鸚鵡盃の盃。あの石にさはるよどみには。心竊に松陰の。露

の言をつゞけても。流にむかひて早き瀬に。いかゞは子建が八斗の字。十八公の栄をあらはすは。丁固が夢の松の字。三刀をかけし夢には。州の字をつくりて。益州の刺史に遷しも。あふにあえるは時なり。梶の葉に露の玉章を。かきながす文字の歌かたは。天の河瀬にやうかぶらん。わきて風も身にしむ比は。蟲の音もろき涙も。思みだるゝ秋の心なれば。愁の字とはよまれけり。千々に物思ふ月影。我身一をかこちても。つもるは人の老と成て。つゐには八字の霜降ぬ。呂安が書し鳳の字は。いかなる恨かのこりけん。汀にとめし水の字は。くめどもつきせぬ勢に。爭をなす龍の字の。空にのぼりし雲の跡。さても天津御神の古に。時平の大臣の梓弓。砂に跡みし沓の字は。一字千金の酬なり。是則文字の德。素戔の烏の尊の昔より。かき傳たる磯城島の。道有御代はくもりなく。拾集る玉津島の。神もろともにみそなはし。花は開て万歳の色。月はみがきて千年の影。上治れば下安し。誰かはたのしまざるべき。

仙家道

太上元始之元宮は。構を渏虚の間に揷み。空洞射山の絶限は。あの基を祖聽の外ひく。三氣しなをことにし。二儀ことに別しより。洞天は三十六。金闕霞にかゞやき。福地は七十二。青巖月に欲。無爲を爲態とする。白日珍化の倫。星の位に連なりて。上帝に使する政。くもらぬ影をや照すらん。三千年になるてふ菓の。百千度万代を重て。つきせぬ水の源。菊を洗し流まで。汲てしらるゝ長生。大茅具茨の幽に深き跡。是皆物外の樂きはまらず。天地をこめし壺の內に。道德の薗をひらきて。交久き仙遊。玉の盃を客に勸ては。石の床嵐に拂。瓊蘂を摧て朝に服すれば。雲の碓水につき〳〵しく。八佾の禮を調て。

立舞玉女の袖のよそほひ。紅の雪を飜すも。妙なゝ調にかよひきて。雲吹とむる夕風。さても巴卬の橘に。其身を腰やどしをきて。濱の砂をうちすさみ。其乘物をあらそひけん。二人の翁の閑適商山の昔にも。なを立まさる栖家とて。口に含し龍根草。則龍に化しつゝ。乘てのぼりし五雲の上。げにおよばれぬためしかな。玉晨金母東王父。善門高溪安期生。太眞の秘錄に預て。無窮の庭に自得するも。おなじく一涯の内なれば。聖君の壽域と。均かるべき物をや。

五明德

五明は帝規のくもらぬ。道をあらはすのみならず。月を隱して懷に入る。樂天の露のことの葉。皆賢聖の風を仰便として。炎暑をつくす翫物たり。彼輕箑をしりぞけて。官爵を枤にせし。晉の十四年の花省。秋の思を動して。げにあだならぬかたみかは。婕妤が載せし紈素の色。雪を集る閨の内に。すゞしき夜半や積らん。わざて哀も深き夜の。程なく明行しのゝめに。思ひみだれししるしの扇。櫻の三重がさねに。霞る空の月をうつす。水莖の絕ぬ名殘。おぼろげならぬ契の末。さも假借や殘けん。そよや九夏の天に手もたゆく。鳴す扇は是や此。蝙蝠のかはほりの。とびかふ羽風も品殊に。故ある其樣なるらん。夏はつる扇に契を結置てや。白露のたまらず亂て。草の葉末にをとづるゝは。今はた秋の初風。綠の眉も透扇の。差て忘ぬ妻とみえし。豐の明の面影。一輪の明月。雲霄を出とかきすさむ。扇の匂ふかゝりし。袖の別をひるがへして。教の外の賢法に。覺入にし信の道。そもありがたくぞ覺ゆる。遍照の光重山にかくれぬれば。扇を擧て暫。此其姿に喩けるも。玉の泉の清流。五の塵をや洗らん。心を同して。悦を合する貞臣。代々をかさぬる竹のはなやかに。鶴の

翅は雲井まで。かけりて名をやあぐべき。

旅別秋情

旅別は是客の思。行路は又友をしたふ。何も哀はかはらねど。殊にわりなく切なるや。餞別は秋の情ならん。思立より峯の秋霧へだてつゝ。すぎこしかたもとをざかれば。麓の里をよそに見て。駒並て向ふ嵐の。跡よりしらむ横雲の。たえ〴〵殘る篠の目。又いつか會坂の。相の梢をすぎがてに。ほのかにまねくか篠薄。見てだに行むと。名殘をとむる關の戸を。あけてもしばしやすらへど。思ひとがむる人もなし。此山は雲につらなり。野原は煙の末とをく。海は浪をしのぎても。旅のなさけぞしのびがたき。東屋の眞屋の余に戀しければ。唯かりそめの雨宿りに。立寄友の往擂にも。いざや古里人に言傳む。分ぬすさみもおかしきは。主さだまらぬうかれ妻の。妻よぶ男鹿の眞葛原に。なれも恨て音をたつるや。おなじ涙の類ならん。凡日を次夜を重きても。旅衣の露を片敷草枕に結契はあだながら。思ひをのこす夜半の床に。蛬のこゑいそがはしき。ことをやげにさは嫌らん。今はたさびしくよはる蟲。秋の霜のをきあへぬ。寢寤をすゝめつゝ。やがて明行鳥の音。そよや千種百種かぜになびき。おもひみだるゝ苅萱。名も昵き女郎花の。はなには誰かめでざらん。まばらにふける板庇に。夜はすがらにねられめや。北斗の星の前には旅鴈を横へ。南樓の月の本には。寒衣の砧の音さびし。閨月の冷きをうれふるも。唯曉の空にあり。時しもあれや。秋の別を何様にせん。旅は夜さむの風厭敷。早九月の初三夜。玉にまがふ露をみだり。弓にや似たらむ三日月の。入方見ゆる山の端にも。此心細雲間の光。蘭蕙苑の嵐の。紫を摧籬の菊。此花開て後は更に。花鑑かつみる色やな

からん。あの露も涙も拂あへぬ。旅術の秋の夕暮。野の宮の秋の哀。秋の名殘をしたひてや。伊勢まではるかに思ひをくりけん。

曉思留記念

妹與我ねくたれがみの手枕に。思ひみだれてはらひもあへぬ衣々の。袖の涙の玉鬘。かけなはなれそと託ても。げにさはえならぬ別路。いひしらずぞや覺る。取て〔か脫〕かへりし蟬の。衣手にはならはぬ恨と。染深よりし扇の。形見もわすれぬ妻なれや。人每に淺からずたのむる中河の。とだえの橋よいかならん。いまはと語曉の。しばしおきゐる床の山に。我名もらすなといひ出ても。又近江路の行末。勢多の長橋よそに。やがてきゝもわたらば。よしやげに下行水の深き思。いつかは會瀨にうかびいでん。そよや曉月を鷄籠の峯に送。寒霜は閨のうちに殘る。こほる涙を片敷て。解ては更にねられめや。いとむつまじき移香も。我身にとまるかたみかは。彼是よしなき情を。いざゝはひたすら思すてん。湘浦の竹の世々をへても。紫に染し古を。おもへばゆかりの色の記念なれや。形見は記念に長契の。末までかはらずとゞめん。

戀朋哀傷

遇難は友なり。朋として諸共に。心を直からしむる。得事又すくなし。をのづから思をひとつならん類。いかてか呢からざらん。されば伯夷叔齊は。首陽山のかたらひあさからず。孔子は顏子淵が。此別をふかくかなしむ。うらむらくは常なき世の。避ぬ別に哀念。物のはてやさは。定れる別離の堺なるらん。思出も戀しきは。いまはいなばといひし道に。かへりこん程をば待とし契つゝ。千年をかけても。たのむかひなき世のならひは。東路遙に傳聞し。空き風の便の。哀はたぐひぞなかりける。旅の空夜半の

煙と我は消なく。つれもなくあまのもしほ火たきそふる。なげき凝積恨わび。いくたび波にそぼつらん。等閑の其言種にいひをきし。露の情のことの葉も。げにわすられぬ名殘を。いはんや膠漆のともなひ離難。芝蘭の昵かうばしく。花にたはぶれし容貌。月に語し面影。雲をへだてゝ涙を拂ひ。雨を凌で袖をひたす。ひたすらなれこし古を。誰にか今は語はん。殊にわりなく聞えしは。秋の心を傷むる。夕霧のへだてなかりし中。柏木の散にし古里に。さびしく殘落葉までも。いかゞはあだにをもはん。よしやさは今生世俗のむつびを。當來讃佛乘の因として。淨藏淨眼の賢跡や。無差世親にことならず。兜率の臺をともにかざり。一乘の筵に座をつらね。乃至一念無上の。九の品の蓮の露に。契をなどかは結ばざるべき。あの各留半座の誓かはらず。閻浮の友をぞまつべき。

得月寳池砌

山に是万歳の嵐のどかに。溪は又千秋の流久く。法水すめる寳池にのぞめば。則法流湛々として。此功德池の浪にことならず。蓮は衆色を染出せる。汀は妙なる薫香風に滿盈り。沈麝匂をまじへつゝ。香煙雲にや上らん。倩靜にをもんみるに。深き心をくみてしる。その源を訪へば。五家七宗とつたはりても。假に暫名をや分けん。しかれば道を求る叢。林は所しげゝれど。此砌にしくはなく。御法の筵を廣くのべ。忍辱の室鎭に。莊嚴玉を嚴つゝ。星をつらぬる袂は。解脫の威儀を刷ふ。朝な〱の勤行。夜々法燈を挑とか。彼も是もよしやげに。唯一筋に壁に向へば。微細の霧空晴て。澄ば心のくもりなき。此月を得たる樓閣の。名をあらはせる臺なれば。淸光をみがきつゝ。さはりの雲をぞ拂べき。宜哉逢春閣の名にしおひて。さとりの花も

こゝにして。春にあふ扉にひらけん。又側を禮すれば。蘸碧の上補陁落の聖容かたじけなく。鳥瑟を並て。普擁護を垂給。一心頂禮觀世音薩埵。抑あふひてこれらの譽を思へば。發願の賢恵より。開山の遺跡をのこす。利益は末代を鑒てや。もらさず機をば治けん。そよさは教の外の傳。あの機前會得の古を。誰かはたやすくわきまへん。唯心意識をはなれても。猶一刀をくださゞらめや。其功必至ては。法界悉道ならん。

全身馱都德

倩おもむみれば。うれしき哉たのもしき哉。生身在世に異ならず。全身の馱都に會奉る。曠劫の因あさからず。多生の緣深きにあり。されば栴檀の烟雲はれて。戀慕の思をあらため。眼前遺身玉耀の嚴を拜悦せし。まさに過分の巨益にやなぐさみけん。しかうして香性が分布の勅命。八國の諸王にをよぼし。人天六種に普く。内薫の哀愍鎮に。外に濟度の方便道廣し。遠く西天月氏の堺より。近く東土震旦の醫王山。青龍寺にもかぎらず。緣は時の宜にまかすれば。流轉所々に事殊に。相承其機にかぶらしむ。先は我朝佛法最初の執政。用明の太子の掌の。玉の臺に誕生の奇瑞樣々に。つゐに南無佛の詔。歸敬の基をあらはしけん。法隆寺の道場。鑒眞の崇し招提寺。摩尼寶殿の德用なんぞほかにもとめん。光は金輪際を蓋し。四禪無道の雲をわく。或は塔婆を三十三天の月に磨き。或師子國臨幸の砌には。現身に御法を說給。抑全身舍利寶篋印。神咒の陀羅尼門。蜜藏の深旨をよびがたく。深が中になを深は。瑜伽眞實の深蜜。誰かはたやすくのべつくさん。此天の下をうるほす。請雨の法驗も。只彼威力によりて也。神泉霜池の分身。龍神八部の擁護も。ゆへあなる物をな。羅漢の遺教流布も又。遺身

駄都の加被なり。さても世々の名匠を請來〔そ然〕々の昔は區々なれど。今に代々の勅封。かたじけなくもやたえ也。甲乙の尊容數粒を益。是則東寺一流の響として。世に又たぐひぞなかりける。凡明王のくもらぬ政も。げに此玉體威神力をめぐらして。撫民の樞をあはれむ。されば佛日日域に朗に。東漸の光益々に。光を垂る應用は。數恒河の砂もかぎりあり。かたちは米粒にことならねど。金剛の杵も摧ず。あの堅固法體の體として。法身常住をあらはす。まちかき代の事なれど。貴かりし奇特は。春日くもらず。光を和ぐる瑞籬より。明けき惠の。渡天の道を諫と。高山寺に送し二粒の舍利。解脫の信をぞ示ける。そよやかすめる春の靭綠の。のどけき日影は薄紅の。櫻をかざす花の會。秋の時雨や露霜の。色々に染成夕榮の。梢をかざる紅葉の會。絲竹の調をとゝのへ。廻雪の袂をつらぬる儀。梵琴和雅の妙なる聲。かしこに勤こゝに修する。所々靈場の法則。專只此敬禮天人覺〔天人[illegible]〕。尊重讃歎の値遇結緣。恩德廣大の慈愍にあり。いかでか我等報謝せん。伏乞天長地久の祈願成就。一花一香の手向までも。早さとりの花をさざせとなり。いはんや諸佛滅度已供養舍利者。起萬億種塔金銀及。頗梨車渠乃至瑠璃珠等の。嚴飾莊嚴の功德は。喩ていはん方もなし。勝計のこと葉もおよばれず。

江島景

虛元縹渺の堺かすかにして至難ければ。雲蓬露萊のもみか。むなしく名をのみきく。此尋やすく行やすきは。大樹營にとをからぬ。江の島の形勝。倩舊記を訪に。巨靈の神贔負と力をこらして。そばだていだせる石巖垣合細線の。道に歩をすゝめつゝ。岩根づたひに攀上。四望眼にきはまらず。先松燭を禮すれば。垂跡をあら

はす大辨才。辨才富貴のみならず。様々のねがひを三の峯。三天のすがたに象て。ぁの花は曼荼の春の霞。紅葉は色相の秋の風。かぎらぬ草木の末までも。恵の露をやそゝぐらん。鳴居荒磯ぎはの嶋めぐり。あまたの龍宮殊にあやしく。深き御法の底までも。そも掲焉道なれや。断岸によこたはる艤。碇綱を木かげに結てや。干潟をもとむるあさなぎに。拾袂の玉や如意珠。げにその心のごとくなり。或は蒼龍虎をしらべ。或は文魮の磬を鳴も。八百万代の糸竹の。妙なる聲にや通らん。鮫室に鼇鳴て。ぁの暮行空の雨そゝぎ。やがてはれぬる夕就日の。紅輪をしづむる青海に。ぅかはりて月は中空の。雲より伊豆の大島しま〳〵みえて。彼方是方の浪間わけ。夜舟漕音ぞ寝覚の浮枕。抑役の優婆塞をはじめて。かしこく聞えし古の。代々の龍象。金蜜藏の重寶を納置て。利益をほどこす東海。浪の白木綿かけまくも。かたじけなくも諸人の。祈手向になびきつゝ。袖ふきなるゝ追風。神さびまさる瑞籬の。久き宮居の富榮。幾春秋をかさねん。

諏方効驗

夫神鏡は機を鑒て影をうかべ。瑞籬は地を撰て跡を垂。彼是共にかなひつゝ。萬州に感應をほどこす。されば當社明神は。遠く異朝の雲をしのぎて。近く扶桑の塵に交。本地を遙に訪へば。普賢十願の誓約は。發露を無爲の都に打拂。ぁの千手千眼の願望は。圓滿無㝵の巷にみつ。しかれば上萬乘の玉の臺。臺をいさぎよく照滿。くもらぬ政に光をそへ。下萬民の柴の樞。々を憐〔に脱歟〕擁護は利益鎮に益々なり。或は靈地をかしこしめ。或は勝地をこゝにつぐ。尊號を上下にわかちては。貴賤踵を廻して。感歎の功

をはこばしむ。諏方の御渡の深誓。須賀の荒野の廣恵。雨露の恩にことならず。いたらざる草木の本もあらじ。大慈大悲の本誓。あまねき利物の道しあれば。順縁逆縁皆もらさず。眉白の鷹のはだれの雪。積れる罪も跡なる。消行煙の下にむせび。子をおもふ雉も歸りては。翼たかく法性の空にや翔らん。鞷の角の時の間も。かりのその身を手向ば。鹿野苑にとかれし法の。覺の道にぞ入ぬべき。蹄を草村になづまされ。鵜船にともす篝火も。後の闇路に照べき。光や和光のしるべならん。中にも濟度の方便掲焉。頓に生死にしづめぬしるしなれや。楠井の池の波の白木綿かくとみえて。國の堺もとをき海の。さなきの汀にうかぶなるも。ゆへありてぞや覺る。彼是奇瑞樣〳〵なれば。あなかまあだならぬ標示と仰つゝ。穗屋の薄のいとしげき。おり〳〵の祭禮新に。何も時にことなれど。

先は木曾路の櫻の花鑑。目並梢もえならず。かすめる比の淨樂會。賤士が早苗を取〳〵に。にぎはふ營の五月會。今は早夏六月の御手作。いねてふ一夜の程もなき。秋のさなへの神事。御射山祭は七月の末。身にしむ秋風になびく。矢並たれて者の武の。露わけ衣の日も夕ばえの色々に。袖に移ろふ花摺。げに故々敷ぞ見ゆる。さても冬籠る御室は。安名尊凍に契を結てや。時をもわかずうかぶ贄。せめてもあさからぬ結縁に。深き心を顯す。普門の誓に任てや。春秋冬夏をわかつなる。春秋の宮の宮居こそ。花さき實生恵とおもへば。なをたのもしくはおぼゆれ。四の御柱片柏も。内證四無量四抄かとよ。又幼稚竹馬をぞ憐べき。稚の名にしおふ兒宮。凡辨才十五の部類。皆一天四海を加護せしむ。抑桓武の御宇。延暦の古にし年とかや。秋の田村のほのかにきく。彼右幕下の古。戰場の道に

趣きしに。ちかきまぼりにあひそへし。神威の兵革かたじけなく。つゐに勅命を全す。しかのみならず代々の征罰をかへり見て。朝家ことに此神を重ずれば。誰かは首を垂ざらん。そよや倩仰ておもへば。天下坐神のしるしを示す梶の葉。いつもときはの色ながら。織女牽牛のたえせぬ秋の手向までも。よしあなるものをな。

別紙追加曲

源氏紫明兩榮花

そよや光源氏の品ことに。様々きこえしもてなしに。其こよなき契の。行末榮し様には。紫の上なきながらひの。むつまじくゆかりの色を。思初にし始より。我手ならしの振分髪。おひさきみえしきびはの程。思し筋のそのまゝに。かはらずねびやまさりけん。はかなき物からしかすがに。憑よすがと待えては。二心なく玉簪。明暮すさみし戯までも。いかてか情をそへざらん。今はたえならぬ色を増。樺櫻の花の花鬘。且見ても强てあかねば。春の霞に立並。類もまれにや集立けん。げに片方の夜關もさすがにおぼしてや。人道ならぬ道ならなくに。徘徊疲し道路。さればやおもはぬ旅の栖居までも。都にとめし面影。浪の立居に忘れねば。浮寝の床の梶枕に。恩賜の御衣を返しても。夢を憑し妻と成。浪間無比の哀をば。浦風の便にやとひけん。浦より遠の浦傳。只さ計の瓶ぞとも。うちと

け語出しや。せめて隔なかりし中の。此其むつごとに顯ん。忘形見をとゞめけんも。こはさは世々のむくひかは。あだならざりしかしづき種。つゐに明石の恨なく。彼岸を出しあまをぶね。うきては亙に思ねど。なれこし岡部の里もはや。海づら遠くや隔りし。さても身をつくしの。深きしるしを顯しは。住吉の神の誓に任つゝ。今日をや松の梢の。枝さしそへし榮ならん。かゝりし惠のかい有て。諸共に翅をかはひし中にして。はぐゝみ立けん鶴の子の。雲井に昇る秋の宮。高位の光なれば。月の桂の里人も。さこそは御影をあふぎけめ。彼も是も忝き。道有御代の榮花の花盛。幾万代の春をへても。猶賢き譽に誇也。

琵琶曲

鳳鸞和鳴の聲。三尺五形のかたち。或は玲瓏の響。或は天地にかたどる。其絃四絃にして。其聲二十彈。流泉ながれ清して。啄木の調妙也。霞ば遠き遠山。雲隱する隱月。撥して招く在明の月や。半の月にたぐふ半月。禁庭の草霜を戴。御溝の水玉を含。一千里に氷舖。六宮に粉飾比。中の秋の夜はの寢覺の中の君に。月の都の天津人。來て授し姿は。三五の月の色よりも。猶光殊にや見けん。會坂や人の行來を留しは。關の藁屋の曲調。馬上に愁吟切なりし。胡國の旅。漢宮萬里月の前の腸。抑尋陽江の夜。留れる船の浮浪に。思猶豫調寄や。急雨迸る大絃。私言を成小絃。涙の露は玉盤に。落副玉と成やせん。鶯きなく花の底。氷になやめる流までも。かひて又かき返す。是皆妙なる調也。妙音大士の奏せしは。雲雷音の妓樂よ。辨財天の三摩耶形。いかなる故なるらん。將律の調。石上流泉。上原石上流泉。清調平調風香調。丘泉晴超白力。相番假宗陣泰良。五娘がにぎる手。丘次郎良道木繪井天謂

橋。牧馬はいかゞ断らん。其名も高く聞ゆ也。雲井にひゞく玄象。八百万代も。五常を備るは五音なるべし。

聖廟靈瑞讃

夫榮花の花を開し。槐門の古。春の匂馨しく送て。人師範の上無位に。仰れまします今。秋の菓色鮮に。最も貴き勅なれや。爰忝もいちはやき。靈威を尊ば。天満天神の尊號として。帝都にちかづき給ては。鎮衛の樞扉を抑開く。先遙に本地を訪ば。補處の大士。十一面の恩顔。慈悲喜捨忿怒布施愛語。様々の晬濃に。乃至寶瓶錫杖の。三摩耶形も他ならぬ。標示を顯す。三十三身の變作は。六趣の塵に同く。四生の巷に身を任。十九に説るゝ法は又。語言三昧にこたえつゝ。随方諸衆聲字の實相に益廣く。到ざる道もあらじかし。近く聖廟幼稚の。奇瑞の舊記を拜すれば。菅相公の春の薗に。花のかほばせ妙にして。筆の挿頭の梢は。梅檀二葉をきざゝしめ。試に開し詩賦の句は。あの玉を連て亂ず。露も滞る詞なく。せめても餘のすさみにや。最引立て手にもならさぬ梓弓。春の遊の態までも。猶其道にもはづれず。況や節にふるゝ玉章。興を催す金言。誰かいひし春の色。東より到と。露暖かにして。此南枝花始て開。つらゝを結句には又。氷水面に報じて。雪林頭に點ずとか。中にも有難き不思儀は。家を離て三四月。落涙は百千行。此句を潜に連つゝ。殊に御感におさむといへども。發言いまだ顯さゞりし。金玉の光先立て。きゝを外朝の浪にながしけん。いかなる響なりけん。及てもいかゞは宜哉む。褒美の詞も遠離し。宜なるかなや。風月の主と仰れ。天の下のもてなし。到ざるくまやなかりけん。凡菅原の露の玉鉾の。道の道たる家の風に。靈がざる草葉の末もあらじ。されば終

に鳳闕の雲を打はらひ。日月の光を瑩つゝ。影なびく砌にくはゝりしより。袖を連し左の司。何なる中の隔ならん。おもんばかりぞ量難き。定ざる世のさがなれば。昨日のうつゝ今日の夢よ。みしはあだなる習にて。昌泰聖暦の春とかや。都を霞のよそにして。餞別の愁は浮生をもて。げに後會を期せんや。君しがらみと仰ても。せきも留ぬ涙河。いかなる瀬にか沈けん。人遣なりし旅の空。進れぬ道に行々も。猶願し宿の梢。野にも山にも立煙。同思にやむせびけん。須磨の板宿明石潟。恨はさても盡ね共。せめても慰祢とや。口詩を賜し驛の。治れる國の習とて。露驛を傳し旅の泊。はしたなく遠くきにけりと。浪に大臣馴衣。餘香を拜せし名殘までも。古郷を忍妻なれや。哀を殊に副しは。暁の夢も盡終し。觀音寺の鐘の聲。都府樓瓦の色。さてそはさびしかりけめ。ひまゆく駒の心ちして。つながぬ日數を重つゝ。かしこの栖ゐの萱が軒。十ふの菅薦菅筵。片敷涙に床なれて。終に常ならぬ世を告。三年送し二月の。末の露は花より前にあだに散。本のしづくの玉消し。跡にも光や殘けん。かゝりし程にやたへ也。人の心の浮雲に。朦霧のまよひかとよ。秋の心の晴やらで。踏とゞろかし鳴神の。雲井に天聽を驚かし。様々の奇瑞時を告。神託度をや重けん。今一度の勅命は。眉目に似たりといへども。左に移名をいとひ。二世の恨を顯しも。理とぞや覺る。然ばはたして上無臺に備り。蘋蘩の傍いつくしく。禮奠の風を仰也。

同靈瑞超過

抑當社の靈驗を。あだにしもいかゞはゆふだすき。かけまくも賢き擁護なれば。代々の臨幸にも。先作文筵を宣つゝ。同く御遊の儀を調ふ。是則神慮内證の。納受におさまるのみならず。人

倫外用の諸藝を賞せしむる故也。かゝれば節々の祭禮をこたらず。馬長の勤仕も。其品々を顯して。腰差の花の色々に。秋の挿頭をや手向らん。長き様のしるしかは。山鳥の尾のきりふの。をのが様々にきなせる笠。故々敷ぞみえ渡る。樂人十烈の蹄までも。即俗而眞やがて其。實の法の道。げにさは何なる昵有て。賤花あや子が居をト。旅の臺の假にも。光をこゝに垂給ふ。そよや聞におもんみれば。貴き哉や太政威德天としては。二世の願望を。遙に兜率の雲に照し。大内山の麓には。あの右に近き御垣守。まのあたり賢き跡を垂。甍を並る玉垣には。星を連る眷屬神。皆久遠の如來。往古の薩埵。主作は時に隨。區々の利益を施す。恨らくば外にはいつはれこ道を厭。内には直を憐。今に位次を亂ざる家例までも。正にすなほなるをきてたり。又殊に奇特の様は。松は千年萬年の榮なれど。纔五更の内に。あの百尺の枝を連。十八公の榮を。此北野の御しめに顯し。梅は萬里の波濤を凌つゝ。東吹風に送て。春や昔の匂を。今に西府の御垣に改ず。應用は所を分ども。濟度は偏に利物の誠を前とす。國を守。政に光を副。理世安樂寺社の號の名にし負も。都鄙同故あなる物をな。聞渡も。憑有は。深誓に會初河の。流久端籬の。潔御影を澄しめ。民を撫宿しの森も。茂恵の梢なり。賑へる煙のかまど山も。尙此砌に遠からず。さても貴跡を殘は。正暦の震筆。壁に書たる言の葉。他ならず文殿におさまる。しかのみならず傳敎大師の當初。吾建杣の斧の柄の。朽ぬる代々を重し後。大乘戒壇を彼山に立られしに。丞相の尊筆の御言のりに。戒珠の光を瑩し。其徳高くきこえつゝ。叡山の嶺の重寶と。誰かは是を仰がざりし。されば阿耨多羅三藐三菩提の佛達。冥加あらせ給と誓し

めし。感應日々に光をます。其理も好みあれや。延暦の餘流の基までも。只此叢祠の靈瑞の。余に又超過せる響なればなり。

鹿島靈驗

天尊光普ねくして。天津社國津神。八百萬代の中にも。岩戸をあけし朝倉や。返々も貴は。青にぎ赤にぎ。彼是此二のしで。三鏡榊の枝にかけまくも。賢き鹿島の明神は。豐葦原の本神。天の兒屋根の尊のり。末を受たる政の。猶行前もはる〲と。東の路の路の末。常陸の國に跡を垂。金鷲銀鶴二の鳥と顯れ。稻米の種子を播す。其名舊んたりと云ども。利主は益々あらた也。しかれば嶮難の河礒をわたり。石巖の山路を凌つゝ。其國に到ば。遙なる入海かけて興津浪。々に棹さす人もあり。野路の篠原露分て。駒をとゞむる類もあり。初て參詣の人は皆。汲上の濱の荒鹽に。先身を濯禮儀をなし。汲上といへる事はよな。此國に高山あり。昔大神こゝにまし〱て。筑ことをして水波の曲を彈ぜしに。彼濱の浦浪さながら山にあがりき。それよりこの名を得たりとぞ。さて其峯も筑波山。陰よりも繁き悪とは。故ある様なるらし。げに逢事片結なりし常陸帶の。長き契の末も皆。只此和光の擁護也。

同社壇砌

そよさは其社壇をいづくと御てぐらの。平々たる野外に。一の林をなせるとか。則彼地に望ば。深き谷高岡。常葉木茂き大山の。神さびたる砌に。寶拜殿寶殿。あの奥の御前ぞ尊き。八龍雷風の神。風雨を心に任すれば。普き國土の利益あり。奥の洲沼の尾高武者は。諏方住吉も一とか。異國征罰の甲の宮には。唯識論の三十頌を。顯しつけ給へり。諸法空爲座の御座の石。是忍辱觀察の思惟石。深き誓のつきせぬは。御手洗

河の流の。泉をながす水上。神代のまゝに仕きて。黄衣の神人御物いみ。しるしの龜の甲を經ても。其氏絶せぬ宮人。抑稱徳の御代やさは。神護景雲上。帝都を守らんが爲には。此三笠山に御影をさし。其春日補佐の神は。四智の垂跡なりければ。三千余社の神明は兩部の諸尊の權化にて。内外の利益を成とかや。さればにや光源氏の中にも。國は樣々にきこゆれど。彼常陸の宮の任國までも。猶此神をや仰ぎけん。さても大織冠の古。鹿島へ詣給しに。旅宿に告を蒙て。實を納し鎌倉の。末さかゆべきしるしを。あめ兼て是を示しつゝ。今に都鄙平かに藤門の榮花を開かむ。

補陀落靈瑞

夫補陀落山の靈瑞は。仰とも仰べき徳高く。三所權現は鎮に。憐深くして深事。淵水の底際もなし。しかれば弘誓の舟に法の道。濟度の岸遣からず。かしこに到ば。先は野口の大日堂。六波羅密の額の内。檀波羅密是にあり。さては慈覺の菩薩像々に。吾立杣の麓り。和光勸請の玉墻は。東國守護の爲なれば。御齋の繁昌益々也。或は所々の佛閣。或は四明の孝法を安置して。二季の彼岸を始置。皆此大師の恩徳。法を授し星の宮。陰らぬ御代を曠。開渡も貴は。山菅の橋の深砂王勝たる道の歸敬として。社壇をぞ造し。上人伊豆留の岩屋より。大劍の峰に遷。四色の雲の知部に。千里の雪を凌て。四本龍寺を建けるぞ。當山建立の始なる。今本宮と號するも。則此所に有 故あなる旨をな。あの沙門勝道曆山水瑩玄珠碑と書給し。弘法大師の實跡。小玉殿の社は。補星の垂跡なりけり。龜山てふ瀧の尾。弘仁の聖主の勅願。遍照金剛の草創。女體中宮の額有。凡南山五筆の水莖の跡。東海湖水の砌に留。梵漢共に益廣。阿遮の秘密。神咒

の字。石而の尊影。右剣四魔を退。左索業縛の標示たり。又八曼荼羅の遷は。鎮壇の香の火。種々に供養の故多し。中にも山王圓宗の弘通を。誰かは仰がざるべき。そよや梓弓春は三月の。花の白木綿掛も。賢き新宮の祭禮。菩提寂光雨伽藍。龍生の瀧も心澄。さても此仲呂下旬の比ぞかし。千部會の儀式を新を調ふるは。諸徳修験の舞を顯す諍。又前唐院旋入の重寶は。中禪寺に納る。妙見並摩訶羅天。和光の利益を助て。盛蓮道交の巧たり。蘇頗羅異人の都とする所也。達水龍かん靈物ゝゝに在をや。夫心鏡冥會して。道徳遙に存せり。能寂の利見。妙祥の攝引。群山にふを垂。孤岸に往梁する如に至ては。仁山より智水にたくして。堂鏡をみがひては。機水に應ずる物也。此山の頂の體たらく。四方に望てかへりみれば。誠に神都と覺つゝ。龍虎の姿の勢をなせば。風雨時にすなほに。靈神三所現ぜしかば。弘仁七年夏の天。此勝形を卜ては。あの二千余歳と宣給ふ。されば や徳を普施して。萬里眼前に。白雲足下にかなへり。

同湖水奇瑞

抑三の湖水をたゝへて。山水相映徹せり。其奇瑞一にあらずとか。船に棹さす始は。延暦第三の卯月なり。本迹二の神體。忝もせう道の感現。異花の色は名付難し。奇香の匂いづくよりぞ。百園の檜杉紺樓をぞかまふる。六時の鳥の聲々。此響同かりけり。鶴は渚に遊て。鷗は浪に戯。翼をふるひ聲をはく。あの鈴と玉に異ならず。異人常によくして。音樂時々鳴す也。松風琴をかけ。舐浪鼓を調つゝ。霧帳雲幕に。おり〳〵雜陁の幕歷せる。此星燈電炬しば〳〵。普香のつがねを取也。池中の圓明空裏の惠日も。普照耀の光は。遍法界を照せり。上野島を見ば又。天

長地久の祈念を。思出れば貴し。歌の濱ときこゆるは。彌勒菩薩吉祥天。藥師寺の本尊は。大勇金剛の造立。耆婆が藥の壺をぞ御身に納給ける。日輪寺の五大尊。千手が崎は觀世音。此外樣々の勝地あり。心も詞も及ず。兩峯の宿々の奇特も。嚴重にぞや覺る。小野寺は則其一。慈覺誕生の所也。傳教大師の草創。是も醫王善逝六千部。法華經一千部をぞ納る。靈山淨土の南門と。ほり出せる額あり。廣智菩薩の鐘の銘。みるに信心淺からめや。倩思ば補陀落の不思儀いと多。權現照覽し給ふらん。凡當山は桓武嵯峨の御願たり。八ヶ國を寄附せられしは。大同弘仁の善政。正一位を授しも。弘仁聖曆の事かとよ。とき葉かき葉の惠には。佛法人法興隆す。如法寫經の勤行。結緣灌頂の儀式。すべて顯密品々の法樂。威光倍增の方便。これに過たることはあらじ。されば千年無量壽佛。馬頭の忿怒揭焉。陰陽の契呢じく。恩愛の慈濃に。孝行の儀も最重。彼滿題權現の御名には。正に其所願成就を顯せり

巨山龍峰讃

夫巨山德高して。寺號を聖曆の賢に顯し。伽藍建長寺。興國の靈場鎭に。陛下征夷の雨露の恩。祈願の誠に報ぜしむ。況や三千の聖容。一々の誓願。忝くもや妙也。檀信の臺をみそなはして。福壽の寶算家門の齒に普。此榮花の花春の色鮮也。是皆新なる堂閣尊像。嚴飾莊嚴殊妙華香。三禮漸々積功德。いかてかたのもしからざらん。爰靈瑞を鑒て。異に勝地の眼目を撰る。龍峯の號故あんなる物をな。潛に臥龍は地を守。仰ば慶雲峯に聳。三光同く朗に。二儀共に納。しかれば精舍を東南の角に向ふる。正に掌方角を賞すれば也。智水の深きはかり事。溪谷の砂もなめらかに。石岩の舊苔を打はらふ。和尚德賢

して。つゞまやかなるを好すといへども。利益應用の普きにこたへて。外には耕夫の牛をかり。内には飢人の食をうばふ。佛祖跡をひそめや。魔外うかゞひ難し。又賤民の態までも。杣木のねりそくり返し。はこぶ歩に物うからず。此宰椽けづる飛驒工。うつ墨繩の一筋に。あだならぬ功をいそがはしく。茅茨を切調。されば鳳の翅の反宇。並べる鴛鴦の瓦。ゑれる甍。頗梨の壁。畵圖の色々様々に。地にはしけり珊瑚の甃。上下の莊嚴妙にして。二階の閣を重や。先二世の悉地の標示ならむ。前には諸天擁護を廻す。輪藏の經典軸々に。金玉の德用喩もあだにや及ぶべき。後には老杉谷をかこみ。古松は靈石に碧蘿の色を餝。岸竹風音を成。香嚴の忘ぬふしなれや。門葉榮枝を連ね。代々の久き様たり。花木匂を送は。東嶺春の谷の風。德月光圓に。秋を送嵐や雲をはらふらん。瑤池の浪に冷しきは。三伏の松の下風。爐峰の雪の朝には。翠簾を卷上。軒の垂氷も玉を連ね。銀砂互に映漸〔映イ〕せる。眺望四方に勝たり。いづくにかひとしき砌あらん。傳開北山の室の戸ぼそには。太山櫻の色にうつる。優婆塞の宮の宇治山も。終に菩提の菓をや結ばざりし。名をのみのこす椎が下。只徒に幽閑のおもひにつかれけんも。よしなくぞや覺る。

同砌修意讃

抑はるかに五十六世の。春の霞を隔といへども。ちかく二十八祖の秋の月は。嗣法の袂にうつりきて。陰らぬ光を仰ても。望らくは鷲峰の遺勅を頂戴し。學てもけいそくの。敎儀に空定〔足イ〕を結んと也。倩是等の願望の。むなしからざる事を思とけば。開山の恵も香しく。芝蘭谷に匂をほどこし。流は松の源を受。瑞籬の久き道は。此中の峯の叢。林はしげく榮つゝ。彼といひ是

といひ。賢誠の書は。余に又及類もあらじ。むべなるかなや。斗宗のいにしへもわすれず。懐舊の涙をうるほす。外朝の浪を凌ても。憐を送し芳志のいたり。偏に只此事なれや。凡嶺嵐窓に音信れ。飛花落葉の時を告。深更に燈をかゝげ。後夜に鐘磬を聞のみかは。目にふれ耳にてとはる所。誰かは心をはげまさゞらん。暫法の喩馬に。精進の道をばすゝむとも。退て揀擇の路につまづかざれ。何至道に機を撰ん。しかじ根を深し。勝をかたからしめんには。其功たゞ成すとなさざるとなれば。自己の本分に〔ろ歟〕などかもとづかざるべき。さてさは本分のよへもげに。怠に歩をはてべば。大道邊際無导なり。

為鹽冶〔谷イ〕廣田金吾差博士畢。

應永二年六月一日　　沙彌坂（花押）

續群書類從卷第五百五十九

遊戲部九

玉林苑上

鶴岡靈威

抑秋津島は是。神態事茂して。一陰一陽の風遠く仰ぎ。天神地神新に。光を和げたまへり。中にも天照大神は。かけまくも賢き宮居にて。伊勢の濱荻代々ふりぬ。八幡三所の御事ぞ。中もをろかなるやな。人王十六代の陛下。譽田の御門といますかりき。忝なくぞ覺る。日本武の尊の御孫。豐維穴門の御事なり。息長足姫の御代に。干珠滿珠の靈威を施し。高麗百濟新羅。三の唐國をしたがひて。終には豐國の。此宇佐の宮にあとを垂給ひき。貞觀の比かとよ。行敎和尚の三衣の袂にやどりて。男山に遷給ひしも。帝都花洛の守にて。都の南に住給ふ。御裳濯川の淸流を受繼。石淸水の深誓を顯す。その源を尋つ

つ。鶴が岡邊に新宮造せしより。げに鎌倉のさかゆべき。常盤かきはの松がえに。幾千年をかちぎらむ。柳營の春の雨。人を潤さぬ惠かな。幕府山の秋の月。光をあふぐぞたのもしき。されば梓弓末遠かれと。朝夕祈る手向のゆふしでも。さこそは君になびくらめ。

善巧方便德

夫眞俗道明なれば。善巧方便の巷につまづかず。その德則直なるや。悲智の誠の學なるらむ。進退自在なれば。本分無导にして。求とも謂じ捨とも云じ。何ぞ此狂言遊宴の戯れ。讃佛乘の因。是皆善巧方便の緣ならざらん。歌舞輿宴。伎樂の薩埵の翫び。たれかはさは徧せん。他にしも如何譎あらむ。然ば三祇百六波羅蜜。難行苦行四弘誓願。只これにあり。國を治民を育計と。善巧の教儀を守にし。方便の賢によるが故に。その眞實を顯す。凡紫泥の忝なきを。仰のみにあらず。梓の眞弓聖に。文武の翅を並ては。翰墨に記する鳥の跡。法令本より直ければ。萬機いかゞは亂らん。されば毛詩には頌の聲に和。史記左傳の玉章。玉を連て光を磨く。あらゆる內外の鎌緗も。何か善巧方便の道を法とせざる。今又舊きを訪にも。夏山の茂き世繼を移す大鏡。陰ぬ政淸して。代々の明君。榮華の花の色々。春秋の宮に及し。博陸輔佐の袂までも。民に及ぶ哀み。心王心數になずらふる。理を爰にあかす。そよや人每に移ふ情にさそはれてや。櫻をかざす櫻がり。交野の御野の朝嵐に。霞亂て花の雪。散通陰る篠の日。月に語ふ秋の國に。ね覺事問夜寒の風。時待出る谷の戶に。折しる鳥の聲々。春野急雨夕時雨。霜雪霰玉篠の。葉分の露の色までも。哀を催す妻として。その緣むなしからめや。倩をもむみれば。貴哉諸佛菩薩。哀愍善巧樣々なる。中にも東方阿

閣の始より。方域を分。尊號は又縁によるをば。須彌頂師子音師子相をば。多摩羅跋栴檀香木の。乃至十六年順曠大の恩德。大願五百に遍く。骨肉は毘布羅の峰高く。其身を分し道には又。芥子の深をも漏ず。久遠塵泥の劫數を。たれかは正につくさん。皆これ善巧誘引の基なれば。その姿を先とす。況哉毘盧遮那曼茶の莊嚴。外部の變作品とに。願以大慈悲の宿因爰に答つつ。方便の御法もさま〴〵に。廣甘露の門を開。無上の法輪を轉ぜしむ。由やさは終に善巧のたちまちに。云もて行ば。自性離會の言說。々々の外の不立文字。但然無导物之無邊底。虛空なんぞはかる事をえん。

永福寺勝景

忠臣國を治。おさめて雨露の恩忝く。六十六の境にそゝがしむ。そゝかざる草葉もなければ。藪しもわかず道しある。御世の政陰ず。法燈も光を善副。皇道ともに朗なり。一夢に時に合哉明德。々高仰は名にし負三笠山。彼右幕下家の草創。靈場樞押開て。その寺號を新に訪へば。永福智圓滿の標示として。則建久の治天を撰しも。建久かるべき。未來を兼てや示しけむ。然ればば莊嚴何ぞ褒美の詞も及ばん。たとふるに外に撰難し。寛を守風の翅は常に竹園にかける。徳化に續つゝ。猶し竹の谷までも。代々の薫風をや仰らん。幾度惠に榮ん。さても靈場を拜し奉れば。安養の聖容は無邊の光を垂。淨瑠璃醫王善逝。一代牟尼の尊像。諸聖衆みな各因位の誓約に答つゝ。過現の利益たのもしきぞや覺寶池の水は瑠璃に透て。移る橋を見渡ば瑠璃のいらか玉の砌。汀の波に並よりて。鳧鴈鴛鴦は羽を通して戯れ。苦空無我と囀る。風常樂の響あれば。寶樹の梢に澄上る。そよや梓弓彌生の比かとよ。廻雪の袂も華の匂ひにや移ら

ん。閑き空の夕榮。糸竹の調の妙なるも。兜率の園に異なず。夏山の茂時の鳥も。勝此谷にてや初音聞らん。納涼殊に便を得て。凉き風を松陰の。岩井の水をや結ぶなら。岸風に扇をも忘ぬべきは。先日にかゝる釣殿。歸さも更に忽れず。晩凉の興を勸れば。いとこよなき砌なれや。

同砌并

猶又殊に分無は。紅葉をかざす秋の興。行道山（道イ）路の此面彼面にやすらひ。色々にみゆる諸人の。袖の行すりも。ゆかし敷ぞ覺る。良冬枯の梢寂き山嵐の。音さゑ行ばいとゞ今は。小夜更る間のや。露をかたしく小筵の。床もさこそは氷るらめ。雪の朝の眺望は。よに又類や稀ならん。されば或は輕軒轅を廻して。此三薗の塵に馳。或は委（香イ）騎輿を並て。路邊の砂に進。左に望右に顧に。あの遊覽もたゞ此砌にあり。抑妙なる靈地のさま〴〵なる中にも。法水底清き石井の流。其源を汲てしれば。絶せぬ末ぞ賢。小川の谷と聞渡も。水上近き程なれや。又間荒に昔杉のや。月もたまらず漏くる。時雨の雨そゝぎぞさびしき。秋の寤覺なる。勝さは宮城野の原。野田の玉川ならぬとも。發てはいつしか。移ふ萩かやつるらん。野わけの風ぞはげしき。勝地は多しといへども。仙宮はたゞ此所。龜が淵と名を流すも。蓬萊洞をや浮ぶらん。倩おもむみれば。結縁もとに賴有哉。眞言院の安置は。無佛能化の尊容。瑜伽神秘の内證深して。深き故あるなる物をな。彼と云是と云。貴哉眞俗に共德廣して。理智光を並つゝ。〔永興〕行福寺の擧に備れば。たれかは樂ざるべき。誰かは悦ばしめざるべき。

鹿山景

方に今此靈場に望て。奇瑞の義を拜すれば。譽讃の詞も及れず。發願の願望も。いと賢檀信。法

の光をてらしつゝ。此政陰なく世治に基より。勝地を撰叢林を示し。草創最初の砌りかとよ。白鹿まで來るは。瑞鹿山の號有き。爰遙に古を訪。阿含の筵を延しも。鹿野苑に如會場やなかりけむ。西天東土境異なりといへども。然もその名は是同じ。旣に知ぬむかしを望て。新なる今になずらふれば。佛法東漸の理。いかでか賴もしからざらむ。いはんや三昧正受に入給ひし。佛光を垂事。開山和尚の勅號。何ぞ外に疑はん。左右に梵天の聖容を瞻せば。誰かは擁護を仰ざらむ。然ば解脫の風涼く。煩惱の雲を拂つつ。寺號は圓に覺月。殊に潔く。標示朗な哉。されば我は精舍甍を並たる。佛日庵を照すは。最畢は草露の如也。□□は大仙庵も仙家なれや。三壽をたもつ栖ならむ。白雲庵に從ほては。春風軒端に音信る。又遺身馱都の安置を貴めば。誰か遠く三十天の雲を望ん。善財五十五の知識を。一基三重の莊嚴。海印三昧を顯す。寶雲閣と開るも。普門の誓廣して。寶や虛空に普からん。中にも石屛流どくして。寂莫たる砌は。鷄足の坐跡に同く。妙高湛々たる法水の流は。功德池の浪に異ならず。さても余に又類なり稀ならん。三皐の額の字を仰も忝なくぞ覺るや。さは彼も是もいかゞせん。謂とやいはん謂ずとやいはん。祖師の直下の言句。他にしもいかゞは計見。外よりも來ず内よりも出ず。陰陽も互に事異ならず。天地と共に動なく。物々取捨もむこし石塊邊際無尋ならむ。拂子をとり。竹篦を上て。機にしめすばかりに。豈あたはんや。

竹園山[illegible]讃

倩おもんみれば。是道儀は感應道交の時至。機法は宿緣淺非ず。その緣識に顯。信ぜずば有べからず。貴むべし仰べし。何ぞ徒に頭然に手を垂や。爰に果葉世々に榮。竹園山動なく。鳳凰翅

をやすめてなり。明王の徳化を囀らん。寺號は又賢き法の泉。流久く絶ざる末を受傳。智水の源。あの源を汲て知。然れば桑田無絃葉祝より。乃至今に及す徳。仙岳の高に異ならず。中與殊に彌笙。古窟の即風を仰ば。塵波を拂に無星ならん。猶進退絶に。棟釋の道にも滯ず。傳開和尚，古とかや。發願を西海の波にうなし。成就は東關の窓場。樞を拂開に新なり。是則菩薩或の。雪山の行教を助つゝ。同標位家門の榮花。普開春の匂芳く。果して法味の菓を。功徳の林に結しむ。抑是等の基を思ば。忝くも聖廟の寶前にしてや。祈念通夜を重し夢の告。さだかに覺て理を案ずるに。菅原の末葉の露の。數にもあらぬ身にしあれど。漏れぬ恵をや灑らむ。照覽正賴あれば。望已に奉ぬ。さても此勝地の體多く。摩訶調御の伽らん。甍を並無雙。世に異し往反の。道有常盤山は。後にめぐりて北に行。東の境を渡り。の谷々より。西の面の谷の方域。西土の教なの緣として。六八の聖容を安置す。佛殿は釋迦の三尊。羅漢諸聖皇をつらね。祖師の勅號を仰は。大學堂の額の文。さは機に與し竹篦を。此うちある諫とおもひきや。

同砌如法寫經讃

如法寫經の勤行。朝夕懇懃の砌として。六根懺悔龍花の閣。三會の曉朗ならん。法輿の莊嚴妙なるは。寶珠に馱都の光を制。是等の功力ならねば。祈願誠に答つゝ。面々位牒の號は早。菩提の妙果に進らん。そよや十種の供養を備へしむる。靈像の庭を拜すれば。風收りて閑き御代の春ながら。開ばかつ散雪とふる。木の華がたみ。目並梢もなべてみな。薄紅の櫻色に。山本霞む夕榮。廻雪の袂を飜し。又慈尊の曲。糸竹の調を調。遙に兜率の雲にや迸らん。かく鸞笛琴箜篌。歌歎歌舞の粧。梵音和雅の響。秘漢音□

四智心略。降臨遷衆の納受も。理とぞ覺ゆる。されば普賢大士十羅刹女。二聖二天三十番神。十二神將。皆居一々の擁護をたれたまふ。

象山謠

夫呂茶は功を顯事。百藥に勝。形を調る事。九醞に越たり。大昊立春の德。緣盛りに叫にして。此雨の前に納る。國土誠にゆたかなれば。黄帝無爲の代に及ぶ。雲腴雲脚の名を得しも。雲師の司にや並けん。或は鳳凰儀て。陽精を養德を備。或は龍鱗になずらへて。陰氣を助る勢あり。山名粋を含て。鷹の觜猶物て。園牙わづかに萌して雀の合和也。青山を買々とせしより也。松の直を尋ねけん。瑤理今と位を等してぞ。松の聲をも送ける。さても皇慶の時かとよ。陸鴻漸と聞しは。一朝の譽として三卷茶經を作りつゝ。茶神の號を施して。名を末葉に殘せる。かの白樂天も。茶園産業として。あの生涯を過しき。紅葉の貞を進ても。等閑ならぬ興をあまし。雪印の客に與しても。汎無益多りき。凡三國佛祖の禮奠。九天靈耀の祭供にも。只此設を專にして。先冥應を垂たまふ。禪院點茶の軌則彌々敷。をごそかなる玄妙の善理を薦置て。實地を踏べき基には。趙州の喫茶去面に。是をながめ知なば。天下の古頭を更に疑べし。

紅葉

與有甚與有。紅葉又紅葉。宴有かな宴あり。落葉又落葉。黄葉の紅葉の色々。梢を錦林間の景物。只此紅葉に如はあらざれば。忝くも西川の。御幸絶せぬ流は。紅葉を賞られし叡慮。名にし負嵐の山下の。家々の風の言葉。其舊にや殘らん。貞觀の御代かとよ。靈木の紅葉に無との匂を制し。紅葉は綾綺殿の梅の紅葉。梢を分し色は勝。西より秋や染つらん。時は彌生の鷄冠木の。紅葉と成を手折つゝ。春ながらかくこそ秋の

と云しや。分無紅葉の傳ならん。唐紅にくゝる水も。紅葉の色にや染つらん。龍田の川の増水も。みちくる紅葉の色毎に。淵瀬ともなく深ければ。渡ぬ君が情には。錦とや惜給ひけん。湊の汐も此流の。紅葉の色を錦ぞと。浪も立來て歸るは。故郷人をや忍ぶらん。いかに時雨の染つらん。紅葉の山ぞ色深き。秋待得てや渡らん。天の河瀬の紅葉の橋。紅葉の筏を下ば。暮行秋のとなせの瀧。數行（片イ）の紅の殘るも。此さは鶺鴒の背の上とかや。鞠のかゝりに二重槻。紅葉の比ぞ興は增。紅葉の庭の杳や。かの葛雅仙が藥の色を晴けん。花の別をなぐさむは。櫻が枝の紅葉ば。もみぢをば（に咲）暫山櫻。華の春まで殘れかし源氏の卷の中をも。紅葉の賀ぞ勝なる。風の傳にて紅葉ばを。紫の上に送しや。紅紫二の色ならん。衣に色々の紅葉や。紅葉重の薄やうの櫛。何も由有てぞや覺る。文峯に辯を案。今暮行長月の。鷄毛の駒に。紅葉落葉の手綱。故あるなる物をな。或ときは飛花落葉と觀き。佛の菩提を成ぜしむ。或ときは慈愍三藏も。四變の德を褒に。時雨る秋に紅葉も。冬嵐に眠き理をおもへり。さても紅葉の品々に。いとこよなく覺るは。惑の紅葉忍ぶとも故をいはばや岩つゝじ。櫨のもみぢのはしばかり。柿の紅葉の玉章。水莖の跡をや流しけむ。松の下葉も紅葉する。天の橋立澄渡。月の桂の紅葉ばを。夜までみむとうたゝねに。ぬる手のもみぢ散事を引留ばや。眞弓八しほのもみぢ。柞に萩（小イ）が紅葉。葛の紅葉。岩垣まさき葛の葉。凡四方の草も木も。紅葉に殘る色ぞ無。抑傳教大師。吾立杣の紅葉の箱。明くれ國を祈ても。世に又類稀なれば。深か中に深心を。たれかは他に宣盡さん。

日精德

芝澗は塵俗の棲泊に非ず。嫌らくは鶴（臨イ）雲千漳（嶂イ）

の遠をなづむ事を。蓬瀛に神仙の幅宅する所。恨らくば鼇波萬里の望を隔事を。豈如や費長房が賢あと。重陽の露の情久く留り。籛彭祖が長齢。八百の霜多積庭。酈縣の谷の下水。盡せぬ流を汲馴て●五百の年をたもちしも。澗屋新を並き。足引の山路菊を打拂。袖白妙の移香の。消せぬ程の數も。いかでか千世を重ねけん。抑國治家富て。金鏤瓊葉の寶豐に。上舞下歌て。金杯の黄酒に浮。十分を引味も。十様の徳を顯すのみならず。千葉は蓮を奪。此一莖は髮を垂たるに似たり。風の力を待ずして。白露の匂を遠送り。霞にかける霜の經(タテ)紅桃の錦を織なり。今又堯舜の淳なる道に立かへり。政無爲なりと。きくもうれしき文はげに。仙洞に廻す玉の車。さても分無聞しは。光源氏の紅葉の賀に。散過たりしかさらに。うつろふ菊のえならぬを。差かへ給ひし今案由有てぞや覺る。辨のめのとの。うつろふ色をも恨しも。玉の村菊の巻かとよ。中にも晉朝の陶淵明が。籬下先生の譽。松菊主人の名殘まで。塵を通し心のおく。尋て聞べき様かは。殊に勝て妙なるは。他力超世の本願。一度御名を菊の色。金の臺に乘じつゝ。白毫の光さしもげに。逢がたき御法のしるしにて。芙蓉の菊の露の底に。妙覺の月を宿すこそ。誠に無上の功徳なれ。

玉林苑下

山王威徳

天先生て地後に定り。然て神其中にあれます。國の常立の尊始て顯給より。伊弉諾伊弉册二柱の御神。おのころ島に交りて。日神月神山川草木を生成て。國をば則神國とぞ名付ける。六十余州の神道。三千余座の垂跡。利生方便互に。勝劣無と云ども。圓宗の妙法を受て。朝天の守事。日吉山王に如はなし。その本地を尋ぬれば。或は往古の如來なり。塵點の霜遠。或は慈悲の薩埵也。利生の月晴たり。光を和げて。此穢たるに交り。物に緣を結て。濁る衆生を漏さず。さゞ浪や志賀の山邊を越には。道も法あへぬ花の雪。踏分て歩を運人は。みな遍き春に逢とかや。社壇に望てひざまづき。神祠に向つゝ。心を閑る曉の。懺法の聲澄て。六情の罪霜消ぬ。五更の天の明方。深山の松の嵐も。神さび渡る程なるに。猿の叫聲澄て殘月峯に傾く。通夜の衆徒は漸白雲の底に立歸。參詣の輩は猶。玉敷庭に集。誠に和光利物の。廣き惠とおもへば。普き影を仰て。賴心もいと深し。卯の花の開や卯月の祭には。八柳の昔の跡ふりて。一松の今の御幸。猶彌珍なり。郭公鳴や五月のに五月會。神祭中の中。四季折節の神態。權現の威光を顯す。神自神ならずや。人是を神とす。人自安からず。神の威德に預はなり。忝くも山王は。慈覺智證權現の法味を受たり。末代惡世の凡夫の。世俗の事をも嫌ず。佛法王法を守事。四方の神にも勝たり。あの利生和物の露の色。日に制てぞかゞやく。

背振山靈驗

夫海西に名隅あり。背振山是なり。飛龍背を振しかば。龍樹權現跡を卜。德善大王辨才天。天乙護法の靈場。誠に神委の地なるかな。建立の昔をかぞふれば。神功皇后の當。新羅を責給ひしに。祈精の爲に草創。此一千余歲霜ふりて。死

の松老たり。佛法の前にさは。かゝる樣ぞ有難き。慶山下を望ば。奇巖斜に峙て。雲洞深通り。洞戸に雲閉て。鳥だに翔らぬ山のをく。高々と聳たる靈岳。其頂に龍池あり。水底の石の面には。金の銘を顯せり。龍宮大城に通ずる。佛法所持の門とかや。役の優婆塞是を見て。感を荷て行し。一葉菩提の西の峯。是也胎金兩部の岩室。波旬の額をしへたげ。かりこめの岩屋は乙天童のしわざとか。遙に石陵の岩かど。廻〳〵て幽々たるに。篠原上り上れは国見の嶽。清淨結界の露地なれば。結業煩惱の霧霞。只一時に晴ぬべし。暫岩上にやすらひて。閑に山川藪澤を見渡ば。西は遙に松浦潟。ひれふる山も程近く。陰らぬ鏡の浦なれば。玉島河も影淸し。

同山弁

猶又北嶺を望ば。玉島筥崎の。松の緑も末遠く。香椎の宮の杉村。磯路を廻鹿の島。唐泊のこの浦波忽に隔る雲のなかりせば。高麗唐や百濟までも。陰はあらじとぞ思ふ。さても貴かりしは。傳教弘法慈覺智證。渡唐の波を凌しも。先此勝嶺の雲を分。斬頭の誠を凝さしむ。凡難行苦行積功累徳の行人は。歩を運て靈薬の。衣手寒きすゝの庵。昔の小篠霜さえて。手の斤ざしの明暮は。谷の清水を結び上。嶺妻木を取々に。佛の道にぞ仕ける。採菓汲水拾薪設食。乃至以身而作牀坐。法花經を我得事は。薪こり菜つみ水汲理も。思知れて頼し。欣求淨土の便只此靈地に如はあらじ。抑元明の聖代。和銅二の年とかや。三昧發得の上人。瀧業をめさるゝ事有き。則詔に應じて。花落の月に雲上り。帝闕の星を仰て。効驗威光を耀す。時に勅使の至し龍寺。陸使寺と號せらる。忝くぞ覺。源家將軍の白旗を新に奉りて。三所の御殿に納らる。末代までのしるしも。勝有難き山なれば。万歳とよびて君

をいのり奉る。

隨身競馬興

賢哉弓馬は右道にあて。明けき左文の道に並。されば三朝に是を重じて。四夷を治る基たり。傳らく違穆王八疋の馬蹄は。纔し一回天下を奈ともせず　近用明の太子厩戸の皇子の黒駒は。富士の雲路を分てかける。其徳さま／＼なる中にも。競馬の道興を催事。賞翫朝家に輕からず　家々の風儀品々なり。爰靜に史記を伺ば。〔莊子〕騶子齊に行て。此藝の雌雄を計つゝ。中下の番をかたしめ。則千金を田忌に與しも。只此道の譽なり。本朝の舊き訪ば。其儀武徳殿に始しより。忝くも清和の寶祚に備り。蜜教の法威加持の効驗を顯しも。先此道の德たり。然れば所々の玉垣に。玉の沓を調。駒のゆふしてかけまくも。賢き勅願代々に絶ず。其神山の御垣には。五月五日の儀を飾る。錦を着する其氏人の。番の數々故あらむ。左右近衛の馬場にも。折々にこの興を催す。賭弓の儀式も由有や。都の南に城南寺　洛陽東山の麓には。我立杣の上の御注連を祟らる　彼は鳥羽の御宇最賢寺衷。是は後の白河の流久き瑞籬の。濁らぬ道ある政。臨幸今に新に　叡覧其儀外に比なし　階下の月卿　松扉の雲客　皆色々の衣を連　或は勅に應ずる役に叶　或は左右の轡に隨　息賜の樣を競ても　數又用日に事々也　隨身御前を渡次第　鞭をさし韉をもてるのみならず　其品をのがさま／＼なり。

同番諸藝興

御馬を上。玄番を應ずるに隨て。木の音座を各番に向しむ　此時に上手有下手あり。左右に是をつかさどる。先皷の勝負を申ば。定れる番あるなれば。是又時によるとかや。寂興ある姿は。緋も緑も色異に。染分の袂ぞおかしき。則その

袂のしをは一筋に。よはるれとかまふなれど。つよくても猶つよかるべきは。うつしをしむる腹帶の。力七寸をからむ手綱なり。三地の内に進せ。そもいちはやき勝負ならん。取組番の心鏡。馬の跡をはやめても。我先にと勝鞭を。さしも進とすれども。同く並る鞭は。定れる持にや收之。凡是を賦家々は。上下を兼なれど。道は氏を貴ずる蓺として。秦下野佐伯や。其名は大中臣まで。譽讃の德家に絶ず。衛十列の勤仕のみか。庭火の前に立舞袖の手向にも。和光の御影をや照すらん。中にも殊に美々敷覺るは。榮木高三笠山に。隨ふ番の長。治れる手綱に取副る。左に持る梓弓。此右に帶て。やさしき名にしおふつぼやなぐひ。先日に立て見や。重なる匂ひも。いとすよなき袂の。唐紅のこぞめの袖。一重にをさされる色ぞなき。世に又異なれば。鐙にかくる葉までも。故々敷ぞ覺る。さても分無しは。光源氏の大將の。蓬生の宿りを分入しにも。鞭して露をや拂けん。又垣ほの夕顏を手折しも。彼是其身に隨態として。かつうとからぬ道にや仕へむ。

寢覺戀

其や心をくだくはしとして。世渡る道もいざやさは。戀路に迷習の。さま／＼なる中にも。眠は三更五更重ねても猶又。夜を殘す思の切なるは。戀慕の心を痛令る。ねざめの床に如はあらじ。夢路結ぶ契の覺て。あやなき夜半の小莚に。かた敷袖の涙にうかぶ面かげよ。いかにせよとて有明の。月に彊顏うかれ鳥の。うきねを友なふね覺ならむ。ねて覺をかこつ手枕の。透間の風はさらでも身にしむ。時しも秋の長夜の。恨や勝さは盡さらむ。明ぬと告る鐘の音。有難かりし様にも。あの南呂半の天津空の。空に心のあくがれけるは。ねざめの中の君とかや。四

調の音を調ても。雲ゐをしたひし名殘や。此理なりと思ならむ。ね覺ノ時雨。ね覺の砧。ね覺の床の鐘聲。いづれかは戀の妻ならざらん。

屏風徳

夫安宅のしつらひ樣々なりといへども。臺をかざる屏風に。立並類又無。譽をひとしむる物なし。八尺屏風は五尺の身を宿せしむ。六折六折は一双。彼又十二月に像る。佛名の屏風。大和繪の御屏風も。禁中に是を立る。折々のあらゆる儀を成にも。分ては七尺の屏風なり。四季を分に方有。色紙を押に數あり。詩哥を書に道あり。されば三圖是を興じ。家を治とかやな。集家誡の屏風も。彼徳にや立けむ。漏刻史名の屏風は大宗臥興瞻し。次成敗の屏風は憲宗常に是をみる。さながら政の爲也。そも琴ひき立し屏風の内。聞の教に随て。荒き風を退しも賢ぞ覺る。鄭公は雲母の屏風に朝夕影を宿し。身のゆがめるを刷ひ。寫列女傳の屏風に向居て。增々心を直くす。草枕屏風に署居薇露の屏風。國にや隱くみゆらん。世繼の屏風の哥にも。花みて歸人もがな。弘法大師の[illegible]生も。多度の郡屏風の浦。屏風の横かけと名付て。苔地を傳ふ峯通。すゞかけ衣やふりぬらん。車に立て遣しは。張書の屏風とかやな。舟差留て立しは。川より遠の網代屏風。兵部卿の宮は。逢せを深や忍びけん。雪ふる里を見やれば。山は屏風に似たりな。小野の舊道風絶ず。二度野跡を留るは。寶祚に立し書圖の屏風。繪に書ば月も有明にて。入山もなし。花も常盤に散ざれば。屏風徳ぞ面白き。床敷事の限は。見まくほしきなからひの隔となるは屏風の隱。引遣ばかり覺ても。思ひをく心の内の瀧なれば。落とはみれど。其音は聞ざりけり。中にも勝たる屏風は瑠璃の屏風。金鵝の屏風。或は孔雀魏と掃書の屏風とぞ聞。魏

證が十賢。帝に奏せし列疏を顯し。其名はいかなる屏風なるらん。又屏風を賞せらるゝ所は。河原の御祓。大嘗會御賀の砌四方拜。さても貴く妙なる哉。莊嚴儀を調へ。十二天泉水の屏風を立なるも。瑜伽三摩耶戒の靈場。故あるなる物をな。

琴曲

傳らく分無據にひかれても。聞をげにや殘すらん。班女が閨の内には。誰松風を契けん。楚王の臺の上の琴。最昵き調なれや。何も糸竹の曲。取々なりと云とも。分て情の切なるは。〔喩イ〕靈琴の妙なるねと其基を訪へば。嶺嵐の涼き冷谷の。梧桐の靈木を切調へ。龍蹄の〔舌を龍〕姿に像りて。則龍角の角をいたゞき。龍舌の含み。或は風に嘯き或は雲に聳たる響を成。されはや世に又類なき聲出の。穴面白やと聞るも理とぞや覺る。閑き春の霞の内に。朧げならぬ月に歸衣手。身に入秋の風に亂るゝ霧に咽て。峯飛越るたのむの雁。〔マヽ〕鳴の鳴の秘曲も。皆此琴のねに喩。鈴鹿の其名も舊たり。清凉の重寶と備る。乃至四絃の響までも。〔只此イ〕只音律の道より出とかや。又乞巧奠の卷をも。猶此絃に極る。檜の葉柏 片枝色染夕時雨の。槇の板屋を過音。霰たばしる玉霰の。籬の竹に音信るも。〔わりなきイ〕無調に紛なる。和琴の手に七拍子の透撥。十二絃の余の琴のねの勝たるも。故有なる物をな。絃の數もとく〳〵に。大和唐を分つゝ。品々にぞ聞る。さても異代の政令に絶ず。賢き代々のさまにも。清見原の古。吉野の宮の琴の音。抑天照太神の陰なき御守とかや。紫の琴を奏しも。いみじき〔雲山業〕御調物是也。されはや照覽も忝く。筑波山葉山茂き恵の障なく。高山のさかしきに攀上りて。水調の〔を講イ〕曲奏しむ。然ればや岩越波に。杜の名を流すも。山有なる物をな。幽玄かりし翫の。さま〳〵なる中にも。女三の

宮の琴の音。女御の君のしやうのこと。紫の上の大和琴。みな是こよなき類なれば。並るわざや稀なりけん。そよや妙なる哉。大球緊那羅が琴の音。威儀を忘れし解脱の袖も。則この器の德。正に中道の妙理の。その理を備ればなり。

餘波

花月の窓の交には。昔の昵忘ねど。程は雲ゐの望にぞ。霞隔る位山。憂しの門のわたらひ。今も定ぬ世なれども。流れて早年次は。立も歸らぬあすか川。正に恐正に痛正に恥ざるべけんや。三聖の教は殘れども。空く五常の宗を忘れ。桑門の姿は學ども。亂に木の叉（宋叉の戒也）の禁を犯す。忠孝互に背。乘戒共に是ゆるし。倩我等が有樣を思解にも薄氷。踏みる路の一だに。などあやぶまず成にけん。かゝる浮世のさがに猶。東土の利生おこたらず。忝なくも留置。清涼寺の尊容は。忉利の形見も今ははや。由來までに覺れど。

妙なる哉や八軸の。垂露消せぬ貞文。貴き哉や一念に。雖霜殘らぬ本願。正像已に暮ぬれど。遙に在世の名殘ある。遺法流布の時なれや。埋ぬ名をや殘しけん。龍門原上の苔の下。朽せぬ骨や留りし。段氏顏氏の石の上。あの其も思へば唐の。遺き跡とも云つべし。傳て聞も袖ぬるゝ。恩賜の御衣の言葉。心盡しのも。思合て分無は。朝雲暮雨の夢とかや。その■までも故有は。三笠山の家の風。良吹たゆむ程も猶。人には殊に殘し置花の梍の司人。半日の昏は他なれど家路忘るゝ花の友。一夜の契はかりなれど旅ねをしたふ草の庵。いかでかしたはざるべき。昭陽の床の面かげ。爭か忍ばざるべき。長生の臺の私言。明る夜の惜き名殘は衣々の。袂につれなき有明。雲ゐに冴る霜の上の　庭火の影のほのかなる。神樂の末のかゝかみ。袖打しめる人長の。今はとみゆる一儛。最幽玄聞しは。彼命

婦が遁し嵯峨の庵 昔覚る物ながら。此香の几丁のけずらひも。物さびわたる棲居なるに。事問來る雲の上の。情や哀催しけん。分たる物の音取々に 隈無月に調すみ。なみだも共にかきなかす。響夜深く成し程。一具終し蘇合の。名殘も身に入松風に。彼信明の 少將の。さもぬれがたく名に負し。袖もとにぞしほれける。さても寛和の御門の。はかなき夢に驚て。六月の廿日あまりかとよ。貞觀殿の高妻戸。押明方の月影に。さすらひ出て華の山。妙なる法の道に入。賢跡をのこされしも。かの弘徽殿の玉章をば。なを御身にぞそへられし。 されば妻子珍寶及王位に至まで。皆是有爲の業報にて。いまはのきはの夕煙。つゐにはなびかぬ物なれば。實の道にさそへかし。我まだしらぬしのゝめ。御法の花に移ばや。心の内をいはねば。いはんや私學のしるべせし。子も恩道の老のなみ。歸て迷やみ路をも。たすくるためし稀なるに。或は道を重して。高槐の月に詠をとゞめ。或は命を輕して。細柳の風に名を惜。則兼父の恩愛の。跡まで及名殘なり。まして十月そのはらに。やどしわづらふ箒木の。おひゆく末のはる／＼と。はぐくみたつるかなしみも。げにありはてぬ青柳の。春のよそほひはやく暮。小萩が本の秋の風。露の夜すがの昔まで。はかなき契と成世には。なにの名殘もなき物を。只其爲に西に馳。東にはしりていとなめど。皓然として行ぬれば。所有の産貨も悉。皆他の有とや成ぬらん。厭はゞやいとはゞなどかいとはざらん。いへば難波も法の船。さすが岩木にあらざれば。このむとこのまざるとなり。發心の標ひらけなば。阿耨菩提も遠からじ。

衣

夫衣は。眞俗二體を分ち。君臣上下をさだむ。さ

れば三世十方の諸佛は。解脱の衣を餝とし。一代無二の教主も。忍辱の德をほどこす。出世大事の因緣を。說あらはし給へり。一乘無價の適も。逢がたき衣の裏にかや。抑遙に思遣四十八願莊嚴淨土。理槃の雲の衣。いかなる粧ひなるらん。凡生を人間に受て。十善の位にいたるも。五戒法衣のあつき力。つゐに法身のはだへをや餝るらん。綾を織なさゞりしは。三皇の賢き時の衣。寒夜に御衣をあらため。民を憐給しもかたじけなくぞおぼゆる。中にもわりなく聞えしは。實方の臨時の祭の小忌の袖。御手洗川にやのこすらん。雪を拂ひし面かげ。行平の鶴の摺衣。在中將が忍摺。さても宇治の橋姬。片しき衣霜さえて。待夜むなしき袖の氷。とけぬ思をや重ぬらん。光源氏の品々に。色〳〵の衣をわかちしも。其情をや定けん。げにも狹衣のふしぐ〳〵も。いとしたはれぬ形見なれや。小夜の袂のかはかぬは。泪をもらす戀衣。陽春程なく影闌て。紅花根に歸り。鳥もふる巣にいりぬれば。霞の衣たちかへて。いつしかうすき袂哉。秋は身にしむ夕とて。泪をさそふ袖の露。ねぬ夜非間月影よ。哀をそふる妻なるらん。役の優婆塞の其みの衣。露に馴來て幾秋か。すゞ分し袖もしほれけん。梵天の衣はそもいかばかり輕して。わづかに三朱なるらん。この羽衣の衣手に。五劫を懸し非願は。げにあさからずぞ覺る。

〔右自撰要目錄卷至玉林苑以國書刊行會本參考訂正〕

續群書類從卷第五百六十

遊戲部十

平家勸文錄

平家相傳之大綱

初て釋し曰。抑平家の大綱を釋するに多儀有。先平家とは桓武天皇第五の皇子。一品式部卿かづらはらの親王の御孫。高見王の太子。高望の王の時。寛仁(平歟)元年十二月十三日に。民部卿宗章の朝臣帝皇をかたぶけんとせし時。祖王の宣旨をかうぶりて。宗章を追罰せし故に。天下安穩にして洛中太平也。人民平安にして國土豐饒也。故に帝王御感有て。同二年の五月十二日上總守になり。朝敵をたいらぐる故に平の姓を給る。

次家者

忽に王民を出て武家になる故に。宮の字をば捨られて。家の字をたまはる。朝敵をたいらぐる故に平家と云也。

次物者

親王の御子これ也。高望の親王の御子。鎭守府の將軍義(良歟)望なり。

次語者

六人の平家の作者也。其六人と云は。一には少納言入道信西の嫡子。高野の宰相入道が作文の平家は。本末とゝのほらず有けれども。其詞優美なる故に。世にひろく用られたり。是を北國平家と云。赤坂の道信が流と云也。三十六巻の文書也。二には少納言の息女。宰相入道には妹。善恵比丘尼の作文の平家は。其詞ひいでたりといへども。女の言葉なれば物よはき故に。あまねく流布せず。月卿雲客の北方。内裏女房達のもてあそび物と成ぬ。世間にかな本とて。在家の中にひろく流布するは則是なり。三には少納言入道の三男。宰相入道俊教には舎弟。櫻町の中納言繁教卿の作文の平家は。佛法の詞をまじふるが故に。平家のうちに是を用ゆ。むねとは高野。粉川。天王寺。山門。三井寺。小野。廣澤。双林寺。廣隆寺等に多く流布するは則是なり。四には宇治の大臣の御孫。權大納言助高の卿の作文の平家は。寛忠僧都安樂寺下向の次に。豊後國にして是を寫し上りつゝ。尾張國熱田の大宮司宗泰は妹聟なるに依て是をあたふ。東海東山道の内。國々に流布すといへども。未本末首尾もとゝのほらず。さるによつて在々所々にあまねく是をもてあそばず。五はもろなかの舎兄もとみつの中納言の作文の平家は。洛中にあつて流布せず。其御子に吉野執行大納言の律師榮田がこれを移して。御子の中納言法印朝光にあたふ。是を西國本とは云なり。また北國にも少々流布せり。六には少納言入道信西の子息。玄用法師の作文の平家は。上中下三巻の書に作る。天台山に是あり。後嵯峨の御宇に召出て。院中のもてあそび物と成て。山三井寺に多き故に。東國にも少々流布す。北國にも是有。其後中壹年有て六巻の書に作つゝ。性佛熊野の權現の御示現によつて

かたり出せる本則是也。夢中詫宣の本といへり。此六人の作文平家は。思ひ〳〵の本とて。家々に是をもてあそぶものなり。抑今案ずるに。當流の平家は四條大納言公任卿の御子息。三條大納言公教卿の鴨本末を委細にそろへたりしを。内裏より御使ありて召出されてゑい覽有に。其詞優美にして本末相違なき故に。時の關白殿御息法性寺殿御披見有て。勘點をくはへられて。後あながちに世に流布すべからずとて。内裏の飛香舎にをさめられて。其後法性寺殿御逝去の後。五ヶ年を過て御孫中殿の御子息内大臣もろかね公。勸學院學匠と共に御内談有て。十二卷の書に作たまへり。其後洛陽に流布せり。其後四條院の御宇嘉貞三年丁酉五月十八日に。正二位行右大臣藤原朝臣公胤公の五男親隆僧正の時。内裏より申出して。本朝十二卷の合戰狀と名付つゝ。大唐の時身にしたがへて育王山に披露し給へり。其山の衆徒湛清僧正と云人是を披見して。此書を先祇園精舍の一行計をよみつゝそれよりおくをば披見に及ばず。紫點を仰て感歎の書をそへて本朝へかへさる。大唐には此本を書て育王山の巽のふもと寶光寺にして是をうつす。本をとりて育王山の坤のふもと稱名寺の住僧これを寫す。是大唐第二傳の本とす。其本を取て育王山の南のふもと最勝廻寺にしてこれをうつす。是大唐第三傳の本とす。其のちは大唐國には在々所々に披露有と承る。たとへば我朝には蒙求百詠樂府等のごとくに。人々是を珍敷す。其後五ヶ年有て。僧正歸朝の後是を本朝に披露す。四條院大に賀し思召て。草案中書清書の本ありしを。草案の本を。洛中の當道に御免ありぬ。中書をば世間流布本とて。在俗の中に多く是有　清書本をば内裏に納られて有を。

三條大納言教道卿、法性寺殿御孫右大臣諸兼と申合內裏より申こひつゝ御子息達並中納言僧都觀照調子の草の字を種々に調て流布し給ふ。雖然一部の始終本末其奧書を調へて相傳する人まれ也。朱點、墨點。文字の讀。うら書。きゝ書は比叡山楞嚴院の沙門秀明法印勘出して書なせり。此奧書の本末をつたふる人は。人間通神。世間達智、出家の爲には智識なり。地によつてたほるゝものは。必地をおさへてたつ。內典につく者は內典によつて佛法をます。孔子老子の震旦に出現するもかくのごとし。又これにおゐて多くの義理有。或は宇治の巻本ともいふ。其故はうぢの大納言教道卿の內裏より申出し書寫して。世間に流布し玉へる故也。或は雲井の本共いへり。其謂は內裏の御書所におさめらるゝ故也。昔は一國に一本なり。いまは諸國郡鄕に流布せり。仙道を好む人は是を嗜て。鬪諍死亡するを。佛の御名をとなへて。修羅の苦患をぬくなり。才覺をこのむ人は是をまなびて智惠とす。抑東大寺の親隆僧正は入唐の時本朝より身にしたがへ給ける文には。朗詠、文粹。三教指歸。平家。是等なり。唐人披見して曰、三教指歸は佛法によりて文書あらはすとて紫點をくはへず。文粹は雜筆也とて空く返さる。平家は唐朝の史記と文書に似たり。內外典に通じたる書なりとて。紫の點を加へて返されたり。此平家に四部の合戰狀あり。いわゆる保元の昔は主上上皇の國あらそひ。源平兩家の軍兵一所に付事もなく。父子箭先を射ちがへ。兄弟刄を合て主從讐敵となるを。本朝第一番の合戰と名付。次に平治元年の古しへ。右衞門督藤原信賴卿。左馬頭源義朝、主上上皇をなやましたてまつりて。みちのり入道を誅し畢。子息所從等は東西南北に逃散

じ。其作類悉亡ぬ。是をば本朝第二番の合戰狀と名付。次治承の比兵衛佐源賴朝。一院の院宣並高倉の宮の令旨によつて。信濃國東八ヶ國をもよほすに。信濃國住人木曾左馬頭兼伊豫守義仲上洛して。平家を打落して後。元曆元年の正月中に都に有といへども。惡行過分の故に。賴朝の爲に誅罰せられ畢。同二年三月廿四日。長門國壇浦にて平家作類悉ほろぼされて從類眷屬のこりなく誅せられ畢。是を本朝第三番の合戰狀と名付。次に承久三年の今は。後白川院御孫。高倉院第四皇子後鳥羽院の御時。鎌倉將軍賴家をそねみ給間。御むほんをゝこひて關東をせめらるゝといへども。却而夷賊のためにほろぼされて。隱岐國へ流し下しまいらす。在所になぞらへて隱岐院とぞ名付奉る。是を本朝第四番合戰狀となづく。如此の四部の合戰狀。或は義理を悟り。或は難字を知り或は

序題をきいて道理をわきまへ。或は死亡を聞て無常をしる。餘の三部は年號によりて名を〔略〕うる間。さしたる末鈔もなし。平家はゆい書有によりて其末抄世におほし。故に平家は題名に付て三十一の名字あり。其第一には鬪諍集となづく。其故は源平兩家の軍兵打死殺害死亡多きが故なり。二には鬪諍生死集と名付。其故は源平兩家の人々の外にも。修羅殺害ともいはず。轉々生死のつみ多がゆへなり。三には盛者離苦集となづく。其故は主從父子兄弟等行末をしらず。別のなみだに袂をひたす故也。四には愁難衆沉集と名づく。其故は月卿雲客の北方。后妃。宮女。皆海底にしづみし故也。五には逆罰因緣集となづく。其故は平家惡行。並十善の帝王を源氏せめおとし。異國迄傳えきこへしかば。人々皆舌をふりし故なり。六にはふでう惡妄集となづく。其故は關白を流し親

王をせめおとし。茂仁親王をせめて其首をきる故也。七ツには惡行用心集と名付。其故は平家の惡行過分にして、神明三寶にも捨られ奉り。都てほろびし故也。八には迷路會菩集と名付。其故は平家都を落て後。筑紫へ追落されて。大宰府に付て後。小松殿三男左中將淸經朝臣海底に身をなげし故也。九には無常觀行集となづく。其故は源平兩家の合戰の時。熊谷次郎直實大夫敦盛をうちて後。菩提心を發して高野山に籠りて後。菩提をとぶらひ奉し故也。十には和漢才覺集となづく。其故は平家の事といひながら。本朝の物語のたとへ。皆史記文選等の要文どもを引聞。漢士の言葉をしる故也。十一には偏悟道理集と名付。其故は善惡の言葉をきゝて。無常の道理をしる故也。十二には佛法滅法集と名付。其故は南都の燒亡。並三井寺の坊舍を燒拂。佛像經卷を燒失ふ故也。十三には伽藍破滅集と名付。其故は東大寺興福寺。園城寺の堂舍塔廟悉燒拂故也。十四には王法經義集と名づく。其故は後白川院の法皇を鳥羽の北殿におしこめ奉りて。多年御愁歎有故也。十五には轉果被幸集となづく。其故は池の尼公賴朝をたすけ給ふ故に。大納言賴盛また賴朝にたすけらる。修羅道の苦患をまぬかれて。善生好德する故也。十六には今古褒美集と名づく。其故は薩摩守忠度都を落し時。さゞなみのうたをたけく優美によみたりし故也。十七には愛着別離集と名付。其故は小松内大臣重盛公の嫡男權亮三位中將惟盛。おもき妻子をふりすてゝ。後世菩提をねがひし故也。十八には怨增會苦集と名付。其故は平家都を落て後。讃岐國八島の磯にて。白鷺のむらだちとぶをも。源氏の白はたをあぐるかとうたがひて肝をけし。夜の鴈の飛來るを。敵のふねをこ

ぐかぢをとかと心をおどろかしゝ故也。十九には五情怨苦集と名づく。其故は晝夜諸國の兵をめし集て。源氏を防げどもかなはざる故也。二十には求不得苦集と名付。其故は筑紫をば山家の兵藤次秀遠に具せられて。山がの城に籠玉ひしかども合期せられず。山野はひろしといへども。やすまんとするに所なく。大海ふかしといへども。のまんとするに潮となり。遅々たる春の日も食をもとむるにえず。沉々たる秋の夜も衣をもとむるに是をえず。然ばはだへをかくす事もなく。うへをやすむるたよりもなき故也。廿一には五衰出現集と名付。其故は建禮門院西國より御登り有て後。東山吉田といふ所におはしましける。是も猶都ちかき所なればとて。其後小原のおく寂光院にわたらせ給へども。たすけ養奉るべき人もなし。入道大相國の御娘たるうへ。一天の后の宮にてわたらせ給ひしかば。何事かともしくわたらせ給ふべきに。只今はなに事も御心にまかせぬ御ことなれば。ひとり山中の御住居。たとへば天人の五衰來りて。獨隣家に捨られてかなしむに相おなじき故也。廿二には榮花因縁集となづく。其故は太政入道安藝守たりし時御方に候し。保元平治兩度の合戰にうちかちて。太政大臣にあがり。子孫榮花にほこりし故也。廿三には惡靈毒集と名付。其故は讃岐院をばのちに崇德院と號し奉る。其後又神とあがめ奉り畢。宇治の左大臣殿も惡靈となり給へば。おそろしき事共ありしかば。贈官贈位をたまはられし故也。廿四には誕生優美集と名づく。其故は安德天皇御誕生優美の事。代々の帝の誕生よりすぐれて耳目をおどろかしゝ故也。廿五には流罪望郷集と名付。其故は法勝寺執行俊寛。新大納言成親卿。終に召かへさるゝ

事なくて配所にてうせ給ひし故也。廿六には下陵死亡集と名付。其故は安德天皇外家の惡徒にひかれて。長門國壇の浦の海にしづみ玉ひし故也。廿七には源平因緣集と名付。其故は源平兩氏の敵對はじむる事。源平兩氏の朝家に召つかはれて。源氏のおこる時は。平氏勅命によつて是を退し故也。廿八には闘諍廻制集と名付。其故は源平兩家の敵對はじむる事。崇德院の天下をみだり玉ひし時。のりなが爲義制し奉れどもかなはず。或はきられ或は流罪せられし故也。廿九には兩氏爭威集と名付。其故は左馬頭義朝。太宰大貳淸盛國をあらそふ故なり。卅には夫婦往生集と名付。其故は入道相國妓王妓女どち佛を寵愛して有しが。佛性從緣逃の文にたがはず。此四人の白拍子ども入道を緣として往生をとげし故也。卅一には人衆誅劫集と名付。其ゆへは北條四郎時政上洛して。平家の子孫と云ものを。一歲の子二歲の子を殘さず。數を盡してほろぼし失て。洛中をしづめし故也。如此卅一種の名字。家々の人々思々心々に題目を書出してをくといへども。世以あまねく流布せず。去ほどに四條院より宣旨を下されて。此作文の題目名字定がたし卅一種の内何をか名字とさだむべきとおほせ下さる。寛曉法印承て北野天神宮に三七日參籠して。此作文の題目をば何と付べきと。今夜の内に夢の告をさづけ給へと祈誓申さるゝに。三七日之滿する曉の天に。御寶殿の内より四十有餘の束帶裝束ノ上﨟一人。赤衣の衞府御供して出給ひ。右の人さし指をさしのべて。夢の内に彼の法印がひたいをおさへてのたまはく。横の一てんに八十の字を加へ。天下平にして國土豐饒の前儀なり。穴の上の點に家の一字を加へて。家々の賞翫繁く多して。「群載」郡俗備

人の榮耀ならむ。物は將來をへずして天下によき人あまねからむ。語は未來に絕べからず。傳る風さかりにして萬國流布せんとの玉ふ。寬曉法印夢覺て此義を案ずるに。私の義にあらずと思ひて。夢想の文字をふたに書て內裏へ奉る。內裏より勸學院の學匠共をめしあつめて御沙汰有。各かなはず。菅丞相の末孫武藏守爲兼の朝臣がはからひとして。橫の一點に八十の字を加れば。一八十は則平の一字なり。穴の上の點に豕の字を加れば。穴の下の八點をすてゝ。上のかぶり計取て豕の字に合れば。即家の字になる。天下平に家々に賞翫すれば平家と云物あつめのことばなり。諸の字を合すれば則物語と云。さては別の子細なし。三十一種家々の人々かき出したるも無用の事也。只今平家物語と云べしと題目に定りぬ。ゆへに尤源平兩家の菩提並末類所從等の菩提の品を先とすべし。又題目に平家物語とあらはるる事。尤神妙なるよし。上下一同に僉義有て。平家物語とぞ名付らる。是卽凡夫のことわざにあらず。神明感應の名字なり。誰人かこれを忽諸せんや。本朝四部の合戰狀の中に。此題目は北野天神御示現也。餘の部は年號をもつて題目とす。故に此部には闘戰を觀念し候。彼死亡〔下闕〕等の靈をとぶらふべきもの也。又平は泰也。天を守儀也。家は萬民をおさめやしなふ義なり。物は天下の諸の事を集る儀也。語は廣流也。天下流布の義也。又云。平は道理通達の義なり。又云。平は朝敵滅亡の儀なり。是高望の親王並鎭守府の將軍義望をさすなり。家は作文の納る所。內裏の飛香舍是也。飛香舍の出仕は一人の外はゆるされず。舍は宮の儀。宅の儀。家の義也。故に平家と云物也。物と云はかづらばらの親王をさす也。諸とは前の六人の

作者をはすつ。三條大納言公敎の御事をさすなり。後に內大臣に成給ふ。然ば久我に御所に御座あれば。久我の內大臣とも申けり。此故に當流の平家をば久我の卷ともいふべきなり。語は源平兩家有待無常。並漢家本朝修羅鬪諍に身をほろぼしし官兵軍兵。一業所感の死亡等の悲歎の言句をかたり出す。故に物語とは云なり。無常を本として。餘の討どもをば才覺にせるなり。又云。平は東方に司る。四鎭守護の天童には第一の提頭〔吒歟〕賴化〔託歟〕天王是也。鎭は守護之義也。此には持國天皇と云也。諸乾闥婆王は此天王の化身也。家は南方に司る。四鎭守護の天童第二の毘樓勒叉天王是也。此には增長天王と云ふ。諸鳩槃駄縛叉天王是也。此には廣目天王といふ。諸龍王は此天王の化身也。語は北方を司る。四鎭守護の天童をば第四の毘沙門天王是也。此には多門天王と云。諸夜叉此天王の化身也。如此のふしぎどもを語りあつめて。世に流布せる故に平家物語といふ也。

平家勘文錄一卷記

本云。于時至德元年三月四日書上畢。末代重寶是也。當道秘書何事過之哉　可秘々々。

山王上七社。大宮權現本地釋迦如來。二宮權現本地藥師如來。聖眞子權現本地阿彌陀。八王子權現本地千手觀音。客人權現本地十一面觀世音。十禪寺權現本地地藏菩薩。三宮權現本地普賢菩薩。

又中七社之中三社。聖女權現本地如意輪觀世音。早尾本地不動明王。大行事本地毘舍門天王。此十社當道中拳〔峯歟〕勸請而名宿神者也。

三十番神

天照皇大神　　八幡大菩薩

賀茂大明神　松尾大明神
大原野大明神　春日大明神
平野大明神　大比叡大明神
小比叡大明神　聖眞子權現
客人大明神　八王子權現
稻荷大明神　住吉大明神
祇園大明神　赤山大明神
武部大明神　三上大明神
兵主大明神　苗鹿大明神
吉備津大明神　熱田大明神
諏訪大明神　廣田大明神
氣比大明神　氣田大明神
六日鹿島大明神　七日〔北野〕比野大明神
八日江文大明神　九日貴船大明神

長祿三年己卯九月十二日。椿一檢校明岩一公庵主年六十九圓寂。

辭世頌曰。

韵聲不識。自己所及。末後一句。不來不去。

延德三年辛亥三月廿一日。於一檢校觀崩乘大德。年八十四圓寂。輪一檢校。法名日圓。在名宮城。

職代記

自中興職之次第之口書

自往昔職之次第。其外座中之由來。記置物雖有之。去應仁錯亂中於淨教寺紛失畢。其以後被唱失之間端々記置也。

〔第一脫歟〕中興開山覺一總檢校。在名明石殿。戒名心月本明大德。御迁化應安四辛亥年六月廿九日。

第二其以後之職。慶一總〔檢校脫歟〕。在名鹽小路。戒名開天道聲大德。此外之總檢校不分明。永享八丙辰六月十五日迁化。

第三相一總檢校。在名井口。戒名妙觀大德。丙辰自職十七年。享德二年正月廿日逝去。

第四 仙一總檢校。在名退壇。戒名師堂心超大德。職二年。康正元乙亥十一月三日逝去。

第五 想一總檢校。在名竹永。戒名源照大德。職七年。寛正三年壬午三月廿五日逝去。

第六 壽一總檢校。在名川島。職四年。文正元丙辰死去。

第七 收一總檢校。在名竹村。戒名乘永大德。職十三年。文明十一年己亥逝去。

第八 竺一總檢校。在名宮川。戒名如練降江大德。職十七年。明應五年丙辰九月十日逝去。

第九 城文總檢校。在名森澤。戒名大德。〔誤脱歟〕職七年。文龜三癸亥卯月廿八日逝去。

第十 拜一總檢校。在名廣川。戒名好玉大德。職六年。永正六己巳八月十五日逝去。

第十一 秀一總檢校。在名若山。戒名明秀大德。職十九年。享祿元戊子十月十九日逝去。

第十二 賀一總檢校。在名山村。戒名明宗清光大德。職四年。一年隱居。天文二癸巳卯月廿三日逝去。

第十三 積一總檢校。在名宮島。戒名月溪明心大德。職一年。天文三年甲午九月十六日逝去。

第十四 城見總檢校。在名金山。戒名音響宗觀大德。職一年。天文四乙未五月三日逝去。

第十五 天一總檢校。在名松崎。戒名淸順大德。職六年。天文十辛丑十二月廿二日逝去。

第十六 芳一總檢校。在名竹島。戒名善秀。職二十五年。永祿九丙寅二月十三日逝去。

第十七 善一總檢校。在名甲寺。戒名直翁宗透大德。職十五年。天正八庚辰十月廿九日逝去。

第十八 鏡一總檢校。在名松本。戒名松山宗光大德。職十二年。天正廿壬辰正月十四日逝去。

第十九 傳一總檢校。在名藤井。戒名慶嵓宗善大德。職廿一年。慶長十七年壬子閏十月十七日逝去。

第廿 圓一總檢校。在名伊豆。戒名如心誠江大德。職十年。元和七年辛酉十月廿五日逝去。

第廿一 城幸總檢校。在名森島。戒名松風院雲夢廣空大德。職一年。元和八年壬戌九月八日逝去。

第廿二 城友總檢校。在名森田。戒名宗永大德。職二年。寬永元甲子十二月四日逝去。

受久一總檢校。在名奧田。職十年。惡行過法。寬永十一年甲戌二月廿日不座。

和謠分國記

山城國

一やたてかも　一うき舟
一くるまそう　一あらし山
一弓やはた　一大原御幸
一おとこ山　一金札
一松の尾　一をしほ
一老松　一つねまさ
一田村　一百まん
一軒ばの梅　一定家
一こかぢ　一空屋
一美人草　一わんさう
一ゆや　一西行櫻
一はん女　一夕がほ
一はじとみ　一きふね
一かな輪　一とうがんこじ
一かげ清　一じねんこじ
一をみなへし　一こがう
一野の宮　一雲林院小町
一かよひ小町　一花月
一小野丹後　一たゞのり
一せいぐわんじ　一しやり
一京落葉　一王代記
一大會　一岡ざき

一放生川
一扁六代
一賀茂物狂
一花ぬす人
一ぎわう
一戀のおも荷
一弓つき狂
一くらま
一せか非
一とをる
一草子あらひ
一花がたみ
一美人そろへ
一羅生門
一こてう
一あたご山
一まきゞぬ

一むこ入じねんこじ
一長兵衛
一橋辨慶
一堀川夜うち
一侍従重ひら
一やすより
一かんせうじやう
一くらま天狗
一花いくさ
一みな月
一花見西行
一まき
一あさがほ
一ともあきら
一よりまさ
一うちより正
一神無月

一かたわ車
一にゐまくら
一現在ぬえ
一北野
一ゆつう
一清時田むら
一いなり
一とがの尾
一くらゐあらそひ
一翁草
一藤田
一花ぐるま
一六代
一石神
一清水小町
一さかき
一たきぐち

一浄土寺しづか
一ぬえ
一あふひの上
一鷹が嶺
一しぐれ
一哥の中山
一玉みづ
一さい藤五
一梅津
一やはた
一ことゝまつ
一はしひめ
一よるべの水
一じざう
一ふしみ
一やぐら忠信
一うつせみ

一あみだが嶺
一うきはし
一さくら姫
一すみぞめ櫻
一はゝ木々
一庭とり
一やはた弓
一彈かくたう
一かふり
一しやなわう
一身をつくし
一俊成
一源氏夕がほ
一卅三間
一月のわ
一今生彈正

大和

一春日龍神
一玉かづら
一谷かう
一井筒
一たえま
一大佛供養
一こうろぎ
一かつらぎ
一三輪
一かさ木
一くろづか
一はせ六代
一碁
一ふたつ塚
一花やぐら
一うねめ

一すゞかけ
一雪かつらぎ
一吉野參詣
一よしの西行
一二人靜
一よしの琴
一庭とり立田
一くず
一いこま山
一をだまき
一ひばり山
一たかま
一もとどり塚
一二本の杉
一こんがう山
一ゐんへし
一よしの狂
一こもり
一修羅かさ木
一しきみ天狗
一あだちしづか
一吉野靜
一たつた姫
一いもせ山
一あいせん
一ほし
一はつせ
一さほ山
一くめ
一みつ山
一中丸
一龍門寺
一かいで
一たつたくるひ

一さくら子　一その
一あまつやし　一あふひ
一うぐひす　一佛とうし
一しきしま　一ちご塚
一やしほの岡　一青柳
一さほの川　一あまのかぐ山
一あすか川　一たつたもみぢ
一つゝじが岡

河内

一道明寺　一もりや
一あまの　一雨月
一大とも　一たかやす
一雪鬼

和泉

攝津

一なには　一くれは
一あしがり　一七きおち

一岩舟　一松風
一松むし　一江口
一まんぢう　一ゑびら
一はくらく　一とうゑい
一舟辨慶　一もとめ塚
一兵庫つき嶋　一そとば小町
一住吉参詣　一よろほし
一皷の瀧　一げんじ遊
一いくさ　一形見送り
一みちもり　一かはづ
一すま　一須磨源氏
一住吉江上　一ながらのはし
一市人　一すみよし
一ふじ太こ　一梅がえ
一〔脱字歟〕

伊賀

一あさこの井　一しきみ塚

一生そとば　一たれ〔か歟〕その森

伊勢

一みもすそ　一かゞみみもすそ
一あこぎ　一すゞかひめ
一たか　一かごゑんま
一二見のうら　一かんとう
一ゆづりは　一河上
一こおう　一あさま明星
一繪馬　一ほしあひ
一さかほこそう　一七つ子

尾張

一やうきひ　一源太夫

參河

一かきつばた　一をしどり

遠江

一はまな　一戀のすゝき
一追かけあさい〔ひ歟〕な　一舞車

駿河

一富士　一ふじの卷狩
一ふじおろし　一ふしぎそが
一夜うちそが　一いけにゑ
一はごろも　一六代
一草なぎ　一しほくみ

甲斐

一うかひ

相模

一江の嶋　一清重
一江の嶋參詣　一箱根參詣
一げんぷくそが　一てうふくそが
一小袖そが　一せんしそが
一虎送　一親子そが
一すけつね　一和田さかもり
一上田　一むつら
一御所すゝき　一千壽重衡

武藏

一角田川　一若草

近江

一竹生嶋　一ゑぼしおり
一志賀　一しらひげ
一かね引　一東國くだり
一三井寺　一關寺小町
一あふむ小町　一もち月
一ふえ狂　一せき寺
一嶋めぐり　一栗津
一あふひともゑ　一かみおしみ
一さかゞみ　一せみ丸
一かねひら　一なき不動
一馬乞さゝき　一伊吹
一さち　一からさき
一こけい　一あかまき
一源氏供養　一法性坊一

一鶴とら　一なかはら

美濃

一やうらう　一いな舟
一山中ときは　一たるい
一熊坂　一ゆうれい熊坂
一ともなが　一せき原

飛彈

一ひだのたくみ

信濃

一もみぢがり　一土車
一雪のおきな　一とくさ
一たかなし　一見かへり
一はちの木　一おもひ妻
一ふせや　一ね覺

下野

一せつ生石　一なすの與一
一舟はし

出羽
一せつたい　一はぐろ
一くろ川ゑんねん　一みなと入
陸奥
一たかだち　一もじずり
一太刀はり　一かつぽ
一にしきゞ　一飛雪
一ひがき　一うとう
一末の松山　一しのぶ
一麥つき　一都嶋別
一あだち　一あねはの松
一遊行柳
常陸
一櫻川　一ほしたう
一ひたち帶　一をくり
一よこ山　一をやま
若狹
一玉さき　一五筆
一にうせ川
加賀
一佛のはら　一あたか
越中
一山うば　一さねもり
一うたうら　一おいさがし
一あしくら　一地獄めぐり
一なをい
越後
一大熊　一かしはざき
一松の山かゞみ　一竹の雪
一身うり
佐渡
一だんふう　一とがくし
丹波
一ひむろ　一酒傳どうじ

一落葉野江〔日吉〕
一糸くり
一はだか鬼
一だうやぶり
一ゆふれゐ大江山
一落ば
丹後
一太山天狗
伯耆
一大せん
出雲
一大社
一かぐや姫
一みさき
一きつき
石見
一なか山
播磨
一人丸
一あかしの上
一よこ笛
一こか山しり
一師範
一月満花みつ
一あつもり
一三木が尾

一むろ君
一書寫
一そね
一鶴村かも
一たかさご
備前
一藤戸
一和泉しきぶ
一玉の井
一なを家
一つもり
備中
一とも源左衛門
安藝
一まる
一いつく嶋
周防
一むろすみ
一大河くだし
長門
一いかりかつぎ
一めかり
一大ほく
紀伊

一高野の巻
一かねまき
一こ川
一はまならし
一高野物狂
一これもり
一かるかや
一かぶろ物狂
一ろう祇王
一和哥の天神
一文字瀧飛
一しやうぶが谷
一布引の松
一見るへの松原
一池寺
一玉津嶋
一千里のはま
一かうろう

阿波

一なると

讃岐

一やしま
一松山
一あま
一はま川

筑前

一二夜天神
一さよ姫
一千世鶴
一きくち

一たうせん
一清經
一かしゐ
一玉とり
一そとおり姫
一鶴若
一あひぞめ川

筑後

一玉嶋川
一枕物ぐるひ

肥前

一ろう太こ

肥後

一あそ山
一山本小町

日向

一うのは
一めくら景清
一はま川

大隅

一しやうの幡

薩摩

一かうち山
一しゆんくはん

一嶋津

唐國

一天龍鬼神
一御腦やうきひ
一菊水
一ふかん
一一角仙人
一せうき
一うちわ
一七人しやうぐ〳〵
一ひらとこ覺
一海中しやうぐ〳〵
一わかな
一とうばうさく
一菊じどう
一風俗哥
一かふう
一ばせを
一しやうぐ〳〵
一かんたん
一くはつきよ
一ちやうくわ
一じどう仙人
一てんこ
一ちやうりやう
一ほうそ仙人
一まうそう
一せいわう母
一きんたんちん
一しくわう
一よみがへり
一ちやうはくらん

一古木
一はんくわい
一そぶ
一せうくん
一まれいさん
一しやうぐ〳〵ひ
一ひつじ
一やうか
一さこく
一せいをきさん
一寂光
一ほてい
一しやうきせいしゆ
一かんやう宮

天竺

一三藏
一かんざん十德
一ふかん禪師
一龍神
一法花經
一大般若
一方便品
一らかん
一紋酒
一きんきく
一はんごんかう
一つきかね
一ほうざうびく
一師子

國不知分

一月宮殿
一一もと菊

一熊手判官
一つる
一いそや
一行家
一材木
一かすい
一をとし
一武文
一まり
一花いくさ
一惡源太
一はやと
一たいふ
一野かん
一ちかた
一うつかのけん
一さる

一たてを
一神無月
一太刀ほり
一つちぐも
一神子山颪
一千曳
一さごろも
一けんしやう
一筥居
一三住
一大黒
一ふり姫
一熊谷
一しみづ
一かたな
一ふみさき
一とうだいき

一千重院
一をとひら
一花の家
一八府のみや
一たかむら
一ぎおんさた
一郎辨
一石井
一あふぎせきわた
一西國くだり
一こせきく
一たにしやうし
一たうみつ
一そとばながし

以上六百七番

一がき
一しき
一えひけつ
一花鳥風月
一あまかす
一下帶
一しゆつけん
一せんせき石
一つか人
一東國のぼり
一しやうきう
一たゞつな
一じとう
一ほしくだり

文祿貳癸巳年十月五日於禁裏御能組

翁　千歳　長命彌右衛門
三番三　木下與右衛門

秀吉公ツレ金春太夫　虎菊治右衛門　甲田帯刀　樋口石見守　津田忠兵衛

弓八幡　春藤六右衛門　幸五郎次郎　八幡助左衛門
奈良珍砥　岩元雅樂

狂言　民部卿法印　新庄駿河守
長命甚六

秀吉公　大藏
芭蕉　山岡如犬　毛利輝元　伊藤安仲

秀吉公ツレ岐府中納言　松浦伊豫守
皇帝　甲田帯刀　大藏平三　津田忠兵衛
幸五郎次郎　貞光竹友

秀吉公　前田利長　岡田新八
源氏供養　山岡如犬　關白秀忠公〔次鼓〕　貞光竹友
奈良珍砥

岐府中納言ツレ秀信卿　樋口石見守
千壽　春藤六右衛門　彌石與次郎　同人
中納言小性

家康公
野宮　淺野彈正　畑山[illegible]大夫
畠山信濃守　同人

丹波少將秀勝
羽衣　春藤六右衛門　樋口甚六　津田忠兵衛
大藏道意　八幡介左衛門

織田常心ツレ金春宗印
山姥　矢田半左衛門尉　岡田新八　小勝善七
幸五郎次郎　貞光竹友

秀吉公
三輪　下村宗也　樋口石見守　細井玄蕃正
觀世又次郎　八幡介左衛門

二日目　暮松新九郎

翁　千歳　長命彌右衛門
三番三　木下與右衛門

秀吉公ツレ金春太夫　虎田治右衛門
老松　甲田帯刀　大藏平三郎　津田忠兵衛
岩本雅樂　幸五郎次郎　八幡介左衛門

秀吉公
定家　春藤六右衛門　同人　樋口石見守　伊藤安仲
同人　大藏道意

蒲生氏郷
鵜飼　下村宗也　但馬守長利　石井彌市　東寺小次郎
奈良珍砥　幸五郎次郎　淺野長次郎

丹波少將秀勝
遊行柳　永井兵[illegible]　七大夫　細川玄蕃頭
ツレ樋口石見守　奈良珍砥　觀世又次郎　一增

秀吉公
大會　下村宗也　大藏平三郎　津田忠兵衛
觀世又次郎　八幡介左衛門
浮田秀家
楊貴妃　春藤六右衛門　大藏平三　仲
大藏道意　安
秀勝
東岸居士　甲田帶刀　樋口甚六
彌石與次郎　八幡介左衛門
ひく貞　民部卿法印　彌右衛門尉
龜松
みゝ引　秀吉公
家康公
くらま參　大藏彌三郎　長命甚六
三日目
翁　金春太夫
千歲　長命彌右衛門
三番三　木下與右衛門
秀吉公ツレ金春太夫　虎菊治右衛門
呉服　春藤六右衛門　樋口石見守　津田忠兵衛
觀世又次郎　八幡介左衛門
秀吉公
田村　甲田帶刀　虎菊右衛門　大藏平三一
岩本雅樂　幸五郎次郎　增

秀吉公
松風　山岡如犬　樋口石見守　貞光竹友
大藏道意
秀吉公
江口　池尻仁兵衛　東寺善次郎　同　大藏三郎四郎　同　人
人
秀吉公
雲林院　永井右近　高安與右衛門　淺野右京大夫
觀世又次郎　春日市右衛門
秀吉公
杜若　下村宗也　樋口石見守　津田忠兵衛
大藏道意　安　仲
織田常心　秀吉公　永井右近
金春宗印　岩本雅樂　同　人　小勝善七郎
紅葉狩　春藤六右衛門
奈良珍砥　同　人　安　仲
岐府中納言　鈴木傳左衛門
通小町　淺野彈正大弼　淺野長次郎
幸五郎次郎
秀吉公
大藏平三　津田忠兵衛
金札　春藤六右衛門
幸五郎次郎　八幡介左衛門
御手負　大藏彌右衛門　長命甚六
祐善　民部卿法印　新庄駿河守
大藏三郎四郎

續群書類從卷第五百六十一

遊戯部十一

申樂聞書

夫猿樂のおこり。四座共に家々知事なり。乍然金春大夫にかたをならべん猿樂はなし。金春は元公家なり。其故は仁王卅二代用明天皇の御宇に。大和の國はせの川に壺ひとつ流來〔よ歟〕也。はせの人取上て口をひらき見るに。はうがんびれい成二三歳の男に。同けいづを一卷そへて有。ふしぎに思。御門へそうもん申。用明天皇ゑいぶんましく〳〵。いそぎ大内へ御取よせ。つぼの中をゑい覽有に。心も言葉も及ざる人あり。おなじくけい圖をもひらきゑいらむましますに。唐のしんのしくわうの第二の王子にてましませ共。さる子細にてながす。此御子日本難波津にあるべしと書留給ふ。用明天皇ふしぎに思召やういく仕給ふ。御りんげんには。日本は小國たるゆへに一皇たり。かんてうの太子にてましませども。二男なれば日本皇にもいかんなり。又御くらゐひきくもいかん成とて。正二位左大臣にそなへ申。御氏もしんのしくわうの王子なれば。しんの字を給るなり。しんの字のよみははたのと申なり。然間

はたの丶御氏はじまるなり。又名乘を川勝と申なり。是萬里のはたうをおぼれ給はで。此日本まで流着給ふにより。川勝と付給ふ也。又用明天皇の御子にしやうとく太子と申おわします。いまだ御年いたらせ給ざれば。用明天皇の御しやてい御位をゆづらせ給ふなり。御名をしうしゆん天皇と申奉る也。此御宇にしやう徳太子九歳にして御げんぷくなり。御ぢせい六年也。同しうしゆん天皇の御位を御あねごへわたし給ふ也。しやうとく太子の御おばごなり。是をすいこくわうぐうと申奉る也。御ぢせい卅六年也。此推古天皇聖德太子へ御くらゐを御ゆづり給べきとて。御こゝろみのせつしやうにそなへ給ふなり。此聖德太子人みん御あはれみの御ために十七ヶ條のけんぱふをせんし給ふなり。然に推古天皇の御宇に。守屋大臣といふ人有。是はしんだうをもつぱらとし給ふべきよしを申。又聖德太子は佛法をさうぞくあるべきとて。聖德太子と守屋と御弓をとらせらるゝ。太子の御かたへは今のはたの川勝同心申。然共太子悉御負被成候間。禁中をば悉皆守屋大臣にやかれ給ふ也。太子は宮古を御落有て。攝州住吉の邊に。かけのこほりと云所へ落させ給ふに。守屋程なくおひつめ奉る。餘に御なん儀に思召。二人ながら麻を作たる畠へ隠給ふ。此麻南方へ分て道のごとくにみゆるを見て。守屋も麻中へ追詰奉る。太子佛法御さうぞくの御心差なれば。諸菩薩天降りましまして。守屋が方へは黑雲をかけ給ふ。太子を紫雲にのせ奉りて天へ引上給ふなり。守屋ちからなく歸しとき。太子もはたのもてんにあれば。火雨やふらんとて。岩にうつ穴をほりて

隱し也。其後太子天降りましまして。難波の四天王寺うづまさ寺建立仕給ふ。此時守屋は同かけのこほりに稲藏と云城をこしらへて籠り居たり。此時太子川勝もろともに稲藏が城へよせ給ふ時。守屋が思樣。太子は菩薩の行をなし給へばとて。攝津國のいねどもをあつめ。山のごとくに積重て其上に居ば。太子も菩薩の行をなし給ふ間。稲ふむ事叶たまはず。彼稲藏のふもとにましまし給へば。天より弓と矢ふり下たり。歡喜し給て守屋を御たいぢ有べきよしをきゝて。木の皮を以よろひをこしらへ。よろひ甲まで法華經をほり付着したり。此心は太子は佛法御そうぞくの御爲なれば。法華經の文字いなさるゝ事ならば。法華經かたわに成べし。さ有ば佛法御さうぞくの御せいぐわんいつわらせ給ふと云也。然間君臣に二言なし。りむげん汗のごとくにてまさにいたまはず。此時守屋は法華經のよろひかぶとをき。稲藏が城の上より太子を打申さむとて悦なしゝ處に。夫より白羽の矢三筋太子の御前へふり來る。太子ふしぎに思召　一筋は太子。一筋をば川勝もちて待處に。是をば夢にも知ずして惡口申處を。太子も川勝も一度に放矢が守屋大臣が口の中へいこめられ。則守屋めつす。彼川勝城へ登り守屋が首をとり太子へ奉る。是によつて津國のかけのこほりに今にをいて麻を作らぬなり。然ば太子も御そくゐ也。同川勝が子に氏安と云人有。同其子三人有。金衣。金春。滿太郎なり。金衣丸は十七にて死し。ある時御門氏安夫婦の夢に。老僧の枕に立寄給ひてのたまふやうは。我は春日の明神なり。われしんだうの御事なれば。五すい三ねつのなやめる事

有。是を忘れん事は金春と滿太郎をば春日に參らせよとの御れいむなり。急兩人を春日の宮へつかはさる。ある時三笠山より鹿に猿のりて神前に參り。さま〴〵のまねを仕りしを。金春。滿太郎是を見て猿のまねをしたり。後にはひやうしと云事をし出し。又うたひと云て。ふしなどおりまぜてうたひ。かぐらをそうしゝなり。金春と滿太郎せんその御爲にとて寺を建立し。しんらく寺と號。秦樂寺とかく也。せんぞはしんのしくわうにてましませば。しんたのしむ寺と云心なり。此寺の御門前にやしきを二ヶ所たて金春滿太郎ゐたり。同天照太神の御靈八咫鏡のかげをうつし申給ふと傳る也。かるが故に金春の家には圓滿井と申也。大和山城兩國の竹田と云所を知行する故。在名竹田と名乘なり。まくのもんにはまるの內にふたつたかの羽をうつ也。同藤の丸も打てと有。是は多武峯にだんざん明神の御前にて始て能と云事仕始也。時人王卅九代天智天皇の御時に。かまたりの內大臣始て藤原のしやうをたまはる。其御子たんかい公ふひとう藤原のとうりやうたるにより能をいたしたり。御おんしやうに御もんを被下たる也。是四座共に打と云義有苦しからず。同滿太郎は宮王と名乘。金春がふしひやうし。同まくのもんも能のやうも同事にて。氏もかはらぬ。是金春のそしなり。ある時金春と不和の義有て。ならをさひ出さ　。近江の國にくだり。日吉の山王の御手猿樂となりたる也。然間近江かゝりとて。ふしひやうしを金春のきやう義に引かへて。日吉大夫とて一家仕出たり。國もへだゝり。ふし拍子もかはりけれども。金春のそしなり。ある時春日の

明神の御れいむに。宮王もとのごとくにならへかへして兩大夫と成べしと。金春かたへ御れいむの御そしやうあれば。神慮にまかせ金春のゆるしにより。又ならへ歸り申。此日吉大夫子を二人持たり。ともに歸り申時。山王より猿を御使として日吉をとめ給ふ。然共在所なればとて本意申。日吉が思やうは。近年日吉がゝりとて。隨分しんらふにて。ふしひやうしまで仕立かへたるしるしなきとて。二男をば日吉にさしをく也。宮王がそしなるべし。かるが故に春日へ歸り。もとのごとく宮王が役をつとむる也。金春宮王がさる樂と云字は申樂とかくなり。ある時金春宮王ちよくかんの身と成。九州へながされ申時。かゝる王土に住ながら。ちよく命をいかで背かん。御りんげむに任。まづまづ流罪におこなはれ申とも。神慮をそむきがたきとて。明神の神の字を申うけんをば。御やしろの中にこめ置。若御ゆるされを蒙身と罷成候者。もとのごとく春日の御手申樂衆に罷成らん。行するゐ御守おはしませとて。しめすへんをばすてゝ。つくりの申ばかりを家の文字となし。申樂と書傳也。又近江猿樂は如此書也。心は日吉の山王の御手さるがくなれば猿樂と云字よし。是によつて末代におゐて四座の人金春と家の論などいたす事ならば。則春日大明神の御神慮に背。其座ながくたえられべし。又申樂禁中へ參り申さぬ義あり。金春には天よりあまのおもて一めんふり來り。金春の守護面是なり。是を始ていづれの家にも佛作か神作の面一めんづゝ有也。是をかけて能をする時。御門の御一禮有。天下におゐて御門より下として天子の御禮をうけん。佛三寶の御

ばつおそろしとなり。然間猿樂は大内裏へ參らぬと云義又あるせつに日吉の山王の猿大内女房と嫁して子を四人持たり。此子共生落ながら物のまねを能して。としたけてくふうし出したるにより。一たんちくるいの種なればとて。禁中へは召寄られぬと云義有。兎角種成共腹なり共。きんちうにて申樂とも成たるなり。春日のまつり霜月廿七日也。廿六日の夜春日の明神御旅所に御幸なり。渡し物と云事有。百の物百のすい日やう是を四座渡す也。式次第は金春。金剛。觀世。保昌。何も式の時はいしやうさだまりたるさしぬきかりぎぬ也。御旅所におゐて禮神のうち式三波有。伶人はくろかんぶりつきとをしさしぬきを着也。是にせんざいは一人づゝなり。能の次第は。明神の御くしをとりて。みくしにまかせすると云り。又金春座には傳り物有。聖徳太子の御はたさを。同しやうとく太子のてんぢくよりでんじゆし給ふ舍利九十粒有。金春の家はんじやうすべきには。此舍利のかずおほく成となり。同尼のおもて一面有。是は天よりふり來ると云り。かるが故に天の面とかく云說有。

一觀世。保昌といふ（ら脫）二座有。是は元兒の名也。いかんなれば此人には伊賀國はつとり殿の子なり。有時服部殿の御夢に。鹿にのりたる老人來りて。なんじが二人の子をかすがへ參らせよとあり。彼金春へつき猿樂を習て。是も神樂衆になれり。しかしながら觀世はそうりやうたれば。保昌觀世がふし拍子をほんとうつすなり。時に京都の公方樣たか氏より五代のばつそん。大將大臣後東山殿義成と申奉る時。又くわんせのばつそんに世阿彌と申上手有。義成の御かんにいりて則

御手猿樂と成なり。此時桐の御紋を下さると云也。其時の御約束に。末代におゐて京の公方ぁらん程は。觀世の座は下たるべからず。たとへいづれの座に名人有共。觀世にのぞみあらばとるべしとさだめらるゝ。是は中頃の事なり。是により保昌もくわん世のさしつぎなれば。くらゐもたてると云へり。くわん世大夫名字をむすぶさきと名乘は。伊賀國はつとり殿の本りやうを知行するゆへ。在名を結崎と云へり。又保昌はどゐ共とやま共名乘。大和の國十肥外山知行によつて是も在名をいへり。觀世保昌はもんに矢はずをうつなり。服部殿の家のもん也。又ほうしやうといふ字。寶生共かくと云義有。よしともいひあしきともいへり。保昌の二字やすまさとよむなり。家に傳はる義なり。同くわん世をけつきといふ事は。結崎の字のゆへなり。結喜とかくは非なり。崎の字よし。ゆふさきともむすぶさきともよむ。いづれもよろし。

一金剛の事。上野國小畑殿の二男を兒になされ。其後出家有て金剛坊と申。此出家大和に上り春日に參り申とき。金春の能を見て面白と思ひてげんぞく有。金春を賴召。上手に成て。後には金剛かゝりとて一座こんりふしたり。然共金春につぐ也。後には大和の坂戸と申所を知行して。名字を坂戸樂と名のれり。出家歸りなればとて。我は家をたてらるゝとなり。此一代は淸僧にて。金春が子をやしなひて金剛家をつぐと云り。紋には鷹の羽をわりてちがへてするなり。觀世も保昌も金剛もくらゐは從四位なりしが。大職冠のたふのみねを御かいざん有。ちやくしを出家になし申。御名をばじやうゐ上人と

申。かいざんの御坊主にそなへ申。二男はたんかいこうふひとうと申。みね御建立の供養に能有。其後四座參り。能を申時。金春はもと正二位なりとて。くらゐのぼするにおよばれて。三座をば從四位を正四位と御おんしやうにくだされ。同藤の丸御もんをば四座ともくだされたり。いかにも可秘也。

一猿樂のがくのかずは。春日にてはもとは六十がくなりしが。天王寺にしこうして百廿番のがくにわかつ。春日にては伶人と云。春日より外にてはいづれもさるがくと云。春日にては神人なればなり。

一おきなと云事を能のがくはじめに舞事有。おきなと云事は。昔天神六代をば面足のみことを表し奉る。いざなぎいざなみへ御代をゆづらせ給ふとき。天神七代地神五代おわらば。仁王と成べしと御せいごん也。あんのごとく地神五代の御神をばうのはふきあわせずと申奉る。此王子をば仁王の御はじめ神武天皇と申奉るなり。彼おもたるのみとの御代には。御代の間はつもりもなき久しき事なり。天神七代のうちにも。とりわき御目出度御神なれば。今〔し歟〕世におゐて翁とあがめ奉る。おもてとあきとふたつにするは則あうむ也。天地なり日月也。又おもたるは御しんたいは龍なり。たうだふ宮はしなどこんりふの御供養に能をする。此翁の龍神にてましませば水のふう也。天下の祈禱に成と云事。此がくに天下太平國土安穩の御祈禱とうたひて。翁は其かたち千秋萬歲のはくはつ。見る人まで滿歲樂となり。此故、君の神とあがめ申奉る也。かるが故にうたひは皆眞言なり。又面の色はしろし。是にも心あり。又翁の舞はいか程もしづか成べし。

是にも心得有。
一千歳と云事は。地神第三あまつひこほゝにゝぎのみことにてまします也。此御代天地も日月もとしも月も時も夜もひるもあらはれ給ふなり。天津彦捕々耳々杵の命の御代卅一萬八千五百四十二年なり。此がくに君が代をまもるべき事。千秋萬歳樂とうたひはじむるなり。
一三番とはかしこねのみことを表し奉ると云り。翁の面のしろきはひる。三番の面のくろきは夜。是いんとやうとの心なり。此がくにほうかひはん又ゑんめいくわんと云事有。此らんぶと申は吾朝ばかりにてはなし。昔天竺に月迦長者祇園精舎建立せし時。しやくそんをぬしにそなへ奉る。御かいびやくのぐやうに。十大弟子きやうげんきゞよをなし給ふにらんぶと云、字亂舞是也。みだれまふとよむ也。日本の春日と云事も。吾朝の鷲深山の明神は則釋尊にてまします。いづれも是を以心得べし。又或説には三番は地神四代ひこほゝでみのみことを申奉る。御代六十三萬七千八百九十二年なり。彌御目出度御神なれば延命冠と申奉る。命をのぶるわらはとひきかへてうたふと云説有。是本説也。翁しづかの舞なれば。三波はさゞめくなり。此がく仁王開闢神武天皇の御宇より有るといへども。中頃中絶。此時靈鬼の煩國家にみち〳〵。人みん皆々死す。春日の御たくせんに。昔のごとく式三波をそふせば煩もやまん。又死したる者もよみがへらんとあれば。急神前にをひてそふしければ。則平安になりたると也。三波ともかく。又三番ともかく也。一説に。翁は春日。三波はしらひげの大明神。千歳は八幡大菩薩にてまし

ますと云義有。其故に春日もしらひげもいまだ神道にてましますあひだ。おもてにてかほを御かくし給ふとなり。又せんざいはぼさつにてましませば。御かほをもかくしたまはでしゆじやうをけどし給ふとなり。何も此せつども可秘々々。

一能と云事。天照太神。そさのうのみことゝ御くらゐあらそひ給ひし時。天照太神あまの岩戸へ引こもり給ひしとき。日本くらやみと成し也。其時七日七夜岩戸の前に神々かぐらをそうし給へば。岩戸をすこし御ひらき給ひし時。神々御かほしろ〳〵〔く歟〕と見えはじめ給ふに。あら面白との給ひしなり。おもしろきと云事はじまれり。其時の翁は春日明神。千歳はしらひげの明神。三波猿樂は八幡大菩薩。ゑひくわしやは住吉の大明神。太鼓はをはりの國源大夫の明神。笛は大和の國笛吹の明神。大つゞみは津國鼓の明神。小つゞみはあきのいつくしまの明神。此時より能の道具はじまりて今世迄も有。かぐらとはならはして候へども。岩戸のまへにてさるがくの御法と申は能の御事也。何も神々のなされ初たりとなり。

一申樂一さいの心もち有。歌舞一心の道をしるべき事は。こゝろにあるを志といひ。言葉にいへるを詩と云。其詩不休してゑいぎんにうつる。ゑいぎんするにたへざれば。手の舞足のふむところを知らぬといへり。心ざしのおこりは幽玄をほんとする也。幽情余情にあらはれぬれば。言葉かすかにやさしき也。然者其ことはりをふくみて立ふるまふは皆歌なり。是又舞なり。仍て此曲味かんようたる事を思ふばかりに。かたはらのいたきことをしるしをき申所。能詮所詮一心一見

なり。然共此道をおもふ心のみ也。

一五音の事。祝言の曲。とうりうの曲とて次第有。曰く。祝言。幽玄。戀慕。哀傷。闌音。是なり。

一祝言。此曲の心はたとへば年の始の御よろこびせんしゆう萬歳といふごとく也。呂の音を本として。律の音を心得て。もじにたゞしくかゝりて。すぐに拍子すくなにうたふなり。こゝろは一曲あんぜんにさらによこしまなる事をきらふ也。此曲味にいたりいたりては。五音始終しやう／＼に成也。たとへば諸木かれて松にならべるがごとし。歌に曰。

萬代を松にぞ君を祝ぬる千歳のかげにすまんとおもへば

是祝言の音の心なるべし。

一第二に幽玄の曲。是はかすかにしてふかし。聲あやをなして。色にゑみ香にめでたるたぐひ也。然共たゞしきせいは已前の祝言の下地にて。心をふかめそめたる也。たとへばしら糸を五色に染るがごとし。其しんじつのこんぽんといへるは。春の霞のひまに花の色香のほころび。秋の露にちくさのにほへるがごとし。ゆうにやさしう物ふかく。しかもはかなき聲筋こそ幽玄のふしなるべけれ。然共ゆうにやさしからんとて。行すゑもなくしてのはめやなめは。更にきかざれば是のみ心得がたし。されどももろ／＼の音曲のせい。祝言のくらゐを心得なば。あまりによはき所はあるべからず。歌に曰。

又やみんかた野のみのゝさくらがり花の雪ちる春の明ぼの

ふる郷のちれるもみぢにうづもれて軒の忍ぶに秋風ぞ吹

一第三れんぼの曲。まづゆうげんをふかむるきよく。みせいのゑいにせつなるところをほんとして。爰ほどに哀もよせいもあり。なさけもつきけり。かげも匂ひもそふるなり。歌に曰。

忍ぶれど色に出けりわが戀は物や思ふと人のとふまで

一第四哀傷の曲味の事。春の花も秋のもみぢも。皆々散々に成はてたる野やまの風の色すごく。木々のこずゑも紅葉も散て。淺茅が原のけしき見るがごとし。時雨そめつる色をつくしはてゝ。あしのまろやのかなしみの聲のみなり。よせいを忘るゝ心なるべし。ばうおくのかなしみもあり。此ばうおくとれんぼとの眞はかはりめ大事成べし。いづれにも眞草有。歌に曰。

あさぢふや袖にくちにし秋の霜わすれぬ夢をふくあらしかな

一第五閑音の曲。是はたけたるくらゐなり。あれて立たれどもあまりにこむせず。又ははじめにしづかなるくらゐも有。しんじつにはひとり音曲なるべし。四音と五音とのくらゐをと〳〵くきわめつくしては。やすくなにともうたがふくらゐなき也。然ばやすきくらゐ一さいかんおふのわざ。誠いたけてをほきかるべし。たとへば其聲のすがたとしふる杉のたてるがごとし。歌に曰。

いつしかと神さびにけりかぐ山のむ杉がもとにこけのむすまで

一うたひに十體の風姿あり。ふうしとは其すがた。うたひによりて心得有。

第一祝言。相生の松。

おもふ事などとふ人のなかるらむあふげば空に月ぞさやけき

第二幽玄。上果女體。
　ゆや。春のあけぼのゝごとし。
わすれゆく人ゆえ空をながむればたえだえにこそ雲も見えけれ
第三戀慕。是も幽玄に同。松風。
　秋のゆふぐれのごとし。
きえわびぬうつろふ人の秋の色に身を木がらしの森の下露。
第四哀傷。關寺。物あはれなる體なり。
　小町の能にはいづれも此心得有。同歌にも。
身にさむく秋のさよ風吹なべにふりにし人の夢に見えつゝ
第五闌音。同閑音もありとをし
　鬼とりひしぐ體と云り。
消てほす玉くしのはの露霜に天てるひかりいく代へぬらん

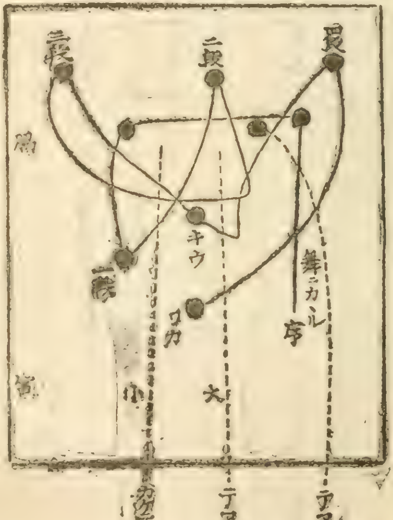
第六麗體。大原御幸。
しきみつむ山路の露にぬれにけりあかつきをきのすみぞめの袖
第七遠く面白體。とをる
天の戶をおし明がたの雲間より神代の月のかげぞのこれる。
第八濃體。百萬。
思ひ草葉ずゑにむすぶしら露のたまたま來ては手にはとられず
第九有心體。あしかり。
津の國の難波の春は夢なれやあしのかれ葉に風わたるなり
第十可然體。江口。
すみわびぬ身をかくすべき山里にあまりくまなき秋の夜の月
右十體如此。何も千金莫傳。唯一人一曲。可秘々々。

一をきつゞみの事。是は何も大事の義にて。心得有といへども先初日一大事有。先笛よりねとりを吹出し。さて呂の呂(音歟)を吹出して鼓は打候はん。其後は一二と吹べし。三段四段以後は常のひやうしなり。わきもつゞみといひ。合二段とも三段とも。かねてかくやにてやくそくのごとくに出る也。さてわきのはしかゝりの中程へ出たらんには。つゞみもはやめて打あげ。笛もふきあげべし。いまだわきいでずば。そのまゝ吹捨ておき候べし。吹とめは三段にかはるべし。わき能には笛より吹出すべし。後にはつゞみより打出す手もあり。つゞみより打出したらば。いでたる拍子二段まへを吹也。萬口傳に有。

一うたひの心得の事。を。は。に。此字をばうへよりうたふべし。と。し。く。此字はしたよりうたふべし。か。は。し。た。此字はやはらかにあたるべし。

舞臺

五段の舞の畫圖なり



一かんやう宮　そふ　くわうてい

此たぐひの能は。出(り歟)はしんのらんちよなり。其故は大唐の王はかけそめの御幸も。がくにて御ありきなされ候により。しんのらん

序なるべし。

一 一せいのうちの一せいといふ事有。是は行一せいに有べからず候。二段の一聲に有べし。たとへば松風の一せいに。鹽くみ車わづかなる。是は序にうたふ也。うき世にめぐるはかなさよは破にうたふなり。波こゝもとやすまのうらは急也。月さへぬらすたもとかなは又序也。如此いづれも心得有べし。

一 くりの内のくりといふ事有。たとへは夫十二いんゑんのるてんは車の庭にめぐるがごとく。鳥のはやしにあそぶに似たり。ぜんしやう又ぜんしやう。かつてしやう〳〵のさきをしらず。來世猶來世。さらに世々のおはりをまでは。初をば序に。次第〳〵に破にうたふなり。さてまたわきまふることなしをば又ぢよにうたふべし。

一 さしことの内のさしことゝは。たとへば然にいんしの花をさゝげ。御法の色をあらはす也。一げひらけて四方の春。のどけき空もひかげをえて。やうはいだうりかず〳〵の色香にそめる心までは。ひやしにすこしものせずして。いかにもかろくうたふ也。じよはふじつさうへだてもなしまでは。大つゞみにも小つゞみにものせてうたふべし。同一せいも初段をばのせず。二段をばのせべし。くりも如此也。

一 くせまひのうちのくせ舞とは。水にちかきより。秋とてもなどかかはらんまでは。次第〳〵にかろくのせべし。又のせてうたふ。よしやおもへばさだめなきより。又水にちかきとうたひ出したるごとくに。くらゐをうたふべし。おなじく是も次第にかろ〳〵と是をばのせてうたひ。又袖しばしいざやかへさんをば又序にうたふといへり。

一座にてうたふうたひに。さしのあるうたひを破に。うたひのはじめをほんにかへしてうたふべし。たとへば月にちる花のかげゆく宮めぐりをうたひたらば。はこぶあゆみのかずよりも〳〵と返してうたふなり。又うらがれの草葉にあるゝ野の宮のなどのやうなる小うたひは。座敷にてはかへすべからず候。

一高砂に四海波しづかにては。能にても座敷にてもかへすまじく候。又くわうていにすいきやうきんしやく。羽衣になみだの露の玉かづら此たぐひ返すまじく候。

一くり上のゆりとめを八句のゆりと申。くわんぜかゝりにはつづけてゆる。金春はきりてゆる。口傳に有。

一わききやうげんとあいしらひをいふをばせりふと申也。しらこととも申なり。

一小うたひ。くせ舞のまへにうたふをばさしことと申。出はの一せいなどの後にうたふをばさしこゑと申也。能々分別可有也。

一笛あつもりに大事のせりふ有。たとへば一谷にも付にけり〳〵とうたひあげて。正面にむかつてじゆずを手にからみ。がつしやうして。我此所に來て見ればいにしへを思ひ。りんゑにかへるぞや。南無阿彌陀佛〳〵とねんじゆして。やふしぎやな。うへ野にあたつて笛のねの聞え候と。つゞみうちのかたへむくべく候。可秘々々。

一とうがんこじの一せいに。くわんぜかゝりに大事有。たとへば松をさへみな櫻木にちりなして。雪にこゑある嵐かな。是いかにも可秘々々。はれがましくなき所に。又あまたにてうたふ時は。松をさへみな櫻木にふきなして。花にこゑあるあらしかなとうたふ

べし。可秘々々也。
一しほるはのとにてしほるなり。のの字はくちをすぼめて云字也。口をむけばなときこゆる也。同なの字は口をひろぐるなり。きやうの字はあきて云字なり。けふの字はうはあぎにかけて云字なり。倚と云字ははさきのうちにかけて云字也。やうの字は口をひろげて云字也。しやうの字もひろぐるなり。てうの字はすぼめる字なり。ろうといふ字はすぼむるなり。らうといふこと葉はひらく也。ちんと云字はしたにあてる字也。しんといふ字はうはあぎにかくる字なり。この字はすぼめる也。かの字はひろぐるなり。せうと云字はすぼむるなり。きう字もすぼむる也。もの字も同じ。まの字はひらく。はの字も同じ。ねうの字は中にすぼむる。へうの字はひらく。との字はすぼむる也。ちうの字も同じ。りうの字も同じ。りやうの字はひらく。ちやうの字は同じ。をの字はすぼむる。わの字はひらく。よの字はすぼむ。たの字はひらく。れの字は同じ。右何れも心得に有。
一歌れんがなどのあとにて。うたひしようまうの時は。ありとをしのくせまひをうたふべし。

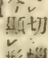
本云
此書物於我等家秘傳書にて候へ共。餘御所望候條。不及是非候。他見有まじく候。
大森　彦介
金　十藏殿
まいる

右之一冊者下かゝりの物と見えたり。
慶長四年四月廿一日一校畢。
妙菴玄又

禪林小歌

陰士　聖冏　笑吟
沙門　聖聰　補註

惜値春花不問山之山陰。近來片鄙聚洛有號唐樣餝室集衆催興之宴。亦傍陰士囉齊養身心矣。先客殿引物華綾敦絲綮子(異作木綿)。四季屛風有之。思恭(和尚)寺長老。釋迦三尊。因多羅人(梵)。羅漢懸。吳道子。俗。月壺(僧。金山寺長老。已上二人觀音)。觀音。米元輝。陸青。李堯夫(俗。同山水。已上三人共)。山水。文與可。東坡居士。檜芝瑞(俗。同竹。已上三人共)。竹。仲華光(俗)。卜梅。(卜木梅。春風情。)楊補之(俗。已上二人梅)。梅有哉。韓幹。李伯時(共俗。同馬)。馬形。戴嵩。舒悅(共俗。同牛)。牛畵。牧溪(和尚。唐土)。虎。所翁龍(和尚)。張僧繇(俗。已上二人龍之名筆)。龍畵。雲雨時必有鱗甲動不思議。胡直夫(俗)。人形。陸信忠(俗)。十王。有日觀雪窓梁楷(共俗。日元人。工葡萄。雪宋人也。尤畵蘭)。筆。猶又其外名筆盡數。其前多立卓。金襴打敷。(以金帛交絲纖)。金紗水引。燭臺。燭切。(以可切燭。燭。今顯形)



香匙。(以押香呂灰。其形)



火箸。(挾香置香爐。其形)



(因香飛。其形)



如此。胡銅(名所出國)。紫銅。以名色。錢深銅。金瑠璃茶碗。並鍮石香爐。花瓶立華。微咲梅花含雪潔。半枯枯木帶苔綠。古木奇木時花色色見。猶又異物重寶有見。名不知始知塵寰云有仙境。昔天須菩提(釋門有二須菩提。天須菩提者喜好衣也)。衣服居處莊嚴專之。更忘無相理。佛爲化。彼出王宮室莊一會。依之成作佛弟子。即便得悟。然則覺化門方便難有。各次第着座。最初受湯。先點心次第。水晶包子(包子以小麥作也。水晶包子以葛作也。此其異耳)。驢腸羹(如字)。水精紅羹。驢作羹(如字)。鼈羹(鼈切三角。鼈之形)。猪羹(似猪之肝)。甫羊羹(羊羹。羊之鵬。甫養)。寸金羹(金色方寸黃金色形)。白魚羹(佳沼少魚。其色白。俗曰志良以於)。骨頭羹。糟蕎羹。羹數差差也。有乳餠(以小麥作也。其形似孔房也)。茶麻菓。饅頭。卷餠。蒸餠溫餠等。餛飩。螺結。柳葉麵。桐皮麵。

經帶麪。打麪。三維麪。素麪。雍菜麪。冷麪。更互
譚之。取二菓子一。茶子二龍眼一。荔子。似二山胡形一味甘其色金色也。
榛。形用實。林檎。少六柱樹。胡桃。栢子。松子。
松茸。棗。杏。栗。柿。柑子。温州橘。之品也。名國人味無寒國橘似二柑
子一種分。而以二薑橫一甘美二最分ル也。茂也。野伊蘚上物。緣高折敷無二置
臺一見。星皮盤。胡鼓盤。建盞。作也。以二壓石一多古油滴。
能也。曜下。持レ花盞。建盞。胡盞。國。湯盞。名レ茶レ用。以可レ吞レ湯
幅州盞。國。天目。山名。立茶出處。先栂尾名坊。名所山城
西山。田中。山本。池。園伽井。尾崎。深溝。逆淵。乘勝。
一品。小品。天狗品。禪賀院御影堂之園。北山眞言四大
取二東山清水寺一。靜閑寺。北北野。仁和寺。
寺前一也。高雄。西山。葉室。宇治。所名。八幡。淀。所名。山崎。
所名。般若寺。山階。所名。醍醐。寺名眞言四箇寺隨一也。作者僧正醍醐山弘法付弟
也。或福者僧食二財寶一不レ知二後一。僧正勸曰。汝可レ供二養萬
僧一云云。彼猶恡二著財寶一心不二肯受一而虛誑言作曰。僧一名裸
形乘レ牛直二在門一。我可レ修二萬僧供養一。僧正即我身變而乘レ牛
圓及二其日一遂リ下。彼不レ得レ止以修二萬僧一。終成二無縁頑心一也。
勸修寺。取二國伊賀。大和。都部名所無。殘。膽瓶
以入レ水。湯瓶取持。度度立二廻之一。彼玉泉七椀。叡山西塔有二玉泉坊一

卜云人二嘿下一住二一山一交二三千一行學東關定惠共亡。寶充二藏一依二金銀等七寶一作二器一是云二七寶一也。珍寶
是遺。億遺焉。其後退レ座且假息。山水間會。置
花棚机。硯猊眼。依レ形。溪風味。皇帝見レ鳳レ嘆。石宿
筆。鶏距。紫毫。洛栞。孫包二墨一。松墨。油煙。一字二碧
雲一。三脚蝦蟆水滴。又見レ傍貫壺。玉壺。胡瓶。白
花金花瓶。茶花牡丹。龍壺。觀乳。染付。定州。名國冬
菰一清菰。東陽瓶並置。釣軒風鈴。順レ風。其滴
滴東丁二滴滴東丁鳴心細乎。蘇。是一尺八寸上
垂床。繩床。倚子。腳踏。副。柱杖。竹
枝拂子。扇子。有
之。敷二花氈肉氈木綿氈豹虎皮一。或有二假林臂
爲レ杜。或有下登二倚子一學二坐禪一人上思思誘儼
然有樣無二斷方一。彼釋迦因深。禪定樂。大
梵王宮中閒禪遊。是哉。思遣焉。嗚呼是
因果不レ遁。銅燃猛火中受二地獄楚毒苦一。後悔不
叶。思此生非閃電光中。只徒明暮而不レ思知レ無
墓。頻鳥者悲父顧父之無墓。八歳之身運壞。天仙亦不レ據。鳥鳥哀。古人話頭

以語示法。經論。耳目所及。更無障碍。佛祖師不傳沒滋味處（沒滋味是無其味也）。不審。（不審是諦也。謂不審也。）作麼生。（唐土ニ禪家也。日本ニ之趣如何ノ意同耳。）上手爲連歌古歌覺集語曪齋便。街談巷說。（於路辻語無用之事。）人上懇直目無盡期覺。瀰齋出來。皆久直本座。青漆椀光明朱一鉢影曜計也。維摩鉢瓶飯置。（予名居士借上方香飯世界ノ一鉢香飯于丈室中、并萬億諸佛皆飽足。可表不二圓融之義也。以一飯亦及大衆受飡之、更分一飯。）現白雲呼雪蒸飯。蒸之、海雲汁。苦汁。山菜。野菜。海藻。無殘菜。老少共並居食受有樣。費粒恐哉。有誡。縱呑熱鐵丸犯戒身不受施梵網經說。不思知稼穡艱難苦勞哀矣。見一二三奉。有餅飯氷溫麵水團（蒟蒻圓小。出葛作。）等哉。齋了菓子時景物無殘。其後取香火。思思燒香。香合何何。桂目。金紫。金枝花。堆朱。堆紅。九蓮。絲黃九。紅花綠葉。縲絲。犀皮堆漆。燒香何何。一水三山。萬安群。鷓鴣斑。（色斑如鷓鴣色。）宇治山陰伽羅木。有海岸沉哉。當世早香春。桂䕺。松風。夕星。（謂夕星日後光明也。）

此香還薫曾賦羅漢。（出所也。謂唐土羅漢洞也。）法華經。（一分八貫錢也。）滿室薫香甚覺。是爲供養爭無益。客昇香煙漸覺。猶又戀茶成集喫茶曲。（曰一種）本非新古引合。亭客合雀合。（雀亭主客。）無試十服茶。（問是也。無名批判。難不審覺。）喫各批其出所。二種四服。宋朝名所清峯。雅州茂山。浮梁。田畝。鄉園。打六札。（已十六札宋朝名所日。本朝名二唐茶之。）唐茶名之春。隣梅。夏木立。秋草。初雪。（如次春夏秋冬ニ契戀。）戀。四季三種是。其外葵葉。秋蘭。無嫌風情哉。有巧言詞功能更不中人。或中茶商名人。亦我是稱哈笑不爲音。彼瞋恚憍慢何修羅基也。雖然茶有十德。（一諸佛加護。二五臟調和。三孝養父母。四自在。五睡眠自在。六長壽。七息災延命。八天魔怖畏。九心靜。十臨終不亂。）蘇摩訶童子經讚之。滿時消此。通時塞。非是茶德。茶湯少粥面集。茶少湯多雲脚散。湯全茶（字玉）讚讚。茶教坊達阿彌同讚之。是日暮思遲力。又挨後會。眞不定也。悲哉我等此身快味也無實。耽美食之身三惡道基也。歷線對坐左右光陰

早押移。時不待人。其期爭可知。有宗鏡錄一百卷。永明智覺禪師述作。五燈。五家宗風一部盡之。會元光明藏傳燈。二十。普燈廣燈錄一花五葉碧岩。十卷。圓悟禪師作。海漢他作。淮海。無門石門北磵文集等。祖師語錄多。文字更閑。不能讀其理。譬若一藏教。只是機無益也。玆廻不出離。我人奈何否。其任他不涉是非思量。存何道理。敎外別傳不立文字修行眞理處。無眞理處。諸天供不好。雲居道膺禪師洞山悟本禪師弟子也。師許膺於別峯令獨住。以木師粥飯日日令受之。而三日不參。飯亦不受。師不見膺。如枯木瓦石不動而坐。師曰。何故三日不來等。膺曰。諸天供珍美以食足。故不參。師謂膺入禪定故也云々。因曰。佛祖正位不知禪定。膺曰。如何是佛祖正位。師曰。不思善不思惡。膺終伏。膺則用不思善不思惡。次夜諸天不來。珍美不供。膺明日詣本寺參長老。曰。我不思善不思惡思量。長老曰。既是不思善不思惡也。何物思量乎。膺曰。非思量云云。師許所解。百鳥花無由。牛頭法融禪師曰。祖道信禪師弟子也。信禪師來牛頭融訪。汝見何事。融曰。百鳥含花來而供我。信禪師思。融修禪定加責融曰。佛祖正意不知禪定。融正即信禪師聞佛祖正意諸義師弟是亦姿百鳥花無也。語許得法破也破也。墮也墮也。破竈墮和尙或時出山入里頭陀。里人各捧齋而同嵩山ノ嶋入。問由。里人曰。是此里ノ鎭守之神。遠近不輟祭祀。和尙思奇怪行山原社廟。只一箇釜耳在。釜中見無別物。唯有落葉之混雨水。依謂此釜惡神令人惱。我說得以杖敲竈三下云。咄此竈只是泥瓦合成。聖從何來。靈從何來。恁麼烹寄物命。又打三下。竈乃傾破墮落。須臾得靈一了思急下於山。山途値青衣蛾冠有一官俗頭著地。手拱曰。我是此山靈神也。住千年我依有熱苦令困於人。今蒙禪師說無生法。得脫此處生天。立所迷亡悟顯。其恩爲報。受迄參。言爭可及。師曰。是汝本有性也。非吾強言。神再拜而沒。婁婁隨隨。婁婁甚之義也。隨博轆轆也。之行不定流行轉變也。譬如轉路速。云轉轆轆地如是。婁婁隨隨轉轆轆者。袈裟下之身亦唯受者也。定可生三途。今彼等之意也。袈裟下人身亦如何覺。辭助之乎者也。皆是言句筆助之助也。言語助得法不助身之眞信之僞。身助逾不成矣。惜値春花不問山之山陰。

今曰。此書僻見之人。只文字勿爲所用。又勿思狂言綺語。文文句句。併或誡虛受信施之勸化。又示心性無事之著語也。即知狂言綺語顯法性深高。奇哉不思義之好語也。讀人留心矣。所註偏任師仰。殘處追而應註也。應永年中□□酉譽撰。

續群書類從卷第五百六十二

遊戲部十二

閑吟集

夫謳歌之爲道。自乾坤定剛柔成以降。聖君之至德。賢□之要道也。濫之異域。其來久矣。先王和五聲也。以平其心感其政也。五聲。六律。七音。八風。以相成也。清濁。小大。短長。疾徐。以相濟也。君子聽之。以平其心。々平德和。故詩曰。德音不假。嗟嘆之不足詠歌之。詠歌之不足不知手之舞足之踏之也。治世之音安以樂。其政和。亂世之音怨以怒。其政乖。正得失動□〔天歟〕地感鬼神。莫近於詩。々者志之所之也。詩變成謠謳歌。尤三代以前無不物。宗廟侶隣詠。鑿井而飲。耕田而食。堯時之歌也。易水之於秦。大風之於漢。有一句之歌素練白馬壽得成是也。接輿歌鳳兮。甯戚扣牛角。楚王萍實。陳主後庭花。僉無不言民間也。易曰。鼓缶歌也。豈非至德要道乎。異方如斯矣。熟思本邦昔。伊陽岩戸而歌七盆夜曲。大神而于罅隙。神戸擘開。而霄壤明白也。地祇之始已有神歌。次催馬樂興也。催馬樂再變而成早歌。其間有今樣朗詠之類。數曲三變而有近江大和等等音曲。或徐々而因精。或急々暗耳、奏公宴慰下情者。夫唯小歌乎。小歌之作。匪獨人物也明矣。風行雨施天地之小歌也。流水之淙々。

落葉之索々。萬物之小歌也。加之龍吟虎嘯。鶴唳風聲。春而有鶯。秋而有蛬。禽獸昆蟲歌自然之小歌者耶。而況人情乎。五千餘軸逈人之小歌也。五典三墳先王之小歌也。移風易俗。經夫婦成孝敬厚人倫。吁小歌之義大矣哉。竺支扶桑。説音律吟調子。其揆一也。悉説。中殿嘉會。朗唫罷淺々斟。大樹遊宴。早歌了低々唱。并小扇之翩々。共踏花飛雪。携尺八之暮々。獨立荻吹風。爰有一狂客。編三百餘首謳歌。名曰閑吟集。伸數音好事。諭三綱五常。學人賢士至德要道也。豈小補哉。于旼永正戊寅秋八月。青灯夜雨之窓。述而作。以貽同志云爾。

こゝにひとりの桑門あり。ふじの遠望をたよりに庵をむすびて。十余歳の雪を窓につむ。松ふく風に軒ばをならべて。いづれの緒よりとことのしらべをあらそひ。尺八をともとして春秋のてうしを心むる。折〳〵に歌の一ふしをなぐさみ草にて。ひまゆく駒にまかする年月のさゝ〳〵。とひえんきやうの花のもと。月のまへの宴席にたちまじはり　こゑをもろともにせし老若。なかば古人となりぬる懐舊のもよほしに。柳のいとのみだれ心とうちあぐるより。あるは早歌。あるは僧侶。佳句を吟ずる廊下のこゑ。田樂近江大和ふしになり行數〳〵を。忘れがたみにもと思ひ出るにしたがひて。閑居の座右にしるしをく。是を吟じうつり行うち。浮世のことわざにふるゝ心のよこしまなければ。毛詩三百餘篇になずらへ。數をおなじくして閑吟集と銘す。このおもむきをいさゝか雙紙のはしにといふ。命にまかせ時々も秋の蛍にかたらひて。月をしるべにしるす事しかり。

花の錦の下ひもはとけて中々〳〵よしなや。

柳のいとのみだれごゝろ。いつわすれうぞ。ね

みだれがみのおもかげ。

いくたびもつめ。いくたのわかな。きみも千代をつむべし。

なをつまばさはにねせりや。みねにいたどり。しかのたちかくれ。

木のめ春雨ふるとても〳〵。なをきへがたきこの野べの雪の下なるわかなをば。今いくかありてつままし。はるたつといふばかりにや。みよし野の山もかすみて。しら雪のきえしあとこそ路となれ〳〵。

かすみ分つゝ小松ひけば。うぐひすも野べにきく初音。

めでたやな松の下。千代もひくちよ。千世〳〵と。

しげれ松山。しげらふには。木かげにしげれまつ山。

たが袖ふれし梅が香ぞ。春にとはゞや。物いふ月にあひたやなふ。

只吟可臥梅花月。成佛生天惣是虚。

梅花は雨に。柳絮は風に。世はたゞうそにもまるゝ。

老をな隔てそかきほの梅。さてこそ花の情しれ。花に三春のやくあり。人に一夜をなれそめて後いかならむ。うちつけに心空にならしばの。なれはまさらで戀のまさらんくやしさよ。それをたがとへばなふ。よしなのとはずがたりや。

年々に人こそふりてなき世なれ。色も香も變らぬ宿の花ざかり〳〵。誰見はやさんとばかりに。又めぐりきて小車の。我とうき世にあり明の。つきぬやうらみなるらむ。よしそれとても春の夜の。夢のうちなる夢なれや〳〵。

よしの川の花いかだ。うかれてこがれ候よの〳〵。

かつらぎ山にさく花候よ。あれをよとよそに

おもふた念ばかり。

人のすがたは花うつぼ。やさしさしておふたりや。うそのかはうつぼ。

人はうそにてくらす世に。なんぞよ燕子が實相を談じがほなる。

花のみやこのたてぬきに。しらぬみちをもとへばまよはず。こなぢなどかよひなれてもまよふらん。

面白の花の都や。筆でかくともおよばじ。ひがしにはぎをん。きよみづ。おちくるたきのおとはのあらしに。地主の櫻はちり〴〵。にしはほうりんさがの御寺。まはらばまはれ水車のわのりせむせきのかはなみ。かわ柳は水にもまる〻。ふくら雀は竹にもまる〻。都のうしに〔は歟〕くるまにもまる〻。野べの薄は風にもまる〻。茶壺は引木にもまる〻。げにまこと忘たりとよ。こきりこは放下にもまる〻。こきりこのふたつの竹の世々をかさねて。うちおさめたるみ代かな。

花見の御幸と聞えしは。保安第五のきさらぎ。我々ももちたる尺八をうでの下よりとりいだし。しばしはふひて松の風。花をや夢とさそふらん。いつまでか此尺八ふひて心をなぐさめむ。

ふくやこ〻ろにか〻るは。花のあたりの山おろし。ふくるまをおしむやまれにあふよなるらん。此まれにあふ夜なるらむ。

春風細軟なりせいしの美。

吳軍百萬鐵金甲。不敵西施咲裡刀。

ちらであれかしさくら花。ちれかし口とはなご〻ろ。

上林に鳥がかすむやらう。花がちり候。いざさらばなるこをかけて花のとりおはう。

地主の櫻はちるかちらぬか。見たか水くみ。ち

るやらちらぬやら。あらしこそしれ。

神ぞしるらん。春日野のならのみやこに年をへて。さかりふけゆく八重櫻〳〵。ちればぞさそふ。さそへばぞちるはほどなく。露の身の風をまつまのほどばかり。うきこともけくなくもがな〳〵。

西楼に月おちて。花の間もそひはてぬ。ちぎりぞうすきともし火の。殘りてこがるゝ影はづかしきわが身かな。

花ゆへ〳〵にあらわれたよなふ。あらうのはなや。うのはなや。

御ちやのみづがをそくなり候。まづはなさいふ。又こふかととはれたよなふ。なんぼこられた。いしんほちこゝろちや。

しんちやのわかたち。つみつゝまれつ。ひいつふられつ。それこそわかひときのはなかよなふ。

新茶のちやつぼよなふ。いれてののちはこちやしらぬ。こちやしらぬ。

かれ〳〵のちぎりのすゑはあだゆめの〳〵。面影許そひねして。あたりさびしき床のうへ。涙のなみはをともせず。そでにながる〔る脱歟〕川水のあふせはいづくなるらむ〳〵。

面影ばかりのこして。あづまの方へくだりし人の名は。しら〳〵といふまじ。

さて何とせうぞ。一めみしおもかげが身をはなれぬ。

いたづら物や。おもかげは身にそひながらひとりね。

あぢきなひぞちや。枳棘に鳳鸞すまばこそ。梨花一枝雨を帶たるよそほひの〳〵。太液の芙蓉のくれなひ。未央の柳のみどりも。是にはいかでまさるべき。げにや六宮の粉黛の顏色のなきもことはりや〳〵。

かのせうくんの黛は。みどりの色に匂ひし〻。春やくるらむ絲柳のおもひみだるゝ折ごとに。風もろともにたちよりて。木陰のちりをはらはん〳〵。

げにやよはきにもみだるゝ物は。青柳のいとふく風の心ちして〳〵。夕暮の空くもり。雨さへしげき軒の草。かたぶく影をみるからに。こゝろぼそさのゆふべかな〳〵。

柳の陰に御まちあれ。人とはゞなう。やうじ木きるとおしあれ。

雲ともけぶりとも見さだめもせで。うはの空なる富士のねにや。

見ずばたゞよからう。見たりやこそ物を思へたゞ。

なみだひそ〳〵。人のすいするなみだひそ（〳〵脱歟）。

思ふさへこそめもゆき。かほもみらるれ。

今から譽田まで日がくれうか。やまひかたはれ月はよひのほどぢや。

あらうつくしのぬりつぼ笠や。これこそかわち陣見やけ。えいとろえいとえいとろえとな。

湯口がわれた。心えてふまひ中こゝら。えいとろえいとえいとろえいな。

世間はちろりに過る。ちろり〳〵。

なにともなやなふ〳〵。うき世は風波の一葉よ。

なにともなやなう〳〵。人生七十古來まれなり。

たゞ何事もかごともゆめまぼろしや。水のあわ。さゝの葉にをく露のまに。あぢきなの世や。

夢幻や南無三寶。

くすむ人は見られぬ。ゆめの〳〵〳〵世をうつゝがほして。

なにせうぞ。くすんで一期は夢よ。たゞ狂人。

しゐてや手折まじ。おらでやかざゝましやな。

彌生のながき春日も。猶あかなくにくらしつ。

卯の花がさね。ななめさすぞよ。月にかゞやきあらはるゝ。

夏の夜をねぬにあかぬといひをきし人は。物をやおもはざりけん。むぎつく里の名には。みやこしのぶの里の名。あらしなの涙やなう。あはでうきなのなとり川。川音もきねのをとも。いづれともおぼえず。在明の里の子規。郭公きかんとて杵をやすめたり。みちのくにはたけくまの松のはや。末のまつ山。ちかの鹽がま〳〵。衣の里やつぼの石ぶみ。そとの濱風〳〵。更行月にこそふく。いとゞみじかき夏の夜の月ゐる山もうらめしや。いざさしをきてながめんや〳〵。

わが戀は水にもえたつほたる〳〵。ものいはでせうしのほたる。

磯すぎじさなきだにみる〳〵戀となる物を。」

影はづかしき吾すがた〳〵。忍び車を引しほのあとにのこれるたまり水。いつまですみははつべき。野中の草の露ならば。日影にきえもうすべきに。是は磯べにより藻かくあまの捨草。いたづらに朽まさり行袂かな。

桐壺の更衣のて車の宣旨。葵の上の事あらそひ。

思ひまはせば小ぐるまの〳〵わづかなりけるうき世哉。

宇治の川せの水車。なにとうき世をめぐるらふ。

やれおもしろや。えん京には車。やれ淀に舟。えん桂の里の鵜飼舟よ。

忍び車のやすらひに。それかとゆふがほの花をしるべに。

ならぬあだ花まつしろに見えて。うき中垣の

夕顔や。

忍ぶ軒端に瓢簞はうへてな。をいてな。はゝせてならすな。心のつれて。ひよひよらひよひよめくに。

まつ宵はふけ行鐘をかなしび。あふ夜は別のとりをうらむ。戀ほどの重荷あらじ。あらくるしや。

しめぢがはらたちや。よしなき戀をすが筵。ふして見れどもをられればこそ。くるしや獨寝のわがたまくらのかたかへて。もてどももたれず。そも戀は何の重荷ぞ。

戀はをもしかろしとなるみかな〳〵。涙の淵にうきぬしづみぬ。

戀風か。きては袂にか。いもとれ〔ね歟〕てなう。袖のをもさよ。戀風はおもひ物哉。

おしやるやみの夜。おしやる〳〵やみの夜。つきもなひことを。

日數ふりゆくなが雨の〳〵。あしふく廊や萱の軒。竹あめる垣のうち。げに世中のうきふしを。誰にかたりてなぐさまん〳〵。

庭の夏草しげらばしげれ。道あればとてとふ人もな。

青梅の折えだつか〳〵つかや。こりよつかひかるゝ。

わごれうおもへば。あのゝ津よりきた物を。をれふることはこりやなに事。

なにをおしやるぞせは〳〵と。うはの空とよなう。こなたも覺悟申た。

思ひそめずはむらさきの。こくもうすくも物はおもはじ。

おもへかし。いかにおもはれむ。おもはぬをだにもおもふ也に。

思ひのたねかや人のなさけ。

おもひきりしに。來てみえて。きもをいらする

〱。おもひきりかねて。ほしや〱と月見て廊下にたゝれた。またなられた。
おもひやるこゝろは君にそひながら。何の殘りて戀しかるらむ。
思ひだすとは忘るゝか。思ひださずや忘れねば。
おもひださぬまなし。忘てまどろむ夜もなし。
おもへどおもはぬふりをして。しやつとしておりやるこそ底はふかけれ。
思へどおもはぬふりをしてなふ。思ひやせに痩候。
げにや寒竈に煙たえて。春の日いとゞくらしがたふ。幽室に燈きえて秋の夜なをながし。家貧にしては信智すくなく。身いやしうしては故人うとし。したしきだにもうとくならば。余所人はいかでとふべき。さなきだにせばき世に〱。かくれすむ身の山ふかみ。さらば心のありもせで。なを道せばき埋草。露いつまでの身ならまし〱。
扇のかげで目をとろめかす。ぬしあるをれを何とかしようか。しようか〱しよう。
たそよおきやう。こつぬしあるを。をしむるはくひつくは。よしやしやるゝとも。十七八のなじひよ〱。そとくひつゐてたまふれなう。はがたのあればあらはるゝ。
うからかひたよ。みしなの人のこゝろや。
人の心の秋の初風つげがほの。軒ばの荻（萩歟）もうらめし。
そよともすれば下荻のすゑこそ風をやかこつらん。
夢のたはぶれいたづらに松風にしらせじ。槿は日にしほれ。野草の露は風にきえかゝる。はかなき夢の世をうつゝとすむぞまよひなる。

たゞ人は情あれ、槿の花の上なる露の世に。

秋の夕の蟲のこゑ〴〵。風うちふひたやらでさびしやなふ。

尾花の霜夜はさむからで。名殘がほなる秋の夜の蟲の音もうらめしや。たまくらの月ぞかたぶく。

風破窓を簸く、灯消やすく。月陣屋をうがちて夢なりがたし。秋の夜すがら所から物すさまじき山陰に。すむとも誰かしら露の。ふり行すゑぞあはれなる。□哀なれども山がつの友こそ岩木なりけれ。見ぬ色のふかきや法の花心〴〵。そめずばいかゞいたづらに。其から衣のにしきにも。ころもの玉はよもかけじ。草の袂も露涙。うつるも過る年月はめぐりめぐれど。うたかたのあはれむかしの秋もなし。

おしまじな。月もかゝりねの露の宿〴〵。軒もかきほも古寺の。うれへは崖寺のふるにやぶれ。神は山行のふかきにいたましむ。月の影もすさまじや。誰かいつし。蘭省の花の時錦帳のもとゝは。廬山の雨の夜草庵のうちぞおもはるゝ。

ふたりぬるともうかるべし。月斜窓に入曉寺の鐘。

今夜しも州郎の月。閒中たゞかたりみるらん。清見寺へくれてかへれば。寒潮月をふひてけさにそゝぐ。

殘月清風雨聲となる。

身は浮草の根もさだまらぬ人を待。正體なやなふ。ねうやれ月のかたぶく。

雨にさへとはれし中の。月にさへなう。月によなう。

木幡山路に行暮て。月を伏見の草枕。

たき物のこがらしのもりいづるこすのとぼそは。月さへにほふゆふぐれ。

都は人目つゝましや。もしもそれかと夕まぐれ。月もろともに出てゆく〳〵。雲井もゝしきや大内山の山もりも。かゝるうき身はよもとがめじ。こがくれてよしなや鳥羽の戀塚。秋の山。月のかつらの河瀬舟。こぎ行人は誰やらん〳〵。

夢路よりまぼろしに出るかり枕〳〵。よるの關戸の明くれに。都の空の月影をさこそと思ひやるかたの。雲ゐは跡にへだゝり。くれわたる空にきこゆるは。里ちかげなる鐘のこゑごゑ。

東寺のあたりに出にけり〳〵。昔誰がつくり道〳〵。さて鳥羽殿の舊跡。さなきだに秋の山風吹すさみ。うき身の露の袖の上。末はよどののまこも草。かれ〴〵なりし契ゆへ。ならはぬ旅のわが心。三津の御牧のあら駒を。さゝかにのいともてつなぐとも。二途かゝる人心。たのむぞおろかなりける〳〵。

殘灯牖下落梧之雨。是君を思ふにあらずとも。鬢まだらなるべし。

宇津の山べのうつゝにも。夢にも人のあはぬもの。

唯人はなさけあれ。夢の〳〵〳〵。きのふはけふのいにしへ。けふはあすのむかし。

よしや〳〵つらかれ中〳〵に。人の情は身のあだよなふ。

うやなつらやなふ。なさけは身のあだとなる。なさけならではたのまず。身は數ならず。なさけは人のためならず。よしなき人になれそめて。いでし都もしのばれぬほどになりにける〳〵。

たゞ人には馴まじ物ぢや。なれての後に。はなるゝるるるるが大事ぢやる物。

浦は松葉をかきとしよりの。嵐ぞ今朝はとり

かき聚たる松の葉は。たかぬもけぶり成ける〳〵。
鹽屋のけぶり〳〵よ。たつ姿までしほがまし。
しほにまよふた磯のほそ道。
なにとなる身のはてや覧。鹽により候かたし貝。
鹽くませ。あみひかせ。松の落葉か丶せて。うきみほがす崎や波のよるひる。
みぎはの浪のよるの鹽。月影ながらくまふよ。
つれなく命ながらへて。秋の木のみのおちぶれてや。いつまでくむべきぞあぢきなや候。
かくてもはこぶ濱川の〳〵。しほうみかけてながれあしの。世をわたるわざなれば。心なしともいひがたし。あまの丶里にかへらん〳〵。
舟ゆけば岸うつる涙川の瀬枕。雲はやければ月はこぶ。うはの空の心や。うはの空かやなにともな。

うたへや〳〵うたかたの。あはれ昔の戀しさを。今も遊女の舟遊。世をわたる一節をうたひて。いざやあそばむ。
さほの哥うたふ憂世の一ふしを〳〵。夕波千どりこゑそへて。友よびかはす海士乙女。恨ぞまさる室君の行舟やしたふ覧。あさ妻舟とやらんは。それはあふみのうみなれや。我もたづね〳〵て戀しき人にあふみのうみ。山もへだたるやあぢきなや。浮舟のさほの哥をうたはん。みなれ棹。哥うたはん。
身はあふみ舟かや。しなでこがる丶。
人かひ舟は沖をこぐとても。うらる丶身をただ。靜に漕よ船頭殿。
身はなると船かや。あはでこがる丶。
沖のとなりでふね漕は。阿波の若衆にまねかれて。あぢきなや櫓が〳〵をされぬ。
沖の鷗はかぢとる舟よ。足を艫にして。

磯山にしばしいわねの松程に〳〵。たが夜舟とはしら波に。〔琵琶〕櫓音ばかりなるとの浦。静なる今夜かな〳〵。

月はかたぶくとまり舟。鐘はきこえて里ちかし。枕をならべて。おとりかぢやおもかぢにさしませて。袖を夜露にぬれてさす。

又港へ舟が入やらう。からろのをとがころりからりと。

つれなき人を松浦の奥に。もろこし船のうきねよなふ。

こぬも可なり。夢の間の露の身の。あふとも宵のいなづま。

今うきに思ひくらべていにしへの。せめては秋の暮もがな。戀しの昔や。たちもかへらぬ老のなみ。いただく雪のましらがの。ながき命ぞうらみなる〳〵。

うらみは數〳〵おほけれども。心々申まじ。此花を御法のはなになし給へ。

恨に〔に歟〕なにはに・おほけれど。又はわごりよをあしけれと更に思はず。

葛の葉〳〵。うき人はくずの葉のうらみながら戀しや。

四の鼓は世中に〳〵。戀といふ事も。恨といふ事もなきならひならば。ひとり物はおもはじ。

九の〳〵夜半にも成たりや。あら戀し吾つまの面影たちたり。嬉しやせめてげに身がはりに立てこそは二世のかひもあるべけれ。此樓出ゑ事あらじ。なつかしのこの籠や。あらなつかしのこの樓や。

そふてもこそまよへ〳〵。たれになう。たれに成ともそふてみよ。

そひそはざれ。などうら〳〵となるるらう。

人氣もしらぬあら野の眞木の駒だに。これはつゐになるゝ物。

我を中〳〵はなせ山唐にてもわごれうのくるみでもなし。

身はやぶれ笠よなふ。きもせでかけておかるゝ。

笠をめせ。かさもかさ。濱田の宿にはやる。すげのしろひとかり笠をめせなう。めさねばお色のくろげに。

色がくろくばやらしませ。もとよりも鹽燒の子で候。

ひく〳〵〳〵となることはひかで。あの人の殿ひく。いざ引物をうたはんや。いざひく物をうたはん。春の小田には苗代の水ひく。秋の田にはなるこひく。名所都に聞えたる。あだちが原のしらま弓も。いま此御代にとゞめた。淺香の沼にはかつみ草。忍の里にはもちずり石の。おもふ人にひかで見せめや。あねはの松の一枝。鹽竈のうらは雲晴て。たれも月をまつしまや。ひらいづみは面白。いとゞひまなき秋の夜に。月ゐるまでとひくなるご。いざゝらをきてやすまん〳〵。猶ひく物をうたはん〳〵。浦には魚とる網をひけば。鳥とる鷹野に狗ひく。何よりも〳〵契の名殘はあり明の。別もよほすしのゝめの山しらむ。横雲はひくぞうらみなりける。

忘るなとたのむのかりに友なひて。立別行都路や。春はさそひて又越ぢ。

（田樂）里へは露の身よ。いつまでの夕なるらむ。

身はさゞ太刀。されども一度とげぞしようずらふ。

奥山の朴木よなう。一度はさやになしまうしよ〳〵。

ふでゞ一度いふて見う。いやならばわれもたゞそれを限に。

うら枯の草葉にあるゝ野の宮の〳〵。跡なつ

かしき爰にしも。其長月の七日の日もけふにめぐり來にけり。物はかなしや。小柴垣いとかりそめの御すまゐ。今も火たきやのかすかなるひかりや。わがおもひうちにある色や外に見えつ覽。あらさびし宮所あらさびし此宮所。野の宮の森の木がらし。秋ふけて〳〵身にしむ色の消かへり。おもへばいにしへを何としのぶの草衣。きてしもあらぬかりの世に。行かへるこそうらみなれ〳〵。

犬かひ星はなん時候ぞ。あゝおしやおしや。おしの夜やなふ。

やさしの旅人や。花はぬしある女郎花。よししる人の名にめでゝゆるし申なり。一もとおらせ給へや。なまとゆきたてるをみなへし〳〵。うしろめたくや思ふらん〔[illegible]〕。女郎とかける花の名に。誰かいらうをちぎりてん。かの邯鄲のかり枕。夢は五十年の。あはれ世のためしも誠なるべしや〳〵。

秋の時雨の又はふり〳〵。ほすはほされぬ戀のたもと。

露時雨もる山陰の下紅葉〳〵。色そふ秋の風までも。身にしみまさる旅衣。霧間をしのぎ雲をわけ。たづきもしらぬ山中に。おぼつかなくも踏迷ふ。みちのゆくゑはいかならむ〳〵。

名殘おしさにいでゝ見れば。山中に笠のとがりばかりがほのかに見え候。

一夜なれたが名殘をしさにいでゝ見たれば。奥中に舟のはやさよ。霧のふかさよ。

月はやまだの上にあり。船は明石の沖をこぐ。さえよ月。霧には夜舟のまよふに。

うしろかげをみんとすれば。霧がなふ朝霧が。

秋はや末にならなら坂や。このてがしはの紅葉して。草うらがるゝかすがのに。つまこひかぬる鹿の音も。秋の名殘とおぼえたり〳〵。

さよ〳〵。ふけがたの夜。しかのひとこゑ。
めぐる外山になく鹿は。あふた別か。あはぬうらみか。
逢夜は人の手枕。こぬ夜はおのが袖まくら。まくらあまりに床ひろし。よれ枕こちよれ枕よ。まくらさへにうとむか。
一夜窓前芭蕉の枕。涙や雨と降覽。
世事邯鄲枕。人情灔澦灘。
淸容不落邯鄲枕。殘夢疎聲半夜鐘。
人をまつむし枕にすだけど。さびしさのまさる秋の夜すがら。
山田つくればいほねする。いつか此田をかり入て。思ふ人とねうずらう。ねにくの枕や。ねにくの庵のまくらや。
とがもないひ尺八を枕にかたりとなげあてゝも。さびしや獨寢。

一夜こねばとて。とがもなき枕をたてなゝげに。よこなゝげに。なよな枕よ。なよまくら。
引よ手枕。木枕にもおとめよ手枕。たかをのわしやうの〳〵手まくら。
くる〳〵とは枕こそしれ。なう枕。物いはふには勝事のまくら。
戀の行衞をしるといへば。枕にとふもつれなかりけり。
衣〳〵の砧の音か。枕にほろ〳〵〳〵と。それをしたふは涙よなふ〳〵。
君いかなれば旅枕。夜さむの衣。うつゝとも夢とも。せめてなどおもひしらずやうらめし。
爰はしのぶの草まくら。名ごりの夢なさましそ。都のかたをおもふに。
千里も遠からず。あはねば咫尺も千里よなふ。君を千里にをひて。けふも酒を飲て。ひとり心をなぐさめん。

南陽縣の菊の酒のめば。命もいく藥。七百歳をたもちても。齡はもとのごとく也〳〵。
うへさに人のうちかつゝねりぬき酒のしわざかや。あちよろり。こちよろ〳〵よろ。腰のたゝぬはあのゆへよなふ。
きつかさやよせさにしさひもおあかきは酒のとがぞ。をにとなおぼしそよ。おそれ給はで。我にあひなれ給はゞけうがる友とおぼすべし。われもそなたの御すがた。うち見には〳〵おそろしげなれど。なれてつほひは山臥。
いはんやけうえんの砌には。なんぞかならずしも人のすゝめをまたんや。
あの鳥にてもあるならば。君が行來をなくもなどか見ざらむ。返々もうらやましの庭とりや。一げにや八聲のとりとこそ名にも聞しに。明過て今は八聲も數すぎぬ。空ねかまさねか。うつゝなの鳥のこゝろや。
うきも一時。うれしさもおもひさませばゆめ候よ。
此程は人めをつゝむ吾宿の〳〵。かきほのすすき吹風のこゑをもたてずしのびねに。なくのみなれし身なれども。今は誰をかはゞかりの。在明の月の夜たゞとも何かしのばん。杜鵑名をもかくさでなく音かな〳〵。
篠のしのやの村時雨。あらさだめなのうき世やなふ。
せめて時雨よかし。ひとり坂屋のさびしさに。
せめておもふふたりひとりねもがな。
ひとりねしよのうやな。ふたりね寢そめてうやな獨ね。
人のなさけのありし時。など獨ねをならはざるらむ。
ふたりねし物。ひとりも〳〵ねられけるぞや。

身はならはしよなふ。身はならはしの物哉。
ひとりねはするとも。うそな人はいやよ。心はつくひてせんなやなふ。世中のうそがいねかしうそが。
たゞおいて霜にうたせよ。夜ふけて來たがにくひ程に。
とてもおりやらば。よひよりもおりやらで。鳥がなく。うつゝいく程あぢきなや。
霜の白菊うつろひやすやなふ。しやたのむまじの一花こゝろや。
霜のしらぎくはなんでもなやなふ。
君こずば小柴。わがゐとゆひに霜はをくとも。
索々たる緒のひゞき。松の嵐もかよひ來て。ふけてはさむき霜夜月をこさんに送也。
霜ふる空のあかつき月になう。さて。わごれうはかへらうかなふさて。
鷄聲茅店月。人迹板橋霜。
歸るをしらるゝは。人迹板橋の霜のゆへぞ。
はしへまはれば人がしる。湊の川の鹽がひけかな。
はしの下なるめゝしやこたにもひとりにねうとのぼりくだる。
小川の橋をよひには人のあちうきわたる。
みやこの雲ゐをたちはなれ。はる〳〵來ぬる旅をしぞ思ふ。おところへのうき身の果ぞかなしき。水ゆく川の八橋や。くもでに物をおもへとは。かけぬなさけの中〳〵に。なるゝやうらみなるらむ〳〵。
鎌倉へくだる道に。竹へげの丸はしをわたひた。木かけぬか板かけぬか。竹へげの丸はしをわたひた。木もかへた板もかへた。にくひ若衆をおちいらせうとて。竹へげの〳〵丸はしをわたひた。
面白の海道くだりや。何とかたるとつきせじ。

鴨川しら川打わたり。おもふ人に粟田口とよ。四の宮河原に十禪寺。關山三里を打すぎて。人まつもとにつくとの見わたせば。勢田のながはし。野寺。しの原やかすむ覽。雨はふらねどもり山をうち過て。小野の宿とよ。すりはり嵩の細道。今宵は爰に草枕。かり寝の（醒）夢をやがてさめが井。ばんばとふけば袖さむ。伊吹嵐のはげしきに。不破の關もり戶さゝぬ御代ぞめでたき。

靨の中へ身をなげばやと思へど。底の邪がこわひ。

今朝の嵐はあらしではなげにすよの。大井川の河の瀨のをとおやげにすよなふ。

水がこほるや覽。湊河がほそりすよなふ。我らも獨寝に身がほそりすよなふ。

春過夏闌て。又秋くれ冬のきたるをも。草木のみ只しらする也。あら戀しの昔や。思出は何に付ても。

げにやながむれば。月のみみてるしほがまの。うらさびしくもあれはつる。跡の世までもしほしみて。老の波も歸にやらん。あら昔戀しや。

戀しや／＼としたへどもねがへども。かひもなぎさの浦千鳥音をのみなくばかり也／＼。

あはでかへれば。朱雀の川原の衛。明たつ在明の月影つれなや／＼なう。つれなとあはでかへすや。

須磨や明石のさ夜千どり。恨／＼て鳴許身かな／＼。ひとつうき世に。ひとつ深山に。

み山烏のこゑまでも。心あるかと物さびて。しづかなる靈地哉。げに靜なる靈地かな。

からすだに憂世いとひて。墨染に染たるや。身をすみぞめにそめたり。

丈人屋上烏。人好烏亦好。

をともせいでおよれ〱からすは月に鳴候ぞ。

名殘の袖をふりきり。さていなうずよなふ。吹上の眞砂のくずさけはなふ。

袖に名殘をおし鳥の。つれてたゝばやもろともに。

風に落。水にはさかふ花紅葉。しばし袖にやどさん。涙の露の月の影〱。それかとすればさもあらで。小篠のうへの玉あられ。をともさだかに聞えず。

世間は霰よなふ。さゝの葉の上のさら〱さつとふるよなふ。

凡人界のあり樣をしばらく思惟してみれば。くわいらい棚道にひがをあらそひ。まてばいづれの所ぞや。妄想顛倒夢まぼろしの世中に。あゝをあるとやおもふらむ。

申たやなふ〱。身が身であらうには申たやなう。

身の程のなきもしたふもよしなやな。あはれ一村雨のはら〱とふれかし。

あまり言葉のかけたさに。あれみさひなふ。空行雲のはやさよ。

芳野川のよしやとはおもへど。胸にさはがる る田子のうらなみのたちゐに思ひ候物。

田子のうら浪。うらのなみたゝぬ日はあれど。日はあれど。

石の下の蛤施我今世樂。せいとなく。

百年不易滿。無縛強弓。

わごりよに心つくし弓ひくに。つよの心や。

とり入ておかふやれ。しら木の弓を。夜露のをかぬさきにとりいれうよなふ。

さまれゆへたり松山のしら鹽言語神變た。よ弓いりかたにゆへたりよ。あら神變た。

いと物ほそき御腰に。太刀をはさ矢おひ。とら

豹を踏御脚に。わらぐつをめされた。くゝればかさとなり候。賤が柴垣えせ物。

いや申やは。たゝく〳〵うて。柴垣にをしよせて。その夜はよもすがらうつゝなや。

うすの契やはなだの帯のたゞかたむすび。神は僞ましまさじ。人やもしも空色のはなだに染しひたち帯の契かけたりや。かまへてまもり給へや。たゞたのめ。かけまくも〳〵かたじけなしや。此神のめぐみもかしま野の。草葉にをける露のまもおしめたゞ。戀の身の命のありてこそおなじ世を頼むしるしなれ。

まことの姿はかげろふの。石に殘すかたちだに。それとも見えぬつたかづら。くるしみをたすけたまへと。いふかとみえてうせにけり〳〵。水にふる雪しろふはいはじ。きえきゆるとも。ふれ〳〵雪よ。宵にかよひしみちのみゆるに。夢かよふ道さへ絶ぬ呉竹のふし見の里の雪の下折とよみしも。風雅の道ぞかし。げに面白や。わか竹のはり竹のさゝらならば。夢の通路たえなまし。千秋萬歳のゑいぐわも破竹のうちのたのしみぞ。あぢきなの憂世や。夢さへ見はてざりけり。

見るかいありてうれしきは。契し今朝の玉章。除目の朝の上書。

しやつとしたこそ人はよけれ。

げにあひがたき法にあひ。うけがたき身の人界をうくるみぞとやおぼす覽。はづかしやかへるさの道。さやかにもてる月の影は。さながら庭の面の雪のうちの。芭蕉のいつはれる姿の。まことを見えばいかならんとおもへば。鐘のこゑ諸行無常と成にけり〳〵。

おほとのへの孫三郎が織手をとめたる織衣。牡丹。唐草。獅子や象の雪ふり竹の籬の桔梗と。うつればかはる白菊の。おおとのへの竹の

下。うら吹風もなつかし。さすやらてさゝぬおり。さとなど待人のこざるらむ。

人の心はしられずや。眞實心はしられずや。

人の心とかた田の網とは。よるこそひきよけれ。よるこそよけれ。ひるは人目のしげければ。

みちのくにのそめいろの宿の千代つるこがおとゝ。見めもよひがかたちもよいが。人だにふらざなをよからう。

うきみちのくの忍ぶのみだれに。おもふ心の奥しらすれば。あさくや人のおもふらん。

忍び身の心に隙はなけれども。なをしる物は涙かな〳〵。

じのぶの里にをく露も。我等が袖の行衛ぞと思へども。色には出じとばかりを〳〵。心ひとつに君をのみ。おもひこしぢの海山のへだては。千里の外なりとも。人のこゝろのかはらずば又かへりこむ。かへる山の秋の夕のうき旅も。こにそはばかくはつらからじ。

しのばゞ目でしめよ。言葉なかけそ。あだ名のたつに。

何よ此しのぶにまじる草の名の。我には人の軒ばならん。

龍のは今は名はもるゝとも。

忍事もしあらはれて。人し〔ら此歟〕とにこなたは數ならぬ躯。そなたの名こそをしけれ。

しのぶれど色に出にけり吾戀は〳〵。物やおもふと人のとふまで。はづかしのもりける袖の涙かな。實や戀すてふわが名はまだき立けりと。人しれざりし心まで。思ひしられてはづかしや〳〵。

をしからずのうき名や。つゝむも忍ぶも。人目も恥もよい程らかの事かなふ。

おりやれ〳〵。おりやりそめておりやら

れぱおれが名がたつ。只おりやれ。
よし名のたゝばたて。身は限りあり。いつまで
ぞ。
おそばにねたとて。皆人の讃談ぢや。名はたつ
て詮なやなふ。
よそぢぎらぬ。ちぎらぬさへに名のたつ。
流轉生死をはなれよとの御とぶらひを身にう
けば。縦其名はなのらずとも。かけよろこばゞ
それのみぬしと おぼしめせ。回向は草木國土
までもらさじなれば。 わきて其ぬしよと心あ
てあらば。それこそゑかうなれ。それまではい
かであるべき。
只將一縷懸肩髮。引起塗歸宜刀登。
むらあやとこもひよこたま。
今由た髪がはらりととけた。 いか様心もたそ
にとけた。
わがまたぬ程にや。人のこざるらう。

まつとふけどもうらみつゝ。 ふけどもへんな
い物は尺八ぢや。
まてども夕のかさなるは。 かはり初かおぼつ
かな。
まてとてこぬ夜はふたゝび肝も消候。 更行鐘
の聲。そはぬ別をおもふからすの音。
復待よひの更行鐘の聲聞ばあかぬ別のとりは
物かはと詠ぜしも。 戀路のたよりのをとづれ
の聲と聞物を。
この哥のごとくに。 人めましくもいひたつる
人は。中〳〵わがためはあたごの山臥よ。しら
ぬ事なのたまひそ。何事もいはじや聞かじ。
白雪の〳〵道行ぶりの薄氷。白妙の袖なれや。
樒が原にふる雪の花をいざやつまふよ。 末つ
む花は是かや。 春もかへきなば宮こには野べ
の若菜つむ。つらや〳〵。
つほひなうせいしやう。つほひなふつほや。ね

もせひでねむかるらふ。
あまりみたさに。そとかくれてはしてきた。先
はなさひなう。はなして物をいはさいなふ。そ
ぞろいとしうて何とせうぞなふ。
いとおしうて見れば。猶又いとおしいぞ〳〵
と。かひ行垣の緒。
にくげにめさるれども。いとおしひよなふ。
いとしうもなひ物。いとおしひといへどなう。
あゝ勝事はしやよや。さらばわごれうちとい
とおしひよなふ。
いとおしがられてあとにねより。にくまれ申
て御ことゝねう。
人のいらくばわれも心のかはれかし。にくむ
にいとおしいはあんはちや。
にくひふりがるあのふりをする人はひずおれ
がする。
いとおしいといふたらかなはふず事か。明日
は又讃岐へくだる人を。
我は讃岐のつるわの物。あわの若衆に膚觸て。
あしよや腹よや。つるわの事もおもはぬ。
眞やわが心。夜晝君にはなれぬ。
ふみは遣たし。詮かたな。かよふ心の物をいへ
かし。
こかのとことやらでおとひたをなふ。あら何
ともなの文のつかひや。
おせき候ともせかれ候まじや。淀川の淺き瀬
にこそしがらみもあれ。
こしかたより今の世までも絶せぬ物は。戀と
いへる曲物。げにこひは曲物。くせ物かな。身
はさら〳〵。さらさらさら〳〵。更に戀こそね
られね。
詮ない戀を志賀の浦浪。よる〳〵人により候。
あの志賀の山ごえをはる〳〵と。ねたふなれ
つらふ返〳〵。

あぢきなと迷ふ物哉。しどろもどろのほそ道。

笈はどこ。石原嵩の坂の下。足いたやなふ。駄賃馬に乗たやなふ。殿なふ。

よしやたのまじ行水の。はやくもかはる人のこゝろ。

人はなにともいはゞ聞の水候よ。わごりよの心だににごらずばすむ迄よ。

瀬の中川うつかとわたるとて袖をぬらひた。

あら何ともなのさても心や。

宮城野の木の下露にぬるゝ袖。雨にもまさる涙かな／＼。

紅羅の袖をばたがぬらしけるかや／＼。

花見れば袖ぬれぬ。月みれば袖ぬれぬ。なにのこゝろぞ。

難波ほり江のあしわけは。そよやそゞろの袖のぬれ候。

なくはわれ。なみだのぬしはかなた／＼ぞ。

折／＼はおもふ心のみゆらんに。つれなや人のしらず顔なる。

よべのよばひ男たうれよもれ。こきかごにけつまづゐて。太黒ふみさく／＼。

花かごに月を入て。もらさじこれを。くもらさじともつが大事な。

かごかな／＼。うき名もらさぬかごかななふ。

雖甚斟酌多候。依去候御懇候間。愚筆を指置如本書写畢。御一見之已後者可有入火候也。此興々々。

大永八年戊子卯月仲旬書之。

續群書類從卷第五百六十三

飲食部 一

式三獻七五三膳部記

二獻　壹割へいし一具　此三日用意の事の力に在傳也

式三獻

「わつ寺本此膳記にあり」

しほ

しほのもりやうは杉なりに高さ一寸ほど也。【一本わ有】

二

うち身

鯛入にに鯛か用ず、鯛を用也。口傳有之。ひはの枝をさす。【一本わ有】

はしかみ

はしかみのもりやうは杉なりに高さ一寸ほど也。【一本わ有】

引渡しののしに刀めつくも膳月の數十二也。閏月あれば十三也。文つみは月は膳へ枚本膳の皆たき膳のさきになす也。

一

海月

女房衆へはまはしもりなり。ひきわたし。

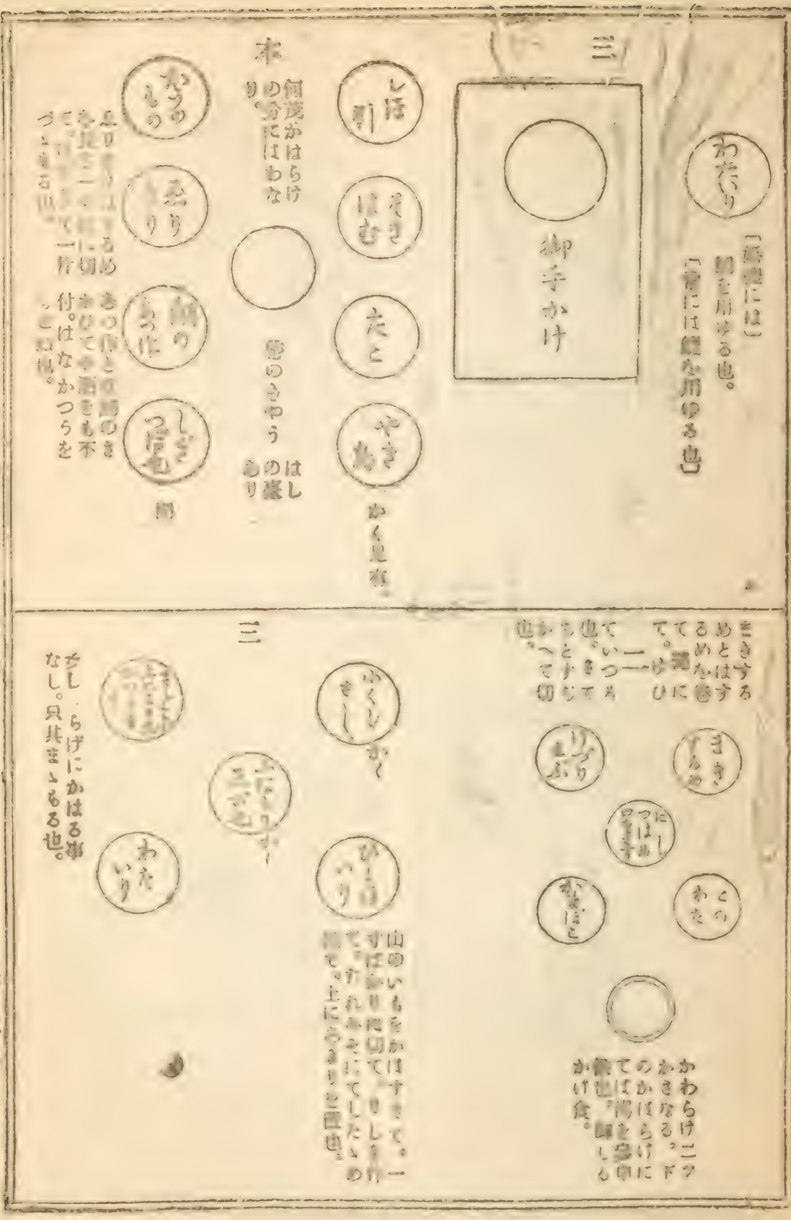
かわらけわなし。【一本わ有】

三重

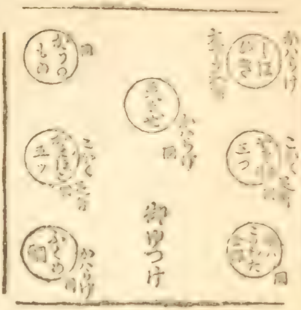
はしの臺あり

梅干
五ツ

【一本わ有】梅にしは四ツもりて。其上に壹ツもりて。以上五ツ也。

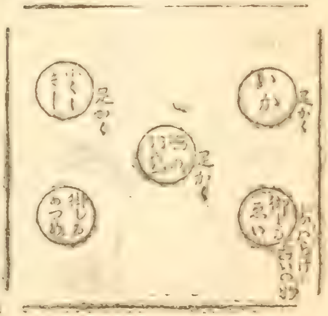

三
わたり
御手かけ
しほ
たと
やき鳥
かく昆布。
はしの臺あり
三
ふくしさし
わた
いり
まきするめ
りつぶ
くのわた
かわらけ二ツかさなる。下のかはらけにてば湯を…かけ食。
なし。只其まゝもる也。

一

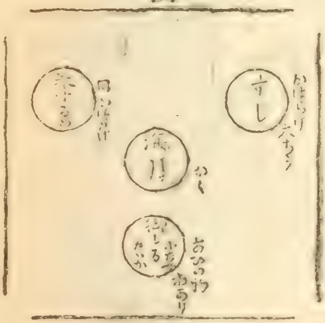


二

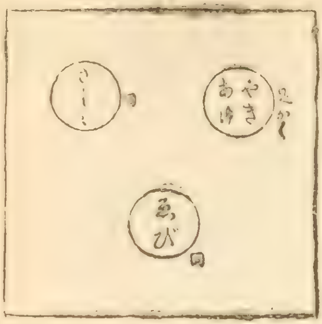




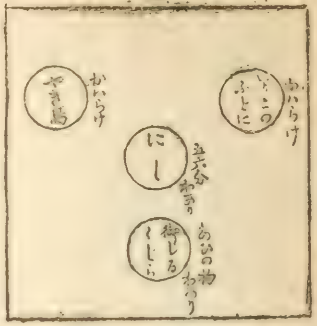
四



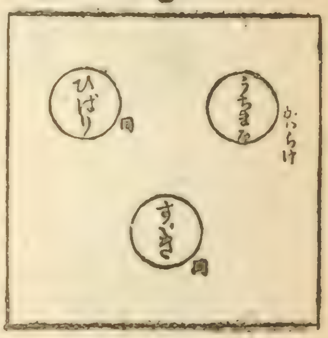
六



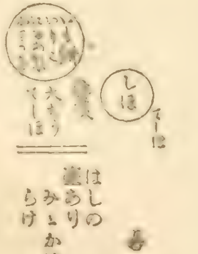
五

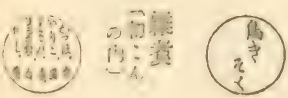


七



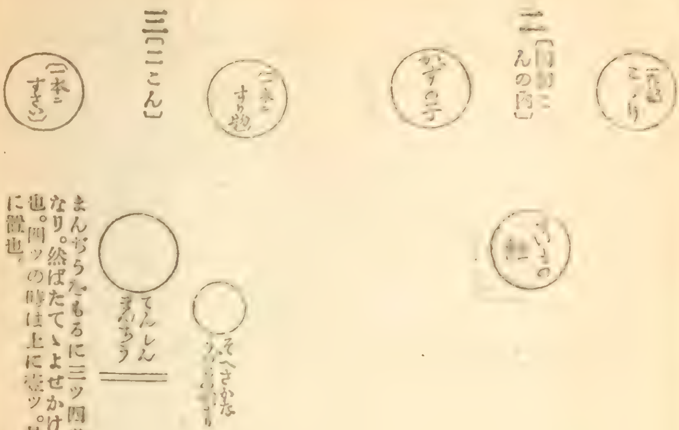
大かく足なし





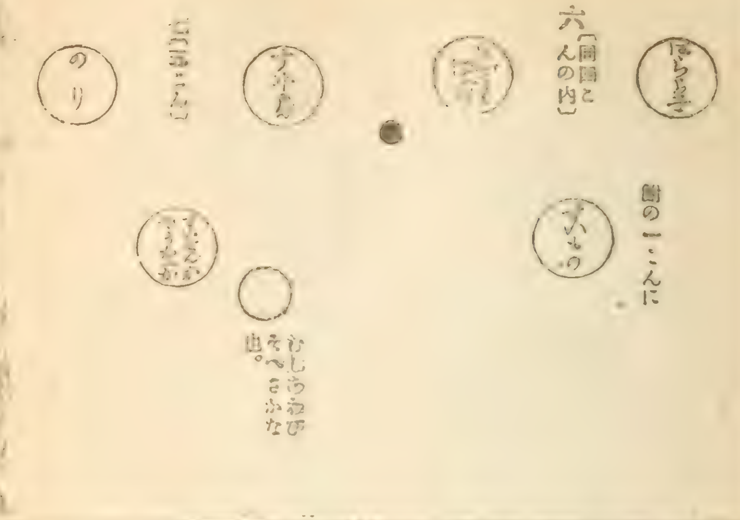
かめのこうにはいち上にいりこをもる也。常には青黄赤白黒なれ共。雜煮の時は青赤黄白黒ともる也。

足には五色をもり候。



まんぢうたもろに三ツ四ツももるなり。然ばたてゝよせかけてもる也。四ツの時は上に壹ツ。是をよこに置也。





佛子の脂をつゝみ候事。當流にはなく候。公方様御成など。其外きつとしたる時は。片口にて參候間。口をもつゝむ事なく候。自然かた口なき時。もろ口にて候へば。口のつゝみ様有之。他流には木の葉をゆひ付など色々の事候。一向なき事に候。

慶長拾一　　大草三郎左衛門尉

六月廿四日　　公因（判有）

山内料理書

武衛御内　山内三郎左衛門尉殿相傳申料理之事

一青かいしき　精進の事也、きかいしきとは　かぶら也。

一引しるの事つるまきにてつく事。はや汁はくるしからず。

一粥の上にて酒まいらず。先以かつしよくきん也。

一さかなの内にててんしんまいる事。さかなのこん數へは不入

一てんしん已後御酒長々在て。さかな等に冷麥まいる事くるしからず。

一さかなこん〳〵にはしまいる事。　大名さまへはまいるべし。

一はし臺はみゝかわらけにをく事。　大名さまの外あるべからず。みゝかわらけのうへに紙かいしきのやうにかみををく。

一さか月にかわらけををく事。三さか月外えはいつも一をくべし。　かわらけ二をく事きかずと也。三せんをしたみの用に末座などにをく事あるべき哉。

一本膳。是は椀の膳の仕様也。土器の時は汁不居。中の飯計可居。椀の時は鎰折敷。

一



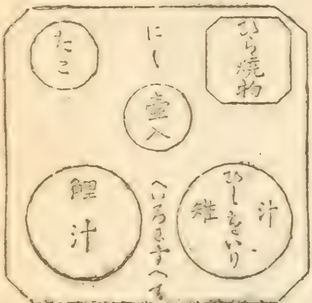
土器ならば五ど入也。かわらけの時は足打也。

一鯛焼物をひら焼物と云。かいしきせず。

一辛螺さざえをそくする。

一蛸。いぼをすきて皮をむく也。

二



かわらけ
あいの物

一分飯の時も本膳にも分飯にも手無也。祝時は分飯の上に置箸にても甘箸にても少居也。

一三膳とも二の膳の方に居。引物より左に居。三膳以下の[illegible]は三くみ迄とも皆引物也。但[illegible]向膳[illegible]之。

三



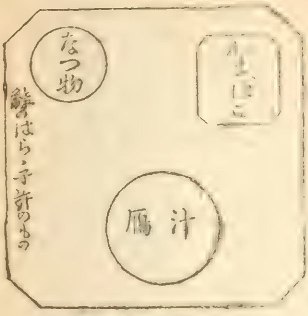
三ど入

[illegible]汁たるべし[illegible]いのもの[illegible]べし。

下に青物[illegible]もいの物[illegible]汁に[illegible]も可呑ため也。

引

一物



五ど入

汲口とん山葵を春に半程かわらけの端に付。

二



焼ひたしとは。きすをやいて皿へ入て。頭方よりもそくとこそげて鱗をおとすなり。其後醤少入。酒を掛。尾をとがさぬやうに焼也。

三



一夏の仕立の事

本膳



かわらけ飯ならば汁は居まじき也。如前。

二



白瓜など入べし。なすびも吉。うすしたじにて煮よ。[illegible]にて。

三



魚汁なるべし。何にても。

ひらをむしりて酒かけべし。

あゆの焼物。青みかいしき。

引物

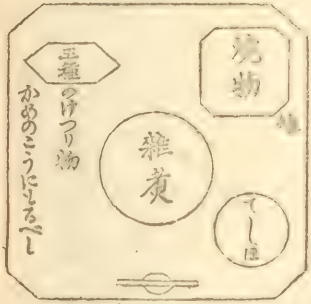


越瓜なくは冬瓜以下用。越瓜を少ゝとく切。厚サ一寸五分計に切。たれみそにて煮べし。又鯛をとりすりて入。
まよりむしり向かけべし。すり付たる所也。

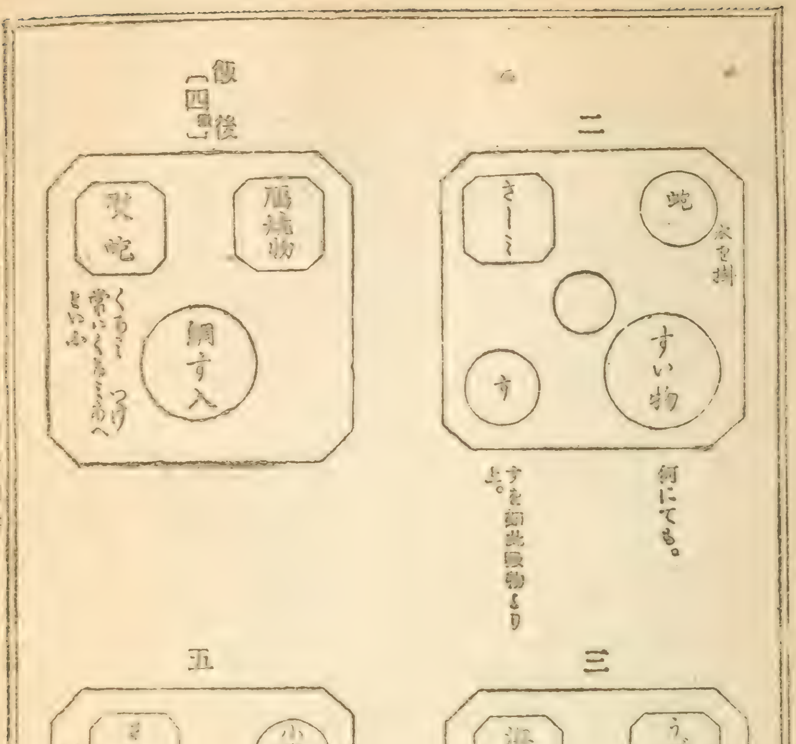


うるかに。鮎の内あけにてにろ也。

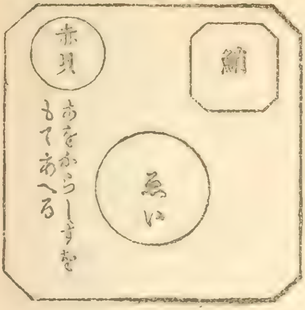
一夏肴くみ之事
五種削物如此もる也。
白　青
黒　四季同
赤　黄
亀のから。手鹽時のには違。先れんしあけす。高五六分計なるべし。むかひへ青かいしき少出しかけよ。



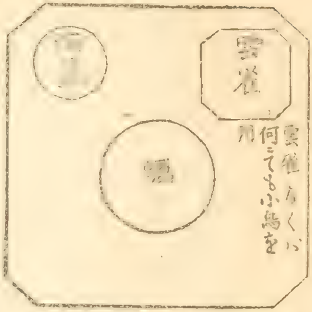
焼しほいかにも少し焼。
箸みゝかわらけにすへよ。
ざうに五ど入。


二
蛇
さしみ
すい物
す
何にても。
三
うづら
海老
五
小海老
ひしほ入
す
飯後
〔四膳〕
鷹焼物
鯛すし入

八



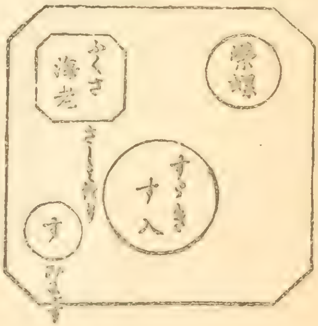
六



雲雀は翠の爪一ッのうすさ也。

かきひれるとほ。桶に水入て。わらのねいほにてこれまわせば。黒きものもからもおつる。いりやう。水酒にている。又白水にていりて酒を入。

七

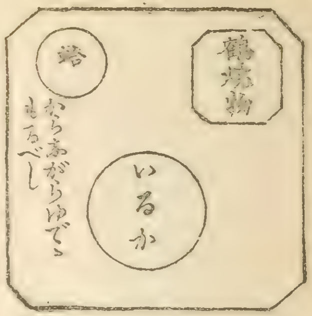


九



ぬかこ指。雁を五分計に四かくに斯。厚さ二分金に切。すりひし紙前あぶる。串にしに鉄三ツ計すみ違にさすべし。凡如此くしにきけて在べし。きそくのひねりめと鳥の間三ふせばかりたるぺし。紙鳥はきりてよれば紙しめりて見ぐるし。

十



一夏肴くみの事

一



(了然)あしらふりなく候はゞ。山のいも以下にても入よ。鯛烏。もちゐ。いりこ。生るあわび。四色をたれみそにてによ。口傳在。四種之外入べからず。

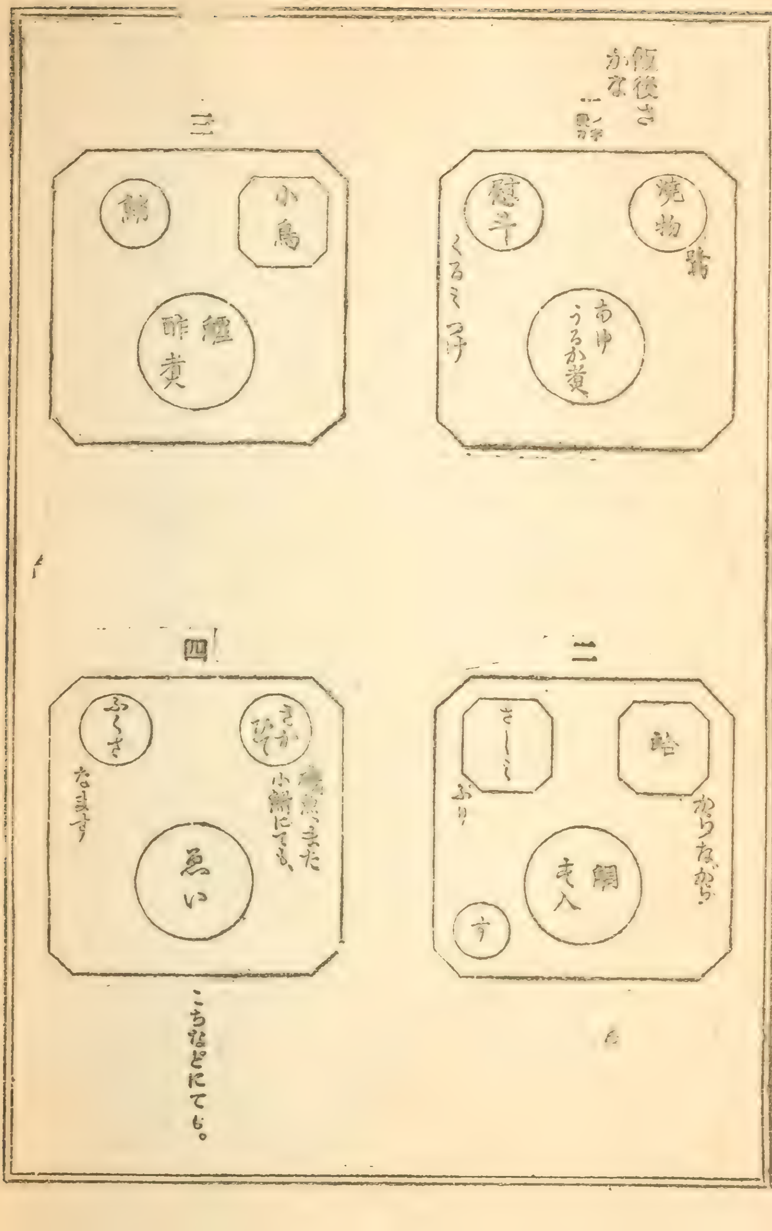
二



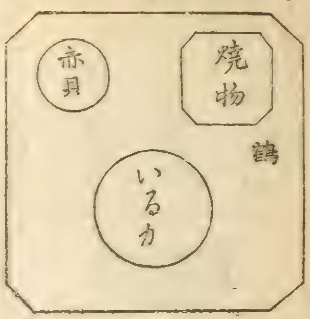
三



鯛にても。

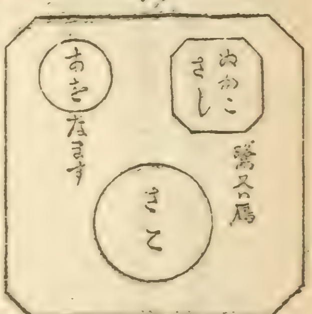

飯後さかな
三
小鳥
鱠
酢煮
焼物
向
うるか煮
くるみ
つけ
四
ふくさ
なます
小鯛にても、
二
さしみ
ぶり
蛤
す
こちなどにても。

五



塩つけ又干物にても。

六



初こんの雑煮削物などなく候はゞ如此すべし。

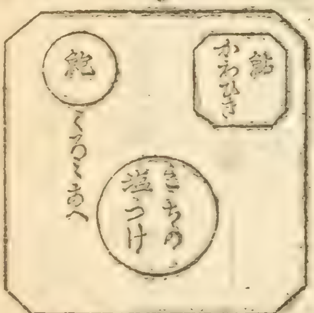
一京に賞翫の物。國においてありがたくみえ候間。其心得をなすべきと也。

一たこなどはぶゑん又しほづけなどなく候はゞ。ひだこを能ほどほして。やわらげてつかふべし。

一菓子にはきさんじなる物をせよ。飯後にまいるなれば也。

一茶のこにはしほ〳〵しき物のこまやかなる物

七



鮎のかわ引とは。如常出候て能々洗て。ふくさつくりもろさしみ。

鮑くろみあへとは。わたくろみをたゝき。あゆすあへ也。

をせよ。これ第一習也。くわしとは飯已後まいるをいふ。ちやのことはてんしんのちまいるをいふ。されば點心已後の茶子なる故。しほ〳〵しくこまやかなる物用。

ちやのこ



ところ計はまいらせず。あめをばこゝかはらけにてしるあめをゝく也。あめにてところさして御まいり在。楊枝。

のりあをかいしき在。



ふかいしきすべし。

むすびこぶ。五葉の枝につけ候て。又時の花のえだにもつけ候て。

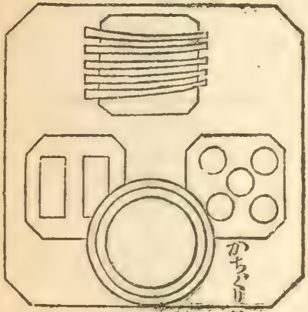
一三さかづきのくみやう。

御めな衆にはくきやうたるべし。

〔熨斗あわび五ほん〕

折敷は足うち。

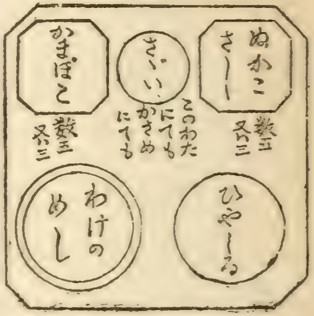
こぶ。のし。かちぐり〔折歟〕のもり物はかくの打敷。



さか月数三へいから也。則三かはらけといふ。

昆布二きれ此繪のごとくたてにすべく候。

是は三膳の前にもしるし候へども又如此もさるべし。





一このわたにいりこ風情なる物入事有べからず。
一鷹鳥はしにて不食。但いりたる鳥など。手にて食べきならねば不及力。
一たかの鳥。貴人にはまるのくちを上にもる也。凡以之鷹鳥を知也。
一鴫をもる事。はしを上にもる也。
一貴人御銚子の上に盃御置候て。被召出時左手をつき右にて取下。左右の手にて呑也。
一蝶がたに口つゝみたる瓶子。女蝶。右。男蝶。左。縦ば西上座也。東下座にをかば女。南。男。北
一折をく事。二から。三からをく。柿を積にへたをとる也。但名物柿などは其儘。
一ひる已後果子茶子不承といふ說在。未聞。
一ゆづけにせぬ菜の事。すし。なます。山椒。鹽。

一ちご。かつじき。めな粢。てんしんの時。こせう。紙をば置て。こせうをばつゝまず。然ばちご。めな。其外こものこせうしるに入事なかれ。

一山葵あらふとは不謂。こくるといふ。おろす事。春は葉方よりも下。冬は根方より下。

明應六年丁巳二月廿六日於客亭書之。

續群書類從卷第五百六十四

飲食部二

食物服用之卷

一膳にむかひて覺悟の事。さげをのとめやうあり。又あしのくみやうのこと。貴人の御前へあしのうらのむかざるやうになすべし。但これは貴人御きんじよに五三人のしつけなり。其外は人なみを見あわせ候てしかるべし。

一食まいり候しあはせのこと。左の手にてはしをとりあげ右の手にまづもち。（これにみやうあり。女房若衆は右にてとるべし。くでん。）さて食椀をとりあげ。食を一くちまいり。しるをとりあげ。みばかりをまづまいりをくなり。又食をまいり。汁をとりあげ。しるをすい。みをまいるべし。さいをまいるに。何にてもなかをきを參るべし。されどもぜんくみによりまいるやうあるべし。あえまぜなますかみしもにあらば。いづれなりともまいりはじむるなり。まるたあわびのからもりなど。一ばんにまいる事いかゞ。

一二の汁のまいりやう。はしをとりなをし。汁を右にてとりあげ。いとじきを左の手のうちにすゆるやうにしてまいるべし。かわら

けなどの時は兩の手にてとるなり。又本膳のさいと二三のさいとをかけまいる事いかゞ。本膳は本膳。二の膳は二の膳。三の膳は三のせん。そればかり汁さいをまいるべし。又さい一つ皆まいり候事いかゞ。すこし宛いづれのさいにも手をかけらるべし。但ことによるべきか。又三の汁は左の手にてとりあげ。汁をすひみをくふなり。これを二三のくひわけといふ。

一食のさいしんうくる事。我よりしたの人うけ候間は。すこし待こゝろをなし。さいなどをいろい。したの人さいしんうけ候はゞ食を參るべし。

一食に汁をかくる事。本膳のさい右の手にて少のけ。食を膳にわけ。しやうじんの汁をかけべし。おほ汁ひや汁同前。但ときのけいぶつなどあるは。それをかくべき也。是賞翫たり。

一ひき物かなかけも。もり付たるをば。かなかけを取あげ。ひだりに持まいるべし。但汁ある物。足のつきたるをばとりあげずまいるなり。さてはしをおさむるとき。食はじめたる物。あるひはしやうじんのものにておさむべし。口傳。

一すわう其外袖のながき物。食物まいり候時。左の手をつき候はで。すわうの袖のゑもんをとり。左のひざに袖をしき。手をあをのけまいるべし。

一寺などにてしやうじんの食まいり候時。折敷にはわけず候。小汁わんにても。又はしるわんにても。わけられ候ことよく候。同じくはわけられ候はぬ程まいり候てしかるべき也。

一まへ鹽はまいり候てもくるしかるまじ。但

若衆などはいかゞ。

一みをくはざるさきに汁をすひ候は。鯉たかぎるよし申つたへ候。其外はこと〲くみをくゐ候て後。汁をすふものぞと。

一心のしき三こんとて口傳あるよし候。梅干すえ候事は。人のまへにて物にむせじためぞと。梅干は口に酢たまるゆへ也。又くらげをすえ候事は。ほねあるものもちひがたき人のためにや。

一食まいり候時。左の手をひざのうへにをく事わろし。いくたびも手をふせたゝみにつかへてしかるべし。

一食のさいしんをうけ。しもにもをかず。すぐにまいる事いかゞ。折敷にをき候て後まいるべし。

一汁のさいしんひくあひだは食まいらず。し【ら脱歟】はくはしをとりなをし。汁のきたるを待べし。

一酒をめす事。うけ候て其まゝめすはよし。のみうけ候てしたにはをかざる也。のみかけずしてはしたにおき候てもくるしからず。

一中酒のあひだに。何にてもしやうじのものを手にとりあげふくする事。としよりたる人はくるしからず。若衆などはいかゞ。

一食のゆをまいるには。はしをとりなをし。箸さきにてゆをそとそゝぎあげ。ゆをまいり。扨後はしをおさめらるべし。

一くわしは何なりとも。まいり候てのちやうじをとらるべし。たゞし寺などしやうじせんの時は。やうじをとり候て後。くわしをまいるとぞ。

一茶のめしやうは。左右の手にて臺をとり。二くち三口ほどめし候て。だいをしたにをき。ちやわんを兩の手にかゝへ。御茶のこらざるやうにしてよし。當世はやるちやのしき

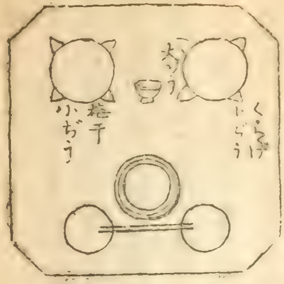
しかるべし。しわしくしるすに及ばず。
一座つきのときは扇をぬき。てうしいで候はゞ。
扇をさゝるべし。

右通法かくのごとし。

式三献　初献圖

一三盃は一どいり。二どいり。三どいり。以上三つなり。又二つながらおなしほどのかわらけをもするなり。大ちう三どいりのあひだなり。かうだて二ゑひきあはせたるべし。

初献圖



なましほからだてなし。

みゝかはらけにはしをのせ。はじのさきをしほかはらけにわたすべし。

一ひきわたし。十三月は十三にきざむべし。男はひきわたし。女はまはしもりたるべし。のしあはびを二つかさね。そくいひにてつけけづる也。

一男の参會はあしつけ。女房はくぎやうなり。但おなじほどなるはいづれもくぎやうなり。男ばかりのときは皆あしつけ也。

一式三献はいづれもくはざるもの也。はしをもいろはず。

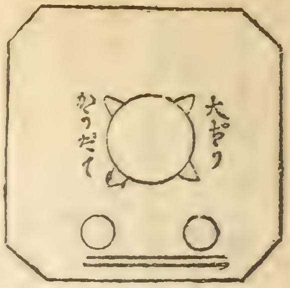
一總食のからだても二重なり。まへのひきあはせは人の物きるごとくすべし。

二献目おなじ圖

男はさしみ。

女はうちみ。

うちみは大ちう又大がくのうちに。四方にあつがみをしき。これをもるもあり。ふちのうちたるべし。

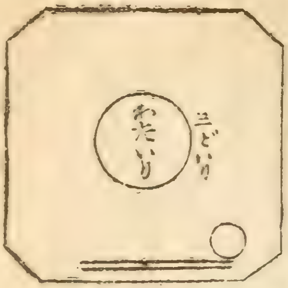


しほがはらけ

からみはわさびにてもしやうがにてもおろしてまろくもる也。小ちう也。かうだてなし。

三こん目おなじづ

このわたいり。女はひれをしたになしてもり。おとこは ひれをうへになしてもる也。 鯉のわたのすそし見ゆるやうに わきへいだしもる也。



なましほ

式三献ののみやうの事。

一ばんに三つさかづきを かさねたるを。すゆるところにてうへの盃をとり。あひてに禮をして。貴人まづきこしめし。魚道を二つめの盃へいるゝ也。のみたるさかづきをば。右のはうたゝみのうへにをく也。あひて又うけてのむ也。ふるきさかづきのをきところもおなじ。さて酌とる人つぎの間へ行候て。てうしをへちの人にわたせば。別の人酌をとり。すなはちくわへて拶すべ。座にかしこまりゐる時。さしみをまいらする也。そのときまへのぜんを目のひだりへ少ひきのくる也。膳すえて後。しやくすゝみよりてまいらする也。式代あるべし。此たびはつきの人のむ也。同じく魚道をまへのごとくすて。右

のたゝみにおく也。又酌かはりつぎの間にて別の人にわたし。則酒をくわへてまへのごとく御前にかしこまるなり。猶々酒のくわへどころへ。例式にかはりてつぎのまにてしやくてうしをわたし。則そこにてかわる也。さてまへのごとくかしこまり居るとき。又わたいりをすへ。さて御酌にまいり。式代ありてきこしめす也。おもむきは同前。一人の前に三膳ながらならべてすゆるもの也。膳のすゑやうは。一ばんのぜんは主人の左かた。二ばんのは右のかた。三ばんめは二番めの膳をいちかみへあげ。其あとに三番の膳をく也。かくのごとく調へて一膳づゝあぐべし。其時ふるきさかづきを自身とり候て。一ばんのぜんをもとのごとくをく也。あぐるときは一番の膳よりしだひ〳〵に三度にあぐる也。

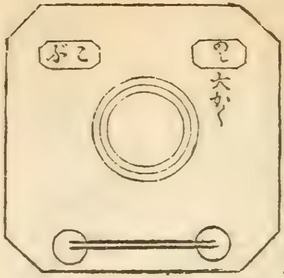
貴人と三ツ盃のみ様の事

一　一ばんにきにんきこしめし。二ばんめにあひて呑。又二こんめをあひて呑。貴人きこしめし。又三こんめを貴人きこしめすところに。此たびはあひてはさかづきを一つのまずして。貴人三どめにきこしめしたる御盃をいたゞくなり。貴人盃たまはりて。其さかづきどころ。前わがのみ候二つのさかづきの上にはをくべからず。ならべてそばにをくべし。又あぐるときは。我のみ候さかづき二つを。いまだのみ候はぬ一つの盃のうへに。まへのごとくしたにかさねをく也。きにんのさかづきをば三つのさかづきのそばにならべ。右のかたにをくなり。三つの盃にかさねべからず。

一　一だんのしふげんにはしき三こんあるべし。例式のときはひきわたしたるべし。

同圖

のし
七も
五も



三さかづきはへいからたるべし。

前のごとくへそかはらけもくるしからず。

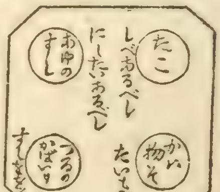
まへのごとく。

右のみやうはまへのごとし。しやくも三人かわるなり。ふるさかづきのをき所も同前。

湯漬一上

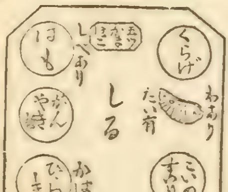


三

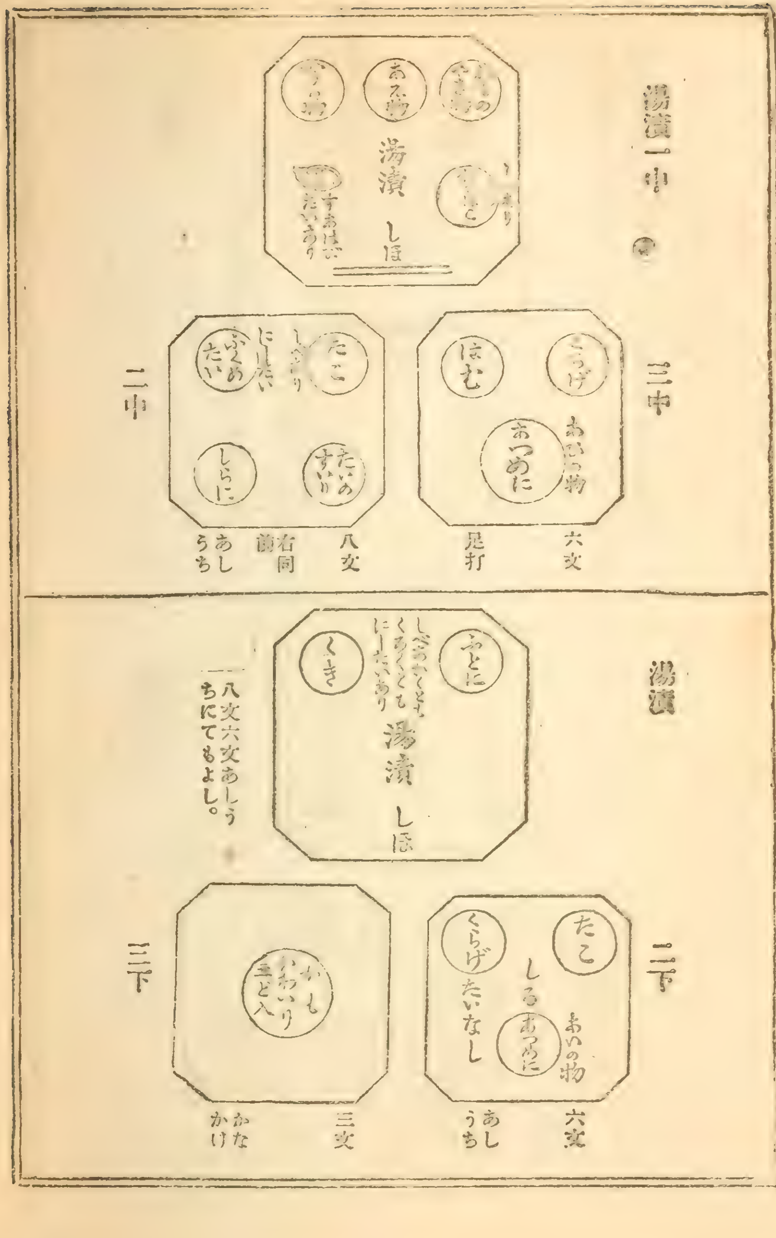


八文

二

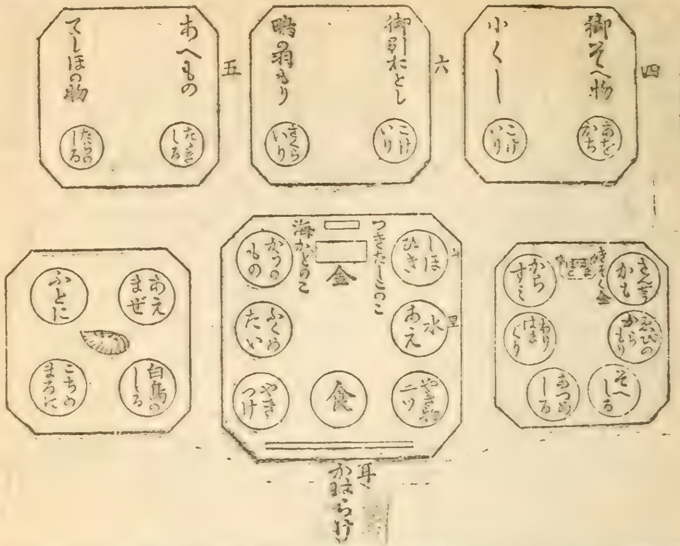


十文



湯漬一小
あへ物
湯漬
しほ
二中
たこ
ふくあたい
しらに
たいのすいり
三中
はむ
あつめに
あいの物
八文
右同前
あしうち
六文
足打
湯漬
ふとに
くき
湯漬
しほ
一八文六文あしうちにてもよし。
二下
たこ
くらげ
しる
たいなし
あつめに
あいの物
六文
あしうち
三下
かも
三文
かなかけ

又湯漬



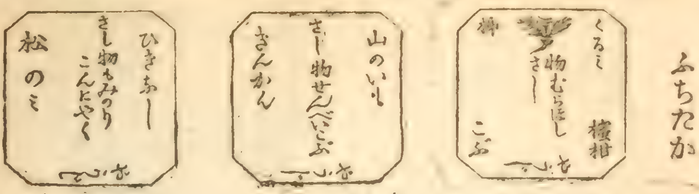
一御湯漬のこんだてきこしめしやうは。左にてゆをうけ。まづしたにをき。しき座を見合。はしをあげ。ゆたまりと申て。めしをむかひへてはしをしのけ。さは〳〵と二くちくひ。かうの物に手をかけべし。又食をくひ。やきつけに手をかけてよし。

一ゆづけくちのうちと申て。食をくちにふくみ。汁さいをくふことをきらふ也。

一なにゝてもあれ。はしよごれ。ゆのにごれるをきらふ也。

一人のまへにてやうじなどつかふには。かすみはたゝうがみのなかへすつべし。にはなどへすつる事なし。

一上くはしふちたか五文。中くわし　ふちたか御臺のくわし。



雑煮之圖

餅。まるあはび。いりこ。やきくり。やまのいも。さといも。大まめ。汁たれみそ。

已上七色。

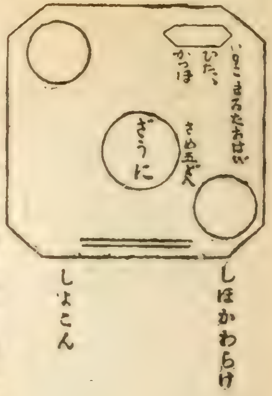
家によりてかずのすくなきもあるべし。式三献の後御まいりさかなと申は雑煮の事也。又かめのこうの物はくわざる事なり。いりこ。まるあはび。かつを。いも。餅。

右五色も例式の時はくるしからず。

おなじ圖

雑煮のこと。いりこ。くしあはび。いへのいも。餅。かつを。右この五種也。

もりやうの事。下一わたりはいへのいも。二にくしあはび。三に餅。四にいりこ。五に餅。そのうへに又いりことくしあはびとをよきやうにもり。そのうへにかつほをほそくけづりて。あなたこなたへをくべき也。

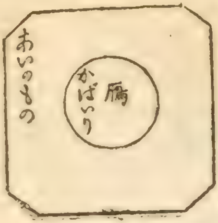


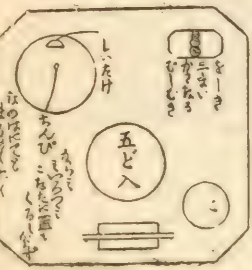
しほびきふぜひの物は大かく鳥のやき物ならば小ちうものによろべし。

點進之圖

むぎのそへ物　三文かなかけ

けしからしさんせう三いろをまろくしてもる也。



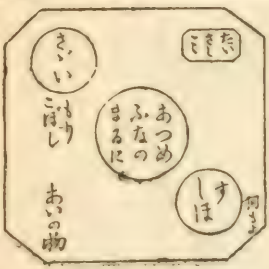


一汁はのちにあたゝめひきまいる也。始よりはいれざるものなり。

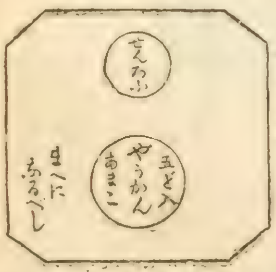
一さいしんはひやむぎのごとくとりかへ候てまいるべし。

一ひやむぎの事。むかひの兩のわきに。二まひづゝ四枚。中のうへにのせて。三まひたゞしひきかへ候。兩のわき三まひしかるべし。いづれも中は二まひたるべし。さいしんもあしつけにのせ候て持て出すべし。おしきはむしむぎのよりはすこしちいさかるべし。

三こん



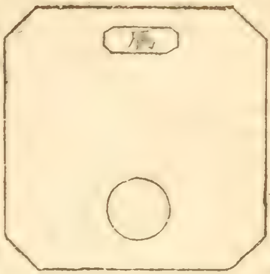
四こん



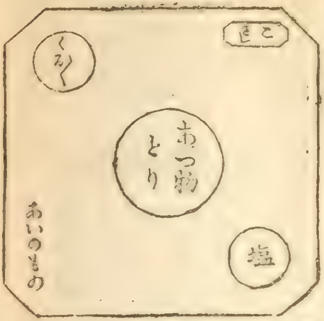
一三の膳は上下をきらはずあしつけなるべし。貴人はひきものまであしつけ也。大名のみうちの人はひき物はひら折しき也。

六文あしつけ

かんのそへもの



三文
かなかけ

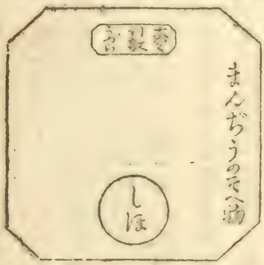


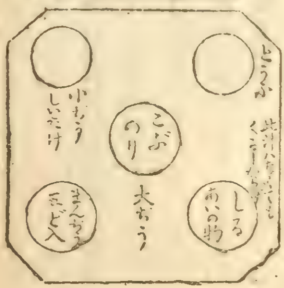
五こん

六文あしつけ

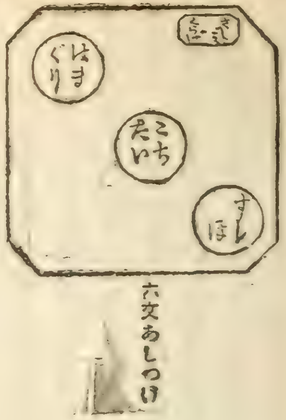
一まんぢうの膳くみの事。足付に五ど入也。まんぢうは三ながらさたう也。貴人一人賞翫の時は御上ばかり五ちよさう也。何もさたう也。汁はあひの物たれみそをはじめより入て置也。精進のうちはとうふもしいたけも少大に切也。枇杷のかい敷有べし。こせう紙なし。

六こん





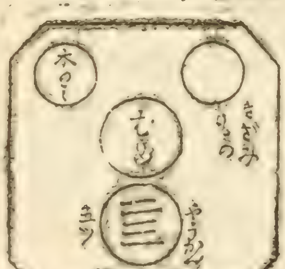
七こん



雑煮の組付

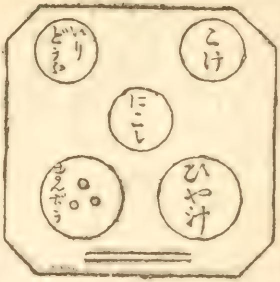


一雑煮きこしめしやうは。はしをあげ。左の手ををしきとひざのあひだにつき。うはをきをこくちくひ。さてさゆうの手にて持あげ。ひだりの手にすえ。汁をすひをくへなり。ゆめ〳〵くみつけをくふべからず。又若衆などはもちあげず。一はし二はしめしても。やがてはしをおさめらるべし。



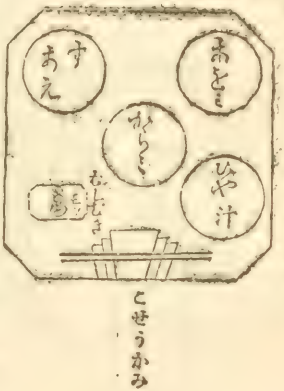
一やうかんのきこしめしやう。なかなるさらに三ツのこし。あとへ汁をうけ。木のこをい

れきこしめすなり。是二ッなかなるさちへやる事はかんのさはと心得べし。



一きこしめしやうは。汁をうけしたにをき。下座を見合。はしをあげ。ひだりにてまんぢうをとり。はしに持そへ二ッにわり。右をしたにをき。ひだりのまんぢうをあんをおろして。まんぢうのこくいと申候て。二くちあてきこしめし。右にてはしにもちそへ汁をすふなり。二どめににごしを汁へ入すふべし。是は汁まんぢうの事也。又けんぶつのときなど。折につみたるときは。わちずにきこしめす也。

むしむぎのこんだて



一きこしめしやうは。はしをとりあげ。左にてこせうをとりしるへいれ。おしきの右のすみにをくべし。色々をきやうに口傳有。あをみのさらをひだりへとり。あきたる折敷をばその跡へ折敷のふちにかけをくもの也。さらのくずしやうにみやう口傳あり。

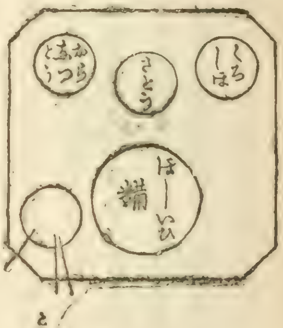
一ひやむぎは右のさらよりくひはじめ候てよ

し。まづさらをあげず。一はし汁のうちへいれ。ながくはきりて。さてさらをとりあげくふべし。其後はさらをあげむぎくふ也。

一桐の葉などにもりたるむぎは。葉もとよりくふべし。はのすゑはくふといかゞ。

一うどんは三はしつゞけてくふべし。いくたびもさいしんをうけ候と。ていしゆへの馳走なり。わがきらひ候とて。人のちそうをおろかにもてなす事いかゞ。その座にこ〔ノ誤歟〕まるうへはふしやうをもこらへ。上座の人をよくうかがふけしき見よきなり。

一水をすへ候事は。もし黒鹽にてさしよごれ候はゞ。すゝがんためなり。とうしんはほしいひのうちへくろしほいりよごれ候時。とうしんをいれ候へば。すなはちうせ申ものぞと。又常の鹽なりとも黒鹽なりとも。ほしいひくひ候はぬまへに。手のうちへうつし。



なめてのち。ほしいひをくゐ候也。後は鹽くはざるもの也。さたうは水のどにつまり候時なめ候へばよく候。からなつとうはのちのさかな也。糒にまぜあはせくふ事なし。

粥の事

一かゆをまいるに汁をかけくはざるよし。世上中ならはせしなり。細川右馬頭入道などはくるしからずとて。常に汁をかけもちいられせし也。同じく房州も常にこのぶんた

り。しかるとはいへども若衆などは用捨あるべき也。

一ゆづけのときは汁をばすはざる也。但としよりたる人は汁すふ事もあるべし。みばかりまいるものなり。

一おなじくゆづけのとき。何にても箸のよごれざるやうにたしなむべし。そのゆへはゆづけの汁などはこと〴〵くたれみそ也。さいもぬたあえなどはあるまじ。

一わかき人ははをとの高き物まいる事いかゞ。

一かまぼこは右にてとりあげ。左へとりかへ上ははし。中はゆび。下はいたともにきこしめす也。きそくかけとて板の置やうに口傳あり。

一このこはいくたびも持あげきこしめしたりとも。まへのごとくふたをしてをく也。

一にしのつぼいりはふたをせずしてをく也。

一さしみのはしがへしとて口傳あり。すあはせをしてをくなり。

一鴫の羽盛はみをばくへ。ほねなみせそと云事あり。

一さくらいり。ふくらいり。きこしめしやうあり。

一はしをおさめてのち。はしをとりあぐる事は如何。但としよりたる人はくるしかるまじき也。

一若き人などそうめんもちいるに。ひや汁などさのみおほくうけ候はでしかるべし。さうめんも少づついれもちひらるべし。さうめん折敷なども我となをされまじく候。さいしん引ものなをし候て。又をきこせうを汁におかるべからず。又くちをとたかくあるべからず。むぎのそへものと。若衆にはは

しをすへ候ていだし候。もしはしなくばかよひ衆はしをとりかへすへらるべし。
一かんを若衆などめすに。さいしんの汁をすふ事あしゝ。めす時もかんをはさみあげてくひ切候事いかゞ。はしにてそとはさみきりめすべし。かんのよこはしとて口傳あり。
一さゞひのふたははしにてとるものなり。
一瓜をばくちをはなさず。右にてくふ物なり。瓜の一くちといふくでんあり。
一何にてもあれ。さかな手にもつならば。左にてくふべし。
一座敷へなをるには。うしろを三寸。まへ膳のあいだ三寸くつろげべし。
一せきはんは箸あるとも手にてくふもの也。
一鷹の鳥にはかひしきをせず。燒物の（脱字歟）
一小桶に入たるこのわた。にし。さゞひ。かまぼこ。まるうほ。さしみ。これらのもの若き人まいり候はぬ事にて候。但つねのさしみにてはくるしからず候。
一めしたしの事。いかにもふか〳〵としんしやくをし。わがしうのかたを一日見候て。扇をぬき一禮をなすもあり。又あがりたる人ならば。禮なくしてさかづきばかりとんぢやくしてのむもあり。さかづきは左。うすおしきは右に持かへり候。そうしやこはれ申時は。さかづきをこかくと同じごとくに。したにてそうしやにわたすもの也。其後まかりいづる。かくごの事。いかにも身をちゞめ。はうばいをためらひ候事ほん也。
一御とをりと申は。さゆうへ禮もなく。又さかづきにしだひをもせず。たとひわれよりあがりたる人成とも。さきへいでゝくるしからず候。口傳。
一おながれ大せひの時に。人きこしめしたる

酒てうしへいれつかはさるゝ也。このときは酒をうけ候てのち。酒をいたゞき申也。口傳。

一酒をすつるは下座へすつるもの也。うへ座へはゆめ〳〵すつべからず。たゞしざしきのもやうたるべき也。

一わがのみたるさかづきを。くぎやう又はとうさんの物のうへにすえべからず候。さりながら女人などはくるしかるまじき也。

一つけさしといふ事なきにはあらず。時の興によるべし。さしてゐがほ分別可然。又は座中へこころへあるべき也。

一少人の御酌などにてさけたまはらば。さかづきのなかもちいかゞ。かの少人しんるいなどざしきに有あひ候て。しづかにめせなどゝじぎあるべき也。

一はしはもとするゐと申也。若衆などは左にてはしをとりあげ。右のかたのはしするゐよりくふべし。其外は右にてとりあげ。左のはしするゐよりくふべし。このせつもありといへども。まへにしたがふべし。

一はしさきは一寸しめす物也。ふかくしめすはいやしき事ぞ。

一ちごかつしきめし候まじき物はすいもの。くいきるもの。はをとのたかき物。大きにきらふ也。

一日の付所。あしのふみやう。扇のぬきさし。口傳。

きらひはしの事

一ぜんこし。　一そでこし。
一もろおとし。　一さいのさい。
一しるなまち。　一よこはし。
一てうふくのはし。　一まとひはし。
一たてはし。

右是九つをくふべからず。
一はしのをきどころは。上はひざのふしのうへ。中はひざの中程。下はいは其下也。いかにも身をちゞめてはしをせばくもつがほん也。是三しきのをしへやうたり。
一一ばんに貴人きこしめしたるさいをば。下輩のものは二くちまでたべぬもの也。其後は貴人御賞翫の物をわれももちひ候てくるしからず。但これはゆづけなどしきしやうの事也。
一食は　女入。　俗冠。　出平とくふなり。但是はたかもりのめしの事也。
一さいしん食わくる事なし。ほんはんのめしをばわくるとこゝろへべし。
一食にかくる汁は大汁又はそへしるほん也。魚鳥のしるかけべからず。さりながらあひてのことわりによるべし。又貴人御もちひの汁かけ候てもよし。
一食のさいしんをうけ候に。さゆうの人うけ候はぬ間は。くひ候はで待べし。
一食のゆも同前也。又上座にきこしめし候あいだ。ひかへてゆをもうけべからず。湯に見かへりとて口傳あり。
一鯔羹はかし。て。尾。くびをのこし。こうよりくふ也。
一猪羹はくびよりくふ也。
一竹葉羹はしんはをのこして。かれ葉をれ葉よりくふ也。
一鶏卵羹はふときかたよりくふ也。
一海老羹はひげを残しくふ也。
一みづの子はいくたびもくふべし。おほかたかんはかず四十八羹のものなれども。木のこのいれやう右のごとし。

七ッてんしんの事

一　一ばんにさうけい。二ばんに水のこ。三ばんにやうかん。四ばんにうどん。五ばんにまんぢう。六ばんにきりむぎ。七ばんにむしむぎ。

右これをいふ也。常の御祝言のときはなきもの也。千部の經文はとんしやなどの時の事也。

一つばき餅。何にてもあれ。右にてくふべからず。右にて候瓜ばかりと心得べし。口傳。

五節供之次第

正月一日より三月三日まで是は蓬餅也。正月七日是は五節供の外也。歌にいはく。

せりなづな五ぎやうたびらこ佛のざすゞ
なすゞしろこれやなゝくさ

是はしゆうがしたをかたどる。五月五日ちまき。しべのかず七つ五つほんなり。かしらよりくふべし。七月十五日はすの食に鯖一さし。これはくびいたをかたどる也。九月九日せきはんの物也。是は腹わたをかたどる。きこしめし様。ひるは左の手にこぼしくふ也。武士はもちあげ。右のゆびにてくひ。おさめを左の手にておさめべし。はしにてくふべからず。かひしきは南天がほんなり。これを五節供のそなへものといふ。

御肴之次第

一ばんに。二ツほし。ところ。こぶまき。
二ばんに。三ツほし。すゞめちまき。
まきするめ。
三ばんに。折二合。まんぢう。こぐし。
四ばんに。大しきろう。前後の口傳。
五ばんに。盃の臺。金のた下。（本ノマヽ）しら木のだい上と心得べし。つゝみやう口傳。
六ばんに。くぎやうかけいりはやてと心得べし。

七ばんに。　足打。是はわが手から次第につみ。いかほどもよびいだすものなり。　、

一何にても下座へさがりたる肴はかみへあぐべからず。たゞし當座のしつけによりくるしからず。口傳。

一貴人くだされ候さかなをば。たかくとり。ひきくいたゞくもの也。

一御前にて肴をたべ候てよく候はんや。又懐中候てしかるべきや。是はとしごろ又はざしきにもよるべきか。くでん。

一當世御酒二へん三べんのあいだにくわし出す事あり。小笠原の流にはなき事なり。くわしはふちたか本也。からのほんいかやうに結構なりともいだすべからず。せんべい山の芋などいづる事用捨有べし。

一さかづきののみやうの事。貴人の御盃をば。口のあたりたる所をそとわが口をあて酒を呑べし。いたゞきて後の事也。女房衆のをば口をそへざるものなり。口傳。

一人の御盃を呑とき。膝をばそとなをしてのむべし。

一わがのみ申さかづきをへぎのうへにをき候てよく候と申さるゝ人もあり。又すゑ候はでそばに置たるがよく候と申沙汰もあり。是は盃人にさし候ところさだまり候はゞ。へぎのうへに置てしかるべく候。我盃たれのみ候はんもさだまらざるときは。へぎのうへに置候はで。かたはらにをくべし。此時我盃いたゞきさし候事わろく候。但あやまりを以てあやまりとするならひ。むかしよりありき。口傳。

一盃のだいに盃二ッすゑ候てはつる事。のみやうしやくとる人の心得いかん。はじめはその内の貴人ならではきこしめさず候間。

だいのうへに置候てきこしめし候事勿論也。其後はしだひにした〳〵のまれ候。だいの上にをきながら。こなたかなたへ持ありき候事しかるべからず。盃たれとよびいだし候てまいらせらるべく候。このときさかづき臺はなち候てよりのちは。だいにをかず。したにをき候てしかるべく候。是はしやく人の心得たるべし。さかづきおほきなるを。した〳〵にのまれ候てしかるべく候。是はしやくにんきやくふたりのこゝろへたり。たゞし一ツは臺の下にある時は大小はいらず候。臺の上に有盃より酒をいれ申也。但折によるべし。

一若き人御座候時。内のものをよびいだし。酒のませらるゝとき。はやくさかづきをとりしりぞき候事わろし。けうをもよをし客人にすゝむべし。たゞしどうばうさるがくなどたべ候ては。はやくとり候てしりぞくべき也。

曲に酒のみやうの事

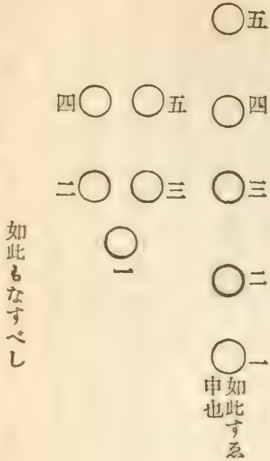
一一露といふは。酒を皆のみ候て。さかづきのしたをすて候に。かなかけのうへにても。又めゝかくのうへにても候へすて候に。一露おとし候やうにのみ候を一つゆと申候なり。

一一文字のみといふは。酒をのみきり。さかづきをおしきなどのうへにかたぶけひき候へば。そのあとの一文字のやうに付候を申也。

一瀧呑といふは。さかづきを二ツ左右の手に持候て。一ぱうのを皆のみ候はゞ。又一ぱうのをみなのみ候。さがづきへ上よりいれ候。ひだりへも右へも。兩方へ我とさかづきのさけをうつして呑候を瀧のみといふ也。

一鶯呑とは。さかづきの酒を一いきにすきと

のみ候をいふなり。
一楊梅のみとは。さかづきのうちへ山もゝを一ッ入候て。酒をのみきり様に。楊梅のはしとなり候様にくひ候をいふ也。酒のみきりさま。すこしも山もゝのはをとをそく候てはきよくなし。
一藤の花呑といふは。盃五ッも七ッも置。酒を入。かたはしよりまもなくのみ候をいふなり。



已上。

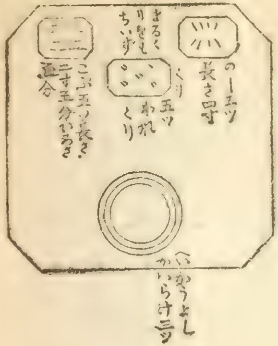
一鯉のしるをば食にかけざるものなり。さりながら一汁にて候はゞくるしからず候。口傳。
一鮭の焼物くゐやうの事。すき焼のときは。くひはじむる時。左の手をそとそへ候てくふべし。但わかき人などしかるべからず候か。
一楊梅など酢付にしたる物さいに出る事有。そのときは食とひとつ口にくふべからず。又かゆの時梅干なども同じ。わかき人ならば山椒などを汁に入候事しかるべからず。梅ぼしくひ候事同前。
一かわらけのさかなしるすい候。又汁一ッある鯉の汁をばかならずすふもの也。
一かわらけのものをばかたでにてはとらざる物也。雨の手にてとりあげくふべし。
一白鳥の汁の事。上にくろほねを二ッほども

り候ていだす也。そのとき汁をとりあげ。くはざる先にほむる事しつけ也。くい候てのちほめ候は。あぢはひをほめたるもの也。ほんの賞翫のほめやうにてはなく候。

一鶴の汁にはすぢを三ツあるひは二ツをく也。ほめやう同前。

一鴈の汁にはくらげ大豆を二ツ三ツほど入事あり。そのときはいつにてもあれ。初鴈とほむべし。しさい有事也。口傳。

初献



一かいしき。勝木(カツキ)。勝草(カツクサ)。さうはらび。

一きこしめしやうは。(スリテ)一ツ(エセキ)にして三(ナモ)どづ(タガ)ゝの御み。九どのかずを入るもあり。このうちの御酌に。陰陽のひざ。あひをひの手わかれ。かしらたちわかれ。酌の一しやく。二しやく。これ口傳。

しやくのもん

ほろんしや〳〵おふ〳〵百圓滿
おくとつしゆさいはい

おなじく哥

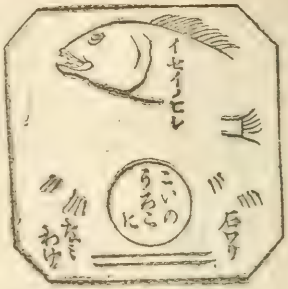
武士のにぎりてむかふ弓にこそ
むかふかたきはあひらうんけん

是を三返となふ

一酒は鼠尾。馬尾。鼠尾とつぐべし。

一初献の御酌のくわへは二こんめのしやくを取。二こんめのくわへは三こんめのしやくとり。四献めより皆かはり候てよし。三献めのときは御酌請取わたし有べし。御し

やくのこゝろもちには。つめひらきいきあひあり。口傳。



右是は御すひもの也。てんぢくれうもんのたきをのぞむゆへに出世のこい也。きこしめしやうは。下座へ御てうしまいり候て。はしをあげ。右にてすい物をとり左にすへ。くゐをくもの也。ゆめ／＼汁をすふべからず。まんぢうのときのあつもの。やうかんのときのうけいり。これをば一ばんにすふと申也。小人などははしをもとりあぐべからず。

一かまぼこはくみつけのよきはかたなめを付べし。折にもるにはかたなめをつけざる也。

一むめやきの事。たちばなやきのごとく。鯉にてもたいにても。すりものにして。梅のせひほどにまるめ。青のりの粉にてころばし。あほきやうにしてやき。梅の枝におもしろくつけ候てもるべし。

一たちばないりの事。たちばなやきのごとくこしらへ。ゆにのまゝにやかずしてかわらけに五ッ。賞翫ならば七ッ。あるひは九ッもり。ゆの葉のもとをきり。五三うへにをき。かつを。たれみそ。酒をかゆらかしかけてまいらすべし。

一もまきの事。まへのごとくうをのみをこしらへ。くろのりうつくしくつゝみ。そのうへをころばし。たちばないりのごとくにして。汁をもそのごとくかけまいらすべし。ゆの

菓は入べからず。

一つみ煮の事。うをのみをまへのごとくにして。はしにて梅のせいほどにつき切。まへのごとく。ゆに入あげ。かわらけにもる事まへのごとく。同じく汁をもこしらへかけ候てまいらすべし。

一のりまきの事。かまぼこのごとくこしらへ。まないたのうへにおしひろげ。あをのりとくろのりとをべちにこにして。今のみのうへにあをきをおき。その次にくろきを八分ばかりをき。こぐちよりこぶまきのごとく。はうてうにてきり〳〵とまき。大かまぼこを二ツばかりあはせたるほどのせいにして。板につけてゆにしばしにてあげ。こぐち二三ぶんほどにかしらと〳〵をきり。まへのごとくもり。しるをもおなじやうにこしらへまいらすべし。

一獺の一足。狸のきわたり。猿の木取。猪のひづめ。いづれもくわし也。かみにうけ候てくふ也。

一まるたまづまいり候へども。しもへ先おしさぐるなり。しかるにいたひきものの三ツまいるときも。二ばんめにまいり候へば。かみへまるたあがるよし申りうもあり。よきほどはまるたもまいり候へばしもへさがる也。

一五の膳まいるときも同前。

一さうめんまいる事常のごとし。俗かたにはむしむぎなどゝおほせられ候。出家方にはてんしんと仰らるゝ也。口傳。

一亂酒の時南方より思ひさしある事候。そのときは見あはせ。少あがりたる人の盃をまづのむべし。どうはいの人にて候はゞ。先へさし候はんよし。いはるゝ人の盃よりのむべし。

一めしだしまいり候とて、皆そばむかれ候。くせ事たるべし。いかなる貴人の御酒にて候とも。そと身をひねり候てのみ申もの也。

一めし出しのとき。扇をぬき候事あしゝ。端てもさし候へとあり。さりながらゐのこの時。御前にて御酒のとき。めしいだしには扇をぬくもの也。

一人なかにてぎよだうをすて候には。さきへなしてすて候事あしゝ。何時も我前へなるやうにすつるもの也。

一ぎよだうの事。かわらけの事は申にをよばず。ぬりたるさかづきにて候とも。あたらしき盃はのみやうあるべし。

一貴人の御前にてたゞの人盃いたゞき候事あしゝ。さりながら貴人の御ことばかゝり候はゞ。平人のなりともいたゞくべし。

一めしだしのとき。れき〳〵御座候。申をとをりて。かみへまいり候に。いかなる貴人さゆうに御座候とも。まいり候時は禮あるべからず。少のくこゝろもちにてまいり。かへりさまには。おとなしき人の前にて。そのかたの手をつき。禮をつかまつりのくべし。

一亂酒の時。貴人のながのみなどゝ仰られ候はゞ。わざととがを仕り候事しつけ也。見事ありやうにのみたるはあひさつすくなし。

一鷹白鳥のうはなきに。すゞくろほねあるあしあるべし。これをよけくふべし。

一十月猪の子のときばかり。扇をめしだしにさす也。あふぎのかなめをひだりへなし。餅をうけ申なり。餅をとりいたゞきふところに入。扇をばさきよりたゝみよすべし。餅をば御口そへといふ也。此ときばかりむらさき小袖をきる也。

一酒のときざしきなどにてかわらけの物を貴

人よりくだされ候を。兩の手をいだす事口をし。ひけうなる仕合也。右の手をつき。左の手をさしのべ。いかにもこしをかゞめ候てたまわるべし是うやまふこころ也。兩の手をいだす事いやしきしつけ也。

一四足の汁は食にかけず。其汁へ食を入まいるべし。

一貴人めし候。御はしくださるゝ時は。貴人御めし候かたのぬれ候ところをうへになし。ぬれざる所にくださるべし。

右一卷者雖爲當家秘術書。依不淺御戀〔懇歟〕望。口傳等無殘令傳授畢。蓋不顧外口歟。且非其仁可被禁視洩者也。

小笠原備前守

永正元年九月七日　政淸

伊藤又右衛門尉

天文七年二月八日　宗家

伊藤彦次郎　號兵部少輔

天正八年六月二日　正家

伊藤孫兵衛尉

寛永二年八月十三日　宗秀

伊藤新五入道桃庵

不卜

右食物服用之卷以尾崎雅[illegible]〔[illegible]〕之本寫之一校了

續群書類從卷第五百六十五

飲食部三

料理物語

料理物語目錄

第一海の魚之部

鯛は　はまやき。杉やき。かまぼこ。なます。しもふり。くすたい。汁。でんがく。さかびて。すし。ほしてふくめ其外いろ〳〵つかふ。同わた子もなし物によし。すい物。

鱸　さしみ。汁。やきても。なます。同せいご。おきなます。

眞鰹　さしみ。すし。やきても。

鱧　なます。かまぼこ。子いり。こんぎり。いろいろにつかふ。

鮭　汁。すし。さかびて。ほしていろ〳〵。

鮹　櫻いり。するがに。なます。かまぼこ。此外色々。同いひだこ。すいもの。同くもだこ。さかな。

烏賊は　うのはな。なます。さしみ。なまび。かまぼこ。に物。青あへ。其外いろ〳〵。同小いか。すいもの。同するめ。水あへ。色々。

鯨　汁。さしみ。すい物。あへもの。かすにつけて。うちの物いろ〳〵。同かふらぼね。水あへ。肴に。

養魚は　さしみ。でんがく。

鮫　さしみ。干けづりもの。やきても。

鱏　汁。なます。でんがく。なべやき。すいもの。

王餘魚は　なます。かまぼこ。汁。でんがく。やきて。

鯒　汁。さしみ。いりても。

鮟　汁。おきなます。すいり。なまび。同わたなし物。しまあぢも同前。

鯖　沖なます。すいり。しほもよし。せわた。なしものによし。

きすご　汁。なます。すい物。たまりやき。なまび。

細魚　なます。なまび。

魳(かます)　やきて。なまび。ふくめ。
鮟鱇(あんかう)は　汁。さしみ。すい物。
ふくたう　汁。杉やき。でんがく。ひふく。色色。
もうを　ふくたうもどき。やきて。
かながしら　汁。やきもの。
めばる　いりて。なまび。
たなご　汁。やきて。こゞり。
名吉(みやうきち)　汁。こゞり。かまぼこ。なます。小鳥焼。さしみ。なべやき。同へそ。すい物。かひやき。なます。いな。沖なます。すゞめすし。
鯐(ゑそ)　なます。きのめ焼。いりもの。
海月　あへ物。なます。すいもの。
海老　いりて。なます。に物。小ゑび。汁。なます。すいもの。
伊勢海老も。車同前。但ゆでゝ又やきても出し候。
蝤蛑(がさめ)は　からに。いりて。同つましろ。まめ。なしもの。
糸より　汁。かまぼこ。なます。やきて。
くちいり　やきて。石もち共いふ。
くづな　汁。かまぼこ。あま鯛共いふ。
鰯は　なます。しやか汁。すいはし。くろつけ。やきて。かすに。同田作。にもの。なます。水あへ。同たゝみいはし。さかな。
鮗(このしろ)　なます。やきて。なし物。
黒ばけ　汁。さしみ。かはをさる。なまび。
文鰩魚(とびうを)は　さしみ。かはをさる。ひもの。
熊引は　けづり物。ゑびのせ。
白魚(しろを)は　汁。さしみ。かまぼこ。に物。いりもの。すい物。
小鮎は　さしみ。いりもの。白うをよりこまか也。
海茸は　あへ物。さしみ。しやうがす。いりざけ。
浮木は　さしみ。しゝめ。しやうがす。

生海鼠は　なます。ふくらいり。こだゝみ。すこ。いとにつくり。いりざけかけよし。同わた子。なしもの。このこは生にていり酒。同わたすい物。いりこは汁。けづりもの。に物。同青あへ。水あへ。色々。

鰤　あぶらやき。白。さしみ。すいり。

鰆(さはら)　ござい焼。さしみ

生鰹は　さしみ。なます。汁。すいり。せんば。なまび。やきてたゝきによし。にとりはかつほゆで中時の汁なり。

めぢか　かつほ同前也。

わらさ　さしみ。すいり。やきて。なまび。

鰣(はまち)　さしみ。すいり。

まぐろ　はまち同前。

江豚(いるか)　さしみ。汁。すいり。

蚫　かひやき。にがひ。すがひ。さしみ。かまぼこ。なまび。ふくら煎。のぶすま。なます。たたき蚫。わさびあへ。同わた。ながれこ。なしものに。ふくため共。とこぶしとも。いふ。

同くし蚫。汁。にもの。けづり物。色々に吉。のし。たんざく。もみのし。結びのし。にもの。

辛螺(にし)　かひやき。ころばかし。かしみはひやしるに入。

栄螺(さゞい)　つぼやき。にがやき。さしみ。ころばかし。のしに成。に物。かすづけ。

つべた　さしみ。ころばかし。

よなき　からやき。さしみ。なます。くし焼にはたまりに山椒のこをふり付てよし。

みるくひ　からやき。くしやき。さしみ。わたあへ。

たいらき　わさびあへ。くし焼。に物。汁。なます。わたは。さしみ。

赤貝　汁。からやき。に物。くしやき。なます。

ころばかし。

烏貝　からやき。さしみ。

ほたてがひ　からやき。くしやき。よなき同前。

蠣　すい物。汁。すがき。くしやき。杉やき。

蛤　むし。す。なべ焼。すぎやき。汁。やきて。同あさり。すい物。なし物。

ばい　ころばかし。にもの。いしやき。

馬蛤　汁。に物。あへもの。同大野までもほしあぶり。さかな。

うに　なしものによし。かぶとがひの身也。

田螺　青あへ。すい物。

からすがひ　ころばかし。くしやき。

非のかひ　ころばかし。きりぼし。さかな。

蜆　にもの。汁。あへ物。

たうくらげ　さかな。

第二磯草之部

昆布　汁。に物。にあへ。くはし。むし漬。だしに。油あげ。其外いろ／＼。

若和布　汁。さしみ。あぶりさかな。きざみさけに入。其外いろ／＼。

荒和布　汁。に物。さかな。

さがらめ　冷しる。あぶりさかな。

青苔　汁。あぶり肴。くはし。又さけに入。むしづけ。上をきによし。

もづこ〔く歟〕　ひや汁。さしみ。

搗布（かぢめ）　ひや汁。あぶりざかな。

とさる　さしみ。なます。

甘苔（あまのり）　ひや汁。あぶりざかな。

淺草のり　右同前。いろあかし。

十六島（うつぷるい）　ひや汁。あぶり肴。くはしにも。雲州に在。

かたのり　汁。さしみ。五色あり。

みる　さしみ。

於期（おご）　さしみ。あへ物。汁。うはをき。

しやうがのひぼ　色。くろし。あかし。汁。さしみ。あぶりざかな。くはしにもよし。経のひぼともいふ。

のろのり　ひや汁。あぶり肴。いりざけにすをおとし。くりしやうが入。さかなによし。

ふじのり　ひや汁。あぶりざかな。色あをし。

海鹿（ひじき）　に物。あへもの。

ほんだわら　に物。なます。にあへ。すさい。

ところてん　さしみ。かうの物。夏のこゞりに入吉。

能登のり　すい物。あぶりざかな。

濱松　さしみ。あへもの。

燕巣（えんす）　さしみ　すひもの。煎鳥に入。

女耳　さしみ。茶菓子。にもの。

日光のり　川にあり。

第三川魚の部

鯉　さしみ。なます。汁。濱やき。すし。こゞり。小鳥焼。すい物。

みこい　さしみ。なます。かまぼこ。すい物。

鮒　なます。汁。さしみ。にもたしこゞり。なまなり。小鳥やき。かす漬。すいもの。

鮎　なます。汁。さしみ。すし。やきて。かまぼこ。白ほし。しほ引にしてさかな。さかびて。同うるか。子なしもの。同子を生にていり酒かけよし。

鱒　はまやき。さしみ。なます。すし。汁。に物。くしやき。

鮭　やきもの。なます。すし。はらゝ汁。かまぼこ。いりやき。なまひ。其外いろ〳〵。同子。わたなしものに。しほ引はさかな。ひらき。さかびて。同からざけ。水あへ。にあへ。色々につかふ。

水鮭（あめ）　汁。ひでりなます。すし。やきて。

わたか　汁。なます。すし。

もろこ　汁。すし。なます。
鮠(はへ)　汁。なます。
鯎(うぐひ)　なます　汁。
鱧(はむ)　すし。なます。やきて。
わかさぎ　汁。すし。なます。
いだ　なます。濱やき。
魟　なます。さしみ。すし。かばやき。こくせう。杉やき。山椒みそやき。此外いろ〳〵。
鮎　汁。すし。
鯰(なます)　汁。かまぼこ。なべ焼。杉やき。
はんざき　山椒いをともいふ。すいもの。くしやき。こくせう。いづれもかはをさる。
眞龜　すい物。さしみ。いしかめも同。

第四鳥の部

鶴　汁。せんば。さかびて。其外色〳〵。同もゝげわた。すいもの。骨くろ鹽。
白鳥　汁。いり鳥。ゆで鳥。くしやき。酒びて。其外いろ〳〵。
鴈　汁。ゆで鳥。煎鳥。かはいり。生かは。さしみ。なます。くしやき。せんば。さかびて其外色〳〵。
鴨　汁。骨ぬき。いり鳥。生皮。さしみ。なます。こくせう。くしやき。酒びて。其外色々。
雉子　青がち。山かげ。ひしほいり。なます。さしみ。せんば。こくせう。はふし酒。つかみ酒。丸やき。くしやき。いろ〳〵。
山鳥　汁。やきとり。其外色々。きじのごとく。
鷭(ばん)　汁。やきとり。いり鳥。いろ〳〵。
けり　汁。やきとり。色々。
鷺　汁。くしやき。さんせうみそ。
五位　汁。いり鳥。くしやき。
鶉　汁。くしやき。いり鳥。こくせう。せんば。ほねぬき。かせちあへ。
雲雀　汁。ころばし。せんば。こくせう。くしや

き。たゝき。

鳩 ゆで鳥。丸やき。せんば。こくせう。酒。

鴫 汁。いり鳥。焼鳥。こくせう。ほどはほねぬきにもよし。其外いろ〳〵。

水鶏 汁。ころばかし。くしやき。

桃花鳥(つぐみ) 汁。ころばかし。やきて。こくせう。

雀 ころばかし。汁。此外の小鳥同前。

鶏 汁。いり鳥。さしみ。めしにも。玉子はふわ〳〵。ふのやき。みのに。丸に。かまぼこ。そうめん。ねり酒。いろ〳〵。

第五獣之部

鹿 汁。かひやき。いりやき。ほしてよし。

狸 汁。でんがく。(山椒みそ。)

猪 汁。でんがく。くはし。

菟 汁。いりやき。

川うそ かひやき。すい物。

熊 すい物。でんがく。

いぬ すい物。かひやき。

第六きのこの部

松茸 汁。あへもの。に物。やきて。

平茸 色々有。汁。に物。やきて。

椎茸 汁。に物。やきて。なます。さしみ。ほして。

初茸 汁。にもの。やきて。

いぐち 汁。やきて。

よしたけ 汁。にもの。

しめじ 汁。に物。

松露 汁。さしみ。にもの。

木くらげ にあへ。なます。さしみ。茶菓子。いろ〳〵。

かうたけ に物。茶ぐはし。(鹿たけともいふ。)

鼠茸 汁。にもの。

岩茸 に物。茶ぐはし。さしみ。(何もよくゆにして。)

第七青物之部

菜　汁。からしあへ。さかいり。くき。煎鳥に
入。ほして。其外色々。
大根　汁。なます。にもの。香の物、ほしてい
ろ〳〵につかふ。
牛房　汁。あへもの。に物。もち。かうの物。茶
ぐはし。其外いろ〳〵。
ふ　汁。にもの。さしみ。くしやき。肴。色々。
たうふ　汁。でんがく。うどん。ふわ〳〵。こほ
り。いせだうふ。六でう。茶や。きしやき。同
うば。汁。茶ぐはし。にもの。色〳〵。
蒟蒻　さしみ。なます。に物。くしやき。ころば
かし。汁。こほりてすい物。くはし。
薯蕷　汁。にもの。茶ぐはし。いも酒。もち。そ
うめん。色〳〵。
里芋　汁。にもの。香の物。同たうのいものく
きなます。あへもの。すさいによし。
烏芋　に物。茶ぐはし。黒は。ひやしもの。

蓮　に物。なます。くはし。ひやし物。同はへ。
茶ぐはし。けんによし。
ふき　汁。あへもの。に物。かうの物。同たうは
さかな。
めうが　汁。なます。さしみ。あへもの。すし。
つけ物。けんに。同竹子いろ〳〵。
たんぽゝ　あへ物。に色。汁。
よめがはぎ　汁。あへ物。に色。す。さしみ。
蓬　汁。もち。
常山　汁。あへもの。に色。
はこべ　汁。あへ物。
なづ菜　右同前。
芹　汁。あへもの。せりやき。なます。いり鳥に
入。みつばせりも同じ。
土筆　汁。に色。すさい。
獨活　汁。なます。あへもの。すうど。かうの
物。

蕨　汁。ほして。に色。あへもの。同粉はもち。
防風　なます。すづけ。けん。
すぐり莧　ひや汁。さしみ。あへもの。同唐莧。
　あへもの。
藜(あかさ)　あへ物。すさい。
莇(さゝみ)　右同。ねもよし。牛房のごとく。
たで　からみ。つけもの。だしによし。
からしの葉　あへ物。何ものあをみにつかふ。
芥子の葉　すさい。あへもの。
大豆のは　あへもの。但あくにてゆですぢをさり。うすにてつきあへ候。青
まめ。なます。いろ〳〵によし。
はゝき草　あへもの。すさい。
苣(ちしや)　汁。さしみ。あへもの。同たう苣なますに。
川ちしや　さしみ。
白瓜　汁。なます。かうの物。ほしてよし。
甜瓜　なます。かうの物。汁。ほしても。
木瓜　なます。みかはあへ。かうの物。

冬瓜　汁。なます。
烏瓜　香の物。同實は玉章と云。さかな。くは
しにも吉。
夕がほ　汁。さしみ。同實玉章に成。
茄子　汁。さしみ。まろに。あへもの。香の物。
　しぎ焼。きりほしていろ〳〵。
さゝぎ　汁。に色。あへもの。同葉も實に物に。
くこ　汁。あへ物。に色。さしみ。もち。茶。
うこぎ　右同前。
にら　汁。あへもの。
蒜(にんにく)　汁。さしみ。なます。みそ。すいくち。
根深　汁。いり鳥。さしみ。杉やき。
葱(ひともじ)　汁。あへ物。すあへ。なます。さしみ。
あさつき　なます。さしみ。
野ひる　さしみ。あへもの。
竹子　しゆんかん。汁。からしあへ。かうの物。
さしみ。つけ物。やく。むしても色〳〵。

よし野竹子もつかひ候。あしのこも。
にが竹の子　かわともにやきてつかひ候也。
たうの若め　うどのごとくつかふ也。
またゝび　さしみ。つけもの。葉もさしみに吉。
わさび　からみ。すいくちによし。汁。
ところ　に物。くはし。
くずの粉　に物に打。そうめん。すいせん。すいとん。きんとん。やき餅。葛もち。
牡丹の花　さしみ。ほして。に色。すあへ。
芍藥の花　右同前。
山なしの花　さしみ。に色。
萱草花　右同前。はもさしみによし。一寸四五分出候時。口傳。
菊のはな　さしみによし。
のうぜんの花　さしみ。に色。
忍冬のはな　ほして。に色。

すまふ取の花　さしみ。
じゆんさい　さしみ。ゆがきて。けん。生にて。池にあるねぬなわといふものなり。
銀杏　にもの。くはしによし。いりかわをさる。
梅　つけ物。しほほして。いり酒。煑梅。色々。
楊梅　すづけに。ひやしもの。くはし。
しそ　汁。すづけ。
柚　けん。ゆみそ。すい口。ゆべし。酒に入。同葉も。
もやし　汁。さかな。
藤葉　汁。に色。あへもの。
はうれん　に色。すさい。汁。あへ物。
べにの花　に色。すさい。但三寸ばかりのとき。
青麥　汁のうはをき。三寸ばかりの時。

第八なまだれだしの部

生垂は　味噌一升に水三升入もみたて。ふく

ろにてたれ申候也。

垂味噌　みそ一升に水三升五合入せんじ。三升ほどになりたる時。ふくろに入たれ申候也。

煮貫　なまだれにかつほを入。せんじこしたるもの也。

だしは　かつほのよきところをかきて。一升あらば水一升五合入せんじ。あぢをすひみ候て。あまみよきほどにあげてよし。過候てもあしく候。二番もせんじつかひ候。

煎酒は　かつほ一升に梅干十五廿入。古酒二升水ちとたまり少入。一升にせんじこしさましてよし。又酒二升水一升入。二升にせんじつかふ人もあり。

だし酒は　かつほに鹽ちと入。新酒にて一あわ二あわせんじこしさましてよし。

精進のだしは　かんぺう。昆布。やきても入。ほしたで。もちごめ。ふくろに入にる。ほしかぶら。干大根。右の内取合よし。

しやうじんの煎酒は　たうふをでんがくほどに切あぶりて。梅干ほしかぶらなど刻入。古酒にてせんじ候　又さけばかりにかけをおとしてもよし。口傳在之。

山葵みそすとは　わさびをおろし。みそをくはへ。よくすりて酢にてのべ申事也。

生薑味噌酢とは　右同前。

白酢は　けしにたうふを入。しほかげんして。すにてのべ候。しらあへには酢をいれずよくすり候。

霜降は　鯛をきどりにえ湯へ入。やがて水にてひやし候事也。しちめてといふも同事也。

又ゆがくとは何もさつとゆで候事也。

かけをおとすとは　すましにたまりをすこしさす事也。

どぶとは　何時もさけのかすをしぼりたるがよし。にごりざけはあしく候。

第九汁の部

鯛のかきいりは　鹽をいりよきころにしほをのこし。なべのやけたる所へうほを入。そのうへゝいをのひたるほど古酒を入。たゞさかけのきたるとき。三番白水をさし。鹽かげんすひ合候て出し候也。すいくちは時分の景物よし。但是は鯛せぎり也。

鯛かうらいには　なべに鹽を少しふり。そのまゝ鯛を入。古酒に白水をくはへ。右のいほひたく〱に入候て。さかけのなきまで煮候て。めしのとり湯をさし景をおとして。かげんすい合せ出し候也。何にても木の子ねぶりなど入てよし。其外作次第。此時はたいをおろしてきり入る也。

鯛ふくとうもどきは　下地中味噌にてどぶさし。たいを入に候て。しほかげんすいあはせ出し候也。又こくなり候へば。いくたびもどぶはさし候なり。但ひふくのかわ入てよし。ひふくやきてはぎてよし。

鱈の汁は　〔た脱〕昆布だしにてすましよし。うは置こんぶ。おこも入。雲腸入てよし。かすみそにても仕たて候也。

鯉のゐいり汁は　まづゐをとり。ゐとほそわたをよくたゝきなべに入。きつね色にいりてかすをとり。酒にてもだしにてもなべをながしすて。後だしを入煮申候。こいは三枚におろし。うろことともにきり入候。夏はうろこ入事あしく候。口傳在之。しほかげん大事也。又ゐをすりてさけにてのべ別に置。〔口脱〕にがみのかげんすい合出す流も在之。在古傳。同鯉みそ汁にては鮒のごとく仕立候。

鮒の汁は　みそを中より上にして。だしをく

はへよし。若和布にてもかぢめにても。ふなをまきてに申候。あまみすくなき時は。すりかつほいれてよし。いづれもみそをだしにてたて候てよし。よく煮候てさかしほさし。すい口山椒のこ。

鯡喉汁は　こぶなえびまじりにても。かげんは右のごとく。妻ごばう。大こん。竹の子。何にても作しだひに入。さかしほ。すい口同。

鱈汁は　昆布だしにてすましよし。すなはちこぶ上置によし。おごかたのりもなく。だしをくはへよし。又はまぐりつみ入。みのになどをくはゆることもあり。同ひだらも汁によし。

鯨汁　すましにかけをおとし候。みそしるにてもしたて候。妻ごばう。大こん。くきたちなどよし。竹の子めうがつくり次第。くじらはつくりざつとにえ湯をかけることもあり。又くじらにざつとにてよきも。色はじめてはく。煮候て後よきも有。可心得也。

ふくとう汁は　かわをはぎ。わたをすて。かしらにあるかくしぎもをよくとりて。ちけのなきほどよくあらひきりて。まづどぶにつけてをく。すみさけも入候。さて下地は中味噌より少うすくして。にえたち候てうをゝ入。一あわにてどぶをさし。鹽かげんすい合せいだし候也。すいくちにんにくなすび。

鯒(こち)　もうをなどもふくとうもどきとていだし候。これもかわをはぎすて。ひふくのかわ入吉。仕立様はふくとうのごとく。

鮟鱇の汁　かわをはぎおろしきりて。かわをも實をもにえ湯へ入。しゞみたる時あげ水にてひやし。その後さけをかけをく。みそしるにえ立候とき。魚を入どぶをさし。鹽かげんすい合せ出し候也。又すましの時はだし

ばかりにかけも少おとし候。此時はうはをきつくりしだいに入。

こだゝみは　煮ぬきにて仕立候。汁をあたゝめ候て。出しさまにいとなまこ。かまぼこ。そぼろにつくり。あをのりなど入。すいあはせ出し候也。山のいもおろしても入候也。

むかしは山のいもいれず。

はらゝ汁　はらゝうすみひづにおろしなど入青。中みそにて仕立候。だし入かきなど入候時は味噌かげん口傳。

鮒汁　中みそにだしをくはへよく煮申候。どぶをさしてよし。妻はごばう大こん其外色々。但久しくたき候て又みそのあぢあしくなる事あり。左候へばあたらしき味噌をたてさし候て出しよき物也。いづれもみそをこくしてひさしくに申。しるには此心持入也。口傳。すい口山椒のこ。同葉。

しやか汁　青いわしのわたかしらすてあらひ。妻は大こんにてまめうがにても入。だしばかりにて仕たて候てよし。

すいり汁　味噌をこくして。ねいものくきともに入。よくにえ候時。鮒のすしのかしらきり入出し候也。

鶴の汁　だしにほねを入せんじ。さしみそにて仕立候。さしかげん大事也。妻は其時の景物よし。木のこはいかほど數入候てもよし。何時も筋を置。すい口わさび。柚。又はじゆより中味噌にても仕立候。すましにも。

白鳥の汁　中味噌にてしたて候。又すましにも妻は時分のものつくり次第に入。

かわいりは　鴈にても鴨にても。皮をいりだしを入。ほねをせんじ。なまだれ少さしてみを入　鹽かげんすい合出し候。これも妻は時分の物。惣別きの子は鳥汁　いつも入候て

よし。すい口わさび。柚。
あをがちは　雉子のわたをたゝき。みそを少入。なべに入きつね色ほどになるまでいり。なべをすゝぎ。さてだしを入。にえ立次第鳥を入。しほかげんすいあはせ出候也。いりかげん大事也。霜雪正月の事なり。
山かけは　だしになまだれをくはへ。雉子を入仕立候。妻は山のいも。のり。青麥にても有次第に入。いれずしてもくるしからず。
ひしほいり　うす味噌にだしをくはへ。きじを入仕立候。山のいも。のりなど入て仕候。
南蠻料理は　鷄の毛を引。かしらあしとしりをきりあらひ。なべに入。大こんを大きにきり入。水をひた〱よりうへに入。大こんいかにもやはらかになるまでたく。さて鳥をあげこまかにむしり。もとのしるへかけをおとし。又大こんをにてすいあはせ出し候時。鳥を入さか鹽吉。すい口にんにくその外色〱。うす味噌にてもつかまつり候。妻に平茸ねぶかなども入。
狸汁　野はしりは皮をはぐ。みたぬきはやきつぎよし。味噌汁にて仕立候。妻は大こんごばう其外色〱。すい口にんにくだし酒鹽。
鹿汁　うすみそにだしくはへ。妻色々入仕立候。すいくちにんにく。こせう。
冷汁　いづれもにぬきにて仕立候。もづこ。あまのり。のろふじにても入よし。くり。生薑。めうが。かまぼこ。あさつきなども入よし。
あつめ汁　中味噌だしくはへよし。又すましにも仕候。大こん。ごばう。いも。たうふ。竹の子。くしあわび。ひふく。いりこ。つみ入なども入よし。其外色〱。
芳飯(はうはん)の汁　にぬきよし。かまぼこ。くり。生薑。おろし。玉子。ふのやき。なあへて。あげこぶ。めう

が。花かつほ。のり。きざみ候ものは。何もこまかに仕よく候。精進の時はいろ〳〵つくり次第に入。

しゆみせん　菜も豆腐もいかにもこまかにきりたるをいふ。みそしるにだしくはふ。

ばくちじる　たうふさいのめにきる事。汁同。

わり菜　かぶらともにわり付。一束に切たる事なり。中味噌にだしくはふ。

右衛門五郎　菜をながくもみじかくもきり。ひらかつほも入。ぬかみそも入たるをいふ。

柳に鞠　つまみ菜にさといもいるゝ也。

干菜汁　中みそにだしくはへ。くろ大豆。蛤。小鳥などたゝき入。さといもゝ入よし。

人参汁　大こんを大きにきり。一鹽の鯛を入。みそしるにだしくはへ。よく〳〵に候てよし。

おろし汁　大こんをおろし。かき。はまぐりなど入。中味噌にだしくはへしたて候。

とろゝ汁　にぬきよし。山のいも。あをのりよく〳〵こまかにおろしすりて吉。のりはいろよきほど入候て吉。あたゝめ過候へばあしく候。すい口こせうのこ。

納豆汁　味噌をこくしてだしくはへよし。くきたうふいかにもこまかにきりてよし。小鳥をたゝき入吉。くきはよくあらひ出しさまに入。納豆はだしにてよくすりのべよし。すい口からし。柚。にんにく。

蓬汁　みそにだしくはふ。ゑもぎをざく〳〵にきり。鹽すこし入もみあらひて入。又ゆがきてもよし。たうふなどさいにきり入。正二三月に吉。

はこべじる　はこべをきりもみあらひ。二月大こんなどくはへ入。置もみそにて仕立候。

からげ汁　なすびを二つにわり。中を少くぼ

め。あをさんせう。けしなどすり。くるみも入あはせ。しその葉につゝみ。こぶを糸にしてよくからげ入。 みそしるにだしくはへよくに候て。出しさまにすいあはせ。葛をときうち候て出しよし。

じんふ汁 なすびを二つにわり。又かたなめをこまかにきりかけ候を申也。是もみそをこくしてだしくはへ。すい口けし。青山椒すりてをく。

觀世汁 たうふをうすくきり。中みそにてしたて候也。これもふんをかけ出してよし。

ねぶか汁 みそをこくしてだしくはへ。一鹽の鯛を入よし。すましにも仕たて候。

鯉の觀世汁 こいをおろしちいさくきりて。たうふをあぶりきり入。中みそにて吉。けし。さんせうのあんをかけて出してよし。

第十鱠之部

料理なます 鯛。さゞい。きすご。かれい。小海老などいろ／＼入。おろしなどくはへ仕候。何れもなますは膳を出しさまに一度入候て吉。鹽かげん大事也。しほは一度にあへ候てよきやうに分別あるべし。二度三度に入候ては。しだいにあしくなり申候。無曲物也。けんは色／＼其時分のものつくり次第にをくべし。

鳥鱠 何もつくり鳥ばかりすにていため候て。その後鯛其外も入あへ候て出し吉。わさびくはへよし。

がんざうなます きすご。さより。かれい。ゑび。烏賊など色／＼つくりませ候事也。是は酢鹽かげんしてあへ。けんばかり置べき也。

沖鱠 あぢ。いなどをまろつくりにして。たでをあら／＼ときり入候をいふ也。 鯖もよし。鯛其外のうをにても仕候。鹽かげんいよ

いよ大事也。

鯉の子つけなます　こいを三枚におろし。身をうすくへぎ。かわをのけほそくつくり候。やがていりたる子をつけてよし。をそく候へば付かね候。さていりざけに酢をくはへはしらかし。なます半分にかけて。半分はひえたる酢にわさびいれてあへ。兩方かきあはせ出し候事也。たゞし鯉みなにはしらかしたるをかけ候傳も在之。

鮒なます　ふなを三枚におろし。ほねかしらにしやうゆうを付。よくやきてこまかにたゝき。身はいかにもうすくつくり。いりたる子をかきあはせ。からし酢にてあへ候。又たですにてもよし。やきがしらめん／＼にもりわくるともあり。惣別なますの酢かげんは。なますをみなもりて。あとにすのおほくあまり候はぬがよきかげん也。

鯝(こうしろ)なます　ふなのごとく仕たて候てよし。

やまぶきあへは　鮒なますをからし不入にあへ申事也。

ひでりなます　あめのうほを三枚におろし。身はすきてつくり。兩のかわをうちあはせ。かわめよりやきてきざみ入。たうのいものくきをさゝがき入。酢しほかげんしてあへ候を云也。皮も白やき也。

皮やき鱠　あゆにてあめのうほのごとくつかまつり候事也。これも身はすきて作候。かわしらやき。

ぬたなます　からしをよくすり。さて酒のかすをよくすり。あゆにてもいわしにても鯔(なよし)にても。まづすにていため。その酢をすて。後にぬたをすにてのべ。鹽かげんしてあへ候也。後のすおほきはあしく候。但あゆにはあをまめのぬたに柚の葉きざみ入あへ申事

も有之、

太郎助なますは　一鹽のたい。あわびなど。いかにもうすくつくり、いりざけ酢等分にしてあへ候。たゞしあはび後にいれてよし。鯑鮭もよし。はなかつほ。二月大こん。木くらげなどきざみいれてよし。

燒ほねなます　鯛のうすみほねなどやきむしりとりて。田つくり。いりて。川えび。木くらげ。栗。しやうがおろしなど入。すしほかげんしてあへる也。

わさびあへは　鴈鴨同もゝげなどつくりすにてしほ少しふりいため。そのすをすて。たいらぎ。あわび。たいなど入。わさびすにてあへ候。鳥いれずもつかまつり候。

がせちあへは　鶏にても小鳥にても。しやうゆうをつけ。よくあぶり候て。こまかにきり。からしすにてあへ候也。あをかちあへともいふ也。

水あへは　いりざけに酢をくはへよし。ごんぎり。田つくり。するめ。いりこ。小鳥。やきて入。からさけ。青うり。めうがのこ。木くらげ。牛房。右の内にて取合あへ候也。さんせうの葉きざみ入てよし。

みかわあへ　きうりをかわともにきざみ。鹽すこしふりもみて。ざつとすゝぎしぼり。花かつほ入。けしみそをいり酒すにてのべあへ候なり。こわくなり候時は。かわをさりてもつかまつり候。

青あへ　いりこをよくゆにしてだし。たまりにてよく煮候て。あをまめをすり。鹽かげんしてあへ申事也。

第十一指身の部

霜降　鯛をおろし。よきころにきざどり。にえゆに入。しゞみたる時あげひやし。つくりたゝ

み候事也。いりざけ吉。からしなどもをく。
かきだい　鯛を三枚におろしこそげてかさねもり候。いりざけよし。からしをく。けんはよりがつほ。くねんぼ。みかん。きんかん。
小川たゝき　生がつほをおろしよくたゝき。杉いたにつけ。にえ湯をかけしらめてつくりたゝみ候。右のかきだいにもりあはせよし。鯉にてもつかまつり候也。同いり酒。
すゞき　あをす。生姜酢にてよし。
まな鰹　いりざけ。しやうがすにても吉。
くじら　うすくつくり候て。にえ湯をかけ。山椒みそすにてよし。
ふか　かわを引つくりて。にえゆをかけ。よくしらめ。しやうがすにて吉。ざつとゆがきてもよし。
鮫　これもふか同前。
こち　かわをはぎうすくつくり候。しやうがす。いりざけ。たですにても。
鮟鱇　これもしらめてしやうがす。
さわら　いりざけ。しやうがす。
なまかつほ　しらめて吉。そのまゝもつくる。からし酢。
鯉　いりざけよし。
鮒　これもいりざけよし。
あゆ　これも煎酒よし。
うなぎ　白やきにして青すにてよし。
雉子　丸煮にしてむしり。山椒みそすよし。
鴨鴈　きじのごとく。又ほねぬきにしては輪切にして。わさびす。しやうがみそすよし。
にはとり　これもきじのごとくつかまつり候。
小鴨　きじのさしみに鯛のそぼろゆがきもりあはせ。わさびみそすにて出しよし。けんにかたのり。きんかん。何も鳥むしりて。

むし竹子　ねをきり。かわともにたてにをき。せいろうにてよくむして色々にきり。白すにてさしみに吉。みるくひ。あわび。にがひ。又椎茸。木くらげなどもとり合せよし。

うき木　しらめてしやうがすよし。

榮螺　よなき。みるくひ。鳥がひ。たいらぎののわたなどは。つくりゆがきてわさびみそすにてよし。

川ぢしや　よめがはぎ。あさつき。又は菊の花。芍藥のるいはいづれもすみそにてよし。

松露　ゆがき白すにてよし。

眞鮎　よくゆにしてむしり。生姜みそすよし。

さかびて　鯛。あわび。たら。さけ。あゆの鹽引。からすみ。かぶらほね。鶴。鴈。鴨。右の内いかにも鹽めよきを取あはせつくりもり候。けんくねんぼ。其外作次第。だし酒かけてよし。

第十二煑物之部

いり鯛　さしみよりすこしあつく作り候。たいにてもこいにても。子を半分はつみきり。半ぶんはくだきていり酒にすをおとしはしらかし。出しさまにたいも子も入やがてもり候。にえ過候へばあしく候。

煎鯉も　右のごとくつかまつり出し候。

たいするがには　たいを白やきにして。だしたまりにすをすこしくはへ。よく／＼に候て出し候。又やきてぶたのあぶらにてあげ。さてに候へばいよ／＼よし。是は南蠻料理ともいふ。

杉やき　鯛をあつく作りをき。だしにてみそをこうだてなべに入。にえ候時箱に入。先ほねかしらを入にる。身は入候てやがてよし。どぶをさしてよし。かき。蛤。たうふ。ねぶか。其外作りしだいに入也。

なべやき　みそ汁にてなべにて其まゝに申也。たい。ぼら。こち。何にても取あはせ候。

はもの子いり　だしに鹽又はかけをおとし候。すも少しくはへ仕立候。はもはなますよりあつくつくり候。子もわたも入てよし。

たこのするが煮　たこをよくあらひ。そのまゝだしたまりにすをくはへ。いぼのぬくるまでよくに申候。くろにとも云也。

櫻煎は　たこの手ばかりいかにもうすくきり。だしたまりにてざつとに申也。

酢煎　だしに鹽ばかり入にる。出し候時すをすこしくはへてよし。あぢ。さば。かつほのるいよし。

ごさいに　さわらを白やきにして。だしたまりにてに申事也。

ふくらいり　なまこを大きにきり。だしたまりふかせ。出しさまに入。そのまゝもなる事也。すつほうともいふ。あわび。いかもよし。

ぞろりことは　いりこをせんにきざみ。よくゆにして。小鳥かもなどをたゝき入。山のいもゝいれ。だしたまりにてに申事也。いりこばかりに候へばせんいりことい ふ。

鮭のいりやき　杉やきのやうにつくり。はららを半分すりこしてをき。半分は丸子にてをき。だしたまりかげんして。身にわたもきも入に申候。にえ立候時丸子もすりこも入。かきあはせやがて出し候也。粒山椒入てよし。

煮和（にあへ）　だしたまりよし。からさけ。かわ。うすみもすこし入。くろまめ。からかわ。梅干。田作り。木くらげ。あんにん。ぎんなんなど入に候て。玉子のそぼろうはをきにしてよし。夏はさまして出し候也。

しゆんかん　竹の子をよくゆにして色〳〵に

きり。あわび。小とり。かまぼこ。たいらぎ。玉子。ふのやき。わらび。さがらめ。右の内を入。だしたまりにてに候てよし。又竹子のふしをぬき。かまぼこを中へいれ。に候てきり入も有。

のつぺいとう　鴨をいり鳥のごとくつくり。だしたまりにてにる。にえたち候とき。かげんすいあはせ。うどんのこをだしにてとき。ねばるほどさしにえたち候時出し候。ぼと鴫などもうづらも。

生かわは　鴈にても鴨にてもかわをはぎつくり。すをはしらかし。二へんかけてをき。又身を作すを一返かけてしたみ。だしたまりかげんして。にえ立候時すいあはせ鳥を入。そのまゝ出し候也。うはをき。せり其ほかつくり次第なり。鯛のそぼろしらめをきてもよし。

せんばは　小鳥にても大鳥にても。だしにかけをすこしおとしてよし。

ほね抜　鴨のとしりをきり。それよりあしかたまでのほねをぬき。中へ玉子かまぼこをいれ。口をぬひあはせ。ゆで鳥のごとくに候て。輪切にして出し候。赤あしくぼねはのこし候也。

ゆで鳥は　骨共にだしたまりにて久しくに申也。

いり　鴨鳥をつくり。まづかわをいりて後。身をいれいり。だしたまりかげんしてに申候。いりざけもくはふ事有。せり。ねぶか。くきたちなど入よし。すい口柚。わさび。

じぶとは　鴨のかわをいり。だしたまりかげんして入。じぶ〱といはせ。後身を入申事也。

野衾　小鳥をたゝき。せんばのごとくざつと

にて。扨鯛をかきこまかにたゝき。にえ湯をかけあげをき。大きなるあわびをうすくへぎて。これもしらめ候へば。ふくろのごとくなり申候。此時だしたまりかげんして入。ふき立候とき三色入。かきあはせ候へば。ふくろの中へつゝまれ申候。玉子のそぼろうは置によし。すい口いろ〳〵。

にびたし　鮒を白やきにして。だしたまりにてに申事也。

伊勢豆腐は　山のいもをおろし。鯛をかきてすり。いもの三分一いれ。たうふに玉子のしろみをくはへする。何もひとつによくすりあはせ。杉の箱に布をしき入つゝみ。ゆにをしてきり。葛たまりかけ候て出し候。又鳥みそわさび味噌などかけていよ〳〵吉。又たうふばかりにても能すりて。右のごとくつかまつりいだし候。

葛鯛　たいをやき物のごとくきり。くしにさし。ゆにしてくずたまりかけ出し候。葛大こんも右のごとくつかまつり候。

とうふふわ〳〵　だしたまりにてひとあわふたあわに候て。はや出し候事也。

料理どうふは　ねりみそにだしくはへよしうはをきはなかつほ。くり。生姜。くろごま。くるみなどをきてよし。

に色の仕様は　だしたまりにすをくはへ。何もよし。

いとこに　あづき。牛房。いも。大こん。とうふ。やきぐり。くわいなど入。中みそにてよし。かやうにをひ〳〵に申によりいとこに歟。

ひばりころばかし　中へ玉子かまぼこ入てよし。

とうふ玉子　とうふをすり。くちなしにてう

すくそめ。くずのこをすこしくはへ。だしたまりにて玉子のふわ〳〵のごとくしていだし候。ほんたまごのごとくなり。

鮒のこゞり　たれみそにかげをおとし。ほねのやはらかになり候までに申候て。風ふきにをき候へば。一時の間にこゞり候。夏はところてんの草くはへよし。

ふのつぺいとうは　ふを油にてあげ大きにきり。鴨の料理のごとくいたしてよし。

ころ〳〵小鳥をたゝき。せんばのごとくざつとに候こうちあげなき。かまぼこをよくすり。むくろじほどにして。かの鳥にてこがし。だしたまりかげんしてに候て出し候。

第十三燒物之部

はまやき　大鯛のうろこばかりふき竹にてはさみ。かたなめを入。鹽をふりやき候て。さか鹽にかけをおとしかけ候て出し候也。

まくりやき　たいをおろしうすくきり、しほをうち候へてやく事也。

あらしほやき　鮒にしほばかりつけ。やきてかけしる。さかしほにかけをおとしかけ出し候也。

小鳥やき　ふなの三四寸ばかりあるを。三枚におろしくしにさし。山椒みそをつけやく事なり。こい。なよしなどもよし。

木のめやき　ゑそに鹽を付。ゆの葉にてつゝみ。そのうへをかみにつゝみ。むしやきにして取出し。かけしるかけ出し候也。

きじやき　とうふをちいさくきり。鹽をつけうちくべてやくなり。

鴨やき　すびをゆで。よきころにきり。くしにさし。山椒みそ付候てやく事也。

鮭やきて　かけしるはにごりざけすみ酒にたまりくはへ。ゆのすをしぼり入候てかけ出

してよし。はらゝも入はしらかしかけ候。

やき竹の子　竹のこのふしをぬき。中へかまぼこ玉ごまろにして入。かわともにやききり候。かまぼこの鹽すこしからめにしてよし。

いりやき　鴨を大きにつくり。たまりかけをきて。かわをいり身をはさみ入。なべにて一枚ならびにやく事也。あまりにしるなくば。かけ置たるたまりすこしいるべき也。

へぎやき　右のごとくつかまつり。杉のへぎにて一枚ならびにをきやく事也。

第十四吸物之部

うの花　いかのせのかたをすぢかひ十文字にこまかにきりかけ。又大さよきころにきりはなし。ゆにをして妻にのりなど入。だしにかけをおとしふかせ。すい合出し候也。

みのに　玉子をあけしやくしにうけ。くだけぬをにえ湯へ入候。是も妻色々。汁同前。

かき　鹽をいりてよきころにしほを殘しかきを入。ふきたち候時すい合せ候。汁すくなくばだしにても水にても可入。鹽をいらずにつかまつる事も在之。さかしほさしてよし。

このわた　よきころに切。うすみそにだしを入。ふき立候時わたを入すい合せ。其まゝ出し候也。

三國は　のとのり也。だしたまりにて仕たて候。川えびをくはへよし。すい口こせうのこ。

松茸　古酒にてさわ／＼といり。さかげのなき時白水をさし。だしたまりくはへふかせ候て。すいあはせ出し候。すい口柚輪切其まま入吉。

第十五料理酒之部

玉子酒　玉子をあけ。ひや酒をすこしづゝ入。

よくときて鹽をすこし入。かんをして出候也。たまご一つにさけをのべに三盃入よし。

いもざけ　山のいものいかにも白きをこまかにおろして。是もひやざけにてよく／＼ときのべ。鹽すこし入。間のよきまでかきまはしてよし。

鳩ざけ　はとをよくたゝき。酒にてとき。みそをすこしなべに入。きつねいろにいりつけて。鳩もさけも入よし。山椒のこかこせうのこか。わさびなどすこし入よし。しやうゆうにてもいり付候也。

はふし酒　きじのはの中のふしよりさきをこまかにたゝき。鹽すこし酒すこし入いりて。右のからみ何にても入。さけをよきかんにして出し候也。身をくひ申時はしやうゆう少くはへよし。

つかみ酒　雉子のわたをこきみそを少しくはへ。よくたゝきあはせ候て。一足のあしに一本づゝにくしをさし。かのたゝきたる物をゆびの中へいれあぶり候へば。よくにきり申候中も。からりとあぶれたると見え候時。ゆびのきはよりきりて又よくたゝき。又すこしいりて酒を入。間をして出し候也。

ねりざけ　玉子に白ざたうを入。冷酒にてよく／＼ねりあはせ。かんをいたし出し候也。

生姜酒　みそにしやうがおろしすりつけいりて。さけを入かんをいたし候。しやうがばかりも入る也。みそざけは味噌ばかりいるゝ也。

甘酒はやづくり　道明寺一升をゆにてあらひあげをき。こうじ一升を水一升五合入。すりばちにてよくすり。すいのうにてこし。右三色なべに入。とろ／＼とねり候へば。時のまによくなり申候。白ざたう入候てよし。

つりん酒　くろまめ一升いりさまし。よきさけ一升五合いれつけ置候。まめやはらかにほとびたる時のみてよし。

第十六さかなの部

玉子ふわ〳〵　たま子をあけて。玉子のかさ三分一だしたまりいゝざけをいれ。よくふかせて出し候。かたく候へばあしく候。いなのうす。鳥のもゝげなどいれ候へば。野ふすまともいふ。

まきかまぼこ　玉子のふのやきにかまぼこを付。そのうへにあらめをならべ。きり〳〵とまきうへをゆひ。鹽を少し入ゆで候てきり申候也。

まきするめ　するめをあらひ。くずのこを少しふりまき。わらにてゆひ候て。湯煮をしさましきり候也。

たゝきするめ　そとあぶり候て。板のうへにてよくたゝきむしり候也。

めまき　山のいもを荒和布にてまきゆで候て。色々にきり候。これもくずのこすこしふる也。

生干（なまひ）　なまかつほをよきころにきどり。すぎばしにはさみからげゆで候て。あぶりきりてたまりかけ出し候なり。めぢか。わらさにてもつかまつり候也。

鮭のなまび　生鮭をたてにさめが井もちのごとくきり。しほみづにつけ。すこしの間置。やがてほしてあぶり出し候。

鷹の羽といふは　杉板にかまぼこつけ。あひにあらめを入。に候てはなし。すぢかひにきりて。鷹はのごとくみゆるやうにあはせて置候也。

酒に入候けづり物　干鱈。するめ。鮭のひらき。干いか。きすご。ふくめ。いりこ。くしあ

わび。はながつほ。わかめ。あをのり。六でう。右の内とりあはせよし。六でうはつきかなにてつかせ申候也。

もみふとは　さけにてふをよくもみて。だしたまりにてに申事也。又干梅平がつほも入。古酒にてもに申候。

玉章　からすうりのさね也。きんぶんしともいふ。たまりにていりあげてよし。其外あんにん。たうにん。くろ大豆。からかわ。生姜などもくはへてよし。ゆふがほたねも仕り候。

ふきのたう　ゆで候てくしにさし。山椒味噌を付あぶる。ゆでずにもつかまつり候。

切山椒　さんせうのうちのしろみをとりよくすりて。花がつほみそをくはへ候。かげんはからみよきほどにこれ有べく候。つくねひらめこまかに一分四方。きり。よくほしてなをほ色にかけてよし。ちんぴも入。たまりくはゆる。

あわびの生干　蚫をよこにうすくへぎ。酢にほしていりざけをかけ出し候。

冷し物　大こん。うり。なすび。はす。黒くわい。りんご。もゝ。すもゝ。ぶんす。くり。なし。此外いろ〳〵時の景物よし。

なしものには　たいの子。同わた。あばのせわた。ふくだめ。いわし。うに。うるか。同子。なる子。鴫のわた。鮭のわた。はらゝ。しつき。鰹たゝき。ひばり。うづら。此ほかいろ〳〵有。

酢漬には　めうが。生姜。梅。山もゝ。竹の子。ばうふう。うど。はす。人じん。ほたて。山椒。しそ。またゝび。此外色〳〵。但酢一升に塩三合いれよし。

あわびわたあへ　わたを煮てすり。やきみそ生姜もいれよくすり。あわびには酢をかけ

いためて。そのまゝあへ申候。

たいらぎわたあへ　わたをゆがき切て。しやうがみそ。山椒味噌にてあへ候。是はたいらぎはいため候

能登のり　水にてあらひ。いりざけにてもみ。くり。しやうがきざみ入。胡椒のこふりて出し候也。

もやし　芹やきのごとくして出し候。煎酒にても。

玉子はす　蓮の中へたま子のきなるところばかりながし。口をしてゆでゝきり出し候。

唐海月　鹽を出しきざみ。しやうがきざみくはへ。いりざけにすをおとしかけ出してよし。

うき木は　しらめ。生姜すにて出し候。

海茸　しやうが酢いりざけもよし。

無盡漬　から皮。木くらげ。梅干。竹の子。同あまかは。さがらめ。昆布。ほんだはら　銀杏。とさか。生姜。めうが。牛房。山もゝ。小梅。あんにん。たうにん。ところ。ゆでて。はす。人じん。ちんぴ。おご。青苔。むすびて。右の内當座有あひ候を入てよし。此外も　次第に可入候也。

第十七後段之部

うどん　粉いかほどうち申候共。鹽かげん夏はしほ一升に水三升入。冬は五升入て。その鹽水にてかげんよきほどにこね。うすにてよくつかせて。玉よきころにいかにもうつくしく。ひゞきめなきやうによく丸め候てひつに入。布をしめしふたにして。風のひかぬやうにしてをき。一づゝ取出しうちてよし。ゆでかげんはくひ候て見申候。汁はにぬき又たれみそよし。胡椒。梅。

けいらん　もち米六分。うるの米四分。よくこにしてきぬにかけ。いく度もふるひ。よきこ

ろに水にてこね。中へくろざたうつゝみ。きんかんほどに丸めてに申候。汁はうどん同前。但米のかしやう。すこしの間水につけ。やがてあげておけに入。なみよくをし付て置てよし。はやければ粉あらくおもし。ひさしくつけ候へば。こぬれてとぢあひ。ふるひ候事ならず候。

切麥　これも鹽かげん。うちやう。何もうどん同前。汁はにぬき又たれみそに。からしたで。柚。

葛素麵　まづくずをすこし水にてときわかし。めしのとりゆほどのかんにしておけにうつしさまし。それにて粉をこね申候。かげんはひきあげおとしみるに。いとになりきれぬほどがよし。はやくおつるもきるゝもあしゝ。とをし中上戸はゆびのはいるほどにあけ候。おやわんよし。ふときほそきは上戸の高下により候。なべの湯をよくにやして吉。そうめんにへ色かはり候はゞ。すいのうにてすくひとり。水に入ひやし。よくもみあらひ候。水をさい〳〵かへ候へば。いよいよしろく見事になる也。汁はきりむぎどうぜん。芳野葛ならではなり申さず候。色〳〵口傳在之。

しよよめんは　山のいもをこまかにおろし。もち米の粉六分。うる米四分をこまかにはたき。山のいもにてよきころにこね。玉をちいさうしてきりむぎうち申ごとくにうち候。ゆでかげんはにえうきあがる時節。是も汁は切麥同前。

水繊　くずのこを水にてとき候。かげんは一てきつめにのせたまるほどにしてよし。扨水せんなべにあつさのかげんよきころに入。湯のうへに置候へば。色かはりかたまり

候時。なべともにゆの中へいれ。にえ候をひきあげ。水の中へうつしひやし。よきころにきり申候。是も汁は切麥同前。湯の中へはやく入る事あしく候。

水飩（すいとん）　くずのこを是もとも水にてこね。よくつくねあはせ。竹にても木にてもうちのべ。はゞ二三分長さ三寸ばかりにもきり申候。みそにだしくはへにる。にらか又は何にてもうは置よし。但ゆにをして入てよし。かやうにいたしけいらんにもりあはせ。うどんのしるにてけし。さんせうのあんを皿につけても出し候。

きんとん　葛の粉をみそしるをはしらかし。さましこねて。中へけし山椒などすり入。ひらりとまろめ候。これもみそ汁にてしたて候。猶口傳在之。

蕎麥きり　めしのとりゆにてこね候て吉。又はぬる湯にても。又とうふをすり水にてこね申事もあり。玉をちいさうしてよし。ゆでて湯すくなきはあしく候。にへ候てからいがきにてすくひ。ぬるゆの中へいれ。さらりとあらひ。さていがきに入。にへゆをかけふたをしてさめぬやうに。又水けのなきやうにして出してよし。汁はうどん同前。其上大こんの汁くはへ吉。花がつほ。おろし。あさつきの類。又からしわさびもくはへよし。

麥きりは　大麥の粉也。うちやうはきり麥のごとくうちて。みじかくきりて。汁うはをきはそばきりのごとくしてよし。

にうめん　まづ素麵をみじかくきりゆで候て。さらりとあらひあげをき。たれみそにだしくはへふかせ入候。小な。ねぶか。なすびなど入てよし。うすみそにても仕立候。胡椒さんせうのこ。

すゞりだんご　餅米六分のうる米四分の粉を水にてやはらかにこね。むくろじほどに丸。あづきのしぼりこにてよくに候て。鹽かげんすいあわせ。白ざたうかけ候て出しよし。

雜煮は　中みそ又すましにても仕立候。もち。とうふ。いも。大こん。いりこ。くしあわび。ひしがつほ。くきたちなど入よし。

第十八菓子の部

玉子素麵　たまごをあけ。よくかきあはせ。白ざたうをせんじ。其中へ玉子のからにてすくひ。ほそくおとし候なり。取あげよくさましてよし。

おこし米　よくいにんをよくほし。引わり米のごとくにしてきつね色にいり。さてさとうに水をくはへふかせ。にえ候時かさにすこしづゝさたうをとりわけ。よくいをすこしづゝ入ませ。盆へあげ候へば。かたまり候がよきかげんなり。いくたびにもかさにとりわけつかまつりてよし。道明寺にてもいたし候。

牛房餅　ごばうをよくゆにしてたゝき。すりばちにてすりをき。さてもち米六分うる四分のこにさたうをくはへ。牛房と一つにすりあはせ候。沙糖過候へばしろくなり申候。さてよきころに丸め。ゆにをしてごまの油にてあげ申候。その後さたうをせんじ。そのなかへいれに申て出し候。ごばうさたうのかげんにまゐめ候時の口傳在之。

葛燒もち　くず一升。水一升。沙糖一升。三色よくこねあはせ。みかんほどにまろめ。なべにすこしあぶらをぬり。さい／＼うちかへし燒申候。

葛餅　くずのこ一升に水一升五合入。ねりて出し候。もちはいづれもまめのこ。鹽。さた

うかけて吉。又くずのこ。わらびのこは何ときもやげんにてよくおろしてこね申也。

蕨餅　粉一升に水一升六七合も入。よくときてねり候てよし。粉同。

雪餅は　うるの米一升もち三合をよくこにして。水にてにてしめし。せいろうに布をしき。米のこをふるひ入てよくむし候間へ。串柿。栗。かやなども入候。黄にいたし候は。くちなしの汁にてこをしめし候。

杉原もちは　めぐりともいふ。杉原をこまかにむしり。山のいもの葉をゆでゝすぢくきをとり。扱餅米六分うる四分のこをこね。ゆにして三色一度によくつきあはせ候。是は六月土用に大臣の參物にても小臣もよし。

枸杞餅　くこをゆでよくつき。そのしるをしぼりとりて。もちうる四六のこをこね。ゆにしてよくつき申候。又直にも入申候也。

五加餅も　くこ同前なり。

ちまき　是も四分六分のこを水にてやはらかにこね。ま菰にても篠のはにてもつゝみまきよくゆで候。黄にはくちなしの汁入。沙糖。大豆のこ。しほ。

さゝ餅　うるの米上白にして。よくこにはたき。三段にこをとる也。一番はざつとはたき。先ふるひ。そのこはのけ申候。二番めによくはたき。こまかにふるひ候。扱水にてこね。ちいさく玉にしてなべに入にる。ふきあがりて又しづむまでゆで候。あげ候てうすにてよくつきて色〳〵にちぎる。黄にはくちなし。青はゑもぎの汁入よし。青大豆のこ口傳在之。柚の葉。

御所様餅　南部殿傳。うるの米四分。もち六分。よくこにして。山のいもをおろしこね候て。ちいさくひらめにとり。みそ汁にてよく

に候て。餅ばかりもり沙糖をせんじかけ出し候也。さたう一升に水四分入せんじよし。

近衛様雪餅　白朮。二兩。茯苓。一兩。山藥。二兩。蓮肉。二兩。よくいにん。二兩。右よくこにしてうるの米四分。もち六分の粉に合すり。さたう八兩。右何もよくかきあはせ。つねのごとく布をしき。むし候てきり出し候也。無比類也。

第十九茶之部

奈良茶　まつちやを少いりてふくろに入て。あづきと茶ばかりせんじ候。扨大豆と米入候を半分づゝいり候てよく候。大豆は引わりかわをすてよし。又さゝぎ。くわい。燒栗なども入よし。山椒のこ鹽かげん有。何もにかげん大事也。

枸杞茶　くこのわかきをつみ。むしてほいろにかけ候。ゆで候てもよし。引申時はつねの茶を三分一くはへてよし。

うこぎちや　これもくこのごとく仕候。桑茶も同くこのごとくつかまつりてよし。

第二十萬聞書之部

一夜ずしの仕様　鮎をあらひ。めしをつねの鹽かげんよりからくしてうほに入。草つとにつゝみ。庭に火をたき。つとゝもにあぶり。そのうへをこもにて二三返まき。かの火をたきたるうへにをき。おもしをつよくかけ候。又はしらにまき付。つよくしめたるもよし。一夜になれ申。鹽魚はならず候。

鯨の置様　鹽一升水一升をふかせよくさまし。三日つけをき。その後あげ候て。つとにしていつまでもをく也。そのまゝおけにつけをく傳も在之。又かすにつけ鹽くはへつぼに入置候へばいよ〳〵よし。あかみは久しくゐ申さず候。

竹の子の置様は　よくゆにしてあま酒に。鹽をくひかげん二しほ三鹽もからくしてつけて置候へば。いつまでも色よくゐ申候。鹽をいだしつかひ候。

こなりも　右同前。來年出來候までゐをくてゐ申候。是はつかひ候二日まへより鹽を出し候よし。

六でうの仕様　たうふをよきころにきり。水に鹽からく入候てに候て。くしにさしほし申候也。

白川甘酒は　白三升を引わりよくむしさまして。こうじ五升に水五升入。よくもみてすいのうにてこし。しぼりかすをすて。その水にてつくりいれ。とき〳〵かきあはせ候。夏は三日冬は五日にてよし。

柚べしの仕様　柚味噌のごとく口をきり實をすて。味噌。生姜。胡椒などよくすりて。かや。ごま。あんにん。そのまゝ入まぜて。ふたをあはせからげ。よくむしてほし。あまにつり候てよし。

唐の芋のくきの置様　かわをむき。こまかにさき。ほそきかたをゆひあはせ。南方にかげぼしにして吉。

氷こんにやく　よくに候てそのまゝ雪にあて候へばこほり候。たうふも同前。

こけらずしの仕様　鮭をおろし。身をひらひらとおほきにつくり。めしに鹽かげんしてかきあはせ。そのまゝをしかけ申ばかり也。

なしものゝ鹽かげん　夏はいを一升に鹽五合。冬は三合いれて吉。さりながら遠近に口傳在之。

ふりこは　しほとはいを入。すりばちにてこねまはし候へば。即時に白くなり申候。

正木（まさき）醬油　大麥壹斗白につきいり引わり。大

豆壹斗。みそのごとくにる。小麥三升も臼にして引わる。右の大豆に候て麥のこにあはせ。こを上へふり。板のうへにをき。にはとこの葉をふたにしてねさせ候。よくね候はば鹽八升水貳斗入つくり候。同二番には鹽四升。水壹斗。こうじ四升入。三十日をきてあげ候也。

仙石流（せんごくりう）　大豆壹斗。大麥壹斗。水壹斗一升。鹽四升。こうじ三升。右いづれもかき合。麥のこをかきあはせ。うへにもふりねさせ。右の水にてつくり入候也。

狸汁。口傳　身をつくり候て。松の葉。にんにく。柚を入。古酒にていりあげ。その後水にてあらひ。上さかしほかけ候て汁に入よし。獺もかくのごとくつかまつり候よし。

もやしには　大豆。小豆。さゝぎ。ふんどうにても水につけ。おしきに土を入まき候へば。やがてはへ申候。一寸四五分も出たる時つかふ。

仙臺干飯は　もち米をいかにも上白にして。寒のうちに水にてあらひ桶に入。日々に水をかへ。十四五日もつけをきてさらし。扨よくむしてかげぼしにして引わり。三段にふるひ候てよし。こはのけ候て吉。中計よく候。

靑大豆の粉仕樣　あをまめなき時は。大こんのはをすこしゆにしてすぢをとりしぼり。ほいろにかけやげんにておろし入候へば。臼も青くなし申候。柚の葉はにほひばかりにすこし入てよし。

口野うどんの鹽かげん　水五升に鹽一升五合入てよし。にえにくきもの也。夏冬のかげん口傳在之。

沙糖をねり申には　玉子を壹つつぶし入候へ

ば。その玉子にさたうのちりみなつき候てとれ申候。蜜にも。

濱名納豆は　大豆壹斗味噌のごとくたきて上候て。うどんのこを壹斗入。よくあはせてねさせて。こもをふたにして三日ばかり置てみればよくね申候。ね候はゞふたをとりそとさまして。うへをしたへかへして又ねさせ候。よくね候はゞかきよせ水六鹽三にてつくり入候。水五々にてもいよ〳〵よし。さて時〳〵かき合候。三十日の間はかきてよし。土用に作り入候へ共。九月九日ごろまで置候てよし。ねさせやう口傳。戸板に入候へば。戸のさんの高さほどにもりてよし。あつく候へばあしく候。三十日もかき。大かたなれ申候時。から皮。生薑など入候て。くちをよくいたしをき申候也。

正木ひしほ　大麥白一升一夜水にかし。さは〳〵と煮ていかきにあげてむす。大豆八合。むしくひはづかけえりて水にてあらひほじ。よきほどにいりてこまかにさら〳〵と引わりかはをさる。右二色まぜ。やはらかにむして。あつさ五分程にむらもなくひろげ。上下にうどんの粉二合五勺ふりてねさせ。はなよくつきたる時おこし。あら〳〵とくだき。少し日にほし。花のちらざるやうにしてかみふくろに入置。何時にても五日まへにこうじ四合。鹽貳合五勺。水一升入つくり候。冬は十月十五日前よし。右こうじ鹽水をぐら〳〵とわかし。よくさまし。桶にてもつぼにても作り入。日あたりにをき。一日に五六度もかき候。色のつき候までそとにをく。但五升とも仕候へば。鹽三合づゝ入よく候。

鮒のかす漬は　一夜鹽をしをしてかすにつけ。をしをつよくかけよし。五月六日のうち

によし。
くわい　ところ。いも。皮をむぎ手水のこに漬置候へば。五日七日も色かはらず。
ふくめの仕様　干鯛をあぶり。板の上にてそとたゝき。むしりすり候てよし。かます。鮫。鹽引。きすご。何にてもいたし候。
靑瓜の置様　寒の中の雪を鹽からく入。せんじてつぼに入置。うり二つにわり。中子よくとりてつけ置候。來年夏まで有。ねぶか。さゝぎなどもをく。
竹の子のきりぼしは　いかやうにもきり。しほ湯にてゆ煮をすこし仕。よくほしてつぼに入置。來年まで色かはらず。口傳。九十月時分に又とり出しほしてよし。
茄子(なすび)の切ぼしは　生にてほし。つぼに入置よし。これも九十霜月に三五返もほしてよし。
鮒の汁　急候時白砂糖酢をすこしくはへいれ候へば。即時ににえ申候。ひさしくをけば後に砂糖のあまみしれ申候。但十人前にかひじやくしに二盃。酢は半分入てよし。
ほしたる椎茸を生になす事　いかにもうらの白きをさたう水につけ候へば生になり申候。
柚を來年まであをく置事　梅ほどなる時。こぬか壹升。鹽一升にからかねのせんくずすこしくはへつけ置候。つかひ候時は宵より鹽をいだし候
橘飩(きんとん)のこねかげん　味噌汁の手引かん程なる時こね候てよし。すいとん。葛。そうめんの友湯も此心持口傳在之。何も葛はやげんにておろし細(こ)にしてよし。
煎酒急候時は　酒一升かつほ二ふし。だし五合入。あぢをすひ見候て。たまりくはへ出し候。梅干は酒一升に六七入候てよし。鹽もた

まりもよき比せんじ候て入候事に候。

煮貫は　味噌五合。水一升五合。かつほ二ふし入せんじ。ふくろに入たれ候。汲返し〳〵三返こしてよし。

右料理之一巻は庖丁きりかたの式法によらず。唯人々作次第の物なれば。さしてさだまりたる事はなく候へども。先いにしへより聞つたへし事。けふまで人の物がたりをとむるにより料理物語と名付侍る歟。遠國名所〳〵の珍物は幾千萬ならむ。亦明日はきく事みる事もあらん。おかしく出來たる事は書そへてんかし。山野河海の魚鳥も無一物より出來たる無盡像（無盡藏）。雨露のやしなひに生ずるかたちはさま〳〵かぎりなき事なれば。たれかすべてはかりがたし。いまきこゆるものあるも。このむまじきは殘しをく。又うるはしきを失念も有なむ。只あらましごと。春のながめ旅の空つれ〳〵のあまり筆にまかせ侍りき。しかあれども予はくはしくしらず。存知之旁（方々）に口傳を相尋らるべき者也。於武州狭山書之。

寛永二十癸未曆極月吉日

續群書類從卷第五百六十六

飲食部四

神谷宗湛筆記

天正十四年丙戌小春廿八日。上松浦唐津村を出行して。同三川(シツイ)島より船に乘り。筑前國かぶり村に着。陸地を上り。下關より船に乘兵庫に着也。其より陸地をのぼり。同霜月十八日に下京四條森田淨因所に着。宿仕候也。廿日愛宕山に參詣仕。其日山は雪にて寒事との外なり。廿一日下向仕同宿に休也。廿三日上京。宗及老御宿に始て參候。宗湛又宗傳兩人共時不時の御振舞有。又廿四日夘刻。兩人見舞申候得ば。大文字屋に御會御出之折にて。門にて御目に掛候得ば。跡に留置候而御振舞有。同日申刻に大文字屋榮淸より俄に被召寄。不時御數寄有之。

天正十四丙戌霜月廿三日より

一(廿三日晝)天王寺屋宗及老不時振舞有。宗湛不時上京。御うら坐敷にて。

一(廿四日朝)宗及老同宿上京にて不時御振舞有。兩人共朝より晝迄うらざしきにて咄居候也。

一大文字屋榮淸に宗及老は其朝の御會にて。御坐敷より宗湛宗傳被召寄。不時御數寄有。深三疊四寸の爐釜。自在つり。床に虚堂の墨

跡掛て。同表補綃（上下茶ス、ケ色ホツケン。中淺ギノホツケン。）一文字風帶（帯イ）。金地の金襴。萌黄地は寶盡。牡丹。唐草。はち軸。（三重にあり。）くわりん也。同箱内竪一尺程。横二尺三寸程有。五字ヅヽ十二下。奥の一行は虚堂叟知愚書と有。

知愚

息耕翁（古文字）

横一寸立二寸

虚堂（古文字）

此墨跡天下一也と宗及老被仰也。

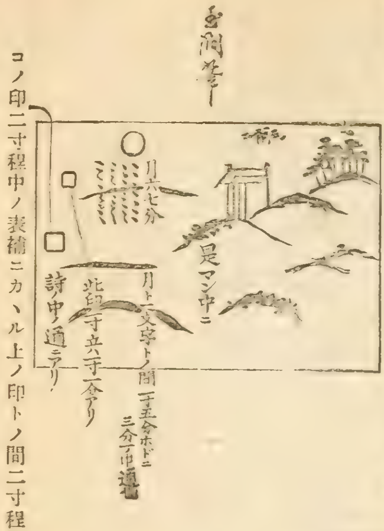
一廿五日。曉（晩イ）。四條森田道味御振舞。大内（裏イ）御即位拜見仕て歸に。本住坊具足屋了安。宗湛。宗傳也。

一下京四條宗逸御會事。宗湛。宗傳。裏座敷平三疊。閑爐裏五德すへ。茶碗今燒に道具仕入て。棗水指。釣瓶。面桶。引切。炭斗ふくべ。火箸桑木也。

天正十四丙戌十二月三日。寅刻下京四條よりさしずにて大徳寺に參る。大雪にて洛中三尺積り。乘物も難成程也（哉イ）。門外にて夜明也。惣見院に參り案内申候得ば。文首座の寮に先呼入て朝飯（食イ）有。三の膳迄結構の御馳走有。其後客殿に御呼出し。古溪和尚被成御出候て掛御目也。扨内より卓（シヨクイ）を持出て。椽向て置候。其上に剃刀一。香爐。香合を置。先和尚樣御出有て。香一種薰（焚イ）て。剃刀御當てゝ三度問訊有て。如本剃刀を置候へば。其後僧衆髪〔そり〕とり法體仕候也。和尚依尊意本尊に三拜仕候。扨三方に奉書を一重を敷。白梅一枝置。御肴兩種有之。其後そうめん出。其時に土器一重を足打にすへて出。御酒五返。又肴三種有。頓て罷立。下京宿にてこしらへ堺に罷下。其夜くろす（づイ）と云村に一宿する也。翌四日堺に着。其時に天王寺や迄宗傳被出候。道叱老事小性相添。提擔子持參候。其日寒天にて

大風大霰殊の外也。四日大安寺虎藏主寮に着。則風呂に入也。四日宗傳にて晩振舞有。
（五日朝）一宗傳御會事。宗湛博多衆三人坐敷。二疊半圍爐裏。小霰釜。自在釣。茶碗。高麗井戸道具仕入て。土水指引切也。
（同晩）一嵯峨夜咄宗湛宗傳。平三疊爐新釜。自在釣。今燒茶碗に道具仕入て棗釣へめんつう引切。先薄茶有て其後振舞有。其後濃茶。
（六日朝）一宗傳御會事。松井廉仙。宗湛。山口衆。道具同前。
〔七日[illegible]〕一本住坊御會事。深三疊。床なし。四寸爐。眞緣眞釜。共（友イ）蓋。自在釣。瀨戸茶碗に道具仕入て。つるべ。めんつう。引切。棗手水の間に土の花生に白梅入て薄板にすへて。上坐の眞中に。茶巾をばしめさずして被持出候。
（七日晩）一忙閑振舞。多人數也。
（八日[illegible]夜咄マデ）一大和や立頓（左イ）御會事。宗湛。宗傳。深三疊。四寸爐。古釜。五德すへ。瀨戸茶碗。道具仕入て。棗釣瓶。面桶。引切。先濃茶。後薄茶。
（九日）一新屋了心。夜咄。宗傳所より參也。松波。虎藏主。宗湛。宗傳。書院古金屏風立て。爐釜五德すへ。瀨戸茶碗道具仕入て。棗釣瓶。面桶。引切。先古き四方盆に搗栗蜜柑入て出。其後薄茶。良咄て粥出也。
（十五日）一天王寺や道叱老御會事。宗湛。宗傳。四疊半。床六尺。折釘上の玉緣に有。四寸爐。眞緣釜。たつま眞。自在釣。手水間に一軸掛。水指。芋頭。眞ふた。輪花臺天目すへて水覆金の棒の先塗茶杓。筌。紫竹。巾。しめし。棗ふた置。五とく。炭斗籠。筋。桑の柄。貫。唐金。羽。厰。
一芋頭九寸程一文字にあり。口も九寸程。乳（ちイ）は兩方に有。
一天目は高二寸二三分。覆りん銀也。漆古土（とイ）黑藥の上黃色に。下藥は白し。覆輪と下に白藥

其まゝ。
一輪花臺ヘくりんなし。五葉形也。
一水覆棒の先金の色古見事也。口に筋有。高さ三寸九分。口三寸。下ふとく一分半大也。色しやれて青白きやふにしてぎんはしる。
一秋月一軸。上下萌黄金らん。金地鶴菱。牡丹。から草まじる。中紺金らん。鐵仙花。一文じ風帯丹色金襴也。紋は角龍。マス勝とも云。露丹



四面平湖月滿レ山。
一阿螺髻鏡中看。
岳陽樓上聽二長笛一。
踏盡崎嶇行路難。

洞庭秋月[印]竪一寸横一寸一分。[印]竪横二寸。色。此云丹色と云は赤き内に黄有。是は紅なりと被仰候。勿論古し。切軸。象牙。圖の事竪一尺一寸五分。横二尺九寸。又上の高さ一尺四寸五分程。下七寸五分。中ノ上六寸程。中の下三寸程。中の脇二寸程。一文じ上一寸五分。下八分程。風帯一寸程。軸先八分程。是凡見合也。折釘三ッたくぼく二ッに掛。
十五日晝茶過より晴りて
一嵯峨ニ不時先薄茶有。其後一炭置て濃茶有。此花や與太郎殿より白袋到來とて四方江入て。諸道具同前。
十七日朝
一新や了心御會。深三疊。四寸爐。古釜。なり口高肩一筋有。五徳すへ。床正曇墨跡。瀬戸茶碗道

具仕入て。棗釣。面桶。引切。
宸初より終迄大燈墨跡掛。掛物竪一尺三寸。横二尺九寸。廿四行有。廿行目五字さげて廿一行有。其四行目に。虎兵シツリ正墨書と有て。上に一寸角印。下に竪一寸横三分の印。二ツとも表具掛る見え兼申候。奥口一寸四五分をいれ。

十七日朝　一道叱老御會。宗及老。宗湛。床初より大燈墨跡掛り。爐釜。自在釣。手水間ニ芋頭水覆。棒の先。ふた置。五とく。棗。袋入。高麗茶碗に道具仕入て。茶杓。象牙。床に掛物終迄有。墨跡一尺一二寸。四寸文字八行。自奥の八行目は三字有。丈一寸と有。惣數九十九。印なし。

十七日晩　一宗及老御會。宗湛。宗傳。四疊半。爐。釜。蒲團。自在釣。
床船子一軸。手水の間芋頭。眞蓋ニ棗袋入。天目ニ道具仕入て。水覆。棒先。蓋置。五徳。炭斗籠。火箸桑柄。釜置。どう。
薄茶の時高麗茶椀ニ道具仕入て。中次帛紗物。濃茶の時淺黄。薄茶の時鼠色。
船子。繪牧溪。賛虚堂。



此字形下ハ右ヘユガムナリ

、、、、、
、、、、、
、、、、、
、、、、、

詩の上三分一の上より有。芦は詩の下迄懸る。人形は座て兩の手にて兩の膝いだきて居。又上印詩の三字ツ目の通に有。宗云御會イ

一天王寺屋宗存會。宗湛。宗傳。平三疊爐。新釜。自在釣。井戸茶椀に道具仕入て。棗袋入

て釣べ面桶引切。濃茶過て内より大壺持出てみせらる。口覆澁紙。〆緒紅。濃茶の時帛紗物にて釜のふたを取。薄茶には巾にて取。其儘に被置候也。

一(注一)(一月晦)草部や道設(説イ)御會。宗湛一人。疊三疊。勝手の内に一尺程の小棚有。下に土の水指。共蓋。爐。釜。筐被。環。弦鐵。棚には臺天目あり。手水の間に四方盆に肩衝すへて。勝手疊の中に被置候。土水覆。

肩衝高三寸一分半。但肩より上四分半。此内一分はひねり迄し。横二寸五分程。口ひねり迄の外かけて。口付の筋二ッ有。但口の外ニ一ッ。其口三ッ。又肩筋一ッ。是はみへみへず。以上三筋有。又腰に帯一。藥かけはづし。土の間七八分。なだれ一ッ。此は左の方に藥かけはづし二所。其返のうらに一所有。同なだれの上帯みへず。そばの藥のはづれの上も帯みへず。底はつくりかけ也。上よりかくふち有。中をしくぼめたる如そこ有。土色赤目に藥飴色に。赤目やはらか成はだへ也。又そばに藥のかけはづしの土に指形の樣に藥有。うる〱として上に薄白きんのやうに見ゆる物有。蓋の内も上よりの如くに緣有。はく古し。つくの上に引殘とぎる。同中程高筋一有。其内に常の筋細き一ッ有。つくの本に一ッ。

袋。白地小紋の金襴。しめ緒紅也。

天目覆輪なし。藥黒し。灰被き見事也。土も黒し。

臺黒し。釜蒲團形のかつき也。環付鬼面紋鐵。釜の口の高五分程。廣さ五寸四五分。共蓋也。此茶入を三好實休より千貫文に御取候也。此蓋を共柿の蔕と申て。又つくとも云ふ也。

一曉萑御會。宗湛。宗傳。平三疊。爐。新釜。自在釣。床大燈墨跡。瀨戶茶椀に道具仕入て。棗。つるべ。面桶。引切。墨跡竪一尺一寸程。横一尺程。九字づゝ七行。字數六十三。此内三ッはおどり字也。上下茶。中薄柿。風體紺の金砂唐草紋也。露白。はち軸。眞ぬり。（廿一日晩）

一隼人殿御會。湛一人。二疊半。床なし。おし入の心に半切疊有。半切疊二。始より燕なしに水計入て薄板にすはる。眞中に但前十六日也。手水の間に白梅入て。爐。新霰釜。自在釣。せんから茶椀に道具入て。棗袋に入。つるべ。めんつう。引切。（廿四日朝）

一庚因御會。宗湛。二疊半。床なし。上座に始より大壺置て一覽させて。やがて内へ被入候也。爐。新霰釜。自在釣。つるべ。土水覆。引切。瀨戶茶椀に棗入て。棗水覆唐物也。銀子七枚に御取候也。濃茶過て内より水にてすゝぎ持出られ一覽仕候。（廿五日朝）

一具足屋立安御會。宗湛。宗傳。渠三疊。天目。床なし。爐一尺七寸。木緣。釜共蓋。自在釣。鐵の環。大にしてけぬき合にして被懸候。瀨戶茶椀に道具入て。棗袋に入てつるべ。面桶。引切。炭斗瓢簞。筋鐵。こひ（コイ）茶過て大壺花出て一覽仕候。眞壺土黑目にしてあらく。藥は黃なる樣にかはき。色遠山は肩の下にたしかに有。（十二月廿五日晝）

ろくろは三口。高は一寸二三分程。六斤餘詰候也。底に判有。藥其内にちぽ〳〵と有。覆は白き厚紙にして。〆緒は茶の四折也。綿糸四重に結。一はげ有て二所ゆひて被出候。此壺金一兩に古田左助より被取也。釜は口廣さ四寸五分。くり口也。鬼面環付也。惣高七寸程也。共蓋也。金子二ッに平野より被取也。宗易目利にて炭取はふくべ也。薄茶過て

宗傳取出て被見候時。火筋をのけて一覽。此者宗易より參候と也。手水鉢石內丸く切候事。柄抄上に置候。

廿六日朝
一茜屋宗佐御會。宗湛一人。四疊半。床六尺也。始より花繪掛て。爐。釜。常張。蒲團。環付。丸シ。臺天目葭棚に有。手水間に信樂水指。面桶に五德入て、薄茶の間は人形茶椀に道具入て棗。袋入。右茶碗外にかきめ。內に角印高色赤し。くはんよう也。花書は上下淺黃の金襴。紋鐵心花也。中白地金襴。大紋。牡丹唐草。一文字風袋。紺の金襴小紋也。露赤し。紙の內竪一尺七寸五分。幅(竪イ)一尺三寸。肩面の內絹也。細し。象牙切軸六七分。紙內新ミユル。上一尺七寸。下八寸。中。上七寸五分。下三寸五分。左右二寸七分づゝ一文字。上一寸六分。下九分。肩面の內高八寸五分。横八寸七分。花數七ッ。三ッ開。四ッほみ。葉廿二。二ッハ少。長き若葉也。折釘上之玉縁に有。表具風帶一寸。

廿七日朝
一紹二御會。宗湛。宗傳。平三疊。爐。栗緣。二重釜五とく居。釜大成に依て。爐の四方くりてつるべを置。瀬戸椀に道具入。肩衝。面桶。引切。薄茶の時は中次。其外道具同。灰の再進は藥のかける炮烙に入。同抄子添て。炭斗ふくべ。筋。桑柄。羽。釜置は鼻紙(異イ)也。釜二重釜也。環付兜面。口の高三分程。廣三寸程。大さ九寸二三分。此釜宗易御目利にて金子二ッに御取候也。

墨跡は帋內竪一尺一寸。横二尺六七寸。字數百五十一。廿一行。奥の一行に宗峯叟妙趣書于明月(日イ)軒。上下北絹。こひ茶。中。薄淺黃。一文じ風帶。白地金襴(異本一寸ナシ)露紅。はち軸ぬり。肩衝は高三寸二分。口一寸三分。同廣一寸四分。肩四分。惣横二寸二三分。土藥黑。肩より下に指の跡程の漆付たる様也。ひねり返有。口付の筋な

し。帶なし。但藥の下にそと有樣に見ゆる所も有。

天正十五年丁亥正月二日より堺にて。

一道叱老御會。立頓、宗湛。四疊半。床に秋月の一軸掛て。釜白作釣。臺天目。水指。芋頭。水覆棒の先蓋置。五徳。濃茶過ぎて哺之內に。大阪より宗及老御狀之迎馬に飛脚相添て被遣候。明日三日朝御城にて關白樣大名衆に大茶湯被成候。左候へば宗湛事を宮田左近殿關白樣江被成御取合候處。明朝御茶可被下由被仰出候程に。御進物を用意仕候て可被越之通承候に付。急薄茶有て罷立候。則進物虎皮二枚。大豹皮一枚。照布二端。沈香一斤。大阪に持參候。夜に入令着候處。宗及老石田治部少輔殿に御座候に依て。則治部江參候へば奥に呼入られ酒有。三方の上に白梅一枝置て肴などを置て出候。治部殿被仰候は。明日御隨分馳走可被成と御申候。忝候と申罷立也。歸に宗及老にて御振舞。宗惠。宗湛。

正月三日大坂御城內にて大茶湯之事

一、正月三日寅刻に御城に諸出候時。御門外にて宗及老御取合にて宗易に始て掛御目候。大名小名乘物にて出頭の體おびただしき樣子也。卯刻堺衆五人同前に罷出申候。先廣間に各同前に罷居候也。奧より石田治部少輔殿御出有て。宗湛一人計を御內に召れ。御茶湯のかざりを一通拜見させられ候。其後本の廣間に罷歸。夫より暫有て進物を上對面致候也。其後堺衆五人則參上候て。御飾を拜見仕候へとの御諚にて。關白樣御跡より各同前に拜見仕候處。筑紫の坊主どれぞと御尋被成候へば。宗及是にて候と御申御出らるゝには。殘の者どもはのけて。筑紫の坊主

一人に能見せよとの御諚候條。堺衆皆椽に出られ。宗湛一人拜見仕。椽に罷出候て暫御飾を見申。關白樣御諚には。多人數成程に。四十石の茶計にては足まい程に。撫子と松花の茶を今挽せて各呑せよとの被仰出候へば。松花の御壺宗易。撫子の御壺宗及床より持おろして御茶被出候。又本の所に直し被置候。其より御膳出候也。其時は我々共は罷立。次の廣間に罷居候へば。關白樣御諚に。筑紫の坊主に飯をくはせよと被仰出候程に。御前に罷出。大名衆同前に御飯被下候也。左候へば多人數にて御座敷つまり候程に。座敷の眞中に細や宗久と宗湛とうしろを合て罷居候。其外には京堺の衆又御通の衆多人數也。其內石田治部少輔御通に而。宗湛同前御馳走被成候也。

一御茶の時に。關白樣御立ながら御諚被成候には。多人數なる程に。一服三人づゝて呑也。さては鬮取て次第を定よと被仰出候へば。內より長さ三寸橫一寸程の板に名書付て。小性衆持て出候。御前に投出され候を。座中の大名衆此板をばい取にして。其後誰々は誰が手前とさしよられて。御茶聞合る(きこしめさるイ)ゝ時。其筑紫の坊衆(主イ)には四十石の茶を一服とつくりと呑せよやと被仰出候程に。宗易手前に參一服被下候也。井戶茶椀にてぬるく點ぜられ。又新田肩衝を手に取て見せよと御諚にて。拜見仕候事宗湛一人。

御飾の事

違棚　右椛尻ニ薄色椿入 薄板ニスヲル

長ソロリ〱柳ニ入

左珪璋盆ニスハル

棚と床との間柱に。青磁の筒に水仙花入。多
也。大閤様御手づから也。

床の御飾の事

一晩鐘　前撫子御壺。口覆萌黄金襴。緒紅。
一青楓　前四十石御壺。覆萌黄金襴。シメ緒紅。
一雁絵　前松花御壺。覆萌黄金襴。シメ緒紅。
一是は臺子との間に。棚臺子の様に有。脇の棚に鐍無に白梅入て薄板にすわる。

臺子

一假茄子數の盆に同盆内に象牙茶杓乞紹鷗所持
一卓同數の臺にすわる
綠桶引掛
胡桃四引掛合子引掛
小霞釜紹鷗
風爐切合　太鼓胴　ふた置

手前　宗易

炭斗　瓢簞。井戸茶碗。やせくり毛の天目。

棗。臺天目。柄杓立。合子。風爐釜。
一中臺子。蓋置。椽桶。井戸茶碗二ッ置て。是皆金の道具也。宗無手前。炭斗。瓢簞。筋皆金。
一臺子。宗及手前。松本茄子。内赤ノ盆。同竹茶杓。珠跡貴紐釜。風爐切合。芋頭。紹鷗。尼子天目。臺なし。柄杓立。備前物。水覆。瓶蓋。蓋置。五徳。塗天目に茶筅入て。炭斗瓢簞。

	新田肩衝	四方盆	宗易
臺子前三分	面白肩衝	四方盆	宗無
	初花肩衝	四方盆	宗及

一桃尻はふくらに唐草の紋有。口より下にも同紋。かね色少赤し。
一ぞろりは金色いかにも青く。濡色にみゆる。内に黒〆成心有。紋なし。
一珪璋盆は黒き内にした色の様に見るはだに彫有。柘榴也。彫にかどなし。古く丸め也。外はぐり／＼。大サ八寸程にみゆる也。

一晩鐘の繪。詩奥に有。四字の中の通に角印一ッ有。紙内竪一尺一寸五分。横一尺九寸有。上下萌黄金襴。中紺地金襴。一文字風帶。丹色。露丹色。

一青楓は詩は口に有。印二ッと承候。一ッ見ゆる。二幅より紙内せばし。印の内黒くしてみへず。上下萌黄金襴。中白地金襴。紋てつせん花。一文じ風帶。露白。

一雁の繪は紙の内鐘の繪と同じ。表具も同事。露淺黄。軸は三ぷく共象牙切軸也。

一撫子の壺は土あらく赤黒目に。腹にとげの如くにむさ〳〵としたる物有。藥青黒めにして星のやう成物有。少し傾く。

一四十石の壺は少し下ぶくらにして赤く。あらめ成土也。細はらゝのやう成物みゆる。藥青黄に上藥濃所有。藥の内に星のやう成物みゆる。三ッの内には一ッ見事成御壺也。

一松花は下ほどに土細くして。白け色に藥黄目也。藥濃所もなし。

御振舞過て種々御雜談御立そろて也。

一關白樣御衣裳。上は唐織の御小袖五ッ。むねに下迄皆上の襟。上御同服は白紙子ぼけの裏也。御帶は紅也。いかにも長して一方長く結。御膝の下迄に有。御ぐしには萌黄のしゞらの御頭巾。御髮ゆはせられず。御小袖長くして御足みへず。

一鏞無は少もつくろひなし。宗及老所持のよりは少じしむる。色も少こし。

一似茄子は藥赤く飴色に黒。其内に藥むらむら也。

一松本茄子は上藥似たり。よりは黒目也。口の比内少細高也。

一新田肩衝はさのみつかにむくりと有。なだれ二ッ面に有。裏も有。藥はげ高に帶みへ

ず。底糸切也、細き石二ッ三ッ有。土青目に上白くに。洗立たるやうに有。口付の筋三有。一ッはくびの下也。くび立あがる也。

一面白は新田より胴はる骨高也。口の様子は新田と同様にみゆる。くび立のびず。土は黒目に赤き心に有。藥黒目也。肩もさのみつかず。なでたるやう也。

一初花は新田と同じ。くび少つまり傾く也。外下細き様にみゆる。土少黒目に白けたり。但新田のやうには白けず。新田よりは黒目也。下藥は黒黄目に。上藥南方に雲のやうにして。所により土の上になだれ一ッ有。口付の（時イ）筋有。帶有。

一數の盆堆朱也。外計彫有。足の高二三分。大（縁イ）サ六七寸程にみゆる。

一抱桶は銅也。共ぶた也。葉の様成物打出紋也。

一合子は宗湛所持よりはかさにして。底丸目みゆる。口の様子同じ。

一白天目は土黒藥黒して。上白き心にみゆる。

一尼子天目は土黒し。形右に同じ。

一正月四日晝。石田治部少輔殿へ昨日の御禮に罷出候所。先書院にて菓子御振舞候而。其後數寄やに被召寄。御手前にて御茶被下候也。宗及老。宗凡。宗湛三人也。御茶大海に入一ッ。棗へ三ッ。中次一ッ。以上五ッに入。此茶をかふき茶にとて點て下され候也。

（六日朝）一德林御會。宗湛一人。四疊半。床に始より墨跡掛て。四寸の爐。自在釣て。古釜。釣もの。釣瓶。天目に道具仕入て。中次。面桶。ふた置五とく。手水の間に墨跡を卷て。千種の壺置て。覆丹色小紋金らん。（緒イ）裏淺黄片色。〆緒淺黄昔の結構也。結下て千種の壺は土荒目にて赤し。下ふくらに底にこぶ有。判四ッ有。祥

の字一ッ判の上に有。薬は濃して大になだれ有。其下分やうに見ゆる。ろくろ三ッ口より乳二ッの間に上に小筋有。三方に有。一間乳の方にはみへず。

一〔正月八日〕春世。夜咄。宗及。宗湛。宗傳。先薄茶有。其後鉢子皿に豆ふくし指。餅串指にして山椒みを付て。其後濃茶。

一〔[illegible]〕宗及老佐々内蔵介殿を御會ゝ。平三疊。爐。紹鷗。金補釜。五徳すへ。様にふく井簀敷て。宗湛跡見ると被仰付候。依之内に而飯給て。客人立れ候後に廻りくゞり入候也。床に定家の色紙掛て。前にふわの香爐と香合置合て。中の通同香爐には白き灰を入て抑て有。香合の内には唐紙の香包二ッに入て。其上に東の一字計書て。二ッ付て置れ候。其外道具。高麗茶碗に道具仕入て。文琳水指。芋頭。面桶。引切。炭斗。ふくべ。

一かなつぼ釜は手取也。じやうご耳の所に筋三ッ。下に筋二ッ。環鐵釜蓋はのみいれ共ぶた也。一方にくちめ有。上つまみ也。筋高し。

一ふわの香爐。高サ二寸。下口三寸九分半。口にせいかん。ろくろの様に筋三ッ上下に有。色くわんようよりも青白く。ひゞきくわんかた也。足は鬼面が臨より一分程短し。口に少つくろい有。

一香合高サ九分。横貳寸。外にをり入ひし。上に細ひし。内に花ひし有。其中に居ほてい有。右の膝を抱。其上に右の手を打掛て。杖を下に置て。杖の緒の方左の膝の方にあり。

一正月九日。晝より郡山へ罷越候。宗及老。春世。宗湛三人馬にて。〔[illegible]〕池田いよ殿御振舞。書院にて十日朝。いよ殿御會。宗及。宗湛。春世。平三疊。七寸五分の爐〔本様〕。釜。自在釣　天目に道具入て。棗。釣べ。面桶。引切　有會過

て明朝。御茶可被下との御禮として宗及御供仕候て。大納言樣へ罷出候。

一羽柴みの守樣御會。〔[illegible]〕宗湛。宗及。深三疊。大目床。杉のかまち。竹葉にてふきて。屋根裏大日の先道籠有。二枚障子立て四寸爐。さる釜。五とく居。床に初より虚堂文字掛て。前にやほの御壺置て。手水の間に二種ともに取て。臺天目。針屋肩衝。水指。信樂眞ふた。面桶。引切。大納言樣御手前なり。御振舞の時始の通は御自身也。再進より御小性衆也。墨跡上下こひ茶。北絹。中薄淺黃。一文じ風帶。〔一イ〕こひ淺黃金らん。帋の內竪一尺一二寸。橫二尺六七寸。詩七言。奧の五字下て又二字上て。其脇に二字。其外に三字有。詩の內字三ッ不足なり。

一やほ御壺。こね土か土細して。白日に底に印有。藥はげ高にしてなだれ五有。右の方より二ッ目の藥長くて。其下に飛藥有。藥黑目に黃して。上藥片脇に藥濃し。覆白地金襴。〆緒紅。

一肩衝ハ高二寸二三分に底へげ土也。一文字にしてふちの如に有。靑黑口に赤日に有能土也。胴はりて藥の掛はづし三分程。口付の筋一帶一。上藥黑目なだれ一ッ。

一天目は名忘候。臺は尼崎臺也。

一道籠は始には二枚障子立。手水の間に取て。肩衝を盆に居て。其脇に水指置。奧のすみに香合可有。水指は其まゝ。

一さる釜は霰也。環付猿也。口三寸四五分。水指信樂。居大にして下丸し。〔內曲歟〕眞の蓋。

一手水鉢は平丸き石を角半分に切て也。柄杓はふせて也。右之御禮過て罷歸候。〔所歟衍〕池田いよ守殿に咄して居申候所。堺宗傳より飛脚書狀持參。明朝利休老より御茶可進との御案內候程に。早々堺へ可罷歸との到來に依て。

即時にこしらへ。郡山を出。九ッ時分に堺へ着候。又則納へ。大阪に八ッ時分に着候。利休露地の口に待。宗傳案内申され候へば。則此方へとて外のくゞり迄。小性衆に行燈を持せ御出候程に。夜不明にはい入候也。両人の乗物は間を置候て待せ候也。

一（正月十三日）利休御會。大坂にて宗湛。宗傳。深三疊半。四寸爐。五徳居。釜。霰姥口。環付。鬼面床の向柱に。高麗筒に白梅入て。手水の間に取て。床に橋立の大壺を置て網に入。次の間小棚の下に土水指唐物也。同茶尻ふくらに入。井戸茶碗に道具仕入て土水覆引切。

御雜談。

一袋に入物は茶入計也。つん切なども不苦。是は茶の養生にて有程に。其外何にても不可入。

一茶抄。古は小壺の茶抄などゝて。夫々に仕合可有。今は折ためにてもすくゐ候。口に入さへせは也。

一投頭巾は。珠光末期に。宗珠に是に無上の入候はて。揃計入よと云て死也。古は二貫文程の物也。如此いへる事ひげ也。此小壺をならや又七と云者所持候つるに。彼雜談を聞てらうさいにて死也。古の者はおかしき也。

一圓悟の文字は一休に只もらい。是を珠光の表具せられし也。珠光は一休和尚の弟子にて候間只被進候。今千貫文に利休とられ候との御雜談也。

一小茄子とは三ッの内にてもと細目に有とて云也。細きにあらず。

一老茄子とは老たる茄子のごとく黄なる藥有るに依て也。

一古木の事御雜談之事。

一内赤の盆は赤は雜成る心也。黒きは古き心

也。

一綱の子綱の事。叱付に依て被仰也。

一瓢箪の茶入の事。

一橋立は土背高。ろくろの如。備前ものゝ能燒たる如にして。黄成物土にみゆる。藥黒口にして少なだれ有。其左の方の下にこぶ有。又土の上に黒きものゝちぼ〳〵と有。藥の内に白き樣なる藥有。口にろくろ三ッ。底に判有。罌らすし。肩おち胴張。覆もへぎ。小紋金襴。〃緒紅也。緒[illegible]房先右に覆にかどなし。丸く有。

十四日朝
一鐵也宗納御會。宗湛。四疊半。床六尺。四寸爐。木緣。床に肩衝袋に入 四方盆にすへて手水の間に袋ぬかせて。つるべの前に置。床には無準の墨跡掛て。面桶。引切。瀬戸茶碗に道具仕入て則祐肩衝は高サ二寸九分。口一寸五分に高サ四分半。肩二寸四分有。上藥黒く。藥の内になだれ候。露先皆黄なる心有。土靑目に黒して。赤目の心も有。底へげ土也。

一無準墨跡立一尺程。横二尺二三寸程。上下みる色北絹。中丹色。黄也。金襴一文じ風體。紫金襴。紋牡丹。露白し。字數三十二字有 但八行也。奥に一寸八分の程の丸印：其下に五分四方の角印有。唐新敷みゆる也。

一袋はけうろく組打也。地紺也。紋黄也。是は五ッ爪の龍と申也。此段子は天王寺や道叱の大壺の覆にて候を各分候て。小壺の袋にめされ候との雜談也。

〔十六日朝〕
一針屋宗春御會。宗湛。四疊半。六尺床。四寸爐。霰釜。自在釣。すみおりに二枚屛風立て。床にはんとう袋に入。四方盆にすへて手水の間に眞手桶置。前の脇に盆置合て。葭棚より臺天日取出。是は紹鷗所持の由被仰也。は

んとう高サ二寸二歩半。口横二寸六分。内は四分有。しきの高サ一分半。めんを取。なだれ一ッ有。其上薬たかみに石間有。少横にきれ目有。後の方にも横になだれ有。薬はげ高三分一程。袋白地の金襴淺黄の緒つかり。〔付書〕薄茶の時も天目。其外同道具也。

〔正月十六日朝に一會〕一松井隆仙御會。宗湛。四疊敷の内一疊の押入。爐押入に有。釜手取五徳すへ。一疊の押入に礁に柳と白梅と入て。卓にすへて手水の間に取て。水指。平。眞蓋。伊勢天目臺。奈良塗。棗土ふた置。太鼓胴。土水覆。礁花入は青磁の色濃して少ひゞき有。高七寸。口一寸九分。卓眞也。ぬり茶杓也。

〔十七日、朝に一會〕一宗同御會。嵯菴の兒。宗湛忙閑兩人。平三疊也。五寸の爐。釜。常張也。くさり釣道籠あり。瀬戸茶椀に道具仕入て。つるべ。面桶。引切。棗。薄茶過て大壺乞出し一覧仕候。床には忙閑上られ候。土は黒し白ヶ和也。細土也。薬黄日にして遠山うしろ有。ろくろ二ッ。底に少切日有。色漆にて繕候。腹にも一分ほどのうるしのめあり。

〔十八日朝に一會〕一水落宗惠御會。宗湛。平三疊。爐一尺七寸五分。大釜。自在釣。床に圓座肩衝袋に入。四方にすへて手水の間に袋ぬかせ。つるべ置合て面桶。瀬戸茶椀に道具仕入て。めんつうの内に入て。引切。肩衝は薬黒目に飴色の心、土は紫の黒色に有。ひねり返は繕候。圓座の際にも繕有。帯なし。口付の筋もなし。蓋は古し漆替り色有。袋白地金襴。〆緒紅也。右會過て。十八日八ツ時分より。那山に大納言様江御禮に參上申也。

十八日夜一池田伊與殿御振舞。書院也。御茶數寄屋にて。先薄茶有て御振舞過て。濃茶數寄屋也。白伊勢天日に道具仕入て。棗つるべ。面桶。引切。

後の薄茶は中地に入」

〔十九日朝永山に一覧〕
一武音御會。祁山にて宗湛。平三疊。四寸爐。釜。環付。角也。始より大壺を一疊の押入の疊に置。手水の間に土水指。備前物。共ぶた。瀨戸茶椀に道具仕入て。棗。面桶。引切。又眞の釜とて別に一覧仕候。羽箒也。腰に亀甲の紋有。肩にびやうの如くしぼ〳〵と双て二重に有。同肩に筋有。

正月廿日朝
一藪内道和堺にて宗湛。平三疊に床。爐。七寸五分木緣也。丸釜。自在釣。床に始よりたんぽゝの繪掛て。高麗茶椀に道具仕入て。棗。めん桶。引切。薄茶の前に大壺持參候て見せらるゝ。壺は土赤目にして赤黑こぶ土の處も有。上藥は黑目に四十石の壺に似たり。ろくろ三段に有。遠山二ッあざやか。四の乳大にして其間紋有。梅鉢の樣也。

廿一日朝
一卜意御會。宗湛。深三疊。床なし。爐。七寸五分木緣。丸釜。古し。環付ちどり也。上座に始より墨跡掛て。濃茶過て。内より大壺持出一覧仕候。墨跡は筆忻笑隱。帋の内竪一尺二三寸。横四尺程。上下こひ茶北絹。中淺黃。一文じ風帶。紺地金襴。紋は細き牡丹唐草。りんぼい也。はち軸也。口には八月十二日と一行在。二行目より奥迄三十行有。八重垣と云大壺は六斤程入候也。ろくろ三ッ有。段々に藥如常。黑藥は腹に掛。こゝを左になして被置候也。見合及老の指南と也。土しゞらの如にして。赤き上に黃なる樣に燒たり。底に漆にて長々と三ッ繕有。乳に花の樣に二ッ、兩に押形有。覆莿黃金らん金地。紋は小ひし。大牡丹から草也。中に花有。うら淺黃。〆緒紅。緒の先左也。

廿一日
一錢屋宗衲宗及老召連參候へば。内に御呼入候。先薄茶一ぷくヅヽ呑也。其後御振舞有

て又薄茶有。其後に大壺乞出て拜見仕候也。瀬戸茶椀に道具仕入て。つるべ。棗。めんつう。引切。此玉虫は六斤程詰候と也。青目にして黑藥黄藥一方下けにて塗候如に有。其處小きなだれ有。土黑目に細也。底に朱うるしにて玉虫と二字有。又墨にて判有。此判相阿彌か。ろくろ三ッ有。八重垣の壺花壺より肩おちてみゆる也。

一廿七日朝虎屋紹意御會。上京にて宗及老。宗云。宗湛。平三疊。四寸の爐。押入。床。大。釜。常張。五德居。燒茶椀に道具仕入て。釣べ。面桶。引切。濃茶過て從關白様拜領の壺とて。宗及老乞出一覽候也。壺遠山なし。藥淺黄土赤目にして。一方ばかりに黄成物燒出てこぶ有。肩張て下細に四斤半程詰候よし也。土の上に墨にて判有。底に墨にて藤と云字一ッ。又朱にて判二ッ有。覆紺地の小紋金襴。四方九〆折目なし。〆緒紅。乳を前へ被置候事。壺に依也と及老被仰也。炭斗唐の竹也。

一廿八日朝（晝イ）森田道味御會。下京四條。宗湛。淨因。宗傳。三疊敷。爐。新釜。五德居。燒椀道具入。釣瓶。面桶。引切。棗。濃茶過て大壺持出一覽させらる。五斤半入候也。ろくろ二ッ外いくびも有。藥飴色。上藥に砂の如くむさ〱と一方に有。なだれ二ッ。土赤くして細なる砂まじる。底に判有。

一廿九日朝針屋宗和御會。上京立賣。宗及老。宗湛。平三疊。床。杉かまち。四寸爐。眞の縁。釜。自在釣。床に肩衝袋に入。四方にすへて。軸脇に組中より少脇に手水の間に盃を取て。袋共にすみおりの疊に。其儘道籠の方に。つるべ伊勢天目に道具仕入て。面桶。引切。茶入袋白地金襴。小紋。〆緒。淺黄。一ゆにして肩衝は土赤目にして黑目也。藥はづれ三四分程下迄なだ

れ一ッ有。露先に白黄なる様に有。藥の內になだれ二ッ有。此間に指形のごとく藥はづれ有。又うしろに大指程に藥掛はづれ有。下藥薄黑口に少赤目にて。細なる金のやうなる物有て。上藥黑く飴色也。口付の筋大に二ッ有。二ッ共に藥に隱れ。中の筋外細高にみゆる。底へげ土也。薄茶の時も道具前に同じ。炭斗瓢簞の筋桑柄。手水の石丸少也。

（二十一日朝）一茶や宗可御會。上京立賣。宗及老。宗云。宗湛二疊。爐。新釜。自在釣。燒椀に道具仕入て中地釣べ。面桶。土蓋置。手水鉢は桶也。柄杓ふせて。前には尻細にしてくぼく。ふみ石に角の瓦置て也。

（二十日朝）一大文字や榮淸御會。上京立賣。宗及老。宗湛。深三疊。爐。大釜。尻丸環付。鬼面。床に墨跡掛て。手水の間に取て。釣べ。面桶。引切。燒茶椀に道具入て褁。

（二日晩）一森田淨因御會。下京四條。宗湛。宗傳。三疊敷　道具同じ。

（四日朝）一圭泊御會。上京うらつじ。宗湛。二疊半。床に茄子袋に入。四方盆にすへて四寸爐。手水の間に茄子袋ぬかせて盆にすへ。爐のそばにつるべ井戸茶椀に道具仕入て。面桶。引切。釜丸也。扱落は口と羽との間にびやう有。自在釣。

富士茄子は高サ一寸九分半。底の廣九分半。口付の筋二ッ。又肩より外下に一ッ。腰より下に大に帶一ッ有。土赤目にしてぼけて。其內に黑目に有。藥飴色黑き樣にして。其內に白黄なる樣にぎんの如くみゆる也。面になだれ一ッ。そばに下にも有。又藥の上に黄白の樣になだれて。前の肩より一處による。右の方に藥かけはづし有。裏の方に二分程に長く石間有。底糸切也。袋廣東也。是常の廣

東に替。此類天下に三ッ有と雜談也。口のつくりに寄て横に筋三通中大也。其中に白く一筋ヅヽ二通に有。裏こひ茶也。緒つかり淺黄也。

一〔二月廿四日晝ヵ〕一暗御會。上京。宗湛。休意。深三疊。床に始墨跡掛て手水の間に取て大壺被置候。高麗茶椀に道具入て。棗。釣べ。面桶。引切。

一〔七日晝ヵ〕鳴尾や宗叱。堺。宗湛。宗傳。平三疊。爐。釜。自在釣。瀨戸茶椀に道具仕入て。棗袋に入て。釣べ。面桶。引切。

一〔二月七日晝ヵ〕道叱老不時御振舞にて。先薄茶有て。暫咄有て振舞有。其後濃茶有。爐。釜。自在釣。眞手へ棗。井戸茶椀棒先水覆土也。蓋置。五德。茶杓。黑塗燒仕入て。棗。釣べ。面桶。引切。

一〔八日晝ヵ〕本住坊。堺にて。宗湛。深三疊。床なし。爐。釜。自在釣。燒茶椀に道具仕入て。棗。釣べ。面桶。引切。上座疊に備前物に花生。



高サ八寸
ふくら三寸五分程
古也

疊に其儘置て。

一〔九日朝〕草部や道說（設イ）御會。堺。宗湛。深三疊。大日。爐。釜。自在釣。土水指。瀨戸茶椀に道具仕入て。棗袋に入。面桶。引切。手水の間に床に土の花生。九薄板にすへて。茶巾洗に白玉を入。小刀添て床の前に被置候て。宗悅花を入候得よと。亭主被仰候へども。御斟酌に依て亭主御入候。

一〔十一日朝飯後〕納や與太郎殿御會。堺にて。宗湛。宗傳。是は納や宗薰息十五歲。肩衣袴。二階座敷也。二疊半。床なし。五寸爐。眞釜。自在釣。瀨戸茶椀に道具仕入て。棗。釣べ。面桶。引切。濃茶過て大壺乞出一覽候。

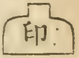
十一日晝
一宗及老御會。堺にて。宗湛。平三疊茶や也。爐。かなつぼの釜。五德居。床に文琳袋に入。唐丸盆にすへて。手水の間に おろして水指の脇に置候。

かなつぼは 口廣四寸四五分。高サ三四分をり口也。環付しやか耳。環付の通りに糸程の筋三。下に筋二ッ。共蓋にも筋有。上はつまみにて環有。肩衝盆口七寸程にして。内に鳳凰二ッ有。端に花五處に有。中ひきくせかいの心にして。内は漆白し。花は赤し。外靑漆底黑し。口にも足にも赤緣有。燕口のごとく。足の高サ八分。惣高サ一寸四五分。底には何もなし。只黑き迄也。文琳は飴色の樣にして黑し。骨高也。口付筋一ッ也。其下に筋二ッ。但藥の下にそとみゆる也。帶はなし。土靑目にして白けたる樣也。土の内に 指形の樣に多有。表に上藥の はづれ有。後にも 藥はづれ有。其廻に圓松のごとくに上藥有。其外藥薄し。下藥に三方よりなだれて底に一處による。其そばに飛藥一ッ有。糸切也。押入たる樣に有。又口付の筋より二三分下に骨高にかど有。惣高二寸三分半。口の高サ三分半。口の廣一寸一分半。但内九分。

二月十一日晝
一嵯菴不時會。宗湛。風爐に今日移候とて。釜其外道具如常。

十三日朝
一谷宗宅御會。堺にて。宗湛。平三疊。床に圓悟文字掛らる。手水の間に卷て。爐。釜。自在釣。瀨戸茶椀道具仕入て棗袋に入。釣べ。面桶。引切。

墨跡帋の内竪一尺三寸。橫四尺。字五十五行有。口より十九行目に上に六字候。其次より廿行目字十六候。其上に三四字除候。其次二行又二行ヅヽ書留候。奥四行は三字下て有。

終五十五行目年號月　印の字みへず。一
日有て。其下克勤（十元御イ）

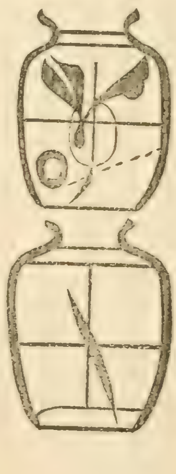
行の字數三十一
二三ヅヽ候。同樣の字數にはなし。三字（宝イ）すれ
候て有。下の中すれ黑して。はけなどにて左
の上に引上候樣に有。上下こび茶。中薄淺
黃。風帶（韻イ）同薄淺黃。露濃淺黃。一文じなし。は
ち軸也。皆ほつけん也。
（二月十三日晝茶會）
一宗及老不時御會。堺にて。宗湛。御茶やにて。
爐。かなつぼ。釜。五德居。井戶茶椀道具仕入
て。中次面桶。土水指。引切。土水指は備前物
也。名くゝり袴とかや。常林壺七斤入候と
也。黑藥にしてうづらめ也。下藥は黃目也。
表の脇の乳の通靑藥有。右にかたぶく。土は
白け黑目にして細也。藥はづれ何も赤し。底
くぼくそばへげたる樣に有。藥はづれの土
三寸四五分。口は上はたかりに高一寸三四
分にろくろ三ッ。上より二ッの間少筋一ッ
有。乳は常也。蓋の內に常林の二字書付有。
覆丹色金襴。牡丹唐草。其花一ッふたの上に
なる樣に候。
（二月十四日朝）
一納や宗薰御會。堺にて。宗湛。平三疊。五尺五
寸床。爐。釜なべ釣もの。共ぶた。自在釣。瀨
戶茶椀道具入て。中次つるべ。床に始より絵
迄虛堂文字掛て。鍋釣物高四寸程。橫幅八
寸。上平くして端に環付有。口の高サ六分。
同橫三寸七分。內三分。口の上外にひきたる
樣也。虛堂墨跡紙の內竪一尺二三寸。橫四尺
四五寸程也。三十一行有。奥の一行に字七ッ
有。一行に十三字ヅヽ有。上下こび茶。中薄
淺黃。風帶（韻イ）も薄淺黃。露白し。一文字なし。は
ち軸也。表具皆北絹也。宗宅の墨蹟の表具と
同じ。露計替也。
（十四日）
一本住坊堺にて被呫。座敷に木履臺に新土器
に油さして。茶の後大壺持出一覽仕候。淸香

也。いくひ藥黑して土器也。覆紺地金襴。紋
は菊（鏡イ）形にから草寶盡し。〆緒紅。房有也。二
重に取て。
（十五日朝）一塗（アイ）や宗勺御會。宗湛。平三疊。五尺床。風爐。
眞釜。釣べ。面桶。引切。瀬戸茶椀に道具仕入
て。棗袋に入。床に予昂墨跡かけて。手水の
間に卷。濃茶過て大壺持出一覽仕候。是紹鷗
より納や宗久に參り候。其より宗瓦に。其よ
りまたぬりやのじをんに三百貫に參候。六
斤大袋七斤も入候と也。墨跡予昂歸去來辭
上候也。
（十七日朝脫歟）一藪內道和堺にて御會。宗湛。おく板に墨跡掛
て。風爐。伊勢天目に道具仕入て。面桶。釣べ。
引切。棗。
二月廿日（十九日イ）一鹽屋宗悅御會。平三疊。五尺床。始に象瀉の
大壺置て。振舞前におろして見せらる。手水
の間に床に水仙花の繪を掛て。土水指天目
に道具仕入て。棗。面桶。引切。爐。釜。五德
居。薄茶の時人形茶椀也。其他道具同じ。象
瀉之壺は七斤（六イ）程也。ろくろ三ッあざやかに
して上に藥漏る也。藥はづれ四寸程にして。
前に薄黃色の下藥五分程故。上藥飴色に黃
黑く有。兩方よりなだれて藥の內にて留る。
土細にして能やけたり。赤黑口也。底に印の
如くに墨の跡有。底に見所有。口傳表にこぶ
大小十四五有。何も藥の內に有。火口有。左
なだれて有口高サ一寸四五分。ろくろ有。口
は下しめて。壺すつくりとして胴長。覆萠黃
金襴。牡丹唐草大紋也。〆緒紅。房左に二重
に取て。水仙花圖に竪二尺七八寸。横一尺一
寸程。花開て二ッ。半開二ッ。莟三ッ。葉七ッ。
上下濃淺黃の金紗。中白地金襴。牡丹から草
大紋也。一文じ風帶（鏡イ）。萠黃金襴小紋から草の
內に寶盡。兩のへり一分ヅヽ。一文じ金襴也。

露紅也。讃は口に二字。其より二字さげて十字ヅヽ二行有。其次一字上て三行有。初一行は十三字有。

（二月十九日朝）一宗及老御會。大坂にて。綿屋紹意。宗湛。床大燈文字掛て。其外道具常也。

（十九日晝）一萬代や宗安御會。大坂にて。宗湛。二疊半。五尺床。四寸爐。釜。自在釣。床に肩衝。四方盃にすへて。手水之間に勝手つるべの所に置て。高麗茶椀に道具仕入て。釣べ。面桶。引切。投頭巾惣の高サ三寸一分。口の高四分。口廣一寸四分。口付の筋大に二ッ有。一ッは肩に依て有。帯は前二方に見へず。後二方あざやか也。へら四ッ有。へらの下右による。底になだれ有。土靑目に黒目也。底へげ土也。藥飴色にして上藥黄白様なるもの有。藥一方の肩より雲のごく掛。一方も薄く掛る。藥の下の土骨高にして。星の如くに白き土みゆる。茶椀口四寸五六分。茶置ほぐメ日四ッ。蓋中にやヽきれ有。端そとそる也。呑口薄く。式はほそくし。藥赤黒目なるの様に候。内に巾すれ半分より深し。又ぬめ〳〵として其下の藥和也。白ひゞき有。五百貫に代付候也。



（二月廿日朝）一天滿樵斎御會。大坂にて。宗湛。四疊敷。四寸爐。小き丸釜。五德すへ。六尺床。手水の間に一軸かけて。瀬戸茶椀に道具仕入て。棗袋に入。釣べ。面桶。引切。花繪白也。扇面などの圖宗佐のと同。別に付有也。

（十二日朝）一宗凡御會。堺にて。宗湛。二疊半。風爐。霰釜。瀬戸茶椀に道具仕入て。棗。面桶。釣べ。引切。

一御城大坂にて。亥二月廿五日朝。山里の御會の事。山岡對馬殿宗湛兩人。此仁は前關白樣に被召仕候人也。近年は御きげんを損ふて。松平家康樣を憑て（憑候てイ）江戸に牢人候。今度さつ摩の島津殿就御成敗。御馬被向候に依て。御前に被召出候。今朝廿五日朝御茶可被遣候由に候。仰出候て俄に御案内によりふたふたとして汗を流し參上候也。宗湛は七ッ時分より參上候て。はね木戸の本に居扣候へば。宗及老御出候て。是に對馬殿俄に被成。御意候て御出候程に。相待て同前に入候へと被仰候處。彼方ふた〳〵として被參。同心仕て山里にはいり候也。此露路はね木戸迄も水を打立（置候イ）有之事。宗湛不參前より也。

御座敷二疊。床四尺五寸。かべ暦張。左の角に爐有。其脇に道籠有。姥口の釜。床に晩鐘の一軸掛。兩人はいり候へば。頓て關白樣被成御出。能みよやと御立ながら御諚有。頓て御振舞。前御通小性年五ッ六ッ（年十五六イ）程也。手水の間に一軸を卷せられ。新田肩衝袋ぬかせて。四方盆にすへて有。尼子天目に道具仕入て。水指。芋頭。眞蓋。水覆。瓶蓋。ふた置。太鼓胴き候て關白樣御勝手より御出候てをれが手前にて呑よとの御諚にて。御手前にて御茶點候に。平釜。姥口。みや玉所持也。羽厚く。其上にひやう廻りに有二重也。是は宗易の指南也。釜の紋水に櫻花也。蓋は唐金也。つまみ鬼の伏て左に向て有。環付鬼面也。晩鐘初に記之。尼子天目別に記。芋頭高サ八寸。土荒く赤目。口七寸。瓶のふた土白して赤目に上黑目也。肩衝別に記。

〔玄三月二日朝光飯〕
一油屋宗悅御會。堺にて。宗云。宗湛。四疊半。六尺床。肩衝袋に入。四方盆にすへて長板に風爐。眞手桶置合て。天目臺高麗茶椀に道具入て。面桶。ふた置。肩衝をば手水の間にみおりの疊に直し點候。薄茶の時は中次其外道具同前。肩衝惣高サ二寸七八分。口廣一寸三分。同高三分肩の廣サ四分にして。一文じにつきて外中より肩の方丸目に有。肩一様に藥濃して。黒内に飴色有。帶腰より下りて有。藥外はげ高なる様也。表の如くなる藥脇になだれ二ッ有。面になだれ一ッ下迄掛て露先なし。底はたゝきにて作かけ也。土の色青目有。左の先にも藥のけい有。表の藥脇に上下に飛びたる上藥あり。帶より下すそほそし。蓋の中つくは上平也。袋は白地小紋金襴。緒つかり紅也。天目口四寸三分。但九目有。式は三目有。但一寸四分骨高して。胴に縖なし。土黒之内赤目底に朱の跡有。下藥白黄目に。其上に黒上藥掛。藥の上にさびの如なる星の様に細々有。中より下一段黒し。

三月四日晩
一水落宗惠に。宗及老。道和御咄に日暮て。宗湛を呼に御捻參候程に。戌刻に參候へば。座中くらくくとして御咄候。宗湛内より燈臺持出し。初より床に備前花入に花生て有之。夜更て宗及花を乞。出生らる。花出來候て各褒美候也。



一同夜宗惠所より罷歸候に。皆の衆宗凡に同心有て參候。座敷に始より宗awaitなど有て被

咄候とみゆる。及老は各はいり候よりそとおそく跡より御入候。被仰には。以前よりはじむまじ。先障子なき程にとて、椽の口に二枚障子皆立らる。

〔三月五日朝堺にて晩敵〕一なや了鳥御會。宗湛。平三疊。六尺床。眞かまち。床に虚堂墨跡掛て。風爐。眞釜。環付しやう耳。土水指。備前人形。茶椀に道具入て。中次。面桶。引切。手水の間に墨蹟を卷て一行字數四十五字。印一有。上下茶色。中白地金紗。一文じ風體。濃淺黃金紗。紋は花鳥也。露濃淺黃。

〔六日晝〕一春世御會。大坂。宗湛。宗傳。深二疊。風爐引出て。大釜。つるべ。棗。燒茶椀道具入て良久咄候てより。亭主出て被申候には。間の處にて日暮候つる程に。早御歸候へと有。傳被申候には。其分に能立べく候へども。間の處に適參候程に。薄く一ぷくたべてと有ければ。何とさらば已前の殘り候茶を申そうとて。内に入て持出申たり。新き花瓶薄色を闕扇に入て持出申たり共。御斟酌あらん程に。吾々生申さうと花を御生候。此筒も只今繕參候。尤も始て生候との雜談也。振舞別に記。

〔三月八日朝〕一闕本道拙御會。堺。宗凡。宗湛。平三疊。七寸七分爐。新釜。自在釣。すゝん茶椀に道具仕入て。中次。土水指。面桶。引切。炭斗。ひやうたん。此面桶は紹鷗御拵候とて見せられ候。高二寸五分。口五寸三分。厚一分半。へげ目有。

〔九日晩敵〕一宗及老御會。堺。本住坊。宗湛。御茶や也。平三疊。竹椽に圓座二ッ有。床軸脇に大燈國師かな書の墨跡掛て。中にはほそ口に欵冬生て盆にすへて。風爐小板の間九目半。古丸釜。下水の間に床の内取て土の水指。瀨戸茶

椀に道具仕入て、嚢袋に入て面桶。引切。炭斗。瓢たん。細口高サ六寸五分程。口一寸貳分。高サ二分。盆光明朱也。口一尺二三寸にしてよう入也。かな書墨跡。紙の内竪一尺三寸。横一尺七寸程。上下茶。中と風帯とは薄淺黄。一文じ紺地。上下茶。はち軸木也。字數十二行。手水鉢はつるべ柄杓伏て。

一（三月十日）宗及老堺にて。御同道の衆宗惠。宗納。宗湛被召連。方々遊山候。其歸に及老御振舞申さふとて。三人被呼入候。四疊半。四寸爐。霰釜。五徳居。はいりてより一炭。咄有て薄茶一服ヅヽめさるヽかと被仰て。内より眞手桶持出置。其後に面桶。引切。瀬戸椀道具入て。棗葭棚より取候也。

一（十一日朝）道叱老御會。隆仙。道設。宗湛。床に始より終迄定家の色紙掛て。長板に風爐。たつま釜。水指。芋頭。置合て。高麗椀に道具仕入て。棗土水覆ふた置。五とく。色紙上下白地。大紋牡丹唐草。中紺大紋唐草。一文じ風帶。（體缺）萠黄金地金襴。露淺黄。象牙切軸也。たつま口五寸四五分。惣高一尺。高四寸五分程。環唐金。芋頭。高六寸八分。口七寸三分。上様のよりは土そと黑目也。

一（十四日朝脱歟）宗甫御會。道設。鳴尾屋宗叱。宗湛。四疊半。六尺床。風爐。平釜。蒲團形。葭棚床虛堂墨跡掛て。軸脇に飯胴袋に入。四方盆にすへて土水指。平日也。眞ふた。瀬戸茶椀に道具入て。土水覆。墨跡は帋の內竪一尺三寸程。横二尺六七寸。六字ヅヽ四行。又四字一行。夫より一字下て六字ヅヽ二行。又五字一行。又二行。上下茶北絹。中白地金紗。一文じ風體。萠黄金襴。露淺黄。塗はち軸也。

師道明嚴善應

酬石橋過了問

龍湫一花一艸
人皆見是子知
樵〔[illegible]〕獨點頭
源侍者游台鴈
以此春之京〔[illegible]〕定
癸亥春三月
虚堂叟知愚書于
乳峯明覺庵下

知愚

息畊翁

虚堂

此二字も古文也

飯胴口二寸五分程。高サ二寸二分程。底一寸三分程。同高サ一分半程に糸切也。土黒して上赤日に藥宗春のと同じ。なだれ三處に有。



口むつくりと厚して骨高也。袋緞子紋寶藎し。裏茶の北絹也。水桶柄杓伏て。

一（三月十六日）千紹安御會。本住坊。宗湛。二疊半。四尺五寸床。風爐。釜古。床に鶴一聲に花生て薄板にすへて。棗瀬戸茶椀に道具仕入て。釣べ。面桶。引切。金の色青く白け。其内に赤目にもみゆるむら有。小き處黒目也。是紫銅なり。なにとも古くされたるかねの様にて候也。

一（十七日朝）道叱老御會。宗久。宗及。宗湛。長板に風爐。釜。水指。芋頭。中次。人形。茶椀に道具仕入て土覆。塗茶杓。

一〔廿日[illegible]〕なや宗久御會。大坂にて。宗湛。平三疊。六尺床。風爐。りんてつ釜。はいりてより一軸持出て。勝手にて繪のひもを解て床に被懸候。終迄有。手水の間に數の臺に天目すへて。床の前の疊に被置候。軸腕の方也。銅の水指。中次は道籠より被取出。又道籠の内に茶椀置て。茶筌茶巾被入て金の水覆。ふた置唐

金。薄茶の時はすあん茶碗也。外にかきめ有。棗其外道具同前。

波繪の事。紙の內立一尺三寸。横三尺七寸程。奥に波の所六七寸程切て又繼々とみゆる也。印なし。上下白地金襴小紋也。中萠黄金襴。牡丹唐草大紋也。一文じ風體。紅の金襴。雲形の菱之內に鳥有。露赤し。象牙切軸也。數の臺はほうづきの高サ二寸二分。下廣サ二寸四歩〔分歟〕。但五目半。縁二寸八分。但六目半。上の覆輪五處にえくぼ有。縁のふくりんに六七ッ程付。ふくりんの所に五六分疵有。漆置候。式のふくりんの所にも其如に繕有。五梅は筆にてちよろ〳〵付候様に有。其向に一文じ有。常の朱也。手水鉢松の木の舟也。丸く切て。薄茶過て書院に御同心候て御酒など有。其先に茶や有。事々敷體也。

亥三月廿三日。堺罷立てならの數寄見として參候。道叱老御一通方々に。

〔三月廿二日朝〕一四聖坊御會。宗湛。四疊半。床に始より芙蓉の繪掛て。風爐に眞霰釜。黒色也。眞手桶。金水覆。肩衝袋に入。四方盆にすへて蛟龍臺。天目伊勢。高麗に道具仕入て。葭棚より取出候。肩衝は惣高二寸七分。口は一寸六分。同高サ四分。肩二寸六分。土赤黒目に口付の筋一ッ。帶なし。藥飴色にしてはだへさら〳〵とみゆる。なだれはなくして黄目に薄くなだれ成所を前に被置候。臺は黒し。龍數六ッ。ほうづきに二ッ。縁の上に二ッ。同下に二ッ。高臺付は雲形計有。但皆雲形の內に龍有。二ッ向合也。內一ッそばむきに。一ッは眞向に逢也。皆龍毎は額にしはのごとくに彫目有。此様也。覆輪の間一分半程ヅヽ置て彫有。繪の事筆舜擧也。紙の內竪二尺七寸。横一尺程。芙蓉の花白し。一ッは表。一ッは裏。其處

に葉有。下にかけ葉一ッ有。以上葉十六枚有。上下紺地金紗。中白金紗。一文字風體。丹色小紋金襴。露紫也。象牙切軸。炭斗は籠。火筋鐵也。此人年七十程にみゆる。白髪細形の上下也。

〔三月廿七日[illegible]〕一塗や源三郎御會。奈良にて。宗湛。四疊半。六尺床に白鷺の繪始終掛て。風爐に眞釜。竹紋有。眞手桶。金の水覆。臺天目。肩衝は葭棚より取出て點らる。肩衝惣高二寸七分。口は一寸四分。同高三分半。〔口徑〕明二寸四分。なだれ三ッ。藥はげ高也。土白少青目に底へげ土也。蓋はつく丸。繪の事。絹の內竪三尺四五寸。橫一尺六七寸。白鷺二ッ。蓮葉二ッ。印三ッ有。內二ッは左の方に上下に有。同下之印そと大也。右の上に一ッ。皆一寸三分程の印也。上（緞イ）下茶。中風帶小紋濃淺黃の緞子。露紫也。一文じなし。はち軸（くはりん）。筆者徐照也。又は月山と云人も有如何。

〔三月廿七日[illegible]〕一四聖坊の內宗有御會。宗湛。平三疊。床六尺。始より北澗墨跡掛て終迄。風爐釜切合て。天目に道具仕入て。釣べ。棗。面桶。引切。薄茶の後大壺請出てみる。北澗墨蹟は紙の內竪一尺。橫一尺六寸。字數三十一有。但四字ヅヽ七行。奥に一行は七字。其奥に下りて字有。らい紙は口も奥も一寸五分程ヅヽ也。印なし。右の會過ぎて奈良を立て愛宕に差上也。

（三月廿八日）一福壽院愛宕山にて　先廣間にて御振舞有て。數寄やに呼被入。深三疊。四寸爐。釜自在釣。燒茶椀に道具仕入て。つるべ。面桶。引切。道籠より肩衝取出。肩衝は高二寸九分。肩二寸五分。口は廣一寸六分。高サ三分半。藥はづれ五六分。土赤く黒目に。藥下たゝき有。なだれなし。口と首掛て一寸程。色漆にて繕

有。うけ口也。蓋は利休好候也。

一同三月廿八日愛宕を下り。四月十五日上松浦唐津村に下着し。四月十八日唐津村を立。關白様御見廻にさつまを指て罷下候。同廿四日。肥後國八代熊川の端にて。石田治部殿に逢てあとを尋。廿六日みなまたにて御陳に參候。石田治少より馬人迄被仰付。廿七日に卯刻より御供仕。さつまいづみに着候。廿八日いづみの御城にて御目見へ仕。石田治少御取合也。御進物は白鳥高麗胡桃十袋也。御前に被召出。金の天目にて御茶被下候。臺子御茶湯にて。小性衆はのきて胴坊衆の手前也。則治少御取合にて御暇給て。其日より唐津に罷歸候。

一丁亥六月三日。薩州より還御。筑前國箱崎社内に關白様御陳候。同七日の朝唐津より參上仕。箱崎に着。八日御目見へ仕候也。宗及老御取合也。同十日關白様博多の跡可有御覽とて。社頭の前よりふすたと申南蠻船に召され。博多に御着候。御舟に乘候者はばてる兩人。宗湛。其外小性衆也。博多の濱にて御進物を上げ申候へば。其内銀子一枚計被召上候。其外の物は博多に被下候也。同十一日より博多町の指圖を書付られて。十二日よりの町割也。博多奉行瀧川三郎兵衛殿。長束大藏殿。山崎志摩殿。小西攝津守殿此五人。下奉行三十人。

一（六月十三日朝）宗及老に御會。數寄や臺やの體有。關白様。藥院。休夢此兩人御相伴。押板に定家の色紙掛て。前に鑰無に花生て。新釜あられ。水指瀬戸水覆。棒の先天目臺なし。引切。此かやぶき座敷の體御褒美也。御跡見三松様。宗湛。

一（十四日晝脱歟）利休老御會。宗湛。宗室。宗仁。深三疊。かや

ぶき。壁も青色。一新釜かな風爐小板なり。疊の上に其まゝ置て。上座の柱。高麗筒にしの花生て。やくもの花も。御茶入備前。肩衝を白地金襴の袋に入。緒つかり紅なり。利休被仰候には。此茶入は布袋と申候。袋計さほどにと有也。燒茶椀に折ため茶巾仕入て。釣べ。面桶。引切入て。此茶は橋立の壺の追風と被仰候。

一〈同日利休茶湯ノ後〉紹安御會。宗湛。宗仁。二疊半。青松葉にて壁をしとみ上候。笘ぶき也。先足打に紙を敷て椎茸と串蚫とにしめて。楊枝二ッ置て。其後御茶。金風爐。新釜。燒茶椀に道具仕入て。棗。釣べ。面桶。引切。

一〈亥六月十九日朝〉關白樣に御會事。箱崎御陣所。宗湛。宗室。御數寄や三疊。椽なし。二枚障子に上にあげ窓六尺のをし板有。手水鉢有。木をくりたる也。古して苔むす。柄杓は上に伏て。箱松の下廻りて御數寄やの前に古竹にて腰垣有。そこにす戶のはねきど有。夜のほの〳〵明に。箱松の通はね木戶迄參候也。內より關白樣障子御明被成て。ざれて這入やと御聲高に御諚也。いまだくらくして座敷の內も見え分らず。上座の押板には文字掛て。其前に機尻にゐのこ草を生て薄板に居る。風爐。御釜。責紐。手水の間に水指。芋頭。內より御出被成て。茶をのもうかと御諚候て。しぎ肩衝を四方盆にすへ。井戶茶椀に御道具入て。水覆。瓶蓋。引切にて御手前也。御茶過て後。此肩衝を御手に持せられて。兩人の者を御側に召れ。見よ此藥有故しぎと云ぞと御諚也。文字は煎點と二字計有。牧溪也。しぎ肩衝は形に委書。

一〈六月廿五日朝箱崎アカハダニテ〉關白樣を御會仕事。宗湛陳やにて也。二疊半。青かやぶきに壁くどりの戶迄青かや也。床

一疊。かまち大竹抔。御相伴長岡玄旨様也。風爐古眞釜。床の前風爐の先に數臺置て。伊勢天目。薪。文琳。水指古くして。御茶を點申也。床にはにしきのしとね敷て。關白様被成御座。御膳御あがり候。御茶の時は下におりさせられてきこしめさるゝ也。

御衣裳。上に御白綾御小袖。桐の御紋。御肩絹袴。唐茶繝形。御脇指は木瓜。鍔黒作。緣は金也。次之間に宗及。休夢。其外宗及御知音大名衆三人御座候て。御膳など御肝煎候也。先九鬼大隅殿。山崎志摩殿。今一人御名忘候。關白様御前御通は休夢也。茶湯仕掛。其外道具などは宗及御肝煎也。小性の如く忝と申候事也。

一六月廿六日朝。御客人之事。箱崎にて御會仕候。石田治部少輔殿。施藥院。九鬼大隅守殿。

右兩種掛御日候。

一大谷刑部 少輔殿は 其前上様 御機嫌 惡に依て。香椎付に御隱れ候を。石田治部少輔殿我等を御頼候により。舟にて香椎より姪濱に送申候て。御宿をば興德寺に置申也。依御大望道具。姪濱に持參仕候て。刑部少輔に掛御目候也。

一關白様宗及所に御會。御相伴三松様。休夢。鹽やの座敷也。押板にも古林の 墨跡掛て手水の間に細口に 花生て。風爐。霰釜。新。釣べ。瀬戸茶碗に道具入て。棗。面桶。引切。右御茶過て又關白様花を御生候也。座中の衆どつと感ぜられ候。其後に向の休夢陳やにて御袴などぬがせられて。又被成御出て。一折せんかと御諚にて 御發句。鹽がまのはまべ涼しきまどのまへ。上様御發句。立よるかげのしげる松竹。宗及。關の戸を明て。下忘候。上様此後付合に。たてならべたる門のに

ぎはひ。休夢。博多町幾千代までやつのるらん。上様。此御句博多の者に聞せ申さいでと各御褒美候へば。上様御機嫌能也。

一天正十五年丁亥十月一日。於北野被成大茶湯候之間。宗湛可罷登之由被成御朱印候。宗及老御取次にて飛脚來候事。九月十七日九州よりは只宗湛一人にて候間(候程にイ)。急度可參上之趣。御状參候に付罷登り。其節博多屋敷草をけづり。漸かりやを掛候頃にて。難罷上候へども。任貴命。則廿二日。(天教日也。)博多を罷立。十月四日に大阪迄着。天氣無之儘船中に逗留不及是非。同廿八日に上京聚樂に着。其日大津より還御。午刻聚樂宗及の表にて關白様に御目見へ。宗及御取合也。御諚には。かはゐや遲く上りたる哉。頓て茶を呑ませうぞよと被成御意候。忝と申上候也。

十月九日朝(八日晩イ)
一石田治部少輔殿御會。聚樂にて。其朝俄に上様御用被仰付候程に。食を宗及所にてくいて茶を此方にて給候へとて。白鳥一ッ被送候程に。茶を御城にて被下。宗及御供仕候て參上候也。一疊半。床有。四寸爐。(青漆。)霰釜。床定家色紙掛て。前に遲櫻の大壺置て。內より釣瓶持出て置。瀨戸茶椀に道具入て肩衝袋に入。土水覆。引切。ふし有。肩衝は惣高二寸四分程に胴はる。口一寸三分。同高サ口分程。藥黑くなだれ一ッ有。又脇に一ッ。表の右の方に飛藥一ッ有。土は黑目に底へげ土也。是火に逢候と御申候。碎てみゆる。袋白地金襴小紋。緒つり紅也。

一十月十日朝山崎志摩殿。十日晝長束新三郎殿。十日晩。池田伊與殿。
右聚樂にて御振舞。

(十一日朝脫歟)
一休夢御會。此數寄付落候。

(十二日脫歟)
一關白様へ御禮に罷出事。聚樂にて。長岡玄旨

公に其朝御成にて。御歸路の節御目見仕候。忝御諚共に候。又頓て一服可被下と被仰出候。其より御供仕罷歸候。玄旨公。利休坊と御留被成候間。數寄やに這入申候。又古田左助殿共に三人參候也。平三疊。四寸爐。眞緣眞釜。五德居。床に虛堂文字掛て有。釣べ。瀨戶茶碗に道具仕入て。棗。面桶。土ふた置。今燒也。井戶茶碗は底すりたる也。外に土につら有。色は烏子の薄く淺黄也。少ふかわり有。墨跡は墦の內竪一尺二三寸。横二尺一二寸。六字ヅヽ五行。四字一行。其外一字下て四行。奥に角印一ッ。以上九行。字數。

崙桂初飄好問
、、、、、、
、、、、、、　表具こひ茶。中白地金襴。一文じ風體金紗。露白。軸クワリン。
、、、、、、
、、、、、、
、、、、、、
、、、、、、
、、、、、、
（貫）（詩イ）庭見社甲寅秋
虛堂叟知愚書

一（亥十月十四日晝）關白様御會之事。聚樂にて。宗及。宗湛。二疊數。床なし。くゞり口しがの大壺を置て。關白様御勝手の口に御膝立られ御座候。兩人はかしこまつて土地より拜見仕候也。扱內の如立られ。御手づから御取被遊候。其後兩人御數寄やに這入候。上様勝手の口より御諚には。食をくわふよと仰られ候。忝候と申上候也。爐。角に有。御釜。責紐。五德居。今紀州様に有。道籠。土水さし。新田肩衝四方盆にすへて。道籠より御取出され。水覆瓶ふた。天目臺道具仕入て。御手前にて。御茶。責紐。御釜口の廣サ三寸程。高サ九分。をり口九目也。環付

肩に有。釜横八寸程はだへあれたり。新田肩衝口付の筋二ッ。帶一ッ。藥飴色になだれ黒し。ふたつくの本に高筋一ッ有。つくの上平し。塗天目覆輪なく深し。藥黒し。土黒くあれたり。式細し。志賀之御壺四斤餘入候と也。上藥黒し。底迄なだれ掛。下藥は青目にしてそこ二寸程。上に横こぶ二ッ兩方に有。肩の通に壺すり有。其外細きこぶ多し。

一輝元樣御會。(天正十六年三月廿三日朝脫歟) 箱崎御陣にて。廣間にて御振舞。御茶は數寄や也。平三疊。風爐。御釜。古。つるべ。棗。高麗茶椀に道具仕入て。而補。引切。茶(常イ)道は宗是也。道三。宗湛。宗室。宗是。武士衆六人。御釜。(蒲團形二重釜也。)おり口環付鬼面。此釜は天王寺や宗及より屋形樣へ被進候と也。この前に信長樣宗及に被遣。夫より屋形樣へ參候也。環一對金襴の袋に入。出して一覽仕候。

一古溪和尙御會。(十月十二日朝脫歟) 大同庵にて。舜藏主。宗湛。上方より茶壺到來候て御口切也。

天正十七年己丑正月二日。

一二日晝。隆景樣名島にて御振舞。九人。

一五日晝。浦宗勝同所御振舞。十一人。

隆景樣。二木殿。杉宇(寧イ)左。井上又右。鵜新右。桂宮内。手島市助。二木四郎兵。宗湛。壽才。

一八日晝。二木隆安名島に而御振舞。隆景樣。宗勝。其外九人。

一十日朝。井上又右御振舞。同所に而。右人數。

一十一日朝。鵜新右同斷。

一十二日朝。桂宮内同斷。

一十七日朝手島市助同斷。

一(丑正月十三日朝)立花統虎。同統益御兩人。宗湛數寄仕候。

一(廿一日脫歟)加藤主計殿御一人。

一同廿二日晝。正林御家來板坂入道。宗湛數寄仕候。

己丑二月十日朝 一秀包様。桂民部太夫御兩人。宗湛數寄仕候。
（十四日朝脫歟）一隆景様。毛利壹岐守殿御兩人同斷。
三月二日朝 一淺野彈正殿御一人同斷。
五月四日朝 一小笠原殿御一人同斷。
九日晝 一筑紫殿。同島十右。其外三人同斷。
廿八日朝 一宗傳一人。堺より下向に依て也。同斷。
（閏五月廿二日晩歟）一小西攝州。松浦道可。同鎮信三人同斷。
同晩 一古川宗隱（遍イ）一人同斷。
十四日晝 一宗傳。松林。宗慶同斷。
同朝 一毛利壹岐守殿一人同斷。
（廿八日朝脫歟）一堺鳴尾屋宗叱同斷。
丑十二月十九日朝 一毛利壹岐守殿御會。名島にて。隆景様。宗湛兩人かりやの時也。粟四郎兵二疊敷に仕候て有之候を。壹岐守殿御借候て。隆景様へ御茶進ぜられ候。風爐。角釜。瀨戶茶椀に道具入て。つるべ。面桶。引切。振舞の時壹岐守殿御通也。茶堂同前。御茶の後に。次之座敷にて御咄候時に。久留米侍從秀包內より御出候。其後又振舞有。大酒。
丑八月二日朝 一古溪和尙御會。大同庵にて。此數寄付落。
同九月一日朝 一隆景様井上又右兩人。宗湛數寄。
九月五日朝 一三浦兵庫。屋形様御若衆。鵜新右。宗湛數寄。
（天正十八年正月二日朝歟）一隆景様名島にて御振舞。宗勝。杉宇左。二木隆安。井上又右。鵜新右。桂宮內。手島市助。三吉殿。增田七內。粟四郎兵。宗湛。壽才。右人數段々振舞 付有之不書。土水指備前物也。博多にて御堀出候に依て。名を博多水指と被仰之由。御茶抔 打ため。手水鉢は丸石也。古して苔むす。蓋に八十へぎをして。上に柄抔すみ違に伏て。
（亥十月十四日[illegible]）上様御衣裳かゞむめの御小袖。萌黄御肩衣袴。右之御數寄や御俄に被仰付三日に出來候。然ば十五日朝御茶可被下御意には候へども 座敷出來候程に十四日の晝に可被成

候と也。左候へば其朝大徳寺古溪和尚に參。明朝は上様より御茶被下候間居候處に。宗及より急に呼に小性衆被遣之。依てふたゝたと罷歸候也。則宿にてこしらへて御城に參上候也。御前にて宗及被仰には。此御座敷は三日に出來申候。御座敷始に宗湛に。御茶被下候事忝御事に候と〔[illegible]〕御取合候也。是を筑紫にて人〳〵に語聞と申候へとも。御前にて仰られ候也。此の松原御茶やあり。胴坊衆一人居て。長開爐に一方にはくと進たる鑵子をすへ。一方には田樂豆腐二ッ立て。又古板の上にわらにて圓座を作り。其上にかき二ッ盛て三處に有。又其脇より壁にものぐさ二足有。是を錢五文づゝに賣られ候と有。宗及宗湛兩人二足を十文に買て。又茶やの前の圓座を二ッとも兩人にて取て。くどりの本に持寄。たびをぬぎて其上において這入也。筑紫の者に一手してみせよとの御諚也。

〔[illegible]〕一休夢老御會。宗湛。二疊半。眞爐。眞釜。古。環唐金。つるべ。杉。瀨戸茶碗に道具仕入て。中次。面桶。引切。

濃茶過て内より肩衝を四方盆にすへて。中に葉茶を三分一程入て袋に入。座敷にて袋ぬかせて疊の上に置候。肩衝高サ三寸。口一寸三分。高三分程。口付の筋一ッ。藥下に有。〔[illegible]〕茶過て大壺網に入。次の間にて取のけ。壺計持出一覧仕候也。眞釜。其蓋。瀨戸茶椀に道具入て。囊袋に入。白地金襴緒紅也。つるべ。面桶。引切。佐保姫大壺七斤餘入と也。肩撫膕張。乳一ッ次付候かとみゆる。土赤目にそと白けたり。土の心はよし。上藥は薄くしらりと青目也。一方に三寸程の壺すり有。此廻りに藥たまる。一方に四五寸程へつさりと押入たる様に有。其下になだれ十四五有。二ッ

底迄掛。其下に横こぶ有。底にさほ姫と相阿の判有。又左の方にさほひめと。其上に能阿の判有。口高一寸程に。但下しむる。ろくろ三ッ。段々に候。遠山有。常の壺に形替也。蓋の内にさほひめと有。是は宗及書付候と也。宇治森所にて也。さほひめは春迄一段茶能とて申との論〔と欤〕。又茶の色春霞のやうに白けて立様成して申す説有。是二一説有也。

〔亥十二月廿三日戌刻〕一宗及老御會。大坂。平三疊。這入てくらくして暫暗候て。内より灯臺持出られ置候。床に文琳袋に入。四方盆にすへて。又箱なしに菊生て。疊の上に爐。はごいた釜。自在釣。環唐金。井戸茶碗に道具仕入て。つるべ。水覆。棒の先。引切。炭斗　瓢たん。はごいた釜古く紋なし長して目有。

一天正十六年戊子。肥後國に一揆起り。上方より諸勢御下りの時。小早川殿數寄被成。大名衆御茶進ぜられ候事。箱崎座主坊屋數の內に御園に被成。其次に二疊半の數寄や。壁は杉の青葉にて。しどめ風爐にての御茶湯也。三月朔日より始りて。尤隆景。宗湛數寄御座候へども。茶器付無之候。依て寫す也。

〔戊子三月七日朝〕一輝元樣元政樣御兩人。跡見萬年和尙樣。宗湛所數寄也。

〔天正十五丁亥十月廿一日晝〕一關白樣に宗及御同道候て參上仕候。其朝さつま伊集院玄旨公御茶進ぜられ。其跡見也。山里の御數寄やにまわり候。二疊敷床のすみに爐。御釜。五とく居。先四疊敷に這入て。爐。ほうろく。釜。自在つり。其後二疊敷の數寄やに參り候へば。食は何方にてくひ候かと御尋被成候。宗及にてはや被下候と申上候。扨は茶計呑せふぞと御諚有て。勝手より長とろりに薄板添て御持出被成。床に置せらる。博多の者に花を入させうぞと被仰候。

いれずば筑紫にはやるまいぞと御諚候。そばより宗及いろ／＼御斷被仰上候へば。さらば入て見せんぞとて。勝手よりあじろの蓙取に。小車の花入て。胴坊衆持て被出候。一本さつと御入候。兩人拜見仕也。それより御咄有て。茶を呑ふかと被仰。勝手より瓶のふたを持出られ。御手前にて御茶。其以後休夢よび出され。こい茶有。其以後上樣一服きこしめされ。又湯をめされて候也。始より御機嫌よく御雜談被仰掛れなんどして。二疊敷に上樣。宗及。宗湛。終日罷居候。其間に數の臺持參候かと被仰出候に付。宗及御取合。被仰やうにて翌日廿二日に此臺進上仕候。則一軸に判金相添被下候也。

同廿二日
一この村や宗二御會。宗湛。書院にて。板風爐小棚有。

寅九月八日
一宗及老御會。聚樂にて。立石紹鱗(傑イ)。宗湛。此數寄の飾付落候。

九月十日晝
一利休老御會。聚樂にて。琉(瑤イ)首座。宗湛。書院にて。上段の押板に天神の名號掛て。其前に曲輪の卓臺の上に青磁の角香爐置。卓臺の下に古銅の花生に小車一本入て。脇の方に臺子の茶湯也。金風爐。霰釜。金水指に柄杓立。かね竹引切。上に黑茶碗ばかり置。中に臺子の先の壁に春甫の文字掛て。先振舞有。其後に茶の時に内より棗袋に入持出て。前に置點ぜらる。茶の後又内より瀨戸茶椀持出て。臺子の上の黑茶椀に取替へらるゝ也。黑きに茶點候事。上樣御きらひ候程に此外に仕候と。墨跡は横に大字七有。口に吹毛と書出し。上に丸印。下に角印。上下丹色の紙。一文じ金襴。名號はひだり字に。右をまぜて有。筆者はさつま年少書と也。

十月十一日朝
一紹二御會。上京。宗湛。一疊半。上座の角脇に

竹筒に小車を生て。風爐。二重釜。共ぶた。釣棚に棗茶椀置て。炭斗 瓢簞。

一(同十一日晝)輝元樣御振舞。聚樂にて。金書院。隆景樣。安國寺。毛利壹岐守殿。黒田官兵衞殿。宗湛。

一(廿日朝飯)玉甫和尚に御會。大德寺にて。古溪和尚。宗湛。三疊敷。風爐。釜。はらふり。土水指。黒茶椀に道具仕入。棗袋に入。面桶。引切。床に春甫の文字掛て手水の間に取候也。

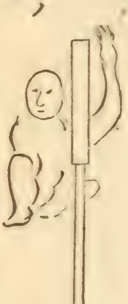
一(廿日晝飯)利休老御會。聚樂にて。宗湛。二疊敷。爐。雲龍釜。環付。松かさ。環唐金。共ぶた。折入。中次。黒茶椀道具入。土水指。瀨戸水覆(下イ)。引切。手水の間に床に橋立の壺置て。紺の網に入。緒から結。濃茶過て大壺を網をのけて。床の前に投ころばして見せらるゝ也。水指唐也。口しめて青藥掛。外に立にかき目有。炭斗瓢簞。羽竹皮にて包て。桑柄火筯。道籠には中次袋に入。茶椀と眞中に置合て。下に水指。脇に水覆(下イ)。柄杓はさきにあをのけて。後に壁にかゝる。

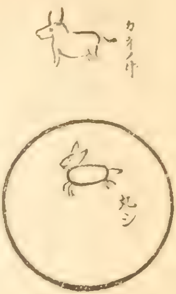
御雜談の事。

肩衝の上に茶杓置候事。光の仕出候 投頭巾より始也。同緒を結候事投頭巾に始也。此仕付何も珠光の仕出候也。書院にだし。つくゑに長サ一尺一二寸巾に細きもんあり。



カウライ筆也

カネノ人形




一〔十月廿二日晝〕休于御會。大坂にて。宗凡。宗湛。二疊敷。爐。かき合の綠。丸釜。五德すへ。床に土の花生菊入て。薄板にすへて。手水の間に取。信樂水さし。眞蓋。面桶。引切。柄杓は立て有。薄茶の時は中次内より持出、道籠前に置。丸釜は羽落也。古也。

一〔廿六日晝〕宗及老御會。大坂にて。宗湛。先外のくゞり入て。土地には數寄やより奥兩所に閑所の前に三處に燈籠あり。二疊敷。初より灯臺に火をともして有。四寸の爐。姥口釜。床に文琳袋に入。盆にすへて。手水の間に袋ぬかせて。落して黑椀に道具仕入て。土の水指。面桶。引切。道籠の内棚には茶碗眞中に。下に水指。眞中にふた置は。先に柄杓は前に掛て始末。炭斗曲ものかき合にぬりて。

一〔廿八日晝〕布や德左御會。大坂にて。安國寺。宗湛。三疊敷。爐。新釜。つるべ。瀨戸茶椀に道具入て。面桶。引切。

一宗及老大坂にて新門跡を御會有。跡見に宗湛。霜月十日朝。床に墨跡掛て前に大壺置て。手水の間に卷て壺計置て。但下に落し投ころばして見せられ申候。文琳をば勝手に置て也。此茶の時也。釜は手取也。

天正十九年卯正月より大名衆ふと振舞事。名嶋にて有。是は寫不申。

〔二月六日〕天正二十年壬辰二月宗湛數寄仕候。

一增田右衛門殿。石田治部少輔殿。大谷刑部殿。

十一日朝 一備前宰相殿。御相伴三人。

三月十五日晩 一松平家康樣。御相伴三人。

十七日晝 一大和大納言樣。御相伴六人。

廿日晩 一羽柴筑前殿。御相伴二人。

廿二日晝 一越後宰相殿。直江山城兩人。

廿三日晩 一武衞之御舍弟。御相伴三人。

四月十四日晩 一宗凡。休夢兩人。

是蒹葭堂寫本也

文化八年六月以森川氏之本書寫校合了

「右神屋宗湛筆記以東京帝國大學文科大學史料編纂掛藏本宗湛日記校合」

續群書類從卷第五百六十七

飲食部五

長闇堂記及家傳遺誡

我等今入日の山にのぞめり。又あまの子の行末を思ふ事も[なき脱歟]親の身なれど。そのはらからの世も。我いにしへを思ふに。いかでくらぶの山高く身をも納しよすがなれば。我はとたる山人ともいはめ。老の寐覺のよなよな。こしかたのよの中を思ふに。我好し茶湯かたの品々うつりかはる有様。そのうつりものとなれる始。年若き者きゝのまゝなれば。傳へまち〳〵にして。心もさだかならねば。終にとの本をうしなふ習ひ。子のため口おしく侍れば。そのあたりに[く歟]覺し事を書とどめて家へ殘して。我身のかろふしけるをもしらしめば。若き世におごりをしりぞくる道なりなんと。あだなる筆をついやすのみ。あら〳〵人のためならず。實もらすべからずといふ。昔[衍歟]春日野といへる山邊に。數ならぬ宮司のすしなりし。我年十といひし比。春日下遷宮ありて元服せし其年。天正八年の比かとよ。織田信長公天下をきりしたがへ給ひ。同十年京都本能寺を御宿所としてましませし時。明智日向守謀反のいきどを

り有て。丹波龜山の城より夜打にし奉り。天下又みだれがはしき所に。羽柴秀吉公 其比中國退治し給ひけるが。日向守山崎表に出陣せし所。秀吉公一戰に打勝給ひ。明智夜まぎれに近江路さして 落けるが。天罰にやありけん。一揆原に殺され畢。秀吉公御上洛有て。天下治りおだやかにして。御身大坂城にまし／＼て後。御心をやすめ。御慰の品々御茶湯をも有。其時千宗易。天王寺や宗及。ならや宗久。三人は堺より召出され 御領地被下。尊御茶湯なれば。下々に至る迄此道たしなみあへり。南北に宗及弟子六十人計。宗易弟子三十人程有しを。秀吉公 御師匠に召れしより。世の中 皆宗易かゝりの茶湯とはなれる物なり。宗易花美をにくまれしゆゑ。かうひの いましめのため。狂歌よみひろめ畢。

ゑりかへて墨染布子色のわた帶たび扇あたらしくせよ

振廻はごまめの汁にゑびなます亭主給仕をすればすむ也

それよりして 世に鼠色とてもてはやせり。又あや織のもめん。鼠色とろめんとて唐より多くわたれり。其比 小紫といふ茶入金子百枚なりしを。秀吉公より筒井順慶に所持あるべきよしにて求給ひし。此代金今の世にしては纔なれども。其比順慶御身上にて尤出かね侍るよし取沙汰有。かくの如き世の寒踈にして。此道を重んじ たしなむ事思ひやるべし。

一世に筒井の 井土茶碗と云しは。南都の水門に有し善玄と云わびの持し 高麗なるを。順慶御所望ありて。やがて秀吉公へ あがり侍しなり。それをいかゞして 御前にてわられ

し。御氣色もそこねし時。長闇空齋有合給ひて狂歌に。

つゝいつゝ五ッにわれし井土茶碗咎をばたれにおひにけらしな

と申上られければ。事外の出來歌とて。御機嫌則直らせ給ふとぞ。

一我等十二三の比。親のあたり近き佗數寄のものありて。客のたびには我をやとひて。給仕通ひになし侍りしより。此道面白くなり。我其儘みしりけるにや。かれこれしかたどもをしへ。其四帖半にて茶立ならはせり。

一宗易袋やに宗哲と云者このかみ主水ちなみ有て。それ賴て宗易へ一禮有て。柄杓茶筌など主水に申付られけるを。我浦山しく思ひて。いかゞして道しる人に近づき侍らんと思ひしより。かの宗哲とちなみ。袋を縫ならひなん。茶湯かたの婢ともなりなんと思ひたりしより。たゆみなく細工にいさみあへり。されど我身は庶子にさへ生れて。家と云ものなし。親ありといへど。世のしわざを忘れて。一心不亂に神佛を信仰して。もとより當社日參の外。伊勢參宮三十餘度。山上天の川四十五度。此仕方によりて子共有付を忘れて侍り。我よしや家なき身なりせば。春日の屋に成こもりも松笠ひろひ。茶湯の道におひては。志をうしなふ事あらじと。しばしもたゆむかたなし。我母は巢川氏與西といふ人の娘たるが。是も大信心の人にて。年三十の比とうとき僧を信じ。心經。三十頌。提婆品。觀音經授受し。朝夕看經精進のゆるしうけとめ。二月堂自參して。壯年より五辛。蓮根。竹子。松茸等の物を斷じ。六十巳後魚鳥をたちて。二人の子のためをいのるのみと申されし。二親壽ありて父八十五。母は八

十三迄恙なく有し也。我幼少より志の故にか有けん。年十五の時にしてさびたる小家求侍り。其年當國は木下美濃守拜領有て。筒井殿は伊賀へ國替仕給ふ也。

一我茶湯を仕初し時を思ふに。北野の大茶湯の年に當れり。大茶湯を考ふれば。天正十三年十月朔日也。秀吉公八月二日に高札を五幾七道に打せられ給ひて。都鄙の茶湯に志せるもの。松原に於てかこふべしとの上意なりし。南都より東大寺。興福寺。禰宜。町方合三十六人。幼年なれども此道すけるまゝ見物のため同道して覺候事をしるせり。北野聖廟前はよし垣ありて。東口より西口へ出入あり。上樣御かこひ四ッ。禮堂の隅を品々にかこはせ。秀吉公。宗易。宗及。宗見。四人の御手前也。各御道具の記ろくあり。大和大納言殿は西門筋西側にして。郡山武家衆。

其次南都寺社町方也。松原中のかこひ思ひ〳〵品々有。中にも覺えて侍りしは。引退小松原有所に。美濃の國の一人芝より草ふきあげ。内二帖敷。間中四方砂まき。一帖敷のこる所瓦にてふち□□爐に釜かけ。通ひ口の内に主人居て。垣に柄杓かけ。瓶子のふた茶碗に丸服部を入て。それにこがしを用意せり。扨晦日に御觸有て。朔日曉天より御社の東口にてくじ取。五人組にして。四ッ御座敷にて御茶被下候。御兩の口へすぐに出立ごとくにして。數百人の御數寄朝九過に相濟なり。扨御膳過。其前より御出有て。一所も不殘御覽ぜし時。かの美濃の國の人。其名は一作。松葉をかこひの脇にてふすべ。其烟立上りしが。秀吉公右より御數のよしにて一服と御意あれば。そのこがしを上奉る。御機嫌殊勝にして。御手に持せられ候白の扇

を拜領して。今日一の冥加とぞいひし。又經堂の東の方。京衆の末にあたりて。へちくわんと云し者。一間半の大傘を朱ねりにし。柄を七尺計にして二尺程間を刀〔置歟〕き。よしがきにてかこひし。照日にかの朱傘かゞやきわたり人の目を驚せり。是も一入興に入らせ給ひて。則諸役御免を下され。八ッ者には皆々御暇被下。それより二條數分散して。その日に又本の松原となせり。内々には諸方の名物をも召上らるべきとの取沙汰あれども。そのさたにも不及。十日計の茶湯仕べきともいへども。其日計なれば多く見物せし人もなかりし。我此見物より心いさみ出。何やうにも成べき物と思ひて。我親の裏に僅四疊敷の小屋有しをしつらひ。二疊敷かこひ。一疊の勝手と一疊をね所と定。聊させる方には棚もつり。ひるは袷をのぼせ置て。今おもへば晴の家をもよひしなり。志だにたるまねば。いさみを主としては人に恥る事無物也。今の世におもへば。たれ有て此しかたならん。たゞ志つよからぬ故にいさみなくして。人をも身をも恥る故。道に至る者なしと見えし。

一數寄の初よりいづれの世に起るといふ事をしらず。道しれる人々に尋れどもさだかならず。おもんみるに。凡東山殿より起ると見えたり。東山殿といふは慈照院殿の御事也。將軍の時は義政公と申奉り。位を御子にゆづり給ひて。東山に隱居し給ひて。年久御慰にて樂しみ給ふと見えたり。珠光も此時の人とみえし。文明年中にあたれり。一休和尚。東の野州。此年號にあまたの名人出世ある時といふ也。東山殿御物好たくみにして。天下の名物多くあつまれるよし也。つくも

がみと云茄子の茶入も此公の御物也。御掛物あまた御用意有て。七百幅有と傳へたり。能藝相三人の童明。懸物の外題今にあり。三幅一對大小のあるに。天井廻りふちの下に溝を通じ。折釘有しやうに仕込と。大小の書軸の用に重て從ひしと也。珠光は南都の人にして。眉間寺のあたりにやしき有といへり。所をさだかにしる人なし。

一路次に飛石するとの始を云に。東山殿の御時。洛外の千本に道貞といふ侘すきの者ありて。其名譽たるによりて。東山殿御感有て御鷹野の歸るさに道貞の庵へ御尋有し時。御脚わらんづなりければ。童明に雜用を敷せて御通り有しを學びて。其後石を置せると也。かのものゝ路次に植し桂を取て。其後より道貞桂と人名付しと也。

一古市播磨。是も珠光の弟子にして萬の名人と傳し也。尺八の上手にして。謠は曲舞三番の外にてしり給はねども。京より南になき謠のよし云傳也。殘雪といふ名石あり。是は古市播州南都かいつかの町夜やのおもひの石たりしを見立給ひて。かやうに重寶となりて。價千貫の物たりし。崟淵の石と云也。

一つるべの水さし。めんつうの水こぼし。青竹のふた置。紹鷗或時風呂あがりにて其あがりやにて數寄をせられし時。初て此作意あるとなん。紹鷗は今の二月和尚の祖父なり。宗化云。紹鷗の子息一段の結構人なりし。我も若き時參會してしる人なりし。

一宗易は秀吉公の御師にして。しかも其才智にすぐれたる〔千家〕人なれば。天下をしなべて此下知を學ばんと云事なし。後は利休居士と申せし。去程に昔の名物ども皆をしてみすたり。茶湯あらたまり。昔のいろりは八寸六

寸を四寸に直し。ふち一寸一歩。上段一寸一歩。上段の内六寸六歩にして。釜は九寸の谷と定められし。此時有馬の湯本に有しあみた堂の釜を求て。其釜の移し世にあみだと號してはやれり。くさり自然もすたり。皆五德すへと成り。茶具。今焼茶碗。茶入に棗大中小ありて。清甫と云ぬし在り。當地林小路與澤といふぬしは。中次の薄茶入天下一たり。墨跡に古溪和尚。則利休の參徒なり。懸物はゞひろきは富貴なりとて。一尺二三寸有。大文字も二行とあれば。見下して又見上あしゝとて。一行物はやれり。表具も光かゞやくはとうときとて。皆紙表具或はほけんと云ものにてする也。萬事手輕くさびたるを本とせらるゝ也。世間のこひに心をつけ。又道具もたても遍く茶湯なるべき事をしめして。道におもむかせんためとも云なり。其外輩茶つぼの口おゝひ。昔はすみきらずして口の緒も長きを。利休角〳〵口の緒みじかくせり。又茶入袋の緒も長緒にして。唐草のくれなひ成しを。今あるごとく緒みじかくうちとめ。一ツにねり。くり糸に迄られし也。茶杓當と云は是が利休始ての作也。その時は桐にて角丸めん地さびなしにうはぬり黒く。木目みるやうにして。ふたのおゝひを薄濃の紙にして。書付を片時に棗の茶の具とありし也。

一大昔八寸六寸の圍爐裏の時は。火箸にて灰を上段のうは口迄かきあげ。炭置て後火ばしかた〳〵を以て。くるり〳〵と灰廻したるよし也。此數寄には逢たる事なし。其後けさう灰を小きかはらけしてかけたる時は我もせる也。後にはあはび貝をしやくしのごくすりて。それを用ひし也。扨金匙子柄火箸

は利休始らるゝ也。さても昔は白鳥の一ッ羽なりしを。鶴の三枚羽とせらるゝ也。又古風の眞の釜はすきすへ也。小板も大小ありて。大風爐には小板を用ひ。小風爐には大板をせし也。其後利休より板一間に定れる也。

一山の上の宗二は。いろに火床と云て。切炭にて井筒のごく組て。中三寸計にして。それら灰仕かけ。扨炭置流入一段能物也。某も久しく是を用たる也。客無時は釜つりさげ一日一夜あるもの也。其時分には火切れざるを手がらとせしなり。かの山の上の宗二さつまやとも云し。堺にての上手にて物をもしり。人にあさるゝ事なき人なり。いかにしてもつらくせ悪く口あらきものにて。人のにくみしもの也。小田原御陣の時。秀吉公にさへ御耳にあたる事申て。その罪に耳鼻そがせ給ひし。其子道七とて故相國樣の茶道して御奉公申せし。又父の傳をうけて。短氣の口わる物にて。上樣御風爐の内遊されし跡を見て。つきかへつ仕直しけるによりて。御改易にあひ。牢人して藤堂和泉守殿伊豫在國の時下國し。其中ひらきなどして。我もあり合て一冬はなせし也。

一昔のひさくはから二寸也。柄を三分利休きられし也。茶筅も二分短くせらるゝ也。昔茶杓をりためかはなり。いろ／＼有し。上ひ昔は無りし也。

一堺薮内宗や口切に利休を約束せし前夜。利休一禮に參られし時。宗や立出。尤忝し。御入有て一服可參由申せば。利休明朝の口切なれば。先入まじき由申さるれば。明日は明日の御事也。先は入有べしとて請じ入釜を立。いろ／＼の物語にて思の外はなししみ

て。はや晩になる程に。利休さらば釜仕改候へとて。朝の數寄迄居つゞけて。口切心よく有しとなり。名譽のたけたるわび數寄也。人を何とも思はざる物と見えたり。隱居の後子にかゝりて有しに。ある友達の佗すき來て。物語してしみぬれば。其人亭主に。隙入事なくば晩迄かたらんといへば。宗や一段也といふ程に。かの客一僕よびて。晩炊もち來れといひやれり。其後をもやより宗やに晩飡よく候と云來れば。是に持來れといひて。只獨のみくひけり。此仕方は此の時代の風俗にして。めづらしからぬ事ならんか。よのつねの者は待合てもくふべきに。其時宜も無事は宗や心つよく大膽の仕方也。されば道わびすきは心つよく大たんにあらねば。道具萬不如意なる程に。世にある人とまじはれる心をとりせられて。肩身つまりてをのづから茶湯にうとむ物なりと云ぞ。只肝の覺悟第一ならん。

一我十九歳の時。伊賀衆馳走にて參來。二疊敷の數寄やありて三年茶湯せり。其時名古屋御陣有て。其人の妻子彼家に置し。みによりても人の思うらめしく思ひしより。廿三の年屋敷自分として求て造作し。三間四面にして一帖半のかこひに勝手三疊。六疊敷に床書院付などせし。則堺よりも細工によび來て。廳小西如清目かけられ。南北の數寄に逢し。さればよおもひよりし細工に。道の媒とはなれりと。心いさみわたれり。同廿五六年當地に上樣御馬廻り衆十人計有し。内五六人とは毎日御知音衆にて參會有し。其内へ我もよび出され。日々御遊び。茶事御好炭御尋にて慰給し。其地其衆皆眞壺持なれば。壺無き方のこひ茶難成仕合にて。我も多

年程は薄茶にて各へ口切せし也。るすんよりいまだつぼ來らざる以前なれば。我つぼなき事を無念におもひ。兼て才覺し。廿七の年屑ぬきの壺ありて。くろうして求しかば。各の衆奇特と感じ給ひて。各合力として集子廿日ヅヽ給はれり。事の外の御恩に思ひし。今思へば其衆五千三千石にして。千石の下はなき知行取なれども。其時代は左程の事も世になかりし比也。八木一石十匁せし時にてあり。其ころ祐春といひて道しれる數寄者ありて細々行來せしに。我同年吉藏と云し者も同祐春へ出入せし。吉藏は親富。祐春稱美せしを。我氣にあたりて無念〳〵と思ひしまゝ。十年の内に我も作事し壺求めし程に。うれしく思ひて。扨祐春よび茶湯して云ことは。御邊內々吉藏事稱美し給ふを無念に持せしに。今は吉藏すきをもせず打捨候ひし。とかく物は心掛ヶ次第〳〵覺候といへば。此春行あたり。氣味よかりし也。吉藏は則外料の樣がへ俗名なり。

一大坂にて秀吉公を桑山法印御成し給ひし時。道庵來て臺子を飾り置れしを。さつまや道七御見廻申て彼臺子を見て。何者かかくしらぬ事仕たると散々にいひて。則道七飾直せし也。道庵次の間に在て其聲をも聞。歷々餘の人も聞て。いかにも（一本無）咲止に有しに。道庵さかぬ體にもてなせる仕方。松倉豐州其座に有しとて御物語あり。其時は道七飾尤のやうに思ひし間。其仕方も知給ふべき人にひそかに尋申に。道七は古風の仕方。利休道庵は當世樣也。臺子は道の秘傳なれば。道庵人にしらせじとのたくみ。尤心深き事也とぞ。右構のよしなり。

一右構は道具よりていたせし由。床の付やう可有事ぞ。昔は心かたきゆへ。其子細に及ざると見えたり。

一堺二條半本住坊といひし人は。利休に執心深き弟子たるが。堺にてちなみ。後同道して當地へ參。方々の數寄にともなひし。久やと云弟子を召れ春日下向の日。我方にて振舞せし時。をかや道可。きすや壽閑といふもの。本住見廻に來り呼入しまで。いまだ知人にあらず。本住坊といひつるは。扨もなら衆は佗の見立なく。いまだ權太輔をも御知なき事よといはれしより兩人赤面し。其年より口切始によびしなり。松や源三郎茶湯の時。持成の長盆所望あれば。彫物の手箱すへて出せしを見終りて後。本住坊床へ上られ侍りし。かへるさ我に物語して○數星の直し樣。松や定てふしん有べし。されども此の子細ありてと申置れしを。源三へ申とゞけ候へば。源三郎若年の比四聖坊にて臺子になる盆御かざり見申候。さはきは見不申候。圓明院にては臺子所望ありて。本住坊臺天目を立られし也。其後東大寺觀音院此事を聞て色々尋らるれども。我四五年かけて床の内の事勤侍れども。若者の入事にあらずとて。終にしらせ給はぬ事心にかゝりし故。臺子の事をも覺侍らずとてかたらざる也。

一利休へ本住坊日々參らるゝ。毎日すきやにて茶を立給へるにより。毎日かやうになされては。何とも參がたきよし申さるれば。利休答へに。その事關東や筑紫より望來る人は。いかやうにても如斯とおもひ又はしらぬ人多し。其方などのやうに心易人に土居のつかれては。某すきならずと申されしと語侍りし。道に長ぜる心もちかくのごとく

なるべし。
一利休物語に。いづくにてもあれ。茶湯に客炭花床へ道具などあぐる程の者は。其品三人ならではなきものと也。又尋行ても茶の呑れし方は二所あり。一には菓子振舞などよき亭主なり。今一ッにはひだるさ忘るゝ程のたけた〔ママ〕亭主也。其外は行ぬ能なりとぞ。
一四疊半を三疊敷となし。客の間遠きとて。又二疊半にして。下の一こまひの疊をくつかめ床とて。ふちなしとせり。其比は十度の數寄は三度會七度夜ばなしなれば。床の內にも居てくつろぎとなれり。
東寺林に善識とて法師ありしは。利休を招待して繩はり賴し座敷今にありしなり。
一利休二疊敷に圍爐を初はすみ切にせしを。さびしきとて客の方へ入かへけれども。又客三人の下一人より亭主の後三人惡きとて。中へ入かへて。扨先の一こまいらぬ物とて切捨。一疊臺目と云なり侍り。先の窓も此時はじまれり。床敷の高。左軒桁より地敷井の間五尺二三寸也。地敷井も昔は七分なりしを九歩にせらるゝ也。疊のへりも同事也。やね裏は三寸かうばい。棟軒外こまひは十二通り也。扨かまぼこ土とて二尺計。棟は土貫くり石ひしと相付候也。昔はわら草履にて有しを。利休より雪踏となれり。足袋も昔ははかざりしなり。
一古田織部殿の時代に。金森出雲殿尤目利の功者たり。堺にて肩付を金子三枚に取給ひて飛彈へ下國し。火口の藥むさきとてやき直し給へると。上方にて取沙汰褒貶有し座に。藪內紹智とてふるき目利の功者、名譽の惡心者有しが。各さやうに被仰候へども。出雲殿は燒口の有て買給ふか。各は其日有ま

じきと云てのゝしれり。さやうの事たれの前ともなく高言のみいへるによりて。人深くにくみし也。其後數切とて客十六人計。大名衆京町方御振廻有し。此內へ紹智にくみしよりはねて。紹智講しと名付し也。其衆來春東山にて。各茶箱もちく□へ給ひし時。雲州御茶にて。茶箱にかの燒給ひし茶入に。ふた袋きれいにして取出し給へば。皆々赤茶入なれば類もなくてわびしきとぞ。夫よりして茶葬當に唐物茶入世にはやれる也。其燒樣尋侍しに。炭をしめして。をくすりの殘したき所を灰の中に押込て。まはりに火を置やき給ふよし也。其茶入伊東掃部殿へ出し給ひしが。後に海へ取落し給ふ也。

一及第臺子と云は。唐の朝廷に及第に試らるゝ學士の出入する門の額に似たるとて。此臺子を及第と名付し也。唐より渡りて天王寺や宗及有しを。宗凡の世となりて。織部殿かり寫し給ひて後。世に流布せし也。棚の內のかざりと云も。天王寺やの外にはしらずと也。其棚にての茶に一度逢候也。江月和尙に有也。書棚に似たる物也。溜ぬりにして下ゲ達の戸袋あり。

一昔は四疊半えん差にして六疊四疊土間屋根の下有。手水それにすはりぬけの石鉢すへ。又木をもほり桶をもすへし也。織部殿の時。長大石の五十人百入して持石鉢となれり。長鉢は南都橋本町の川橋ぎぼうし有けるを。中坊源吾殿へ某申請て持候也。遠江守殿取給ひて。長二尺八寸に切。六地藏の路次にすへ給ひしを。後台德院樣へ上りて江戸へ下りし也。又石燈籠の柱に佛の有し石。京はて町天神の車よけに堀込有しを某もらひ置し。是も遠州御取有てすへ給ひて。後台德院

様へ上りし也。夫より其世に佛はりつけはやりし也。

一金森出雲殿伏見より宇治へ行給ひて。方々の數寄に逢。夫より當地へ渡りても。あなたこなたの茶湯ありし。其時右馬尉と云し禰宜茶入持しを一覽有度事にて。我等も相伴して茶湯有し。出雲殿此數寄にあへるとの給ふ程に。當地にては下手と申と答へければ。何はしらず都にも稀なる掃除のよき事はとの給ひし也。侘數寄などは氣の付所を專用とする物也。侘の手に及べきは掃除なり。名人は人によりほめ所有と見えたり。其右馬殿茶入は當代尾張大納言様にありて小肩付也。又出雲殿手階町にて天目の朱の臺を買給ひての給へるは。臺の黒ぬりは唐物見分がたき物なれば。朱臺夫にてよきぞと也。尤なること也。

一藤堂和泉殿伏見にて數寄に出雲殿。津田長州。高林寺御呼有て。茶過權太輔是に居申との給へば。罷出咄候へとて座敷へ出けり。床に寄木肩付方盆にすはり有。拐炭出て雲州御直し有ての給へるは。御茶入今一ッ有之由承候とあれば。御目に掛可申とて尊立候が。立様に床の茶入其まゝ取て御入有て。又瀨戸肩付の茶入持て御出有て御茶立し也。又床へ雲州御上あり。右の茶入をよく取入給へる作意。誠に冥加の至り也。

一古田織部殿御取立の道や方へ遠州殿を數寄に請じける。供に我も行て茶湯にあへるに。かへさに扨も見事成數寄者にてこそ候つれと申せば。一段不出來成しかたと答給ふ程に。何か御氣にいらぬ事の候しと申せば。其事有。炭ををく時。前なる大炭へ火よく廻りし。けがの様にわられ。火氣見事に出して炭

を置ると、道やに似合ざる也。惡しくはくるしからぬ事よ。てかしたく思へる心は初心の仕かた也と。

一遠江殿伏見にて口切。織部殿 明朝御出の前日に。相伴衆桑山伊賀殿。覺甫。道や三人御見廻に六地藏へ參られし。明日出申。釜かけ有しを。其衆仕掛樣氣にいらずして。釜すへ御直しあり。織部殿氣に入申間敷とあれば。先此まゝみせ申て。後惡くば直し可申とて。明朝織部殿右三人を相伴として座敷入し給ひし時。伊賀殿 釜のかゝり樣よく御入候かと尋給へば。織部殿 此釜此外居樣有まじきと答給ふにて。右の衆相違し給ひてより。遠州には手を置給へるしかた也。其釜森右近殿所望有て參らせられし。

一去方に佗の茶湯者有て。遠州御供に參可有。式の茶湯したると申せば。尤可有式の 茶湯なりしか。夫にては佗の心なし。佗は佗の心を持たでは茶湯は 出來ざる物なり。〔佗歟〕〇の仕方。引さひの重を不取入して。其儘可置事也。佗に似合て茶數少き程に喰切し時。取てもちひん爲の覺悟也。酒間なべにて出し。湯を湯桶にて出せり。是も押かへし 間鍋よく洗て。湯をつぎ出さばよからんとの給へり。佗は萬 事に其心なくては有べからず。よの常の茶湯にほこる人は。かやうの 心持むねにおちがたき物也。

一一手野雁と云鳥 の羽箒世にはやりし。其始は遠州殿備中下國の時。野雁を打給ひて。其羽を箒につかひ給ひしより起れり。又柄杓柄のふとく成し事も遠州 初給へり。又出ふろの足二ッ先へ よせ給ふ事も。脇日より能ようにと好給へり。今の世卓 大小さまく有。是を遠州好出給へり。昔志野が香問し棚

など見給ひて。尙しほらしきやうに成なり。
一粟田口の道善と云道心者の侘數寄有。手取鍋一ッを持て。常はこなかけみそをして。其上を前なる川にてあらひ。茶の湯をわかし數寄せし者也。京へ鉢に出るにも戶を堅めず。心のたけきもの也。又三井寺の麓に侘數寄の道法と云者あり。信樂の壺の六斤計も入を負て。宇治へ茶時分には行て茶もらひ。歸て數寄せしもの也。大津衆かたられしは。京より茶のみにくる人あればのぞきみて。肩衣十德なき物には出あはぬ由申されし。某ふと思より行みれば。先以其寺見事にしてさびげなく。戶口は錠きびしくおろせり。只其仕方何もしらぬ作りものと見え。與さめかへりし也。
一高畠禰宜に宗次掃部とて二人の數寄せし者あり。宗次と云は有力にして物たしなみ深く。鶴白鳥にても奈良中にきれし時も此者には持居たり。妻子うるさしとてもたず。獨ずみに家居きれいにして。うらに茶やし。朝夕も自身用意之結構して自ら食して。かまどの灰を風爐の內のどくにして微塵を拂ひ。社參に出し行莊也。又掃部といへるは實の侘にして。掃除もさのみ右のしかたにはあらず。然を此者をばよにきれい禰宜と呼。宗次とをば手をもつけず。宗次腹立てきれいには誰にも負まじきをと思へり。されど世には心をとりて形をとらず。掃部と云者は實のわびにして侘の樂しみ。一錢のたくわへ望なきにより奇麗の名を取れり。宗次は家居きれいなれども。有力にして獨房主の仕方に鶴白鳥の用意すべて恰好せず。この故に稱せられざる也。あるものしり此事を聞て申されしは。唐土にては掃部ごき者

をば賢人と稱する也。學者修行の功至りて此位に登る事かたきもの也。捕部は自然に其位に生れ付たる也。儒釋道の三教此位をのぞみて其心をみがき求るの教也。萬の道のおきて。心の上をときて形の上にあらず。形の正しくするとは。其心へひかせんとの仕方也。茶湯の道しらずといへども。至りし上は皆心の所作の吟味なるべし。此行やうをしらぬ人の。只茶湯は茶道方炭花の細工手きゝ上手なれば。數寄者の名これより外の義なきとのみ思ひて。朝夕其仕方をからさんとする人あらん。夫は此道形を取て心を捨たる行やうなれば。茶道奉公などの望にはよからんか。茶湯者とはいづくを云べきぞ。但世間茶事する人。十に八九は形くみの行樣なれば。其つれの目に下手上手のせんさく。譽らるゝ程うらめしき物ならんやと語申されし。誠に一道に達せし者は。いづれも同じ事と見えたり。かやうの心有人にあはれ茶道語度おもへる也。

一四疊半の置合。三疊敷の置合の外。利休より一疊大目の置合始れり。

一遠江殿若年の時。當地にて方々の數寄に逢給ひし中に。西福院數寄出來たるとの給ひし。尤仕候由申けるはさにはあらず。唐物茶入小き尻張袋にいれずして濃茶立。其後薄茶にも其茶入持出立られし仕方。茶入秘藏にてなき心持のよきと又薄茶のみ上ゝと。二所に面白き義ありとの給へ。若き時、れども心の付やう常の人にはあらざる仕方也。

一伏見六地藏。遠江殿屋敷の花畠に。某が圍をして茶事せし比。松平下總殿數寄に遠州へ御出の事あり。其歸るさに間宮三郎右衞門御茶申度よし下總殿へ望給へども。御用有

て御同心なし。間宮殿も相伴に遠江殿へ御出あり。茶湯過て下總殿さらば權太輔數寄に御あひ有べしとて。則間宮殿遠州御出あり。間宮殿腹立にして。曾我の舞に。是も君の御恩とや。和殿がうでに叶まじと云を。拍子取高聲に舞給へり。事の外よき相〔[illegible]〕撲思ひ出給へりとおか〔しか歟〕たりし。其後大坂遠州御屋敷の邊にさびたる家こしらへ。菓子の數寄出せり。間宮殿。御用見主馬殿。約束違へ。遠州の家老の數寄に進て。後兩人御出あれども某不申入也。客も亭主も心掛むづかしき物也。右樣の所を侘すきは吟味する事也。京唐物や道玄。道閑。了雲。是も時分おそく來りし故。こがしにてながしおとせり。又其後伏見の御屋敷のむかひ木工家の內をかこひ。遠江殿數寄かへりの衆に茶の湯を出せり。一條樣。黑田右衞門佐殿。松平下總殿。同越中殿。其外京衆合て百五十人計正月初より取かゝり。七十五日の內にすませり。

一數寄をたしなまんは。ふだん茶獨たてまじきもの也。本客の時かの自由思はず出てみぐるしき也。惣別茶の湯に手上手浦山しからぬ物也。手くら品玉取をみる心地せり。又功者もうとましきもの也。あぶらしみしたるくむさけあり。只浦山しきは日利の人。作意ある人。是數寄の根本たるべし。

一我庭前七尺の堂の起は。東大寺大佛再建の聖俊柔上人の影堂を中井大和守改かへられし。その古き堂とて面白き物なれば。去人に申請て前栽の中に移つくろひて茶所に用たり。堂のうちわづかに方七尺。其內に床あり押入あり。水屋有て茶具を取入。床に花掛をして。押入床を持佛堂にかまへて。阿彌陀の木佛を安置し。客に茶湯出せども せまき

事なし。鴨長明は維摩の方丈を學て隱居り。人に交らざるを樂しみ。只一筋にみだをねがへり。我堂は方丈にたらずといへど。餘多の人を入て茶湯せしなれば。淨名居士の獅子の座には叶へりとぞ思ふ。何ぞ長明を求んや。但彌陀の木佛は幸に俊乘の古堂なれば似合〔ク歟〕しき思て安置すといへども。我更に彌陀を賴んとにはあらず。俊乘は法然の弟子たりといへば。上人の禮義をなせるのみなり。

江月和尙江戶にましませし時。此堂いとなみしまゝ。便につき御文奉りし次に此事をのべて。此あみだへ狂哥に。

せまけれど相住するぞあみだ佛後の世たのみをくと思ふな

といひしを書付て送りし御返事に。やさしくも詩歌を以て答給へり。

觀音は同座とこそは傳しに相住居するみだはめづらし

蠢大三千七尺堂。堂中同座佛無量。

自由一箇自然樂。今作西方古道場。

然に小遠江殿或時爰にましませしに。此事を語額一ッ書て給はり候へと申せば。打咲給ひ。さらばとて長闇堂二字を書付給へり。昔の長明いかなる義にて有ぞと問申せば。昔の長明は物しりにして智明らか成故明の文字叶へり。其方は物しらず智くらふして。しかも方丈を好めるによりて。長の文字をとり闇は其心也と笑給へり。去程に七尺の堂をさして長闇堂と名付。長闇子を我表德號となせり。

一我在所野田の里と云は。昔なら七鄕と云し時の一鄕也。此所の十三餘寺の左水尾川にそひて社のましますを。浮雲の宮と申奉るは。

その上神護慶雲の年。常陸の鹿島より分神し給ひて。御詫宣の歌ありと云。

鹿島なるかせきにのりて春日なる三笠の山に浮雲の宮

と有て此所にかゝり居をはしませしによりて也。前なる池の返り橋は雲井の橋と申。奥の石橋さゝやきの橋となん。不潔の身此橋にふるればあやまてるよし。則此社春日の鎮守と申奉る也。此故に春日加持。御供の加持はそのかみより此十三寺の僧おこなひ給ひしより。毎朝早天に詣でおこなはる。鐘樓六ツ時。春日の諸式法。此鐘を以昔はおこなへる作法也。然るを今破壞に及事いたましき哉。此故に社人此鄉に跡をしめしかり。我先祖も此所の住人として數百年をへたり。我世に及て家なくしてかなたこなたと求しと三四度に至れども。地せばくして いかにせんと年月をへし程に。年三十六に至て。今の天下。

東照權現御在世の初。南都へ御奉行給はりて政をほどこし。古を尋新をしり。絶たるをつぎすたれたるを興して。古の聖の御代に立かへりなんとぞ云る。其時に至て此屋敷の地を見せて御奉行より給はる也。昔七鄉の時は里人住て門田も作しにや。古井有てかしこに石ずゑも堀出せり。昔の人の歌に。

水や川流の末のいつの間に野田の早苗も色付にけり

と讀し古歌もあり。其後淺茅が原を只獨いとなみ。からうを忘れてかまへとなし。竹木もうゑ花の種まき。かなたこなたと年をへしより。人の住家とはなせり。今我七十の春秋を重ねて。浮世の外に身をなし。七尺の堂につらねて草菴を營み。野田の山莊と稱し

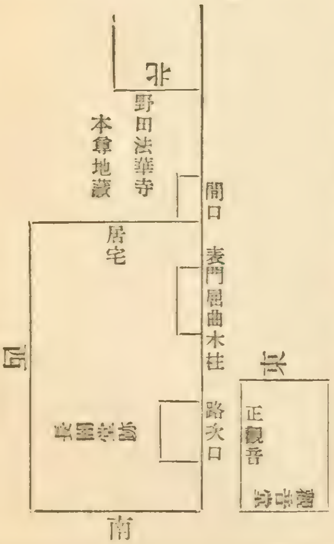
て荷ひ茶を置。かたへに小き屛風をかまへ。我まゝ成色紙色々の中に。今の世 名高き恐多き人々の歌や詩や書て給はりしを押つらねて。老をやしなふよすがとせり。目覺ぬれば花園に行て草きり土かい。あらたわらふに興盡れば。茶やに入て休らひ。花下草を取て立。花をさして一軸にそなへて。我性たゞ有事を不好。在時は薄茶をもたせて。山傳ひより水やの橋を渡り。若草山にかゝりても。みちの錦と讀し給し 昔を思ひ。伊駒が嶽をみやりて。いさむる嶺のあとをしたへり。或時は山を出て猿澤の池に 茶をたづさへ。東大寺のしたしき僧房に入て薔薇の雨に香を聞て。ねぶれば雪嶺童子も夢の中に逢ぬ。遠く境をこえなんとすれば。伏見の館八幡の房。是を山荘の樂となれり。我は春日の神職と生れ。きしかたを思に壽有て今は 事足山住也。是偏に神徳の妙理に叶ひたるとぞ思。若き心のものは。我人力のなす所と云事を知らざりし故に。信心おろそかに成行故。子孫に傳て家をうしなふ習也。願は神徳を忘るゝことなくして。足る事をしるを。我子孫のいましめとす〔る脱歟〕物也。思ふべし〳〵。

維時寛永十七辰之秋。久保權太輔藤原氏
利世長闇子筆之。

此野田長闇堂記家傳遺誡者。〔春日イ〕禰宜久 保權太輔利世老人自筆に記せる 一章にして。墨付紙數廿五枚あり。各其世の 名高き小堀遠州或は松花堂等の書翰反古を裏返して書記せし所。まさに權太輔眞蹟疑なき記錄也。于時此一卷幷長闇堂の銘額 遠州筆。其餘道具品々反古書捨などの 遺物を。權太輔所緣の高畠禰宜何某の許に相傳せしを。去る 享保廿

酉年正月十一日。高品回錄に悉燒失せしと也。尤惜に堪たり。此長闇堂之記一卷。適其災をまぬかれ持傳へけるとなん。今年元文庚申の春。不計此一卷道具や某の手におちて。かれ權太輔の文章を愛せずして。古人の書札を目がけ。過半續目を離して諸所に沽ひさぎけるを。幸なるかな序文の十餘紙を喩々齋樂只子求給ひ。磨滅闕文なるを歎て。他所に分散せし反古を悉に尋乞得て。終に本のごく首尾相調て一卷再興となりし。偏に喩々齋丈人の功にして。遠は權太輔茶道に志深く。遺誡なせる冥加にやあらんといとたふとし。頃日喩々齋懇望して暫時の程恩借し。急速に書寫せしめ侍る。然し本紙は卷物なれども。前後見安からしむ爲に。今省略して繼本に寫替畢ぬ。予茶湯は不好ば其道にうとけれども。年來奈良古人の舊跡編集の望に依て。此權太輔并に傳説尋まほしくて多年需つるに。相知れる人もなく過せしに。今や時至て如斯自筆のつぶさに氏姓迄知れぬる事。予が幸甚とやいはん。依て以て此趣を拙き（本ノマヽ）筆して有のまゝを書つらね侍るものならし。

元文庚申歲仲夏良辰　無名園古道在印



此長闇堂數奇輾轉して。後に角振町岡田寬

舊老人買求て所持有しを。貞享年龍松院公慶上人大佛殿再興之時。寛齋翁の俊乘影堂なりし事を思惟して、公慶上人江七尺堂宇を贈られけるが。勸進所裏の一小陰に當座積置れし所、下部共古物を不知して薪となし火に焚ける。其後公慶上人此事を聞給ひて。千悔めされし也。寛齋翁江に物語せられし也故に。

無名園主（花押）

右長闇堂記無名翁藏本以令傳寫之者也。

于時寛保元辛酉歲仲秋穀旦

種子齋有鷹（花押）

長闇堂記一本借於奈良井上氏藏書而使人寫之。

文化八年六月以浪花森川氏之本書寫了

續群書類從卷第五百六十八

飲食部六

紹鷗袋棚記

ふくろだなの習

一ふくろだなの置やうは。ゆるりのすみより八寸のけて置也。但置所のさきのつかへざる所は八寸よし。さきのつまりたる所は。さきつきつめておくもよし。たなを置たゝみのへりの上一ばいに置也。勝手の方はあまり次第に置也。

一袋棚にて茶立る時。ちや入茶碗をもとりおろし。水指の所に置合。ひしやくをなをし。さて茶わんを茶立る所へなをし。さて茶入をとりてぎんじて。すぐに水指の所へもなをす也。

一ふくろだなの置あはせは。茶入茶わん下のたなにおき。ひしやくは上のたかき棚に置也。ふた置を其わきに置也。いづれもおきやうに習ある事也。

一茶入ばかりを下のたなにも一ッ置事あり。茶たつる時は水こぼしもちて出る也。

一さゝく。ちやきん。ちや入ふた。たなにも置也。おき所は下のだんのたなの右わきに置也。茶入の袋は上の天井の左りの方に置也。

一水さしは初より一の下のだんにおきあはする物也。

一茶入をたなの上に置事習也。かうろを置。客人にかうをも所望し。又ていしゆもかうをいれんため也。其時はすみいれの火ばしをもちいんためにすみいれを置事也。さてかうろをとり入。茶わんにてもちや入にても置かゆる也。かうろはくわいせきの前に置合る也。

一袋棚一の上の所には羽ばうき。かうばこ。かまのくはんなどとり合。何にても二色置べし。但香箱は一ッも置也。れきやうはまん中にも置。又さきへもよせておく時は。羽ばうきはすぐに置事よし。まん中に置時はゆがめて置也。たび〳〵のすき出す時は。ちと又すぐにも置合る也。

一袋棚をおくに。まづさきのつかへたる時は。ゆるりへちかきによつて。水指の前に茶入。ちやせん。茶わん置事ならぬによりて。其時はたなの中のしきりのとをりを。茶入。ちやわん。茶せん置時。しきりをまん中にして。茶入茶碗茶せんを置て。其過てよりおく時も。その所へ茶入茶わんなどを置事也。

一ちやせん茶入を水さしのまん中に置。又茶入を少水さしのまん中をはづして。ゆるりの方へよせても置也。ちやせんはすぐにも置。又少ちや入より引さげてもおく也。これがよき也。

一ふくろ棚にもふくさぎぬをむすび付て置也。むすび所はかつての方はしらより二三寸下にむすび付てよし。たてになるやうに付る事也。

一袋棚を四でう半に置合る事あり。その時は水さしつねの所のひしやくをおく所にふた

おき一ッ。上の段に茶入計ぼんにのせて。水指の方へよせて置也。

一なつめ中つぎに茶いれやうの習あり。ふるき茶は杉なりに入てよし。これは茶わんに入さまに。まん中をわきへさゝくにてはねやりて。まん中をすくふ事也。茶のいきをつよくせんため也。又あたらしきちやは杉なりにてなし。そのまゝ入て。扨すくふ時も其まゝすくふ也。

右ふくろだなの習。すき道の一秘事にて候まゝ。必人に御をしへあるまじく候。

我名をば大黒庵といふなればふくろだなにぞ秘事はこめける

天文十八己酉卯月四日　大黒庵紹鷗判

生嶋助之丞殿

參

紹鷗茶湯百首

其道に至んと思ふ心こそ我身なからの師匠成けり

習つゝ見てこそ知るれ習はすに善悪いふは愚か成けり

心さし深き人にはいく度もあはれみ深く能教へし

我を捨人に物とひ習ふこそ後は上手のもとい成けり

上手にはすくと器用と功積と此三ッ揃ふ人そ能しる

手前をはよはみを忘れ只強くわれと風俗賤くなしそ

手前をは強み計と思ふなよつよきによわく輕

く重かれ
何にても道具扱ふ其時は手とりをかろく置手
おもかれ
手前とは薄茶に有と聞ものを濃茶と思ふ人は
あやまり
濃ちやには手前を捨て一筋にはらの加減とい
きを散すな
濃茶には湯かけんあつくふくは猶淡なき様に
かたまりもなく
兎に角にふくの加減を覚ゆるは濃茶さい〱
立て能しれ
茶を立は茶筌に心能付て茶椀の底へ強くあた
るな
他所にては茶を入て後茶杓にて茶碗のふちを
打ぬもの也
中次を蓋は横手にかけてとれ茶杓はますくお
く物そかし

棗をは蓋は上よりかけてとれ茶杓は角に置も
のそかし
薄茶入蒔繪彫物これあらは順逆おほへたつる
もの也
棗にて濃茶を立はいつとても蓋する時は服紗
にてふけ
肩衝は中次とまた同し事底に指をは懸ぬもの
なり
文琳や茄子や丸壺なつめにも底へ指懸持とこ
そきけ
大海をあしろ（つこイ）ふ時は大指を肩へ懸るは習とそ
きけ
口廣き茶入の茶をは汲と云せはき口をはすく
ふとそ云
井（筒イ）戸茶碗ふかは底よりふきあかれ重て内へ手
は（を入イ）やらぬもの
しめさゝる茶巾出さは湯を少飜し殘てあしろ

ふと聞
我呑しすゝきの跡を戴て呑はあやまりあしら
いと聞
炭置に習計にかゝわりて湯のたきらさる炭は
けしすみ
炭置はたとへ習にそむくとも湯の能たきる炭
は出來也
客になり底取ならはいつとてもいろりの角を
崩し崩すな
客になり炭する時は（ならはイ）いつとても薫物なとは客
たかぬもの
すみ置は五德はさむな十文字ゑんを切すなつ
り合を知
崩たる白炭有は捨置てまたよのすみをおく物
そかし
崩たる其白炭をとり上て又もまた置事はなき
もの

風爐にては炭はなき物見ぬとても見ぬこそ猶
そ見ると知へし
客になり風爐の其内見る時は炭崩なん氣を附
て見よ
墨跡を懸る時にはたくほくを勝手の方へ大方
は引
繪の物を掛る時にはたくほくを印有方へ引と
こそきけ
繪にも又左り右向眞向有若亦床の勝手にもよ
る
飯釜いろり緣より六七分高くすゆるはよしと（習ひとイ）
こそ聞
姥口はいろりふちより六七分下ケてすゆるは
習とそ聞
輪口をは姥口居へにすへてよしされと恰好見
合てせよ
品々の釜によりての名は多し釜の惣名くわん

すとそ云

置合心を付て見るそかし袋の縫め畳目におけ

運手前水指置は横たゝみ二ッに割て眞中に置け

茶入亦茶筌のかた(ロイ)をしるならは跡に殘せる道具目あてよ

何にても道具置付かへる手は戀しき人に別るゝとしれ

よそなとへ花を送らは其花の開き多きはやらぬもの也

釣舟はくさりの間八寸に出ふね入船さては置舟

壺杯を床に飾ん其時は花より先にかさるもの也

夏手前かならす釜に水さすと一筋に云人はあやまり

夏なりと湯のたきらすは蓋メて持あやまりになりは成まし

水指に手桶出さは蓋はまた前の蓋取りさきにかさねよ

釣瓶をは手は竪に置蓋取らはくむかた取て脇へ重ねよ

小板にて茶をたつる時茶巾をは小板のはしに置ものそかし

茶杓にて灑しをたゝく人多しとても服紗てふくものそかし

懸物の釘打ならは大輪より九分下ヶて打釘も九分也

中央に香匙香筋指其時は灰押左り火箸右なり

喚鐘は初め三つに後二つ合て五つ打とこそきけ

茶入より其茶すくはゝ心得て初中後すくへそれか秘事也

茶をふらは手先てふると思ふなよひちにて振

そ夫か秘事也

湯を汲は柄杓に心月の輪のそこねぬやうに心へてくめ

柄杓にて湯を汲時の習には三つの心得有ものそかし

湯を汲て茶碗に入る其時は柄杓は引な我肘をひけ

柄杓にて湯と水と汲其時は汲とおもはし持と思はし

床にまた古今集なと餝なは外に歌書をは餝ぬと聞

外題有物の本なと見る時は功者に外題見せてひらけよ

香合か軌か羽帚かさりなは右羽左羽吟味しておけ

名物の茶碗出たる茶の湯には少心得かわるとそきく

朝會の數寄屋の內は行燈に夜會抔には短檠をおけ

灯火に油をつかは多くつけ客にあかさる心得としれ

〔灯火に陰と陽とのふたつあり朝をは陰に晩は陽なりイ〕

古昔の夜會抔には床にまた懸物花もなきとてそ聞

冬なとは炭もふくへに柄の火筯木地香合に薫物と聞

いにしへは名物抔の香合に直に薫物いれぬとそきく

夏抔は炭もさいろうかな火筯きやうに香合ぬり物としれ

〔夏なとは水次も又かねのもの冬はぬりたるしんの片口〕

蓋おきに三つ足あらは脚貳つ向へなすと心得ておけ

二疊だい三疊代の水指は先九ッ目に置か法なり

茶巾をは長み布幅横はまた縫立七〔五イ〕寸七〔五イ〕寸五分

にも
布巾をは九寸壹尺外に亦八寸九寸にする人も
有
薄板は長み壹尺三寸五分横の廣さは九寸とそ
聞
薄板は床かまちより十七目または十八十九目
もよし
うす板も床の大小扱はまた道具によりて替る
品々
はな入の折釘はまた地敷より三尺三尺貳寸五
分にも
華入に大小あらは見合よかねをはつして打も
法なり
竹釘は皮めを上へ打と聞皮目を下へうつはあ
やまり
三ッ釘は中の釘より兩脇へ七寸三分あい置て
うつ

三幅の繪を懸るには中を掛軸先をかけ次に軸
脇
懸物をかくる時には壁付を一分もあひを置と
こそ聞
繪によりて花に心は多からん風にたてつく艸
はなはなし
花見より歸りの人の（に）茶湯には（せ）花取來る繪も花（めつらしからし花も繪もあけイ）
も桶
不時抔に客の來らは手前をは心はさうにわさ
を愼しめ
兼てより約束しける客ならは心は眞に業はか
ろかれ
右の手を扱ふ時は我心左の方の手のうちにも
て
ひと手前たつる内にも善惡のわかちを知れよ
有無の心を
手前をははやくそへるか扱はまた遲もたるゝ

味をしれ

なまるとは道にて早く又遅く處〳〵にむら有をいふ

小壺にて茶をたつるにはすくふ共汲ともいはしさしぬくと云

盆山を餝し時の懸物に山水抔はさし合としれ

板床に葉茶壷茶入名物を餝ぬものと傳へてそ聞

床にまた籠花入に花生はうす板なとは敷ぬものなり

立花なと寄て拝見する時は三尺有て此方にて見よ

何にても花を拝見する時は扇をぬきて寄て見るもの

目にて見よ耳に觸つゝ香をかきて事をとひつゝ能かてんせよ

稽古とは一より習十をしれ十よりかへるもとのその一

習をは塵芥そと是を知れ書物は反古腰張にせよ

右百四首有

振舞は酢皿屏風に味噌疊亭主機嫌に天氣能酒

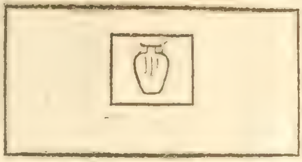
文政十一（つちのへ子）年臘月念六一閲了　忠瑶

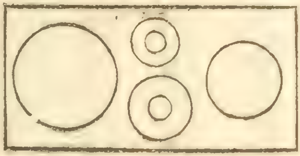
利休臺子かざり様之記

臺子しきじやうの時かざり様の事

一臺子の置様は別書にあり。しきじやうにかざる時は。茶入。茶碗。其外いづれも唐物名物ならではなるまじき事にてあり。かざり様は常のごとくふくろ。水さし。水こぼし。

ひしやく立の置様は。ふろのきめんを臺子のはしらの内のかどの通を一すぢに置也。水指もとつ手のとをりを一通りに置也。ふろと同前也。ひしやく立はふろと水さしとのまん中のさきの方に置。ひしやくをさし





て置也。水こぼしひしやく立の中前に置也。ふた置は水こぼしの中に入て置也。いづれも此ぶんは常にかはる事なし。茶入は盆にのせて臺子の上にまん中に一ツ置也。およそこのゑづのごとし。

一しきじやうの時は。茶せん置とて別にあり。茶せん。茶きん。さゝく。此三色を入て茶たつる時もちていづる也。茶きんを四ツにおりたゝみ。茶せんを其上に置。さゝくはおをのけて置也。

一茶入を盆にのせ。床の右の方へよせ。かざり置事もあり。地しきいより七寸五分。床かまちより盆の間たゝみの目廿二めよし。

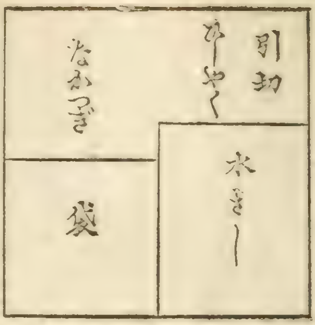
一茶入を棚にかざる事もあり。ちとかべの方へよせて。棚の時は羽ぼうき置そゆる也。

袋棚のかざり様之事

一袋棚に茶わんなどかざる事あり。是は名物の茶碗ならではおかぬさほうにて侍る也。

一袋棚の置様はたゝみの目兩に五めツヽ置。さきは六寸に置。ゆるりよりはすみ八寸ばかりのけて置也。

一置合の大事は床は半。たなはちやうに置事習也。但床に二色置時は棚に一色置也。



一とうごは内に棚あり。棚に茶いれ茶わんをしこみて置。下に水さし。勝手わきにひしやく。引切。めんつばかりもちて出て立る也。

一袋棚に茶臺子のせて置事あり。茶入は右。茶わんは左也。臺ながら立るは口傳とす。さゝくをば臺の中のゑんにあおのけて置事也。茶わんには茶巾茶せんばかり入。しまひさまには常のごとく也。

夜會之樣子

一夜のすきは晝より大事の物也。まづ心しづかに手前もさはがしくなきやうにしなす事せん也。庭には石とうろに火をともし。路地には水うつべからず。あつき時分ならばうへ木ばかりに打てよし。

一こしかけにはあんどん置也。置所はこしかけの前のはづれにすみかけて置也。

一朝にても夜會にても。石とうろに火をともしては。しやうじを立る物也。ともし火にはあぶらたくさんに置也。客にあかぬ道理をせり。

一すきやの内にはたんけいをとぼす事本也。置所はゆるりふちよりたゝみ廿三め。但かねにては壹尺五分あり。中程の地しきいよりは一寸。但二目半也。火口はにじり上りへ

むけて置也。客入てすみする時は。たんけいをゆるりのふちぎわまでよせる也。すみもたくさんに置事よし。

一軒のまどはしやうじをはづし。かけ戸ばかりかけて置也。其ためにかけ戸に色を付る事也。

一すみの時は。手そくいだして。ゆるりふちの右のさきのすみに。ゑをさきへなして置也。

一茶の時はたんけいを床の内へ入。左りの方に置也。前の床ふちより四目。左りのわきの地しきいより七寸五分に置也。火口を前の方になしてよし。

一茶立る時。手そくは水さしと中程の間に。ゑをさきへ火を前になして置也。

一茶の時は手そく出して。水さしと中程の間に。かまの口も手前もよく見ゆる様に置物也。茶出し候てより手そく客より御こひ候事本也。ゑをさきへなし。ゆるりの右の方へいだす也。

一座中せばき時は。床へあがりてもくるしからぬおきてなり。紹鷗のすき出したまふ時。四條の辨殿をしやうじたまひしに。二帖だい目に人六人ありて。ちとせばく侍りければ。辨殿床へあがらせ給へと申されしに。辨殿たんけいの前に上り給ひて。

とこやみの夜も明がたのともし火にほの〳〵見ゆるはなのおちやの香

とよみ給ひ侍りければ。みなゑつぼに入けりとなん。かやうの例もある事也。

一花はこのましからずと紹鷗の宜ひし也。然どもめづらしき花はくるしかるまじきと也。かけ物も大筆なる物しかるべし。紙の内もあたらしききれいなる物尤よしと。紹鷗の相傳也。

一八ツ花がたのわりき物とて。いにしへよりきらふ花あり。
花入にいれざる花はちんちやうげみ山しきびにけいとうの花
おみなへしざくろかうほねきんせんくわせんれんくわをもきらひこそすれ
一鳥より前は夜すき也。鳥なきては朝すきなり。朝すきは手水つかはず。たゞ手水鉢のつくばいてよく見て。そのまゝ立て行事よし。是は今朝手水つかひて則間もなく候へば。今さらつかふに及ばずと也。晝より晩までは手水つかひてすきや入するに定る。
一にじりあがりの前にて。刀わき指扇をもぬき刀かけに上置也。夏は扇をもちて入なり。夏にてもあまりあつくもあるまじとおもふ時分。殊に花など入たると見ては。扇はもたず共入べし。又扇持たり共扇のかな口の方を床の花の方になし。かべに添て下に置。花を見る事是本也。

臺天目の習

一臺天目にて茶を立る時は。臺の上にて湯をも茶をも入て立ると。紹鷗は相傳せられ候。然ども天目を臺よりおろして。立て客へいだす時。臺にのせてまいらするもよし。
一臺は初水こぼしのわきへよせて置候を。茶わんに湯を入て置候時分に。臺をとつてよくふく也。
一臺天目にて茶をのみ候に。むかしは臺をもともに持てのみし也。是あぶなくてあしく候ゆへ。臺ともにとつて。臺を下に置。天目ばかり持てのみたるがよく候。次の人にわたす時は。又臺にのせてわたすべし。
一茶のみはてゝ。茶わんを見て其次にわたし。又臺をも見る也。見やうは盃の見やうと同

前也。扨ていしゆにかへし候時は。膳にのせてかへす事本也。貴人の御前ならば下にも置べきか。いづれも當座のしゆびたるべし。右之條々すき道の一秘事にて侍れば。漫に人に相傳あるまじく候。あなかしこ〳〵。

天正十五亥ノ二月吉日　利休宗易(判)

萬貫や
新四郎殿　參

利休客之次第

一ちや給るべきの狀うけたる時に。忝候可參と返事に。狀之表其位々に慇懃に書て。忝奉存候。必以參可被下と。此必と云事を文章に書べし。これ數寄之大法をしれるなり。さて則禮にまいる也。ていしゆも出合てあふ事よし。對面之時。扨御客はたれ〳〵樣ぞと尋て。正客大名高家ならば。則その大名へまいりて。御夫儀により御相伴に被仰下候間。被召寄候はゞ可忝由御禮申上る事也。同輩の人ならば。狀にて可申遣也。扨すきの時刻に成て。大名ならばよりつけ迄又行て。伺公仕たる由申入る。さきへ參相待可申旨被仰出る事也。又大名とても位によつて。案內なくさきへ行て路地に待申事もあり。同輩の人ならばいかにも別に路地口へゆきて待事本也。とかくおそく行事あしし。

一大名客の御相伴は。相客之御書立まはる事にて侍れば。路地入。中路地數寄屋入。御書立之次第のごとく無相違入候へば。少一禮までにて結句むづかしき事なし。同輩之位或は少目たかくおもふ人と參會のすきこそ。禮にあまり時宜をこらして。路次入。中

路地數寄屋入。其度毎にまづ御あとにつき申べきと。再三の時宜ある事。數寄の道の本也。

一數寄約束して雨ふり雪ふり。はげしき天氣あるに。亭主より數寄をのべ申べきと申遣事大法也。客は一入雨面白候。必々參るべしと返事する事本也。

一數寄に參時はあたらしきやうじといとはりをふところにたしなむもの也。やうじはもじ菓子などの手にとられず。やうじ一つにてはさしかぬる物ある事あり。亭主の出したるやうじに我やうじをとりそへ。はしにしてはさむなり。いとはりはかたびら。はかま。へんてつなどの不慮にほころびる事あり。いとはりなければ何ともせんかたなし。

一年の内に主君或は大名貴人などの口切の御茶可被下約束ありて。自然延引有て五六月までも相のびて。壺をとりよせ口切あらば。あつくとも上にひとへ物きる也。亭主ももちろん着事本也。

一九月十月までも。ふろの茶ならば上にかたびらきる也。是によつて春秋の堺の時分には。かたびら。ひとへ物。或はあはせにても。うす綿入の小袖にても。用意してもたする事よし。

一夏冬ともにたびははくべしと紹鷗申されし也。夏はあせあり。不慮に茶ある事あり。其時はあたらしきたびにても。ぬぎすてゝあしあらひ。よくぬぐいて數寄屋に入もの也。

一心を付て見る次第。こまかには書のせがたし。へいなどに水うちかけたらば。ふろのすきよと心得て。裝束をも着なおすべし。あつき時分にても。いまだいろりのすきの時は。石などは水うちぬらせども。あまりに水は

げしくはうたず。扨さうぢの様子。飛石。手水鉢の前石。すて石。しのび石。よけ石。長石。石つゞき。ならび石の次第。腰かけ。せつちん木の植やう。へいのぬりやう。まどの竹はしら。天井とまり。大目柱。おとしかけ。床ふち。二本柱。ちがひ棚。かやうの體をよく見る也。にじり入てはまづ床に目をかけ見やりて。やがて入て扨にじりかへり。せきだをなおし。前のへいにたてかけて置。扨床へよつて掛物にても花にても心をとめてよく見る也。其次に大目へまはり。ていしゆの茶たつる時。とらする所へ行。つくばいていろりの體。いろりふちのぬりやう。釜の位をよく見て。扨違棚の置合を見て。扨かへりて座をしむるなり。

一手水鉢の前のすて石をかゞみ石と云也。手水鉢のさきの石を捨石と云也。此二ッの石のすへやうに心をとめてよく見る物也。

一主君の御供にて數寄にあはゞ。路地の戸をも立寄てあけ。手水をもかけ申てよし。其ために大名を申入る時は。手水鉢の前のふみ石の右のわきに。又石一ッ少ひきくすゆる事也。にじりあがりにてはもちろんせきだをもなをさるべし。

一刀脇指。主君のは二腰ながら刀かけにあげ置て。我刀は中路地より小者にわたし。脇指ばかりにて參るなれば。我脇指を刀懸の下に立かけて置べし。

一せつちんの戸は。ともし火をとぼす時分にははやし。火なければせつちんの内幕しとおもふ時分には。戸をあけて置ゆへに。客も相客も戸をあけて出入する也。一のあとの人戸をしめてよし。

一にじりあがりの内へ入さまに両わき。次に

上を見て。扨床を見やりて入事よき也。亭主によりめづらしく色々の手とりなる事をする人あり。にじりのあがりの上に花などをいけて。水をあびせたる人もありし也。惣じてにじり上りと云て。頭と手と入て。やがて片膝をおり。よこにうつぶしにじり入事也。たゞうつぶしてはい入にいれば。ひざを入る時にこしあがるに依て。くゞりにてせなかをうつ物也。殊にうつぶしては前さき左右見えずして。かならずしそこなひ致す事也。

一ていしゆ出合。一禮して炭の時。釜を上ろ中へ火箸を入候時分。客もさしよつてはつる迄よく見物する也。炭に氣を付る事専也。

一會席はまづ汁をすきとよくしまひて出し申事賞翫也。出來申の。能料理にて候のとほめ候ても。さん〴〵くいちらしのこし申候へば。みなけいはくにほめたるに成候。但汁は二度より外は出し申事あるべからず。

一路地に水うちしまひたる時中立する也。さきへ出たる人。腰かけのゑんざをくばるべし。

一ていしゆ茶の時いしやうを初と悉くきかへ申候により。昔は客も中立よりいしやうしかへたる事にて候。近年は亭主ばかり着かへる也。

一數寄屋へ入やう。同見やう前におなじ。又ほめやうはあまりにむざとほむる事あしく候。又ほめざるも猶あしゝ。掛物花のほめ時分は。掛物は達磨にとへ。花はうす茶の時と古實の習也。中立より前は多分掛物也。むざと物をほめまはししては。亭主の手前しまひにかまひやかましく侍る故に。まづ物しづかに亭主のしまひを見て。炭も入くわん

すもすへて。くわんをぬかんとせらるゝ時分に。見事成御掛物。扨かれこれとほむる也。達磨の耳にくわんあれば達磨の時とは心得る也。

一此くはんを掛。くわんすをなをして。何とろくに御座候かと。亭主客へ尋る事。是時のあひ也。一段ろくさうに御座候と云てよし。亭主すねものにて。くわんすを少ゆがめ置て客に尋る人あり。ろくさうに御座候といはせすまして後にろくになをせり。然時は客のけいはくに成候。少ゆがみ申候といへば。ていしゆのきよくなし。其時は只一禮の時のやうにあひしらふ物也。

一花の時は多分中立より後の事なれば。亭主猶以手前様々の仕廻あり。能々心得て仕廻に心を付。是をよく見て。うす茶の二人目より三人目へわたるべき前に。心しづかに花をほめ。花入をもほむるもの也。

一茶を三すくひほど入。茶入のふたをとんらやうにする時に。客より御茶今少一兩度も所望する事よし。亭主はしんしやく心に茶入を引。ふたをとらんとする體也。

一茶は一ぺんにてのこらずみなのむべし。二へんまはす事有べからず。ていしゆもずいぶんのこらぬやうに小服に立出し申候に。のみあまし申義は以之外の不調法也。初に今少茶御入候へと申たることば。みなけいはくに成申也。よく心得べき事也。

一のみしまひて。下座の人其茶わんを上座へわたす。是によつて手ひまなきゆへに。下座より二番口の人ふくさをとつて。茶ばかりを下座へ渡し。下座の人茶をのむ内に。ふくさを亭主へ渡す也。

一上座の人茶わんを請取て。香をきゝ色をほ

め。たてやうの茶わんの内をほめ。茶わんを見などして其次へ渡。其次々の人も同前に見てほむる也。扨下座の人又上座へ茶わんを渡す也。上座の人また少見て亭主の初出したる所に置也。

一茶をのむに。上座の人ののみたる。其のみ口をちがはぬやうに。其次々の人も其のみ口よりのむ事肝要にて候。亭主じまんして茶わんの内きれいにたてなし出したるを。方々よりのみちらし。さん〲のたてなしになして。あゝ御茶たちて候と申さるゝは。亭主をきよくれるしかた也。茶のいきも方々よりちりさんじて。よしともあしともいひがたし。うつくしくきれいに一所よりのみ。口こまやかにある所をむかふへなして香をきく事なり。むかふへなしぬれば。のみ口の方上になるに依て。茶のいきも上へあがり。能いきもきこへ候。前になし我はなを茶わんの中へのぞき入れば。あせやいらんはなやいらんと。人目には見ぐるしくて。おとがいに茶のいききかせたるに成候也。

一亭主より客にしかと御座候へと申さるゝ時に。茶の一禮ゐんぎんに有べし。

一亭主茶碗を下に置。湯を入水をむめ合て。二口三口のむ事也。其時も客そと禮すべし。此時亭主のむ道理は茶に毒などの入たる事もあり。其時宜と。一は又後うす茶の時。水のむめかげんを見んためにて侍る也。

一うす茶も上座よりのみまはして。一ぶくも二ふくものみ侍らんうす茶の時は。茶わんを返しさまにいたゞきて返し。一禮はなし。

一茶入こふ時分は。茶をとり置さまに。亭主ちやわん。茶巾。茶せんをも仕廻。さゝくをふくさにてのごひ。しまふ時分に所望してよ

し。是は亭主ふくさ物の手にある次でにて侍れば。其ふくさにて茶入をふき出させん手つかひなり。

一茶入出され候時。惣客ひぢをつかへ茶入をのぞき見てほめる。名物の茶入なれば。亭主より手に御取候て御覽候へと申。其時ふところより手拭を取出し手をのごひ。ひぢをたゝみに付て茶入をとり。まづなりをちと見てふたを取。其ふたの內ばかりを見て。ふたを右のかたに置。茶入の口つき。內の體。土くすり。くすりとまり。いときりのやうす。不殘見てよく〳〵ほめておしいたゞき。次へ渡す時に又初の所に置也。次の人も同前なるべし。但せとやき日本物ならば。客より何と手にとり見申度と云て。扨手拭にて手をのごひ。右のごとくに見申也。客いづれも同前に見て。下座の人又上座の人に渡す。上座の人いよ〳〵又見て又いたゞきて。本の所に茶入の表を亭主の方になし置也。此見る間には亭主は勝手へ入。各見仕廻たる時分に。亭主また出て茶入をとり申さるゝ。其時客おの〳〵ゐんぎんに禮をする事也。

一立炭は多分は亭主炭持て出て入るもあり。又客よりとてもの御事に立炭被遊候へと云もよし。亭主は炭の用意も無御座候。今少御くつろぎ有て御あそび被成候へと云時宜也。客いかに御用意の無御座事の候はん哉。只被遊候へと。再三にこふ物也。もちろん用意したる事なれば。則亭主炭せられば。そこ御とり候へと。ろのそこの火をとらせておかせる物也。扨炭をおかるゝ時。各さし寄て見物すべし。又亭主炭持て出て。客にちと御慰に炭被遊候へと所望あらば。再三しんしやく有べし。但客めいいよの數寄しやなどに

て。慰にいれんとおもはれ候はゞ。さればいれ申べきかとはいわぬ物也。まづ釜をあげさせられよと云也。是則いれんとのすき道のことば也。扨亭主釜をあげて。炭所望の時客すみ入べし。客大名か數寄無双の人ならば。御相伴の中より御取合を申などして。まづ釜をあげさせられよと。相伴衆一人云もよし。

一炭の後釜を客かくる事もあるべし。又立のき亭主に釜はかけさするもよし。亭主は炭に見入て。釜いつまでもかけぬ禮よし。然間炭の後亭主に向て。釜かけさせられよと云時宜尤ある儀也。

一數寄屋の首尾すみて。客人より御勝手拜見申度と所望してもよし。又亭主より客に少御くつろぎ被成候へとよび入るもよし。

一茶過てやがて正客大仁なれば。亭主又いしやうあらためて禮に行に依て。其前に相伴に行たる人。はやく裝束を着かへて。亭主方へ禮に行て。扨正客大仁の前へ行て禮可被申候。大略の位ならば後の禮は狀までにてたがひにすませるもよし。

右數寄道之客之習。知人まれに候。御ひざう有べく候。漫に御教候まじく候者也。

世の中に茶をのむ人はおほけれどみちを
しらぬはちやにぞのまるゝ

天正十五亥ノ五月吉日　利休居士宗易(判)

川崎梅千代殿　參

文政十一臘月一閱了　(花押)

續群書類從卷第五百六十九

飲食部七

茶器名物集

御茶湯道具。次第不同。

一紹鷗茄子　　關白樣

四方盆內赤ノ盆。カントウノ袋。

此壺ハ昔松本所持。其後百廿貫ニ引拙ヘ賣被申候。從引拙六百貫ニ紹鷗ヘ渡。死去後宗久所持。其以後信長公ヘ上リ。從信長公宗久ニ被下。從宗久關白樣ヘ進上也。

一茄子似タリト云。百貫茄子トモ云。　關白樣

カントウノ袋。蓋ハ象牙ツクヘイチ也。四方盆ニ居ル。

此壺博多(宗歟)宗悅珠光目聞ニテ從京百貫ニ取下。子息宗作。其子紹悅。三代所持。從紹悅豊後大守ヘ五千貫ニ渡ル。從大守關白樣ヘ新田肩ツキ。此茄子。兩種一万貫ニ賣也。

一ツクモ茄子

信長公總見院殿御代ニ京ノ本能寺ニテ火ニ入失申候。

此壺珠光目聞ニテ出候。其中傳ニ方々ニ取散シ。越前淺倉太郎左衛門五百貫ニ所持ノ(ス)。其後同國府中小袖屋千貫ニ申請。其後一亂ニ京ノ袋屋ニ預候處。京ノ法花衆亂ニ失候ト

テ不出候。松永以分別取出。廿ケ年所持ノ後。信長ヘ進上候。本能寺ニテ失申。

一珠光小茄子

カントウノ袋。四方盆ニ居ル。是モ信長公御宗後ノ時火ニ入。同所ニテ失申候。

此壺珠光所持ノ後播州ヘ渡ル。播州ノ後南都尊行院ヘ渡ル。其後長穂寺ニ有。以後三好實休ヘ二千貫ニ賣。實休一亂ノ後。本願寺家中下妻法橋ヘ三千貫ニ質ニ行ク。法橋死去ノ後。同名丹後取。丹後死去後本願寺ヘ上ル。從本願寺三千七百貫ニ宗凡取。宗凡ヨリ信長公ヘ上ル。小茄子宗二拜見不申候。天下ニ四ツノ小茄子トハ是也。

一富士茄子　京ノ醫師道三ニ有。

一京極茄子　御本所様ニ有。

右ノ外ノ茄子。好惡ニ不寄。數十計方々ニアリ。

一文琳四方盆　堺天王寺屋 宗及ニ有。

カントウノ袋。昔珠光モ所持也。文林ハロヲソキト云也。薬一段ケツカウ成物ナリ。

一文林玉墻ト云四方盆　[illegible] 與太郎ニ有。

此文林宗二拜見不申候。

一文林　宗短ニ有。

右二ツ之小壺ハ茄子ニ等キ名物也。

此文林ハ數ニ不入。四方盆。

カタツキノ分

一新田カタツキ　關白様ニ有。

昔珠光所持。

右此壺カタツキノ天下一也。

一初花カタツキ　關白様ニ有。

此壺引拙茄子ヲ被出テ後モ。猶一種ニ被樂也。

一ナラシバカタツキ　關白様ニ有。

壺ノ様子宗易雜談能承候。摺子ハ見ズ候。壺

ノナリ下フクラニ開エ候。薬アメ色ニ一段コク候。薬ケククミ候。薬コイト云ヿニナラシバト云心カ。此壺數寄ノ方ニハ是ガ天下一歟。豐前秋月ヨリ進上也。

天下ニ三ツ之名物也。

一カタツキ　宗安ニ有。

昔珠光ノ所持。ナゲヅキンヘラメ四ツ有。ムカフニ一ツ上ヘ下タ一文字ニヲシコミヘラアリ。其内ニナダレ色薬アリ。惣ノ薬ハコヒアメ色也。珠光始新田。次ニ宗及。文林。其後小茄子所持候。此壺カヘ〳〵放候テ。果ニ此ナゲヅキン。彼圓諸一軸死去後迄有。宗珠ニ被申置候ハ。忌日ニハ此一軸ヲ懸テ。ナゲヅキンニヒクツヲ入。茶湯ニスベキ由遺言ニ候。惣別數寄方ニハ此一種ナラシバ數寄ノ眼也。其外ノ茶入ハ悉名物也。

一圓座カタツキ　堺千ノ宗易ニ有。

此茶入ノ袋龍ツメノ純子也。目開ノ一種ナレバ一段數奇道具タルベシ。昔下妻兵庫所持也。床ニ置也。皆面白キ壺也。

一文字屋カタツキ　前田殿ニ有。

此壺別テ當世諸人面白ガリ候。數奇道具也。

一薬師院ノカタツキ　秀長公大納言殿ニ有。

一玉堂カタツキ　京ノ立賣針屋宗和ニ有。

此壺モナリクチ。當世ヘ行面白ガル壺也。

一宗碧ノカタツキ　堺北之上宗二ニ有。

此壺道七如レ存數奇道具也。

一ソクユウカタツキ　堺鍋屋宗訥ニ有。

一圓座カタツキ　堺水落宗惠ニ有。

此壺昔紹鷗所持也。皆面白キ壺也。但口少廣ガ難也。

一喜伯カタツキ　堺湯屋宗向ニ有。

カキヘラ六ツ有。

一カタツキ　堺クサベヤ道設ニ有。

一カブラナシ　　關白樣ニ有。
昔引拙紹鷗名人所持。天下一ノ花入也。但セイジノ物茶碗ノ手也。

一カブラナシ
昔京ノ新在家池上如慶所持也。クワリンノ卓ニ居。
總見院殿御代ニ同火ニ入失申候。

一カブラナシ　　（堺天下寺屋）宗及ニ有。
昔大裏殿御内サガラ遠州所持也。其後堺薩摩屋宗忻所持。薄板ニ居ル。
右三ツ花入名物也。此外カブラナシ數十許モアリ。是モ數奇ニ不入ヌルキ物也。

一モヽソコ　　關白樣ニ有。
昔珠光所持。天下一之名物也。コトウノ花入。五トヲリ文ヲサシ候。四方盆ニ居ル。

一モヽソコ　　平野ニ有。
昔引拙所持。是モ文ヲ五トヲリサシ候。四方盆ニ居ル。

一モヽジリ　　（京ノ醫師）道三ニ有。
是モ同名物也。文ヲ五トヲリサシ候。四方盆ニ居ル。
右天下ニ三之花入也。但此外モヽジリ好惡取マゼ七ツ八ツ候。其ハ數奇ニハ不入候。

一ソロリ（ケイシヤウノ盆ニ居ル）　　關白樣ニ有。
昔紹鷗所持。天下ニ無双ノ名物也。但コトウノ花入。無文ナル物也。

一ソロリ　　（京ノ立賣帯屋）宗甫ニ有。
是モコドウノ無文ナル花入也。次ノ名物也。四方盆ニ居ル。

一ソロリ
京ノ施藥院幷曲庵兩人モ所持也。四方盆ニ居ル。
右之外ソロリ七ツ八ツモ數アリ。是ハヌルキ物ニテ候。

一筒一尊　堺千　宗易所持。
コドウノ無紋ナル花入也。薄板ニ居ル。
一ツチノ花入
御本所様ニ有。
昔紹鷗所持。紫ノ銅。無紋ナル花入也。四方
盆ニ居ル。
一礎之花入　松枝隆仙。
セイジ也。但當世ハ如何。クチノセバキ物
也。ノコイヲトシノ卓ニ居ル。
惣別古銅之花入ハクチノセバキガ名物也。
數奇道具也。〔僞歟〕靑紫ノ物ハクチノ廣ガ名物也。
數奇道具也。
一筒　關白様ニ有。
一ツヽ　堺奈良屋　宗意ニ有。
セイジ也。柱ニカクベシ。
昔紹鷗所持名物也。是モ柱ニカクベシ。
一筒　堺モズヤ　宗安ニ有。
是モセイジ。柱ニカクル。但筒一種ニ持タラ
バ床ノ内ニカクベシ。
一ツノキ　觀世彥右衞門所持。
昔道陳目聞ニテ三好實休所持被成。觀世彥
右衞門ニ拜領サセラレ候。紫銅ノ無文ナル
花瓶也。人シレヌ數奇道具也。但薄板ニ居
ル。
一釣船
クワテキ。昔紹鷗所持。天下無双ノ花ノ名人
也。
總見院殿御代ニ火ニ入失申候。
右釣船ノ數多也。但當世ハ如何。主遠キ物也。
御繪之次第
一左趙昌菓子之繪
昔珠光所持。其後引拙紹鷗名人衆所持也。總
見院殿御代ニ失申候。
御茶湯ノ繪以〔二歟〕書トハ此五種ノ菓子ノ繪ノヿ
也。セイシツノ盆ニ枇杷。桃。蓮。楊梅。中。瓜。

昔三好實休所持。

一佗助カタツキ　（高山）右近所ニ有。

昔引拙所持。

一宗陽カタツキ　（飛驒國）金森殿ニ有。

此壺新田ニ似テ面白。藥ニ望アリ。

一殘月ノカタツキ　（越前羽柴）左衛門督殿ニ有。

一小紫カタツキ　（越前ツルガ城主）出羽守ニ有。

一カタツキ　（奈良東大寺）師聖殿ニ有。

一小カタツキ　（九州）豐後ニ有。

一北野カタツキ　（公家）烏丸殿ニ有。

一セイタカヽタツキ

信長總見院殿御寂後之時。於本能寺火ニ入失申候。

一圓座カタツキ

昔京ノ針屋紹珠所持。是モ本能寺ニテ失申候。

一式部少輔カタツキ

明智日向守所持。於坂本火入失申候。

一鴫カタツキ　（九州豐前）筑紫ニ有。

ヘラカタツキ也。數五ツ。

一木ノ邊カタツキ　長谷川與次殿ニ有。

昔道陳所持。

一シキカタツキ　關白樣ニ有。

名物ト申一段也。數奇道具也。

以上廿六。此カタツキ拙子悉拜見候。此外ニモ十餘見申候。惣別カタツキハ好惡取合。都合五十四五有也。カタツキハ何モ四方盆ニ居ル者也。

一瓢簞　豐後ニ有。

昔松本所持小壺也。四方盆。

一飯銅小壺　（堺重）宗甫ニ有。

四方盆。

一飯銅小壺　（堺住吉屋）宗無所持。

四方盆。

一假銅小壺　　　堺備田宗春ニ有。
以上天下ニ三ツ之名物也。但當世ハ如何。
一ロテイ　　二ツ。但小壺。
クチニ見所アリ。
一ツルツキ　　是モ小壺。
好惡取合六ツ。七ツモ有カ。
一ツルクビ　　是モ小壺。
好惡取合六ツ。七ツモ有カ。
一丸壺　　是モ小壺。
好惡取合其數不知。町ノ棚ニモアリ。
一尻フクラ　　是モ小壺。
是モ町ノ棚ニモ有。其數不知。
右五色之小壺中。昔ハ五百貫三百貫ノ代物ニ立乘タル名物モ有。當世ハ主遠キ物也。何モ四方盆ニ居ル物也。
一篠殿ノ圓壺　　鹽屋宗悅ニ有。
五百貫。但當世ハ如何。

一高山圓壺　　關白樣ヨリ拜領。
右此一種ハ名物ニテハナシ。四方盆ノル。但數奇道具也。當世ハ主多キ物也。
圓壺尻フクラ之事。壺ニ御茶半袋程入大ナルガ數奇道具也。
一萬歲大海　　茶入也。
總見院殿御代ニ火ニ入失申候。昔代物二千貫。但當世ハ數奇ニ不入。
一打曇ノ大海　　茶入也。
代物千貫ノ名物之。但當世ノ數奇方ニハ如何。
一水谷之大海　　茶入也。
是モ當世ノ數奇方ニハ不入物也。
右大海之事。其數ヲ不知。但當世ハ好惡ニ不寄。何モ數奇ニハ不用。中古ニハ名物トテ用ル也。

花入之分

以上五種。セイシツノ盆赤色ノ御繪也。絹ニ書候。

一右趙昌菓子之繪
是同總見院殿御代ニ失申候。
ブドウ。若根之蓮。ヒシ。桃。アリノミ。クネフ。中ニ。柘榴。以上七種也。盆モ同ジ如ク。
右七種之菓子同名物也。薩摩屋宗忻方ヨリ信長公へ上申候。赤色ノ御繪也。絹ニ書申候。

一趙昌花之繪　本願寺家中菊屋 樵齋ニ有。
此御繪モ赤色ハヌタカシ。
花之色昔ヨリ色々ノ說アリ。卯花カト相阿彌折紙ニ相見候。花ノ色白シ。マル繪也。絹ニ書候。

一趙昌花之繪　堺アカネヤ 宗佐ニ有。
悉同如ク。但花ノ色バカリ薄色ニアカシ。絹ニ書申候。

以上此四幅名物也。殘之趙昌ハ世間ニ多シ。當時不用ト也。

一左馬鱗　關白樣ニ有。
此一軸昔紹鷗所持。菓子ノ繪ニ等キ樣ニ主被存候。
圓繪也。絹著タル薄赤色也。山水ノ繪船モアリ。

一夕影　堺ユウチヤウ。
同筆ノ如ク同物也。

一平砂落鴈　關白樣ニ有。
玉磵之八幅ノ墨繪也

一江天暮雪
是ハ大裏殿御代ニ周防ノ山口ニテ失候。

一洞庭秋月　堺天王寺屋 道叱ニ有。

一魚村夕照　堺[illegible]田 常庵ニ有。

一遠浦歸帆　北條殿。
其昔ハ連歌師宗長所持。

昔雪齋所持。其後今川義元所持。
一山市晴嵐　豐後ニ有。
一煙寺晩鐘　關白樣ニ有。
此一軸八幅之内以上ノ名物也。數奇道具也。
一瀟湘夜雨
此一軸八幅ノ薄多〔博多〕島井卷軸也。
右之繪何モ讃アリ。玉磵ノ朱印也。何モ横繪
也。
一玉磵之古木
昔ムクノ宗理一世ノ間所持也。墨繪。紙ニ書
也。竪繪也。
總見院殿御代火ニ入失申候。
一玉磵之枯木　關白樣ニ有。
是モ墨繪。紙ニ書候。兩幅讃アリ。柳也ト云
說アリ。不審。
一玉磵波之繪　〔堺ナヤノ〕宗久ニ有。
右此一軸ハ讃無。横繪。

一玉磵岸之繪
昔引拙所持。此一軸讃ナシ。横繪。
總見院殿御代火ニ入失申候。
一万里高山
玉磵筆。昔下妻丹後所持。讃有。
是モ總見院御代ニ火入失申候。
一小玉磵
昔下妻大藏法橋所持。無讃。
是モ總見院殿御代火ニ入失申候。
一青楓　關白樣ニ有。
玉磵筆。讃アリ。玉磵ノ上ノ玉磵。數奇道具
也。
以上玉磵十五幅。此外玉磵ノ眞筆トテ不慮
ニ出候ドモ。其ハ不可用。
一魚夫　豐後ニ有。
牧溪和尚之筆。讃虚堂。墨繪。紙ニ書候。竪繪
也。

一布袋繪　宗安ニ有。
牧溪ノ筆。開扇讃。
一船子　宗及ニ有。
牧溪筆。虛堂讃也。
右三幅一對也。
一菓之繪　蜂屋出羽守所持。
牧溪自書自讃。客來ノ一味。横繪也。
一大根繪　大子屋ニアリ。
是モ自書自讃。一對。息庵日々ニ徇讃語アリ。
右之外牧溪大軸小軸横繪少違候テ八景十六幅アリ。大軸ハ千貫。小軸ハ五百貫ト。古人名物トテ用之。但當世ハ如何。不用。
總別牧溪此外軸數多シ。名物ニモ可入。依主代物高直ニモ可取。但佗ヲ立ル數奇ハ無所望。
一舜擧筆　常悅ニ有。

芙蓉。赤色絹ニ書候。
一理安仲
赤色絹ニ書候。馬ノ繪鶏ノ繪數多シ。
一月山筆
雀ノ繪。稻ノ繪帋ニ書候。墨繪。
一黄宗皇帝
鶉ノ繪。赤色絹ニ書候。
一馬遠
繪モ多キ物ニテ候。
一モウヱキ
犬ノ繪。右數多シ。
右六人之繪書。依其軸代可有高下。但釣船准
當世ハ不用之。
一徐熙鷹繪　奈良漆師屋。
右一軸ハ珠光之昔所持也。數奇道具也。赤色絹ニ書候。紹鷗道陳ヲ始テ古人褒美ヲ仕繪也。但代ハ百貫計ト紹鷗申候。

一歸去來
スカウ、自書自讃。昔紹鷗所持。堺疋松ニ有。
大形繪之分シルシ畢。墨繪昔玉澗。牧溪。月
山也。殘ハ悉赤色昔也。赤色紙ニ書テハ益ニ
不立。墨繪ハ絹ニ書テハ益ニ不立也。古人ハ
是ヲ秘事ニ仕畢。
　墨蹟之次第
一圓悟禪師之墨蹟　(堺伊勢ヤ)道和所持。
右一軸ハ昔珠光一休和尚ヨリ被申請候。墨
蹟ノカケ始也。此圓悟今一幅アリ。堺奈良屋
宗巴所持。又圓悟一幅谷ノ宗林所持也。右ノ
法悟禪宗ノ眼也。紹隆ヘノ印可狀也。
一虛堂之墨蹟　關白樣ニ有。
此一軸天下一ノ名物也。昔幾島所持也。
一虛堂　秀長公大納言殿ニ有。
昔堺宗陽所持。右一幅天下無双數奇道具也。
一虛堂　(堺山上)宗二所持。

此一軸ハ語禪宗ノ眼也。達磨七百年忌念吾
也。
一虛堂　長岡幽齋所持。
此一軸ハ道陳所持名物也。
一虛堂　[illegible]榮俊所持。
此一軸昔紹鷗所持。
一虛堂　[illegible]宗無所持。
昔紹鷗所持。但絹書テモ名物也。
一虛堂　堺エビスノ町ニ有。
此一軸虛堂ツイヽンノ語也。是モ禪宗ノ眼
也。
右之外虛堂之可有墨蹟少々。但從語可依樣
子。若不慮ニ出候者。茶湯上手幷大德寺長老
衆ヘ可問者也。
一圓照禪師墨蹟フシユンノ事也。公家烏丸殿
ニ一幅。堺宗訥ニ一幅。松井宮內卿法印ニ一
幅。此外方々ニモ有。但可爲名物之外者如

何。

一大燈方々ニ四十幅モ五十幅モ可有。其内悟〔語カ〕ニヨリ。様子紙之中善文字候者。可爲名物者也。

一大惠　癡絶　道冲　南堂　密庵　清拙　モクリン　インケツカウ　トクヒ　エセイカン。

此外圓悟以來十九代ノ諸祖之墨蹟可有其數。若於所望茶湯上手長老へ可爲談合者ナリ。總別墨蹟ハ第一ハ祖師。第二ハ悟。其外ハ様子次第ニ數奇ニ入代モ仕者也。

一珠光香爐　宗易所持。

天下無双ノ名物也。四方盆ニ居ル。

一不破之香爐　〔堺天王寺ヤ〕宗及ニ有。

同名物也。布袋香箱ト置合。長盆ニ居ル。

右之外千鳥之香爐。公家烏丸殿之香爐。京之江村所持紹鷗香爐。京小川マスヤ香爐。イヅレニ香爐方々ニ數可有。彼兩種之外ハ拙子就無案内。善惡紙面ニ不載者也。

一香箱之事。ヒシノ盆香箱トテ名物アリ。是ハ總見院殿御時火ニ入失申候名物也。此外堅布袋。居布袋トテ昔東山殿御代ニアリ。其後方々ニテ失候。殘所々ニ可有候。其内堅布袋堺天王寺屋宗及ニ不破之香爐ニ置合テ有之。何レモツイ朱ノ手也。ヒシノ盆ハツイ紅。此内堅布袋ガ上作ト云フ名物也。布袋ノ香箱ハ作張盛。ヒシノ香箱モ張盛。ヒシノ盆ハヨウモ作。堅布袋上十。居布袋下十。

十炷之香幷追加之六種

一太子

是木所栴檀也。其木ノ〔三[illegible]〕沈ナル處ヲ太子ト云。和州法隆寺ノ寶ナル依テカ太子ト名ヲ付ル。

一東大寺

木所迦羅。天下無双之名香也。公方様一代ニ

一度奈良御參社ノ時。一寸四方切ラセラルヽ也。信長公之時拙子式モ參候。

一セウヨリ〔逍遙〕

是ハ木所東大寺川日ト云 古說アリ。川逍遙ト云心歟。

一三吉野

木所東大子〔寺歟〕ノ白三ト云古說アリ。

一中川

木所マナハント云說アリ。

一古木

木所羅國。其內ノ沉ナル所也。

一紅塵

木所迦羅。東大寺ニ等クシテ名香也。但匂イトフリハ各別ノ事也。

一花橘

木所マナカ中川。花橘事。マナハンマナカノ香トシテ十種ノ內ヘ入事。不思義ナル名香也。

一八橋

木所羅國也。古木ト又フリノ替タル面白キ名香也。

一法花經

木所迦羅也。舊說ニ云。一部ヲ八貫ノ代ニ定ルニ付テ。法花經ト異名ヲ付ル。但當世此說不用。

以上十炷。又追加之六種。

一蘭城寺

木所迦羅。東大寺ニ双ビタル 名香ナレバ蘭城寺ト付ル。

一似

木所迦羅也。一段ノ名香也。此香燒出ハ常ノ迦羅也。中程ヨリ後ランジヤタイノ樣ニ立出候。扨似リト云也。

一面影

木所迦羅也。東大寺ノ面影ノ様ナル名香也。
中程ヨリカヘシニナリテ思所アリ。似タリ
ヨリヲトリタル名香也。

一佛座
此香一段ノ面白キ香也。

一珠數
木所迦羅也。常ニ手ニフレタキ香ナルニヨ
ツテ。珠數ト異名ヲ付ル。

一菖蒲
木所羅國也。一段面白キ香也。羅國ノ名香數
多シトイヘ𪜈此香以上也。
此外五十種之香トテ異名色々有。木所モ色
々有。但武邊隆正ニ宗易。宗及。拙子。名香ノ
聞様相尋之時。右之十六種相極畢。堺ニハ惣
別香ノ道三人之外ハ知タル者ナシ。京ニモ
此四人也。

一武邊隆正
名香ノ道名人也。紅塵一種ニ仕候。十年前ニ
死去候。

一祇薗ノ山本
宮古ト云名香一種持候。是ハ東大寺ノ隱名
ト云舊説アリ。

一竹薗院
八橋ノ香ヲ一種ニ持候。

一川村道勺
似一種ニ持候。是モ十年以前ニ死去候。

一醫師道三
東大寺所持香聞テハ無候。先師相國寺盛都
聞之時。從公方様拜領也。無双之正名是也。
此外名香トテ可有方々之。但無正名者也。右
四人之京衆正名ト云名香アラバ其ハ可致同
心者也。公家ニテハ三條殿。武家ニテハ篠
殿。此兩家名香幷香爐之御家也。但末代ニ正
名ノ香希ナルカ。亦道捨リタルカ。惡キ香ニ

包紙ナド家ノ如法度シテ都鄙へ被遣。其香有方々。三條殿篠殿ヨリ出タラバ。猶正名ニテ有間敷由。武邊申候也。

香爐之灰之事

一右之名物之香爐ニハ火ヲ不取。灰ヲカキアゲ。御床ニ四方盆ニ戴〔臺歟〕並也。亦名物ノ香答〔合歟〕持人ハ長盆ニ二並也。此二ノ香爐ニ火ヲ取事ハ。客人外人カ又ハ數奇者歟。又ハ雪ノ比カ。イヅレニ自然之事也。

一名物之外之香爐ニ香ヲ燒事。ムザトハ不燒大事也。正名之名香カ。何ニ雪月會之朝。客人曉來時歟。夜放更テカ。時節ヲ見合燒者也。但空燒ノタキモノ。常ノ香フロ。イルリヘクブル事モ此ノ時節也。入逢時分モ燒者也。

一灰之押樣之事。筋目九ツ六角ニ手ギワヲスベシ。是ハ御家トテ三條流也。筋日香爐ノ足毎ニ有。猶口傳直ニ申渡者也。

一珠光カヽリ。篠殿ノ流ハ筋目十一五角ニ押也。是ハ面之筋日一ツ香爐ノ面ノ足ニ立ル也。口傳直ニ申渡者也。

一灰之押樣。兩家ノ普法度數有之由風說候。茶湯ニハ不用之。幷富士ナリノ灰。是ハ貴人見若衆之時曲ニ押也。

一キンノ寸。珠光カヽリハ九分ニテ一分角ヲ取也。次ニ一寸ニスル流モ有。但香爐ニヨルベキカ。灰ノ搉樣口傳申渡候。

一香爐ノ取渡シ幷火アイ。貴人ノ前ニテ香ヲ聞樣。又香ヲツグ樣。口傳モ不殘相傳者也。香ノ木カサ。迦羅ハ蚊足程ト申傳者也。殘ハ赤栴檀。マナハン。マナカ。羅國。悉口傳申渡候。

大壺之次第

此御壺御茶七斤ノ上入也
一三日月

此御壺天下無双之名物也。大ナルコブ七アリ。前ニ腰袋ヲ付タル様ナル横ヘ長キコブアリ。前ヘ少傾テ面白キト云事ニテ三ケ月ト付ル也。ナリ下フクラニテ一段ノ珍キ壺也。昔興福寺西福寺所持也。其後日向屋道徳所持。其後京袋屋所持。其後三好實休所持。其時一亂ニ河内高屋ノ城ニテ六ッ破申候。其後堺宗易ニテ繼立。三好老衆三千貫（ニテ質物）太子屋ニ質ニ置候。太子屋ヨリ信長公ヘ上申候。破候テ後モ名物ノ威光猶益シ。御茶モ能候。代ハ五千貫疋一萬貫疋積モナキ事也。御壺ノ様子口傳ニ申渡候。但總見院殿御代ニ火ニ入失申候。

一松島

此御壺コブ卅ノ上有也。此土薬眞壺ノ手本也。三ケ月モ天下無双ノ土薬ナレ圧。此松島トハ替也。古人モ兩壺ノ内スキ〳〵云傳也。ナリハ三ケ月ガ珍キカ。此壺松島ト名ヲ附ル事。奥州ノ名所松島ニ島數多シ。面白キ所也。此壺ハコブ多キニ依テ松島ト付ル也。昔三ケ月モ松島モ東山殿御物也。其後御物等何モ打亂。中比此壺三好宗三所持。子息右衛門大夫紹鷗ヘ賣被申候。其後宗久所持。其後信長公ヘ上リ申候。總見院殿御代ニ火ニ入失申候。御茶七斤上入也。

一四十石御壺　關白様ニ有。

此御壺。昔眞壺白疋二百疋ノ時。千本ノ道悦米四十石取ノ田地ニカヘテ茶湯ヲ仕候。東山殿御感有テ御物ニ被召置。四十石ト異名ヲ被付也。御物亂ヲ後奈良蜂屋紹佐所持候。其後堺宗訥所持候。其後又關白様ヘ上候。松島三ケ月ノ後ハ天下一ノ壺也。御茶七斤半入候。土薬ニモ望ナシ。御茶ノ味ハ三ケ月ト等キ也。

一松花　　關白樣ニ有。
此壺黃清香也。右カツテニテ此壺見事ニ見ユル。土黑色也。土ニコブ二アリ、下藥白ク赤シ。昔珠光所持。其後金田屋宗宅所持。其後道陳所持。其後信長公ヘ上リ。一亂ニ堺久太郎取。關白樣ヘ上候。清香ノ內ヨリ天下ニ松島松花三ケ月ト三ツ名物ニ加ル事。清香ニテ納名譽也。御茶ノ閑味名人衆モ驚入令舊說。御茶七斤入。

一捨子　　關白樣ニ有。
此壺捨子ト異名ヲ云事。世上ニハチガナキニ依テ捨子ト曰舊說アリ。是ハ非說也。チモ四ツ一段見事ナルガ有。東山殿此壺始テ御物ニメサレ候時。能阿彌ニ是程ナル壺ニ未名ヲ付ヌ事。捨子ニスルカト上意ニ付テ。今ニ捨子ト云也。土一段好土也。御茶ノ事ハ不及申。六斤七ツ八ツ入壺也。第一何ノ壺ニモ替リ。藥カジケ上ニ霜ノ降タル樣ナル面白キ藥ニテ候。或時心敬祇候ノ時。此壺ニ發句スベキ由就　上意。則發句被仕候。比ハ御口切ノ時節カト相聞候。

篠カジケ橋ニ霜ヲク朝哉

一ナデシコ　　關白樣ニ有。
此御壺草花ノ事ニテハナシ。篠綾イツモ此壺ヲ子ノ如ニ。秘藏シテナデサセラレタルニ依テ。扨ナデシコト云也。コブ大小十計有。六斤六ツ七ツ御茶入。

一澤姬　　關白樣ニ有。
此壺御茶七斤半入也。ナリドウハリ候テ一段珍キ也。ウシロニヱクボ有。土茶幷御茶ノ閑味モ不及申。森武藏守進上。

一キサガタ　　關白樣ニ有。
此壺コブ大小十四五有。松島ト等ト云テ。奧州ノ名所キサガタト名ヲ付ル也。此本歌ヲ

申傳候。
松島ヤ小島ノ海士ノ浦ヨリモ猶増リ行ク
キサガタノ月
一志賀　　　　　關白様ニ有。
此壺珠光弟子宗珠一種ニ樂。後豊後ノ大守
ヘ放シ候。豊後ノ大守關白様ヘ被上候。志賀
ト云子細ハ。御茶ヲシメ時ノ香ヲ其儘持ト
云事ニ志賀ト云也。コブ大小廿計有。五斤入
也。此外關白様ニ名壺アマタ有。又方々ヘモ
拜領サセラルヽ也。
一兵庫壺　　　（六[illegible]）御本所様ニ有。
此壺荒木攝津守堀出壺也。土藥不及申。コブ
廿計有。御茶ノ閑味四十石ト等様ニ候。
一彌帆壺　　　秀長公ニ有。
三好山城所持。御茶能トテ褒美仕名壺也。
一ハシダテ　　　宗易ニ有。
此壺丹後ヨリ出候。丹後ニ過タル名物トテ。
ハシダテト云説有。又東山殿此壺被召上時。
文ヲモ不見。先壺御覽被成候ニ付テ。
マダ文モ見ズアマノハシダテ
ト云歌ノ心ニテ。ハシダテト付タル説有。名
人ノ一世所持ノ壺ナレバ。御茶ノ事幷御壺
ノナリ。土藥。何モ言語ニ絶シ候。七斤入壺
也。
一九重　　　（[illegible]モスヤ）宗安ニ有。
此壺ハ匂ヒノ深キ壺也。今日九重ニ匂ヒヌ
ルカナト云說ニテ。九重ト云舊說有。七斤
上入。
一八重櫻　　　明智日向守所持。
此壺モ右ノ歌ニテ名ヲ付ル也。九重ト等キ
壺ト云事也。
古郷ノ奈良ノ都ノ八重櫻今日九重ニ匂ヒ
ヌル哉
此歌ニテ二ツノ壺ニ名ヲ付ル也。七斤入壺

也。日向死去ノ時坂本ノ城ニテ火ニ入失申候。

一刁申　宗彌ニ有。

此壺刁申ト云事。天王寺屋ヨリ出タル壺也。天王寺市ノ日。刁ノ日申ノ日也。天王寺市ノ壺ト云ヿ也。六斤八袋入。

一白雲　家康様ニ有。

七斤入ナリ。此(比イ)土藥殘所ナキ名物也。御茶ノヿハ古人褒美シ置ヌ。

一スソ野　前田殿ニ有。

此壺珠光ノ見テ。トヲ山壺ノ下ヘサガリタルニ依テ。スソ野ト名ヲ付ラル、也。御茶天下無双ノ壺也。

一雙月　蒲生飛彈守殿ニ有。

此壺三ケ月ト双ト云事ニ双月ト云也。コブ五ツ六ツ有。六斤七ツ入也。

一時雨　長岡越中殿ニ有。

此壺時雨ト云事。十月ノ比口ヲ切比ナレバ。取分面白キトテ時雨ト名ヲ付ル也。六斤七ツ入。紹鷗ナド褒美シタル壺也。又葉ニ時雨ノ様ナル所モアリ。其ニテ時雨ト云説モアリ。

一淨林壺　宗及ニ有。

土一段ノ壺也。御茶六斤七ツ入。金五十枚ニ關白殿ヨリ拜領也。

一千種　德林ニ有。

引拙ノ壺也。

一深山　京立賣。

此壺遠山二通リ有ニ依テ古人名ヲ付ル也。

右此大壺ハ引拙子悉年四十三歲內ニ見果候。

此外少々ノ名物。又ハ名物ニ益程之御壺方々ニ有。下々ノ眞壺マデハ其數ヲ不知ト云畢ル。

一石之事。昔ハ其數多シ。高麗鉢又ハ漆鉢ニ立

ル也。當時悉捨ル。但此兩石ハ名物成ニ依テ。末賞翫スル人モアリ。

一殘雪　本願寺門跡ニ有。

此壺樣子五寸カ。ハヾ二寸八分。上ヘノ高サ一寸九分カ。黑キ石ニ高キ所ヒクキ所山ノ如ニアリ。其內ニ白キ石峯ニアリ。是ヲ殘雪ト云也。但此石拜見不申候。舊說有。

一末之松山　宗悅ニ有。

右之石モ大方似タル樣子也。上下一寸八分。橫ヘ五寸五分。前後ヘ二寸九分計カ。是モ高キ山下（ヒクキ）山アリ。黑キ石ニ白キ石上ニマジリタリ。

（本哥）末ノ松山波コサジトハト云心歟。

右兩石。ナリハ不定。鉢ニ立ル時。備後砂ト云テ米程ナル白キスナニテ。上手程石ノナリヲチガヘテ立ル。但當世ハ如何。此石拙子拜見候。

一七臺

此臺黑キ臺也。幅輪チウチヤク朱ニテ梅ノ鉢アリ。同朱ニテ一文字アリ。此內梅鉢一文字ナキモ二ツアリ。

關白樣ニ二有。秀長公大納言殿有。（二臺歟）前田殿ニ有。宗及ニ有。以上五ツ一ツ總見院殿時火ニ入失候。一ツ松永時失候。代二千貫ヅヽ也。

昔美濃國ウルキマシト云所ニ。寺物ニ七ツナガラ有。能阿彌見出御物ニナル。

一尼崎臺

上十百貫ニ宛ツ。

一尼崎臺

下十代五十貫宛ツ。

右此臺黑臺也。朱ニテ臺ノ內ニムカデ印有。當世大名道具也。侘數寄ニハ如何。

一紅龍臺

ツイ朱。此外ケイシヤクノ臺。カイノ臺。色

々有。是モ貴人御爲ニハ可然歟。此類天下ニ數多シ。數奇方ニハ如何。

一常黑臺

是ハ平ナル物ナル間。貴人凡人ニ謹ニモ可然歟。

一天目之事。紹鷗所持ノ一ツ。白天目一ツ。天下ニ三ツ。内二ツ關白樣ニ有。引拙ノ天目堺油屋ニ有。何モハイカツギ。此外ハイカツギ方々ニ有。上中下委其數ヲ不知。此内ニ三ツハ昔ヨリ數ノ臺ニ居リタル天目名物也。

一黄天目

是ハ灰カツギニヲトリ候。只天目是ハ世上ニ多キ物也。此三色ハ天目ト云也。口傳ニ申渡者也。天目ハ藥和ニ。ナリハツボフカキガ能候。

一ケンザン

此内影皇(ヤウヘン)。油滴(ユテキ)。烏盞(ウサン)。別盞(ヘツサン)。タイヒ盞(サン)。此六ツケンザンノ内也。代カロキ者也。口傳ニ申渡候。

此天目悉拙子拜見申候。

一松本茶碗

代五千貫。總見院殿御代ニ火ニ入失申候。樣子五ツキ。サウタルセイジノ茶碗ニ上ニフキ黑有。クチ五寸二分。高サ一寸八分。イトゾコ一寸七分。善茶碗トハ此事也。

一引拙茶碗

代三千貫。總見院殿御代ニ火ニ入失申候。茶碗ノ樣子少ヅヽ替候ヘ共。善茶碗〔松本茶〕ト同。

一安井茶碗

樣子少ヅヽ違イ。二ツノ茶碗ニ同ジ。關白樣ヨリ豐後ノ大守ヘ被遣候。代三千貫。

天下ニ三ツノ茶碗トハ此事也。

一珠光茶碗

總見院殿御代ニ火ニ入失申候。唐茶碗也。ヒ

シヲ色ヘラメ廿七アリ。宗易ヨリ千貫ニ三
好實休ヘ參候。此類薩摩屋宗忻ヨリ九州ヘ
參候。此外未二ツ有。
一コン子ン殿茶碗
[青磁歟]清紫之物也。當世ハ如何。堺滿田方ニ有。
一善好茶碗　(堺)宗及ニ有。
昔紹鷗道陳所持。數奇道具之由。
一井ト茶碗　關白樣ニ有。
此一種山ノ上宗二見出名物ニナリ候。高麗
ノ茶碗也。
總別茶碗之事。唐茶碗ハ捨リタル也。當世ハ
高麗茶碗。今燒茶碗以下迄也。比サヘ能候ヘ
バ。數奇道具ニ候也。摺子悉拜見申候。
一茶杓
朱德象牙。昔紹鷗所持。茄子ノ茶杓也。
一茶杓
朱德二ツ目結象牙。總見院殿御代火ニ入失
申候。
此外朱德之茶杓可有數。次ニハネブチモ茶
杓ケヅリ也。
右兩作當世ハ捨リ申候。如何。
一竹茶杓
朱德作。アサギ代千貫。總見院殿御代ニ火ニ
入失申候。
一魚夫硯　宗凡所持。
此硯於唐ペイケイセウ所持。硯ノ裏ニ賓晋
齊ト云字堀付テ有。
一宗達之臺子之內四ツクミ
一平釜
珠光ノタキ桶今宗及ニ有。總見院殿御代ニ
火ニ入失申候。
珠光之合子柑子口柄杓指
宗及ニ有。總見院殿御代火ニ入失申候。
引拙之棚之內

ウハクチノ平釜關白様ニ有。フトンノ釜。今宗及ニ有。宗易荒木所持。今二ツノ内也。銅ノエン桶。

クルミクチノ柄杓サシ。

台子水コボシ。

右嚴之外ハ如何。

一火筋之事

但高麗筋(ハシ)昔紹鷗所持。宗久ヨリ代五百貫ニ平野へ行。彼所ニ有。

一サガラ高麗ノ筋

紹鷗鐵ノ筋兩種。總見院殿御代火ニ入失申候。

一四方盆之事

昔ハネタヌリ名人也。中比ハ法界門上手也。紹鷗茄子ヲ始テ法界門也。上ハ卅貫。中ハ廿貫。下ハ十貫。

一内赤之盆

是ハ唐物也。外ニ花ヲ色々ホル。梅。クチナシ。菊。ボタン。芍藥。此分ホル也。ツイシユノ手。裏黒。朱ウルシニテエンセン東方ト云書付アリ。作張盛。代百貫十枚アリ。又小形ナルガ十枚アリ。是惡シ。代口聞次第。

　侘花入　　宗薫ニ有。

一手燈籠

唐カゴ也。昔紹鷗。

一紹鷗備前筒　　石橋良叱ニ有。

備前物。竹子宗易堀出シ。墳之助殿御代ニ失申候

一袋棚ト云物有。引拙紹鷗是ヲ専ニ度々嚴ル。口傳直ニ申渡候。

　名物之釜之數

一平雲

松永代ニ失候也。

一宗達平釜　藤波平釜二ツ

信長公御代ニ失也。但此三ッノ釜ハ當世ハ
有テモ不用。
一紹鷗小霰ノ釜　關白樣ニ有。
水二升上入。天下一也。
此釜信長公ヨリ宗二拜領仕。關白樣へ進上。
一乙コセノ釜　關白樣ニ有。
水四升八合入カ。
一セメ紐之釜　關白樣ニ有。
水五升三合入。
一ホウロク釜　關白樣ニ有。
水三升入。
一引拙ウハクチ平釜　關白樣ニ有。
右五ッ古今之名物也。
一珠光鍋釜
代千貫。當世ハ宗易如何ト云。
今井宗薫所持也。
一紹鷗ノシヤウハリノ釜

一宗易シヤウハリノ釜
此外ノシヤウハリノ釜モ。又宗久林徹ノ釜。
宗甫。善好釣瓶。モスヤ宗安。宗易釣物。何レ
ニ昔ヨリ申傳釜ハ當世如何。口傳申渡候。
一引拙之大霰之旅釜　（大納言）秀長公ニ有。
右御釜ハ古今ノ名物也。此外紹鷗ノ霰釜幷
筵釜。是ハ數寄〳〵タルベシ。三ッモニ大釜
也。水五升計入。惣別當世ノ釜大カタニ。上
ヘ長ククチセバキ釜ハヤリ候。第一ハダヘ
ヨク。但小釜モナリクチハダヘサヘ能候ハ
バ數寄ニ入候也。悉拙子拜見申。口傳ニ申渡
候。

名物ノ水サシ

一紹鷗イモガシラ　關白樣ニ有。
天下一也。大物。
右イモガシラ有方々數。其ハ如何。但數寄數
奇。

一紹鷗シガラキ。宗易シガラキ。何モ昔水サシ也。

一玄哉シガラキ見事
堺之助四郎ニテ失申候。未出候ハンカ。

一宗及イモガシラ。依主可爲奇特歟。

一カメノ蓋　南蠻物　關白樣ニ有。
土物也。天下ニ一ツノ物也。

一シユカンカメノ蓋之蓋。紹鷗ナド一段褒美候。當時[illegible]和尙ニ有。

一此外カメノ蓋方々ニ數多シ。當世ハ如何。

一紹鷗スイロノ棒ノサキ。宗久ニ有。カトノ物。色少薄黑ニクロシ。

一紹鷗石菖鉢　宗久ニ有。
當時清紫ノ物。花入ニモ成ニ。

一宗析石菖鉢　春屋和尙ニ有。
右同。

一紹鷗備前物之由面桶。モスヤ備前物之カメノ蓋。宗易ノタコツボ。宗及備前合子。ミキタヤ棒ノサキ。右五ツ何モ數寄道具也。

一紹鷗之[illegible]在銘。

一宗易アツキ圓。但唐カネ也。荒木攝伊丹ニテ失候。攝州鐶ハカキモトヲシガ專也。
右之宗易鐶ニハカキモトヲシガ天下一也。

一紹鷗色紙　今井宗久ニ有。
月下繪ニ有。定家ノ仲丸ガ天原ノ歌也。宗及色紙傳下繪ニ有。惠慶法師ガ八重葎ノ歌也。
右定家之色紙之事。下繪ノ有ガ善。下繪ノナキハ惡シ。

一炭取
紹鷗カゴ宗久ニ有。昔ハカゴノ手又ハ食籠炭取ハヤル。當世ハ瓢簞マデニ候。

一ツルベ。面桶。竹之蓋。並此三色紹鷗好ミ被出候。

一自在ハ昔ヨリ有。但紹鷗宗易好ミ被出候。猶以當世數奇道具ニテ候。

以上悉口傳ニ申渡候。

一花之事。十月ニ御茶ノ口切候。白梅。〆柳。薄色椿。白玉椿　金盞銀臺。此花何モ冬專ニ用ル。寒菊モ冬生也。并右ノ花春ハ勿論也。

夏ノ花

一芍藥　薄色ノ千葉。但赤芍藥ハ無用也。

ウチノ撫子。石竹。桔梗。夕顔。白芥子。朝顔。萩。眼皮。右大形注ス〔註一〕。何レニ此外成モ白キ花ハ入ベシ。赤ハ無用カ。一八。ムクゲ。是モ白キハ入ベシ。

春菊モ可入。又秋ノ菊ハ細口ニハ無用也。

眞手桶。ツルベ。花カゴナドニハ可然。

一善花瓶ニハ萬草悉可入。又花ノ上手ハ何レノ花モ手柄次第也。花ニ法度ヲ云ハ初心ノ爲也。口傳ニ申渡。

一會席之事。色々樣々每度替也。其内正體ナルハ日々難度モ可然。其内珍キテダテハ十度ニ一度二度歟。名物持ハ卅ヨリ内。茶湯仕出衆ハ五度迄モ可歟。第一物ヲ入テソサウニ見ル樣ニスルガ專也。口傳ニ申渡者也。又大名ヲ申入時ハ。珍敷作分可出ス。又會席當代ハソサウ也。紹鷗代ヨリ此十年先マデハ。二膳三膳金銀ヲ鏤候。菓子ニ結花ナドアリ。

一茶湯者之覺悟之事。

一上ヲソサウニ。下ヲ律儀ニ。物ノハヅノ違ヌ樣ニスベシ。

一萬事ニ物ノ嗜并氣遣。

一キレイズキ心ノ中猶以專也。

一朝起夜放シ。

一酒ヲヒカユル事。又婬亂モヒカヘ候ベシ。

一茶湯ヲ冬春ハ雪ヲ心ニ晝夜スベシ。夏秋ハ初夜過マデ可然。但月ノ夜ハ獨ナリモ可及

深更。

一人ヲ見知可〔寄歟〕奇合事専也。第一我ヨリ上ナル仁ト〔知〕智音スル事尤可然候。

一茶湯ニハ座敷。路次。境地勿論。竹木ノ在所并タヽミ。此分専也。

一能道具持事。但珠光并引拙。紹鷗。宗易。此衆ノ心ニ被懸茶湯道具専也。

一茶湯ハ無能ナルガ一能也。註ニ曰。人間ハ六十雖定命。其内身ノ盛成事ハ廿年也。茶湯ニ不斷身ヲソムルサヘ上手ハナキニ。彼是ニ心ヲカケバ。何レノ藝モ下手ノ名ヲ可取。右口傳ニ申渡。

又十體之事

一目開

註ニ曰。茶湯ノ道具ノ事不及申。目ニテ見ル程ノ物ヲバ善惡ヲ見分。人ノ跳程ノ物ヲ嫌ラシク好コト専也。口傳申渡。目開ニキラフ事。ムマキ物ニ似タル物ヲスグ目開ヲ嫌也。

一手前

濃茶ガ専也。是ヲ眞ノ茶ト云。世上ニ眞ノ茶ト云ハコイ茶ノ事也。是ヲバ手前ヲモ身ヲモクツシテ。コイ茶ヲカタマラヌ様ニ。イキノヌケヌ様ニタツル也。其外臺子ノ四ツ組并小壺。肩ツキ。其外在此中。

一圍爐裏風爐炭灰之事。

註ニ曰。炭ノ手不知數。但朝ハ炭ヲナガレテ面白様ニ置也。總別冬ハ曉寅ノ刻ヨリ茶湯仕カクル也。然バ日ノサシ出ニ爐中面白シ。茶湯ニハ湯ノワク様ニ無味ニ炭ヲヲク也。客人歸様ニ手ヲヨク也。一日ノ間ニ炭ヲ不取合。流次第ニ置也。日暮カラ夜放ニ更ニ隨テ手ヲ可置。次灰ノ事カヘ〱手ギワヲ眞ニ入テ。ソサウニ見ユル様ニ灰ヲ入也。口傳申渡。

一所作。一花ヲ生ル樣。一繪墨蹟ノ懸卷。一臺天目ノ茶ノ呑樣。同數ノ臺萬ノ臺同前。一コイ茶ノ呑樣。

一床ヘ道具上ゲ下シ。一小壺肩ツキ四方盆ニノセ。客ニ成テ拜見ノ仕樣。一風爐小板ニ釜ヲスグニ並樣。同圍爐裏ニ釜ヲ釣樣。其外手仕程ノ所作ノ事也。

一會席ノ事右ニ委註畢。揔別茶湯ニ作ヲスルト云ハ。第一會席又ハ曉呼カ曉行カ。第二ニ道具ノカザリ樣。扨ハ宮仕ノ珍數カ。如此類也。但人ノ仕タル作ヲバ曾以似スベカラズ。我新作分ノ百韵ニ五句三句スベシ。

一客人振之事大形口傳ニ申渡。

第一朝夕寄合間成𪜈。道具ノ開キ又ハ口切ノ義ハ不及申。常ノ茶湯成𪜈。路次ヘハイルカラ立マデ。一期ニ一度ノ參會ノ樣ニ。亭主ヲシツシテ可威也。公事之儀。世間雜談悉無用也。御茶立ツ前ハ無言。次ニ亭主振ノ事。客人ヲ底ニハ可成程シツスベン。貴人茶湯ノ上手ノ事ハ不及申。不斷寄合衆ヲモ名人ノ如ク底ニハ可思。但上ヲバ如何ニモソサウニ可仕。客人呼合也。道具開ニハ一人カ。此内一座ノ建立口傳在此中。又食ノクイ樣勿論此中ニ同。

一數奇雜談ノ事。古人申舊候。名物之羽。御茶湯之上古上手ニ越。廿年可習事。

一茶湯ニハ作意第一也。習骨法。普法度悉雖盡ト。非作ナラバ若狹屋宗可。梅雪同前ニテ可果。茶湯仕樣之儀習ハ古ヲ專ニ可用。作意ハ新ヲ專トス。風體ハ堪能ノ先達ニ可任ス也。

一茶湯之師匠ニ別テ後。師匠ニ〔古筆〕用ル覺悟一切之上ヘ。佛法幷能亂舞カ。上左歌道。又下々ノ所作ナリ𪜈。名人ノ仕事ヲ茶湯ノ手本ニ

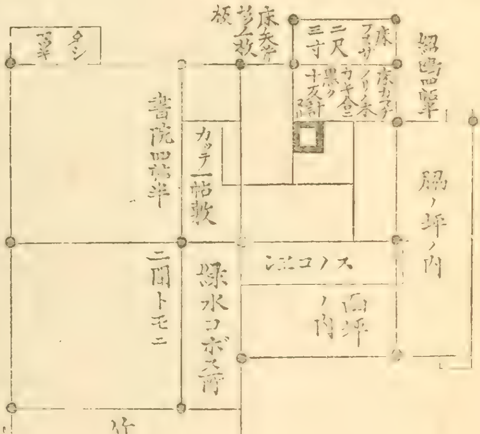
取也。茶湯ハ禪宗ヨリ出タルニ依テ禪宗ノ學ヲ專ニス。第一侘數奇專也。又茶湯ノ師匠ニ成覺悟。茶湯ニ卅年抛身。我茶湯ヲ嗜ミ。茶湯之義坊主ヲセマジキトテ逼塞スル目聞ヲバ天下カラ呼出ス也。又我茶湯ヲ被亂。天下ヘ出坊主顏スル者ハ梅雪同前也。茶湯座敷ニテセマジキ雜談此歌ニアリ。

我佛隣ノ寶聟舅天下ノ軍人ノ善惡

夢庵ノ御作也。

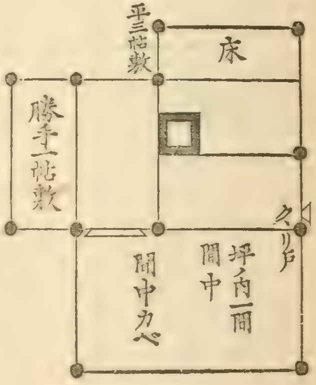
一茶湯上手ニ成テ入事也。初心ノ時此五ツノ覺悟ヲ持バ。一期不上上手ニテ果候也。一コヒタ。一タケタ。一サヒタ。一侘タ。一ヒヨンナ。作者ヲ專ニスケバ茶湯不上也。如右上手ニ成テハ五ツ第一入ヿ也。是十體也。

一孔子曰。十五而初學。卅而名立。四十而不迷。五十而知天命。六十而隨耳。七十而從發心處不越法。此語紹鷗密傳ス。

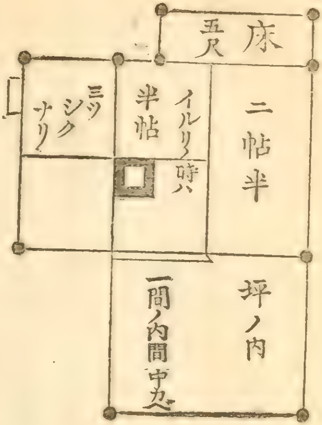


天井敷板ノ間七尺一寸。床天井ハ七寸サガル也。コカベノアイ少長ク。カモイウチノリヨリヒキシ。

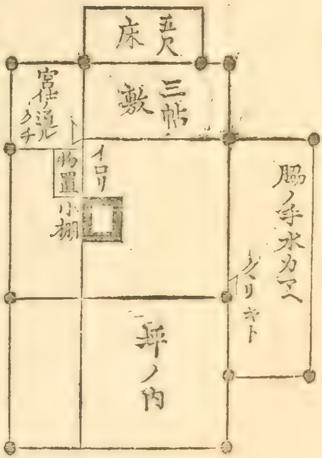
右此座敷紹鷗ノウツシ也。但北向坪ノ內又ハ見コシニ松大小數多シ。天井ノ子板杜檜。眞ノハリ付。黑フチ有リ。勝手フスマ障子黄。引手書隱（晦イ）二間トモニ四帖半也。其後宗久。宗易。宗凡。宗及。此外ノ唐物持京堺ニ悉是ヲウツス。但紹鷗カヽリハ北向也。又宗易ハ南向ヲスク。昔モ珠光ハ北向。右勝手坪ノ內ニ大ナル柳一本有。後ニ松原廣シ。松風計ヲ聞。引拙ハ南向右勝手。道陳ハ東向右勝手。宗達モ右勝手。何モ道具ニ子細有。又臺子ヲスクカ。當時紹鷗ノ流カラ悉左勝手。右勝手ハ不用也。



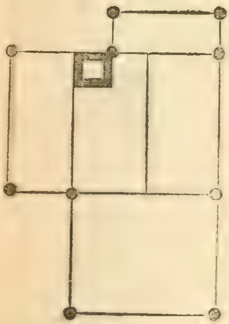
三帖敷ハ紹鷗ノ代迄ハ道具ナシノ佗數奇專トス。唐物一種成トモ持候者ハ。四帖半ニ悉座敷ヲ立ル。宗易異見候。廿五年以來紹鷗ノ時ニ同ジ。當關白樣御代十ケ年ノ內。上下悉三帖敷。二帖半敷。二帖敷用之。去トモ昔珠光被申候ハ。ワラ屋ニ名馬ヲツナギタル好ト舊語ニ有時ハ。名物ノ道具ソサウナル座敷ニ置タル當世ノ風體。猶以面白歟。



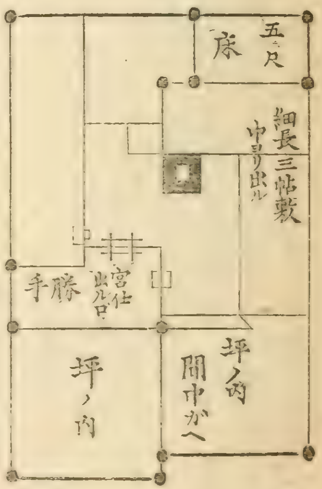
此二帖半ノ事。紹鷗ノ時ハ天下ニ一ッ。山本助五郎ト云人紹鷗一ノ弟子也。其人ニ好テ茶湯ヲサセラレ候也。侘數奇也。開山ト云。蓋並ノ五德ヲ一種ニ持ッ。但當時ハ此五德モ藤コブノ五德モ不用。



細長イ三帖敷。宗易大坂ノ座敷ノ寫也。但道具物茶湯ノ後者ハ仕也。侘數奇初心ナル茶湯ニハ無用歟。



二帖敷ノ座敷關白樣ニ有。是ハ貴人カ名人カ。扨ハ一物モ持ヌ侘數奇カ。此外平人ニハ無用也。又宗易京ニ一疊半ノ始テ作ラレ候。當時珍數ヿ也。是モ宗易一人ノ外ハ如何。孔子曰。及七十從發心所不越法。此語ヲ宗易常ニ思。主名人ニ身ヲ赦シ。山ヲ谷。西ヲ東ト茶湯ノ法度ヲヤブリ。物ヲ自由ニス。但宗易一人ノ事ハ目聞ナルニ依テ何事モ面白。平人宗易ヲ其儘似セタラバ邪道ト云々。茶湯ニテハ有間敷モノ也。但宗易ニ骨ヲクダキ身ヲクダクカ。又ハ金銀山ニツムカ。別而氣ニ入タラバ。其上ニテ主ノ年比。主ノ道具樣子。其身ニ似樣。今ニ茶湯可爲相傳者也。如此心持ナラバ上手ニ可成事眼前歟。



山上宗二大阪ノ座敷細長三疊ジキ也。右座敷ノ指圖六ツ仕候。此外作事ハ百ハ百ナガラチク〳〵替者也。當世ハ大形此一書ノ通歟。

一圓柱妻松之皮カツキ。同栗ノ木歟。

一四方物ハ堺ニ有。ヒハサスヌケ杉ケタカ。

一床ガマチ京丸タ。檜ノ皮ムキ。床四分一珍ク。竹柱スク人モ有。ヲトシカケ。杉ケタ。

一天井コモノ色付堺ニ有。ニガ竹二本ヅヽ双

テ打。一間間中ノ間ニ十三通。但廻フチハ唐竹也。同高サ六尺五寸六寸ノ間數奇次第。床ガマチ京丸タ。檜ノヒンムギ。
一二疊平。平三疊敷。細長三疊敷。大方同作也。少ヅヽ替事ハ作次第。
一宮仕之事。唐物持ハ兒ノ樣成子ヲ若衆出立ニメカ。又ハ喝食カ。又十二三ナル沙彌。是ハ誰ニモ似合候。當時二疊半程ノ侘數奇ハ亭主宮仕可然。
一當世ハ唐椀。鉢子。ツバメグチノ椀。黑椀。精進椀。皿モ悉ヌリ物ヲ遣也。堺空願。奈良ノ才次郎ニ有。
一折敷。鷺口ノ皆朱。本膳。小膳。此外スイモン栗色ノ折敷。數色々有。是モ右ノ二家ニ有。但數奇〳〵ト申ナガラ。椀折敷ハ新ガ賞翫也。貴人ヘハ木具可然。付箸京ノ白筋。楊枝柳。次ニ小板モ空願ニ有。

一茶湯ノ小道具自在柄杓兩種。堺養泉房ニ有。京ニテハ作雲柄杓善。同代。
一眞手桶ナツメ兩種。京ノ天下一。盛阿彌ニ有。
一天下一ノ茶桶。下京藤意ニアリ。ナリ比宗易ノ好。
一奈良風爐。西京宗四郎。五徳ハ奈良ノ天下一作意ニ有。
一茶杓慶首座ノ流。
一ツルベ。堺今市ニ有。井面桶堺中町ニ有。
一茶湯ノ出立。上ニ宇治サラシノヌノコ。裏ハセンシ。色ハ數奇〳〵アイニヱリヲヽイ。袖グチ紙子。下ニ加賀染。道具ノ開カ。始メタル所ヘハ。上ギノ小袖新ガ吉。貴人ヘ行時ハ。依事織色可然。亭主ノ出立ハ。ハリハウシヤウ新キ。如何ニモアカツカヌヲキルカ。又貴人ニ行時ハ十徳小袖。何モ新ガ吉。
一帶。頭巾。鼻紙。汁巾。二ッ。扇。ワラ。金剛。十徳。每度新キ吉。但心安キ所ヘハ十徳バカリハ古クテモ不苦。又貴人ガ始タル所ヘハ新

ガ吉。肩衣袴ハ毎度新キガ吉。

一茶巾。茶筅。小板。ツルベ。面桶。新ガ吉。自在。柄杓ハ少古クテモ不苦。五德ハ古キガ吉。

凡古今茶湯ノ名人ノ名大形註シ侍リ畢。

一毎阿彌。（普光院御代）　能阿彌。（慈照院東山殿御代）　藝阿彌。（同）　相阿彌。（同）四人代々公方樣ノ御同朋也。御繪之外題此衆也。能阿彌名人也。忠昌藏主天下一ノ手書也。此仁ニ能阿彌好ニ就テ菓子ノ繪ヲ始テ。外題多シト也。

一珠光。（奈良光明院）　松本珠報。（山名殿年寄衆）　篠香爐家。（公方□□）　道提。（京千本）　善法。（京粟田口）カン鍋一ツニテ一世ノ間食ヲモ茶湯ヲモスル身上ヲ樂。胸ノキレイナル者トテ珠光褒美候。　古市播州。（和州〔□□〕）數奇ノ名人。珠光ノ一ノ弟子也。名物其數所持ノ人也。　西福院。（南都）　宗珠。（珠光聟目）　宗語。（下京）　善好。（京大口田）　引拙。（堺）名人。名物其數多シ。　藤田宗理。目聞也。紹鷗ノ始ノ坊主。　宗宅。（堺皮田屋）珠光ノ弟子。　紹滴。（堺竹藏ヤ）花ノ上手。　紹鷗。名人。名物六十色程有。　道陳。（堺北向）目聞。　宗里。（堺ムクノ）コヒタル覺悟一世ノ間侍人也。　宗達。（堺津田）臺主ノ嚴一世樂人也。　實休。（三好豐州）名物其數多シ。此外數奇者ニ可有之。關白樣。此外武士衆ハ不入。大坂ニ被召置堺衆ノ分。　宗易。（田中）　宗久。（今井）　宗及。（津田）　宗二。（山上）　宗甫。（重□）　宗無。（住吉ヤ）　宗安。（モズヤ）　紹安。（田中）

大方百五十年以來之茶湯者此衆也。

一茶湯名人ニ成テノ果ハ。道具一種サヘ樂バ。彌陀數奇ガ專也。心敬法師連歌語ニ曰。連歌ノ仕樣。枯カジケ寒カレト云。此語ヲ紹鷗茶湯之果ハ如此有度物ヲナド常ニ申サルヽノ由。辻玄哉語傳候。但茶湯ハ風體年々彌可替ノ條。其時ノ先達ニ可習者也。

一此玄哉ハ紹鷗一ノ弟子。小壺大事迄一人ニ相傳也。心ノ深者也。但目聞ハメクラ也。茶湯モ下手也。

一紹鷗ハ五十四而遠行。茶湯ハ正風體ノ盛ニ死去也。物ニタトウレバ吉野ノ花ノ盛ヲ過テ。夏モ越シ秋ノ月紅葉ニ似タリ。

一引拙ハ十月時雨ノ比。木葉亂時節ニ似タリ。七十而遠行。
一珠光ハ及八十歳遠行。極日冬木ノ雪ノ遠山ニ似タリ。
一右三老ノ行色々ニ替ト云々。但何モ面白シ。
一宗易茶湯モ早冬木也。平人ニハ無用歟。老年及七十。
一名物持ハ其年程ニスル也。侘數奇ハ年ヨリ若ク可然云々。是古人傳也。
一紹鷗ハ始ハ歌道者也。此詠歌大槪之序ヲ道遙院殿へ聞テ。扨茶湯之名人ニ被成。是ヲ密傳ニス。宗易道陳ハ禪法ヲ數奇ノ師匠ニス。拙子式モ右三老ノ跡ヲ續也。
一此一卷前後無口傳ニテ不分聞物也。一世ニハ可懸御目。直ニ可申上候。大形ハ道七ニ申渡候也。

右一卷。今度御行脚之節。予ニテ候道七ニ書遣候。道七其方ヘモ可致進上之由申候之條奉贈候。此書物ハ爲初心計也。總別茶湯ニハ從昔以來無書物。又無師匠。唯古唐物ヲ多見テ。晝夜茶湯ヲスク覺悟。是師匠ナリ。修多羅敎指月剌文字ノ。言句ハ。敎門瓦子舊語任ナリ。數奇者之上ニハ不入者也。

慈瑠和尙御和歌ニ。

ケガサジト思フ御法ノ供スレバ
世ワタルハシトナルゾカナシキ

此歌ヲ宗易老常ニ口吟ニテ候。世上末ノ世ニ成候テ。宗易ヲ始メ我人茶湯ヲ身過ニ仕事口惜次第也。錯今關事禪宗之眼可專用也。
一玉磵ノ讃有道七方。但右ノ讃ニ口傳猶以在之。

天正拾陸年戊子二月廿七日

山上宗二（在判）

桑山修理大夫殿樣

參

一卷他見被成間敷候。第一者名物之判モ候。亦者密傳モ多候。傍以御無用ニ候。道七ヲ預置遣ヘ罷下候條。何ヲ哉ト存。雖一世ニ不仕候調進候。若死去仕候ハヾ形身計候。

續群書類從卷第五百七十

飲食部八

茶道秘傳

一掛物かけ申義。第一竪に。

一同かけひずみ仕候儀。いづれの床にても。軸先をさげ申候。

一卷板第一あをのかざるやうに仕候。

一掛緒壁につき不申樣にいたし候。但一寸ほど候てよく御入候。

一卷緒必右へ引申候。併此緒すき道具にて無之候間。隨分みえ不申樣尤之事。

一繪讃のをの時。ときまきを必印の方へ引候へども。自然はちがへ候ても不苦候。

一卷紙のとめまき。いたのかど。

一同卷板のはづれにてもとめ候。

一同緒まきやう。うしろにて合義あしく候。まへよく御入候。

一三針の時。先中をかけ。左をかけ。右をかけ。扨掛合中をはづし申候。

一同はば一外廣候掛物も同事にて御座候。

一床の名所の義。軸を。軸もと、軸脇。三此外も御入候、

一床へ茶入盆にのせ上申候儀。墨跡により候へども。大方八寸計。

一薄板のをきやう。花入により少づゝ違申候。

はまの眞砂にて候。
一同疊の目。隨分はしたなきやうに。
一花入をきやう。是も花入により少づゝ相違之事。
一同花入第一すぐに仕候。
一ひねり申候義。いづれの床敷にても。きやくつぎを少ひらませ申候。
一花掛物との時心もち御入候。
一棚に羽箒をき申候儀。三所と申候へども。おほく御入候。
一同右羽の時。あいての道具右のごとし。
一同左羽の時必左。もしはちがへ候ても仕候。
一くわんのをきやう。合十四色。
一同しやうはりのくはんも同前。
一棚に茶入置申候事。茶入に寄申候へども。おほきに候はゞ。少さきへよせ申候。
一同ちいさく候はゞ眞中よく候。をきやうにて前へよりても不苦候。
一茶入の置やう。第一右をたかくいたし候。
一同かたみちがあるやうにてなきがまし申候。
一水指置やう。疊のめ薄板同前。
一萬事の道具。棚の上。疊の上。心持御入候。棚上先より疊の上落。
一水指などは先へ寄よりも前まし申候。
一常の小座敷にては。水指のふた第一水さしのとをり。もしはかはり候ても。
一床に道具一種の時は。かならず棚に二種第一の事。
一床に二種の時。棚に一種。
一水さしの蓋はちきなとの時はよこ可然候。
一水指と茶入と二種置合候時は。必組入候事。
一水指と茶にてと茶入との時はつねのごと

く。
一水指と花と茶入置申候時。疊かならず今一種道具をそへ申候。
一水指をはなれ。三種にても不苦候。
一水指と置合候時に。茶入さやくつぎより三分一かけ申候。
一茶入水指をはなれ候時も同前。
一水指の先のかたに茶入組合候時も。右のごとく三分一。
一同はなれ先へより候ても三分一。
一袋の時風爐のまへに茶入置合候時必一種。
一二種にても置やうにて不苦候。右へより候ては。
一水指に茶入を組合申候。一種もよく御入候。
一同水指に茶入茶碗も置合候。
一茶入の紐かけ申候儀。下の見やう三分一などよく御座候。
一茶入盆にのせ水指と置合候事右に同前。
一同盆よりおろし候時。盆を前へ引申候事御入候。引候ても不苦候。
一同盆を引不申候ては。必手に取上。盆をふき申候。
一茶入床へ所望の事。花いかり候いゞ御無用の事。
一茶入拜見の事。茶入により。しきやう中りやく。同亭主により客により申候。
一いづれの茶入にても。ふたなどにしきしやうと申候へども。茶入により遠候ても不苦候。
一盆に茶入のせ候ていだし申候はゞ。いづれの茶入にてもしきしやう。
一茶たて候時。茶入のふたふちに置申候事。盆の心もち。

一茶入のふた。うす茶の時は必右必左。
一盆に茶杓のせ申候義。ほり盆の時左の先にもたせ申候。
一只盆の時茶杓必左の前。
一同角かけ候てもをき申候。
一棚に茶入のせ。茶杓置合候時も。只盆ともに左の前。
一盆ふき候て。ふくさ物にてなをし候事も御入候。
一同左へなをし申候義。ふくさ物左へとり候ても。
一茶入をふき。盆にのせ申候時。左の手をそへ申候儀。さどうたてとはこれにて候。
一五德のすへやうの事。何れの座敷にても。ひとつの爪客のかた。亭主のまへつまらざるやうにいたし候。
一床に硯置申候事。何の座敷にても右。

一床へ上り申候時。左より下申候時。右より。
一座敷の出入同前。かはり候ても。
一人に炭所望の時。下火取候てなをし申候事あしく候。
一四帖半にて盆に茶入のせ置申候所四所。
一同客座後。床の前の疊。必明申候義は。自然時による。
一同客ありきやう。いろりの疊いづかたにてもよけ申候。
一同茶たて候時。ふたをき先の疊。
一同袋棚の時。必ふた前の疊。
一同柄杓少すぢかへ。
一座敷へ出入しづかに。
一出申時勝手へ聞え候程に。
一床に墨蹟花二種の時拜見仕やう。いくたびも上より。
一盆たての時。茶碗もち出候ては。水こぼしの

先へをき申候へども。右にも自然はをき申候。
一寒天の朝。いろりのうち下火などに心もちの事。
一炭にも同前の事。
一夜咄三帖半にてたんけい向へ置申候。
一同二帖半にてはいろりのかたへ。
一同床にたんけい置申候儀。右左は時により申候。
一手しよくなく候て。炭をき候時は引よせ。
一同手しよく出し候時は。先大にすぢかへ。
一同釜上申候時は。向へなをし申候か。いづれにても不苦候。
一同茶たて候時は。水指のわき。
一朝の數寄にあんどんをき申候義。たんけい同前。
一同手しよく出し候事も自然不苦候。

一膳にやうじうち申候義。くわし御入候へば菓子の時。同くわし無御座候とき箸同前。
一小つぼもちやう。下に指を掛申候。しかしながらつぼによる。
一なつめこつぼに同前。
一中つぎかたつきに同。
一大かひかたにゆひかけ申候。
一臺に茶杓のせ申候儀。
一天目にさゝくのせ申候事。
一茶入の上に茶杓をのせをき申候時は。茶杓中よりも先へより申候。
一なつめ　同前。
一中つぎ　同前。
一肩衝もちやう。土に指をかけ不申候。
一眞の茶うすちや遲速之事。
一一帖半にて。ふたをきの目。必先へ。
一茶入疊にをき申候時。目のかけやう二いろ。

一くわんしやうのしもく。いづれのかつてにても可爲有候。
一臺子のをきやう袋棚同前。臺子はゞひろき物にて候間。先へ三寸七分ほどよく御入候。
一四つ組。水指。柄杓。立ふたをき。水こぼし。
一三つ組。水指。柄杓。立ふたをき。
一二つ組。水指。ひしやく立。
一七つかざり下四組に仕候て。たなに臺天目茶入。
一臺子の時。水さしのふたをきやう合七所。
一茶入より茶すくひ出し申時。あひ引。茶入引。さゝく引。

此一卷達而御執心候間。乍迷惑爲御稽古。利休相傳之通。愚意染筆候。一笑々々。

古 織 部

伏飛州公下書

喫茶雜話

一茗茶といへる事は。蘇摩訶童子經にいはく。天竺摩訶陀國。耆婆の墳墓より生出ぬる一株也。ある人ひそかに是を窺ひ見るに。名醫の舊跡より生ぜし事を不審に思ひ。彼一葉をつみ煎服するに。心すゞしく耳あきらかにして。暗きよりあかねさす日に出るがごとし。しかるに巨々等の人是を聞傳へ世々にひろめり。其後唐國に渡り。四百餘洲に流布せり。或日明恵上人渡唐せさせ給ふ。歸朝のみぎり。彼一株の種を袖につゝみ。筑紫背振山に移し。そのゝち栂尾にうつし。其後今の宇治山に移し給ふ。彼二ヶ所にすぐれ。宇治山の土産。皆人はらにあぢはひ深きもて遊びとす。忝も鹿苑。勝定。普光。慈昭。常德。法住勤政の御隙に。席上に奇珍をあつめ。潔

淸を樂しみとなさしむ。しかるに能阿。珠光。道喜。則祐等此風をしたひしと也。是より下つかたます〳〵天下に此道をこふなはれり。中比は南泉のさかひ紹鷗といひしもの。昔の作法をやはらげ。上中下あひかなひぬる樣になせり。又近き比は利休居士鷗が流れをくみ。鷗が作略をふまへ自記せり。誠に人間の樂介となりぬ。又傳に曰く。茗茶は甘く苦く。微寒にして毒なし。瘻瘡をつかさどり小便を利し。痰熱渴をさり。睡をうすくし氣を降し。宿食を消し。久痢赤白の熱痢を治す。熱飮によろし。冷湯にしては痰をあつむ。一に曰く茶。二に曰く檟。三にいはく蔎。四にいはく茗。五に曰荈。又早く採を茶といひ。遲くとるを茗といふ。

一御園は森。川下。武衞は朝日。奉行。京極は祝。奥山。奉行。山名は宇文字。奉行。已上六園也。此後上林是を加へて七種の園と號す。但異說種々あり。此ゆへに我茶をもお茶といへり。御所樣の御茶なれば也。

臺子の事

一四ッかざりといへるは。下の棚に釜。水指。ひしやく立。水こぼし也。但事により蓋をきせふろの左りに置事も有。是は四つの外也。有てなきものなり。口傳。

一七ッかざりといへるは。此上のたなに臺。天目盆に茶入あり。是もふろの脇に蓋置あり。但事による也。多分は置也。蓋置ともに七具なり。

一二ッかざる事は長板の事也。釜水さし也。是も蓋置は有事もあり。又なき事も有。たとひ長板なりとも。釜一ッすはる事はなし。なが板にも臺子のごとく四ッかざる事も有。口傳ならでは述がたし。

一柄酌〔杓歟〕立に火ばしをそゆる事も有。同じくはあしし。若火箸ある時さだうせば。火をなをして後。火ばしを炭とりに入て歸る者也。

一臺天目にて茶たつる時は。すこしきも水のこぼれざるやうにたしなむべし。湯水いるゝ事故實あり。

一數の臺は天目をだいにのせず。茶たてすましてのち。天目を臺にのせ客に進ずる者也。

一盆は下に置ながらふくべし。まづ四方をふき。扨巾をふき角にてふきとゞむる也。又手にとりてふく事もあり。下に置ふく事は。左りの手を盆にあてまじきためなる哉。

一茶入盆に置事。さきばしりといふ口傳あり。天目を臺にのする時も同前。此仕合はいにしへ今にかはらず。口傳。

一諸具を取出す通法。一番に臺天目。茶入。二番に蓋置。ひしやく。三番に茶筅入。四番に水滴也。扨かつての障子をたつる也。此法則も當世は略せりと見ゆ。

一天目にて茶たつる時は。ふくりんに茶巾さはらざるやうにうけてふくべし。

一茶喫しをはつて後。四でう半の坐席にては。天目。茶碗の置所さだまれりと。

一數の臺にて茶たつる事。臺より天目をおろしてたつべし。賓茶たつる時は。殊に臺をわきへのけてたてゝ。茶たてをはつて後進ずる時。天目を臺へあげしんずる也。又有說には茶たてすまして。先臺計客の前に置。扨天目を持參して。臺へのせて進ずるといふ說も有。是も理にかなへり哉。

一印の臺はかずの臺よりもかろくもてなすべき哉。

一數の臺成共。高貴の人は二口三口喫してのち臺をはなつべし。平人は始めより臺をは

なちて吞なり。高貴の人は何となく尋も心易きふるまひよし。われ物にさはる樣なるも亦あまり也。

一本に小壺置には兩の手成べし。常の茶入はかた手也。

一小壺。茶入など袋にいるゝ。元來は御成の時封つけんため也。其時は釜にもよく水さして。鬼面の龍がしらより紙えりを通して封付る也。水指も同前。是はどうぼうの役也。

一茄子。文琳。丸壺は一段位たかき上﨟也。袋に入てほりたる盆にのす。又は方盆にものす。天目と二つ置には長盆にのす。左り勝手も右かつても同じ。小壺袋にいるる時は。天目に袋する事なし。



かくのごとし。

一肩衝。大海はたとへば右の具の番衆にひとし。去ながらかたつきは方盆に一ッ置事も有。大海はいかゞ。肩衝と天目と二ッ置に長盆にかざる事有。二ッ置に大海を置事はなしと。扨此外に茶入色々有。能阿切かたに見ゆ。

一小壺はおよそ方盆に一ッ置事よし。

一小壺の見やう色々あり。主人うぢの茶をならし。先盆をふき。扨つぼをふき肩胴をふき。扨すそをふき面を見合せ。右の手にて盆に置中座へ出す。客次の人に一禮し末坐へさがり。壺は正面よりつゝしんで一覽し。そと亭へゑしやくして手にとり。左りの手にのせ。右の手にてまはし見べし。見るときに蓋の落ざるやうに。茶のゆるがざるやうにしづかに見べし。さて蓋をとりて盆に置。口を一覽し又内を見。蓋をして。又一返しくるりと見て。扨正面を見合せ。盆に置さまにい

たゞく事。頭べをさげ壺をすこしさきばしりして。兩の手にて盆に置也。

一中程の天目を上の臺にのせたらば。天目は中ほどいたゞき下にをく。臺をば一段しつしていたゞき。天目を臺にのせ次の人へ遣すべし。件の氣嫌は諸具にわたるべし。

一主茶たつる間は隨分鼻かまず。又手をつくともたなごゝろつかず。こぶしをかゞめ。外指をつくべし。

一船を見るには。すこし腰をかゞめ。立ながら先花を見。次第にふねを見。扨坐して一覽し。本坐にかへるべし。

一繪字はあかりをうけ。手をつき。床のきはにて見べし。それも小繪又は小文字等に立ながら見て。後に坐して見歸りてもくるしかるまじきや字繪執心の義也。

一畫中の見くだしの事。人形は面より次第に見くだすもの也。鳥なども同前。かしらより見ながす。草木は花實より見はじむる也。山水も同前。

一大人我に御立より有時は。建盞の天目など近き比ほり出すなどゝいひ。愛拶して御茶を進上有事然るべし。あながち天目にあらずとも。時の興にさやうの仕合しかるべし。

一小壺の茶たつる時。初二三はすこしづゝすくふべし。後はだぶりとすくふ也。

一茶巾にて天目茶碗などふくには。先茶置をふき。扨はたをふき臺にのせ茶巾をとるべし。はたをふきすましてのちは。中へ手をいるゝ事なし。

一茶筅入も蓋置もみな居坐疊の内に置者也。

一棚のむかふと屏風との間五寸ばかり。たなの脇と屏風の間五六分計。棚に釜水指をく

に。一すん四五分むかひへよする事は。蓋置をそかんため也。

一水指の蓋は角のたなのはしらへもたせ。水さしへ持せかくる也。

一初心の人は言葉ずくなにして。功者先達の物語を閑居たる體しかるべき哉。もし興に乗せば。名物の由來。名人のしつけ。上古中古の次第などを尋ぬべし。

一會の意得。膳菓子等にいたるまで。閑居の風情物ずくなに。器などあまりそろはずともたゞ珍しき風情を專用とす。是道者のたしなみなるべし。其外ふづくり菓子等にいたるまでかず有は富貴がまし。

一酒は元亂のもとひ。甚だすゝむべからず。其故は情を入たくはへたる御茶一ぷく。あるひは面々にたしなめる一種の具。一覽又はうと／＼しき人など清話のための一會なるに。沈醉して亂にをよばんは。主賓ともに本意なき哉。但たまさか遠來の珍客もし上戸ならばゝうす茶過盃を出し。かすかに厚味一肴して酒をすゝめ飾すべし。當世は珍肴をあつめ。大酒は是道のみちたるにあらず哉。

一後段といへる事なきにはあらず。或は客上戸。或は名物二種所持の人。席上に珍客あらば。後段して殘れる一種など一覽のためならし。

一晨午の前后。一段の名物は朝會。劣れる具は夕會たるべし。但事により風情有べき哉。

一座布の模樣。異風になく結構になく。目にたゝざる體しかるべき哉。然りといへどもその人々の相應たるべし。老人貴人富者は眞に構へ。少年壯人貧賤のわびすきは草にしたつべき哉。

一庭前のをもむき。さして草木うへず石たてず。砂まかず。栗石などならぶべからず。そのゆへは客他方に目を移さず。御茶に情を入。それ〳〵の名物に心をよせしめんため也。

一次の間の躰。手水だいの邊には。いかにもあを〳〵としたる草木植べし。其子細は爐邊の上氣をすゞしめ。小座布の鞘屈をのべんため也。

一開爐。閉爐。老者は十月に早くひらき。二月におそくとづ。少壯は十月より遲くひらき。正月の末にはやくとづ。

一年中茶の會の興行。初春に口をきり。早く知音を請ずべし。必初會たるべし。兼日の朝會は本也。兼日の夕會は次也。

一初春仲春茶の濃し前に必一會有べし。口切後は客の隙たるべき哉。

一不時の會は遠客の來儀。或は一種のほり出し。或は珍香到來。其外は炎暑に水そゝぎ。霜のあした雪の夕邊。爐邊をなかだちとして一ぷく催をせんは。道をしたひこゝろざしの深き道者の風なり。

一會後の禮法。貴主賤客なれば。客先禮。主居に禮。賤主貴客なれば。先主禮。のちに客禮す。老少はともに使札を以て禮を述べき哉。

一珍客貴客の相伴に參りては。先主人に禮して次に本客に一禮を述ぶ。御出に付名物拜見。御茶下さるゝ事かたじけなしなどゝ。

一會後の禮詞。名物有つれば。今日は御名物拜見。御茶下され忝なしと。若普通の御茶なれば。御手前忝しなどゝ述べき哉。

一主賓の禮儀。主開のきはに待て。一禮して呼入る。貴客なればきやくの宿へ迎に行べし。扨客入ば後證尻手をとづべし。

一貴客にじりあがりへ入るゝ時は。相伴の衆は鳥つくばひたるべし。御手水の時も同前。又刀屋の納所も其心得有べき哉。つぎ〳〵の禮儀かはる事なし。

一路次を通るに。始めの時庭前など感じ過。ゆる〳〵とあるは主客を待得たるにものうし。

一にじりあがる時。客の心得專用。床に花合〔臺〕など有に。風雨するに兼て其心得なきはけがある者也。

一床の置物一見の時は。同伴の禮儀。かならずはづすべからず。又萬物を譽るには初心功者の分別有べし。

一衣裳の模樣。賓は一段ときれいに。主は中程に。俗はとを紋。たとひ富貴の僧たりとも。綾からぎぬの類用捨有べき哉。又老入道は裳付のじつとくなども しかるべし。又は常のじつとくにても。但其仁によるべき哉。

一適の貴客には。茶巾。茶筅あたらしきをもちゆ。それ程の時は。茶巾のたち目ぬはざるものなり。口傳色々あり。かくのごときの尊客の時は。茶碗などに茶筅茶巾等を入。勝手より取出し。賓に御茶進上して後。亭此茶碗にてお茶を服すべし。一には憚。一には御用心の時宜也。

一着座して物がたりそとあり。御膳進上あるなり。膳のおもては食せざる前にほむる者也。或は木走或は珍物。又そさうなるは一段きれいなりと述べし。又は器主秘藏と見えば。是又そとことはるべし。惣別數寄の高聲なき事也。

一菓子出ば先楊枝を取。珍物あらばそとほむべし。但常のしつけとは少し相違す。子細あり。

一釜爐の時は炭を見ず。手水に立て入座のとき床を見。さて爐中を見。勝手の置合を見べし。圍爐裡の時は炭を見て立事。普通の儀めづらしからず。

一小壺より茶杓にてちやをすくひ出すに。さしぬくといふ口傳。相引といふ口傳あり。

一客至て貴人なれば。主は始終かしこまり茶たつる也。これをどうばうだてといへり。

一小壷のから物は。右の手にて盆にも疊にも置。和はたりの手にて置也。但客茶堂せば主ひさしの具は兩の手にても置べき哉。

一茶筅にて茶ふる事。まはりに茶のつかざるやうに。かたまらざるやうに。底にかたまりなき様に。いきのうせざる様に。泡のきゆる一様に。餘り久しくふらざるやうに。手さきにてふるべからず。肩にてふるべし。是深き故實也。

一御茶たつる時は。何時も蟻のたうわたりをしく者也。さあればすこし前へかゝりたるやうにしてよろし。

一かしこまる時。足のくみやう有。口傳。

一水こぼしにみづすつる事。座席の人數により大小の具に分別有。口傳。

一茶湯に隨眞と草との差異あり。或は御家門。或は大名などに御茶あげは。金銀をもりばめ。木具土器たるべし。但主によるべき哉。御飾は床に掛物。或は盆。香合。かうろ。だいすの上には茄子歟丸壷か。臺天目成べし。棚のしたには必四組也。眞の釜ふろに水指。南蠻柄杓立。古銅のくるみ口。柑子口。合子はからかねの關子色青と。

一主客の御茶たてをはつて。臺天目をふき。少し脇へのけをく也。扱壷をふく時。壷を實所望あらば。少しじたいして見すべし。此とき

盆にのする事も有。又壺計見する事も有べし。拜實壺を見る時。主の手前しまひて。諸具を勝手へ入べし。又壺計盆にのせて。床の軸はづれにをき。だい天目はたなの上に置事も有。棚にては眞中に置也。但其の貴賎によるべし。かやうなる眞の會には。賓も一段身を清め。衣裳をも分別し。起居清潔實用たるべき哉。めしの用ひ樣。其外菓子喫茶等法則に任せ執せらるべき哉。

一請暇あらば先床前の上下を詠め。何にものこりなきやうに。いんぎんに禮詞有べき哉。

一名物一種もなき人は。たどきれい一ぺんを嗜むべし。萬めづらしくさすが道理にかなひ。まはらざる仕合工夫して。さらりと茶堂したるさま。たとへば小侍の一かどの高名したるほどの手がら也。但此は〔本ノマヽ〕ごか數寄は世間になす人稀なり。多分富貴のさまかなはずして似せたる物ぞと。此等の人は縦百年のふるとも。すきの高名はなるまじ。又道具持のさりやくへたなるは。一大將のをくびやう成心なり。

一かくれなき名物の出たる會席にて。余のこまだうぐに目めわけて見る事無仕付也。第一に名物をねん比に見べき也。第二にころ。第三にくすり。第四に土。第五に手。第六におもて。第七にせなか。第八に色。第九に紋。第十にをもさかるさなどを見覺えべし。又名物の外に小道具めい〳〵に所望する事無仕付也。

一扇を座しきへ持て行には。入時は懐中し。坐して后取出すべき哉。

一主賓ともに立時は必跡を見べし。物を殘すか。又は跡をのごふ事も有べし。

一末座の客衆は物を取次法也。上座の人返擧

にとりつぐ法なし。但禮をば述る也。一説に。六でうじきにてはとりつぎ。四疊半にては取つがざると。

一茶席の會合の時。諸篇くどく慇懃すぎたるは。還而不仕付也。

一茶湯は平生主君に對するごとく。自身茶たつるとも。又諸具をあつかふとも。いんぎんにすべし。かくのごとくたしなみ深き人は。はれ成ときあやまちなし。けいこをはれとし。はれをけいことする事。何れの道にも有。平野の宗悉といへるもの。沈醉して秘藏の筒をわりけるもかやうの義也。

一初發心の者は。師の敎のごとく。いかにも慇懃にかたへ業堂すべし。未手熟すれば。自然にさらりと手前成物ぞと。始めより上手のまねをなせば。一生手まへすなをならず。萬藝も同じ。

一茶入に茶抄置は。物體のまへにをかず。右勝手の時は右に置。左りかつての時はひだりに置もの也。秘すべし〳〵。

一ひねり返し口の見事成物體は。蓋をとりてやがて感ずる者也。主への愛抄ふかし。諸具准之。又は兼て聞及びたるよきところへ目を付賞歎すべし。又かねてあしきといふ所。疵有所は見そらすべし。早くまはして吉。是功者の心得也。

一小壺天目等拜見の時。あせたる手にて主の所へさはらざる様に。藥の所をまはすべし。しらざるものなでまはせり。されば道しらざる人には。たとひ所望ありとも。此道場へ入まじきとはヶ様の義也。

一賓主物がたりの用捨。賓は主の飾まざる樣に。主は賓の氣にあたらざるやうに。疵有具所持の人には。きず有具は曲なきの類。余准

之。

一若壯老の數寄の分別とは。若き時はいかにもこはし。さかり成時は若老をかねゝ。老者はいかにもはなやかにすべし。さあるにより壯年のすき大事也と。

一大き成釜をはいかにも手がろく。小釜をはいかにもをもき樣にあげおろすべし。手首に習ありと。

一ふづくりの意得とは。珍物はたくさんにもるべし。たとひ厚味の物成とも。時節ならざる物はそともる也。

一本の數寄道具といへるは。物體のうち八分おもはしうなけれど。一ツ二ツを以て八ツをけす樣成具を上品とす。さあるにより茄子。文琳。肩衝。大海。天目。繪。花入等にも。上品の具にはそこ〳〵の見所ありといふ。件の大事は以來古市播州。珠光。松本。志野宗伯等的傳せしを。又慶讃。藤田。本行坊。宗珠。紹鷗相續して切磋琢磨せり。

一黄昏の茶湯とは。不時に宵に責來るには。唯釜爐の内の火の光り計にて呼入。さて次の間より灯を漸出したる事面白し。

一茶過て湯まで進じ。客の歸りさうなるを見合せ。走火をなをし。ゆる〳〵と退席なさやうにすべし。油火も同前。又客の立樣には。床の具爐の勝手等をいかにも執心がましう一覽してたつべき也。

一萬月の末にうす色の椿を所持して會あるに。椿を二樣にいけし人あり。宗珠がいはく。二株の内いづれか御本走と戲れしと。

一籃はうす板にのせず。おさに疊の上成べし。

一見合をきゝといへる事。此道の肝要たり。例へば下戸に酒をすゝめ。上戸にうすく盃してしひず。又用所しげき人に。べん〳〵と一

種の具いださず。萬手(丁寧歟)ねぞ成しあはせあしゝ。又病者に禁物の差別なく。又極老の人にかたき物を出さずの類。余准之。

一圍爐裏の茶堂は。たとひ高貴の賓成とも。とうどしてお茶をたつべし。胴をすゑざれば。手不自由にしてお茶たてにくき者也。役者のゆへとうど居る事其憚なし。

一貴人兼日より申入るゝには。せと天目等成とも。心新しきを本走とす。

一極寒氷雪のみぎりは。初入の前より炭おほく置べし。氷雪の路次。或は遠來の客。或は老人など別してしやうくわんには。火鉢に火を多く置。席をあたゝめ。入坐の前。うちへ取いるゝ事もあり。

一薄茶は物がたりなどしばしありて。時分を見はからひ。大ぶくにたてべし。さいへんのうす茶は小服たるべし。貴人の光臨には多分うす茶一ぺんなり。但うかゞひ奉らん哉。

一茶筅をふるには。手ばかりにてふれば。いきをふりうしなふ者也。

一高貴の人の用心なる仁體には。初服の時お茶のうつをすくひあつめ。別の茶碗などに入置。茶過て後亭主たてゝのむべし。但是は茶湯ならずとも此仕合しかるべし。

一花見歸り。紅葉見がへり。紳鋭鷹闘歸りの茶といへる事あり。何れもきれいにして薄茶大ぶくに進ずべし。のちは火をなをし服をよき比に進ずべし。

一名物を亭卑下して床の下。或は輪脇。或は本坐をはなちをかば。賓一覽をはつて後。本坐に置べき哉。但時の仕合たるべし。

一豊後の大主博多のにたり持の紹悦を呼てさせ。新田肩衝をかつての疊にをかれし時。悦障子をあけ疊のかたつきを見。しやうじ

をさし入坐せず。色々よび入らるれど。御物
離を御上なくば。入事仕まじと強て申けれ
ば。床へ上られし。惚さて入坐し拜見しぬ
と。

一上賓とも床の具とりに行には。上坐の疊ぎ
はにて手をつき一禮すべし。但主の手のつ
きやう心替るべし。

一賓に花をいけさせ一覧すべきには。すゑ物
花瓶等置すましてのち。花莚に花を入置て。
扨所望すべし。是は賓の立居ふるまひを見。
花を主一覧せしは賓をしやうくわんの義
也。但その賓によるべし。

一貴人の御相伴して小汁などくはんには。末
坐へとゞかずとも早く用ゆべし。貴人への
ためなれば也。但一坐同輩の時は待そろへ
て用ゆべし。引茶も同前。

一賓に茶をたてさせとりをかれ。名物みづか
ら一覧しをはつては。賓に具を床へあげさ
すべし。賓具をあげて後。ふくさ絹は勝手の
障子ぎはに置べし。此茶堂の時賓心得有。具
毎にそとづゝ感情有べし。

一給仕のたまはる物は。箸持ながら請取べし。
もし主さうじなどあらば。はしを下に置。謹
て請取るべし。但主によるべき哉。

一給緒〔を添〕の客衆に出すには。出給の心あしゝ。

一富貧の會の心得。貧者はいかにも侘たる體
しかるべし。富人はうはつらはそさうに見
え。下はけつかう成べし。

一公方様或は大官の衆へ御茶たつる時は。柄
杓に殘りたる湯。釜へ返したるもくるしか
らず。御相伴の衆のはかへさゞる程くむべ
し。是深き秘事也。

一僧俗まじはりたる會には。椀具かはりたる
事しかるべし。

一すきにも袷二ッ着する事なし。

一高貴の人光臨の時。次の間の用意。硯箱。料紙。枕。衣裄。

一上巳には小袖一ッ。朔日より袷。端午に帷。重陽に小袖。十月亥の子に紫の小袖。巳上。

一茶の會の事。人に今日のもやうを問には。床のかざり。物體の出不出。さてかつ手の具等をしだいにとひ。其後よづくりを聞もの也。

一賓より主への禮。頭巾。酒。茶。飯にもめづらしき物には。それ〳〵の義をかんじて禮詞有べし。

一會後の菓子といふ必楊枝あり。食事なくして茶を進ずるには楊枝なし。茶の子といふ。

一貴人の御前へめし出され。御茶くだされば。脇へれい有まじ。貴人の具をいたときたてまつる也。

一馬だらひの大きなるに。花をいくるには水底に䕃を入すのことす。惣別此みちはたとひ坐しき狭くとも心は法界にもひろからん哉。

一二汁一菜の時。菓子は三五種たるべし。

一一段の貴人には。お茶の時。服を同作の人に卒度とふべし。

一薄茶貴賤のすゝぎ有。貴人一人ましまさば。其めしたる跡計一度すゝぐべし。余人のは二度すゝぐ也。但座中等輩ならば一度すゝぐべし。

一墨蹟禪者のを用る事。底こゝろは赤肉檀邊をはなれ萬事を放下し。執心なき言句を感じ。我心を隨分安閑にとの儀也。

一左り勝手はひしやくすぐ。右かつては筋ちがひたるべし。

一名物あつかひの分別の輕重。其人其物によ

るべし。抄印香憎はそれ程にはあらねども。只一ト揃じたるにより執して一覧す。宗達のからゐは印のよりもすぐれたりといへども。達は墨具あまたあるゆへに。中ほどにあひしらひてよろしからんと。

一名物の花入一覧の時は。さのみ花にとんおやくせて。物體と心所には見成情有べし。又さう成物體は。先花を盛じ。のちに物體をかんずべし。

一萬具を一覧するに。實心付べきをこゝろつけざれは。主曲なきもの也。先物體のなり。比。色。紋。手ぎは。全色本るべし。余准之。

一惣別の意得あながちに數寄のみによらじ。縱へば花をいくるに。少年はいかにもわか〳〵と物たくさんにしてからさず。老年功者はいかにもさびしくかすかに意えていけべし。諸數は早くかれやすきものぞと。

一主實に花生よといへるに。さのみ枝すかさず葉をほくしごかず。然れども枯れ果たる葉。虫の巣。蛛のあみなどは取べし。又自然他所へ花を造るには枯葉。虫の巣。蛛のあみとらじ。是あたらしきいはれ也。又なりたる物の實。落花の跡など有は。たとひ新しき花成とも。たてからし同前たるべし。造るべからず。さるにより他へ造るには。つぼみたくさんに開花すこしあるを本とす。

一違花など二段ある花。もし一りん落は一りんはたゞ今落花したる體にもてなし。うす板などに置べし。是深き習也。一輪の花はいけざるものぞと。

一花を主生るには。花の面實へむかふ様に。實の生るには主へはなの面成やうに。

一香爐置事。掛物釋迦。觀音。達磨。布袋等には。床の眞中に香爐を長盆などにのせて置

べし。右に香合。左りに香爐成べし。又掛物山水。花木。菓子等には。盆に居ず。爐を床の上にぢきに置べし。又床に掛物なくば上にか下にか置もの也。

一御茶の口切には接入の香。又は行人も香たかざる也。もし燒ばうす匂ひたるべし。

一聽雪權老後の月といへる題にてずしたまへり。月にけさむかふぞいかに老果て人に見ゆるもおもはゆき身ぞ。と詠給へるを紹鷗承り。名物並諸具を取あつかひぬる折節に。此御歌を吟じ侍ると。

一南花の繪とて。芙蓉椿など一幅の内に有は好まず。愛に異朝の物語あり。前林深雪裡。昨夜數枝開と作りたるを。ある詩友のいはく。一枝となをしき。其人をしやうじて梅花一字の師といひ。書をとりしと。此句を當道の血脈とす。

右に沙汰するごとく。一術はたとひ世にありとも閑居をおもひ。唯天道は盈をかきぬる事を要としける儀也。此句會得なき人はすきの道には入がたしと。珠光常に侍ると。

予弱冠の昔より衰老にいたるまで。珠光を師とし煎茶三昧せり。蜷蜂堂にあり。漸日も暮ぬれば。ふるき書の落索をひろひ。又は傍に卑語を加へ。一本となせる事。愚行跡のかたみと哉ならん。且一首の狂歌一頌かくなん。

貧僧の日々に會する持佛堂
おそらく客は南無釋迦如來

聽々々々看々耶
一首和哥一絶加
渇（喝ノ似セモノ也）

葛藤　篋裏　我園茶

元和第六暮秋日

茶竹子誌焉

右文政十二(つちのとうし)正月十四日一讀了。この本元本とみゆ。不及比校清書すへし。名等に解がたきあり。喫茶を好める博學者に問べし。

以宮内省圖書寮所藏塙氏本再校了田邊勝哉

大正元年十二月十一日印刷
大正元年十二月十五日發行
昭和十年九月廿五日四版發行
昭和十五年十一月十五日五版發行

（十九ノ下）

發行者　東京市豐島區池袋二丁目一〇〇八　續群書類從完成會代表者　太田藤四郎
印刷者　東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九　永島喜代次郎
印刷所　東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九　新英社印刷所
發行所　東京市豐島區池袋二丁目一〇〇八　續群書類從完成會
振替東京六二六〇七　電話大塚七一八

[illegible]